

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第359集

上野遺跡発掘調査報告書

都市計画街路上野西法寺線工事に伴う緊急発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

上野^{うわ}の^の遺跡発掘調査報告書

都市計画街路上野西法寺線工事に伴う緊急発掘調査

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地域にあり、平成10年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,500箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました都市計画街路上野西法寺線工事を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という、相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的な課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場に立って、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、平成11年度に開始された都市計画街路上野西法寺線工事に関連した、上野遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は、馬淵川流域の河岸段丘上に立地した縄文時代前期から中世（安土・桃山時代）までの複合集落跡であること、また中世の館跡であることが明らかになりました。竪穴住居跡や土坑などの各種の遺構や遺物の発見によって、当地域の歴史を知る上で貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望します。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました二戸地方振興局土木部や一戸町教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成13年 2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 千葉 浩 一

例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸郡一戸町一戸字上野164-3他に所在する上野遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は次のとおりである。
遺跡番号 J F 20-0074 調査略号 U N-99
3. 本遺跡の調査は、都市計画街路上野西法寺線工事に伴う緊急事前調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局文化課の調整を経て、二戸地方振興局の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 野外調査の期間と調査面積・調査担当者は次のとおりである。
期 間：平成11年7月13日～12月3日
調査面積：6,460m²
調査担当者：安藤由紀夫・酒井宗孝・千葉正彦・濱田宏
5. 室内整理作業の期間と担当者は次のとおりである。
平成11年12月4日～平成12年3月31日 安藤由紀夫・酒井宗孝
平成12年4月2日～同年5月31日 安藤由紀夫
6. 出土品の鑑定および分析は、次の個人・機関に依頼した。（敬称略）
石質鑑定：矢内桂三・柳沢忠昭（花崗岩研究会）、炭化材樹種同定：早坂松次郎（岩手県木炭協会）、鉄製品の保存処理：ニッテツ・プロダクツ釜石文化財保存処理センター、火山灰分析鑑定：古環境研究所、炭化穀類同定：椿坂恭代（北海道大学埋蔵文化財調査室）
7. 座標原点の測量・地形測量・空中写真撮影は、次の機関に委託した。
座標原点の測量：株式会社 吉田測量設計
地形測量：株式会社 ハイマーテック
空中写真撮影：東邦航空株式会社
8. 発掘調査において、次の機関の協力を得た。
岩手県二戸地方振興局土木部・一戸町建設課・一戸町教育委員会
9. 野外調査や整理・報告書の作成には次の方々の協力・指導をいただいた。（50音順・敬称略）
熊谷常正（盛岡大学）、関 豊（二戸市教育委員会）、高田和徳・中村明央・久保田太一（一戸町教育委員会）、藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、八重樫忠郎（平泉町教育委員会）
10. 野外調査では一戸町・二戸市・浄法寺町の方々の協力をいただいた。
11. 本書の執筆は安藤由紀夫が行った。なお、石器・石製品の観察は酒井宗孝が行い、掘立柱建物跡・柱穴列の検討は羽柴直人が行った。編集・校正は安藤が行った。
12. 調査成果はこれまでに現地公開資料や調査略報に発表してきたが、本書の内容がそれらに優先する。
13. 本遺跡で出土した遺物および調査資料は、岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

目次

序 例言

I. 調査に至る経過	3
II. 遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
(1) 立地	3
(2) 地形・地質	5
(3) 基本層序	5
2. 周辺の遺跡	8
III. 調査の方法と室内整理	13
1. 野外調査	13
2. 室内整理	15
IV. 検出された遺構と遺物	18
1. 竪穴住居跡	18
(1) 縄文時代	18
(2) 奈良時代	20
(3) 平安時代	26
(4) 中世	54
(5) 時期不明	62
2. 掘立柱建物跡	66
3. 柱穴列	75
4. 土坑類	75
5. 炉・焼土遺構	130
(1) 石囲炉	130
(2) 焼土遺構	130
6. 円形周溝	136
7. 帯曲輪	137
8. 柱穴群	148

9. 遺構外出土遺物	153
(1) 縄文時代	153
(2) 弥生時代	155
(3) 続縄文時代	156
(4) 奈良時代	156
(5) 平安時代	156
(6) 中世・中世以降	157
V. まとめ	213
1. 遺構	213
2. 遺物	214
VI. 分析・鑑定	216
1. 岩手県上野遺跡出土火山灰の分析鑑定	216
2. 岩手県上野遺跡から出土した炭化植物種子	218

表	
第1表 周辺の遺跡一覧表	10
第2表 遺構一覧表	139
第3表 柱穴計測表	149
第4表 土器観察表	200
第5表 土製品観察表	209
第6表 陶磁器観察表	209
第7表 石器観察表	210
第8表 石製品観察表	210
第9表 金属製品観察表	211
第10表 銭貨観察表	212
報告書抄録	336

図版目次

第1図 岩手県図に見る遺跡位置図	1
第2図 遺跡位置図	2
第3図 遺跡周辺地形分類図	4
第4図 基本土層柱状図	6
第5図 遺跡周辺地形図	7
第6図 周辺の遺跡分布図	12
第7図 グリッド配置図	14
第8図 実測図凡例	17
第9図 II C-1 竪穴住居跡	19
第10図 II D-1 竪穴住居跡 (1)	21
第11図 II D-1 竪穴住居跡 (2)	22
第12図 II D-5 b 竪穴住居跡	23
第13図 II D-16 竪穴住居跡 (1)	24
第14図 II D-16 竪穴住居跡 (2)	25
第15図 II C-2 竪穴住居跡	27
第16図 II C-3 竪穴住居跡	29
第17図 II C-4 竪穴住居跡	30
第18図 II D-2 竪穴住居跡	31
第19図 II D-3 竪穴住居跡	33
第20図 II D-5 竪穴住居跡	36
第21図 II D-6 竪穴住居跡	38
第22図 II D-7 竪穴住居跡	39
第23図 II D-8 竪穴住居跡	41
第24図 II D-9 竪穴住居跡 (1)	43
第25図 II D-9 竪穴住居跡 (2)	44
第26図 II D-10 竪穴住居跡	46
第27図 II D-12・14 竪穴住居跡	48
第28図 II D-17 竪穴住居跡	50
第29図 II D-19・III D-2 竪穴住居跡	52

第30図 IA-1 竪穴住居跡	55
第31図 IA-2・II D-1 b 竪穴住居跡	57
第32図 II D-4・15 竪穴住居跡	59
第33図 II D-13・III D-1 竪穴住居跡	61
第34図 II D-18 竪穴住居跡	63
第35図 II D-20・21 竪穴住居跡	64
第36図 II D-22 竪穴住居跡	65
第37図 1号掘立柱建物跡	67
第38図 2号掘立柱建物跡	68
第39図 3号掘立柱建物跡	69
第40図 4・5号掘立柱建物跡	71
第41図 6～8号掘立柱建物跡	73
第42図 1・2号柱穴列	74
第43図 II C5 h-1, 2, 3・II C5 i 土坑	76
第44図 II C6 h・II C6 i・II C7 d 土坑 II D2 h 土坑	79
第45図 II D2 i・II D2 j 土坑 II D3 g-1, 2, 3 土坑	83
第46図 II D3 g-4・II D3 h-1, 2 土坑	85
第47図 II D4 f・II D4 h・II D4 i 土坑 II D4 j 土坑	88
第48図 II D5 d・II D5 f-1, 2 土坑	90
第49図 II D6 c・II D6 d 土坑 II D6 f-1・II D6 h 土坑	92
第50図 II D6 f-2, 3・II D6 i 土坑	95
第51図 II D7 e・II D7 f-1, 2 土坑 II D7 g 墓塚	97
第52図 II D7 h-1, 2・II D7 i 土坑 II D8 a 土坑	100

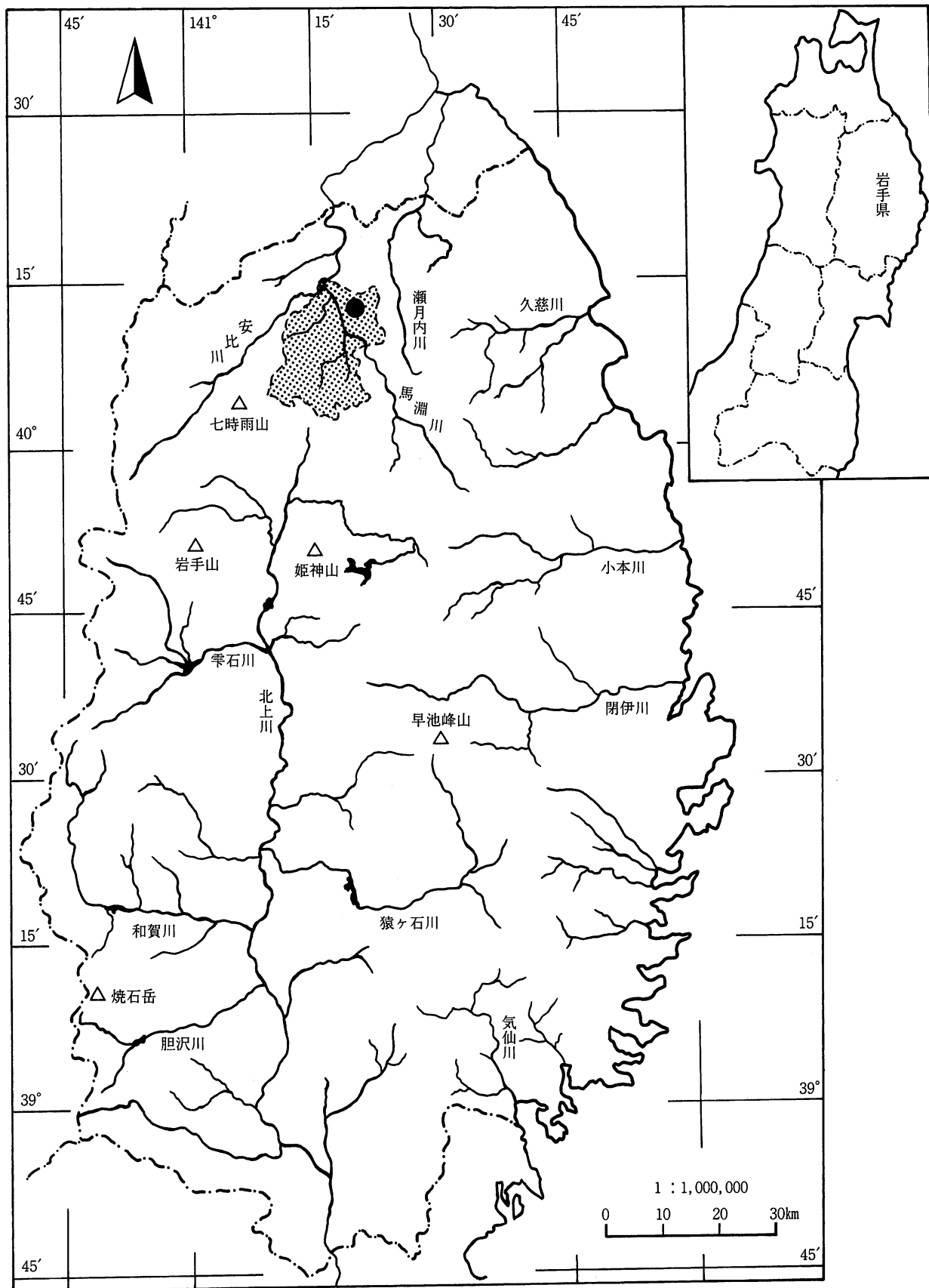
第53図	ⅡD8b・ⅡD8d-1, 2, 3, 4土坑 ⅡD8f土坑	101	第86図	遺構内出土遺物	ⅡC-3住(1)	162
第54図	ⅡD8g・ⅡD8h-1土坑	103	第87図	遺構内出土遺物	ⅡC-3住(2)	163
第55図	ⅡD8h-2・ⅡD9a-1, 2土坑	105			ⅡC-3住(3)・ⅡC-4住	
第56図	ⅡD9b-1, 2・ⅡD9d・ⅡD9e土坑 ⅡD9g土坑	108	第88図	遺構内出土遺物	ⅡD-2住(1)	164
第57図	ⅡE0d・ⅡE1d・ⅡE2a土坑 ⅡE2d土坑	111	第89図	遺構内出土遺物	ⅡD-2住(2)	165
第58図	ⅡE3b・ⅡE4a・ⅡE5a土坑 ⅡE7b土坑	113	第90図	遺構内出土遺物	ⅡD-3住(1)	166
第59図	ⅢB3i・ⅢB4j・ⅢC3i土坑 ⅢC3j土坑	116	第91図	遺構内出土遺物	ⅡD-3住(2)	166
第60図	ⅢC5c・ⅢC5e・ⅢD0b土坑 ⅢD0c-1土坑	118	第92図	遺構内出土遺物	ⅡD-5住・ⅡD-6住	167
第61図	ⅢD0c-2・ⅢD0d土坑 ⅢD0f-1, 2土坑	121	第93図	遺構内出土遺物	ⅡD-7住(1)	167
第62図	ⅢD0g・ⅡD1d-1, 2土坑 ⅢD1e-1, 2土坑	124	第94図	遺構内出土遺物	ⅡD-7住(2)	168
第63図	ⅢD1f・ⅢD2e-1, 2・ⅢD3a土坑 ⅢD3b・ⅢD3c土坑	127	第95図	遺構内出土遺物	ⅡD-8住(1)	168
第64図	ⅡD6f・ⅡD6g石囲炉	129	第96図	遺構内出土遺物	ⅡD-8住(2)	169
第65図	ⅡC5h・ⅡC6i焼土遺構 ⅡD9a-1, 2焼土遺構	131	第97図	遺構内出土遺物	ⅡD-8住(3)	170
第66図	ⅡD9a-3・ⅢD2d-1, 2焼土遺構	133	第98図	遺構内出土遺物	ⅡD-9住(1)	170
第67図	ⅡD7a円形周溝	134	第99図	遺構内出土遺物	ⅡD-9住(2)	171
第68図	遺構配置図	136	第100図	遺構内出土遺物	ⅡD-9住(3)	171
第69図	トレンチ断面図(1)	138			ⅡD-10住(1)	172
第70図	トレンチ断面図(2)	139	第96図	遺構内出土遺物	ⅡD-10住(2)	173
第71図	トレンチ断面図(3)	140			ⅡD-12住・ⅡD-14	173
第72図	南斜面部トレンチ位置図	141	第97図	遺構内出土遺物	ⅡD-17住	174
第73図	北斜面部トレンチ位置図	142	第98図	遺構内出土遺物	ⅡD-19住・ⅢD-2住	175
第74図	地形測量図	143	第99図	遺構内出土遺物	ⅡA-1住	175
第75図	中央平坦部遺構配置図	145	第100図	遺構内出土遺物	ⅡD-1b住	176
第76図	遺構内出土遺物	ⅡC-1住			ⅡD-15住(1)	176
第77図	遺構内出土遺物	ⅡD-1住(1)	第101図	遺構内出土遺物	ⅡD-15住(2)	177
第78図	遺構内出土遺物	ⅡD-1住(2)			ⅡD-4・13住	177
第79図	遺構内出土遺物	ⅡD-1住(3)	第102図	遺構内出土遺物	ⅢD-1住	177
第80図	遺構内出土遺物	ⅡD-5b住 ⅡD-16住(1)	第103図	遺構内出土遺物	土坑(1)	178
第81図	遺構内出土遺物	ⅡD-16住(2)	第104図	遺構内出土遺物	土坑(2)	179
第82図	遺構内出土遺物	ⅡD-16住(3)	第105図	遺構内出土遺物	土坑(3)	180
第83図	遺構内出土遺物	ⅡD-16住(4) ⅡC-2住(1)	第106図	遺構内出土遺物	土坑(4)	181
第84図	遺構内出土遺物	ⅡC-2住(2)			土坑(5)	182
第85図	遺構内出土遺物	ⅡC-2住(3)	第107図	遺構内出土遺物	土坑(6)・石囲炉 焼土遺構	183
			第108図	遺構外出土遺物	土器(1)	184
			第109図	遺構外出土遺物	土器(2)	185
			第110図	遺構外出土遺物	土器(3)・土製品	186
			第111図	遺構外出土遺物	石器(1)	187
			第112図	遺構外出土遺物	石器(2)	188
			第113図	遺構外出土遺物	石製品(1)	189
			第114図	遺構外出土遺物	石製品(2)	190
			第115図	遺構外出土遺物	金属製品(1)	191
			第116図	遺構外出土遺物	金属製品(2) 陶磁器	192
					錢貨	193

付録図版 柱穴群全体図

写真図版目次

写真図版1	空中写真(1)	221	写真図版14	ⅡD-16堅穴住居跡(2)	234
写真図版2	空中写真(2)	222	写真図版15	ⅡC-2堅穴住居跡	235
写真図版3	帯曲輪検出状況	223	写真図版16	ⅡC-3堅穴住居跡(1)	236
写真図版4	出土遺物(1)	224	写真図版17	ⅡC-3堅穴住居跡(2)	237
写真図版5	出土遺物(2)	225	写真図版18	ⅡC-4堅穴住居跡	238
写真図版6	出土遺物(3)	226	写真図版19	ⅡD-2堅穴住居跡(1)	239
写真図版7	調査区全景・遠景	227	写真図版20	ⅡD-2堅穴住居跡(2)	240
写真図版8	調査区遠景・基本土層	228	写真図版21	ⅡD-3堅穴住居跡(1)	241
写真図版9	ⅡC-1堅穴住居跡	229	写真図版22	ⅡD-3堅穴住居跡(2)	242
写真図版10	ⅡD-1堅穴住居跡(1)	230	写真図版23	ⅡD-5堅穴住居跡	243
写真図版11	ⅡD-1堅穴住居跡(2)	231	写真図版24	ⅡD-6堅穴住居跡	244
写真図版12	ⅡD-5b堅穴住居跡	232	写真図版25	ⅡD-7堅穴住居跡(1)	245
写真図版13	ⅡD-16堅穴住居跡(1)	233	写真図版26	ⅡD-7堅穴住居跡(2)	

	ⅡD-8 竖穴住居跡 (1)	246	写真図版68	石囲炉・焼土遺構 (1)	288
写真図版27	ⅡD-8 竖穴住居跡 (2)	247	写真図版69	焼土遺構 (2)	289
写真図版28	ⅡD-9 竖穴住居跡 (1)	248	写真図版70	ⅡD7a 円形周溝	290
写真図版29	ⅡD-9 竖穴住居跡 (2)	249	写真図版71	北トレンチ断面 (1)	291
写真図版30	ⅡD-10 竖穴住居跡 (1)	250	写真図版72	北トレンチ断面 (2)	292
写真図版31	ⅡD-10 竖穴住居跡 (2)	251	写真図版73	北トレンチ断面 (3)	293
写真図版32	ⅡD-12 竖穴住居跡 (1)	252	写真図版74	北トレンチ断面 (4)	294
写真図版33	ⅡD-12 竖穴住居跡 (2)	253	写真図版75	南トレンチ断面 (1)	295
写真図版34	ⅡD-14 竖穴住居跡	254	写真図版76	南トレンチ断面 (2)	296
写真図版35	ⅡD-17 竖穴住居跡 (1)	255	写真図版77	南トレンチ断面 (3)	297
写真図版36	ⅡD-17 竖穴住居跡 (2)	256	写真図版78	遺構内出土遺物 (1)	298
写真図版37	ⅡD-19 竖穴住居跡	257	写真図版79	遺構内出土遺物 (2)	299
写真図版38	ⅢD-2 竖穴住居跡	258	写真図版80	遺構内出土遺物 (3)	300
写真図版39	ⅠA-1 竖穴住居跡	259	写真図版81	遺構内出土遺物 (4)	301
写真図版40	ⅠA-2 竖穴住居跡	260	写真図版82	遺構内出土遺物 (5)	302
写真図版41	ⅡD-1b 竖穴住居跡	261	写真図版83	遺構内出土遺物 (6)	303
写真図版42	ⅡD-4 竖穴住居跡	262	写真図版84	遺構内出土遺物 (7)	304
写真図版43	ⅡD-13 竖穴住居跡	263	写真図版85	遺構内出土遺物 (8)	305
写真図版44	ⅡD-15 竖穴住居跡	264	写真図版86	遺構内出土遺物 (9)	306
写真図版45	ⅢD-1 竖穴住居跡	265	写真図版87	遺構内出土遺物 (10)	307
写真図版46	ⅡD-18・20・21・22 竖穴住居跡	266	写真図版88	遺構内出土遺物 (11)	308
写真図版47	土坑 (1)	267	写真図版89	遺構内出土遺物 (12)	309
写真図版48	土坑 (2)	268	写真図版90	遺構内出土遺物 (13)	310
写真図版49	土坑 (3)	269	写真図版91	遺構内出土遺物 (14)	311
写真図版50	土坑 (4)	270	写真図版92	遺構内出土遺物 (15)	312
写真図版51	土坑 (5)	271	写真図版93	遺構内出土遺物 (16)	313
写真図版52	土坑 (6)	272	写真図版94	遺構内出土遺物 (17)	314
写真図版53	土坑 (7)	273	写真図版95	遺構内出土遺物 (18)	315
写真図版54	土坑 (8)	274	写真図版96	遺構内出土遺物 (19)	316
写真図版55	土坑 (9)	275	写真図版97	遺構内出土遺物 (20)	317
写真図版56	土坑 (10)	276	写真図版98	遺構内出土遺物 (21)	318
写真図版57	土坑 (11)	277	写真図版99	遺構内出土遺物 (22)	319
写真図版58	土坑 (12)	278	写真図版100	遺構内出土遺物 (23)	320
写真図版59	土坑 (13)	279	写真図版101	遺構内出土遺物 (24)	321
写真図版60	土坑 (14)	280	写真図版102	遺構内出土遺物 (25)	322
写真図版61	土坑 (15)	281	写真図版103	遺構外出土遺物 (1)	323
写真図版62	土坑 (16)	282	写真図版104	遺構外出土遺物 (2)	324
写真図版63	土坑 (17)	283	写真図版105	遺構外出土遺物 (3)	325
写真図版64	土坑 (18)	284	写真図版106	遺構外出土遺物 (4)	326
写真図版65	土坑 (19)	285	写真図版107	遺構外出土遺物 (5)	327
写真図版66	土坑 (20)	286	写真図版108	遺構外出土遺物 (6)	328
写真図版67	土坑 (21)	287	写真図版109	遺構外出土遺物 (7)	329



第1図 岩手県図に見る遺跡位置図



第2図 遺跡位置図

1 : 50,000 一戸町・二戸市

I. 調査に至る経過

上野遺跡は、「緊急地方道整備事業上野地区」の街路整備工事に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

都市計画街路上野西方寺線「緊急地方道整備事業上野地区」は、国道4号に接続し一般県道二戸一戸線を径由し、一般県道一戸浄法寺線に接続する一戸町の東西を結ぶ路線である。

当該路線の沿線には、平成12年度開業を目指し県立一戸統合病院、一戸町総合福祉センターが建設中であり、また、大型ショッピングセンターの建設等の計画も予定されている。しかしながら現況は、道路幅員も狭小であり交通の隘路となっていて、病院等の開業に伴う交通量の増大による交通渋滞を招きかねない危険な状態となっている。このため、病院等の利用者の利便を図るとともに、安全で快適な道路空間の確保と交通の円滑な流れを図る道路整備が急務となっていたため、平成9年度に事業採択され、平成11年度で3年目となる。

当事業の施行に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成9年12月25日付け二地土第1456号「上野都市計画事業実施計画における埋蔵文化財の分布調査において（依頼）」の文書により、岩手県教育委員会に分布調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会では、遺跡台帳等との照合を行い、その結果は平成10年4月10日付け教文第50号「上野都市計画事業実施計画における埋蔵文化財の分布調査において（回答）」の文書において、二戸地方振興局土木部へ回答し、その際、事業計画区域が上野遺跡の範囲内であり試掘調査が必要であることが付記された。

回答を受けた二戸地方振興局土木部では、上野遺跡を含む街路整備工事実施の前年度において、平成10年9月25日付け二地土第1125号「都市計画事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書により、岩手県教育委員会に対して、試掘調査の依頼をした。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成10年10月5日～6日に試掘調査を実施したが、その結果は平成10年10月21日付け教文第757号「都市計画事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」の文書において、二戸地方振興局土木部に回答し、その際に、上野遺跡の本発掘調査を要する旨が付記された。

II. 遺跡の立地と環境

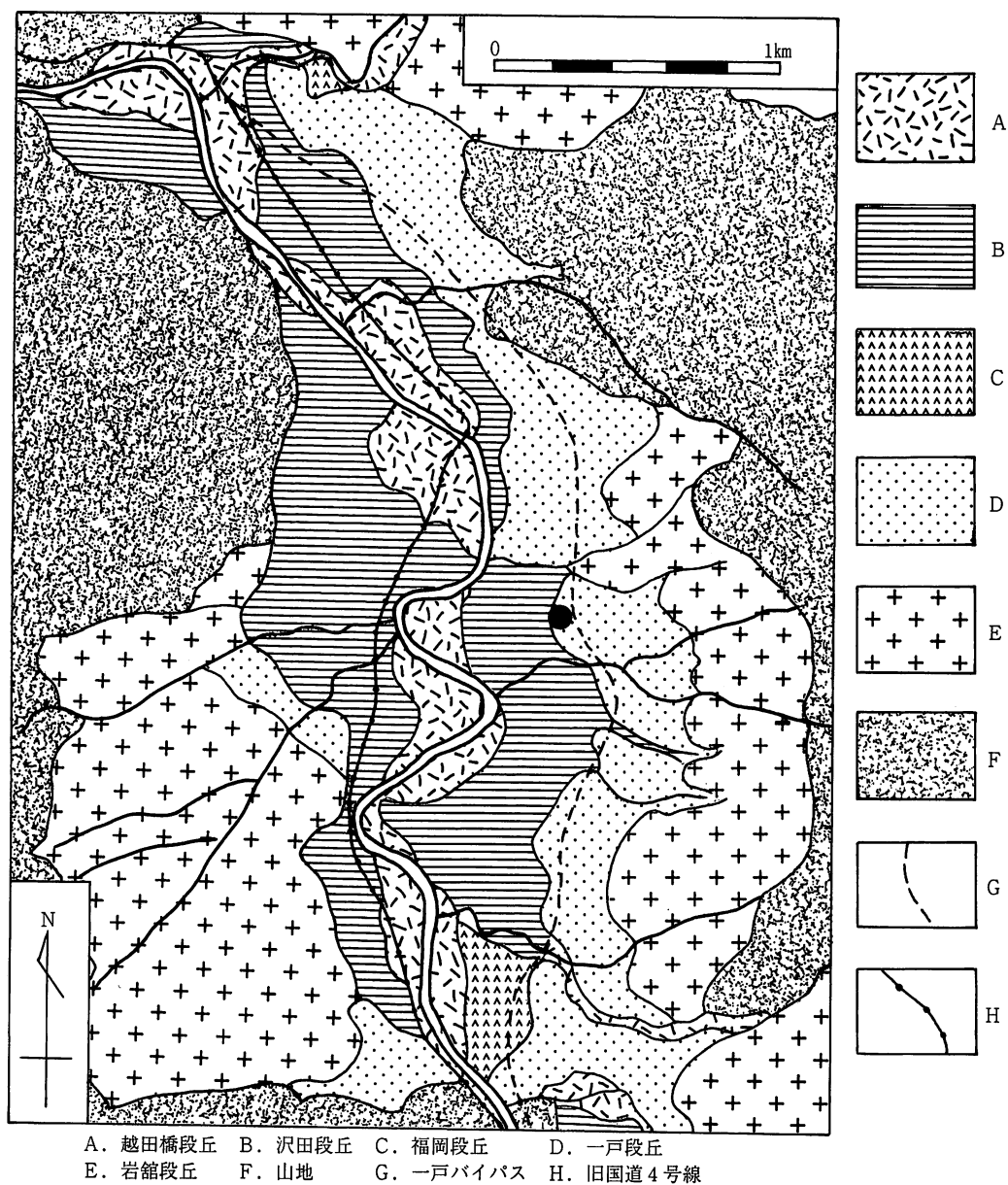
1. 地理的環境

(1) 立地

上野遺跡の所在する二戸郡一戸町は、岩手県の内陸北部に位置し、北は二戸郡二戸市、東は九戸郡九戸村・岩手郡葛巻町、南は岩手郡岩手町、西は二戸郡浄法寺町に接する、面積29,858km²、人口約20,000人の町である。一戸町は、総面積の80%以上を山林原野で占める山間地で、JR東日本一戸駅周辺に市街地が形成されている他、町の中央を流れる馬淵川とその流域に小規模な集落が分布している。

遺跡は、一戸町字上野地内の、北緯40° 12′ 29″、東経141° 18′ 34″に位置し、国土地理院1:25,000の地形図では、「一戸」(NK-54-18-11-4・八戸11号-4)の図幅に含まれる。上野地区は、JR東日本一戸駅の東方1kmの河岸段丘上にあり、西側は馬淵川とその沖積面、東側は更に高位の段丘面と山地に囲

まれた東西に長い平坦地となっている。そのうち、東西約400m、南北150mが遺跡の範囲に相当し、推定の面積は50,000㎡となる。今回の調査区は、馬淵川によって形成された河岸段丘面のちょうど西端部に位置し、標高は約173m程で北側と南側は斜面になっており、調査区中央部は舌状に張り出した見晴らしのよい台地となっている。調査区の南西方向にある沖積面の水田地帯との標高差は20～25m、現状は宅地・畑地及び原野である。



第3図 遺跡周辺地形分類図(「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」より一部改編して転載)

(2) 地形・地質

一戸町の地形形成に関わりの深い馬淵川は、葛巻町東縁の北上山地北部に源を發し、葛巻町を南東から北西に横切り、J R東日本小鳥谷駅の北から一戸町中心部を通り抜け、一戸町鳥越付近で安比川と合流し、二戸市から青森県に入り、八戸湾に達する。幹線流路延長142km、流域面積2,050km²の河川である。一戸町の子守付近から小井田付近にかけての、ほぼ4kmの区間には、最大幅1km程度の谷底平野（沖積平野）が馬淵川に沿って開けている。南の小姓堂から子守付近にかけてと北の小井田西方から二戸市石切所にかけては、馬淵川の流域が狭まった盆地となっている。谷底平野の東側の地域には、谷底平野に接して、一戸バイパスの大部分がの幅300~500mの一戸段丘が南北方向に続き、さらに東側に、一戸段丘よりやや傾斜の大きい丘陵地（岩館段丘）と、標高300~400m余りの山地斜面が迫っている。また、南の子守付近から田中付近にかけて一戸段丘の下位に福岡段丘が部分的に存在する。一方、谷底平野の西側にも、一部に一戸段丘が見られるほか、北半には、標高380m余りの茂谷の山地斜面が迫り、南半には東側と同じく、やや傾斜の大きい岩館段丘が分布する。

沖積段丘である谷底平野は越田橋段丘と沢田段丘とで構成される。一戸段丘は洪積世末の大不動浮石流凝灰岩層で構成される。岩館段丘は同じく洪積世の砂礫層や褐色火山灰層を主体として構成される。福岡段丘は八戸浮石流凝灰岩で構成される。

遺跡のある上野地区は、一戸段丘と岩館段丘面上に存在するが、今回の調査区は前述した通り一戸段丘面の先端部に相当する。その基盤は大不動浮石流凝灰岩層（シラス）であり、C14年代測定値では2万年~2万5千年程の測定値を持つと言われている。

(3) 基本層序

立地する地形を反映して表土下の地層は地点によって一様ではない。第4図は、ⅡD区及びⅢD区における深掘りの土層断面である。

<ⅡD区深掘り土層断面注記>

第Ⅰ層 10Y R3/2黒褐色土

第Ⅱ層 10Y R2/1黒色土 中礫浮石を5%含む。

第Ⅲ層 10Y R2/2黒褐色土 中礫浮石・南部浮石を含む。

第Ⅳ層 10Y R2/2黒褐色土 黄色（多量）、赤褐色（少量）の南部浮石を25%含む。

第Ⅴ層 10Y R2/2黒褐色土 10Y R3/4暗褐色50%混入。南部浮石を10%含む。

第Ⅵ層 10Y R3/4暗褐色土 10Y R2/2黒褐色土20%混入。南部浮石を3%含む。

第Ⅶ層 10Y R5/8黄褐色土 南部浮石を微量含む。

第Ⅷ層 10Y R4/6褐色土 粘性ややあり。

第Ⅸ層 10Y R6/6明黄褐色土~10Y R6/4にぶい黄橙色土 砂質土。

第Ⅹ層 10Y R6/2灰黄褐色土 粘性土。10Y R7/4にぶい黄橙色土（粘性土）40%混入。

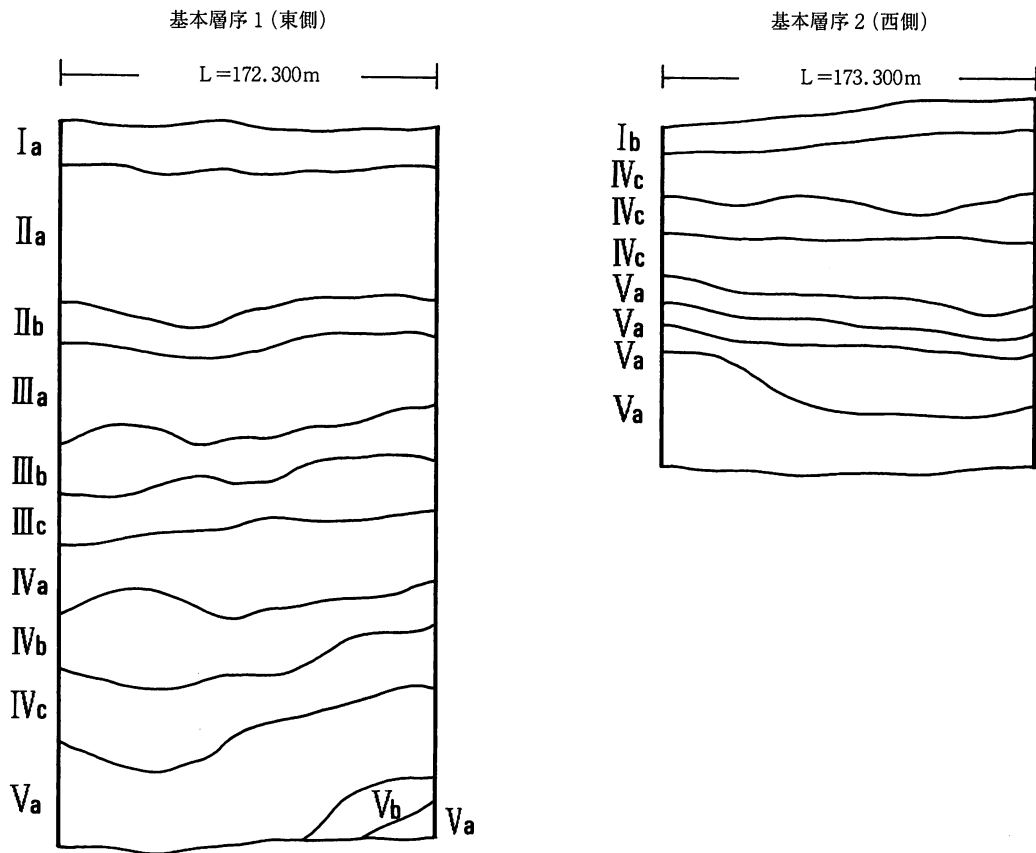
第Ⅺ層 10Y R5/2灰黄褐色土 シラス。

第Ⅻ層 10Y R6/2灰黄褐色土 粘性土。10Y R7/4にぶい黄橙色土（粘性土）40%混入。

<ⅢD区深掘り土層断面注記>

第Ⅰ層 10Y R3/4暗褐色土

第Ⅱ層 10Y R6/8明黄褐色土



第4図 基本土層柱状図

第Ⅲ層 10Y R6/4にぶい黄橙色土 粘性ややあり。

第Ⅳ層 10Y R6/3にぶい黄橙色土 砂質土（砂を多量に含む）。

第Ⅴ層 10Y R8/4浅黄橙色土 シラス。

第Ⅵ層 10Y R6/3にぶい黄橙色土 粘性土。

第Ⅶ層 10Y R8/4浅黄橙色土 10Y R6/3にぶい黄橙色土（粘性土）が筋状に30%混入。10Y R2/2黒褐色土が筋状に10%混入。

第Ⅷ層 10Y R8/4浅黄橙色土 10Y R6/3にぶい黄橙色土（粘性土）が筋状に30%混入。

この二つの地点の深堀の結果から遺跡の基本層序を次のように設定した。

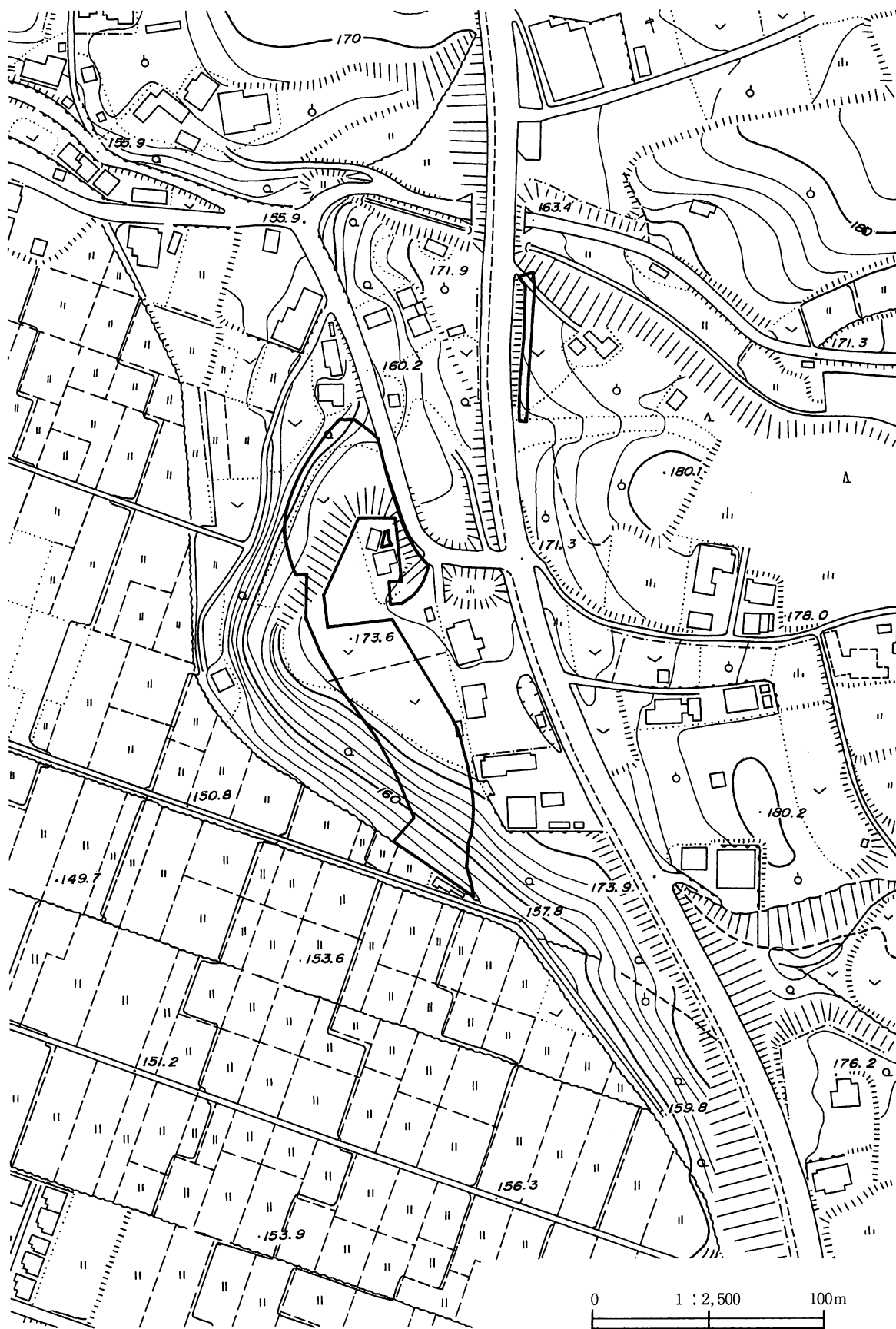
第Ⅰ a層 10Y R3/2黒褐色土 大グリッドⅡD区の表土にあたる。耕作土。

第Ⅰ b層 10Y R3/4暗褐色土 大グリッドⅢD区の表土にあたる。耕作土。

第Ⅱ a層 10Y R2/1黒色土 中礫浮石を5%含む。中礫浮石層。

第Ⅱ b層 10Y R2/2黒褐色土 中礫浮石・南部浮石を含む。中礫浮石層から南部浮石層への漸移層。

第Ⅲ a層 10Y R2/2黒褐色土 10Y R3/4暗褐色50%混入。黄色（多量）、赤褐色（少量）の南部浮石を25%含む。南部浮石層。



第5图 遺跡周辺地形図

- 第Ⅲ b 層 10Y R2/2黒褐色土 10Y R3/4暗褐色50%混入。南部浮石を10%含む。南部浮石層。
- 第Ⅲ c 層 10Y R3/4暗褐色土 10Y R2/2黒褐色土20%混入。南部浮石を3%含む。南部浮石層。
- 第Ⅳ a 層 10Y R5/8黄褐色土～10Y R6/8明黄褐色土 地点によって南部浮石を微量含む。南部浮石層～八戸火山灰土層への漸移層と八戸火山灰土層の純層。
- 第Ⅳ b 層 10Y R4/6褐色土 粘性ややあり。八戸火山灰土層。
- 第Ⅳ c 層 10Y R6/4にぶい黄橙色土 砂質土。八戸火山灰土層。
- 第Ⅴ a 層 10Y R6/2灰黄褐色土 粘性土。10Y R7/4にぶい黄橙色土（粘性土）40%混入。大不動浮石流凝灰岩層。
- 第Ⅴ b 層 10Y R8/4浅黄橙色土 シラス。10Y R6/3にぶい黄橙色土（粘性土）が筋状に30%混入。地点によっては10Y R2/2黒褐色土（炭化物層と考えられる）が筋状に10%混入。水性堆積層。大不動浮石流凝灰岩層。
- 第Ⅴ c 層 10Y R5/2灰黄褐色土あるいは10Y R8/4浅黄橙色土 地点によっては、10Y R7/1灰白色を呈する。シラス。大不動浮石流凝灰岩層

調査区中央平坦部においては、第Ⅰ層を除去した段階で遺構が検出された。なお、基本層序では確認されなかったが、奈良時代の遺構と考えられる、ⅡD-1住居跡・ⅡD-16住居跡、ⅡD2h土坑の埋土上部には、十和田a降下火山灰のレンズ状の堆積が認められた。

2. 周辺の遺跡

一戸町内には、現在503ヶ所の遺跡が確認され、登録されている。第6図には、周辺区域における遺跡の分布を示した。一戸町は、馬淵川の本・支流域の河岸段丘に沿って、縄文時代から古代にかけての遺跡が密に分布しており、また、中世の城館跡も多く存在する。ここでは、これまでに調査された遺跡を中心に、町内の遺跡を概観してみたい。

縄文時代早期の遺跡としては、小井田Ⅲ遺跡・平船Ⅲ遺跡がある。小井田Ⅲ遺跡は、昭和57・58年度に当センターで発掘調査を行い、竪穴住居跡2棟が検出され、「寺の沢式土器」に比定される尖底深鉢土器が出土している（柄澤満郎1985）。平船Ⅲ遺跡は、昭和57年度に当センターで発掘調査を行い、土坑と陥し穴状遺構が検出され、押型文土器・白浜式併行、吹切沢式併行、住吉町式併行、物見台式併行土器が出土している（渡辺洋一1984）。

前期の遺跡としては、本遺跡のB地点が挙げられる。埋設土器が2基と焼土遺構1基が検出されており、遺物は円筒下層a式に比定されている（高田和徳1984）

中期の遺跡としては、御所野遺跡がある。平成元年からの継続調査によって、東西500m・南北120mの広がりを持つ、中期後半のムラであることが明らかとなり、縄文時代の典型的なムラとして、平成5年に国指定史跡となった。遺跡には、中央部の配石遺構を中心として、東西にわたり500棟以上の竪穴住居跡が広く分布するものと推定されている。遺物は、大木8a式（円筒上層d式）～大木10式併行の土器が大量に出土している（高田和徳1992）。

後期の遺跡としては、小井田Ⅳ遺跡がある。昭和56・57年度に当センターで発掘調査を行い、竪穴住居跡4棟・土坑9基等が検出され、「十腰内Ⅰ～Ⅵ式」に比定される土器群が出土している（小平忠孝1983）。

晩期の遺跡としては、蒔前遺跡があり、昭和初期から多量の土器が出土することで知られている。晩期前

半の大洞B式～C1式に比定される土器群は、鉢・浅鉢・深鉢・台付鉢・注口土器・香炉形土器など数千点に及ぶものと推定され、そのうち253点が平成6年に国の重要文化財に指定された。

弥生時代の遺跡としては、前述した小井田Ⅲ遺跡と本遺跡のB地点がある。小井田Ⅲ遺跡では、前期の石囲炉を持つ竪穴住居跡3棟が検出され、鉢形土器・壺形土器・甕形土器・坏形土器・円盤状石製品等が出土している（栃澤満郎1985）。

古墳時代については不明な点が多いが、縄文中期の集落跡である馬場平遺跡から、東北地方南部との交流を示す（高橋信雄1996）、剣形の石製模造品が出土している。

古代の遺跡としては、田中遺跡、本遺跡、北館遺跡などがある。いずれも縄文時代の遺構・遺物が検出され、出土している遺跡であるが、奈良時代以降遺跡の規模が広がり、集落が拡大する傾向がみられる（高橋信雄1996）。

中世では、本遺跡の北側に位置する一戸城跡が挙げられる。主要となる北館、八幡館、神明館、常念館とその他5～6の館により構成されており、堀跡、掘立柱建物跡、竪穴建物跡等が検出されている。遺物は陶磁器、木製品、金属製品、石製品等が堀跡からまとめて出土しており、当時の生活の様相を知る貴重な資料が得られている（高田和徳1986）。

<参考・引用文献>

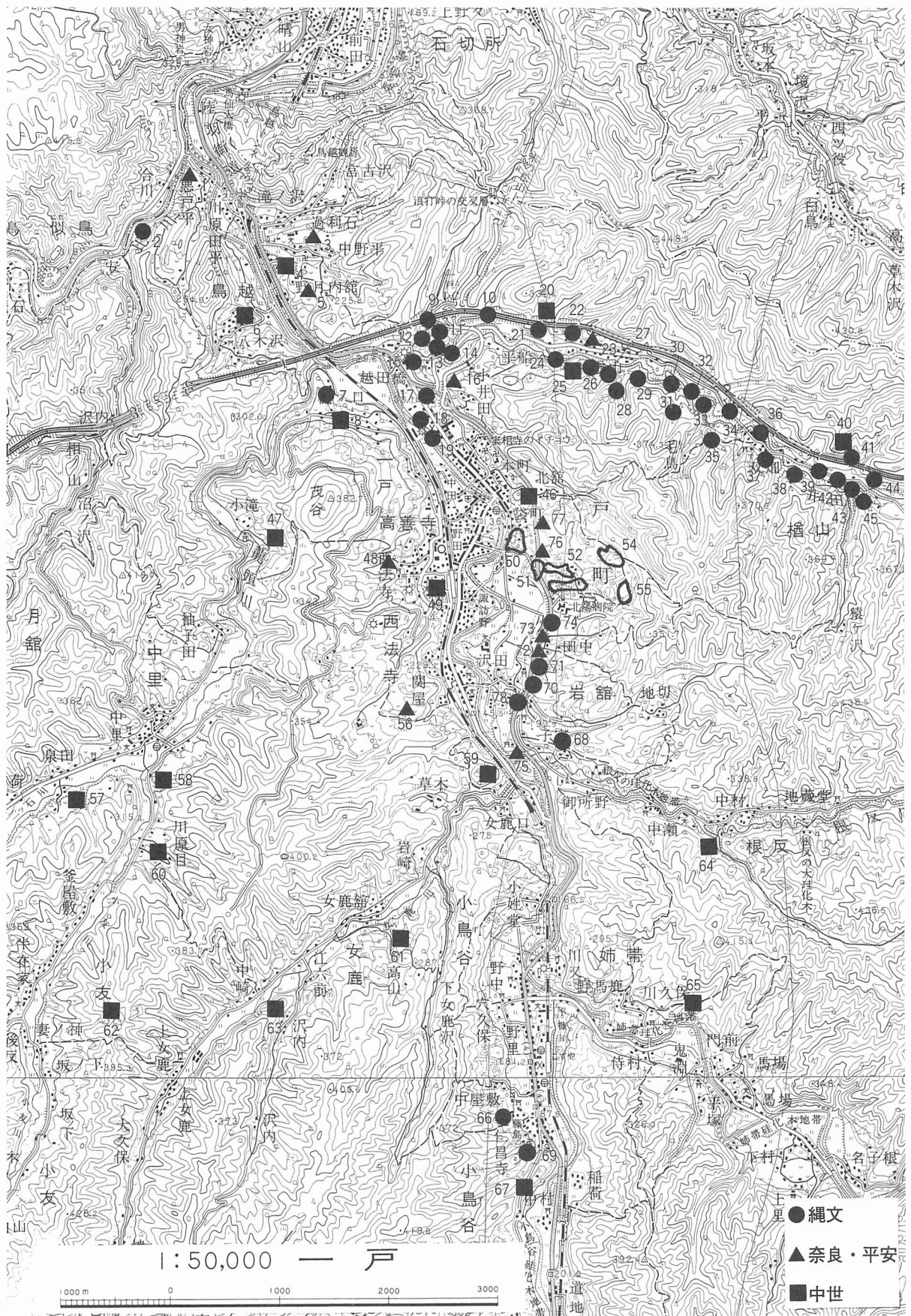
- (1) 小平忠孝他(1983)；小井田Ⅳ発掘調査報告書。文振報第69集。(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- (2) 渡辺洋一他(1984)；平船Ⅲ発掘調査報告書。文振報第76集。(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- (3) 栃澤満郎他(1985)；小井田Ⅲ発掘調査報告書。文振報第85集。(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- (4) 高田和徳(1992)；御所野遺跡 一戸町文化財調査報告書第29集。一戸町教育委員会。
- (5) 高橋信雄他(1996)；日本の古代遺跡 51岩手。保育社。
- (6) 高田和徳他(1986)；蒔前 一戸町文化財調査報告書第17集。一戸町教育委員会。
- (7) 草間俊一・高田和徳他(1986)；岩手県中世城館跡分布調査報告書 岩手県文化財調査報告書第82集。岩手県教育委員会。
- (8) 高田和徳(1981)；一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅰ 一戸町文化財報告書第1集。一戸町教育委員会。
- (9) 高田和徳(1984)；上野遺跡 一戸町文化財調査報告書第7集。一戸町教育委員会。

周辺の遺跡一覧

*：第6図範囲外

No	遺跡名	種別	時代等 / 備考
1	悪戸平Ⅰ	集落跡	縄文・平安 縄文土器（後・晩期）、土師器
2	悪戸平Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
3	中野平	集落跡	縄文・平安 縄文土器（後・晩期）、土師器
4	野月内館（鳥越館）	城館跡	中世 内館、外館、堀
5	野月内館	集落跡	縄文・弥生・平安 縄文土器（早・晩期）、弥生土器、土師器
6	八木沢館	散布地・城館跡	縄文・平安・中世 縄文土器（前・中期）、土師器、主郭、平場
7	親久保	集落跡	縄文・弥生 縄文土器（後期）、弥生土器
8	樋ノ口館	散布地・城館跡	縄文・弥生・中世 縄文土器（中期）、弥生土器、土師器、須恵器、帯郭、三郭
9	大道沢Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
10	平船Ⅲ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
11	小井田Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
12	大道沢Ⅲ	集落跡	縄文・弥生 縄文土器（前期）、弥生土器
13	小井田Ⅱ	集落跡	縄文・弥生 縄文土器（晩期）、弥生土器
14	小井田Ⅳ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
15	小井田Ⅴ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
16	小井田Ⅲ	集落跡	縄文・弥生・平安・近世 縄文土器（早・中・後・晩期）、弥生土器、平安土器
17	蒔前	散布地	縄文 縄文土器（晩期）、石器、土面、土笛、土偶、装飾品
18	越田橋Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
19	越田橋Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
20	松嶺館	城館跡	中世
21	平船Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
22	古里Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
23	榑山	集落跡	縄文・奈良・平安 縄文土器（後・晩期）、平安（土師器）
24	古里Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
25	榑山館	城館跡	中世 堀切、平場、帯郭
26	下榑山Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
27	下村向	集落跡	縄文 縄文土器（後・晩期）
28	内野Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（後・晩期）
29	内野Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（後・晩期）
30	毛島Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
31	毛島	集落跡	縄文 縄文土器（後・晩期）
32	高平Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（前・後・晩期）
33	高平Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（後・晩期）
34	保坂	集落跡	縄文 縄文土器（後・晩期）
35	間木野	集落跡	縄文・弥生 縄文土器（晩期）、弥生土器
36	双畑Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
37	双畑Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
38	田の上	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
39	小木田	集落跡	縄文 縄文土器（後・晩期）
40	小木田館	城館跡	中世
41	似平Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
42	似平Ⅲ	集落跡	縄文 縄文土器（後・晩期）
43	野場Ⅱ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
44	似平Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
45	野場Ⅰ	集落跡	縄文 縄文土器（晩期）
46	一戸城	散布地・城館	縄文・中世 堀、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、陶磁器、鉄製品、古銭、木製品 縄文土器（中・後期）、土師器
47	小滝館	城館跡	中世 堀切、平場、帯郭
48	毘沙門堂	城館跡	平安・鎌倉 塚
49	西法寺館	城館跡	中世 堀、平場、郭
50	上野D	散布地	奈良・平安 土師器
51	上野G	集落跡	奈良・平安 土師器
52	上野E	散布地	縄文・奈良・平安 土師器、縄文土器（後期）
53	上野B	散布地	縄文・弥生・奈良・平安 縄文土器（前・中・後・晩期）、弥生土器、土師器
54	上野I	散布地	縄文・弥生・平安 縄文土器（中・後期）、土師器、弥生土器
55	上野J	散布地	縄文 縄文土器（後・晩期）
56	大平	集落跡	縄文・弥生・平安 縄文土器（中・後期）、土師器、弥生土器
57	月館城	城館跡	中世 二重堀、平場、土師器

No	遺跡名	種別	時代等 / 備考
58	中里館	城館跡	縄文・中世 堀、平場、陶磁器、縄文土器、土師器
59	老ヶ館	城館跡	中世 堅堀?、平場、腰郭
60	小友館	城館跡	中世 郭、平場
61	女鹿館	城館跡	中世 郭、平場、腰郭
62	半在家館	城館跡	中世
63	女鹿沢内館	城館跡	中世
64	根反館	城館跡	中世 平場、単郭、堀、土塁
65	姉帯城	城館跡	中世 堀、土塁、郭
66	仁昌寺Ⅲ	集落跡	縄文 縄文土器
67	五月館	城館跡	中世 堀、平場
68	御所野	散布地	縄文・平安 縄文土器(中期)、土師器、石鏃、磨製石斧
69	仁昌寺Ⅱ	散布地	縄文土器
70	田中Ⅰ	散布地	縄文・中世 縄文土器(早・前・中・晩期)、磨石、土師器
71	田中Ⅱ	散布地	縄文・中世 縄文土器(中・晩期)、土師器、石斧、石鏃
72	田中Ⅲ	散布地	縄文・平安 縄文土器(前・後期)、土師器
73	田中Ⅳ	散布地	縄文・平安 縄文土器(中期)、土師器
74	田中Ⅴ	散布地	縄文・平安 縄文土器(中期)、土師器
75	子守A	散布地	縄文・平安 縄文土器(中期)、土師器
76	北館A	散布地	縄文・平安 縄文土器(早～晩期)、土師器
77	北館B	散布地	縄文・奈良・平安 縄文土器(中期)、土師器
78	馬場平	集落跡	縄文 縄文土器(中期)
*	出ル町館	城館跡	中世
*	赤屋敷	散布地	縄文・平安 縄文土器(晩期)、土師器
*	山井	散布地	縄文 縄文土器(晩期)
*	野尻Ⅲ	散布地	縄文 縄文土器(後・晩期)
*	道白Ⅱ	散布地	縄文 縄文土器(中・後・晩期)
*	大畑Ⅱ	散布地	縄文・古墳・平安・近世 縄文土器(早期)、北大式土器、土師器、陶磁器



第6図 周辺の遺跡分布図

Ⅲ．調査の方法と室内整理

1．野外調査

(1) グリッドの設定

グリッドの設定にあたっては、平面直角座標第X系を用いた。調査区の北東に起点0 (X=23,400、Y=40,600) を設け、0 から南西方向に50×50mのメッシュで調査区全体を大きく区画した。この大区画には、起点0 から西にⅠ・Ⅱ・Ⅲの番号、南にA・B・C・D・E・Fのアルファベットを付して、ⅠA・ⅡAと呼称した。さらに大区画を10等分して5×5mに小区画し、東から0～9、北からa～jを付し、ⅠA1a・ⅡB3c等の小グリッドを設定した。調査区内には、小グリッドに沿った地点に基1 (X=23,200、Y=40,525)、基2 (X=23,250、Y=40,500)、基3 (X=23,350、Y=40,575) と補1～補7を設置して区割り及び実測の基準点とした。

また、飛び地となっているⅠA区を除いた調査区は、南側と北側が斜面、その間がなだらかな平坦地になっているため、便宜上、南斜面部・中央平坦部・北斜面部という呼称も用いて調査を行った。

(2) 粗掘りと遺構検出

遺構検出面までの深さ及び層序の確認のため、調査区の中央平坦部 (ⅡD～ⅡE・ⅢC～ⅢD区) の西側2ヶ所と東側2ヶ所、北側3ヶ所、南側1ヶ所に2×4mあるいは1×2mの坪掘りを入れた。この結果、表土を20cm～30cm掘り下げたところで遺構が検出されたので、調査区中央平坦部については、人力で表土の除去を行い、その後鋤簾をかけ、遺構の検出を行った。南側と北側の斜面については、それぞれに幅約1mのトレンチを数ヶ所入れ、層序を確認した後、北側は重機で、南側は重機と人力で表土及び盛土の除去を行った。ⅠA区及びⅡC区については、前述の試掘の結果を踏まえ、人力と重機で表土除去を行い、その後遺構の検出を行った。

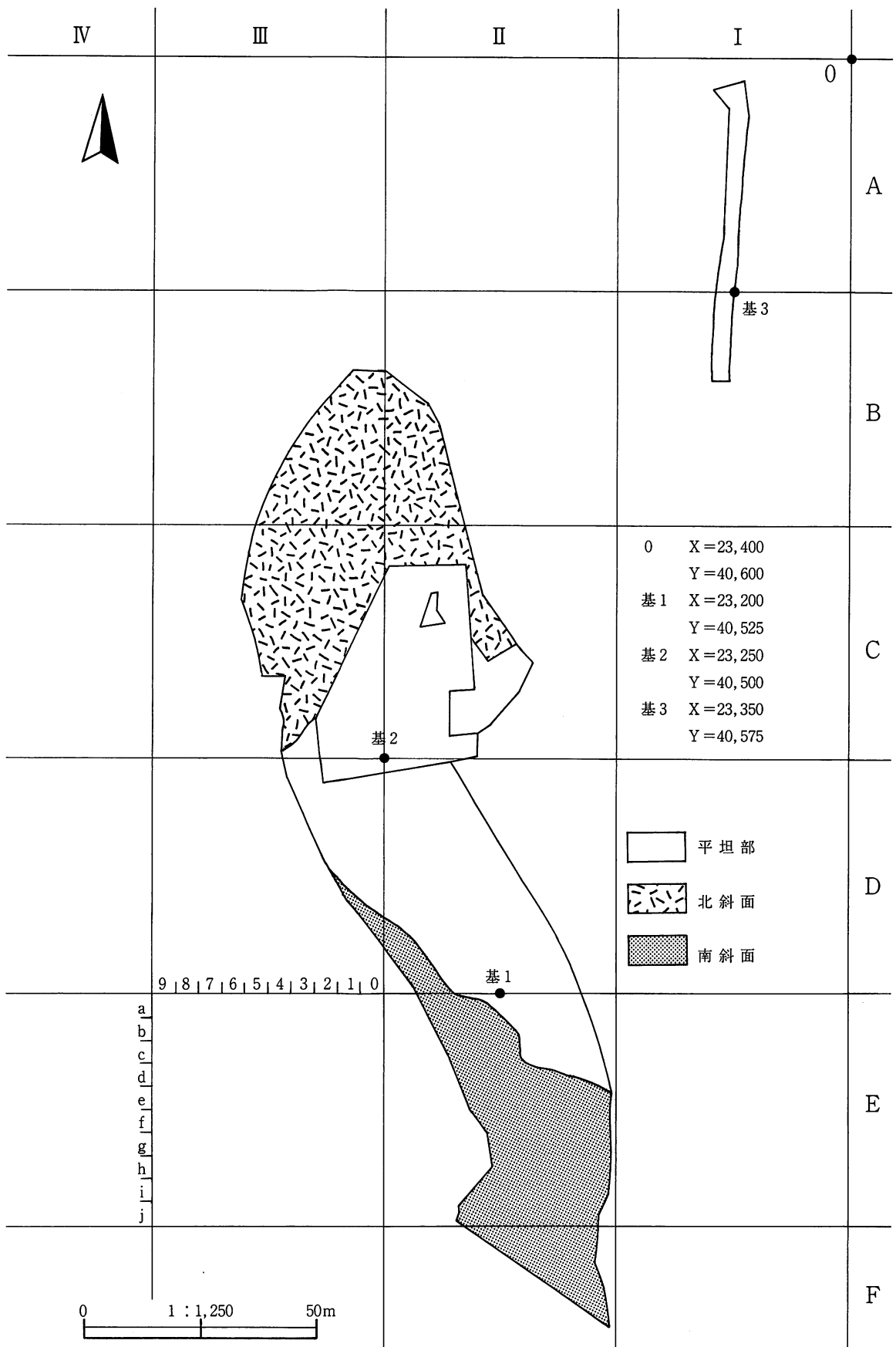
(3) 遺構の命名

竪穴住居跡については、検出された順に大グリッド名を付し、ⅡD-1住居跡、ⅢD-2住居跡等と呼称した。土坑・焼土遺構等については、検出された順に大グリッド名と小グリッド名を合わせて付し、ⅡD5f土坑、ⅡD6f-1土坑等と呼称した。尚、遺構が複数のグリッドにかかる場合は、遺構面積が多く含まれている方のグリッド名を採用したが、厳密なものではない。

(4) 遺構の精査と実測・遺物の取り上げ

検出された遺構は、住居跡は4分法、土坑類は2分法を原則として精査を行ったが、必要に応じてその他の方法も併用した。精査の各段階において図面の作成や写真撮影を適宜行った。

遺構の平面実測にあたっては、トータル・ステーション及びトランシットを併用して基準点を設定し、基1から東西南北の4方向にE1、E2、W1、W2、S1、S2、N1、N2と基点を離れるにしたがって1m単位の座標を与え、簡易的な遣り方測量を行った。ただし、遺構によってはトータル・ステーションを使用し、測量を行った。実測図は平面図・断面図とも1/20縮尺での作成を原則とし、住居内のカマド・炉の断面や焼土遺構などは基本的に1/10の縮尺で図面を作成した。



第7図 グリッド配置図

遺構内出土遺物は、基本的に埋土では上部・下部に分けて取り上げ、床面や底面出土の遺物は、必要に応じて写真撮影、図面作成の後に取り上げた。遺構外出土遺物については、グリッド毎に出土した層位を記して取り上げるよう努めた。ただし、表採遺物については、基準杭の設置前に取り上げを行ったものもあったため、明確に出土地点を記録できず、中央平坦部北東側・北西側等とおおまかに出土地点を記してとりあげたものもある。

(5) 写真撮影

写真撮影は、基本的に6×7cm判カメラ(モノクロ)1台をメインカメラとし、これに35mm判カメラ2台(モノクロ・カラーリバーサル各1台)を補助カメラとして2組使用し、ポラロイドカメラ3台をメモ的な用途として使用した。ただし、調査期間の後半は時間的な制約があり、6×7判カメラでの撮影を省略した場合も多々あった。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。なお、遺構の精査がほぼ終了した段階で、小型飛行機による空中写真の撮影を行った。

(6) 地形測量

調査区南北斜面部の立木の伐採及び雑物撤去が終了した段階で、第1回目の地形測量を行った。そして南北斜面部の表土及び現代の盛土を除去し、中世段階の面を検出後、第2回目の地形測量を行った。調査区南北斜面部の立木の伐採処理が遅れたため、現況状態のままの調査区全体の地形測量は行っていない。

(7) 広報活動

調査経過を公開する現地公開を11月6日に開催した。また、個人の見学要請、新聞・雑誌等マスコミ機関からの取材要請があった場合は可能な限りこれに応じ、広報活動の一部とした。

2. 室内整理

(1) 遺構

遺構配置図は発掘調査時に作成した図面を基に南斜面部、中央平坦部、北斜面部、それぞれについて作成し、分割して掲載した(縮尺率は不定である)。IA区については、調査区全体の遺構配置図を作成し、それらにのみ掲載した。掘立柱建物跡については柱穴群全体図にのみ掲載している。各遺構については、実測してきた図面の座標、セクションポイントの位置、基準高等を点検しながら遺構毎に第2原図を作成し、報告書の土層注記は別紙に箇条書きに記して第2原図に付した。ただし、時間の制約上、土坑・トレンチ断面については第2原図作成を省略し、トレースしたものもある。遺構の点検・合成にあたっては、断面図と平面図が合致しない等(平面レベルと断面レベルの不一致・セクションポイントの不記載も含む)の問題があり、可能な限り修正・復元を行うよう努めたが、徹底はできなかった。各遺構図面は以下の縮尺を原則としたが、一部に変更もあり、図面にはそれぞれスケール・縮尺率を付している。竪穴住居跡の平面・断面図1/50・1/60、カマド等細部の断面図1/25、掘立柱建物跡1/100、土坑の平面・断面図1/50、円形周溝の平面・断面図1/50、炉跡・焼土遺構の平面・断面図1/25、柱穴群全体図1/80、トレンチ断面図1/100。また、平面図における北印は座標北を示す(基1における真北方向は、7°20′1″西偏する)。ほか、位置の表示には基1から東西南北への1m単位の座標を使用した。なお、写真図版における縮尺は不定である。

本文の遺構の事実記載における、規模の測定値は、〔 〕内の数値は調査できた部分の値あるいは残存値で、（ ）内の数値は推定値である。

埋土断面土層注記及び本文において火山灰を表記する場合、一部の例外を除き、以下に記す略称を用いて表現した。

十和田 a 降下火山灰→T o - a 十和田 b 降下軽石→T o - b 十和田中振降下軽石→T o - C h

十和田南部降下軽石→T o - N b 十和田八戸テフラ→T o - H 十和田大不動→T o - O f

(2) 遺物

遺物は、洗浄（遺物水洗）と出土地点毎の仕分けを現場で野外調査と平行して進め、残った遺物の洗浄を室内整理の段階で行った。その後、注記・接合・復元を行い、選別・登録の作業を行った。報告書には、安藤が選別し、一次登録した中から、酒井が取捨選択をしたものを掲載した。

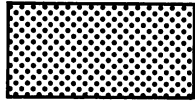
石器・石製品の分類にあたっては、石器を「ある行為を目的とし、石を材料にして作られた道具」と定義し、石製品は、「石を材料にして作られた装飾品あるいは、用途の不明な物」と定義し、分類を行った。

掲載遺物の縮尺は下記を原則とし、写真図版内には、縮尺率のみを記し、実測図版には全てスケールを入れた。なお、縮尺率の正誤については校正段階で整合している。

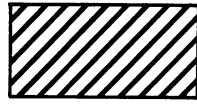
土器の実測図・拓本・写真…1/3 剥片石器・石製品…1/2 (写真1/2・2/3) 礫石器…1/3 (写真1/2・1/3) 金属製品…1/2 土製品…1/2 陶磁器…1/2 銭貨…原寸

土師器の実測図の中に、筆者の理解不足のため、ヘラミガキ調整をヘラナデ調整と誤って実測・掲載してしまったものが多々ある。土器観察表の調整の欄に、「ナデ (M)」と記入してある場合は、「実測図ではナデ調整になっているが、実際にはミガキ調整を施されている、あるいはその可能性が高い」と理解していただきたい。

(遺構)



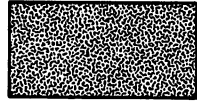
焼土



2段になっている土坑



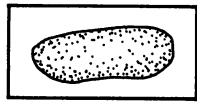
粘土



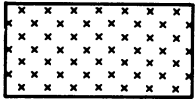
火山灰



柱痕

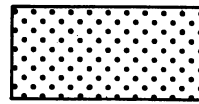


礫

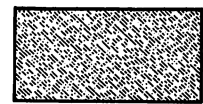


掘りすぎ

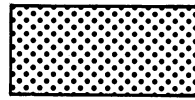
(遺物)



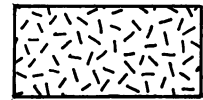
内黒



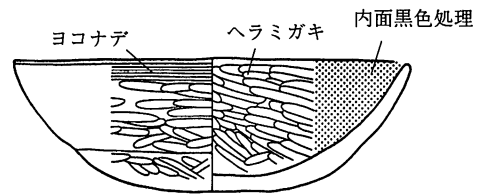
剥落



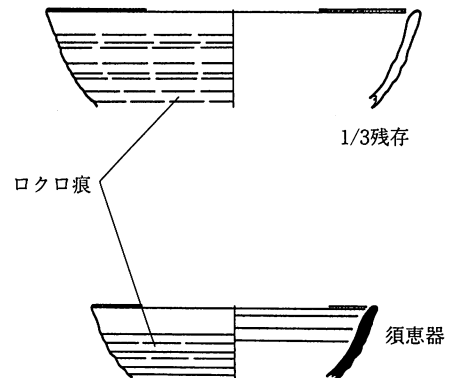
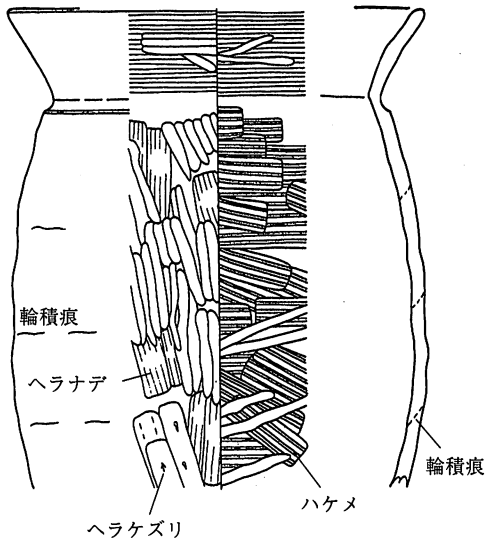
石器使用面



溶解部



完形~1/2残存



1/3残存

1/4残存

第8図 実測図凡例

IV. 検出された遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

(1) 縄文時代

ⅡC-1 竪穴住居跡 (第9図、写真図版9)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡC4・5h、ⅡC4・5iグリッド内に位置する。Ⅳ層上面で、検出された。当初は壁の立ち上がりが部分的にしかわからず、平面プランを掴めないまま精査を進めたが、壁面の立ち上がりを追うことによって、ほぼ円形の住居跡として認識した。ⅡC-3住居跡・ⅡC5h-1・2・3土坑・ⅡC5i土坑・ⅡC5i焼土遺構・PP17と重複する。本住居跡が最も古い。

<規模・平面形>南東部をⅡC-3住居跡に截られており、断定はできないが径5.7m前後の円形を呈すると考えられる。

<埋土>埋土上位は暗褐色土主体で、部分的に黒褐色～褐色土が混入する。中位から下位にかけては、黄褐色土(To-H)の地山ブロックを含む黒～暗褐色土が主体である。人為堆積の可能性が高い。

<壁・床>壁面はⅣ層中に構築されており、壁高の残存値は9～41cmである。東側の壁面は、他の遺構との截り合いにより破壊、あるいは削平されたものと考えられ、確認されなかった。床面はⅣ層中に構築されており、ほぼ平坦である。貼床痕跡、壁溝は確認できなかった。

<炉>床面のほぼ中央で検出されたが、ⅡC5h-2土坑・ⅡC5i土坑に截られており、残存状態は良くない。周辺に垂円礫が一つ存在するが、炉の構成礫であるかどうかは不明であり、地床炉であった可能性の方が高いと考えられる。

<柱穴・ピット>床面北西側でピットが1基検出されている。規模は87×83cm・深さは約16cmで、平面形は略円形を呈し、断面形は皿状である。埋土はパミスを含む黒褐色土の単層である。柱穴は床面で10個検出されている。PP2・PP7・PP9は、配置から考えて住居に伴う可能性が高いが、その他は不明である。

遺物 (第76図1～13、写真図版78)

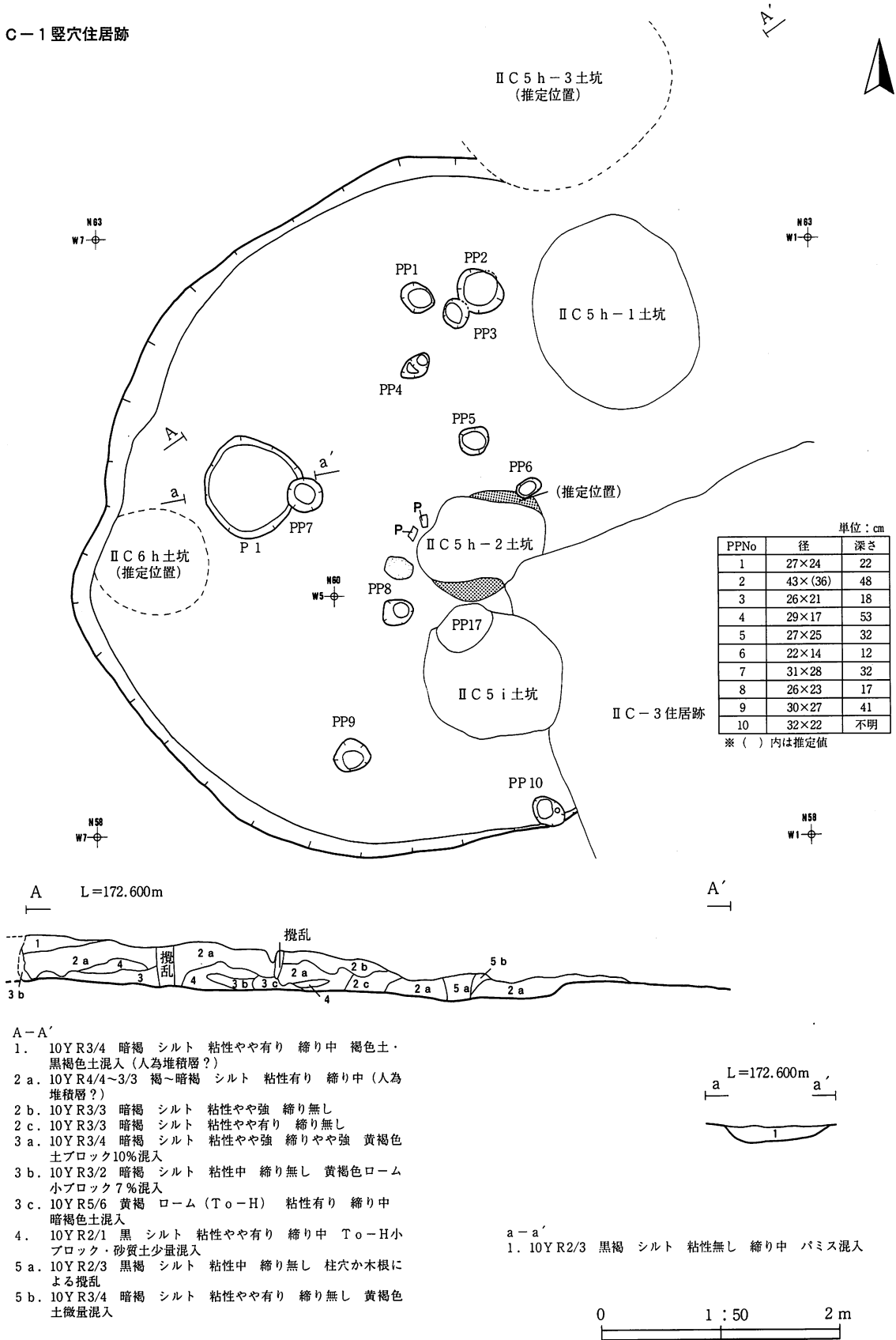
<出土状況>床面及び埋土から縄文土器が、埋土から石製品が出土している。

<縄文土器>1は口縁部が平縁で、僅かに内傾する、小型の深鉢である。2は鉢あるいは壺の底部と思われる。3・4は口唇部に突起を有する深鉢である。5は口縁部と体部下端に平行沈線文をもち、口唇部に刻みを施文された鉢である。6は無文の浅鉢で、体部下端～底部にかけて木葉痕が見られる。7・10・12は地文のみ施文された深鉢の口縁部である。11は同じく地文のみ施文された浅鉢の口縁部と思われる。8・9は同一個体と思われる。器種は深鉢で、8は口縁部片、9は胴部片で、いずれも綾繰り文を有する。

<石製品>13の1点が出土している。石質は玉髓である。遺構に伴うものではなく、流れ込みの可能性が高い。

時期 遺構の形態及び出土した土器の特徴から縄文時代晩期の遺構である可能性がある。

II C-1 竪穴住居跡



第9図 II C-1 竪穴地住居跡

(2) 奈良時代

ⅡD-1 竪穴住居跡 (第10・11図、写真図版10・11)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD6b、ⅡD5・6c、ⅡD5・6dグリッド内に位置する。Ⅳ層上面で検出された。ⅡD-1b住居跡・ⅡD-18住居跡・PP185・PP186・PP309と重複する。本住居跡が最も古い。北東部が調査区域外にかかっている。

<規模・平面形>南西辺5.40m、南東辺〔2.14〕m、北西辺〔4.46〕mを測る。調査終了部分から判断し、平面形は正方形を呈するものと考えられる。

<埋土>埋土の上位には十和田a降下火山灰の水性堆積層が認められた。中位は黄褐色土粒、ブロックを含む黒～黒褐色土主体である。下位と壁際には黒褐色土に明黄褐～黄褐色土・にぶい黄褐色土・にぶい黄褐色土等がブロック状に混入する第一次埋没土の堆積が認められる。

<壁・床>壁高の残存値は28～60cmである。床面はほぼ平坦で締り、Ⅳ層中に構築されている。全面に掘り方を持ち、黒褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土の混合土で貼り床されている。厚さは4～16cmである。

<カマド>北西壁の中央部に位置すると考えられる。燃烧部には径約40cm、層厚約3cmの焼土が形成されており、焼成は良好である。袖部は地山を粘土質シルトで覆って構築されており、両袖の内側には支脚と考えられる甕と礫が残存している。煙道部は刳り貫き式で、外側に向かい、13°下りの傾斜を持つ。煙出し孔は径29×27cm、深さ73cmの円筒状を呈し、上部には球胴甕の体部上半が逆位で埋設されている。

<壁溝>北西辺と南東辺の北側で検出されている。幅4～20cm、深さ1～7cmである。

<柱穴・ピット>床面で4基の柱穴を検出した。主柱穴と考えられるのはPP1とPP2である。南隅で小ピットを2基検出した。P1の規模は径53×50cm、深さ18cmで、平面形はほぼ円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は黒色土主体の混合土である。P2の規模は長軸約140cm・短軸約60cm、深さ9～14cmで、平面形は不整な長方形を呈する。埋土は黒褐色土主体の混合土である。P1よりP2が新しい。

遺物 (第77～79図14～46、写真図版78～81)

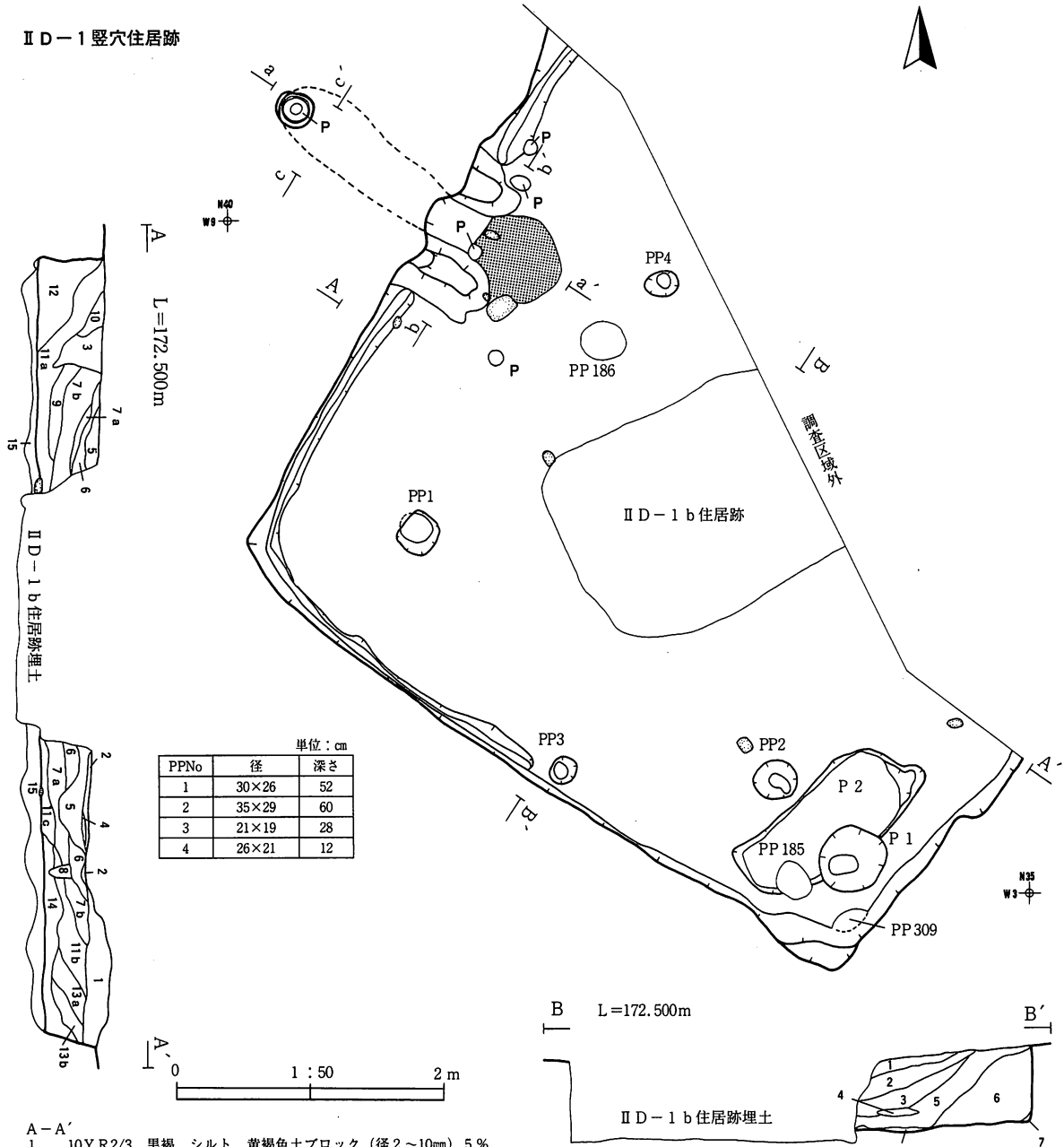
<出土状況>土師器と金属製品が出土している。

<土師器>床面、カマド内及び埋土から、坏、甕、球胴甕、片口、小鉢、甑が出土している。坏は12点出土している。17・29・36は内黒で丸底を持ち、内外面共ミガキ調整を施される。14・16・24～26・30・31・35は非内黒で、14・24・26は平底に近い丸底を持つ。16は平底で皿に近い形態を呈する。34はロクロ成形の坏の口縁部片で、遺構に伴うものではないと考えられる。甕は立体・破片あわせて12点の出土である。口縁部は外反・外傾し、外面調整はミガキが主体である。球胴甕は4点出土しており、外面調整はミガキのもの(19・28)とナデのもの(43・44)がある。15は片口で、口縁部はヨコナデ、胴部外面はケズリ、内面はミガキ調整されている。18は多孔式の甑で、口縁部はヨコナデ、体部外面はミガキ、内面はナデ調整されている。33は小鉢で、外面はケズリ、内面はミガキ調整を施される。

<金属製品>45は埋土上位、46は床面からの出土である。45は棒状、46は板状を呈する。45は丸釘、46は刀子の一部と推察される。

時期 遺構の形態と出土した土器の特徴から、奈良時代の住居跡と考えられる。

II D-1 竪穴住居跡

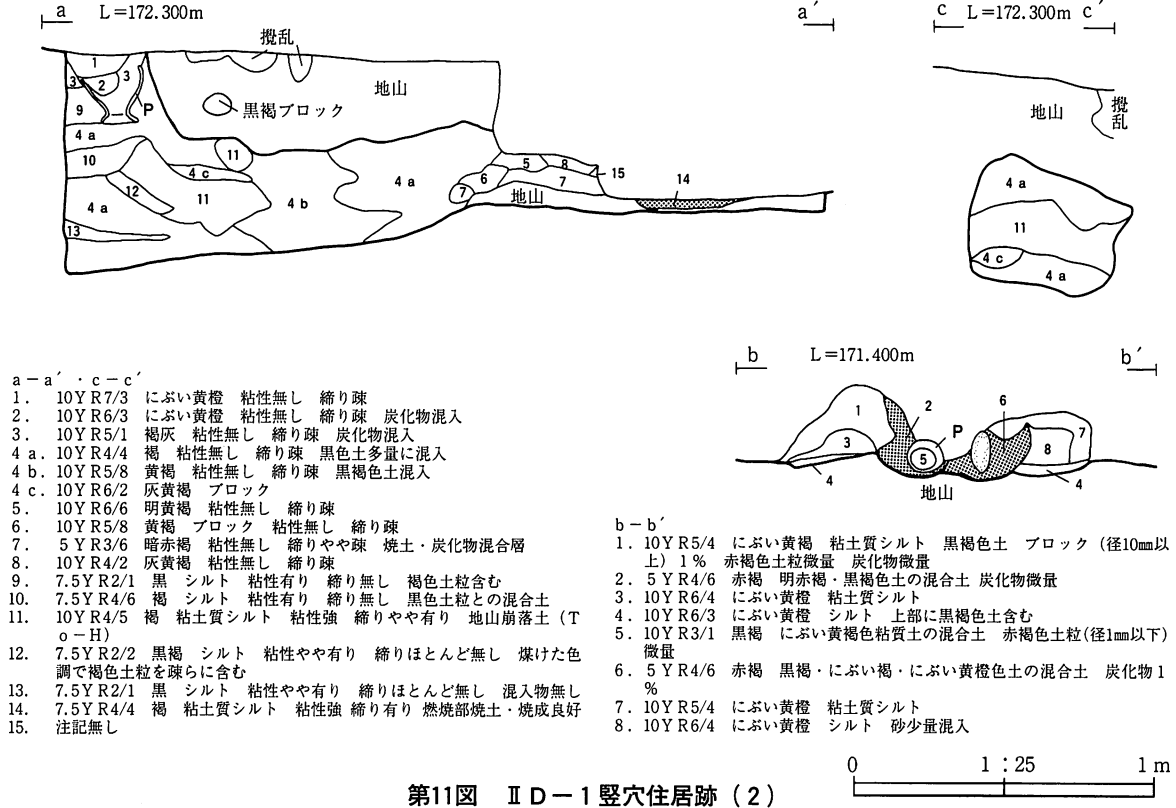


- A-A'
- 10Y R2/3 黒褐 シルト 黄褐色土ブロック (径2~10mm) 5%
 - 10Y R2/3 黒褐 シルト 黄褐色パミス (径1mm以下・T o - C h) 微量
 - 10Y R2/3 黒褐 シルト 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 1%・明褐色土ブロック1%・黄褐色土ブロック1% 柱穴?
 - 10Y R2/3 黒褐 シルト 明褐色土粒微量 (焼土粒?) T o - C h・褐色粘質土ブロック含む
 - 10Y R2/1~2/3 黒~黒褐 シルト 灰黄色火山灰土 (T o - a) ブロック (径2mm以上) 含む
 - 2.5Y 6/2 灰黄 火山灰土 T o - aの水性堆積層 黒褐色土ブロック含む (攪乱?)
 - 10Y R3/2 黒褐 シルト T o - C h 微量
 - 10Y R2/1 黒 黒褐色土との混同土 灰黄色火山灰 (T o - a) ブロック (径1~5mm) 含む 黄褐色土ブロック (径2~5mm)・T o - C h 含む
 - 10Y R2/1 黒 黒褐色土との混同土 攪乱層
 - 2.5Y 4/2 暗灰黄 シルト 黄褐色土ブロック25% 灰黄色土ブロック20%
 - 2.5Y 3/2 黒褐 シルト T o - C h 微量 黄褐色土ブロック (径2~10mm) 5% 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 5% 明褐色土ブロック (径5~10mm) 微量
 - 2.5Y 3/2 黒褐 シルト 黄褐色土ブロック (径2~10mm) 10% 黒色土ブロック (径10mm以上) 微量 炭化物 5%
 - 2.5Y 3/2 黒褐 シルト T o - C h 微量 明褐色土ブロック (径2~10mm) 5%

- B-B'
- 2.5Y 3/2 黒褐 シルト 黄褐色土粒 (径1~2mm) 5%
 - 2.5Y 3/2 黒褐 シルト 黄褐色粘質土ブロック (径5mm以上) 20% 黄褐色土ブロック (径2mm以上) 15% 黒色土ブロック (径5mm以上) 20%
 - 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 シルト 明黄褐色粘質土ブロック (径2mm以上) 黄褐色土ブロック・黒色土ブロック・灰黄色土ブロック含む
 - 13と同種の土がより細かく混じりあう
 - 2.5Y 3/2 黒褐 シルト 明黄褐色土 (径10mm以上) ブロック含む 明黄褐色パミス微量 黄褐色土混入 黄褐色土ブロック (径2~10mm) 15% 炭化物微量
 - 10Y R3/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締り有り 黄褐色土・褐色土との混合土 貼床掘り方理土
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 灰黄色火山灰土 (T o - a) ブロック (径2mm以上)・黄褐色土ブロック (径5~10mm) 含む
 - 10Y R2/1 黒 シルト 黒褐色土との混同土 黄褐色土粒含む
 - 2.5Y 3/2 黒褐 シルト 黄褐色パミス (T o - C h?) 微量
 - 10Y R2/1 黒 シルト 黒褐色土との混同土
 - 2.5Y 4/2 暗灰黄色 黄褐・黄褐・黒・黒褐色土がブロック状に混じる
 - 5より大きいブロックが混入・下部に黒色土が多く堆積
 - 地山 (掘り過ぎ)

第10図 II D-1 竪穴住居跡 (1)

ⅡD-1 竪穴住居跡カマド



- a-a'・c-c'
1. 10Y R7/3 におい黄橙 粘性無し 締り疎
 2. 10Y R6/3 におい黄橙 粘性無し 締り疎 炭化物混入
 3. 10Y R5/1 褐灰 粘性無し 締り疎 炭化物混入
 - 4 a. 10Y R4/4 褐 粘性無し 締り疎 黒色土多量に混入
 - 4 b. 10Y R5/8 黄褐 粘性無し 締り疎 黒褐色土混入
 - 4 c. 10Y R6/2 灰黄褐 ブロック
 5. 10Y R6/6 明黄褐 粘性無し 締り疎
 6. 10Y R5/8 黄褐 ブロック 粘性無し 締り疎
 7. 5 Y R3/6 暗赤褐 粘性無し 締りやや疎 焼土・炭化物混合層
 8. 10Y R4/2 灰黄褐 粘性無し 締り疎
 9. 7.5Y R2/1 黒 シルト 粘性有り 締り無し 褐色土粒含む
 10. 7.5Y R4/6 褐 シルト 粘性有り 締り無し 黒色土粒との混合土
 11. 10Y R4/5 褐 粘土質シルト 粘性強 締りやや有り 地山崩落土 (T o-H)
 12. 7.5Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締りほとんど無し 煤けた色調で褐色土粒を疎らに含む
 13. 7.5Y R2/1 黒 シルト 粘性やや有り 締りほとんど無し 混入物無し
 14. 7.5Y R4/4 褐 粘土質シルト 粘性強 締り有り 焼土・焼成良好
 15. 注記無し

- b-b'
1. 10Y R5/4 におい黄褐 粘土質シルト 黒褐色土 ブロック (径10mm以上) 1% 赤褐色土粒微量 炭化物微量
 2. 5 Y R4/6 赤褐 明赤褐・黒褐色土の混合土 炭化物微量
 3. 10Y R6/4 におい黄橙 粘土質シルト
 4. 10Y R6/3 におい黄橙 シルト 上部に黒褐色土含む
 5. 10Y R3/1 黒褐 におい黄褐色粘質土の混合土 赤褐色土粒 (径1mm以下) 微量
 6. 5 Y R4/6 赤褐 黒褐・におい褐・におい黄褐色土の混合土 炭化物1%
 7. 10Y R5/4 におい黄橙 粘土質シルト
 8. 10Y R6/4 におい黄橙 シルト 砂少量混入

ⅡD-5 b 竪穴住居跡 (第12図、写真図版12)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD4・5 e、ⅡD4 f グリッド内に位置する。平安時代の遺構であるⅡD-5 竪穴住居跡の貼床土を剥がしている際に検出された。本遺構が古い。北東部が調査区域外にかかっている。

<規模・平面形>南西辺3.60m、南東辺〔1.60〕m、北西辺〔1.76〕mを測る。調査終了部分から判断し、平面形は正方形を呈するものと考えられる。

<埋土>埋土の上位は十和田 a 火山灰と考えられる灰白色土ブロックを含む黒褐色土が主体である。中位から下位にかけては、黄褐色土を含む黒褐色土が堆積している。9層において焼土層が確認されていることと、壁際に焼土粒・炭化物を含む暗褐色土が堆積していること、そして床面付近での炭化材の出土状況から、本遺構は焼失した可能性がある。

<壁>南西辺と北西辺は、平安時代の遺構であるⅡD-5 竪穴住居跡によって上部を破壊されており、残存値は約8~21cmである。南東辺の残存値は58~68cmで、緩やかに外傾して立ち上がり、Ⅲ~Ⅳ層を壁面とする。

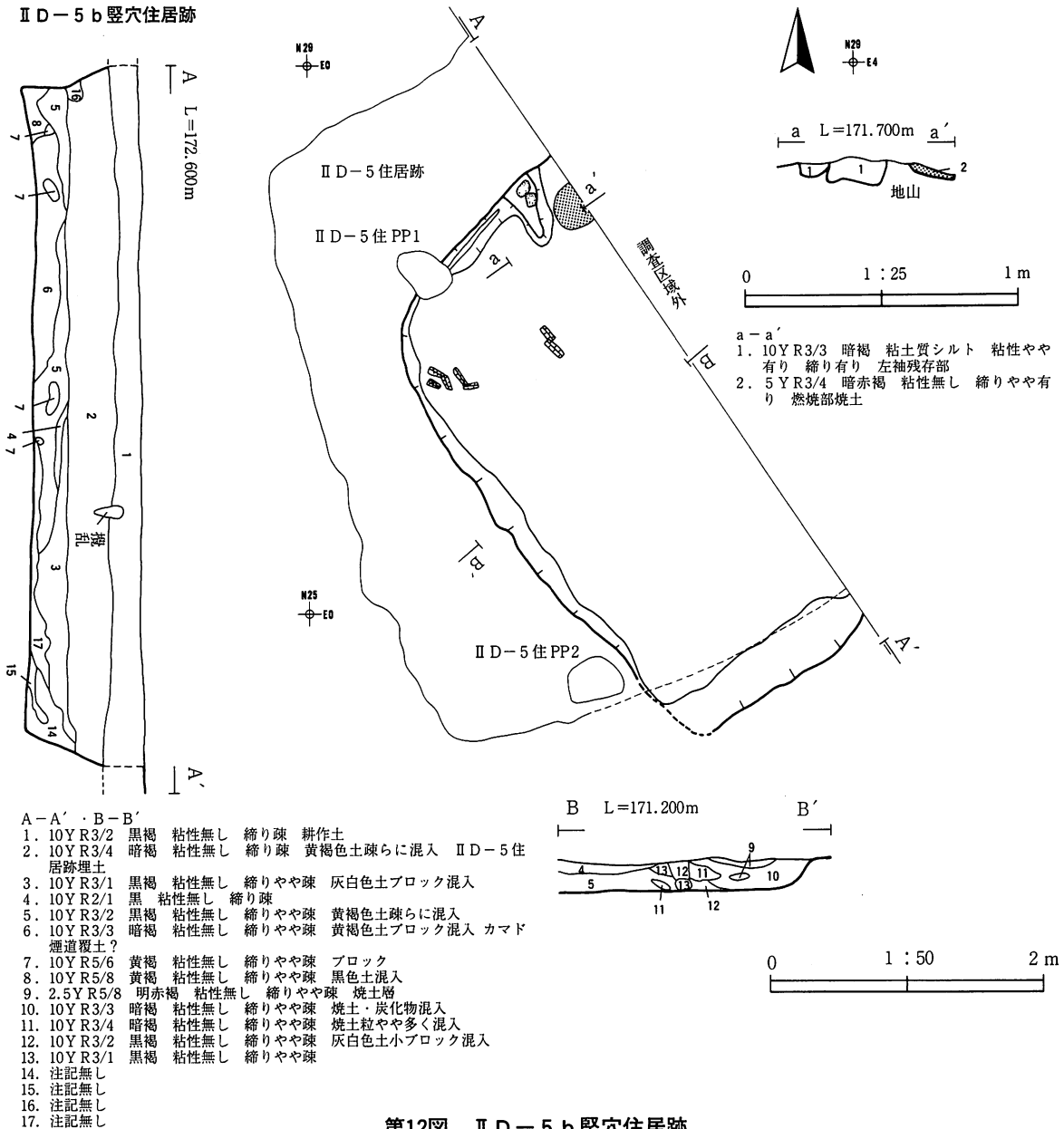
<床面>床面はⅣ層中に構築されている。西隅の床上約5~10cmの面で炭化材が検出されている。樹種はクリである。

<カマド>北西辺のほぼ中央と推測される位置で、左袖部と焼土の一部が検出されている。袖部は地山を掘り込み、そこに粘土質シルトを貼って構築されている。

<壁溝>北西辺の西側でのみ検出されている。幅は12~17cm、深さは約5cmを測る。

<柱穴・ピット>検出されていない。

II D-5 b 竪穴住居跡



第12図 II D-5 b 竪穴住居跡

遺物 (第5図47・48、写真図版81)

<出土状況>土師器が2点出土している。

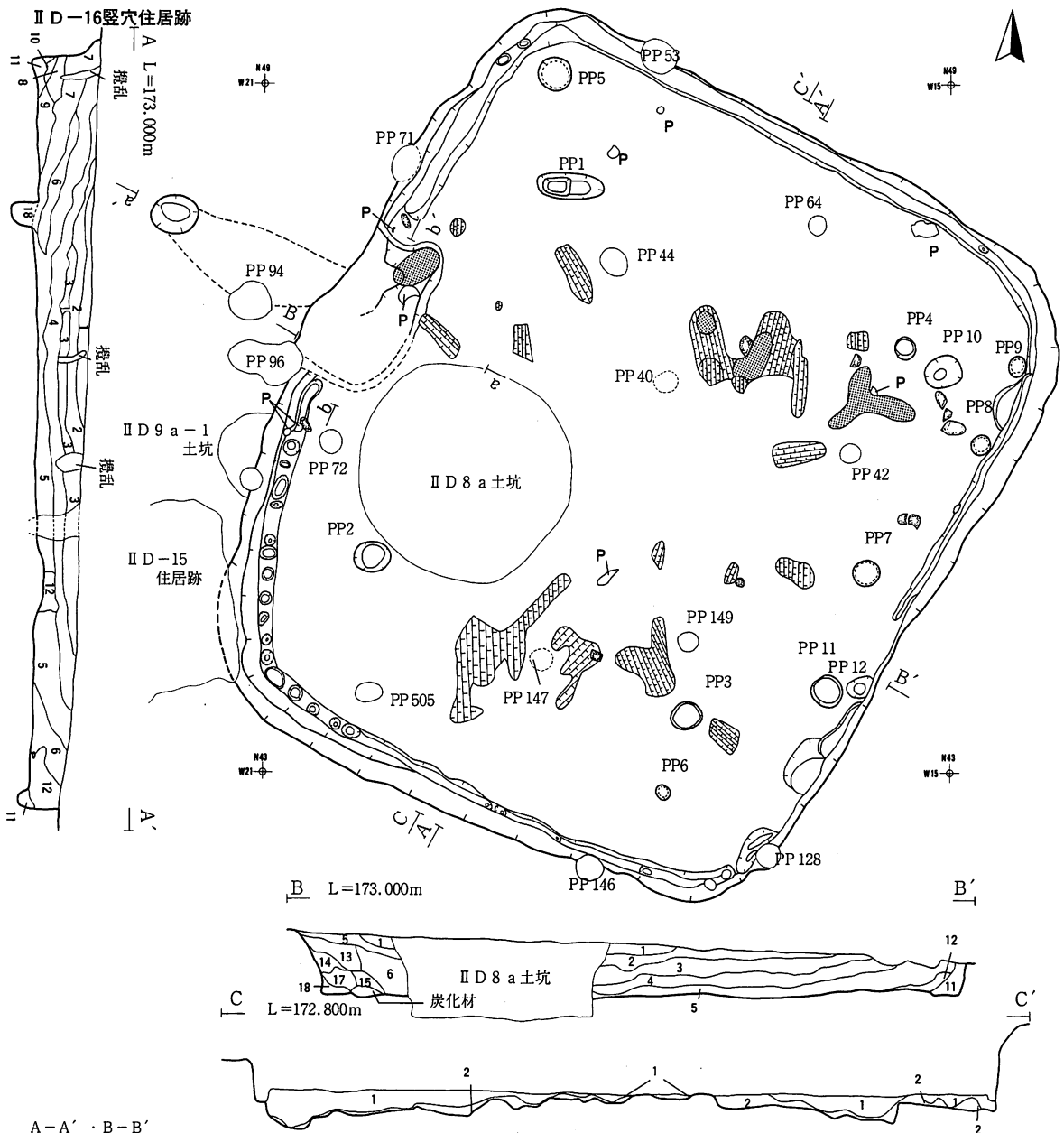
<土師器>埋土から甕の口縁部片が1点、胴部片が1点出土している。47は内外面共にナデ調整を施されている。48は、外面にケズリ後ミガキ、内面にはナデとミガキ調整が施されている。

時期 検出状況と遺構の形態及び出土した遺物の特徴から、奈良時代の住居跡と考えられる。

II D-16 竪穴住居跡 (第13・14図、写真図版13・14)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 7~9 a、II D 8・9 b グリッド内に位置する。III層中で検出された。II D-15 竪穴住居跡・II D 8 a 土坑・II D 9 a-1 土坑・II D 9 a-1 焼土遺構・1~3、6、8号掘立柱建物跡



- A-A'・B-B'
- 10Y R3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 T o-a 粒状、ブロック状に混入
 - 10Y R3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 1よりT o-aブロック多く混入
 - 2.5Y 6/4 におい黄 粘性無し 締りやや疎 T o-a 砂質
 - 10Y R2/1 黒 粘性無し 締りやや疎 T o-aの小ブロック・バミス少量混入
 - 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土・バミス・炭化物混入
 - 10Y R4/4 褐 粘性無し 締り中 黄褐色土ブロック多く混入
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土粒少量混入
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土粒少量混入
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 8より黄褐色土ブロック多く混入
 - 10Y R4/4 褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土ブロック含む
 - 10Y R2/2 黒褐 粘性無し 締り疎 バミス疎らに混入
 - 5Y R4/6 赤褐 粘性無し 締り疎 焼土層
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 バミス・炭化物混入
 - 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 締りやや疎 褐色土ブロック・バミス混入
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 バミス・炭化物混入 13よりバミス少ない
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 炭化物混入
 - 10Y R6/6 明黄褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土と明黄褐色土の混合層
 - 10Y R3/1 黒褐 粘性無し 締り疎

- C-C'
- 10Y R4/6 褐 (T o-N b含む) におい黄色土・黒褐色土との混合土(ブロック状) 粘床土
 - 2.5Y 6/3 におい黄 砂質シルト 及び 10Y R5/8 黄褐色シルト 地山

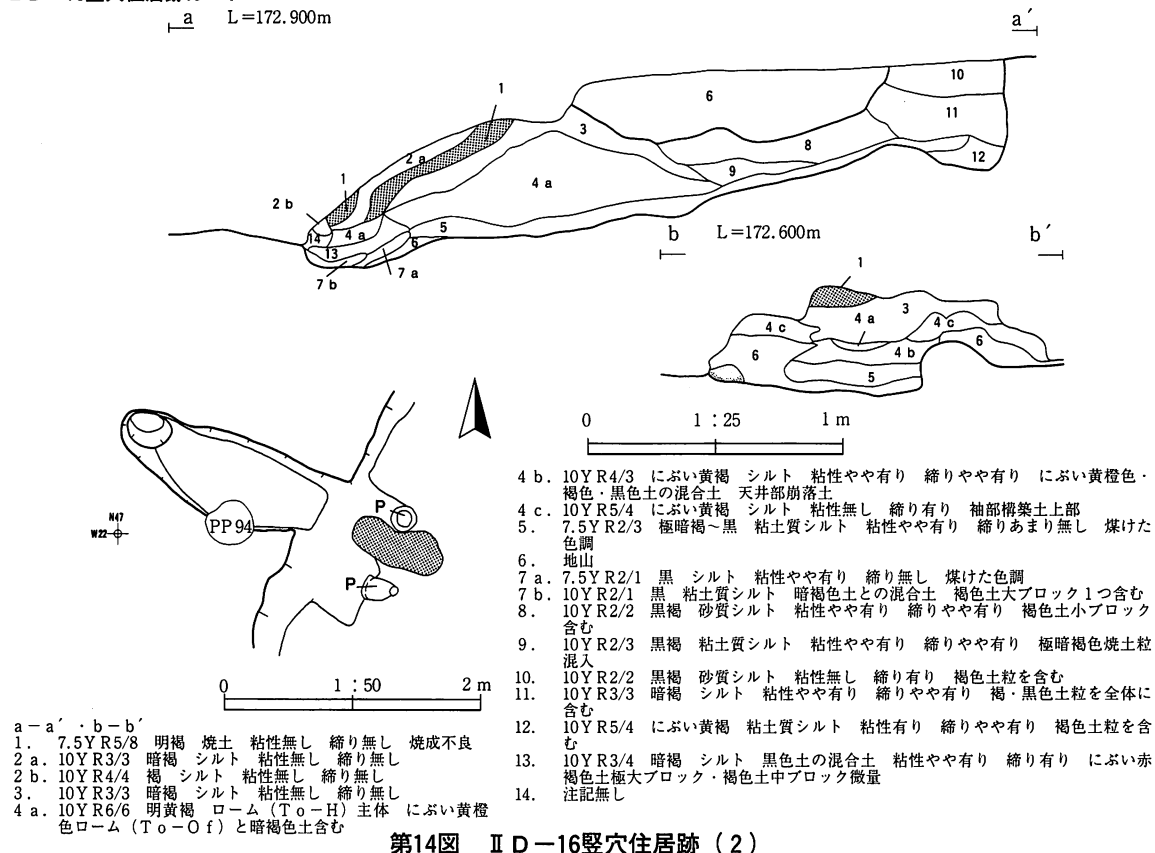
単位: cm

PPNo	径	深さ
1	60×21	73
2	33×27	69
3	27×25	76
4	21×19	70
5	31×28	13
6	14×13	7
7	24×22	23
8	20×18	14
9	19×15	17
10	33×27	58
11	29×27	43
12	24×17	24

0 1 : 60 2 m

第13図 II D-16竪穴住居跡 (1)

Ⅱ D-16 竖穴住居跡カマド



第14図 Ⅱ D-16 竖穴住居跡 (2)

・ P P 40・42・44・53・71・72・146と重複する。本遺構が最も古い。

<規模・平面形>北東辺5.90m、北西辺6.80m、南東辺6.40m、南西辺 [4.50] mの隅丸方形を呈する。

<埋土>上位は十和田 a 降下火山灰 (以後 T o - a と記述) ブロックを含む黒褐色土が主体である。中位には T o - a がレンズ状に堆積する。下位は黄褐色土・パミス・炭化物を含んだ暗褐色土が主体である。12層が焼土層であること、床面の焼土・炭化物の分布状況、カマド袖上部が焼けており炭化材が検出されていること等から考えて、本遺構は焼失住居である可能性が高い。炭化材の樹種はクリ・ナラである。

<壁・床>壁高の残存値は12~65cmである。床面はほぼ平坦で締っており、Ⅳ層中に構築されている。全面に掘り方を持ち、褐色土・にぶい黄色土・黒褐色土の混合土で貼り床されている。厚さは4~32cmである。

<カマド>北西壁のほぼ中央に位置する。燃焼部には75×33cmの楕円形の範囲に、4~9cmの厚さで焼土層が形成されている。焼成が不良であることから、使用頻度はあまり高くないと考えられる。袖部は左右とも、地山を掘り残した後、土師器の甕 (遺物掲載 N o 54・55) を逆に据えて芯材とし、その上を粘土質シルトで覆い構築されている。煙道部は壁側と煙出し孔側の両方から掘り込まれた削り貫き式の構造で、外側に向かい約10° 上りの傾斜を持つ。煙出し孔は開口部径40×35cm、深さ52.5cmの円筒状を呈する。

<壁溝>南東壁の南半を除いた部分で検出されている。幅は6~24cm、深さは2~16cmである。

<柱穴・ピット>柱穴は床面で12個検出されている。配置・深さから P P 1~4 が主柱穴と考えられる。ピットは検出されていない。

遺物 (第80~83図49~82、写真図版81~84)

<出土状況>土師器・土製品・石器・金属製品が出土している。

＜土師器＞床面、カマド内、壁溝及び埋土から、坏、高坏、高台付坏、甕、鉢、小鉢、小型手捏ね土器が出土している。49・54・55・59・64・68は甕で、いずれも口縁部は長く、外反・外傾し、外面はミガキ調整が施されている。62・63は甕の底部で、内外面共にナデ調整が施されている。56・57は内黒の坏で、56は丸底を有し、57は平底に近い丸底を有する。58・61は非内黒の坏で、58は碗に近い形態を呈し、61は平底に近い丸底を有する。50は高坏で、内面は黒色処理、ミガキ調整を施される。51・52は小型手捏ね土器で、ナデ調整が主体である。53は小鉢で、内外面共ナデ調整を施される。60は鉢で、内外面共にミガキ調整を施される。65は蝦夷甕と考えられる。66・67は甕の口縁部片で、口縁部はいずれも短い。69～73はロクロ成形の坏・甕である。66・67・69～73は遺構に伴う遺物ではないと考えられる。

＜石器＞床面から3点（75・77・78）、壁溝から1点（76）出土している。75・76は砥石、77は敲石あるいは磨石、78は磨石である。

＜土製品＞床面から74の紡錘車が出土している。

＜金属製品＞埋土から4点出土している。いずれも器種は不明で、79は鋳物の可能性があり、80～82は棒状を呈する。

時期 遺構の形態、埋土及び出土した遺物の特徴から、奈良時代の住居跡と考えられる。

（3）平安時代

ⅡC-2 竪穴住居跡（第15図、写真図版15）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅡC5h～ⅡC5iグリッド内に位置する。Ⅳ層上面で検出された。重複する遺構はない。北東部は削平されてしまっていた。

＜規模・平面形＞残存部の平面形は南北5.60m、東西〔3.70〕mの隅丸台形を呈する。

＜埋土＞上位は黒褐色土主体、中位は黒色土主体である。下位は砂質土を僅かに含む黒褐～暗褐色土主体である。壁際には、地山崩落土と考えられる、黄褐色～明黄褐色土及び褐色～にぶい黄橙色砂質土が堆積していた。自然堆積の様相を呈する。

＜壁・床＞壁は崩落のため上部が緩やかに外傾する。壁高の残存値は26～97cmである。床面はⅣc層まで掘り込まれている。カマド右袖脇では焼土が検出されている。

＜カマド＞南隅の東寄りに位置する。燃焼部には20×15cmの範囲に、最大5cmの厚さで焼土層が形成されている。袖部は、地山作り出しで、右袖には芯材と考えられる礫が残っている。煙道部は削り貫き式で、外側に向かい、9°上りの傾斜を持つ。煙出し孔は開口部径27×24cm、深さ48cmの円筒状を呈する。

＜壁溝＞検出されなかった。

＜柱穴・ピット＞検出されなかった。

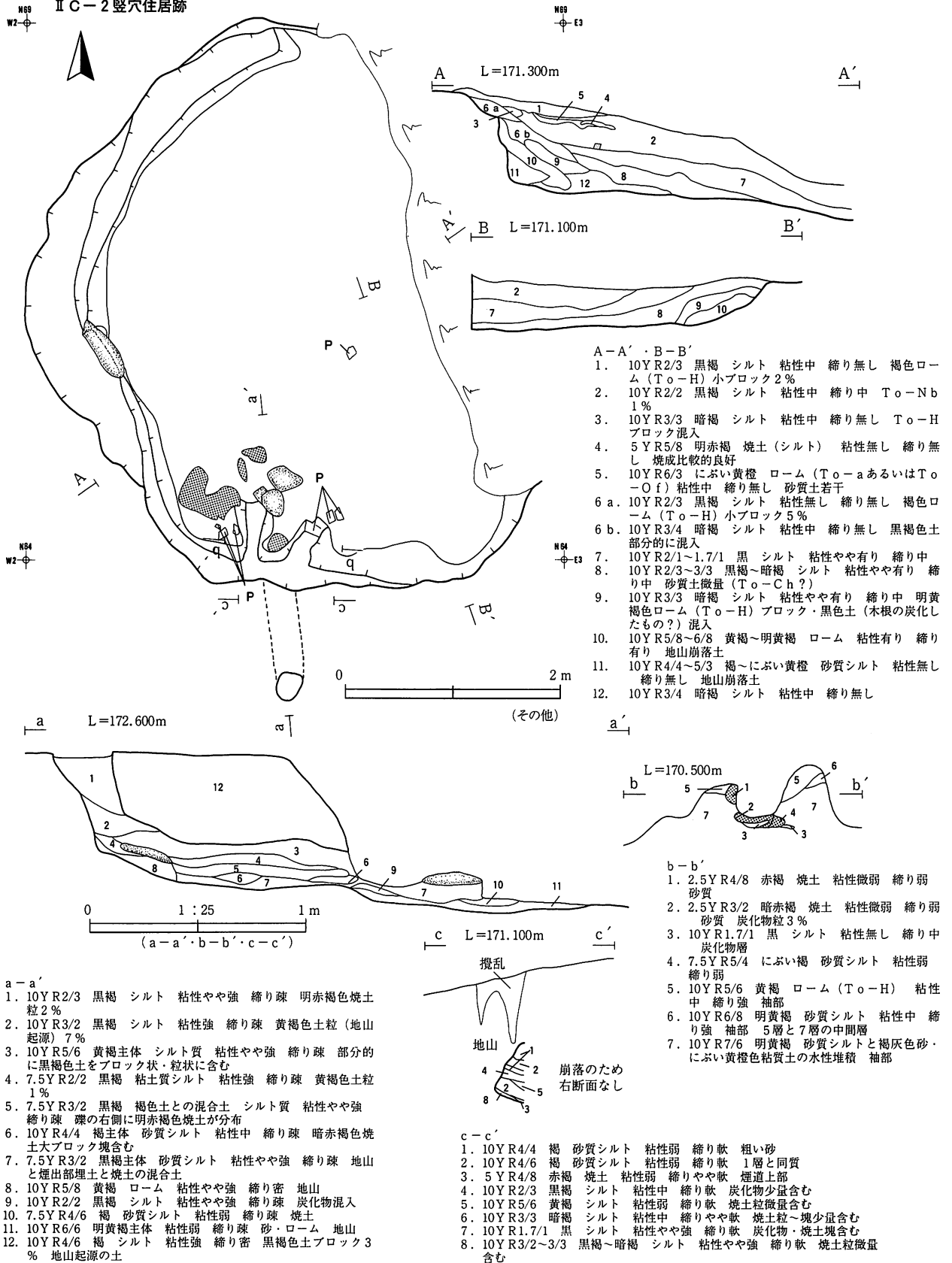
遺物（第83～85図83～96、写真図版84・85）

＜出土状況＞土師器と須恵器及び礫石器が出土している。

＜土師器＞坏1点と7点の8点掲載した。

90の坏はロクロ使用成形され内面黒色処理のないいわゆる赤焼土器の口縁部小破片である。83～89の7点は甕であるが、すべて破片であり完形品はない。ロクロ使用成形はなくいずれも粘土紐巻き上げ手捏ね成形である。口縁部～体部を残す83～86・88・89は成形と器面調整が共通し、口縁部がヨコナデ・体部は内面

II C-2 竖穴住居跡



第15図 II C-2 竖穴住居跡

と外面に若干の違いはあるものの、基本的に内面はヘラナデとユビナデ、外面はヘラケズリを主体にヘラナデ調整され、調整は全体的に粗雑である。87は口縁部を欠失するが、器面は他と同様な調整である。全体的な器形はさだかでないが、口縁部が短く軽く外反する5点(83・84・86・88・89)と、頸部が大きく窄んで強く外反し長い1点(85)の2種類あり、体部の形は頸部から直線的に底部に移行し下部で大きく窄む形(83・84・86)と、多少の違いはあるが中位が膨らむ形4点(85・87～89)の2種類ある。

<須恵器>甕1点と長頸瓶1点が出土している。

小破片であり詳細は不明であるが、91は甕の体下部～底部を若干残すが、内面が横方向のヘラナデ、外面が縦方向ヘラケズリ調整され、体部が膨らむ個体と推測される。92の長頸瓶は頸部のみを残すが、ロクロ使用成形され再調整痕はない。

<石器>

<礫石器>4点の出土であるが、器種には磨石2点(93・95)と凹石2点(94・96)がある。大きさは長径8cm～10cmの扁平な円形～楕円形をなす河川円礫の平坦面を使用面とするが、この石器は平安時代ではなく、縄文時代の遺物の可能性が高い。

時期 出土した土師器と須恵器の様相・特徴から9世紀末～10世紀代に属するものと推測される。

II C-3 竪穴住居跡 (第16図、写真図版16・17)

遺構

<検出状況・重複関係> II C 5 h・II C 5 i グリッド内に位置する。IV層上面で検出された。II C-1 竪穴住居跡・II C 5 h-2 土坑・II C 5 i 土坑と重複する。II C-1 住居跡・II C 5 h-2 土坑を截り、II C 5 i 土坑に截られる。南東部は調査区域外にかかる。

<規模・平面形>北西辺3.25m、北東辺〔1.35〕m、南西辺〔3.00〕mを測る。

<埋土>埋土の上位は、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土主体である。中位から下位は黄褐色土ブロック・十和田a降下火山灰土ブロックを含む黒褐色土主体である。

<壁・床>壁高の残存値は51～71cmである。床面で焼土と炭化材が検出された。本遺構は焼土住居であると考えられる。炭化材の樹種はクリ・ススキ・ナラ・ミズナラの皮である。床面はIV層下面の砂層まで掘り込まれている。

<カマド>北東壁の北寄りに位置する。燃焼部には、厚さ2cmの焼土層が形成されている。袖部は礫を暗褐色土で覆い構築されている。煙道部は削り貫き式で、外側に向かい、2°上りの傾斜を持つ。煙道部の長さは1.22mである。煙出し孔は、開口部径93×94cm、深さ47cmである。

<壁溝>検出されなかった。

<柱穴・ピット>床面南東隅でピットが1基検出された。規模は76×48cm・深さ55cmで、平面形は楕円形を呈する。埋土は地山ブロックを含む黒褐色土主体である。

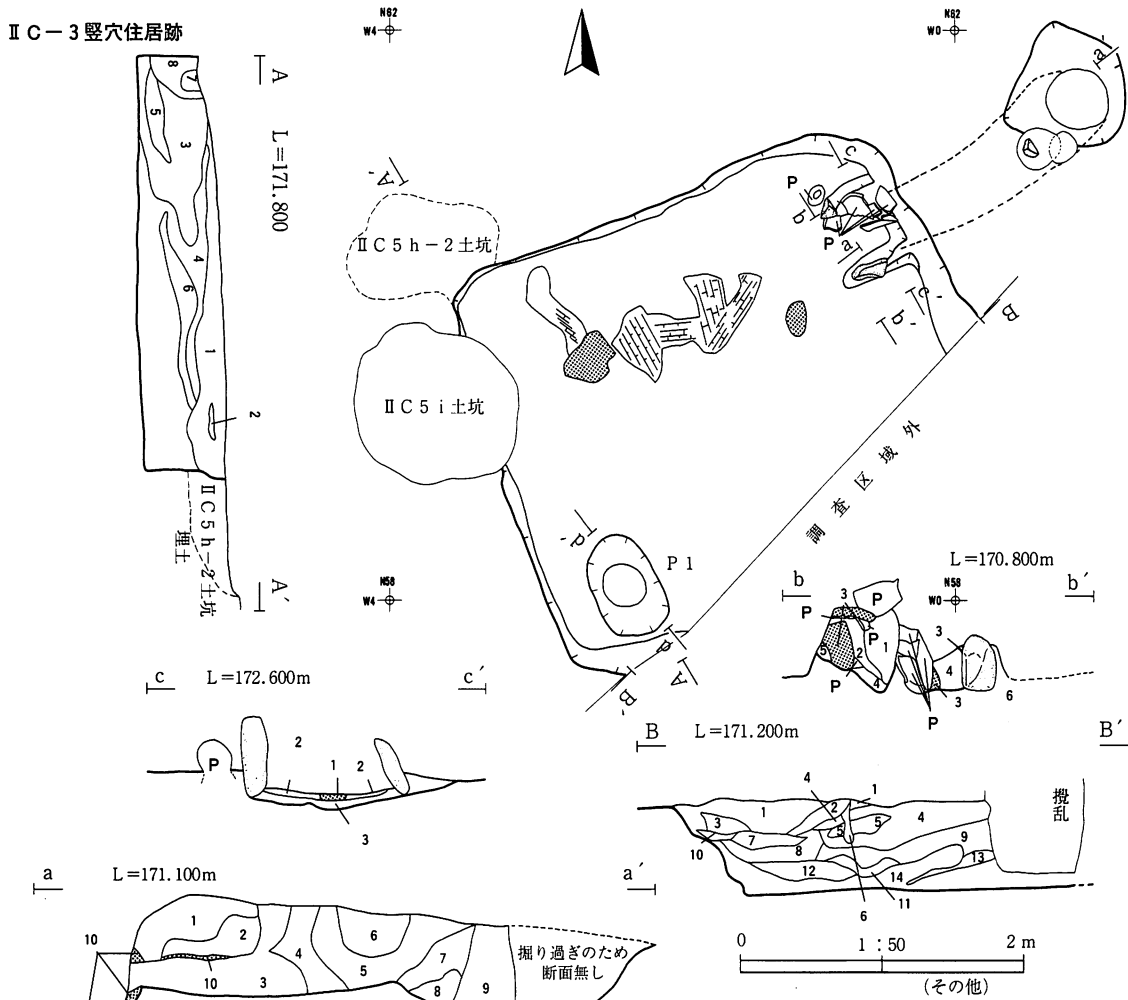
遺物 (第85～87図97～111、写真図版85・86)

<出土状況>土師器14点と石器が1点出土している。

<土師器>出土した14点には坏2点と甕12点の器種が含まれる。

108の坏2点はロクロ使用成形され、内面がヘラミガキ後黒色処理され、107は体部外面がヘラナデやヘラケズリの再調整痕がある。底面は回転糸切り離し無調整108と再調整107がある。甕の12点は101を除いた11点はロクロ不使用成形の個体である。ロクロ使用成形101は体下部～底部を欠失する小型品であるが、内外

II C-3 竪穴住居跡

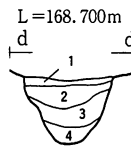


- a-a'
- 10Y R3/3 暗褐 ローム 粘性やや有り 締りやや欠く
 - 10Y R5/6 黄褐 ローム 粘性やや有り 締りやや有り
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや欠く 締り欠く 黄褐色土ブロック (径1~2mm) 微量
 - 10Y R4/6 褐 黒褐色土との混合土 粘性有り 締りやや欠く 黄褐色土ブロック (径5mm程度) 微量
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや欠く 締りやや欠く
 - 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性やや欠く 締り欠く
 - 10Y R3/4 暗褐 シルト 粘性欠く 締りやや欠く 黄褐色土ブロック (5mm程度) 微量
 - 10Y R3/3 暗褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く 黄褐色土ブロック (10mm程度) 微量
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや欠く 締り有り
 - 2.5Y R4/8 赤褐 焼土 粘性欠く 締り欠く

- b-b'
- 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや欠く 締りやや欠く
 - 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性やや欠く 締り欠く 赤褐色焼土ブロック (径1~5mm) 微量
 - 2.5Y R4/8 赤褐 焼土 粘性欠く 締り欠く
 - 10Y R3/3 暗褐 シルト 粘性欠く 締り欠く
 - 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性やや欠く 締りやや欠く
 - 10Y R3/4 暗褐 シルト 粘性やや欠く 締りかなり有り 袖部構築材

- c-c'
- 2.5Y R4/8 赤褐 粘性無し 締りやや強 焼土 (径1~2mm大の粒子から成る)
 - 7.5Y R4/6 褐 粘性強 締り疎 焼土と暗褐色粘質土 (カマド上部構築土) との混合土
 - 10Y R5/4 黄褐 粘性弱 締り疎 砂質土 (住居床面構築土)

- d-d'
- 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り有り 黄褐粒2%
 - 10Y R3/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り有り 黄褐粒3%・炭化物2%
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り欠く
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く 褐色土ブロック (径5mm程度) 1%



A-A'

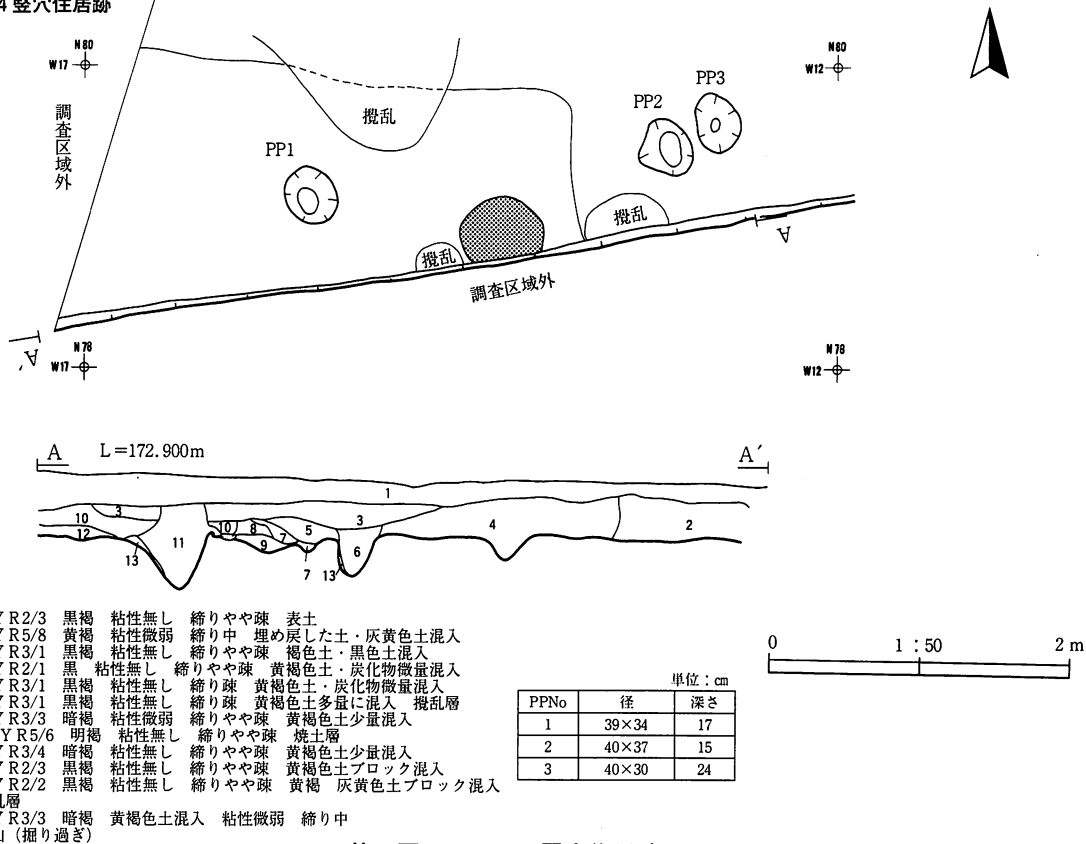
- 10Y R3/1 黒褐 粘性弱 締り弱 橙色焼土ブロック (径1~5cm) 1% T o-Hブロック (0.5~1cm) 2% 炭化物粒 (径0.5cm以下) 1% T o-C h 2% 黒色土ブロック (径1~3cm) 2%
- 10Y R2/1 黒 粘性中 締り弱 炭化物多量
- 10Y R2/2 黒褐 粘性中 締り中 T o-Hブロック (径2~5cm) 10% 炭化物粒 (径0.5cm以下) 1%
- 10Y R3/2 黒褐 粘性中 締り中 3と同じ混入物
- 10Y R2/1 黒 粘性中 締り中 灰白砂質土ブロック (T o-a? 径1~3cm) 5%
- 10Y R1.7/1 黒 粘性中 締り中 T o-Hブロック (径2cm以下) 7% 灰白砂質土ブロック (T o-a? 径0.5cm以下) 3%
- 7.5Y R1.7/1 黒 粘性弱 締り弱 黄褐色砂質土 (T o-a?) 3%
- 注記無し (攪乱層?)

B-B'

- 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや弱 締り無し 黄褐色土ブロック (径1cm程度) 微量
- 10Y R2/1 黒 シルト 粘性やや有り 締り有り 炭化物微量
- 10Y R2/1 黒 シルト 粘性やや有り 締りやや欠く 黄褐色土粒微量
- 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 炭化物極微量
- 10Y R3/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 赤褐焼土粒、炭化物微量
- 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性無し 締り無し 植根
- 10Y R3/1 黒褐 シルト 粘性やや有り 締りやや欠く 灰黄褐ブロック (T o-a? 径1~2cm)
- 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 赤褐焼土粒微量
- 10Y R2/1 黒 シルト 黒褐色土との混合土 粘性やや有り 締りやや有り 黄褐色土ブロック (径0.5cm程度) 微量
- 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り欠く
- 10Y R2/1 黒 シルト 黒褐色土との混合土 (黒色強) 粘性有り 締りやや有り 明黄褐色土ブロック (径1cm程度) 微量
- 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土との混合土 粘性やや有り 締りかなり有り 暗褐色土ブロック、黄褐色土微量
- 10Y R1.7/1 黒 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 黄褐色土ブロック (径1cm程度) 微量
- 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性中 締り中 T o-Hブロック (2~5cm) 10% 炭化物粒 (0.5cm以下) 1%

第16図 II C-3 竪穴住居跡

II C-4 竪穴住居跡



第17図 II C-4 竪穴住居跡

面ともロクロ成形痕のみを残し再調整痕はない。頸部が軽く窄み口縁部が大きく外反し口唇部はやや角張る器形である。ロクロ不使用成形の他個体はいずれも粘土紐巻き上げ手捏ね成形であり、口縁部の内外面はヨコナデ、体部は内面が横方向ヘラナデ、外面は縦か斜め方向のヘラナデかヘラケズリ調整され、全体として粗雑な調整であり、個体差はほとんどない。器形には頸部が軽く窄むかまったくすばみがなく口縁部が短く外反する9点(97~100・101・104・109・110)と、頸部が大きく窄み口縁部が長く強く外反する1点(105)があり、前者の体部形は直立し下部で大きく窄むが、後者は大きく膨らむ違いがある。

<石器>

<礫石器> 1点の出土であるが、器種は凹石1点(111)である。大きさは長径7.5cmの扁平な楕円形をなす河川円礫の平坦面を使用面とするが、この石器は縄文時代の遺物の可能性が強い。

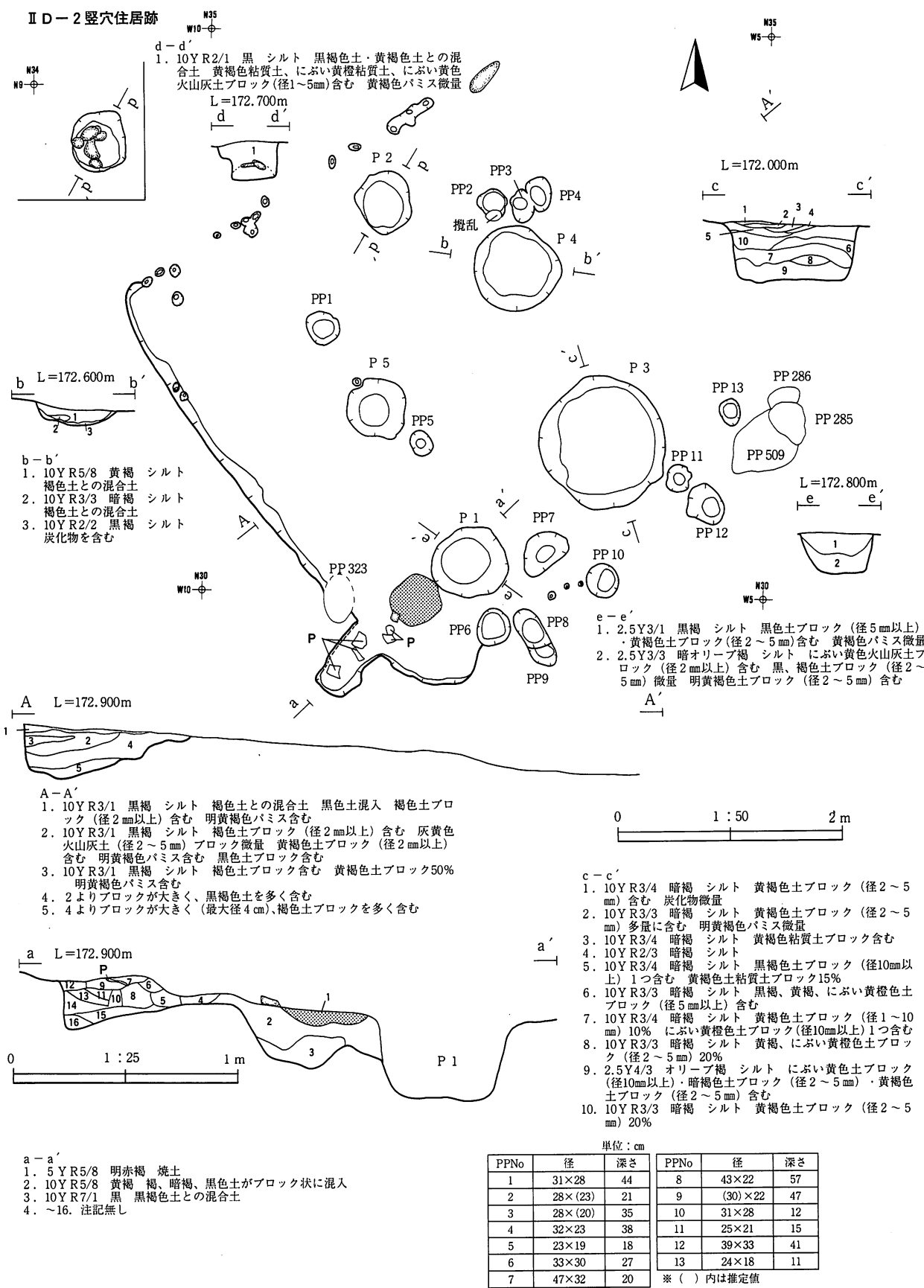
時期 出土した土師器の様相と特徴から9世紀~10世紀前半代に位置づけられると考えられる。

II C-4 竪穴住居跡 (第17図、写真図版18)

遺構

<検出状況・重複関係> II C 7・8 e グリッド内に位置する。IV層上面で検出された。耕作や木根による攪乱を受けており、残存状態は極めて悪い。また、南側は調査区域外にかかる。西側は昭和62年度に戸町教委が調査を行っている(A C 51竪穴住居跡)。今回の調査で検出した部分は住居跡の東側の一部であると考えられる。重複する遺構はない。

<規模・平面形> 壁の立ち上がりを確認できなかったため、詳細は不明であるが、戸町教委の調査結果を



第18図 II D-2 竖穴住居跡

参考にすれば、平面形は方形を呈していたと推測される。

<埋土>埋土の可能性のあるのは、3・4・5・7～10・12層である。

<壁・床>壁は木根による攪乱及び削平により、残存しない。床面南側で、径52cmの焼土が検出されている。

<カマド>検出されていない。

<壁溝>検出されていない。

<柱穴・ピット>焼土の周辺で柱穴が3個検出されている。住居に伴うものかどうかは不明である。ピットは検出されていない。

遺物（第87図112～116、写真図版86）

<出土状況>土師器5点が出土している。

<土師器>出土した5点には坏1点と甕4点ある。

114の坏はロクロ使用成形され、内面がヘラミガキ後黒色処理され体部外面に若干ヘラミガキ再調整があり。底部は残存しないので不明である。甕の4点はロクロ使用成形の1点（116）と不使用成形の3点（112・113・115）がある。前者は内外面にロクロ成形痕のみを残す口縁部～体上部を残す小型品の小破片である。頸部のすぼみが弱く体部が若干膨らむ状況を示す。ロクロ不使用成形の3点は体下部～底部を欠失し口縁部～体上部を残す個体であり、いずれも粘土紐巻き上げ手捏ね成形で、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内面が斜め方向ヘラナデ、外面は斜め方向ヘラケズリ調整され、全体として粗雑な調整であり個体差はほとんどない。器形には頸部が軽く窄み口縁部が短く外反か直立気味となり体部形は頸部からやや膨らむ器形となる様相を示す。

時期 出土した土師器甕の様相から10世紀代に属する可能性が高い。

II D-2 竪穴住居跡（第18図、写真図版19・20）

遺構

<検出状況・重複関係> II D 6・7 d、II D 6 e グリッド内に位置する。III層下面で検出された。II D 6 d 土坑（カマド燃焼部下で検出された小ピットである。本遺構に伴うものかどうか判断が付かなかったため、土坑として登録した。）・II D-18竪穴住居跡と重複する。また、4号掘立柱建物跡に截られる。

<規模・平面形>北西辺（4.00）m、北東辺（4.60）m、南西辺4.60m、南東辺（4.30）mを測る。後世の削平により、残存状態が良くない。

<埋土>南西側のみ残存する。1層が住居跡埋土で、2～5層は掘り方の埋土と考えられる。

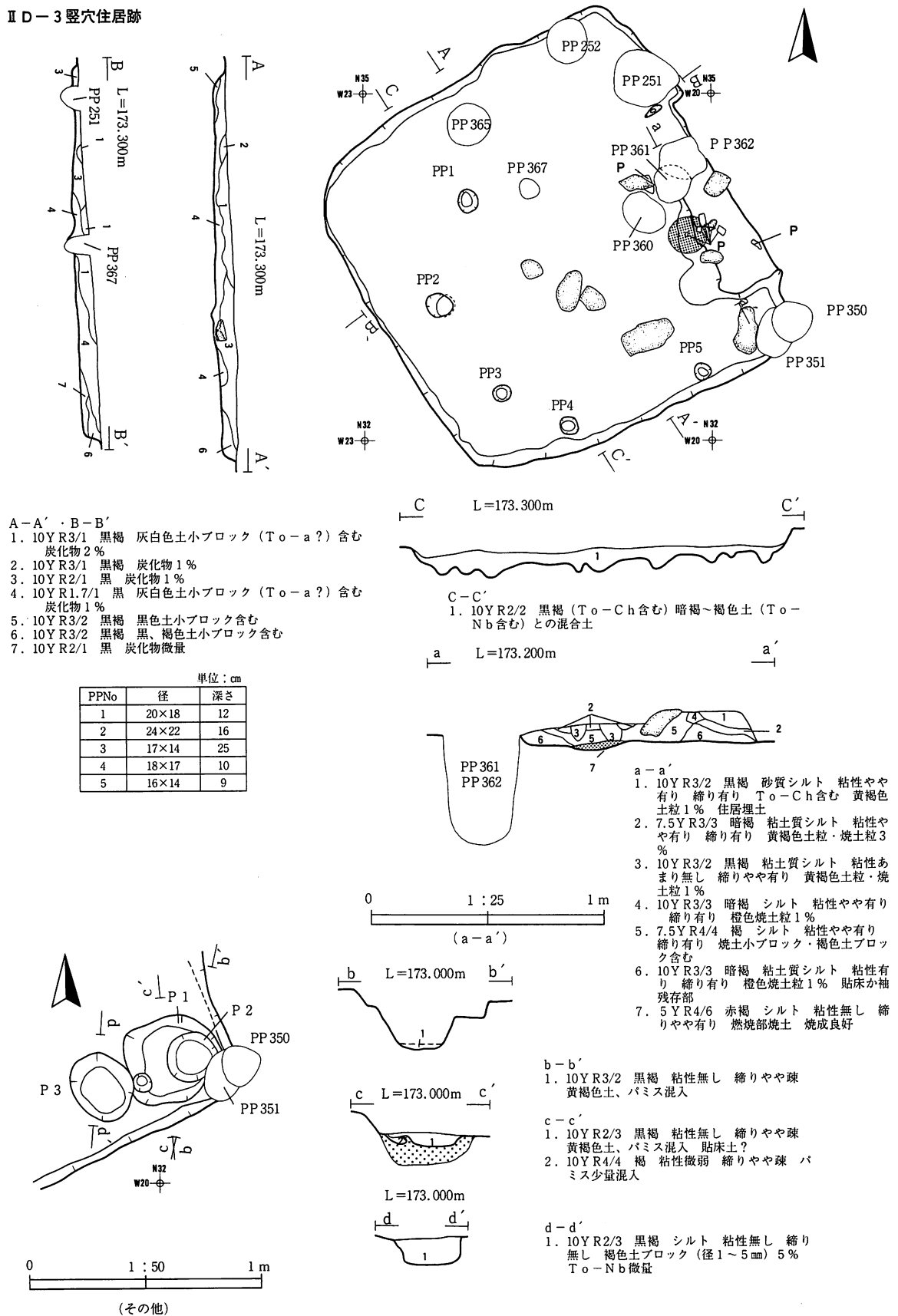
<壁・床>壁は南西辺のみ残存する。壁高の残存値は4～7cm前後である。後世の削平のため、北東部は床面のみ残存していた。IV層を床面とする。ほぼ全面に掘り方を持ち、黒褐色土主体の混合土で貼床されている。

<カマド>南西壁の南端に位置する。燃焼部には、45×40cmのほぼ円形の範囲に、最大7cmの厚さで焼土層が形成されている。また、焼土の縁の煙道側にカマド構築礫と推測される小礫が残存している（支脚か?）。袖部は削平のため残存しない。煙道部は掘り込み式で、壁から60cm外側に向かい、約12°下りの傾斜を持つ。

<壁溝>北西辺・南西辺・南東辺際で径5～12cm、深さ4～21cmの極小ピットが検出されている。壁溝の跡の可能性はある。

<柱穴・ピット>柱穴は13個検出された。住居跡に伴い、主柱穴である可能性の高いのは、配置・深さから考えてP P 1・3・4・8・9・12である。その他は、住居跡を截っている可能性もある。貼床部の精査中、ピットを5基検出した。規模は、P 1が69×63cm・深さ38cm、P 2が57×50cm・深さ34cm、P 3が120×110

II D-3 竪穴住居跡



第19図 II D-3 竪穴住居跡

cm・深さ59cm、P 4 が78×75cm・深さ21cm、P 5 が55×55cm・深さ20cmである。平面形は全て略円形を呈する。P 1 の埋土は、数種の土のブロックを含む黒褐色土・暗オリーブ褐色土で構成される。P 2 の埋土は、黄褐色土ブロック等を含む黒色土主体の混合土で、6個の亜円礫が投げ込まれていた。P 3 の埋土は、黄褐色土ブロック等を含む黒褐～暗褐色土が主体である。P 4 の埋土は、黄褐色土・褐色土の混同土が主体で、最下部には炭化穀類を含む黒褐色土が堆積していた。P 5 の埋土は、黒褐色土主体である。

5基のピットの同時存在は考え難く、時期差があると推測される。P 1 は位置的にみて住居跡を截る可能性もある。

遺物 (第87・88図117～119・122・125～127、写真図版87-117～127)

<出土状況>土師器9点と須恵器2点の11点出土している。

<土師器>出土した9点には坏4点と甕5点ある。

坏の4点(118・121・123・126)はすべてロクロ使用成形で、内面がヘラミガキ後黒色処理され体部外面は回転ヘラケズリ(12)やヘラミガキ(121・123)調整される個体があり、126は内外両面黒色処理、118の内面は黒色処理が二次焼成により消失している。甕の5点(117・119・120・122・124)はロクロ不使用成形であり、体下部～底部を欠失し口縁部～体上部を残す。いずれも粘土紐巻き上げ手捏ね成形で、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内面が斜め方向ヘラナデ、外面は斜め方向ヘラケズリ調整され、全体として粗雑な調整で個体差はほとんどない。器形は頸部が軽く窄み口縁部が短く外反し体部形は頸部からやや膨らむ様相を示す。

<須恵器>出土した2点は坏である。

2点とも破片での出土であるが、125・127とも体部の内外面はロクロ成形痕のみで、127は底面がヘラケズリ再調整のため切り離し技法は不明である。

<自然遺物>P 4 の埋土最下部からサンプリングした埋め土の中に4.15gの炭化穀類が混在しており、鑑定の結果アワ730粒・コムギ147粒・ヒエ5粒・オオムギ2粒・キビ2粒等が含まれていた。

時期 出土遺物の様相から9世紀後半～10世紀初頭頃に属する可能性が高い。

II D-3 竪穴住居跡 (第19図、写真図版21・22)

遺構

<検出状況・重複関係>II D 9 c、II D 8・9 dグリッド内に位置する。Ⅲ層中で検出された。2・3・5号掘立柱建物跡、1号柱穴列、P P 251・350・351・367に截られる。

<規模・平面形>北西辺3.10m、北東辺3.40m、南西辺3.20m、南東辺3.12mの隅丸方形を呈する。

<埋土>黒色土を主体とする自然堆積の様相を呈する。上層には、十和田 a 降下火山灰と考えられる灰白色の火山灰ブロックが見られる。

<壁>壁高の残存値は、南西辺18cm前後、北東辺は3cm程である。上部は全体的に後世(中世か?)の削平を受けている。

<床面>Ⅳ層を床面とする。ほぼ全面に掘り方を持ち、褐色の八戸火山灰土と中礫浮石を含む黒褐色土の混合土によって貼られている。壁周辺部は幾分やわらかいが、中央部とカマドの周囲は硬く締る。なお、床面中央やや南側には、長径18～45cm大の川原石4個が散在する。特に使用痕や火を受けた痕跡は認められなかったが、カマドの構成礫の可能性も有る。

<カマド>北東壁の南側に位置する。残存状況は悪く、袖の芯材または支脚と考えられる礫および焼土を含

む黄褐色土の広がりを残すのみである。

<壁溝>検出されていない。

<柱穴・ピット>柱穴状小ピットは、5個検出された（P P 1～5）。住居に伴うものと考えられるが断定はできない。貼床土の除去後、床面東隅で小ピットを2基検出した。P 3の規模は60×52cm・深さ22cm、平面形は略円形を呈する。埋土は単層で、褐色土ブロックを含む黒褐色土である。貯蔵穴の可能性はある。P 2の規模は45×40cm・深さ（42）cm、平面形は円形を呈する。埋土は黄褐色土が混入する黒褐色土である。住居より時期の古い柱穴の可能性はある。

遺物（第88・89図128～147、写真図版87・88）

<出土状況>土師器17点、須恵器1点、鉄製品1点、中世陶器1点の合計20点出土している。

<土師器>出土した17点には坏6点と甕11点を含み、さらに坏には内面黒色処理3点と赤焼き3点、甕はロクロ成形1点と非ロクロ成形10点に分けられる。

坏の6点（129・130・138・141・144・145）はすべてロクロ使用成形であるが、内面がヘラミガキ後黒色処理され体部外面や底面が再調整される2点（130・138）が含まれる。内面黒色処理の無い3点（129・141・144）は口縁部破片のため詳細不明であるが、内外面ともロクロ成形痕のみを残す。甕の11点（128・131～136・139・140・142・143）にはロクロ不使用成形の10点（142以外）とロクロ使用成形の1点（142）を含む。ロクロ不使用成形の個体はいずれも粘土紐巻き上げ手捏ね成形で、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内面が斜めや横方向ヘラナデ、外面は斜めや縦方向のヘラケズリ調整され、全体として粗雑な調整である。器形は頸部が軽く窄み口縁部が短く外反し体部形は直立や頸部からやや膨らむ様相を示す。ロクロ使用成形の個体は小型品で内外面にロクロ成形痕のみを残す体部破片である。

<須恵器>坏の体部下位～底部を残す破片が1点出土している。

体部は内外面にロクロ成形痕を残し、底面には回転糸切り離し痕が付着する。

<金属製品>刀子が1点出土している。

<中世陶器>頸部の破片が1点出土しているが、形状から見て大甕の破片と推定される。胎土に金雲母が大量に混在する特徴があり、内面は輪積み痕が残り調整不良であるが、外面は良くナデられにぶい光沢を持つ。産地は不明であるが、胎土や焼成・色調などから東海産とは考えられず在地産の陶器であろう。

時期 出土した土師器の様相から9世紀後半代～10世紀初頭頃に属する可能性が強い。

II D-5 竪穴住居跡（第20図、写真図版23）

遺構

<検出状況・重複関係>II D 4 e・f グリッド内に位置する。IV層上面で検出された。II D-4 竪穴住居に截られ、II D-5 b 竪穴住居を截る。

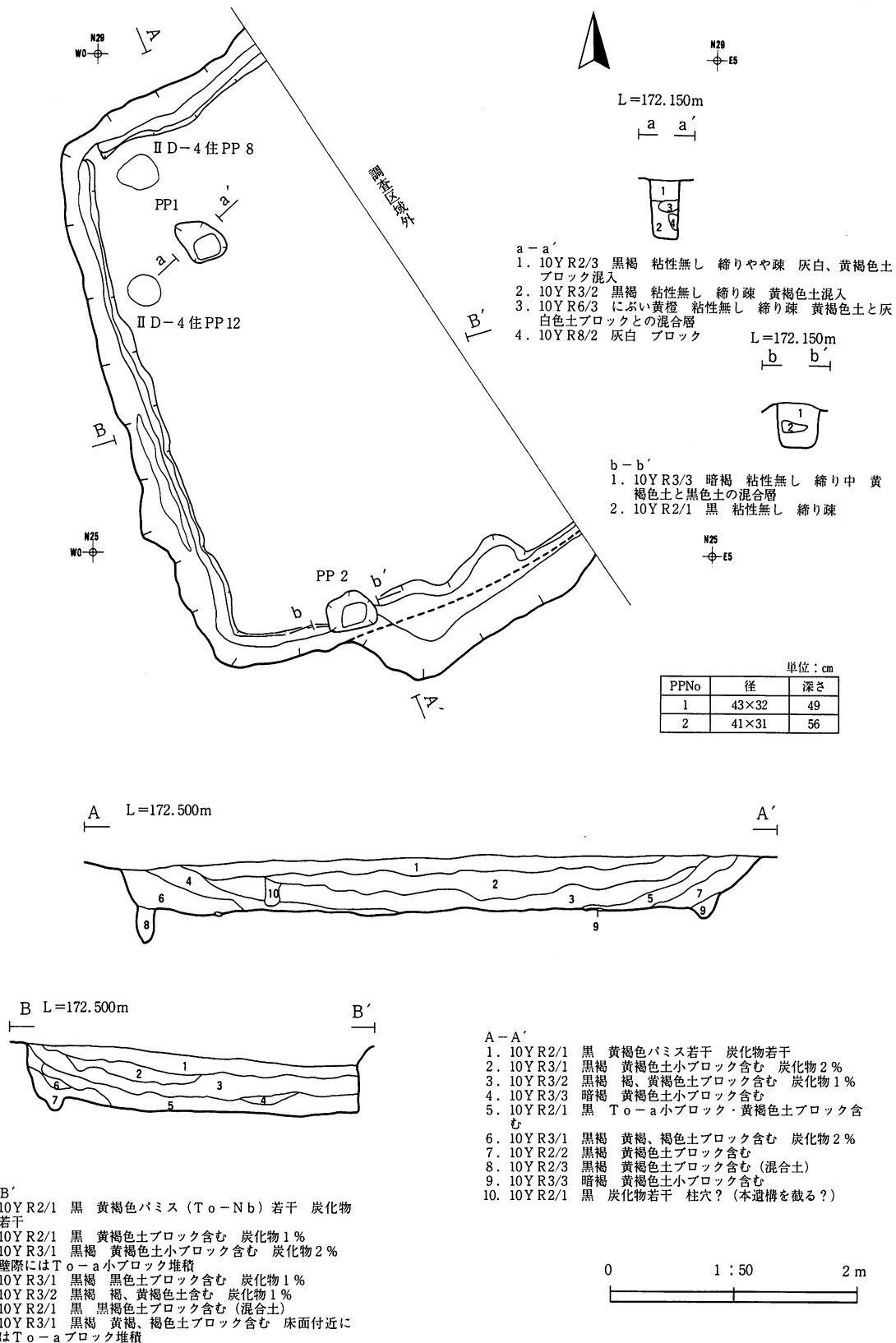
<規模・平面形>北西辺〔1.80〕m、南西辺4.50m、南東辺〔3.00〕mを測る。調査終了部分から判断し、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。

<埋土>埋土の上位は南部浮石を含む黒色土からなり、中～下位は褐色・黄褐色土ブロックを含む黒～暗褐色土主体である。壁際には、十和田 a 降下火山灰土小ブロックを含む黒～黒褐色土が堆積している。レンズ状を成し、自然堆積の様相を呈する。

<壁>壁高の残存値は、南西辺で50cm前後である。

<床面>ほぼ全面に掘り方を持ち、貼床が施されていた。

II D-5 竪穴住居跡



第20図 II D-5 竪穴住居跡

<カマド>検出されていない。

<壁溝>北西辺、南西辺、南東辺で検出された。幅6～50cm、深さは6～27cmである。

<柱穴・ピット>貼床土除去後、床面より6～7cm程低い面で柱穴が2個検出されている。規模は、P P 1が43×30cm・深さ49cm、P P 2が40×31cm・深さ56cmである。ピットは検出されていない。

遺物 (第90図148～157、写真図版88・89)

<出土状況>土師器9点と鉄製品1点の合計10点が出土している。

<土師器>出土した9点には坏4点と甕5点含まれる。坏の4点はすべてロクロ使用成形されるが、148・150・155の3点はミガキ後内面黒色処理され、148は外面がヘラミガキ、底面は切り離した後ヘラナデ再調整される。149は内外面ともロクロ成形痕のみを残し、再調整はない。甕の6点は破片での出土のため全体的なことは不明であるが、すべて非ロクロ成形で口縁部は外反し、体部はやや膨らむ器形らしい。器面調整は、口縁部は内外面粗雑なヨコナデ、体部は内面が横や斜め方向のヘラナデやヘラケズリ、外面が縦や斜め方向のヘラミガキを主にヘラナデ調整される。

<鉄製品>刀子(157)が1点出土しているが、茎の一部に柄の木質部が残存する。

時期 出土した土師器の特徴から9世紀後半代～10世紀初頭頃に属するであろう。

ⅡD-6 竪穴住居跡 (第21図、写真図版24)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD9d、ⅡD8・9eグリッド内に位置する。Ⅲ層中で検出された。ⅡD9e土坑と重複する。本遺構が新しい。

<規模・平面形>全体が後世の削平を受けており、残存状態は良くない。北西辺(3.40)m、北東辺(3.20)m、南西辺3.08m、南東辺(3.84)mの隅丸方形を呈するものと考えられる。

<埋土>黒褐色土・褐色土・黄褐色土等の混合土が主体である。部分的に十和田a降下火山灰土ブロックが混入している。

<壁>全体が削平されているため、2～3cmしか残存していない。

<床面>Ⅳ層を床面とする。床面中央北西側には、長径10～16cm大の礫4個が散在する。カマドの構成礫の可能性も有る。ほぼ全面に掘り方を持ち、褐色の八戸火山灰土と中礫浮石を含む黒褐色土の混合土によって貼られている。厚さは2～3cm程である。

<カマド>北西壁西寄りに位置する。残存状態は悪い。燃烧部と考えられる44×40cmの焼土が形成されている。煙道部は削り貫き式の構造で、壁から1.70m外方に延びており、煙出し孔は44×38cm、深さ49cmである。

<壁溝>検出されていない。

<柱穴・ピット>検出されていない。

遺物 (第90図158～160、写真図版89)

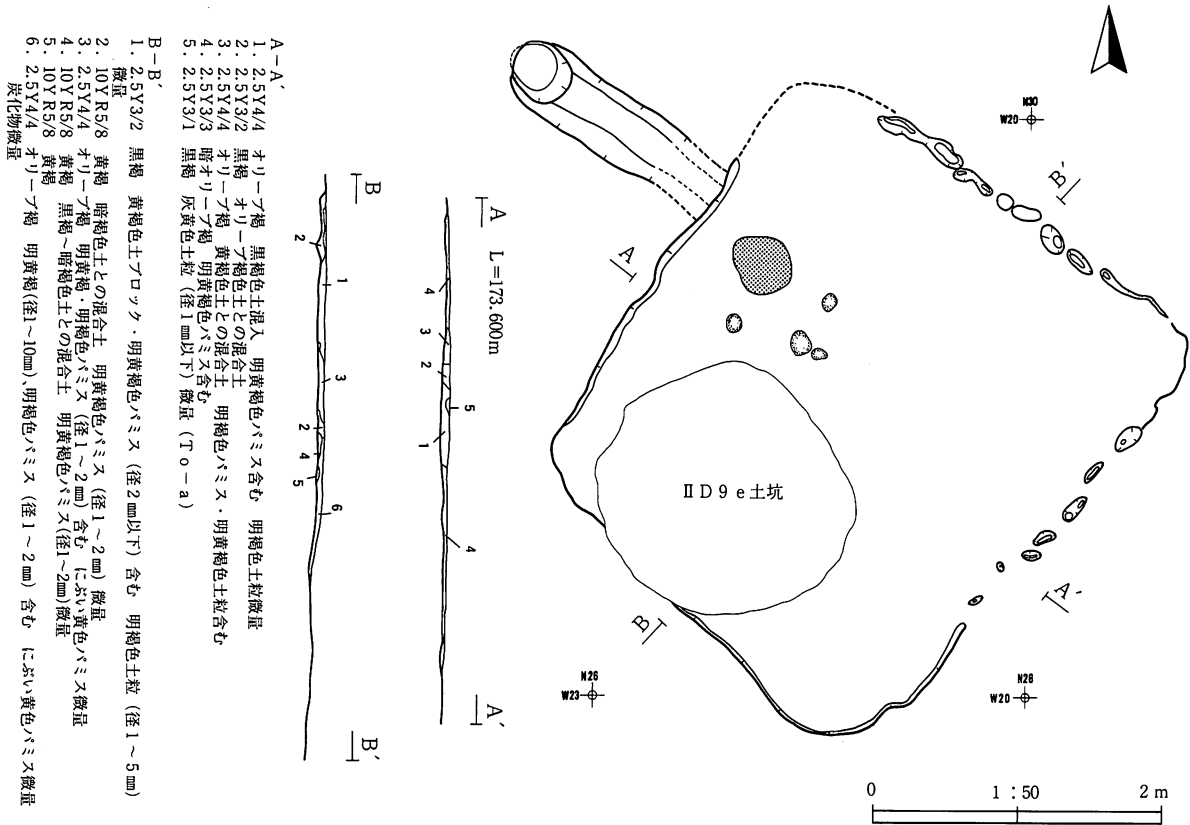
<出土状況>土師器が2点と須恵器1点が出土している。

<土師器>出土した2点には坏1点と甕1点が含まれる。坏(159)はロクロ使用成形で、内外面ともロクロ成形痕のみの赤焼きである。底面は回転糸切り離しで再調整はない。160の甕は非ロクロ使用成形の体部破片であるが、内外面にヘラナデやヘラケズリの粗雑な調整がある。

<須恵器>坏(158)の口縁部破片が出土している。内外面ともロクロ成形痕のみを残す。

時期 出土した土師器と須恵器の様相から10世紀代に属する可能性が強い。

II D-6 竪穴住居跡



第21図 II D-6 竪穴住居跡

II D-7 竪穴住居跡 (第22図、写真図版25・26)

遺構

〈検出状況・重複関係〉II D 7・8 d、II D 7・8 eグリッド内に位置する。IV層上面で検出された。4号掘立柱建物跡・II D 8 d-4土坑に載られる。またII D 8 d-1~3土坑と重複する。

〈規模・平面形〉後世の削平のため、南西壁が僅かに残存するのみで、遺構の平面形は掘り方によって確認されるだけである。北西辺4.45m、北東辺4.70m、南西辺5.23m、南東辺4.62mの隅丸方形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉南西側のみ残存する。黄褐色土ブロックを含む暗褐色土主体である。

〈壁〉南西壁が僅かに残存するのみで、僅かに外傾して立ち上がる。残存値は最大18cmである。

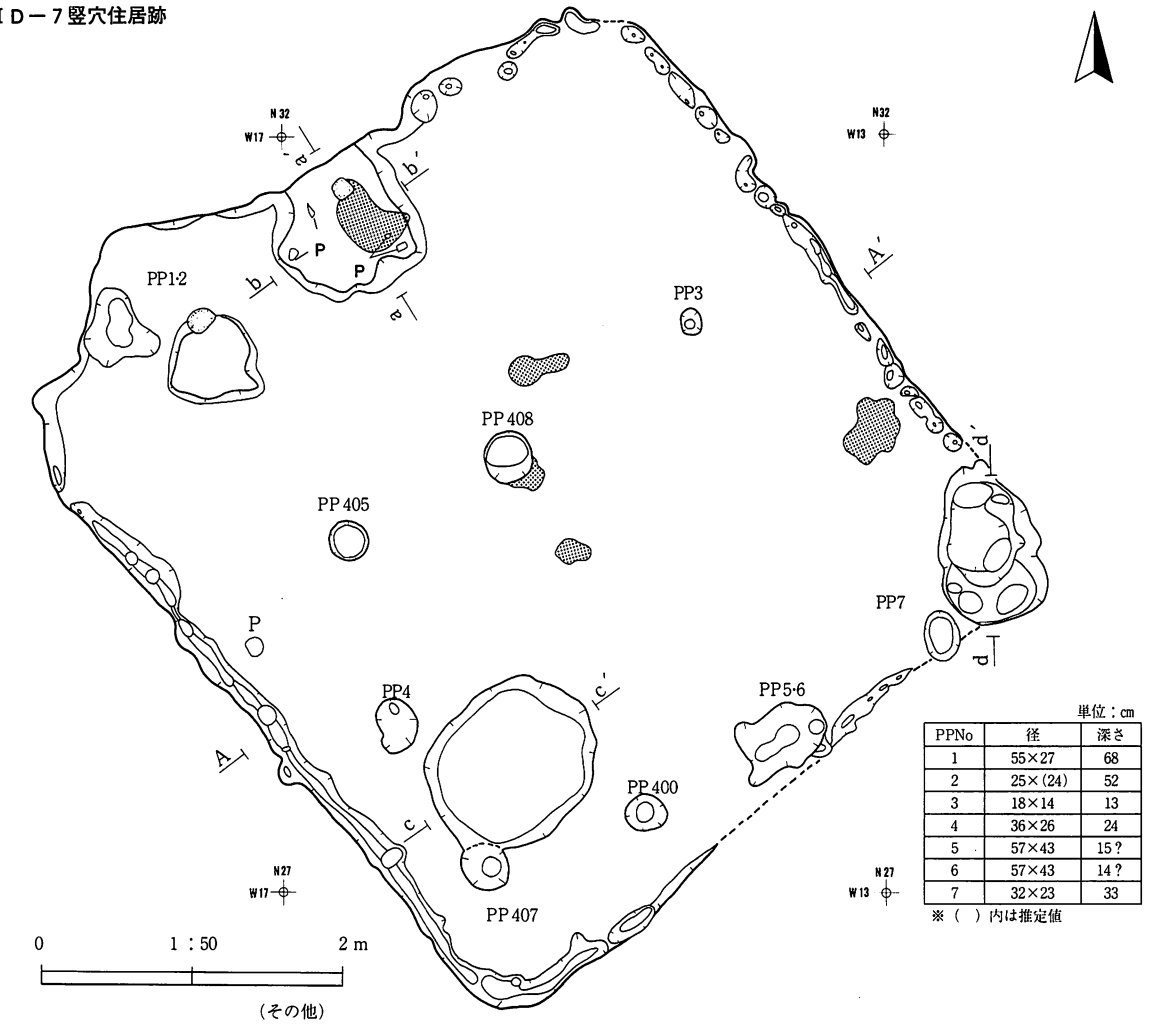
〈床面〉IV層を床面とする。カマドの西側脇には70×65cmの範囲に粘土質シルトが貼られている。また、中央部と南東壁際に焼土が散在する。ほぼ全面に掘り方を持ち、黄褐色・黒褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土の混合土によって貼床が施されている。厚さは6~21cm程である。

〈カマド〉北西壁の中央に位置する。残存状況が悪く、構築材と考えられる亜円・亜角礫と焼土を含む、粘土質シルトの不整な広がりとして検出された。その下には、燃烧部と考えられる最大厚4cmの、焼成の良好な焼土層が形成されていた。煙道部・煙出し孔は確認されなかった。

〈壁溝〉南西辺と南東辺の一部で検出されている。幅は5~20cm、深さは7~23cmである。

〈柱穴・ピット〉床面で柱穴が11個検出されている。その内、P P 400・405・407・408は4号掘立柱建物跡の柱穴と考えられ、住居に伴う可能性のあるものは、P P 1~7である。ピットは2基検出されている。P

II D-7 竪穴住居跡



単位: cm

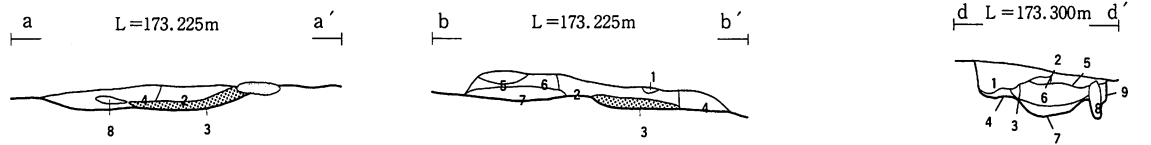
PPNo	径	深さ
1	55×27	68
2	25×(24)	52
3	18×14	13
4	36×26	24
5	57×43	15?
6	57×43	14?
7	32×23	33

※ () 内は推定値



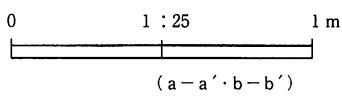
- A-A'
- 10Y R2/3 黒褐
 - 2.5Y3/2 暗褐 黄褐色土ブロック含む 明黄褐色パミス(径5mm以下)含む
 - 10Y R5/8 黄褐 オリーブ褐色土との混合土
 - 2.5Y4/3 オリーブ褐 黄褐色土含む

- C-C'
- 10Y R3/1 黒褐 褐色土ブロック含む 炭化物1%
 - 10Y R4/6 褐 黄褐色土ブロック含む (T_{o-a}あるいはT_{o-f})



- A-A'・B-B'
- 5Y R5/8 明赤褐 粘性無し 締りやや疎 焼土ブロック
 - 7.5Y4/4 褐 粘性無し 締りやや疎 炭化物混入
 - 5Y R6/6 橙 粘性無し 締り中 焼土層 燃焼部焼土 焼成良好
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土混入
 - 10Y R5/3 黄褐 粘性無し 締りやや疎 黒色土混入
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土混入
 - 10Y R2/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 パミス少量混入
 - 7.5Y R6/4 黄褐 粘性無し 締り疎 やや焼けている

- D-D'
- 10Y R5/4 黄褐 粘質シルト 黄褐色粘質土ブロック(径2mm以上)30% 黒色土ブロック(径2~10mm)微量 T_{o-Nb}微量
 - 10Y R4/6 褐 シルト T_{o-Nb}(径1mm以下)を含む黄褐色土混入 黒褐色土ブロック(径2~5mm)微量
 - 10Y R4/6 褐 シルト 暗褐色土との混合土
 - 10Y R3/4 暗褐 シルト
 - 10Y R3/4 暗褐 シルト 黄褐色粘質土(径10mm以上)ブロック 赤褐色土粒(径1~2mm)ブロック含む
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 赤褐色土粒(径1~2mm)含む
 - 10Y R5/8 黄褐 シルト 暗褐色土との混合土 T_{o-Nb}微量
 - 10Y R3/4 暗褐 シルト 黄褐色土ブロック(径5mm以下)5%
 - 10Y R3/4 暗褐 シルト 黒褐色土との混合土 黄褐色土ブロック混入



第22図 II D-7 竪穴住居跡

1の規模は120×97cm、深さ64cm、平面形は楕円形を呈する。埋土はにぶい黄橙色土ブロックを含む褐色土が主体である。住居に伴う貯蔵穴の可能性もある。P2の規模は107×70cm、深さは最深部で39cmを測る。平面形は不整な楕円形を呈する。埋土はブロックを含む混合土主体で、上部は粘土質シルトで封鎖されていた。住居との関係は不明であるが、位置的には伴う可能性もある。

遺物（第90・91図161～169、写真図版89）

<出土状況>土師器が坏4点、甕4点の合計8点、鉄製品が1点出土している。

<土師器>坏の4点はすべてロクロ使用成形、内面ミガキ後黒色処理され、162の底部は再調整のため切り離し技法は不明である。体部外面も多少の差はあるがヘラナデ再調整される。甕はいずれもロクロ非使用成形され、口縁部は内外面ヨコナデ、体部は内面が横や斜め方向のヘラナデ、外面は縦や斜め方向のヘラケズリ調整される。器形は、161は不明であるが頸部で窄み口縁部が外反し体部が膨らむ個体（165・167）と直立気味（168）となる個体がある。

<鉄製品>169は関部と茎部を残す刀子の小破片が1点出土している。

時期 出土した土師器の特徴から9世紀後半代～10世紀初頭頃に位置づけられると推測される。

II D-8 竪穴住居跡（第23図、写真図版26・27）

遺構

<検出状況・重複関係>II D3・4 f、II D3・4 gグリッド内に位置する。II～IV層中において、黒～黒褐色土の広がりとして検出された。検出した平面プランは隅丸方形を呈するが、北東壁側が調査区域外に伸びる。また、プラン全面に十和田a降下火山灰と考えられる灰白色ブロックが混入していた。北西壁東側が、II D4 f土坑に截られている。

<規模・平面形>北西辺〔2.85〕m、南西辺4.00m、南東辺〔3.20〕mを測る。調査終了部分から判断し、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。

<埋土>十和田a降下火山灰土ブロックが混入する黒～暗褐色土を主体としている。また、下位には微量ではあるが、焼土が小ブロック状に混入している。

<壁>壁は床面から、ほぼ直立しているが、南西辺と南東辺の一部は内傾している。壁高の残存値は9～31cmである。西側～南側はIV層を壁面とし、その他はII層を壁面とする。

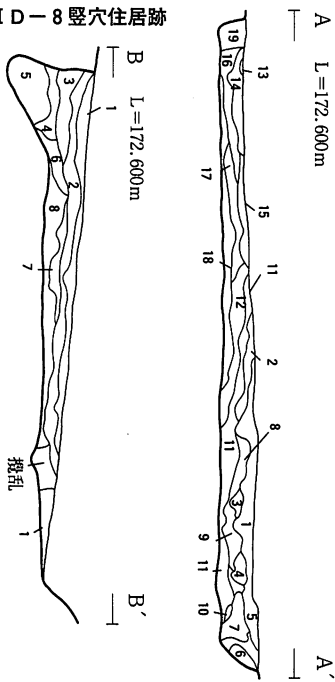
<床面>床面は、II層～IV層面に相当する。床面は非常に硬く締り、やや凹凸がある。調査の勝手際のため図化していないが、南半部では、焼土ブロック・焼土の混じった黄褐色土塊・炭化物・炭化繊維（ムシロ？カヤ？）が確認されている。本遺構は焼失した可能性もある。貼床は、2号カマド（南西壁南寄り）周辺で確認された。

<カマド>北西壁中央（推定）、南西壁南寄り、南東壁西寄りで、それぞれ1基、合計3基を検出した。3基の同時存在は考えにくく、時期差があると思われるが、新旧関係は明らかにできなかった。

1号カマド（北西壁中央？）…本体の残存状態はあまり良くない。袖部分には、構築材と考えられる黄褐色粘性土が残存していた。燃焼部には50×50cm・厚さ3～5cmの焼土が形成されていた。煙道部は掘り込み式と考えられるが、上部が削平されているため、断定はできない。長さは1.40mである。

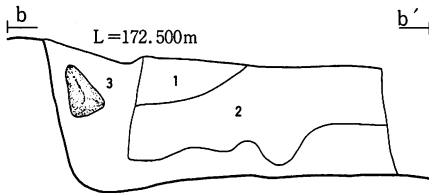
2号カマド（南西壁南寄り）…本体の残存状態は極めて悪く、袖部の芯材と考えられる礫が1個存在するのみである。燃焼部には30×30cmの焼土が形成されていた。尚、この焼土の北側下に小ピットが存在し、黒褐色土が堆積していた。カマドはこの小ピットを埋めた後に、粘土を貼り、構築されたものと考えられる。

II D-8 竖穴住居跡

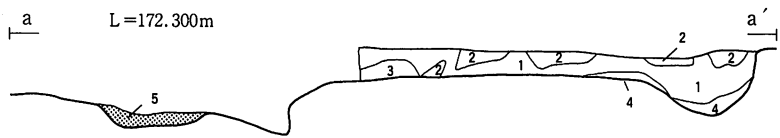
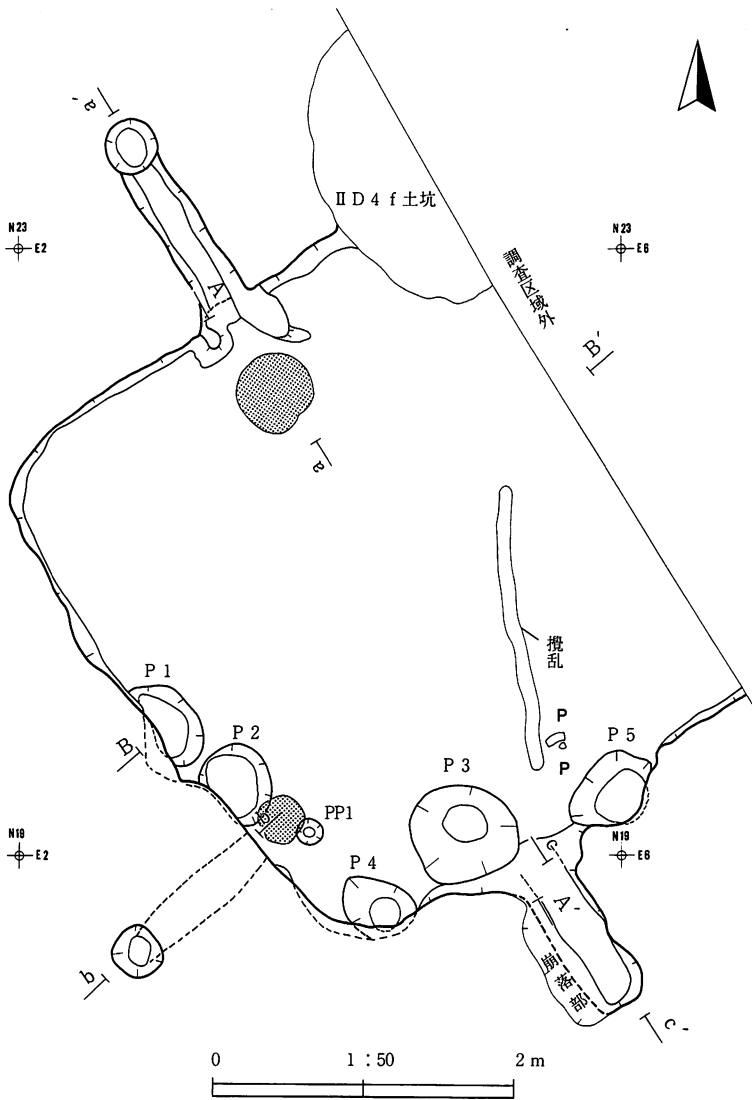


- A-A'
- 10Y R2/1~2/2 黒~黒褐 シルト
 - 10Y R3/3 暗褐 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック微量 におい黄橙色 (To-Nb) 微細粒1%
 - 10Y R2/1 黒主体 褐色土20%
 - 10Y R2/1 黒主体 褐色土15% 黄褐色土小ブロック1%
 - 10Y R3/4 暗褐 におい黄橙色微細粒 (To-Ch) 1%
 - 10Y R5/6 黄褐 粘土質シルト (To-H) 黄褐色微細粒 (To-Nb) 微量 地山崩落土?
 - 10Y R2/1 黒 におい黄橙色微細粒 (To-Ch) 微量
 - 10Y R3/2 黒褐 黄褐色小粒 (To-Nb) 1%
 - 10Y R2/3 黒褐
 - 10Y R5/6 黄褐 粘土質シルト 橙色焼土小ブロック2%
 - 10Y R3/2 黒褐主体 10Y R3/1黒褐色土10% 橙色焼土小ブロック1% 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック3%
 - 10Y R2/2~2/1黒~黒褐 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック5%
 - 10Y R4/2 灰黄褐 橙色焼土微細小ブロック微量
 - 10Y R3/2~2/2 黒褐 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック2% におい黄橙色微細粒 (To-Ch) 微量
 - 10Y R2/3 黒褐 におい黄橙色微細粒 (To-Ch) 微量 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック1%
 - 7.5Y R2/2 黒褐 におい黄橙色微細粒 (To-Ch) 微量
 - 10Y R2/1~3/1 黒~黒褐 灰白色火山灰土 (To-a) 微小ブロック1%
 - 7.5Y R3/3 暗褐 灰白色火山灰土 (To-a) 微小ブロック2% 橙色焼土微細小ブロック1%
 - 10Y R7/6 明黄褐 粘土質シルト カマド袖構築土?

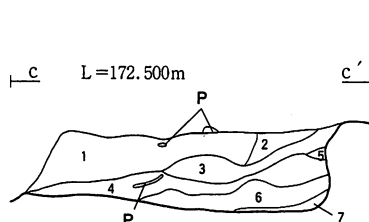
- B-B'
- 10Y R3/3 暗褐 におい黄橙色 (To-Nb) 微細粒2%
 - 10Y R3/2 黒褐 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック微量
 - 10Y R3/3 暗褐主体 黒色土30% 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック20%
 - 10Y R2/1 黒 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック2%
 - 10Y R3/3 暗褐主体 黒色土25% 明黄褐色土小ブロック5% 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック3%
 - 10Y R2/3 黒褐
 - 10Y R2/3 暗褐 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック7%
 - 7.5Y R3/3 暗褐 灰白色火山灰土 (To-a) 小ブロック3% 橙色焼土微細小ブロック微量



- b-b'
- 10Y R3/2 黒褐 To-Nb 2% 地山
 - 10Y R5/8 黄褐 To-Nb 微量 地山
 - 10Y R2/2 黒褐 黄褐色土との混合土



- a-a'
- 7.5Y R2/1 黒 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り くすんだ焼土粒含む
 - 7.5Y R3/4 暗褐 砂質シルト 粘性あまり無し 締り有り 焼土粒・黒色土粒含む
 - 7.5Y R3/3 暗褐 砂質シルト 粘性無し 締り有り 焼土粒を全体に含む
 - 10Y R2/1 黒 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り 焼土粒を含まない (掘り過ぎ?)
 - 5Y R5/8 明赤褐 シルト 粘性無し 締りやや有り 燃焼部焼土 焼成良好



- c-c'
- 10Y R2/1 黒 暗褐、極暗赤褐色土との混合土 To-Ch 1% 明赤褐色土小ブロック (径2~5mm) 微量 黄褐色土小ブロック・炭化物含む
 - 5Y R2/4 極暗赤褐 明赤褐、暗赤褐色土との混合土
 - 5Y R2/3 極暗赤褐 黒褐色土小ブロック (径2~5mm) 1% 褐色土小ブロック微量 明赤褐色土小ブロック (径2~5mm) 1%
 - 5Y R1.7/1 黒 極暗赤褐色土との混合土 To-a 灰白色土小ブロック (径2~5mm) 微量 黄褐色土小ブロック (径2~5mm) 微量 明赤褐色土小ブロック (径2~5mm) 1%
 - 10Y R5/8 黄褐 地山崩落土?
 - 5Y R1.7/1 黒主体 上部に極暗褐色土含む 黄褐色土小ブロック含む
 - 10Y R5/8 黄褐 地山 (掘り過ぎ)

(a-a'・b-b'・c-c')

第23図 II D-8 竖穴住居跡

煙道部は刳り貫き式で、長さは1.22mである。煙出し孔は34×34cmのほぼ円形を呈し、深さは56cmである。上部には2個の垂円礫が埋まっていた。

3号カマド（南東壁西寄り）…本体の残存状態が悪く、袖部は残っていなかった。燃焼部と考えられる焼土を検出したが、調査の勝手際のため実測していない。煙道部は掘り込み式であると考えられる。長さは1.2mである。

<壁溝>検出されなかった。

<柱穴・ピット>床面で、柱穴状ピットを1基、小ピットを5基検出した。P P 1の規模は18×16cm・深さ23cmである。P 1の規模は63×30cm・深さ25cmである。P 2の規模は55×45cm・深さ12cmである。P 2は2号カマド周辺の貼床部を除去後検出された。P 3の規模は74×69cm・深さ48cmである。P 4の規模は50×42cm・深さ43cmである。P 5の規模は64×43cm・深さ22cmである。P 4・P 5は検出プラン内に焼土がブロック状に分布していた。

遺物（第91～93図170～189、写真図版89・90）

<出土状況>土師器18点、須恵器1点、鉄製品1点が出土している。

<土師器>土師器には坏4点（172・173・177・182）がある。すべてロクロ使用成形され内面がヘラミガキ後黒色処理されるが、177は二次焼成により消失している。172・177の底部は回転糸切り離しであるが、182はヘラケズリ再調整により判然としない。甕の14点（170・171・174～176・178～181・183～187）はすべてロクロ非使用成形で口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデやヘラケズリによる調整がありほとんど個体差がない。器形には頸部が窄み口縁部が長く大きく外反する2点（174・180）と頸部が軽く窄み短く外反する6点（175・176・178・183・185・186）、口縁部がほぼ直立する1点（184）がある。

<須恵器>大甕（188）の口縁部破片が1点出土している。

<鉄製品>刀の刀身部（189）であるが、切っ先部分のみを残存する1点が出土している。

時期 出土した土師器の様相から9世紀後半代～10世紀初頭頃に属すると考えられる。

ⅡD-9 竪穴住居跡（第24・25、写真図版28・29）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD 3・4 g、ⅡD 3・4 hグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、複数の住居址の截り合いと思われる黒～黒褐色土の不整な広がりとして検出された。ⅡD-10住居、ⅡD 3 g-1・2・3土坑、ⅡD 3 h-1土坑と重複する。新旧関係は、古い順に並べると、ⅡD-10住居→ⅡD-9住居→ⅡD 3 g-3土坑→ⅡD 3 g-2土坑→ⅡD 3 g-1土坑となる（ⅡD 3 h-1土坑はⅡD-9住居と同時期、あるいは新しいと考えられる）。

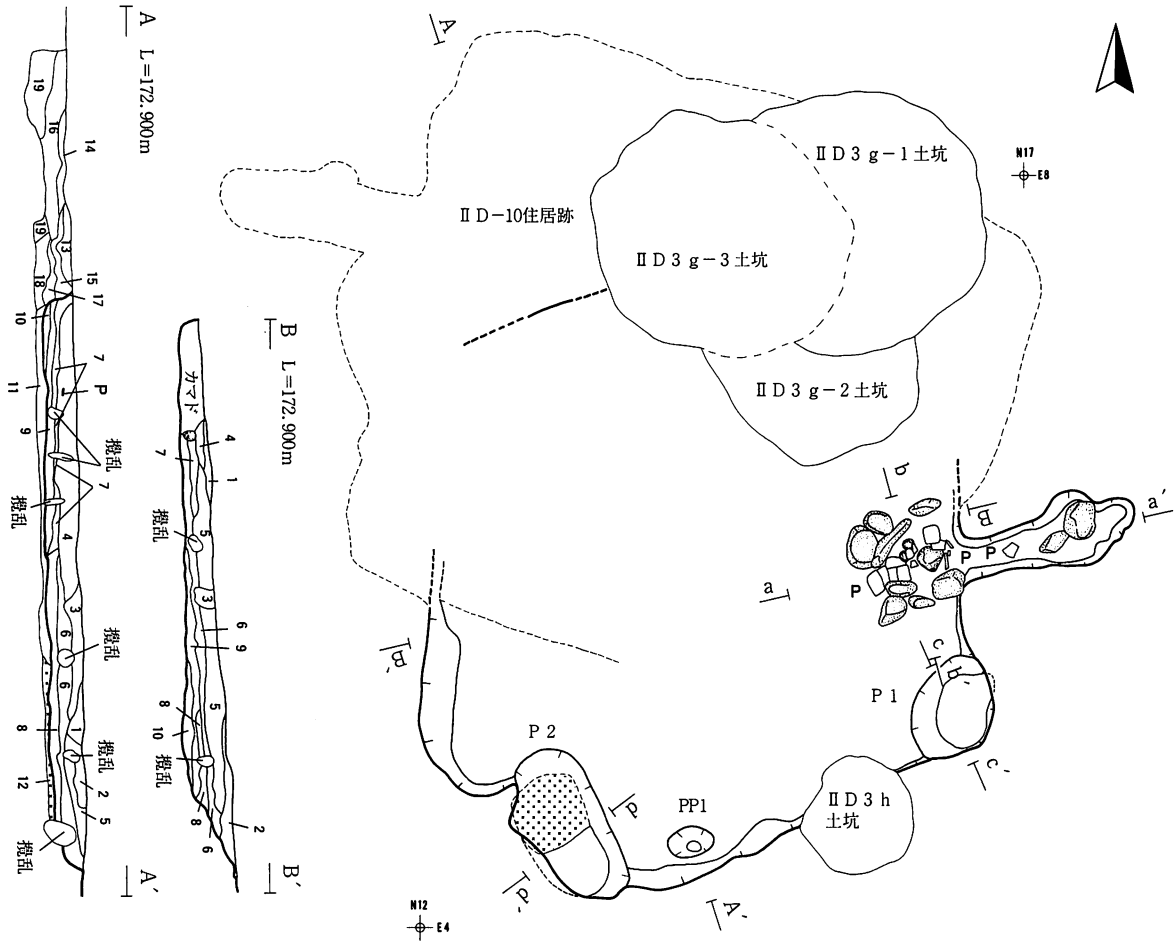
<規模・平面形>基本形は、南北長（3.80）m、東西長3.15mの隅丸長方形を呈するものと考えられるが、南西辺の南寄りに膨らみを持つ。土層観察では地山の崩落を確認できなかったため、張り出し（出入口か？）の可能性も考えられる。なお、北西辺は土層観察ベルトにおいて、その一部を確認できたのみである。

<埋土>上位には黄澄・にぶい黄褐～黄褐色土ブロックを含んだ黒褐色土が堆積する。中位～下位は、黒褐色土主体である。なお、断面A-A'の11・13～19層は、ⅡD-10住居跡の埋土である。

<壁>ほぼ垂直の立ち上がりを持つが、南西辺の膨らみを持つ部分は緩やかに立ち上がる。壁高の残存値は10～20cmである。Ⅳ層を壁面とする。

<床面>Ⅳ層を床面とする。若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦である。全面に、黄褐色土ブロックを含む暗褐

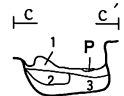
ⅡD-9 竪穴住居跡



- A-A'
1. 10Y R2/2 黒褐 黄褐色土小ブロック 1%
 2. 10Y R3/2 黒褐 黄褐色土ブロック 5%
 3. 10Y R2/3 黒褐 (40%) におい黄褐色土 (60%) との混合土 橙色土小ブロック微量
 4. 10Y R2/1~3/1 黒~黒褐 炭化物粒微量
 5. 10Y R2/3 黒褐
 6. 7.5Y R3/1 黒褐
 7. 10Y R3/2 黒褐
 8. 10Y R3/3 暗褐主体 黄褐色土ブロック45% 貼床土 (非常に堅く締る)
 9. 10Y R3/4 暗褐 におい黄褐色土 5%
 10. 10Y R3/3 暗褐
 11. 10Y R3/4 暗褐 明褐色土ブロック 3% 下に炭化物多く含む
 12. 10Y R5/8 黄褐 粘土質シルト (地山)
 13. 10Y R3/2 暗褐 明赤褐色土微細粒 1%
 14. 10Y R3/1 黒褐 明赤褐焼土小ブロック 5%
 15. 10Y R4/2 灰黄褐
 16. 7.5Y R3/1 黒褐 明黄褐色微細粒 3%
 17. 10Y R4/4 褐
 18. 10Y R3/4 暗褐 (40%) 明黄褐色土 (60%) との混合土 炭化物多く含む
 19. 10Y R3/4 暗褐 橙色焼土小粒・炭化物小粒微量

- B-B'
1. 10Y R8/4 浅黄橙 堅く締る
 2. 10Y R2/1~3/1 黒~黒褐 黄褐色土小ブロック 5% 締りなく、もろい
 3. 10Y R2/3 黒褐 締りなく、ボソボソ (攪乱?)
 4. 10Y R4/2 灰黄褐 浅黄褐色土ブロック10%
 5. 10Y R3/1 黒褐 炭化物粒微量
 6. 10Y R3/1 黒褐 黄褐色土小ブロック 3% におい黄褐色土小ブロック 1%
 7. 10Y R2/2 黒褐 締り無し
 8. 10Y R2/2 黒褐 明黄褐色土ブロック30%
 9. 10Y R3/3 暗褐主体 黄褐色土45% 貼床土
 10. 10Y R3/4 暗褐 明褐色土ブロック 3% 下に炭化物多く含む

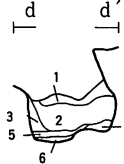
L=172.600m



c-c'

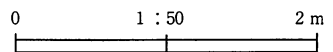
1. 10Y R5/8 黄褐 暗褐色土・黒褐色土との混合土
2. 10Y R4/6 褐 黄褐色土との混合土 T o - N b 1% 赤褐色土ブロック含む 炭化物微量
3. 10Y R4/6 褐 暗褐色土との混合土 におい黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量

L=172.800m



d-d'

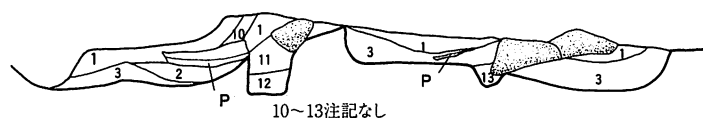
1. 10Y R1.7/1 黒 黄褐色土ブロック (径1~5mm) 1%
2. 10Y R5/4 におい黄褐 におい黄褐色粘質土ブロック (径2~5mm) 1%
3. 2.5Y R5/3 におい黄 砂質シルト
4. 2.5Y R5/3 黄褐 T o - O f の汚れたもの
5. 10Y R6/4 におい黄橙 砂質シルト



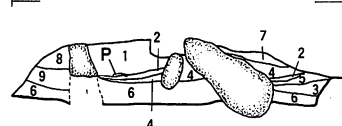
第24図 ⅡD-9 竪穴住居跡 (1)

ⅡD-9 竪穴住居跡カマド

a L=172.600m

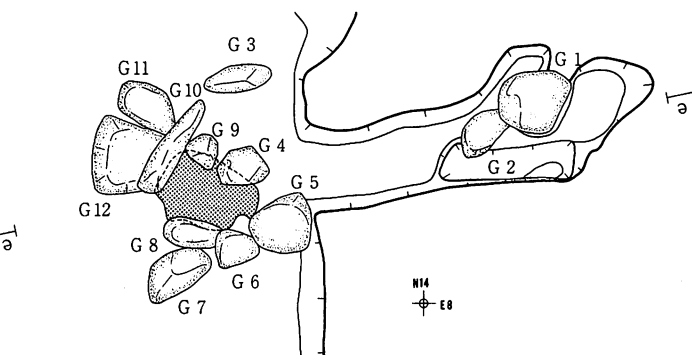


b L=172.600m

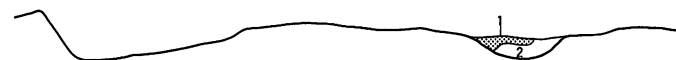


a-a' · b-b'

1. 10Y R3/2 黒褐 粘性弱 締りやや疎 灰黄色土混入
2. 5 Y R4/6 赤褐 粘性無し 締り中 焼土層
3. 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 炭化物・焼土混入
4. 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り中 黄褐色土混入
5. 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 締り中 灰黄色土混入
6. 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締り中 黄褐色土混入
7. 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 炭化物混入
8. 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締り中 粘土塊? 黒色土混入
9. 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締り中 黒色土混入



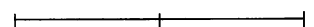
L=172.500m



e-e'

1. 5 Y R4/8 赤褐 焼土
2. 10Y R2/3 黒褐主体 粘性やや有り 締りやや有り 1層の焼土20%混入

0 1:25 1m



第25図 ⅡD-9 竪穴住居跡 (2)

色土で貼床が施されており、中央部は5cm程度で、壁に近くなるにつれて厚くなり、最大で15cm程度を測る。<カマド>北東壁の南側に位置する。残存状況は悪く、本体の構築土から数個の礫が剥き出しの状態となって検出された。燃焼部には、34×27cmの範囲に最大厚6cmの焼土層が形成されている。また支脚と推測される礫 (G4・8・9) も残存しており、G8は被熱し、赤く変色していた。袖部は垂角礫 (G3・5~7・10~12) を粘土質シルトで覆い、構築していたものと推測される。煙道部は、長さが126cmで、壁からほぼ水平に外側に伸び、途中から約10°の傾斜で下る。上部が削平されているため、割り貫き式か掘り込み式かは不明である。煙出し部の底面から5~10cm上で、2個の垂角礫 (G1・2) が検出されている。

<壁溝>検出されていない。

<柱穴・ピット>床面で、柱穴状ピットが1個、小ピットが2基検出された。P1の規模は30×20cm・深さ24cmである。住居に伴うものかどうかは不明である。P1の規模は75×53cm・深さ29cmで、平面形は楕円形を呈する。埋土の中位に、にぶい黄橙色粘質土ブロックを含むにぶい黄褐色土が堆積しており、人為堆積の可能性が高い。底面付近には、粘土質シルトが堆積していた。P2の規模は160×60cm・深さ42cmで、平面形は楕円形を呈する。埋土は褐色土を主体とする混合土で、2層中には焼土ブロックが混入している。

遺物 (第93~95図190~225、写真図版91~93)

<出土状況>土師器31点、土製品1点、鉄製品2点、石器が2点出土している。

<土師器>土師器の31点には坏14点、高台付坏1点、高台付皿5点、甕11点含まれる。坏はすべてロクロ使用成形であるが、内面がミガキ後黒色処理されるもの2点 (194・214) と内外面にロクロ成形痕のみを残す赤焼きが12点 (195・197・200・203~206・208~210・215・216) が含まれるが、底部の切り離しは前者は

回転糸切り離し再調整であるが後者は無調整である。また、194の体部外面には「大有」と判読される墨書が記される。高台付坏の1点(193)は坏身部を欠失し高台部のみを残存する赤焼きである。高台付皿はロクロ使用成形され内外面とも再調整が無く回転糸切り離しの底部に「ハ」字状に開く高台を貼付したもので5点(199・201・202・217・218)出土している。甕の11点(190~192・196・198・207・211~213・230)には3点(192・207・219)のロクロ使用成形を含み、他は非ロクロ使用成形である。前者は小型品であり、内外面のロクロ成形痕のみを残し体部がやや丸く膨らみ口縁部が外反して口唇部が引き出しにより受口状の縁帯となる。後者の甕は輪積み手捏ね成形であり、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内面が横か斜め方向のヘラナデ、外面は縦か斜め方向のヘラケズリを主にヘラナデ調整される。器形は、頸部が窄まる1点(213)と短く外反する個体(190・212)があり、体部は膨らむものと直立気味のもの、そしてやや膨らむものがある。

<土製品> 甕の羽口の破片が1点(221)出土している。小破片のため詳細は不明であるが、炉の装着部を示すガラス質の滓が付着している。

<鉄製品> 刀子1点(224)と鋤先と推測される1点(225)が出土しているが、いずれも小破片であるため詳細はさだかでない。

<石器> 磨石が2点(222・223)出土している。形が円形または楕円形で断面形が楕円形と扁平な河川自然礫を使用したものである。縄文時代の遺物である可能性が強い。

時期 出土した土師器の様相から10世紀代に属するものと推測される。

II D-10 竪穴住居跡 (第26図、写真図版30・31)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 3・4 g、II D 3・4 h グリッド内に位置する。IV層上面において、複数の住居址の切り合いと思われる黒~黒褐色土の不整な広がりとして検出された。II D-9住居、II D 3 g-1・2・3土坑と重複する。本遺構が最も古い。

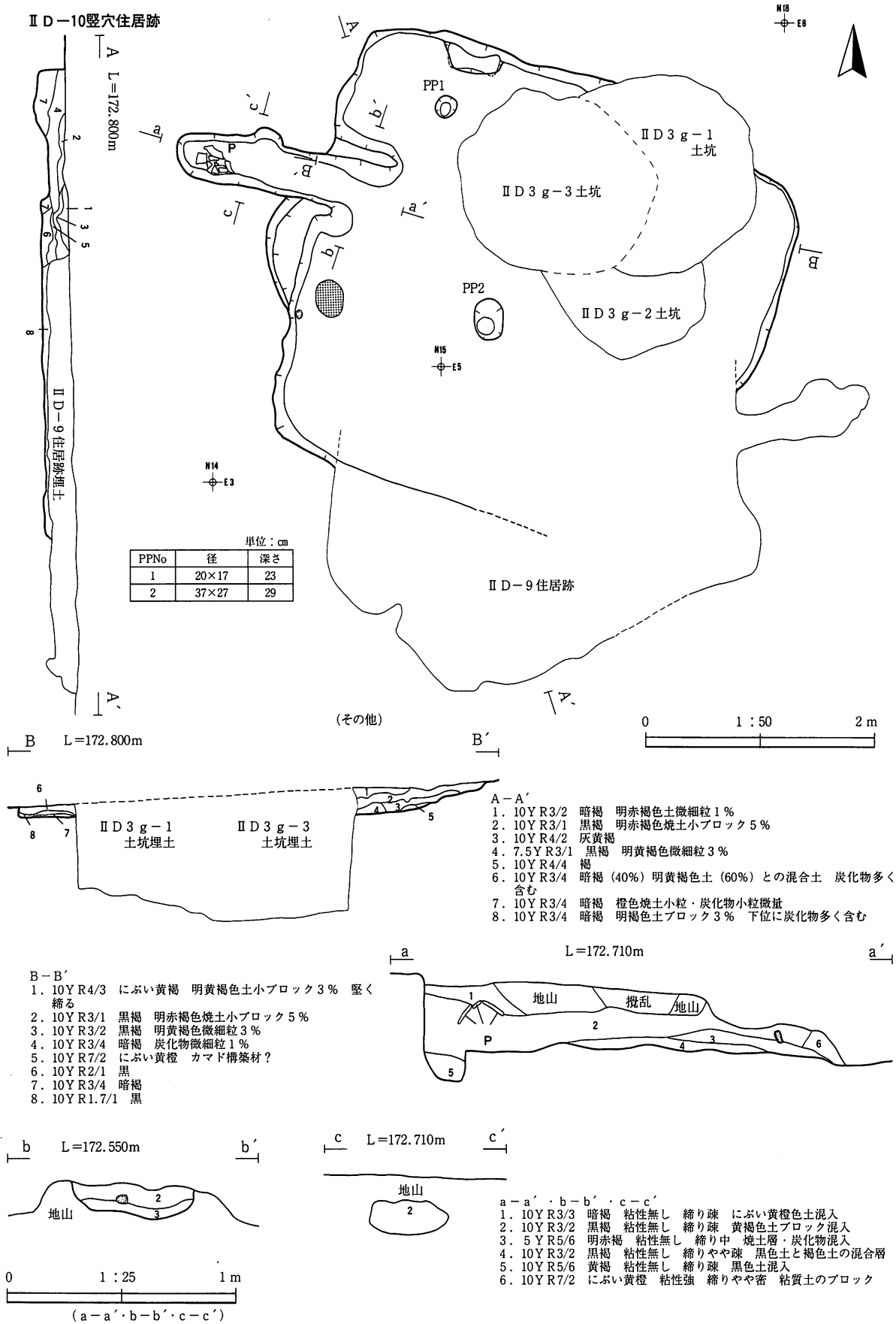
<規模・平面形> 基本形は、北辺4.10m、西辺3.70m、南辺(3.70)m、東辺(3.60)mの隅丸方形を呈するものと考えられるが、西辺のほぼ中央に膨らみを持つ。張り出しなのか、壁の崩落によるものなのかは不明である。

<埋土> 最上位には明赤褐色微細粒を含む暗褐色土が堆積し、上位には明黄褐色土小ブロックを含む黄褐色土(固く締る)及び灰黄褐色土が堆積している。中位には明赤褐色焼土小ブロックを含む黒褐色土が堆積し、下位には、黒褐~褐色土が堆積している。最下位には、炭化物を含む暗褐色土主体の土が堆積し、西壁際のカマド周辺部では焼土粒も僅かであるが混入している。

<壁> ほぼ垂直の立ち上がりを持つが、西辺の膨らみを持つ部分は緩やかに立ち上がる。壁高の残存値は4~35cmである。IV層を壁面とする。

<床面> IV層を床面とする。若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦である。カマド左袖脇で径32×24cmの焼土層が確認されている。

<カマド> 西辺の北側に位置する。燃焼部には、75×50cmの範囲に、最大厚5cmの焼土層が形成されており、上部には1個の小礫が残存していた。袖部は左右共に地山を作り出して構築されている。煙道部は割り貫き式の構造で、壁からほぼ水平に、115cm程外方に延びており、煙出し孔は径43×33cm、深さ49cmの円筒状を呈する。



第26図 II D-10 竪穴住居跡

<壁溝>検出されていない。

<柱穴・ピット>床面で柱穴状小ピットが2個検出された。P P 1・2共に住居に伴うものかどうかは不明である。

遺物 (第95・96図226~240、写真図版93・94)

<出土状況>土師器14点と鉄製品1点が出土している。

<土師器>出土した14点には坏9点、高台付坏1点、甕4点がある。坏の9点(227~233)は、いずれもロクロ使用成形であるが、内面がミガキ後黒色処理の1点(229)とロクロ成形痕のみを残す赤焼きが8点(227・228・230~233・238・239)ある。底部の切り離しはすべて回転糸切り離し無調整である。高台付坏(235)は高台部分のみ残存するので詳細不明であるが、ロクロ成形された個体である。甕は4点(226・234・236・237)あるが、いずれも非ロクロ使用成形され226以外の個体は小破片での出土である。226は口縁部を欠失するが体部が膨らむ球胴形の甕で、内外面ともヘラミガキ調整された奈良時代型の甕である。その他の個体は内面がヘラナデあるいはハケメ、外面がヘラケズリ調整された個体である。

<鉄製品>管状の製品(240)であり、器種不明のものが1点出土している。

時期 出土した土師器から10世紀代に属すると推測される。

ⅡD-12 竪穴住居跡 (第27図、写真図版32・33)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD 4 h、ⅡD 3・4 i グリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。ⅡD 4 i 土坑と重複する。本遺構が古い。

<規模・平面形>北西辺4.10m、北東辺4.12m、南西辺4.14m、南東辺3.96mの隅丸方形を呈する。

<埋土>削平のため僅かしか残存していない。赤褐色焼土ブロック・炭化物粒を含む黒褐色土が堆積している。

<壁>後世の削平のためほとんど残存していない。

<床面>Ⅳ層を床面とする。ほぼ平坦である。ほぼ全面に掘り方を持ち、黒褐色土・にぶい黄橙色土・褐色土によって貼床が施されていた。

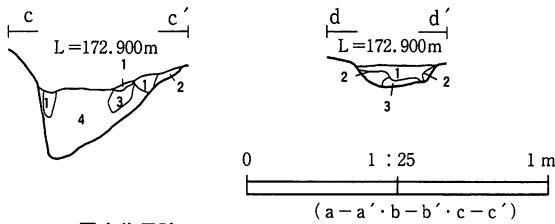
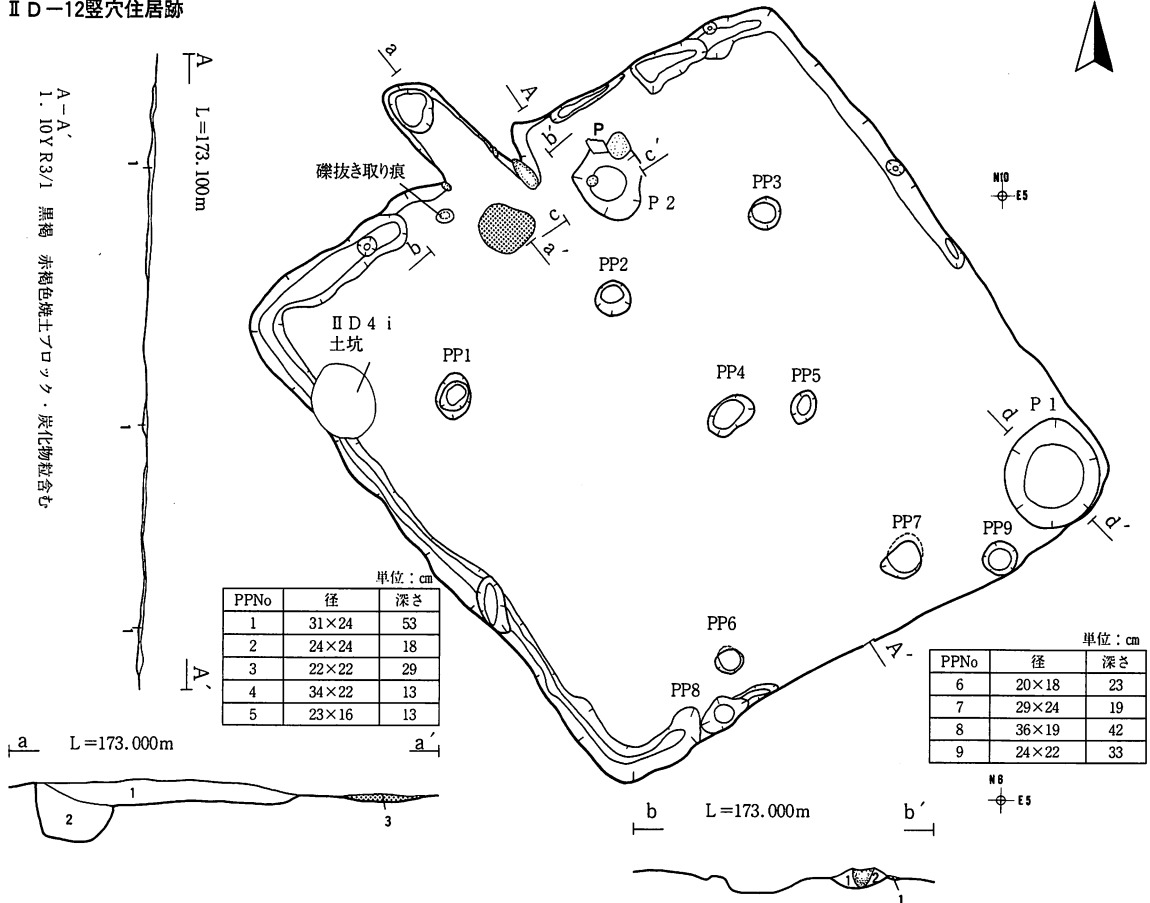
<カマド>北西辺のほぼ中央に位置する。残存状況は悪く、袖の芯材または支脚と考えられる礫が剥き出しの状態で見出された。燃焼部には、35×30cmの範囲に、最大厚5cmの焼土層が形成されている。袖部は右側のみ残存する。地山を掘り込んだ後、礫を配置し粘土質シルトを貼りつけて構築されていたと考えられる。煙道部は掘り込み式の構造を持つと考えられ、壁から約80cm外方に、傾斜せずに伸びる。煙出し部の深さは18cmである。

<壁溝>北西辺と南西辺、南東辺の西端で検出されている。幅6~26cm、深さ4~19cmである。

<柱穴・ピット>床面で、柱穴状ピットが9個検出されたい。住居に伴うものであるかどうか明確に断定はできないが、P P 1・3・8・9の4個は位置・深さから判断し、住居の主柱穴である可能性が高い。カマド右脇と床面東隅で小ピットが検出されている。P 1の規模は75×64cm・深さ21cmで、平面形は楕円形を呈する。埋土の上位には黄褐色土小ブロックを含む黒褐色土が堆積し、下位には褐色粘土質シルトが堆積している。P 2の規模は50×45cm・深さ25cmで、平面形は不整な楕円形を呈する。埋土はにぶい黄橙色土ブロック・焼土粒を含む暗褐色粘土質シルトが主体である。

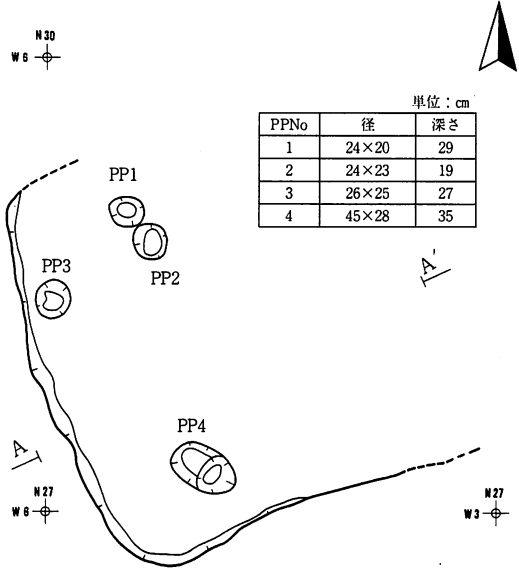
遺物 (第96図241~243、写真図版94)

II D-12 竪穴住居跡

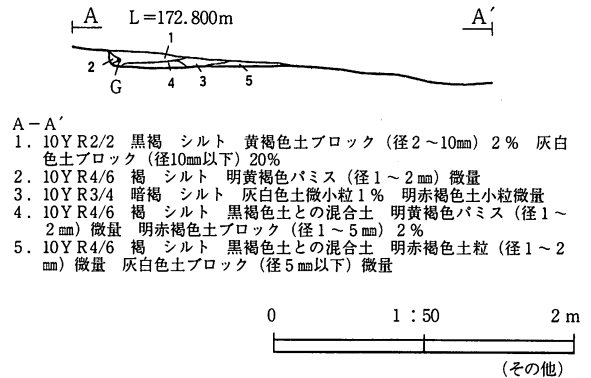


- a-a'
- 10Y R3/3 暗褐 シルト 粘性無し 締りやや有り 橙色焼土粒5% 褐色土粒含む
 - 10Y R4/4 褐 粘土質シルト 粘性有り 締り無し 地山崩落土主体
 - 5 Y R4/6 赤褐 粘土質シルト 粘性有り 締りやや有り 燃焼部焼土 焼成やや良 くすんだ色調(紫色)のブロック混入
- b-b'
- 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや有り 袖芯材礫掘り方埋土
 - 10Y R4/5 褐 粘土質シルト 粘性やや有り 締り有り ロームブロック

II D-14 竪穴住居跡



- c-c'
- 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性やや有り 締り無し ブロック
 - 10Y R5/4 におい黄橙 シルト 粘性有り 締りやや有り 暗褐色土小ブロック含む
 - 10Y R4/4 褐 粘土質シルト 粘性有り 地山崩落土ブロック
 - 10Y R3/4 暗褐 粘土質シルト 粘性無し 締りやや有り におい黄橙色土ブロック・焼土粒含む
- d-d'
- 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性やや有り 締り無し 黄褐色土小ブロックとの混合土
 - 10Y R4/6 褐 粘土質シルト 粘性有り 地山崩落土
 - 10Y R4/4 褐 粘土質シルト 粘性有り 締り有り 黒褐色土粒微量



- A-A'
- 10Y R2/2 黒褐 シルト 黄褐色土ブロック(径2~10mm) 2% 灰白色土ブロック(径10mm以下) 20%
 - 10Y R4/6 褐 シルト 明黄褐色バミス(径1~2mm) 微量
 - 10Y R3/4 暗褐 シルト 灰白色土微小粒1% 明赤褐色土小粒微量
 - 10Y R4/6 褐 シルト 黒褐色土との混合土 明黄褐色バミス(径1~2mm) 微量 明赤褐色土ブロック(径1~5mm) 2%
 - 10Y R4/6 褐 シルト 黒褐色土との混合土 明赤褐色土粒(径1~2mm) 微量 灰白色土ブロック(径5mm以下) 微量

第27図 II D-12 竪穴住居跡・II D-14 竪穴住居跡

<出土状況>土師器が3点出土している。

<土師器>出土した3点はいずれもロクロ非使用成形の甕であり、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は内面が斜め方向のヘラナデ、外面が斜め方向のヘラナデやヘラケズリ調整される。器形には頸部で軽く窄み口縁部が小さく短く外反する個体(241)とやや長く大きく外反する形(243)の2種類ある。

時期 甕のみの出土のため定かでないが10世紀代の所産と推定される。

ⅡD-14 竪穴住居跡 (第27図、写真図版34)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD5・6eグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。ⅡD-13竪穴住居跡と重複する(重複状況は第33図を参照されたい)。本遺構が古い。

<規模・平面形>南西辺2.72m、南東辺〔1.36〕mを測る。後世の削平により、残存状態が良くないが、隅丸方形を呈するものと考えられる。

<埋土>黄褐色土ブロックと十和田a降下火山灰と考えられる灰白色土ブロックを含む黒褐色土が主体である。床面付近には焼土と考えられる赤褐色土ブロックが堆積している。

<壁>南西辺のみ残存していた。壁高の残存値は5~16cm前後である。

<床面>Ⅳ層を床面とする。西半部は概ね平坦であるが、東半部は、削平のためか若干傾斜している。

<カマド>検出されていない。

<壁溝>検出されていない。

<柱穴・ピット>床面で柱穴状ピットを4個検出した。住居に伴うものかどうかは不明である。ⅡD-13住居跡との重複状況から考えると、PP1・2は伴う可能性はあるが、PP3・4はⅡD-13住居跡に伴う可能性がある。ピットは検出されていない。

遺物 (第96図244~246、写真図版94)

<出土状況>土師器が3点出土している。

<土師器>坏1点(246)と甕2点(244・245)がある。坏はロクロ使用成形内面黒色処理の無い赤焼きの口縁部小破片である。甕にはロクロ使用成形で内外面にロクロ成形痕のみを残す1点(244)と非ロクロ使用成形の1点(245)があり、前者は体部がやや丸味を持ち頸部で軽く窄み口縁部が短くやや強く外反する器形である。非ロクロ成形の個体は体部下位~底部を残す小破片のため詳細は不明であるが、内外面ともヘラナデやユビナデによる調整痕を持つ。

時期 土師器甕の特徴から9世紀末~10世紀代に位置付けられるものと推測される。

ⅡD-17 竪穴住居跡 (第28図、写真図版35・36)

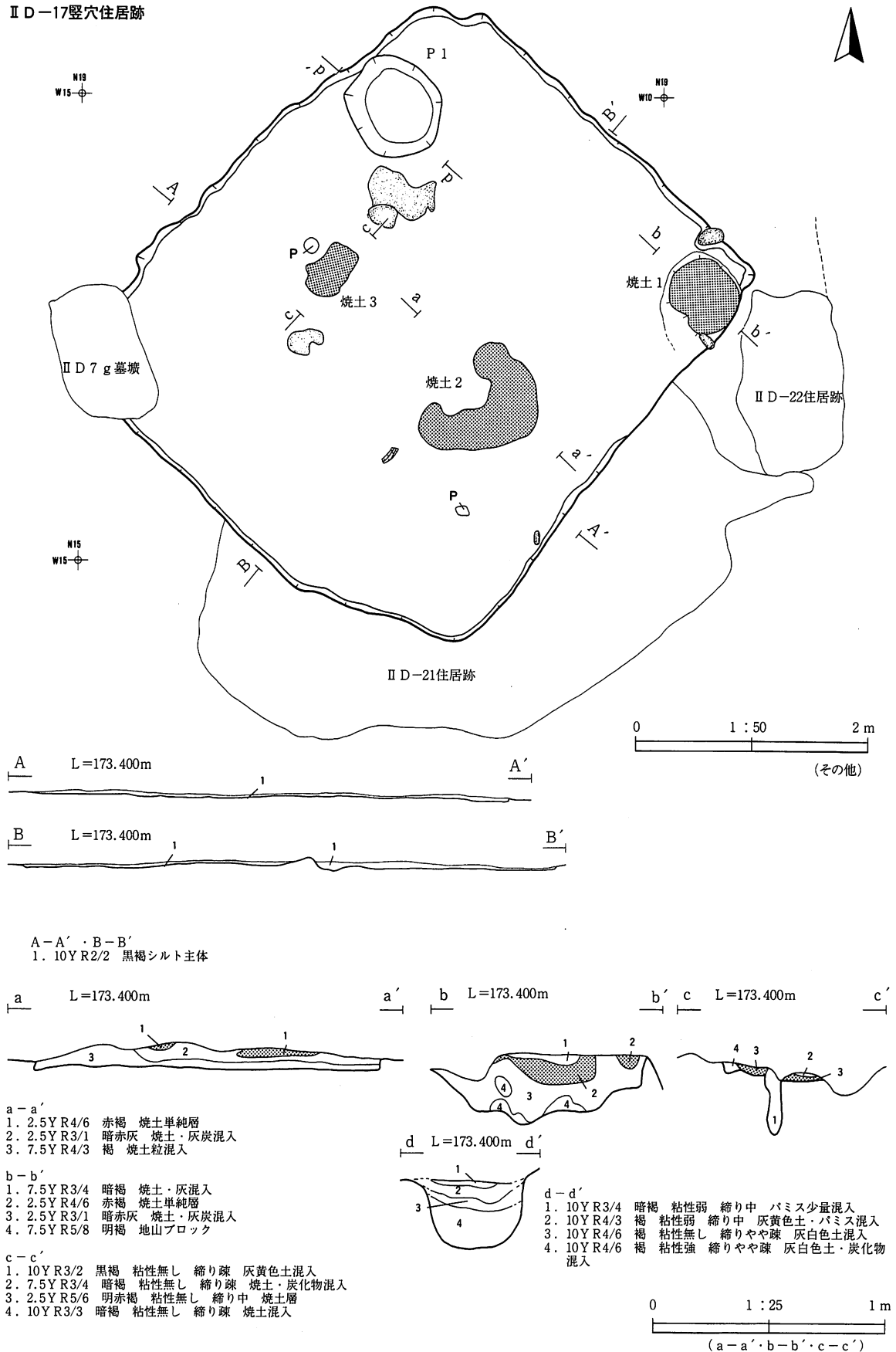
遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD6・7g、ⅡD7hグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、黒~黒褐色土に灰白色土・黄褐色土・暗褐色土等の混合土がブロック状に混じる方形状のプランとして検出された。ⅡD7g墓壇・ⅡD-21・22竪穴住居跡と重複する。ⅡD7g墓壇より旧いが、ⅡD-21・22住居跡との新旧関係は明らかではない。

<規模・平面形>北西辺4.64m、北東辺3.82m、南西辺(4.20)m、南東辺4.18mの方形を呈する。

<埋土>ごく僅かに残存するのみである。黒褐色土を主体とする。

ⅡD-17 竖穴住居跡



第28図 ⅡD-17 竖穴住居跡

<壁>ほとんど残存しない。

<床面>V層中に構築されている。概ね平坦で、赤褐色焼土・炭化材が散在している。炭化材の樹種はツキである。東隅には、63×54cmの範囲に最大厚11cmの焼土層が形成されていた。床面中央北西寄りには、48×35cmの範囲に最大厚7cmの焼土層が形成されている。床面中央南東寄りには、100×77cmの範囲に最大厚4cmの焼土層が形成されている。3基の焼土の検出状況から、本遺構は焼失住居である可能性が高い。ほぼ全面に掘り方を持ち、暗褐色土・黄褐色土・灰白色土の混合土により2～10cmの厚さで貼床が施されていた。

<カマド>検出されていない。

<壁溝>検出されていない。

<柱穴・ピット>北側隅付近で小ピットが1基検出されている。規模は90×75cm・深さ70cmで、平面形は楕円形を呈する。埋土は灰白色土の混入する褐色土主体である。

遺物 (第97図247～260、写真図版94・95)

<出土状況>土師器13点と石器1点が出土している。

<土師器>出土した13点には坏4点(247・249・258・259)と甕9点(248・250～257)含む。坏はロクロ使用成形の3点(247・258・259)と非ロクロ成形の1点(249)に分けられる。前者は小破片のため全体的なことは不明であるが、内面ミガキ後黒色処理(258)の個体と無処理の個体(247)があり、さらに無処理個体の底部は回転糸切り離し無調整である。後者の非ロクロ成形は定かでないが輪積み手捏ね成形で、内外面にヘラナデやヘラミガキ調整される。器形は底部が丸底風で体部中位に明瞭な段を付す特異な形で、奈良時代的な器形と言えよう。甕の9点(248・250～257)にはロクロ使用成形が1点(254)含まれ、その他は非ロクロ成形である。ロクロ成形の個体は体部破片のため詳細不明であるが、内面はロクロ成形痕、外面は縦方向のヘラナデ調整がある。非ロクロ成形の個体はすべて同様の特徴を持ち、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は内面が横や斜め方向のヘラナデ、外面は縦や斜め方向のヘラケズリ調整がある。器形には、頸部が軽く窄み口縁部が長くそして大きく外反する個体(251～257)と短く小さく外反する個体(256)があり、前者が多い。前者の器形は奈良時代に多く見られるものであり、平安時代では初期に散見される。

<石器>重複する縄文時代の遺物と推定される磨石が1点(260)出土している。楕円形で断面が扁平な河川円礫を使用したものである。

時期 出土した土師器の器形に奈良時代的な様相を示す例が多いことから、9世紀代に属する可能性が大きい。

II D-19 竪穴住居跡 (第29図、写真図版37)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 9 g グリッド内に位置する。V層上面において、検出された。

II D 9 g 土坑と重複する。新旧関係は不明である。

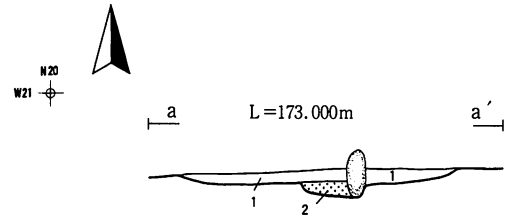
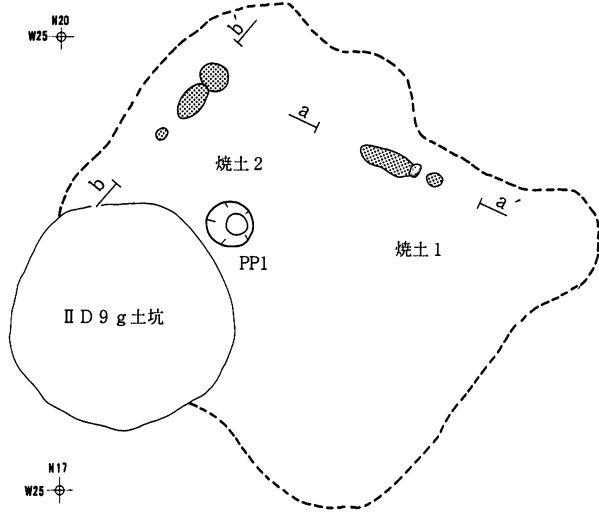
<規模・平面形>削平を受けているため、貼床部のみ検出された。貼床残存範囲は、北西辺〔1.90〕m、北東辺〔2.88〕m、南西辺〔1.35〕m、南東辺〔2.57〕mを測る。形状は不整な方形を呈する。

<埋土>残存しない。

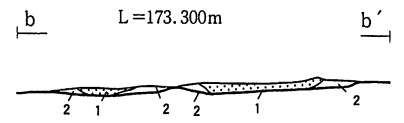
<壁>残存しない。

<床面>V層を床面とする。床面の北東辺寄りと北西辺寄りで焼土層が確認されている。北東辺寄りでは58×14cmの範囲に、最大厚7cmの焼土層が形成されている(焼土1)。北西辺寄りでは67×20cmの範囲に、最大

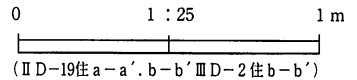
Ⅱ D-19 竪穴住居跡



- a-a'
1. 10Y R3/3 暗褐シルト主体 褐色土混入 炭化物3% 明褐色焼土ブロック1%
 2. 2.5Y R5/6 明褐 焼土

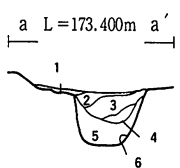
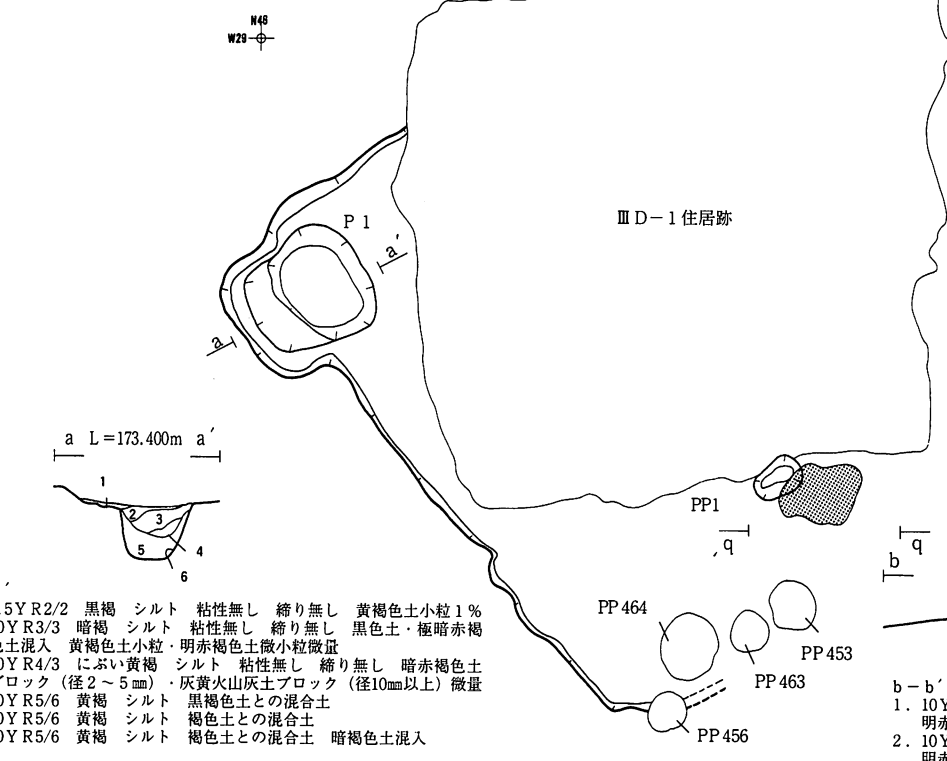


- b-b'
1. 7.5Y R4/4 褐 焼土 下部に炭化物3% 現地性
 2. 10Y R3/3 暗褐シルト主体 褐色土混入

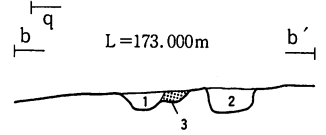


(Ⅱ D-19住 a-a', b-b' Ⅲ D-2住 b-b')

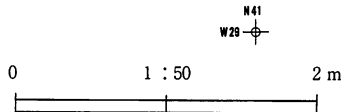
Ⅲ D-2 竪穴住居跡



- a-a'
1. 7.5Y R2/2 黒褐 シルト 粘性無し 締り無し 黄褐色土小粒1%
 2. 10Y R3/3 暗褐 シルト 粘性無し 締り無し 黒色土・極暗赤褐色土混入 黄褐色土小粒・明赤褐色土微小粒微量
 3. 10Y R4/3 にぶい黄褐 シルト 粘性無し 締り無し 暗赤褐色土ブロック(径2~5mm)・灰黄火山灰土ブロック(径10mm以上)微量
 4. 10Y R5/6 黄褐 シルト 黒褐色土との混合土
 5. 10Y R5/6 黄褐 シルト 褐色土との混合土
 6. 10Y R5/6 黄褐 シルト 褐色土との混合土 暗褐色土混入



- b-b'
1. 10Y R2/2 黒褐 シルト T o - C h 微量 明赤褐色土微小粒微量
 2. 10Y R2/2 黒褐 シルト T o - C h 微量 明赤褐色土ブロック(径2~5mm)微量
 3. 5Y R5/8 明赤褐 焼土 黒褐色土混入



第29図 Ⅱ D-19 竪穴住居跡・Ⅲ D-2 竪穴住居跡

厚4cmの焼土層が形成されている(焼土2)。遺物の出土状況から考えて、本遺構に伴う焼土である可能性が高い。黒褐色土と黄褐色土の混合土によって、ほぼ全面に貼床が施されていた。

<カマド>検出されなかった。

<壁溝>検出されなかった。

<柱穴・ピット>柱穴状ピットが1個検出された。規模は30×29cm・深さ24cmである。柱痕跡は確認できなかった。

遺物(第98図261~263、写真図版95-261~264)

<出土状況>土師器が4点出土している。

<土師器>出土した坏3点(261~263)はいずれもロクロ使用成形され内面黒色処理のない坏である。底部の切り離しは261の場合回転系切り離し無調整である。264は非ロクロ成形された甕の頸部片で、内外面共にナデ調整を施されている。

時期 10世紀代の所産であろうか。

ⅢD-2 竪穴住居跡(第29図、写真図版38)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅢD0 a・bグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、複数の住居址の切り合いと思われる黒~黒褐色土の不整な広がりとして検出された。ⅢD-1 竪穴住居跡・PP453・457・463・464と重複する。本遺構が最も古い。

<規模・平面形>上部が削平されており、またⅢD-1 竪穴住居跡によって壊されているため、断定はできないが、基本的には隅丸方形を呈するものと考えられる。西コーナーが若干張り出す。規模は南西辺[4.14]m、北西辺[1.70]mを測る。

<埋土>黒~黒褐色土が主体である。

<壁>壁高の残存値は5~7cmである。

<床面>Ⅳ層を床面とする。

<カマド>南東辺のほぼ中央と考えられる位置で、燃焼部と考えられる、55×40cm・最大厚8cmの焼土層が検出されている。袖部・煙道部・煙出し部は確認されていない。

<壁溝>検出されていない。

<柱穴・ピット>カマド燃焼部と考えられる焼土層の下で柱穴状小ピットを1個検出している。規模は35×25cm、検出面からの深さは17cmである。床面西側でピットを1基検出した。規模は開口部径80×79cm・深さ42cmで、平面形は隅丸台形を呈する。埋土の上位は焼土粒・焼土ブロックを含む黒褐~暗褐色土主体で、下位は黄褐色土と黒褐~褐色土の混合土主体である。貯蔵穴の可能性はある。

遺物(第98図265~271、写真図版95)

<出土状況>土師器が6点と鉄製品1点の出土である。

<土師器>出土の6点には坏3点(265・266・269)と甕3点(267・268・270)があり、坏はいずれもロクロ使用成形で内面がミガキ後黒色処理される。甕にはロクロ使用成形の1点(270)と非ロクロ使用成形の2点(267・268)に分けられ、前者は内外面ともロクロ成形痕のみを残し、口縁部は外反し端部が上に挽き出されて縁帯状の受け口となる。非ロクロ成形の個体は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は内面が横や斜め方向のヘラナデ、外面は縦や斜め方向のヘラケズリ調整される。器形は頸部が軽く窄んで体部が軽く膨ら

み、口縁部が短く強く外反する。

<鉄製品>釘かと推測される細い針金状の製品が1点(271)出土している。

時期 出土した土師器の様相から9世紀代に位置づけられようか。

(4) 中世

1尺は0.303mとした。また、柱間は各柱穴底面の中心と中心の距離を測った。

I A-1 竪穴住居跡(第30図、写真図版39)

遺構

<検出状況・重複関係> I A 4・5 f、I A 4・5 g グリッド内に位置する。表土除去後、IV層上面において、黒～黒褐色土の住居址と思われるプランを検出した。重複する遺構はない。

<規模・平面形>西側と東側が調査区域外にかかるため、東西方向の規模は不明であるが、南北方向は4.4m程度の規模を有すると考えられる。平面形も詳細は不明であるが、南側のコーナーが生きるとすれば、南西辺の北側あるいは中央に張出しを有する、方形あるいは長方形の竪穴建物跡の形態を持つのではないかと推測される。

<埋土>上位には黄褐色土小ブロックを含む黒褐色土が堆積している。中位は黄褐色土・黄橙色土・黒褐色土等の混合土が主体である。下位には黄褐色土ブロックを含む黒色土を主体とする混合土が堆積している。

<壁>壁高の残存値は、北側で最大29cm、南側で最大22cmである。IV層を壁面とし、北西壁は外傾して立ち上がるが、南側のコーナーと考えられる部分付近は緩やかに外傾して立ち上がる。南西壁は南端でのみ立ち上がりを確認できた。

<床面>IV層を床面とする。概ね平坦である。

<柱穴>柱穴状ピットを14個検出した。このうち主柱穴と考えられるものはP P 1・2・3あるいは13・4・5・10・14の8個である。柱配置は東西が2間以上、南北は3間と推測される。柱間寸法はP P 1-2(1.29m・4尺3寸)、P P 5-10(1.29m・4尺3寸)、P P 1-5(3.29m・10尺9寸)、P P 2-3(1.04m・3尺4寸)、P P 2-13(1.24m・4尺1寸)である。

<炉>検出されていない。

遺物(第98図272~275、写真図版95)

<出土状況>陶磁器1点・石器1点・鉄製品1点・銭貨1点の合計4点が出土している。

<陶磁器>出土した陶磁器(274)は中国明時代16世紀頃の青磁稜花皿の口縁部～体部下端を残す破片である。

<石器>4面に使用面を持つ砥石(272)であるが、現形は棒状・横断面方形であり、使い減りにより中央部が凹む。石質はリパライトである。

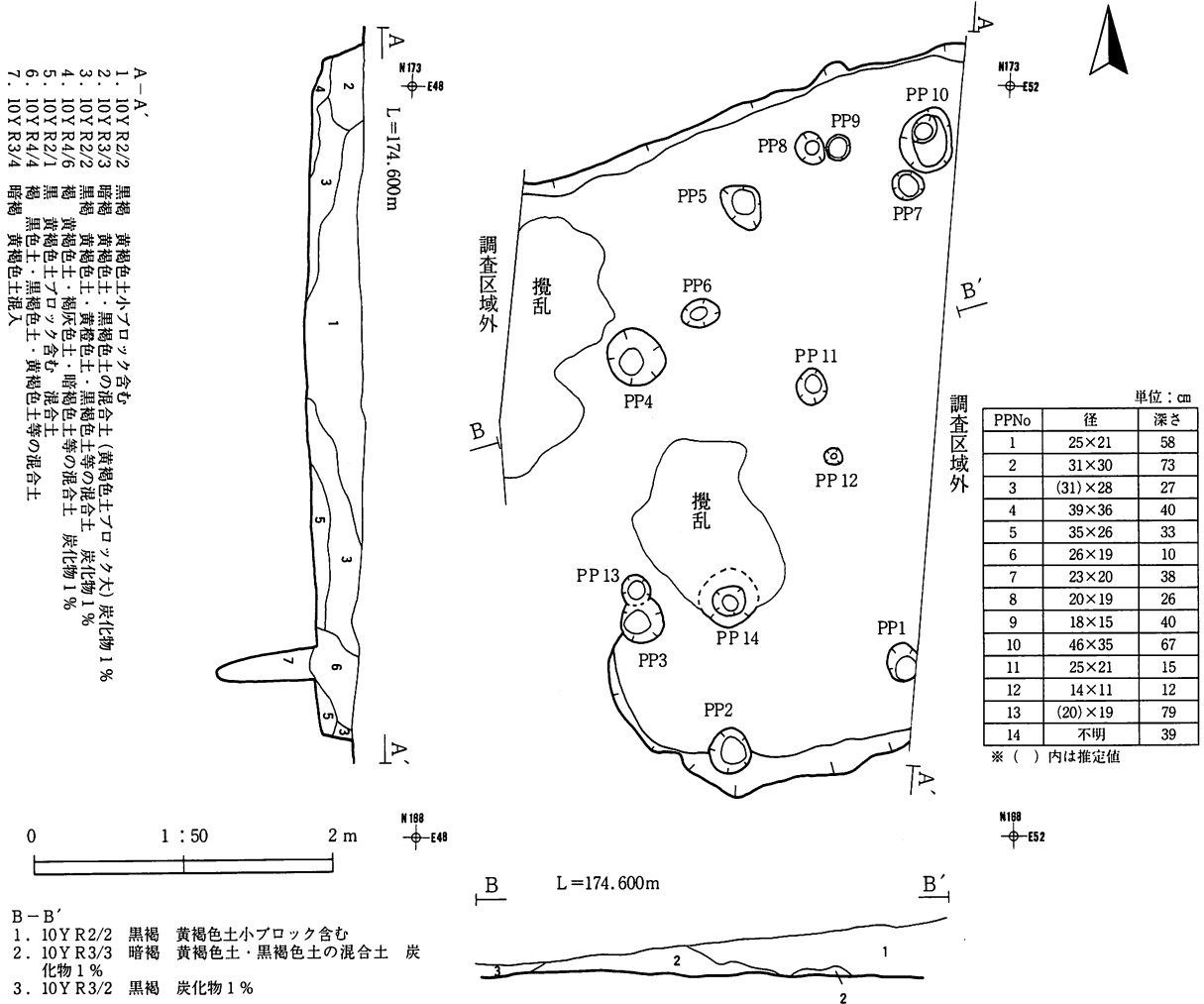
<金属製品>先端部を欠失する刀子(273)である。茎と刀身の間に、棟と刃に闕の付く両闕型の刀子で、目釘穴は確認出来ない。

<銭貨>銭文は〇元通寶と判読できるが、銭文や全体的な形・雰囲気から模鑄銭と推測される(275)。

時期 中世16世紀代の遺構と考えられる。

I A-2 竪穴住居跡(第31図、写真図版40)

I A-1 竪穴住居跡



第30図 I A-1 竪穴住居跡

遺構

<検出状況・重複関係> I A 4・5 g、I A 4・5 h、I A 4・5 i グリッド内に位置する。表土除去後、IV層上面において、黒～黒褐色土の住居址と思われるプランを検出した。

<規模・平面形> 西側と東側が調査区域外にかかるため、規模・平面形は不明であるが、南北方向の規模が5～6mの方形あるいは長方形を呈するものと推定される。

<埋土> 黄褐色土ブロック等の混入する黒褐色土・暗褐色土が主体である。

<壁> 壁高の残存値は、北側で34～60cmで、床面から外傾して立ち上がる。南側は削平及び攪乱によって破壊されたものと考えられ、明確な立ち上がりは確認できなかった。IV層を壁面とする。

<床面> IV層を床面とする。北側で径25～53cmの4個の礫が重なって検出されているが、性格は不明である。

<柱穴> 柱穴状ピットを18個検出した。このうち主柱穴と考えられるものは、PP 6・8・14・13・3・4の6個である。柱配置は東西が2間以上、南北は2間と推測される。柱間寸法はPP 6-8 (1.68m・5尺5寸)、PP 14-13 (1.95m・6尺4寸)、PP 3-4 (1.61m・5尺3寸)、PP 6-13 (3.42m・11尺3寸)、PP 3-14 (1.05m・3尺5寸)、PP 4-PP 13 (1.23m・4尺1寸) である。

＜炉＞検出されていない。

遺物 遺物は出土していない。

時期 中世の遺構と考えられる。

ⅡD-1 b 竪穴住居跡（第31図、写真図版41）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅡD5・6cグリッド内に位置する。ⅡD-1 竪穴住居跡の埋土を掘削中、本遺構の壁の立ち上がりを確認した。ⅡD-1 竪穴住居跡を截る。

＜規模・平面形＞北東部が調査区域外にかかる。規模は、北西辺〔1.90〕m、南西辺1.50m、南東辺〔1.85〕mを測る。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。

＜埋土＞黄褐～明黄褐色土ブロック・にぶい黄橙色土ブロック・灰黄色土ブロック・黒色土ブロック・明赤褐色土粒を含む黒褐色土が主体である。人為堆積と考えられる。

＜壁＞ⅡD-1 竪穴住居跡の埋土及びV層を壁面とする。壁は床面から垂直ぎみに立ち上がり、その後若干外傾して開く。壁高の残存値は55～65cmである。

＜床面＞V層を床面とし、概ね平坦である。

＜柱穴＞柱穴状ピットを3個検出した。いずれも建物を支える主柱穴と考えられる。床面壁際及び壁で、径4～14cmの極小ピットを37個検出している。土留めのための材を刺した跡と推測される。

＜炉＞検出されていない。

＜ピット＞検出されていない。

遺物（第99図277・278、写真図版95・96）

＜出土状況＞鉄製品が2点出土している。

＜鉄製品＞277は富士山形をし、頂点部分に貫通孔を付す火打金（火切鎌とも言う）であり、底辺部分の中央が凹んでいることから、長期に渡り使用された品と推測される。278は正確な器種を断定出来ないが、鎧の部品である可能性が高い。実測図の左辺の二箇所に通する小孔を持つことから、胸当ての部品である可能性が考えられる。

時期 中世の遺構と考えられる。

ⅡD-4 竪穴住居跡（第32図、写真図版42）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅡD5d、ⅡD4・5eグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。ⅡD-5 竪穴住居跡を截り、PP371に截られる。

＜規模・平面形＞北西辺（3.70）m、北東辺（3.65）m、南西辺3.60m、南東辺（3.60）mの隅丸方形を呈するものと考えられる。

＜埋土＞黄褐色土ブロックを含む黒～黒褐色土が主体である。

＜壁＞後世の削平を受けており、東側は残存しない。南西壁の残存値は25cm前後である。一部若干内傾して立ち上がるが、概ね外傾して立ち上がる。

＜床面＞Ⅳ層を床面とする。概ね平坦で締っている。南西壁際で径40cm・厚さ20cmの垂円礫が検出されているが性格は不明である。

- A-A'・B-B'
- 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土小フロック
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土フロック
 - 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土フロック
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 灰黄色土少量混入
 - 10Y R4/4 暗褐 粘性弱 締りやや密 黒褐色土混入
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締り疎 2層に類似 黄褐色土やや少ない
 - 10Y R5/8 黄褐 粘性弱 締りやや疎 暗褐色土混入
 - 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土混入

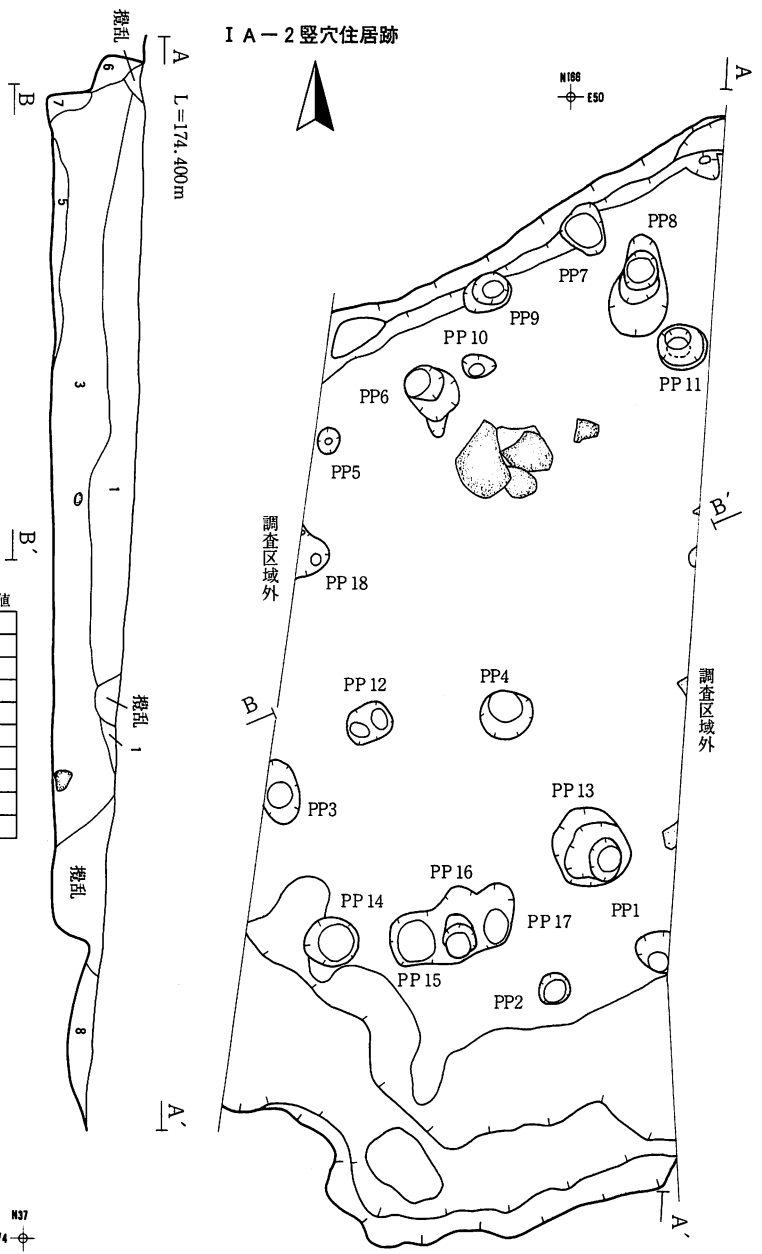
単位：cm

PPNo	径	深さ
1	(30)×27	75
2	21×20	38
3	43×26	76
4	37×34	97
5	21×17	38
6	39×33	77
7	36×29	56
8	58×41	99
9	34×25	29

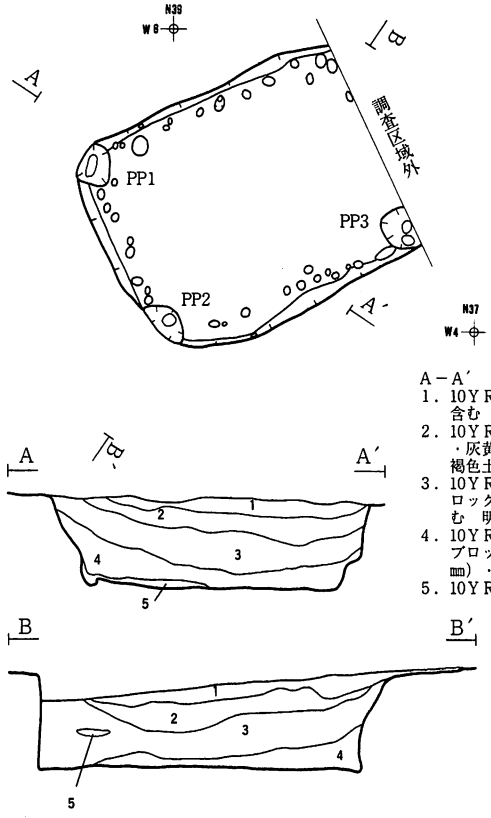
※()内は推定値

PPNo	径	深さ
10	22×16	60
11	34×29	82
12	32×25	35
13	53×52	96
14	36×34	61
15	36×(35)	92
16	51×(40)	76
17	44×(30)	69
18	(40)×29	15

I A-2 竪穴住居跡



II D-1 b 竪穴住居跡



- A-A'
- 10Y R3/1 黒褐 シルト 黄褐～明黄褐色土ブロック (径5mm以下) 含む 明赤褐色土ブロック (径2～5mm) 微量
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 黄褐～明黄褐色土ブロック (径5mm以上)・灰黄色土ブロック (T o-a・径5～10mm)・黒色土ブロック・明赤褐色土ブロック含む
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土混入 黄褐色土・明黄褐色粘質土ブロック (径2mm以上)・灰黄色土ブロック (T o-a・径2～5mm) 含む 明赤褐色土粒微量
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土混入 (3層より多い) 明黄褐色土ブロック (径2mm以上) 5% 灰黄色土ブロック (T o-a・径2～5mm)・明赤褐色土粒微量
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 明黄褐色粘質土ブロック (径10mm以上)40%

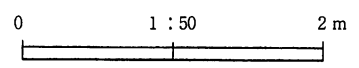
N188
E50

単位：cm

PPNo	径	深さ
1	30×21	18
2	33×17	18
3	38×(25)	20

※()内は推定値

- B-B'
- 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土混入 黄褐色土ブロック (径2～10mm) 含む 灰黄色土ブロック (T o-a・径2～5mm) 微量
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土混入 黄褐色土ブロック (径2mm以上)・にぶい黄褐色粘質土ブロック (径5mm以上)・灰黄色土ブロック (砂質火山灰土) 含む
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土混入 黄褐色土ブロック (径2～10mm)・にぶい黄褐色粘質土ブロック (径2～10mm)・灰黄色土ブロック (砂質火山灰土) 含む
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土混入 (3層より多い) 黄褐色土ブロック・にぶい黄褐色粘質土ブロック (径2～10mm) 10% 明赤褐色土粒微量
 - 10Y R5/8 黄褐 シルト ブロック



第31図 I A-2 竪穴住居跡・II D-1 b 竪穴住居跡

＜柱穴＞13個検出した。全ての柱穴で掘り方及び柱痕跡が確認された。柱配置は3間×3間である。柱間寸法はP P 1-2 (1.25m・4尺1寸)、P P 2-3 (0.89m・2尺9寸)、P P 3-4 (1.07m・3尺5寸)、P P 9-10 (1.05m・3尺5寸)、P P 10-11 (1.03m・3尺4寸)、P P 11-12 (0.94m・3尺1寸)、P P 1-5 (0.98m・3尺2寸)、P P 5-7 (0.98m・3尺2寸)、P P 7-9 (1.06m・3尺5寸)、P P 4-6 (1.06m・3尺5寸)、P P 6-8 (1.19m・3尺9寸)、P P 8-12 (0.95m・3尺1寸)である。

＜炉＞床面中央の北東寄りで検出された。38×28cmの楕円形の範囲に最大厚3cmの焼土層が形成されている。

遺物 (第100図291・292、写真図版97)

＜出土状況＞石器1点と鉄製品1点が出土している。

＜石器＞断面扁平で短冊形をなす砥石 (291) であり、5面に使用面を持ち使い減りにより折損した痕跡を持つことから、本来はこの倍の大きさがあった可能性が強い。

＜鉄製品＞薄く小さい鉄片 (292) であるが、平坦面に亀甲割れ状の錆痕跡を残すことから鋳造品であることが考えられ、鍋の一部であるかも知れない。

時期 中世の遺構と考えられる。

II D-15 竪穴住居跡 (第32図、写真図版44)

遺構

＜検出状況・重複関係＞II D 9 a・II D 9 b グリッド内に位置する。IV層上面において、黄褐色土を含む黒褐色土のほぼ長方形のプランとして検出した。II D-16 竪穴住居跡を截り、1～3号掘立柱建物跡に截られる。また、II D 9 a-2 土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

＜規模・平面形＞北辺2.15m、東辺1.57m、南辺2.07m、西辺1.85mの長方形を呈し、西側に幅1.57m、長さ0.70～0.90mの張り出しを持つ。

＜埋土＞上位には黄褐色土の混入する黒褐色土が堆積し、中位～下位にはにぶい黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が堆積する。人為堆積と考えられる。張り出し部の南西隅から床面西側の埋土の上位から下位にかけて、径8～28cm大の礫が26個程まとまって検出されている。段になっている部分の礫下、75×50cmの範囲には灰白色の粘質土が3～6cmの厚さで貼られていた。

＜壁＞壁はほぼ垂直に立ち上がる。IV層を壁面とする。壁高の残存値は、西辺で69～75cm、東辺で72～96cmである。

＜床面＞IV層を床面とする。若干西側に向かって傾斜しているが、ほぼ平坦で締っている。張り出し部は、床面よりも26cm程高い面に構築されている。

＜柱穴＞床面で柱穴状ピットを5個検出している。P P 1～4が主柱穴と考えられるが、いずれも規模が小さく、掘り込みも浅い。床面壁際で、径4～9cmの極小ピットを14個検出している。土留めのための材を刺した跡と推測される。

＜炉＞検出されていない。

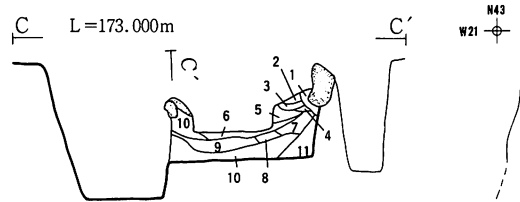
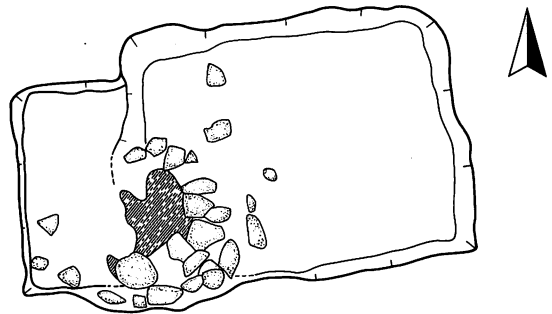
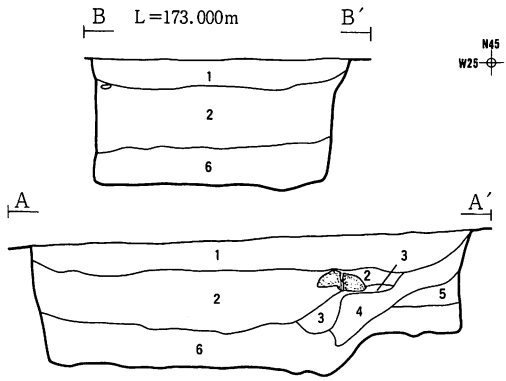
遺物 (第99・100図279・281～290、写真図版96・97-279～290)

＜出土状況＞陶磁器1点、石器1点、鉄製品5点、銭貨4点、その他硫黄の塊1点が出土している。

＜陶磁器＞中国明時代の白磁端反皿 (286) の高台脇～底部を残す破片であり、畳付部分は露胎である。

＜鉄製品＞出土した5点には刀子3点 (283～285)、小札1点、鍋1点がある。刀子の3点は283は両関のものであるが、茎は柄の木質部が若干付着するため目釘穴の存在は不明である。他の2点は茎と刀身の一部を

II D-15 竖穴住居跡集石

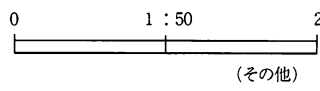


- A-A' · B-B'
- 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土・バミス混入
 - 10Y R2/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄褐色土小ブロック・バミス混入
 - 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄褐色土大ブロック混入
 - 10Y R2/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 バミス少量混入
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄褐色土ブロック少量混入
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄褐色土ブロックやや多く混入

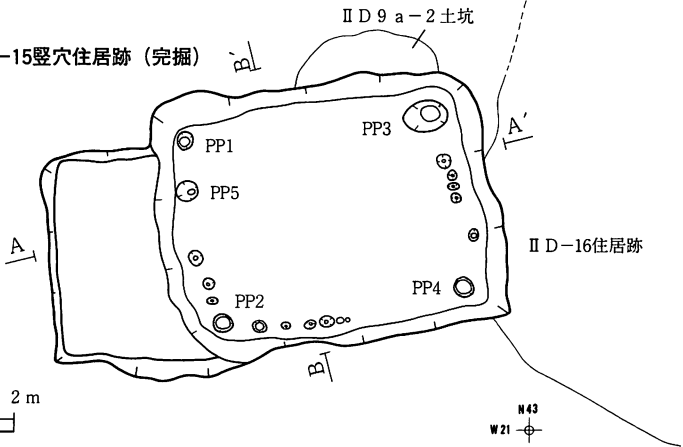
- C-C'
- 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土少量混入
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 炭化物微量混入
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土粒混入
 - 10Y R5/8 黄褐 粘性無し 締り疎 ブロック
 - 10Y R3/1 黒褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土粒混入
 - 10Y R5/1 灰白 粘性強 締り密 粘土質
 - 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土・炭化物混入
 - 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締り中 黄褐色土微量混入
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄褐色土混入
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土微量混入
 - 10Y R4/4 褐 粘性無し 締り疎 におい黄褐色土混入

単位：cm

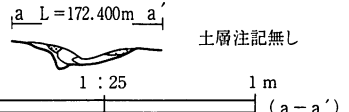
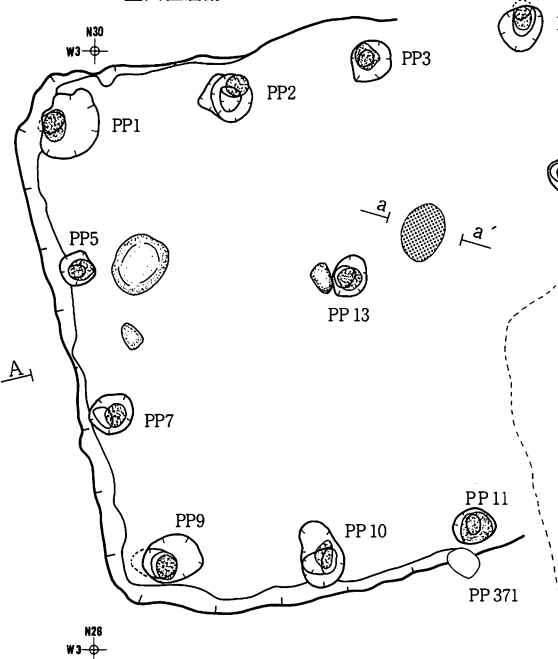
PPNo	径	深さ
1	12×10	15
2	12×12	24
3	29×19	22
4	13×13	20
5	15×14	15



II D-15 竖穴住居跡 (完掘)



II D-4 竖穴住居跡



単位：cm

PPNo	径	深さ	PPNo	径	深さ
1	50×40	85	8	34×30	63
2	37×33	56	9	39×32	77
3	30×28	30	10	45×30	45
4	31×28	54	11	29×24	34
5	24×23	51	12	31×26	63
6	25×25	47	13	27×24	54
7	30×28	41			

- A-A'
- 10Y R2/1 黒 黄褐色土ブロック含む
 - 10Y R2/1 黒 黄褐色土小ブロック若干 炭化物若干
 - 10Y R4/6 褐 黄褐、黒色土ブロック含む (汚れたT o - H層)
 - 10Y R3/2 黒褐 黄褐色土小ブロック含む (混合土) 炭化物若干
 - 10Y R3/2 黒褐 黄褐色土ブロック含む

第32図 II D-4 竖穴住居跡・II D-15 竖穴住居跡

残すが、刃関とする共通点がある。

<錢貨>287~290の4点出土しているが、錢文の判読出来るのは287の○元通寶のみで、それも非常に不明瞭である。他の3点は錢文が見られないこと、錢径が小さいなどからこれらの4点すべてが模鑄錢と推察される。

<その他>硫黄の塊（写真のみ掲載280）がある。

時期 出土した白磁皿の年代により16世紀代と考えられる。

ⅡD-13 竪穴住居跡（第33図、写真図版43）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD6eグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、黒褐色土の長方形のプランとして検出された。ⅡD-14竪穴住居跡を截り、4号掘立柱建物跡に截られる。

<規模・平面形>後世の削平により、南西辺の一部でしか壁の立ち上がりを確認できなかったため、断定はできないが、方形か長方形を呈していたと考えられる。南西辺の規模は（3.74）mである。

<埋土>黒褐色土と褐色土の混合土が堆積していた。

<壁>立ち上がりを確認できた、南西壁の残存値は4~5cmである。Ⅳ層を壁面とする。

<床面>Ⅳ層を床面とする。

<柱穴>柱穴状ピットを14個検出している。全体に削平を受けているため、住居に伴うものかどうかは不明である。このうち住居に伴う可能性のあるものは、PP1・2・3・4・5・13・14・10・8の9個である。伴うとすれば南北の柱間は2間になると考えられる。柱間寸法はPP1-3（1.82m・6尺）、PP3-5（1.47m・4尺9寸）、PP5-14（2.81m・9尺3寸）、PP13-14（1.58m・5尺2寸）・PP1-8（1.37m・4尺5寸）である。PP386は4号掘立柱建物跡を構成する柱穴で、本遺構を截ると考えられる。

<炉>検出されていない。

遺物（第100図293、写真図版97）

<出土状況>錢貨が1点出土している。

<錢貨>腐食がやや進んでいるが「えいらくつうほう（永楽通寶）」と判読される錢文を持つ錢（293）である。書体や錢径などから中国明時代の正錢と推測される。

時期 永楽通寶は中国明時代の1408年に鑄造開始された錢であることから、15~16世紀と推測される。

ⅢD-1 竪穴住居跡（第33図、写真図版45）

遺構

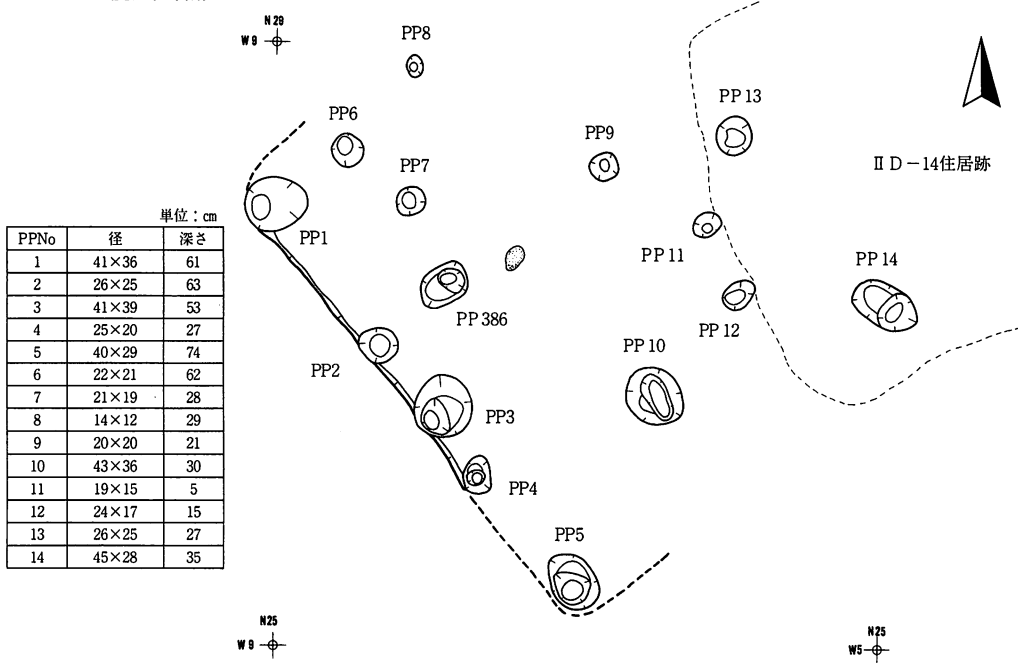
<検出状況・重複関係>ⅡD9a・b、ⅢD0a・bグリッド内に位置する。Ⅳ層上面で、黄褐色土の小ブロックを含む黒褐色土及び暗褐色土の、ほぼ方形の広がりとして検出された。平安時代の遺構であるⅢD-2竪穴住居跡及び2・3号掘立柱建物跡と重複する。

<規模・平面形>東辺3.30m、西辺3.40m、南辺3.20m、北辺3.50mの隅丸方形を呈するが、北東端が若干東側に張り出す。住居の北東側の壁高残存値が、削平により低くなっているため、本来は張り出しを持っていた可能性もある。

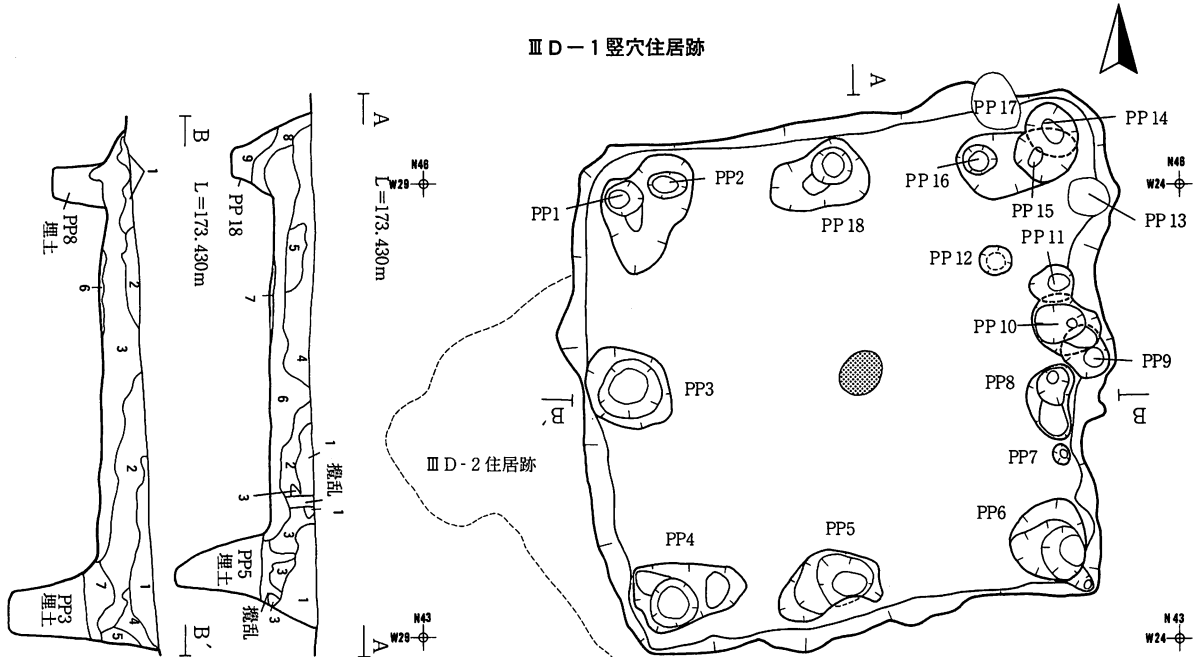
<埋土>黄褐色土の小ブロックを含む暗褐色土・黒褐色土が主体である。人為堆積と思われる。

<壁>Ⅳ層を壁面とし、ほぼ垂直に立ち上がる。各壁中央部の壁高の残存値は、東壁11cm、西壁39cm、南壁

Ⅱ D-13 竪穴住居跡



Ⅲ D-1 竪穴住居跡



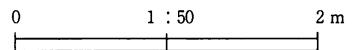
- A-A'
- 10Y R3/2 黒褐 黄褐色土小ブロック含む 炭化物1%
 - 10Y R4/6 暗褐主体 黒褐、褐、黄褐、灰白色土等の混同土
 - 10Y R5/8 黄褐主体 黒褐、灰白色土小ブロック含む
 - 10Y R3/2 暗褐主体 黄褐色土小ブロック含む 炭化物3%
 - 10Y R3/3 暗褐 黄褐色土小ブロック含む 炭化物若干
 - 10Y R3/2 黒褐主体 黄褐色土小ブロック含む 炭化物3%
 - 10Y R2/1 黒 炭化物層 炭化穀類含む
 - 10Y R4/4 褐 暗褐、黄褐色土の混合土
 - 10Y R3/3 暗褐 黄褐、灰白色土ブロック含む
- B-B'
- 10Y R3/2 黒褐 黄褐色土小ブロック含む 炭化物1%
 - 10Y R4/6 暗褐主体 黒褐、褐、黄褐、灰白色土等の混合土 炭化物若干
 - 10Y R3/2 黒褐主体 黄褐色土小ブロック含む 炭化物3%
 - 10Y R2/1 黒 炭化物1%
 - 10Y R3/1 黒褐 褐色土小ブロック含む
 - 10Y R2/1 黒 炭化物層 炭化穀類含む

単位：cm

PPNo	径	深さ
1	64×(40)	75
2	50×(40)	31
3	65×54	62
4	75×45	64
5	71×38	63
6	55×53	70

※ () 内は推定値

PPNo	径	深さ	PPNo	径	深さ
7	14×12	14	13	28×25	46
8	49×29	52	14	38×(30)	62
9	35×28	40	15	42×(35)	30
10	46×38	48	16	(65)×44	35
11	29×(25)	56	17	40×30	30
12	20×20	25	18	68×45	70



第33図 Ⅱ D-13竪穴住居跡・Ⅲ D-1 竪穴住居跡

34cm、北壁26cmである。

<床面>Ⅳ層中に構築されており、ほぼ平坦である。また、灰白色土(T o-O f)により貼床が施されていた。

<柱穴>住居検出面及び床面で計18基検出された。このうち住居に伴う可能性のあるものはP P 1～8・10～12・14～16の15基で、住居を切っていると考えられるものはP P 9・13・17の3基である。そのうち、主柱穴と考えられるものは、P P 1・3・4・5・6・10・14・17の8基である。P P 1・2、P P 10・11、P P 14・15・16はそれぞれ重複しており、新旧関係は明らかではないが、住居の建て替えが行われた可能性がある。柱間寸法はP P 1-3 (1.26m・4尺2寸)、P P 3-4 (1.47m・4尺9寸)、P P 4-5 (1.18m・3尺9寸)、P P 5-6 (1.51m・5尺)、P P 6-10 (1.51m・5尺)、P P 10-14 (1.28m・4尺2寸)、P P 14-17 (1.46m・4尺8寸)、P P 17-1 (1.49m・4尺9寸)である。

<炉>床面のほぼ中央で検出された。焼土層の厚さは約6cmである。

遺物 (第100図294、写真図版97)

<出土状況>P P 10の埋土から磁器片が1点出土している。また、床面から炭化穀類が出土している。分析結果は下記<自然遺物>に記す。

<陶磁器>中国龍泉窯産の青磁稜花皿片である(294)。

<自然遺物>サンプリングした炭化穀類の中に、イネ9粒、オオムギ1粒、マメ科29粒が含まれていた。

時期 遺構の形状と出土した陶磁器の特徴から15世紀末以降16世紀代に位置づけられる。

(5) 時期不明

ⅡD-18 竪穴住居跡 (第34図、写真図版46)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD 5・6 c、ⅡD 5・6 dグリッド内に位置する。Ⅳ層上面で検出された。ⅡD-1 竪穴住居跡・ⅡD 5 d土坑と重複する。新旧関係は不明であるが、本遺構が最も新しい可能性が高い。

<規模・平面形>削平を受けているため、貼床部分の一部しか残存していず、規模・平面形は不明である。

<埋土・壁>残存しない。

<床面>Ⅳ層を床面とする。にぶい黄橙色土・黒褐色土等によって貼床が施されていた。

<柱穴>貼床痕跡を確認できた範囲及びその付近で検出された柱穴状ピットを図示した。本遺構に伴うものかどうかは不明である。規模・形状、配置から考えて、伴う可能性のあるものはP P 1～4で、柱間寸法は、P P 2-3 (1.83m・6尺)、P P 3-4 (1.57m・5尺2寸)となっている。

遺物 遺物は出土していない。

時期 詳細は不明であるが、遺構の形状から中世の遺構である可能性がある。

ⅡD-20 竪穴住居跡 (第35図、写真図版46)

遺構

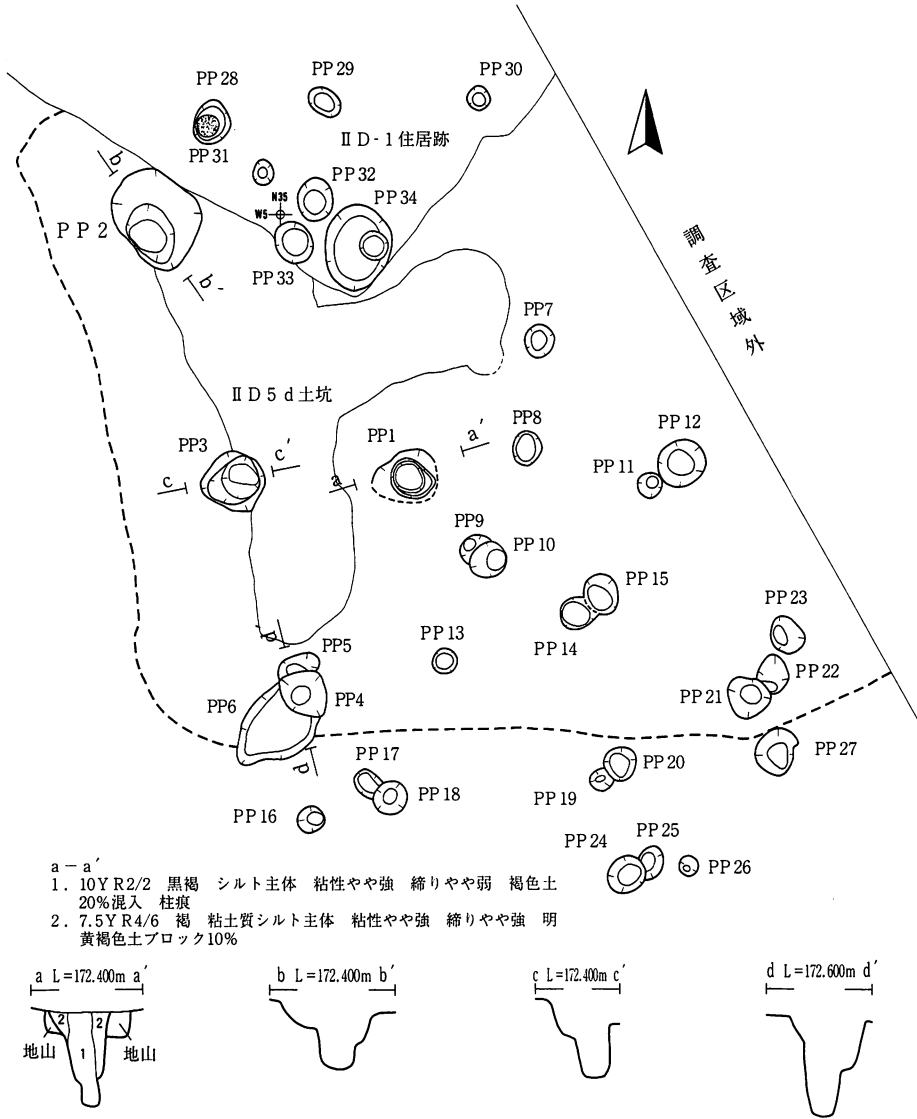
<検出状況・重複関係>ⅡD 4 j、ⅡE 4 aグリッド内に位置する。Ⅴ層上面で検出された。ⅡD 4 j土坑と重複する。新旧関係は不明である。

<規模・平面形>削平を受けているため、貼床部分の一部しか残存していず、規模・平面形は不明である。

II D-18 竪穴住居跡

単位：cm

PPNo	径	深さ
1	47×(38)	67
2	74×60	50
3	45×40	56
4	40×31	67
5	24×(23)	33
6	84×49	29
7	24×21	20
8	24×20	13
9	(25)×23	21
10	26×21	41
11	18×16	不明
12	34×30	33
13	18×17	27
14	(28)×22	47
15	29×24	49
16	19×18	18
17	(23)×16	12
18	24×21	18
19	19×18	不明
20	25×23	17
21	31×30	34
22	29×24	34
23	27×23	48
24	26×26	44
25	25×18	15
26	14×13	不明
27	35×29	18
28	33×25	51
29	24×18	52
30	18×16	50
31	18×15	25
32	30×25	94
33	31×25	49
34	60×48	52



- a-a'
- 10Y R2/2 黒褐 シルト主体 粘性やや強 締りやや弱 褐色土 20%混入 柱痕
 - 7.5Y R4/6 褐 粘土質シルト主体 粘性やや強 締りやや強 明黄褐色土ブロック10%

第34図 II D-18 竪穴住居跡

<埋土・壁>残存しない。

<床面>V層を床面とする。にぶい黄橙色粘質土・暗褐色土・黄褐色土の混合土によって貼床が施されていた。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

II D-21 竪穴住居跡 (第35図、写真図版46)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 6・7 g、II D 6・7 h グリッド内に位置する。IV層～V層中で検出された。

II D-17 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

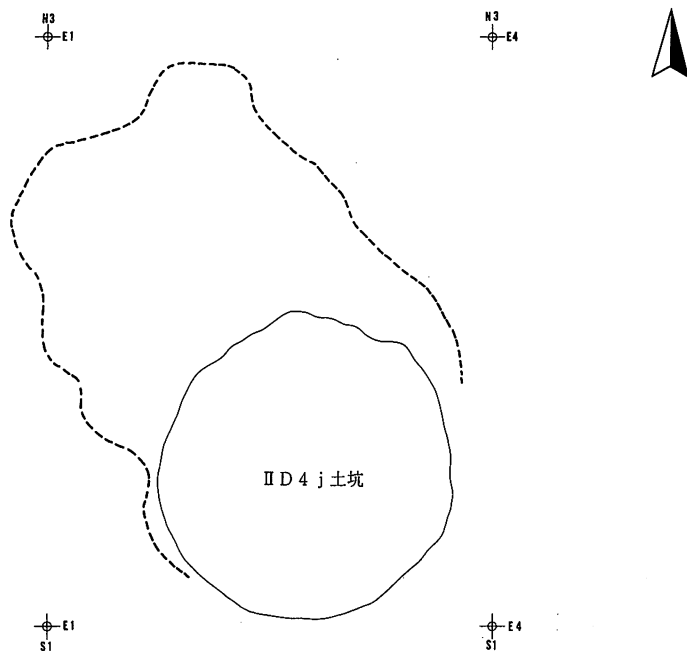
<規模・平面形> 削平を受けているため、貼床部分の一部しか残存してはず、規模・平面形は不明である。

<埋土・壁>残存しない。

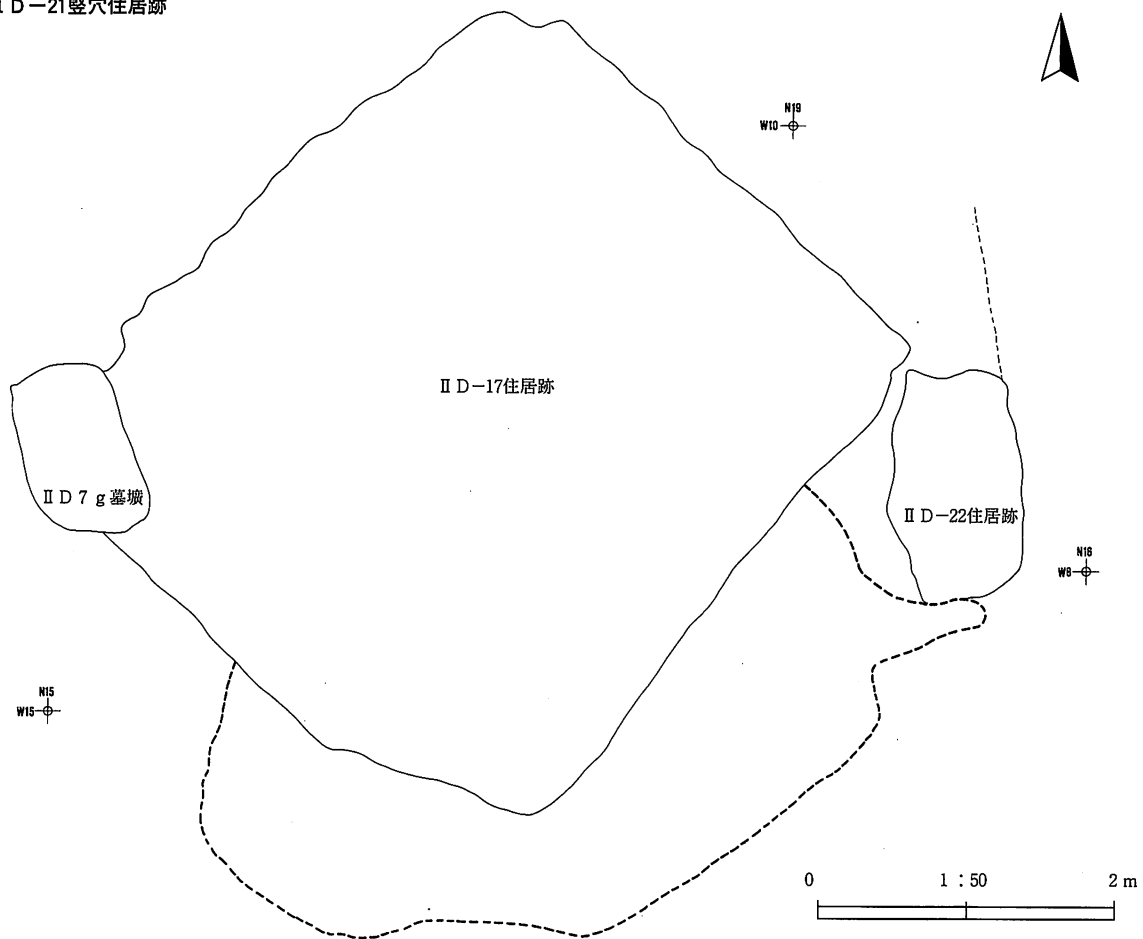
<床面>IV層とV層を床面とする。黒褐色土と黄褐色土の混合土によって貼床が施されていた。

<カマド> 煙道部と考えられる部分の長さは84cmである。

II D-20 豎穴住居跡

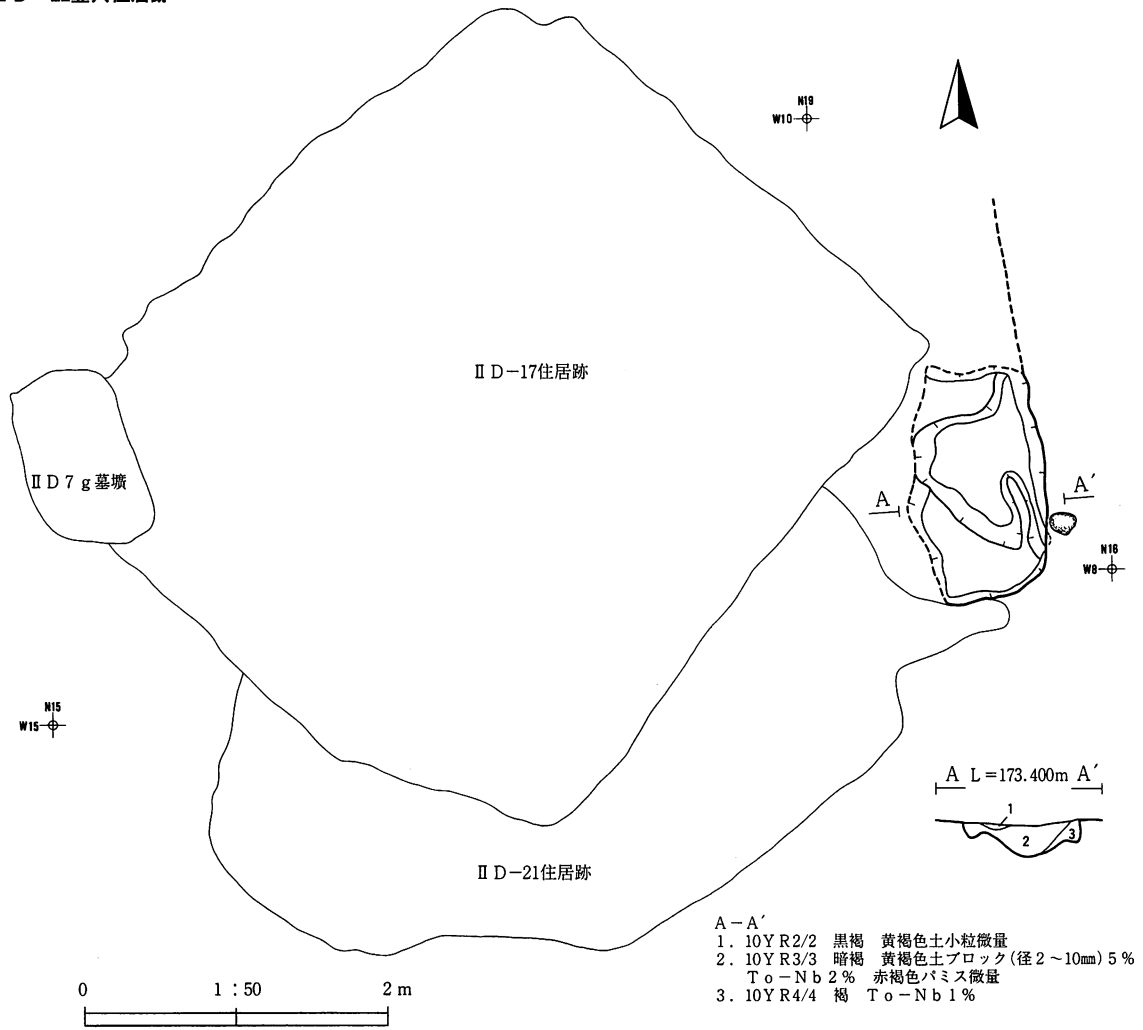


II D-21 豎穴住居跡



第35図 II D-20 豎穴住居跡・II D-21 豎穴住居跡

II D-22 竪穴住居跡



第36図 II D-22 竪穴住居跡

遺物 出土遺物はない。

時期 詳細は不明であるが、煙道部の位置及び重複する II D-17 竪穴住居跡の遺物の出土状況から考えて、平安時代の遺構の可能性はある。

II D-22 竪穴住居跡 (第36図、写真図版46)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 6 g グリッド内に位置する。IV層～V層中で検出された。II D-17 竪穴住居跡・II D-21 竪穴住居跡と重複すると推測される。新旧関係は不明である。

<規模・平面形> 削平を受けているため、貼床部分の一部しか残存してえず、規模・平面形は不明である。

<埋土・壁> 残存しない。

<床面> IV～V層を床面とする。黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土の混合土によって貼床が施されていた。

遺物 出土遺物はない。

時期 詳細は不明である。

2. 掘立柱建物跡

平面図に付している寸法は、() のない数字の単位はcmで、() 内の数字の単位は尺である。一尺は30.3cmとして計算した。また、柱間寸法は柱穴の開口部径の範囲内で任意の点を設定し、計測した。重複関係については、一部を除き直接柱穴が截り合う、あるいは截り合っていたと考えられる場合のみ言及した。平面プランのみが重複する遺構については付録図版を参照されたい。

1号掘立柱建物跡 (第37図・付録図版)

遺構

<位置・重複関係>調査区中央平坦部北側(郭中央)のⅡD7b~d、ⅡD8a~d、ⅡD9a~cグリッド内に位置する。ⅡD-15・16竪穴住居跡を載る。PP243がPP244を載ることから2号掘立柱建物跡より古い。PP160はPP272に載られている可能性が高く、3号掘立柱建物跡より古い可能性がある。6号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

<規模・平面形式>桁行7間(西側13.7m)、梁行3間(北側6.26m・南側6.00m)の建物である。面積は約84㎡(25.4坪)である。1号掘立柱建物跡の建て替えと考えられる2・3号掘立柱建物跡の平面形式と比較して考えると、下屋柱が存在し、東西に廂が付いていた可能性もある。間取りの詳細は不明であるが、三つの空間に分割されていたと考えられる。

<建物方位>桁行の軸方向はN-28°-Wである。

<柱間寸法>桁行は200cm(6.6尺)と185cm(6.1尺)を使用しており、梁行は200cm(6.6尺)と313cm(10.3尺)を使用していると考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 中世の遺構であると考えられる。母屋的な性格を持つ建物であると推察される。

2号掘立柱建物跡 (第38図・付録図版)

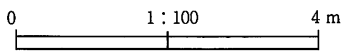
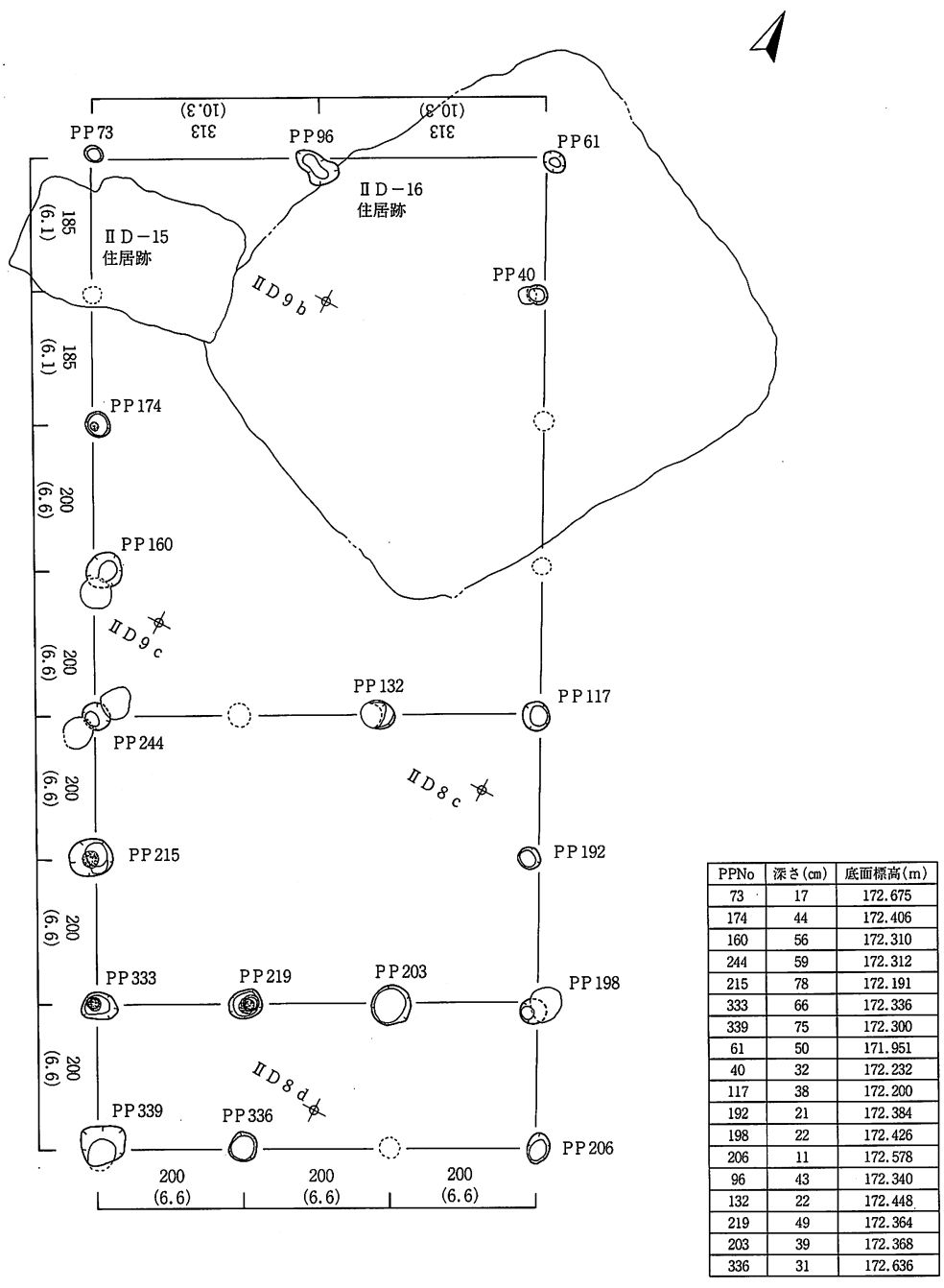
遺構

<位置・重複関係>調査区中央平坦部北側(郭中央)のⅡD7a~c、ⅡD8a~d、ⅡD9a~dグリッド内に位置する。北端は調査区域外にかかる。ⅡD-3・15・16竪穴住居跡、ⅢD-1竪穴住居跡を載る。PP243・244の重複関係から1号掘立柱建物跡より新しい可能性がある。PP204はPP205に載られている可能性が高く、3号掘立柱建物跡より古い可能性がある。PP361はPP362を載っている可能性があり、1号柱穴列より新しい可能性が高い。7号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。ⅡD9a-2焼土遺構と重複するが、新旧関係は明らかではない。

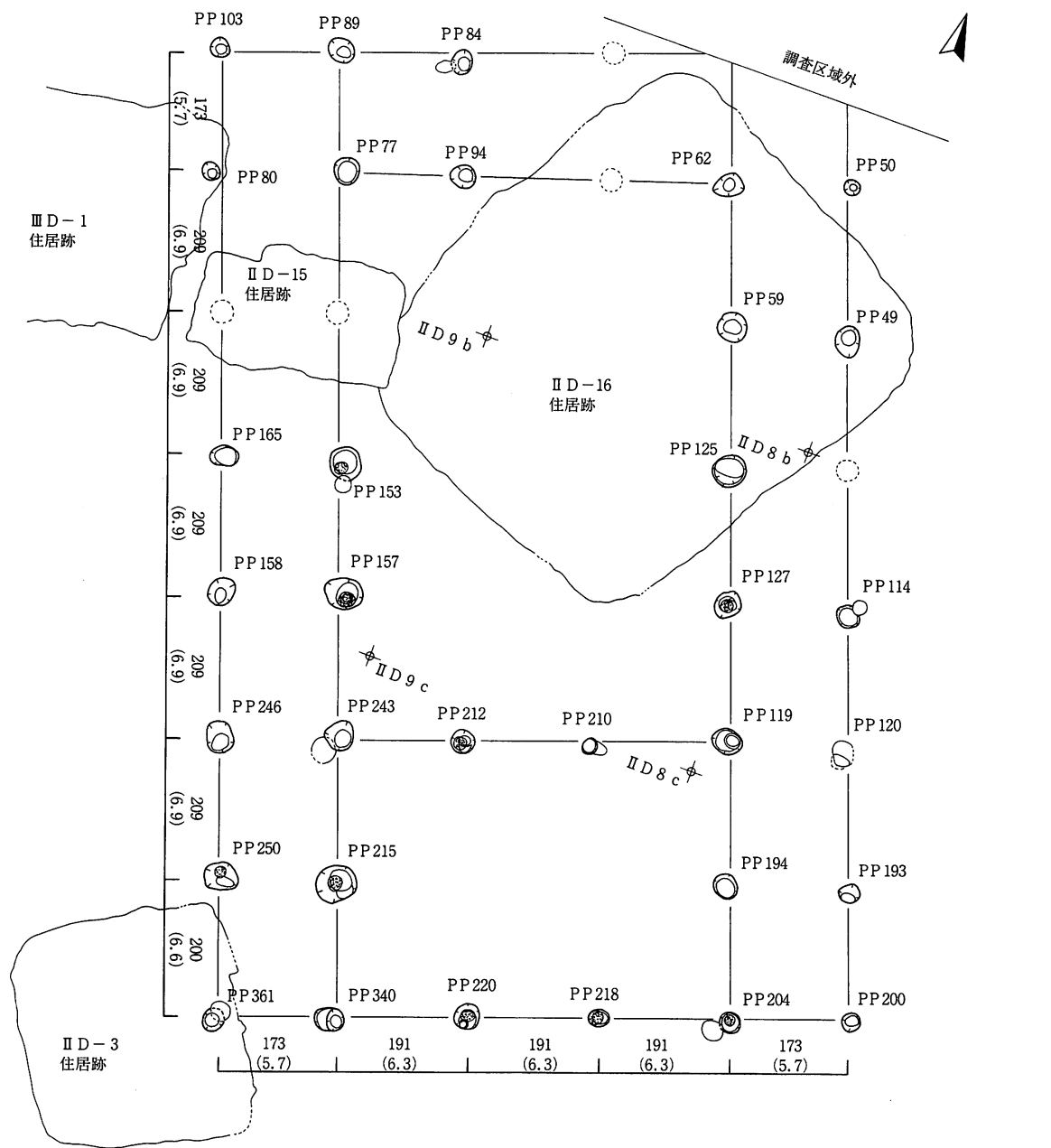
<規模・平面形式>桁行7間(西側14.18m)、梁行5間(南側9.19m)の建物であると考えられる。面積は約130.3㎡(39.4坪)と推定される。身舎は桁行7間、梁行3間で、東側と西側の二面に廂が付く形態を有すると考えられる。ただし、桁行の北端の柱間寸法が内側に比して短く、三面廂建物の可能性も考えられる。間取りの詳細は不明であるが、PP243~PP119の梁間の列を境とし、二つの空間に分割されていたと考えられる。

<建物方位>桁行の軸方向はN-30°-Wである。

<柱間寸法>桁行は209cm(6.9尺)を主に使用しており、北端では173cm(5.7尺)を用いている。梁行の身

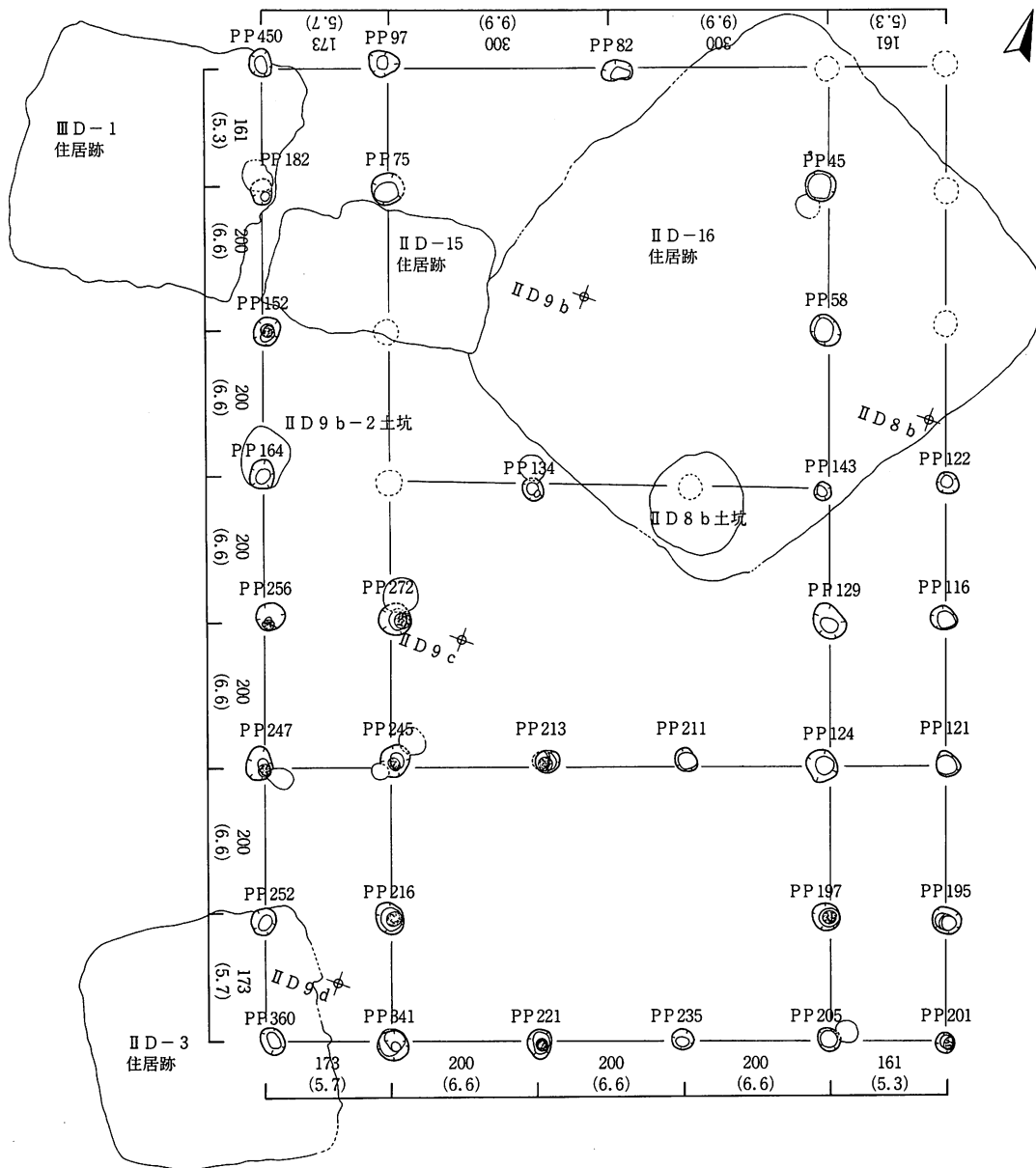


第37図 1号掘立柱建物跡



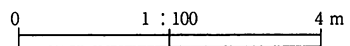
PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)	PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
103	49	172.504	127	39	172.168
80	61	172.360	119	32	172.258
165	50	172.410	194	33	172.305
158	54	172.410	204	102	171.666
246	64	172.336	50	22	172.137
250	66	172.365	49	62	171.723
361	63	172.474	114	21	172.161
89	46	172.443	120	27	172.215
77	59	172.235	193	24	172.302
153	62	172.230	200	36	172.376
157	76	172.110	84	43	172.348
243	70	172.184	94	43	172.313
215	78	172.191	212	32	172.459
340	76	172.264	210	21	172.477
62	47	171.962	220	49	172.402
59	35	172.142	218	33	172.471
125	49	172.066			

第38図 2号掘立柱建物跡



PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
450	50	172.512
182	51	172.440
152	89	172.068
164	67	172.304
256	74	172.240
247	76	172.274
252	65	172.343
360	44	172.599
97	40	172.484
75	57	172.037
272	71	172.114
245	79	172.115
216	65	172.358
341	80	172.260
45	47	172.092
58	47	172.049

PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
143	15	172.677
129	57	171.998
124	51	172.074
197	56	172.115
205	57	172.122
122	51	172.175
116	30	172.160
121	12	172.386
195	39	172.181
201	43	172.196
82	57	172.037
134	50	172.282
213	66	172.157
211	41	172.303
221	71	172.226
235	59	172.215



第39図 3号掘立柱建物跡

舎は191cm (6.3尺)、廂は173cm (5.7尺) を使用していると考えられる。

遺物 (写真図版97-297)

<出土状況> P P 210の埋土から琥珀の原石 (297) が出土している。

時期・性格 中世の遺構であると考えられる。母屋的な性格を持つ建物であると推察される。

3号掘立柱建物跡 (第39図・付録図版)

遺構

<位置・重複関係> 調査区中央平坦部北側 (郭中央) のⅡD 7 b・c、ⅡD 8 a～d、ⅡD 9 a～d、ⅢD 0 aグリッド内に位置する。ⅡD-3・15・16竪穴住居跡、ⅢD-1竪穴住居跡、ⅡD 8 a土坑を截る。また、ⅡD 9 a-2土坑と重複するが、新旧関係は不明である。P P 272はP P 160を截る可能性が高く、1号掘立柱建物跡より新しい可能性がある。P P 204はP P 205に截られている可能性が高く、2号掘立柱建物跡より新しい可能性がある。8号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

<規模・平面形式> 桁行7間 (西側13.34m)、梁行5間 (南側・北側共に9.34m) の建物である。面積は約124.6㎡ (37.6坪) である。身舎は桁行7間、梁行3間で、東側と西側の二面に廂が付く形態を有すると考えられる。ただし、桁行の両端の柱間寸法が内側に比して短く、四面廂建物の可能性もある。間取りの詳細は不明であるが、三つの空間に分割されていたと考えられる。

<建物方位> 桁行の軸方向はN-20° -Wである。

<柱間寸法> 桁行は内側が200cm (6.6尺)、両端が161cm (5.3尺) と173cm (5.7尺)、梁行では200cm (6.6尺) と300cm (9.9尺) を使用していると考えられる。

遺物 (写真図版97-296)

<出土状況> P P 164の埋土から陶器片 (296) が出土している。器種は丸碗で、瀬戸美濃大窯 I 期のものである。年代は15世紀末から16世紀初めに位置付けられる。

時期・性格 中世の遺構であると考えられる。母屋的な性格を持つ建物であると推察される。

4号掘立柱建物跡 (第40図・付録図版)

遺構

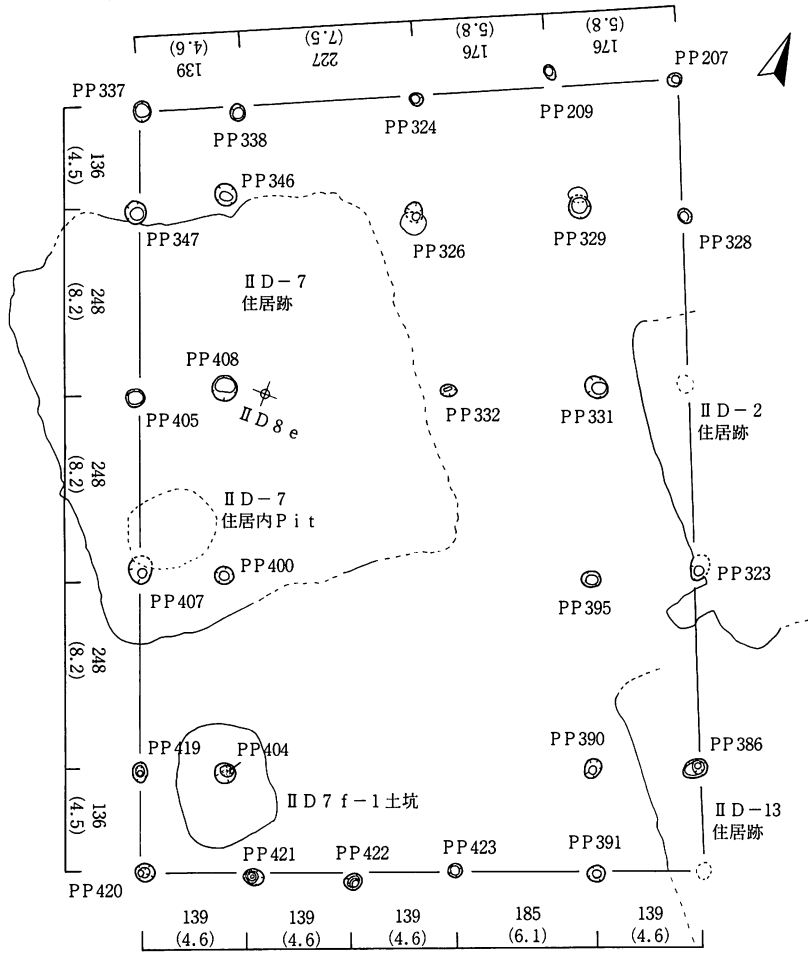
<位置・重複関係> 調査区中央平坦部東側 (郭中央南東寄り) のⅡD 6 d・e、ⅡD 7 c～f、ⅡD 8 d・eグリッド内に位置する。また、2・3号掘立柱建物跡の南東側に位置する。平面プランでは1号掘立柱建物跡と重複する。直接截り合う柱穴がなく新旧関係は不明であるが、位置・平面形式から考えて2・3号掘立柱建物跡のいずれかに付随する建物であると仮定すれば、1号掘立柱建物跡より新しい可能性がある。ⅡD-2・7・13竪穴住居跡、ⅡD 7 f-1土坑を截る。

<規模・平面形式> 桁行5間 (西側10.16m)、梁行4間 (南側7.41・北側7.18m) の建物である。面積は約74.1㎡ (22.4坪) である。身舎は桁行4間、梁行2間で、東側・西側・北側の三面に廂が付く形態を有すると考えられる。ただし、桁行の南端の柱間寸法が内側に比して短く、四面廂建物の可能性もある。間取りの詳細は不明であるが、P P 408～P P 331の梁間の列を境とし、二つの空間に分割されていたと考えられる。

<建物方位> 桁行の軸方向はN-23° -Wである。

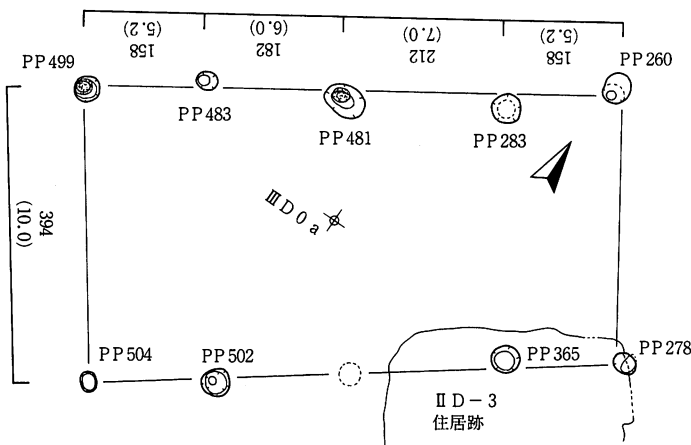
<柱間寸法> 桁行は内側が248cm (8.2尺)、両端が136cm (4.5尺)、梁行では139cm (4.6尺) と176cm (5.8尺) を主に使用していると考えられる。

4号掘立柱建物跡

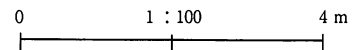


PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
337	61	172.485
347	34	172.790
405	46	172.655
407	41	172.775
419	59	172.711
420	58	172.722
338	20	172.796
346	39	172.650
408	42	172.688
400	35	172.784
404	62	172.620
421	51	172.742
209	21	172.538
329	36	172.422
331	38	172.430
395	45	172.462
390	65	172.372
391	41	172.622
207	35	172.312
328	11	172.562
323	21	172.604
386	42	172.544
324	16	172.686
326	54	172.398
332	11	172.855
422	22	172.965
423	15	172.942

5号掘立柱建物跡



PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
499	63	172.717
483	33	172.965
481	55	172.696
283	23	172.698
260	63	172.364
504	39	172.976
502	33	173.012
365	24	172.874
278	29	172.696



第40図 4・5号掘立柱建物跡

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 中世の遺構であると考えられる。位置・平面形式から考えて2・3号掘立柱建物跡のいずれかに付随する建物跡であると推察される。

5号掘立柱建物跡（第40図・付録図版）

遺構

<位置・重複関係>調査区中央平坦部北西側のⅡD9c・d、ⅢD0c・dグリッド内に位置する。ⅡD-3 竪穴住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

<規模・平面形式>桁行4間（北側7.10m）、梁行1間（西側3.94m）の建物である。面積は約28㎡（8.5坪）である。

<建物方位>梁行の軸方向はN-33°-Wである。

<柱間寸法>桁行は両端に158cm（3.2尺）、梁行は394cm（10尺）を使用していると考えられる。

遺物（写真図版101-393）

<出土状況>PP481の埋土から土師器・坏片が1点（393）出土している。

時期・性格 出土した遺物の特徴から古代に属する可能性がある。規模から小屋的な性格を持つと推察される。

6号掘立柱建物跡（第41図・付録図版）

遺構

<位置・重複関係>調査区中央平坦部北側のⅡD8b・c、ⅡD9b・cグリッド内に位置する。ⅡD-16 竪穴住居跡を載る。ⅡD9b-1土坑、1・7号掘立柱建物跡、1号柱穴列と重複するが、新旧関係は不明である。

<規模・平面形式>桁行5間（南側7.52m）、梁行3間（西側4.08m・東側3.94m）の建物である。面積は約30.2㎡（9.1坪）である。

<建物方位>梁行の軸方向はN-12°-Wである。

<柱間寸法>桁行は内側に164cm（5.4尺）、両端に130cm（4.3尺）を使用し、梁行は139cm（4.6尺）と197cm（6.5尺）を主に使用していると考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 遺構の重複関係から平安時代以降に属するものと考えられる。規模から小屋的な性格を持つものと推察される。

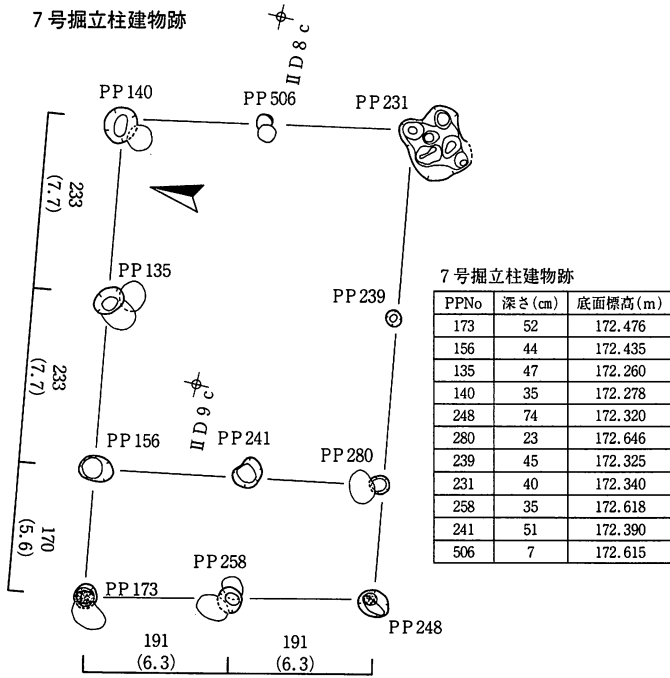
7号掘立柱建物跡（第41図・付録図版）

遺構

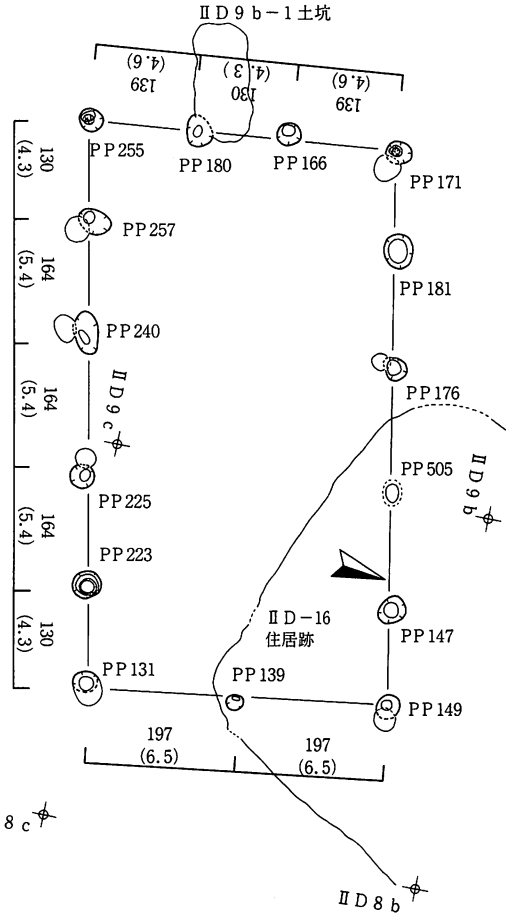
<位置・重複関係>調査区中央平坦部北側のⅡD8b・c、ⅡD9b・cグリッド内に位置する。ⅡD-16 竪穴住居跡を載る。2・6・8号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。1号柱穴列と重複する。PP173はPP172を載る可能性があり、本遺構が新しいと推察される。

<規模・平面形式>桁行3間（北側6.36m）、梁行2間（西側3.82m）の建物である。面積は約24.4㎡（7.4坪）である。桁行の西端の柱間寸法が短く、PP156～PP280の梁間の列にPP241が存在することから、

7号掘立柱建物跡



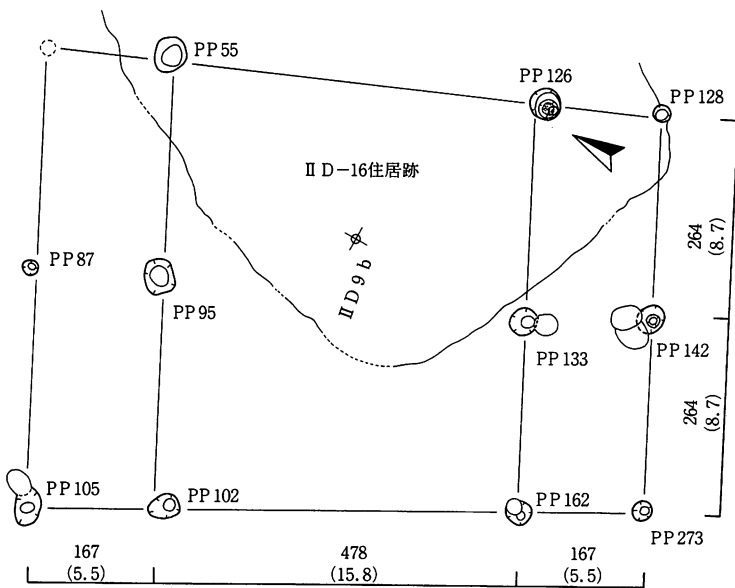
6号掘立柱建物跡



8号掘立柱建物跡

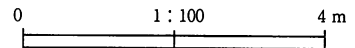
PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
105	56	172.467
102	52	172.422
162	33	172.511
273	16	172.730
55	48	172.162
126	51	172.126
128	27	172.344
87	37	172.437
95	16	172.633
133	37	172.395
142	22	172.510

8号掘立柱建物跡



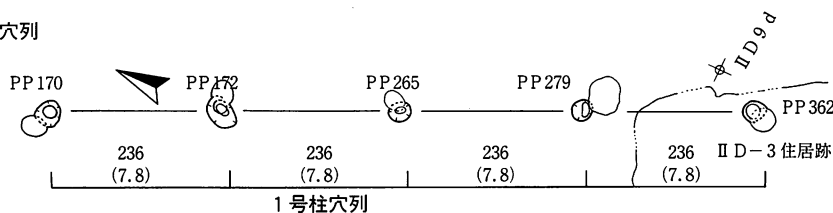
6号掘立柱建物跡

PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
171	74	172.288
181	78	172.100
176	63	172.180
505	72	172.050
147	67	171.972
149	57	171.950
255	81	172.220
257	78	172.199
240	69	172.199
225	60	172.220
223	62	172.120
131	49	172.199
166	52	172.514
180	85	172.172
139	54	172.070



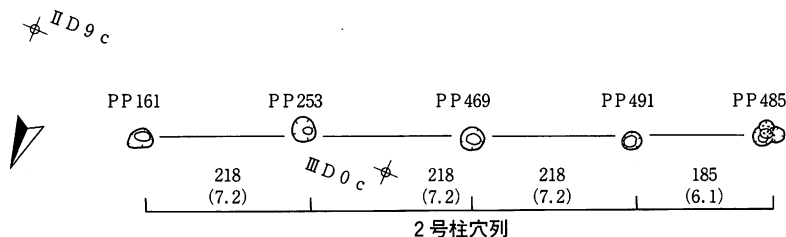
第41図 6～8号掘立柱建物跡

1号柱穴列

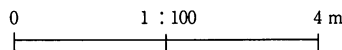


PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
170	69	172.274
172	80	172.196
265	53	172.430
279	26	172.662
362	53	172.545

2号柱穴列



PPNo	深さ (cm)	底面標高 (m)
161	28	172.600
253	46	172.558
469	27	172.960
491	53	172.697
485	50	172.787



第42図 1・2号柱穴列

西側に廂が付く形態を有するものと推察される。

<建物方位>梁行の軸方向はN-21°-Wである。

<柱間寸法>桁行は東側に233cm (7.7尺)、西端に170cm (5.6尺) を使用し、梁行は191cm (6.3尺) を使用していると考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 詳細は不明であるが、1号柱穴列を截るとすれば、中世以降に属するものと推察される。性格は、規模から考え小屋的なものであろう。

8号掘立柱建物跡 (第41図・付録図版)

遺構

<位置・重複関係>調査区中央平坦部北側のII D 8 a・b、II D 9 a・bグリッド内に位置する。II D-16 竪穴住居跡を截る。3・7号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

<規模・平面形式>桁行3間(西側8.12m)、梁行2間(南側5.28m)の建物である。面積は約46.2m²(14坪)である。北側・南側の二面に廂が付く形態を有するものと考えられる。ただし、桁行の内側の柱間寸法を考えると、PP55~PP126、PP102~PP162の間にそれぞれ一本ずつ柱が存在したことも想像される。II D-15・16竪穴住居跡のプラン内であったため、検出できなかったのかもしれない。

<建物方位>桁行の軸方向はN-23°-Wである。

<柱間寸法>桁行は内側に478cm (15.8尺)、両端に167cm (5.5尺) を使用し、梁行は264cm (8.7尺) を使用

していると考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

時期・性格 詳細は不明であるが、平安時代以降に属するものと考えられる。性格は不明である。

3. 柱穴列

平面図に付している寸法は、() のない数字の単位はcmで、() 内の数字の単位は尺である。一尺は30.3cmとして計算した。また、柱間寸法は柱穴の開口径の範囲内で任意の点を設定し、計測した。重複関係については、一部を除き直接柱穴が截り合う、あるいは截り合っていたと考えられる場合のみ言及した。平面プランのみが重複する遺構については付録図版を参照されたい。

1号柱穴列（第42図・付録図版）

遺構

<位置>調査区中央平坦部北側のⅡD9b～cグリッド内に位置する。また、1号掘立柱建物跡の西側に近接している。ⅡD-3 竪穴住居跡を截る。6号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。2・7号掘立柱建物跡より古い可能性がある。

<規模・構造・方向>柱穴5個を検出した。総長は9.44mである。軸線方向はN-26°-Wである。柱間寸法は、236cm（7.8尺）である。

遺物 遺物は出土していない。

時期・性格 中世に属する可能性がある。位置・軸線方向から1号掘立柱建物跡に付随する施設である可能性がある。

2号柱穴列（第42図・付録図版）

遺構

<位置>調査区中央平坦部北側のⅡD9b・c、ⅢD0cグリッド内に位置する。

<規模・構造・方向>柱穴4個を検出した。総長は8.39mである。軸線方向はE-23°-Nである。柱間寸法は、218cm（7.2尺）を多用している。

遺物 遺物は出土していない。

時期・性格 時期・性格共に不明である。

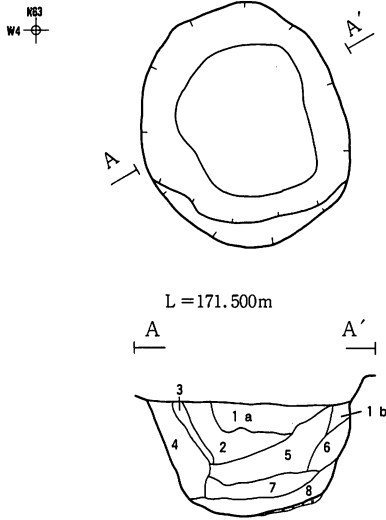
4. 土坑類

ⅡC5h-1土坑（第43図、写真図版47）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡC5hグリッド内に位置する。Ⅳ層上面で、黒～黒褐色土の楕円形の広がりとして検出された。ⅡC-1 竪穴住居跡と重複する。本遺構が新しい。

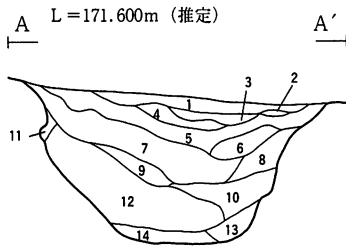
ⅡC5h-1土坑



ⅡC5h-1土坑 A-A'

- 1 a. 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締り無し 黄褐色ロームブロック3%
- 1 b. 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性中 締り無し 黄褐色ロームブロック7%
2. 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性中 締り無し
3. 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性弱 締り無し におい黄褐色砂質土との混合土
4. 10YR2/1 黒 シルト 粘性強 締り無し
5. 10YR2/2-2/3 黒褐 シルト 粘性中 締り無し
6. 10YR4/4 褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り無し 褐色土との混合土
7. 10YR2/1 黒 シルト 粘性中 締り無し
8. 10YR3/3 暗褐 シルト 粘性有り 締り無し

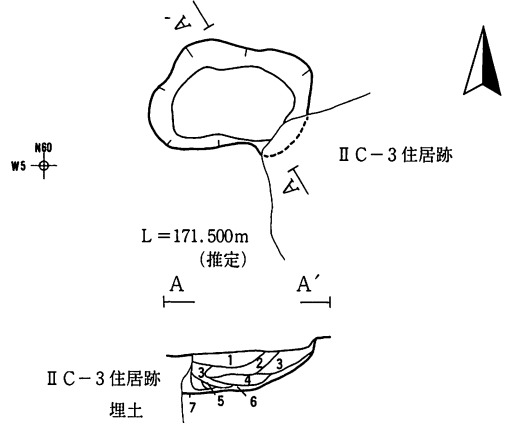
ⅡC5h-3土坑 (平面図なし)



ⅡC5h-3土坑 A-A'

1. 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り有り To-Ch7% 黄褐色バミス (To-Nb?) 1% 炭化物1%
2. 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り有り To-Ch5% 炭化物粒1%
3. 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り有り To-Ch10% 炭化物粒1%
4. 10YR4/3 におい黄褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り To-Ch5% 黒褐色土 (シミのように) 3% 混入 炭化物2%
5. 10YR3/3 暗褐 シルト 粘性やや有り 締り有り To-Ch5% To-Nb1% 炭化物2%
6. 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く To-Ch3% 炭化物5%
7. 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや有り To-Ch2% To-Nb1% To-Hブロック (径2~5mm) 7% 炭化物2%
8. 10YR3/3 暗褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く 褐色土(地山)粒50%
9. 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く To-H1% To-Nb1%
10. 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り欠く 黄褐色土(地山)ブロック (径5~20mm) 5% におい黄褐色砂質土ブロック (径5~20mm) 3%
11. 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く To-Ch3%
12. 10YR3/1 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く 褐色土(地山)粒3%
13. 10YR3/2 黒褐 シルト におい黄褐色砂質シルトとの混合土 褐色土(地山)粒3%
14. 10YR3/2 黒褐 シルト主体 黄褐色土(地山)ブロック (径5~20mm) 含む 10YR3/1 黒褐色土ブロック (径20mm) 3%

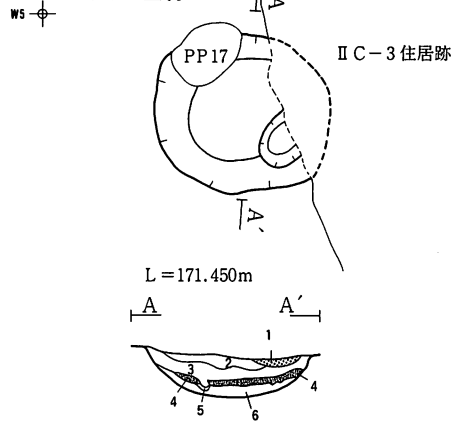
ⅡC5h-2土坑



ⅡC5h-2土坑 A-A'

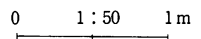
1. 10YR2/1 黒 粘性弱 締り微弱 To-Cu1% To-H粒(径10mm以下) 1%
2. 10YR2/3 黒褐 粘性弱 締り弱 To-Cu1%
3. 10YR1.7/1 黒 粘性中 締り中 黒褐色土霏状に20% To-Nb1%
4. 10YR2/2 黒褐 粘性弱 締り微弱 To-Nb細片2%
5. 7.5YR4/6 褐 粘性中 締り強 焼土(異地性)
6. 7.5YR2/2 黒褐 粘性弱 締り中 5層の焼土粒 (径5mm以下) 3% 炭化物粒 (径10mm以下) 3%
7. 10YR3/2 黒褐 粘性弱 締り中 明黄褐色砂質土ブロック (径50mm以下) 2% 褐色焼土粒2%

ⅡC5i土坑



ⅡC5i土坑 A-A'

1. 10YR4/6 明黄褐 ローム主体 粘性やや有り 締り無し 黒褐色土30% 焼土ブロック20%
2. 10YR2/1 黒 シルト 粘性やや有り 締り無し 褐色土混入
3. 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性やや有り 締り無し
4. 10YR8/2 灰白 ローム 粘性無し 締り無し (ほそほそ) To-a・白頭山苦小牧火山灰
5. 10YR6/6 明黄褐 砂質ローム 粘性無し 締り無し 地山ブロック
6. 10YR2/1 黒 シルト 粘性有り 締り中 黄褐色砂質土少量混入



第43図 ⅡC5h-1, 2, 3土坑・ⅡC5i土坑

<規模・形態>開口部径163.5cm×135cm、底部径103.5cm×87.5cm、深さは87.5cmである。平面形は楕円形である。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はIV層中に構築されている。

<埋土>上位～中位にかけては黒～黒褐色土が主体である。上位は黄褐色土ブロックを含む。下位には暗褐色土が堆積している。人為堆積の可能性はある。

遺物 (第101図298～300、写真図版97)

<出土状況>土師器1点と須恵器2点が出土している。

<土師器>出土した1点(298)は非ロクロ使用成形された小型品の口縁部破片である。内外面ともヘラナデ調整され口縁部が頸部から短く強く外反し、体部は直立気味となる器形らしい。

<須恵器>299は坏の体部破片、300は壺か瓶の頸部の小破片である。ともにロクロ使用成形されている。

時期 出土した遺物がいずれも平安時代に属することから平安時代に属すると考えられる。

ⅡC5h-2土坑 (第43図、写真図版47)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡC5hグリッド内に位置する。IV層上面で検出された。ⅡC-1 竪穴住居の炉跡を截り、ⅡC-3 竪穴住居跡に截られる。

<規模・形態>開口部径111.5cm×70cm、底部径80cm×50cm、深さは36cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面はIV層中に構築されている。

<埋土>上位～中位にかけては黒～黒褐色土が主体である。下位には焼土及び焼土粒を含む黒褐色土が堆積している。ⅡC-1 竪穴住居跡の炉埋土が流れ込んだものであろうか。

遺物 (第101図301～303、写真図版97)

<出土状況>土師器1点と縄文土器が1点、弥生土器1点出土している。

<土師器>土師器の1点(301)は非ロクロ使用成形の体部下端～底部の一部を残存するが、体部は内面ナデ、外面には縦や横方向のケズリ調整があり、底面には木葉痕が付着する。

<縄文土器>303は器表にLR横回転による斜行縄文のみを付す体部の破片であり、器種は鉢もしくは深鉢と推定され中期頃の特徴を持つ。

<弥生土器>302は付加条によるLR横回転単節斜行縄文を付す鉢か深鉢の体部破片であり、中期的な特徴を持つ。

時期 平安時代の非ロクロ成形土師器を含むことから、平安時代に属する可能性が強い。

ⅡC5h-3土坑 (第43図、写真図版47)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡC5hグリッド内に位置する。IV層上面で検出された。ⅡC-1 竪穴住居跡と重複する。本遺構が新しい。

<規模・形態>開口部径202cm、底部径85cm、深さは108cmである。調査の不便により、平面図がないため、測定値は断面図を基に測定した値である。平面形は楕円形である。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はIV層中に構築されている。

<埋土>黒褐色土と暗褐色土が主体の埋土である。最下層には黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が堆積している。最下層を除き、自然堆積と考えられる。

遺物 (第101図304、写真図版97)

<出土状況>須恵器が1点出土している。

<須恵器>304はロクロ使用成形された長頸瓶の頸部破片である。

時期 須恵器の特徴から平安時代に属すると推察される。

ⅡC5i土坑 (第43図、写真図版47)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡC5iグリッド内に位置する。Ⅳ層上面で検出された。ⅡC-3 竪穴住居跡・PP17と重複する。PP17より旧く、ⅡC-3 竪穴住居跡より新しい。

<規模・形態>開口部径127cm×〔107〕cm、底部径〔74〕cm×〔60〕cm、深さは35cmである。平面形はほぼ円形である。壁は外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面はⅣ層とⅡC-3住居跡埋土中に構築されている。

<埋土>黒～黒褐色土主体である。最上位には焼土ブロックを含む明黄褐色土が堆積し、中位には白頭山苦小牧火山灰に由来する火山ガラスと十和田a降下火山灰のレンズ状堆積が認められた。

遺物 (第101図305～307、写真図版97)

<出土状況>土師器1点、縄文土器1点、弥生土器1点が出土している。

<土師器>非ロクロ使用成形され内面ナデ、外面がヘラケズリ調整された体部破片(305)が出土している。

<縄文土器>器表にLR横回転による単節斜行縄文を付す時期不明の体部破片(306)が出土している。

<弥生土器>付加条にLR横回転による単節斜行縄文を付す体部破片(307)である。

時期 非ロクロ成形の甕は平安時代の特徴であり、当遺構は平安時代に位置づけられようか。

ⅡC6h土坑 (第44図、写真図版67)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡC6hグリッド内に位置する。ⅡC-1 竪穴住居跡の埋土を掘削中に東側壁付近で検出された。ⅡC-1 竪穴住居跡を截る。

<規模・形態>開口部径98cm、底部径82cm、深さは21cmである。調査の不便により、平面図がないため、測定値は断面図を基に測定した値である。平面形は略円形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はⅡC-1 竪穴住居跡埋土中に構築されている。

<埋土>単層で、暗褐色土ブロックを含む黒色土が堆積していた。

遺物 出土遺物はない。

時期 遺物の出土がないため不明である。

ⅡC6i土坑 (第44図、写真図版48)

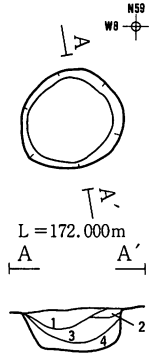
遺構

<検出状況・重複関係>ⅡC6iグリッド内に位置する。Ⅱ層下面で検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径72cm×63cm、底部径57cm×51.5cm、深さは31cmである。平面形はほぼ円形である。壁はやや外傾して立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面はⅣ層中に構築されている。

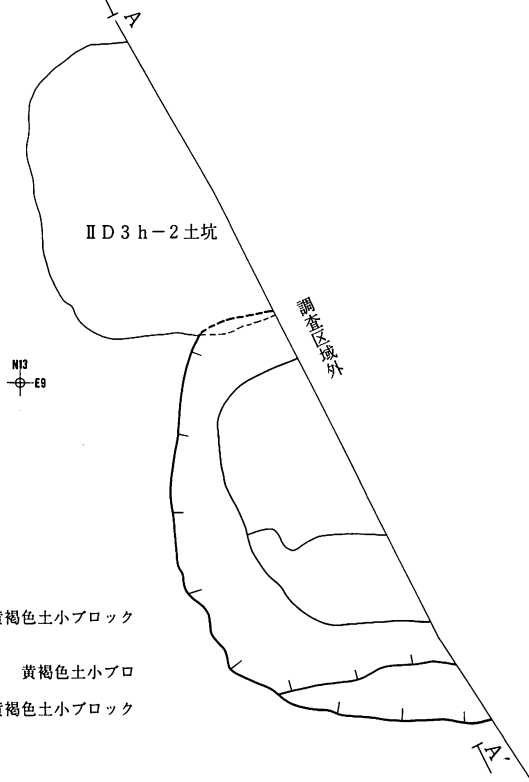
<埋土>黄褐色ブロックを含む黒褐色土が主体である。

II C 6 i 土坑



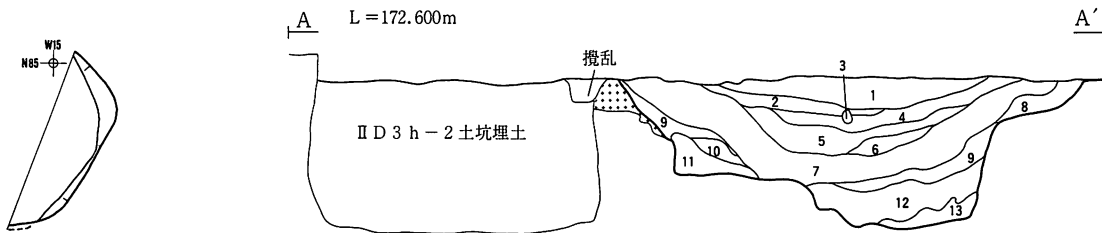
- II C 6 i 土坑 A-A'
- 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く 黄褐色土小ブロック 5% 黒褐色土混入
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性有り 締りやや欠く
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締りやや欠く 黄褐色土小ブロック 3%
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや欠く 締り欠く 黄褐色土小ブロック (径1~5mm) 1%

II D 2 h 土坑

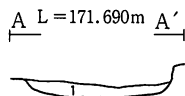


II D 3 h-2 土坑

II C 7 d 土坑 (断面図なし)



II C 6 h 土坑 (平面図なし)



- II C 6 h 土坑 A-A'
- 10Y R2/1 黒 シルト 粘性有り 締りやや欠く 暗褐色土ブロック 3%

- II D 2 h 土坑 A-A'
- 2.5Y R6/4 におい黄 粘性無し 締り中 砂質火山灰土層 (T o - a)
 - 10Y R3/1 黒褐 粘性無し 締り疎 T o - a 混入
 - 2.5Y R6/4 におい黄 粘性無し 締り疎 砂質火山灰土 (T o - a) ブロック
 - 10Y R3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 T o - a 少量混入
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 T o - a 混入
 - 10Y R3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 T o - a 極少量混入
 - 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土少量混入
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 黄色パミス少量混入
 - 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄色パミス少量混入
 - 10Y R4/6 褐 粘性無し 締りやや疎 黒色土混入
 - 10Y R5/6 黄褐 粘性無し 締りやや疎 黒色土少量混入
 - 10Y R4/4 褐 粘性無し 締り中 黄褐色土・灰白色土ブロック混入
 - 10Y R6/3 におい黄橙 粘性無し 締り中 灰白色土混入

0 1:50 1m

第44図 II C 6 h・II C 6 i・II C 7 d・II D 2 h 土坑

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ C 7 d 土坑 (第44図、写真図版48)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ C 7 d グリッド内に位置する。Ⅳ層上面で検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>西側は調査区域外にかかるため、全体形状は不明であるが、楕円形を呈するものと推測される。開口部径〔125〕cm、底部径〔123〕cm、深さは〔50〕cmである。壁は南側の一部が内傾して立ち上がるのを除き、外傾する。断面形は、断面図がないため断定できないが、筒状を呈するものと考えられる。底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>記録がないため不明である。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ D 2 h 土坑 (第44図、写真図版48)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 2 h グリッド内に位置する。Ⅱ層中で検出された。Ⅱ D 3 h - 2 土坑に截られると推察される。

<規模・形態>東半が調査区域外にかかるため、全体形状は不明だが、不整な方形あるいは長方形を呈するものと考えられる。開口部径〔322.5〕cm、底部径〔192〕cm、深さは〔105〕cmである。壁の下部はほぼ直立し、上部は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土の堆積状況から判断し、壁の上部は崩落したものと考えられる。底面はⅣ層中に構築されている。底面に34cm程の段差があるが、埋土の堆積状況から判断し、使用時は平坦な状態で、高い面を使用していたと考えられる。

<埋土>最上位において十和田 a 降下火山灰のレンズ状堆積が確認されている。上位はT o - a の混入する黒褐色土が主体である。中位には黄褐色土の混入する黒褐色土が堆積し、壁付近には地山の崩落土が堆積している。下位の12・13層は底面を平らにするために埋め戻した土と考えられる。

遺物 (第101図308~310、写真図版97)

<出土状況>弥生土器が3点出土している。

<弥生土器>器表にL R 縦回転 (310) や0段多条L R 横回転 (309) による単節斜行縄文、R L 斜めや縦回転 (308) による単節斜行縄文を付す体部と体部上位の破片である。内面調整がナデであることや縄文の特徴から弥生土器と推定される。

時期 弥生時代に属する遺物が出土しているが、T o - a の堆積状況から奈良時代に属すると考えられる。

Ⅱ D 2 i 土坑 (第45図、写真図版48)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 2 i グリッド内に位置する。Ⅳ層上面で検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径130cm×90cm、底部径115cm×78cm、深さは27cmである。平面形は長方形に近い楕円形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>上位には焼土粒を含む黒褐色土が堆積し、下位には灰を含む黒褐色土が堆積している。

遺物 (第101図311、写真図版98)

<出土状況>土師器が1点(311)が出土している。

<土師器>ロクロ使用成形された内面黒色処理のない赤焼き坯の口縁部破片である。

時期 出土した土師器の様相から平安時代に属すると推察され、焼成に関わる遺構であろうか。

Ⅱ D 2 j 土坑 (第45図、写真図版49)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 2 j グリッド内に位置する。Ⅳ層上面で検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径204cm×185cm、底部径198cm×184cm、深さは66cmである。平面形はほぼ円形である。壁は、部分的に若干内傾するが、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面はⅣ層中に構築されており、平坦である。

<埋土>にぶい黄橙色土ブロック・浅黄橙色土ブロック・褐色土ブロック等を含む暗褐色土・黒褐色土が主体である。人為堆積と考えられる

遺物 (写真図版98-312・313)

<出土状況>土師器が2点(312・313)出土している。

<土師器>2点ともロクロ使用成形され内面ミガキ後黒色処理された坯の体部下位と底部の破片であり、底部は回転糸切り離し無調整らしい。

時期 平安時代に属するであろう。

Ⅱ D 3 g-1 土坑 (第45図、写真図版49)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 3 g グリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、重複する2棟の竪穴住居跡のプランを載る形で検出された。検出した土坑プランは2基が載り合っている様相を呈しており、北側をⅡ D 3 g-1 土坑として登録した(その後3基の載り合いであることが判明)。プランは比較的明瞭だった。Ⅱ D-9・10竪穴住居跡、Ⅱ D 3 g-2・3 土坑と重複する。新旧関係は、古い順に並べると、Ⅱ D-10住居→Ⅱ D-9住居→Ⅱ D 3 g-3 土坑→Ⅱ D 3 g-2 土坑→Ⅱ D 3 g-1 土坑となる。

<規模・形態>壁の南半部が崩落していたため、全体形状は不明瞭であるが、概ね円形を呈すると考えられる。開口部径180cm×(176)cm、底部径(165)cm×157cm、深さは63cmである。壁は、北東部分のみ残存し、床からほぼ垂直に立ち上がる。断面形は筒状を呈していたと考えられる。底面は平坦で、Ⅴ層に相当する。

<埋土>断面A-A'の1~20層が本遺構の埋土で、21~27層がⅡ D 3 g-2 土坑の埋土と考えられる。19・20層は壁の崩落土(Ⅱ D 3 g-2 土坑埋土)であろう。1~18層はブロックを含む混合土主体の土で構成されており、人為堆積の様相を呈する。

遺物 (写真図版98-314・315)

<出土状況>土師器が2点(314・315)出土している。

<土師器>314はロクロ使用成形内面ミガキ後黒色処理の坯体部小破片であり、315は非ロクロ使用成形され内面ミガキ後黒色処理、外面ヨコナデ調整され、体部外面に明瞭な段を持つ個体である。

時期 出土した遺物には二時期のものを含むが、埋土の特徴から流れ込みと思われ、時期は特定できない。

Ⅱ D 3 g-2 土坑 (第45図、写真図版49)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 3 g グリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、重複する2棟の竪穴住居跡のプランを截る形で検出された。検出した土坑プランは2基が截り合っている様相を呈しており、南側をⅡ D 3 g-2 土坑として登録した(その後3基の截り合いであることが判明)。プランは、住居跡埋土との判別が付け難く、明確にはつかめなかった。Ⅱ D-9・10竪穴住居跡、Ⅱ D 3 g-1・3 土坑と重複する。新旧関係は、Ⅱ D 3 g-1 土坑の<重複関係>を参照されたい。

<規模・形態>北半部がⅡ D 3 g-1 土坑によって壊されているため、全体形状は不明瞭であるが、円形あるいは楕円形を呈するものと考えられる。開口部径 [140] cm、底部径 [131] cm、深さは76cmである。壁は、南半部のみ残存する。やや外傾ぎみに立ち上がり、開口部では緩やかに外傾して開く。また、東側の壁はやや内傾して立ち上がる。底面は平坦で、Ⅳ層に相当する。

<埋土>断面A-A'の21~27層が本遺構の埋土と考えられる。断面B-B'においては本遺構の埋土とⅡ D 3 g-3 土坑埋土が区別しがたく、北西側の壁の立ち上がりは確認できなかった。埋土の主体は灰白色土ブロック・にぶい黄橙色土ブロック等を含む混合土が主体であり、人為堆積の可能性がある。また、断面B-B'の17層は貼床の可能性がある。構築時にⅡ D 3 g-3 土坑を塞いだのであろうか。

遺物 (第101図316~318、写真図版98)

<出土状況>土器2点と石器1点が出土している。

<土師器>土師器の2点には坏1点(317)と甕1点(316)がある。坏はロクロ使用成形され内面黒色処理のない赤焼きであり、甕は非ロクロ使用成形され体部が球胴形に膨らむ器形である。口縁部を欠失し、体部は内外面ともヘラナデやヘラミガキ調整されている奈良時代型の甕である。

<石器>長楕円形で断面扁平な河川礫の平坦面を使用した台石あるいは砥石(318)である。この石器は縄文時代の遺物であろう。

時期 出土した土師器の特徴は奈良・平安時代であるが、埋土の特徴から流れ込みであると考えられ、時期は特定できない。

Ⅱ D 3 g-3 土坑 (第45図、写真図版49)

遺構

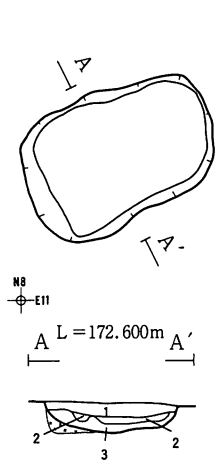
<検出状況・重複関係>Ⅱ D 3 g グリッド内に位置する。Ⅱ D 3 g-1 土坑の底面において、黄褐色土と暗褐色土の混合土の広がりを確認し、その西側にさらにもう1基の土坑が重複していることが判明したため、Ⅱ D 3 g-3 土坑として登録した。Ⅱ D-9・10竪穴住居跡、Ⅱ D 3 g-1・2 土坑と重複する。新旧関係は、Ⅱ D 3 g-1 土坑の<重複関係>を参照されたい。

<規模・形態>東半部の壁の上部を遺構埋土として掘削してしまったため、上部についてははっきりとわからないが、底面から判断すると、平面形は円形を呈していたと考えられる。開口部径(170)cm×150cm、底面径175cm×165cm、深さは98cmである。壁は、西半部のみ残存する。西側は内傾して立ち上がるが、埋土断面と東側の壁の残存部の立ち上がり方から判断すると、断面形は筒状を呈していたと考えられる。底面は平坦で、Ⅴ層に相当する。

<埋土>本遺構の埋土と断定し得るのは、断面B-B'の10・11層のみである。人為堆積の可能性がある。

遺物 (第102図319・320・322、写真図版98-319~322)

II D 2 i 土坑

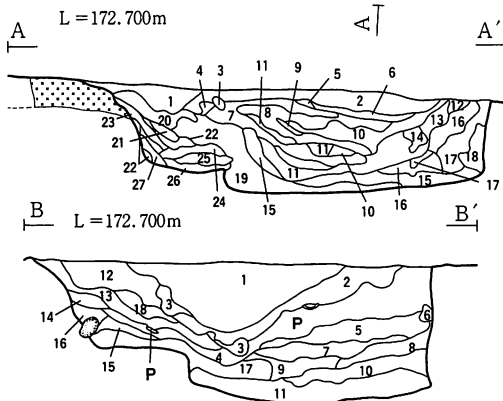
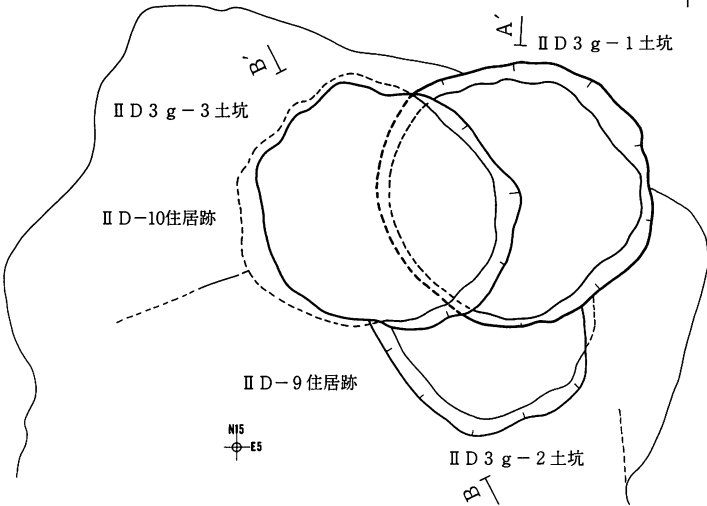


- II D 2 j 土坑 A-A'
- 10Y R3/4 暗褐 粘土質シルト 粘性やや有り 締りやや有り にぶい黄橙、黄橙色土小ブロック含む
 - 10Y R4/6 褐 粘土質シルト 粘性有り 締りやや有り にぶい黄橙、黄橙、浅黄橙色土中ブロック含む
 - 10Y R2/3 黒褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り 褐色土小ブロック含む
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締り有り 褐色土との混合土
 - 10Y R3/3 暗褐 粘土質シルト 粘性有り 締り有り にぶい黄橙色ブロック・褐色土小ブロック含む
 - 10Y R4/6 黒褐 粘土質シルト 粘性有り 締りやや有り 浅黄橙、褐色土小ブロック含む
 - 10Y R2/3 黒褐 粘土質シルト 粘性有り 締りやや有り にぶい黄橙色土ブロック含む 褐色土・黒色土細粒含む
 - 10Y R6/4 にぶい黄橙 粘土質シルト 粘性やや有り 締りあまり無し 黒褐色土粒微量
 - 10Y R3/3 暗褐 粘土質シルト 粘性有り 締り有り にぶい黄褐、褐色土小ブロック含む
 - 10Y R3/4 暗褐 粘土質シルト 粘性有り 締り有り にぶい黄橙、褐色土ブロックを全体に含む
 - 10Y R3/2 黒褐 粘土質シルト 粘性有り 締り有り 褐色土粒・にぶい黄橙色土粒・黒色土粒の混合土
 - 10Y R4/4 暗褐 粘土質シルト 粘性有り 締りなし 黒褐色土粒を含む(地山崩落土)
 13. 注記なし

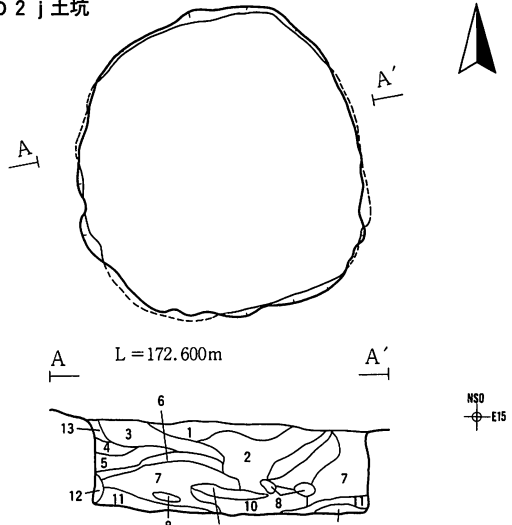
II D 2 i 土坑 A-A'

- 10Y R2/2 黒褐 粘土質シルト 粘性やや有り 締りやや有り 橙色焼土粒1%
- 10Y R3/2 黒褐 シルト 粘性無し 締り無し 灰を主体とする
- 10Y R2/2 黒褐 粘土質シルト 粘性やや有り 締りあまり無し 灰微量

II D 3 g-1、2、3 土坑



II D 2 j 土坑



II D 3 g-1・2・3 土坑 A-A'

- 10Y R3/2 黒褐 黄橙色土ブロック3% 灰白色土ブロック1% T o-aブロック5% 焼土・炭化物微細粒微量
- 10Y R3/2 黒褐(70%) 黄橙色土(30%)との混合土 T o-a小ブロック1% T o-Nb微小粒微量 T o-C h1%
- 10Y R6/6 明黄褐 粘土質シルト
- 10Y R4/3 にぶい黄褐 黄橙色土ブロック微量
- 10Y R4/2 灰黄褐
- 10Y R3/2 黒褐 焼土小ブロック微量
- 10Y R3/2 黒褐 焼土小ブロック1% 黄橙色土小ブロック2% T o-C h1% T o-Nb微量
- 2.5Y3/2 黒褐 浅黄橙色土ブロック5% 焼土小ブロック極微量 T o-a小ブロック1% T o-C h3%
- 5Y3/1 オリーブ黒~2.5Y3/2黒褐
- 10Y R6/4 にぶい黄橙(80%) 黒褐色土(15%)・オリーブ黒色土(5%)との混合土
- 10Y R2/2 黒褐 シルト
- 10Y R3/2 黒褐(70%) 浅黄橙色土ブロック微量 T o-Nb微小粒微量
- 10Y R6/4 にぶい黄橙(60%) オリーブ黒色土(40%)との混合土 T o-a小ブロック極微量 T o-C h3%
- 10Y R3/1 黒褐 黄橙色土小ブロック1%
- 10Y R2/3 黒褐
- 10Y R4/3 にぶい黄褐(40%) 明黄褐色土(60%)との混合土
- 7.5Y R2/3 極暗褐(50%) 黒色土(25%)・暗褐色土(25%)との混合土
- 10Y R4/6 褐 粘土質シルト 黒色土ブロック微量(地山崩落土?)
- 10Y R4/3 にぶい黄褐 黄橙色土小ブロック3% 灰白色土小ブロック1% T o-Nb微小粒1% T o-C h3%
- 10Y R4/2 灰黄褐 黄橙色土小ブロック5% T o-C h3%
- 10Y R5/3 にぶい黄褐(70%) 浅黄橙色土(30%)との混合土 炭化物小粒微量 T o-C h微量
- 10Y R4/3 にぶい黄褐 T o-Nb小粒微量
- 10Y R5/3 にぶい黄褐(60%) 浅黄褐色土(40%)との混合土 T o-aブロック3%
- 10Y R2/1 黒 明黄褐色土小ブロック3%
- 10Y R7/4~7/6 にぶい黄褐~明黄褐 粘土
- 10Y R4/3 にぶい黄褐(60%) 黒褐色土(40%)との混合土
- 10Y R7/8 黄橙 粘土質シルト(地山崩落土?)

B-B'

- 10Y R3/4 褐 黄橙色土小ブロック3% 灰白色土(T o-a)小ブロック1%
- 10Y R4/3 にぶい黄褐(60%) 灰白(T o-a)、浅黄褐色土小ブロック(40%)との混合土
- 10Y R3/2 黒褐
- 10Y R3/3 暗褐 灰白色土(T o-a)小ブロック1% 浅黄褐色土小ブロック微量
- 10Y R4/1 褐灰 にぶい黄褐色土(T o-O f)ブロック5%
- 10Y R7/8 黄橙 粘土質シルト T o-O f 地山崩落土
- 10Y R3/3 暗褐 にぶい黄褐色土(T o-O f)ブロック7% 明黄褐色土(T o-H)ブロック5%
- 10Y R4/1 褐灰
- 10Y R3/1 黒褐 にぶい黄褐色土(T o-O f)ブロック3%
- 10Y R3/3 暗褐 にぶい黄褐色土ブロック7% 明黄褐色土ブロック40%
- 10Y R2/1~2/2 黒~黒褐
- 10Y R5/2 灰黄褐 にぶい黄褐色土ブロック極微量
- 10Y R4/2 灰黄褐 灰白色土微小ブロック1%
- 10Y R4/4 褐 黄褐色土(T o-H)小ブロック3% 地山崩落土
- 10Y R5/6 黄褐 粘土質シルト(T o-H?) 地山崩落土?
- 10Y R3/1 黒褐
- 10Y R8/2~8/3 灰白~浅黄橙 T o-O f?

0 1:50 1m

第45図 II D 2 i・II D 2 j・II D 3 g-1, 2, 3 土坑

<出土状況>土師器3点と石器1点が出土している。

<土師器>319はロクロ使用成形内面黒色処理の無い赤焼き坏、320はロクロ使用成形内面黒色処理の無い赤焼き台付き皿、321はロクロ成形内面黒色処理、内面ミガキ調整を施された坏口縁部片である。

<石器>322は欠損した長楕円形で断面扁平な河川礫の側面を使用した磨石であるが、この石器は縄文時代の遺物と考えられる。

時期 出土した土師器は10世紀代に属するが、埋土の特徴から流れ込みと思われ、遺構の時期は特定できない。

ⅡD3g-4土坑 (第46図、写真図版50)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD3gグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>東半が調査区域外にかかるため、全体形状は不明だが、概ね円形を呈すると考えられる。開口部径〔98〕cm、底部径〔88〕cm、深さは〔45〕cmである。北側の壁はほぼ直立して立ち上がるが、南側は若干内傾して立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で、Ⅳ層中に相当する。

<埋土>黒褐色土主体の埋土である。最上位には焼土粒が混入し、上位～下位にかけては黄褐色土が混入する。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

ⅡD3h-1土坑 (第46図、写真図版50)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD3hグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、黒褐色土・黄橙色土・浅黄橙色土の混合土の不整な円形の広がり、径20～30cmの1個の円礫が埋まった状態で検出された。ⅡD-9 竪穴住居跡と重複する。位置的には住居跡を截る可能性が高いが、新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径76cm×75cm、底部径65cm×46cm、深さは29cmである。平面形は不整な円形である。壁は、西側は緩やかに外傾して立ち上がるが、他の部分は掘り過ぎのため不明である。断面形は皿状を呈していたものと考えられる。底面はⅣ層及びⅡD-9 竪穴住居跡埋土中に構築されている。

<埋土>5層に細分される。混合土を主体とし、人為的に埋められた可能性が高い。

遺物 (第102図323～325、写真図版98)

<出土状況>土師器2点と須恵器1点が出土している。

<土師器>坏1点(323)と小型鉢1点(324)がある。坏はロクロ使用成形内面黒色処理のない赤焼きであり、小型鉢は非ロクロ使用成形され、体部が直線的に外傾し口縁部の内面が強く外削ぎされる器形である。輪積み痕を残し口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデやヘラミガキ調整される。

<須恵器>325は甕の体部破片で内面ヨコナデ、外面縦ヘラケズリ調整される。

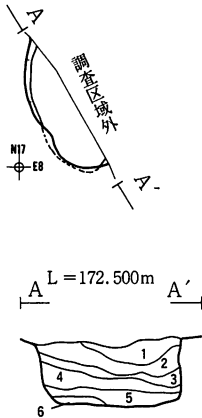
時期 323・325の出土により、平安時代と推測される。

ⅡD3h-2土坑 (第46図、写真図版50)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD2～3hグリッド内に位置する。Ⅱ層中で検出された。ⅡD2h土坑と重複す

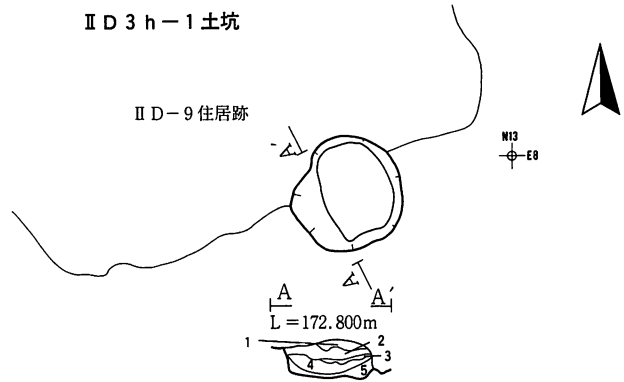
II D 3 g-4 土坑



II D 3 g-4 土坑 A-A'

1. 7.5YR3/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 焼土粒混入
2. 10YR3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土・炭化物疎らに混入
3. 10YR3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土少量混入
4. 10YR3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土小ブロック混入
5. 10YR3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土少量混入
6. 10YR3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土小ブロック混入

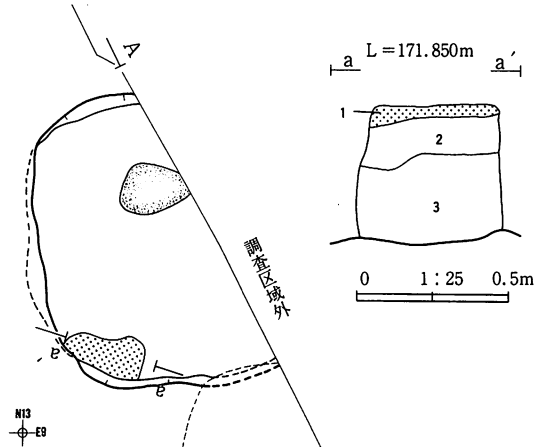
II D 3 h-1 土坑



II D 3 h-1 土坑 A-A'

1. 10YR3/1 黒褐
2. 10YR8/6 黄橙 (55%) 浅黄橙色土 (45%) との混泥土
3. 10YR2/2 黒褐
4. 10YR4/6 褐 黄橙色土小ブロック1% 橙色焼土小ブロック3%
5. 10YR6/8 明黄褐 地山 (掘り過ぎ)

II D 3 h-2 土坑



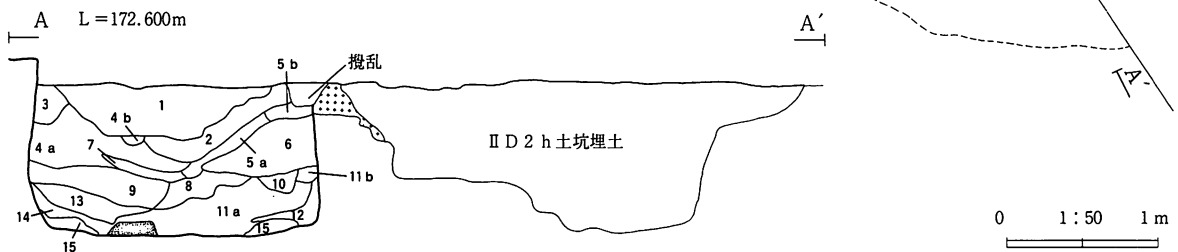
II D 3 h-2 土坑 A-A'

1. 10YR4/3 にぶい黄褐 粘性無し 締りやや疎 黒褐色土と黄褐色土の混合層
2. 10YR5/6 黄褐 粘性無し 締りやや疎 黒褐色混入
3. 10YR2/2 黒褐 粘性無し 締り中 灰白色土少量混入
- 4 a. 10YR3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 灰白~黄色土ブロック混入
- 4 b. 10YR2/3 黒褐 粘性無し 締り中 黄色土少量混入
- 5 a. 10YR3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土ブロック混入
- 5 b. 10YR3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土ブロックやや多く混入
6. 10YR3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 灰白~黄色土ブロック混入
7. 10YR3/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土少量混入
8. 10YR4/2 灰黄褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土と黒色土の混合層
9. 10YR5/4 にぶい黄褐 粘性無し 締りやや疎 灰白色土ブロック混入
10. 10YR3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 灰白色土ブロック混入
- 11 a. 10YR4/4 褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土・灰白色土・黒色土の混合層
- 11 b. 10YR3/1 黒褐 粘性無し 締りやや疎 11 a 層より灰白色土少し多く含む
12. 10YR2/1 黒 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土混入
13. 10YR5/6 黄褐 粘性無し 締りやや疎 黒色土・灰白色土混入
14. 10YR5/6 黄褐 粘性無し 締りやや疎 黒色土ブロック混入
15. 10YR3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 黒色土ブロック混入

a-a'

1. 5YR4/6 赤褐 焼土主体 粘性有り 締りやや弱 黒褐色土20%
2. 10YR2/2 黒褐 シルト主体 粘性有り 締り中 黄褐色粘質土ブロック30%
3. 10YR2/3 黒褐 シルト主体 粘性有り 締り中 黄褐色粘質土30%

II D 3 h-2 土坑



第46図 II D 3 g-4・II D 3 h-1, 2 土坑

る。新旧関係は不明である。

<規模・形態>東半が調査区域外にかかるため、全体形状は不明だが、不整な方形を呈すると考えられる。開口部径〔200〕cm、底部径〔189〕cm、深さは〔110〕cmである。壁の西側は若干内傾して立ち上がるが、その他はほぼ直立して立ち上がる。断面形は概ね筒状を呈する。底面はⅣ層中に構築されており、中央北寄りの部分では径45cmの礫が1個検出されている。

<埋土>上位は黒褐色土と黄褐色土の混合土で構成され、中位～下位にかけては灰白色土ブロック・黄褐色土ブロック等の混入する黒褐～暗褐色土主体の土で構成される。南西側の壁際の底面から約45cm上の面で54×30cm・厚さ4～7cmの焼土層が認められた。

遺物（第103図326～329、写真図版99）

<出土状況>土師器2点、中世陶器1点、石器1点が出土している。

<土師器>坏1点（326）と甕1点（328）がある。坏はロクロ使用成形ミガキ後内面黒色処理、底部回転切り離し無調整であり、甕は非ロクロ使用成形され、体部下位と底部のみを残存する。後者は内面がヘラケズリやヘラナデ、外面はヘラケズリ調整され、底部がベタ高台状をなす奈良型甕である。

<中世陶器>327は壺の肩部の破片で、胎土に海面骨針を多く含む。輪積み痕を明瞭に残し内面はヨコナデ、外面は縦方向のナデやミガキ調整される。色調が赤く在地産と推測されるが、産地不詳である。

<石器>329は凝灰岩を使用した砥石であるが、あまり使用頻度は高くなく、多くの自然面を残す。

時期 327の出土により、中世の可能性が高い。

ⅡD4f土坑（第47図、写真図版51）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD4fグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、住居跡を截る黒褐色土の半円の広がりとして検出された。ⅡD-8 縦穴住居跡を截る。

<規模・形態>東半が調査区域外にかかるため、全体形状は不明だが、ほぼ円形を呈するものと考えられる。開口部径〔197.5〕cm、底部径〔163〕cm、深さは〔27〕cmである。壁は緩やかに外傾し、断面形は皿状を呈する。底面はⅣ層及びⅡD-8 縦穴住居跡埋土中に構築されている。

<埋土>単層で、黒褐色土が堆積していた。

遺物（写真図版99-330）

<出土状況>土師器が1点出土している。

<土師器>330（写真のみ掲載）はロクロ使用成形両面ミガキ後両面黒色処理された坏の小破片である。

時期 平安時代に属するであろう。

ⅡD4h土坑（第47図、写真図版51）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD4hグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、黄褐色土・褐色土・黒褐色土・灰黄色土等の混合土の円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径165cm×154cm、底部径159cm×143cm、深さは32cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、一部が僅かに内傾するが、全体的にはほぼ直立して立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>上位は黄褐色土ブロック・灰黄色土ブロック等を含む褐色土と黒褐色土の混合土主体で構成される。下位は黒褐色土ブロックを含む黄褐色土・褐色土等の混合土主体で構成される。人為堆積の可能性が高い。

遺物 (第103図331・332、写真図版99)

<出土状況>土師器1点と縄文土器が1点出土している。

<土師器>非ロクロ使用成形された甕の底部破片(331)である。器表の調整等定かでないが、底面に木葉痕を持つ。

<縄文土器>332は器表にRL横回転による単節斜行縄文を付す体部破片である。中期～後期の所産か。

時期 331の出土により平安時代に属するか。

ⅡD4i 土坑 (第47図、写真図版51)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD4iグリッド内に位置する。ⅡD-12竪穴住居跡のプラン内において、住居跡の精査時に検出された。ⅡD-12住居跡を截る。

<規模・形態>開口部径51cm×42cm、底部径29cm×25cm、深さは55cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、やや外傾して立ち上がり、断面形は円筒状を呈する。底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>上位には褐色土粒を含む黒褐色土が堆積し、下位にはにぶい黄橙色土ブロックを含む褐色粘質土が堆積する。

遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないため時期は不明である。

ⅡD4j 土坑 (第47図、写真図版51)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD4jグリッド内に位置する。Ⅴ層上面において検出された。ⅡD-20竪穴住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径208cm×197cm、底部径168.5cm×158cm、深さは44.5cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、やや外傾して立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅴ層中に構築されている。

<埋土>上位は黄褐色土ブロック・灰黄色土ブロック・にぶい黄橙色土ブロックを含む暗褐色土主体の混合土で構成され、下位は灰黄色土ブロック・にぶい黄橙色土ブロックを含む褐色土と暗褐色土の混合土を主体として構成される。人為堆積の可能性が高い。

遺物 (第103図333、写真図版99)

<出土状況>土師器が1点出土している。

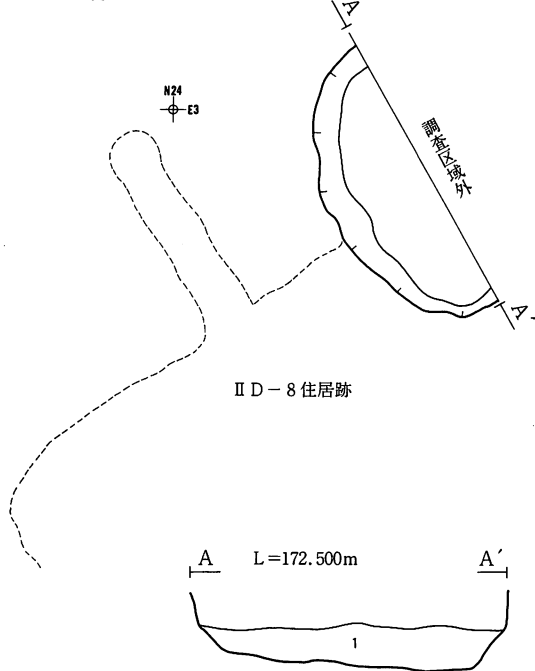
<土師器>非ロクロ使用成形された体部下端～底部を残す甕の破片(333)である。内面はナデ、外面はケズリ調整される。

時期 平安時代に位置づけられよう。

ⅡD5d 土坑 (第48図、写真図版52)

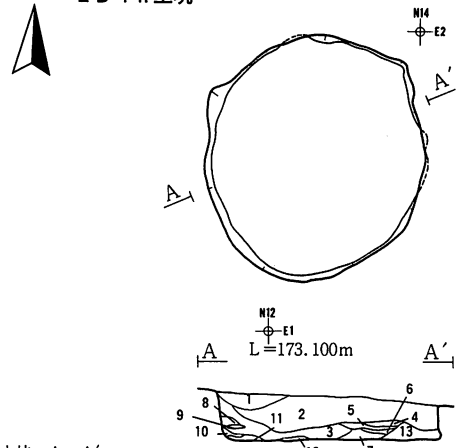
遺構

II D 4 f 土坑



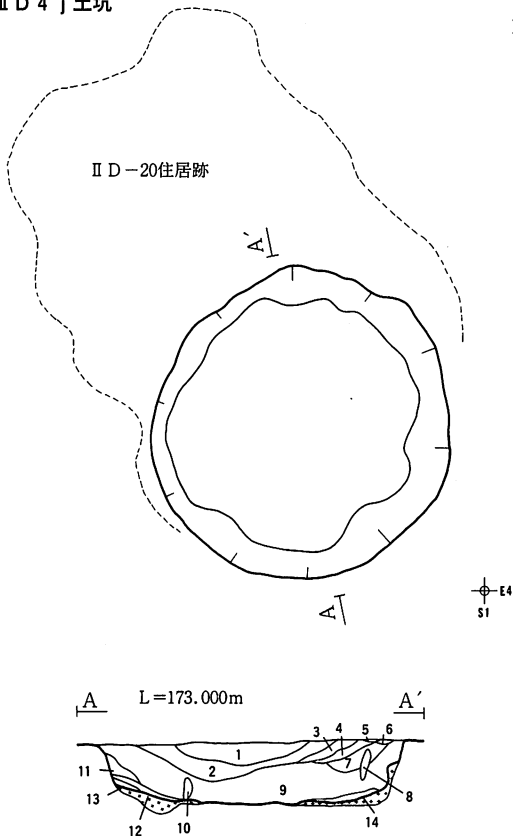
II D 4 f 土坑 A-A'
1. 10Y R3/2 黒褐 シルト

II D 4 h 土坑

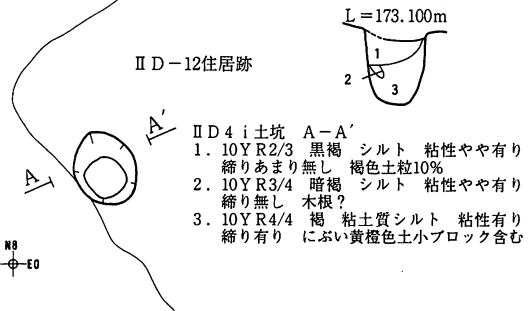


II D 4 h 土坑 A-A'
1. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土との混合土 黒褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 T o-N b (径1~5mm) 含む
2. 10Y R4/6 褐 シルト 黒褐色土との混合土 黄褐色粘質土ブロック含む 明黄褐色粘質土ブロック (径2~10mm) 微量 灰黄色土 (T o-a?) ブロック (径5~10mm) 微量
3. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土 (T o-N b 含む)・暗褐色土との混合土 黒褐色土ブロック含む
4. 10Y R2/2 黒褐 シルト
5. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土との混合土 T o-N b 含む
6. 10Y R5/8 黄褐 シルト 暗褐色土との混合土
7. 10Y R5/8 黄褐 シルト T o-N b 微量 暗褐色土混入
8. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土 (T o-N b 含む)・暗褐色土ブロック混入 灰黄色土ブロック (径5~10mm) 極微量
9. 10Y R2/2 黒褐 シルト 褐色土 (T o-N b 含む) との混合土 黄褐色土ブロック (径1~5mm) 含む 灰黄色土ブロック (径2~5mm) 極微量
10. 10Y R3/4 暗褐 シルト
11. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土 (T o-N b 含む) との混合土
12. 10Y R4/6 褐 シルト T o-N b 含む
13. 10Y R3/4 暗褐 シルト 褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 含む 灰黄色土ブロック (径2~5mm) 極微量

II D 4 j 土坑



II D 4 i 土坑



II D 4 i 土坑 A-A'
1. 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性やや有り 締りあまり無し 褐色土粒10%
2. 10Y R3/4 暗褐 シルト 粘性やや有り 締り無し 木根?
3. 10Y R4/4 褐 粘土質シルト 粘性有り 締り有り におい黄橙色土小ブロック含む

II D 4 j 土坑 A-A'

1. 10Y R3/3 暗褐 シルト 黒褐色土上に混入 T o-N b 微量 灰黄色土ブロック (径10mm以下)・におい黄橙色土ブロック (径1~5mm) 含む 白色バミス (径5~10mm) 極微量
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト 暗褐色土との混合土 T o-N b 微量 黄褐色土ブロック (径2mm以上)・灰黄色土ブロック (径2~5mm)・におい黄橙色土ブロック (径1~10mm)含む 白色バミス微量 炭化物微量
3. 10Y R5/8 黄褐 シルト 暗褐色土との混合土 T o-N b (径2~5mm) 含む 灰黄色土ブロック (径2~10mm)・におい黄橙色土ブロック (径2~5mm) 微量 白色バミス微量
4. 10Y R3/3 暗褐 シルト 灰黄色土ブロック (径2mm以下) 含む におい黄橙色土ブロック (径2~5mm) 微量
5. 10Y R4/6 褐 シルト
6. 10Y R4/6 褐 シルト 黄褐色土との混合土
7. 10Y R3/3 暗褐 シルト 褐色土との混合土 灰黄色土ブロック (径1mm以上) 30% におい黄橙色土ブロック (径2~5mm) 微量 炭化物微量
8. 10Y R5/8 黄褐 シルト 暗褐色土との混合土 撥乱層
9. 10Y R4/6 褐 シルト 暗褐色土との混合土 灰黄色土ブロック (径1mm以上) 多量に含む におい黄橙色土ブロック (径5mm以下) 微量 白色バミス (径2~5mm) 含む 炭化物微量
10. 10Y R7/3 におい黄橙 シルト
11. 10Y R4/6 褐 シルト 黄褐、におい黄橙、黒褐、暗褐色土ブロック混入
12. 10Y R4/6 褐 シルト 暗褐色土との混合土 黄褐色土ブロック・におい黄橙土ブロック微量
13. 10Y R6/3 におい黄橙 シルト 褐色土ブロック含む
14. 10Y R3/2 黒褐 シルト 褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~5mm)・におい黄橙色土ブロック (径2~5mm) 含む

0 1:50 1m

第47図 II D 4 f・II D 4 h・II D 4 i・II D 4 j 土坑

<検出状況・重複関係>ⅡD5・6dグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。ⅡD-18堅穴住居跡に截られる可能性がある。また、ⅡD-1堅穴住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

<規模・形態>長軸〔320〕cm×短軸〔103〕cm・深さ8～21cmの南北に伸びる長楕円形に、長軸230cm×短軸130cm・深さ35～70cmの東西に伸びる不整な長楕円形が重なったような形態を持つ。壁はやや外傾して立ち上がる。底面はⅣ～Ⅴ層中に構築されている。東端部が最も深く掘り込まれており、北端と南端は中央部より浅くなっている。

<埋土>焼土粒・炭化物・灰白色土ブロック等の混入する褐～暗褐色土が主体となって構成される。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

ⅡD5f-1土坑（第48図、写真図版52）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD5fグリッド内に位置する。Ⅱ層下面において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径88.5cm×80cm、底部径72cm×67cm、深さは14cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は緩やかに外傾し、断面形は皿状を呈する。底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>単層で、褐色パミスを含む黒褐色土が堆積する。

遺物（写真図版99-334）

<出土状況>土師器が1点出土している。

<土師器>非ロクロ使用成形された甕の体部破片（334）であり、内面がヨコナデ、外面は縦方向ヘラナデやヘラミガキされる。

時期 遺物の様相は奈良時代的であるが、奈良時代か平安時代に属すると考えられる。

ⅡD5f-2土坑（第48図、写真図版52）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD5fグリッド内に位置する。Ⅱ層下面において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径136cm×114cm、底部径97cm×85cm、深さは33cmである。平面形は楕円形を呈する。壁は緩やかに外傾し、断面形は皿状を呈する。底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>上位にはにぶい黄褐色土ブロック等を含む黒褐色土が堆積し、下位には黒色土が堆積する。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

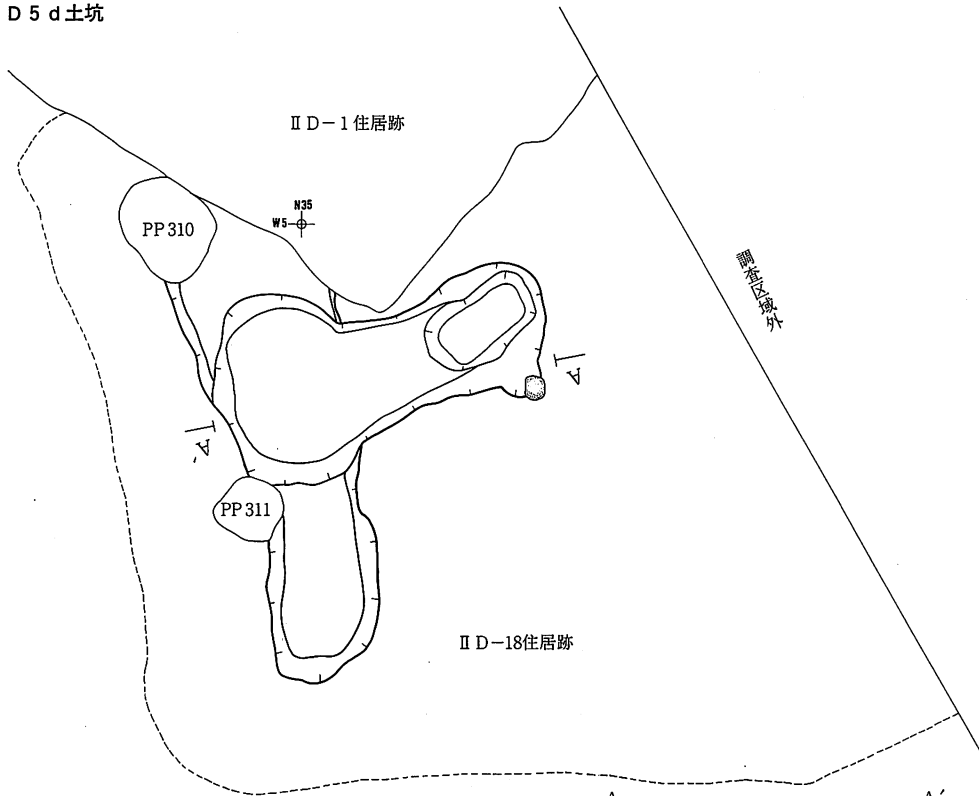
ⅡD6c土坑（第49図、写真図版52）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD6cグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。重複する遺構はない。

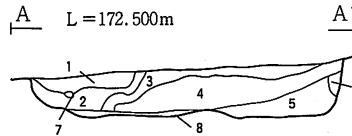
<規模・形態>開口部径185cm×175cm、底部径179cm×172cm、深さは46cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、部分的に直立ぎみに立ち上がるのを除き、やや外傾して立ち上がる。断面形は筒状を呈する。底面は平坦で、Ⅳ層中に構築されている。

II D 5 d 土坑

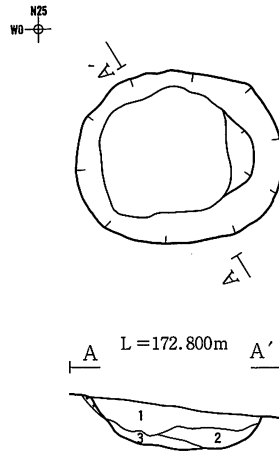


II D 5 d 土坑 A-A'

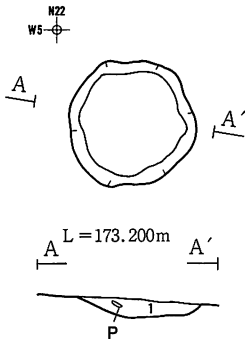
1. 10Y R6/6 明黄褐 粘性無し 締りやや疎 黒褐色土混入
2. 10Y R4/4 褐 粘性無し 締りやや疎 炭化物・焼土粒・灰黄色土混入
3. 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 締り疎 炭化物混入
4. 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 締り中 灰白色土小ブロック・炭化物混入
5. 10Y R4/4 褐 粘性無し 締りやや疎 炭化物微量混入
6. 10Y R5/6 黄褐 粘性無し 締り中 ブロック
7. 灰白色土ブロック
8. 地山 (掘り過ぎ)



II D 5 f-2 土坑



II D 5 f-1 土坑

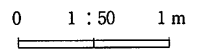


II D 5 f-1 土坑 A-A'

1. 10Y R2/1 黒 シルト 褐色バミス (径5~10mm) 微量

II D 5 f-2 土坑 A-A'

1. 10Y R2/2 黒褐 におい黄褐色土ブロック5% 黄色土ブロック1% 固く締る
2. 7.5Y R2/1 黒
3. 5Y R1.7/1 黒



第48図 II D 5 d・II D 5 f-1, 2 土坑

<埋土>上位は灰黄色土ブロックを含む黒色土・黄褐色土等の混合土主体で構成され、下位は黄褐色土ブロック等を含む黒～黒褐色土を主体として構成される。最上位には焼土ブロック・灰白色土ブロックの混入する層が見られた。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ D 6 d 土坑 (第49図、写真図版53)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 6 d グリッド内に位置する。Ⅱ D-2 竪穴住居跡のカマド燃焼部の下で検出された。Ⅱ D-2 竪穴住居跡と重複する。

<規模・形態>開口部径79cm×55cm、底部径61cm×37cm、深さは40cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、開口部では緩やかに外傾して開く。底面は、若干の凹凸があり、Ⅳ層中に構築されている。

<埋土>黄褐色土・黒色土・褐色土等がブロック状に混じる混合土を主体として構成される。人為堆積と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 Ⅱ D-2 竪穴住居跡より古い遺構の可能性もあるが、検出状況から、住居跡に伴うピットで、カマド構築時に封鎖された可能性の方が高いと考えられる。

Ⅱ D 6 f-1 土坑 (第49図、写真図版53)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 6 f グリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径182cm×161cm、底部径153cm×147cm、深さは24cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は、概ね平坦で、Ⅳ層中に構築されている。

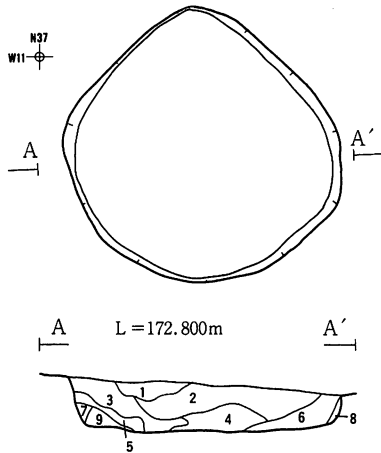
<埋土>上位は灰黄色土ブロックを含む黒褐色土が堆積し、中位は黄褐色土ブロックを含む黒色土と黒褐色土の混合土を主体として構成される。下位は灰黄色土ブロックを含む黒褐色土と黒色土の混合土を主体として構成される。

遺物 (第103図335～339、写真図版99)

<出土状況>弥生土器3点、続縄文土器1点、石器1点が出土している。

<弥生土器>出土した3点(335・336・338)の内335はほぼ全体を推測し得る残存状態であるが、他の2点は体部の小破片である。335は底部から外傾する体部は中位に膨らみを持ち上位で窄み、さらに口縁部に向かって外反する器形をなすが、口縁部と底部を欠失し定かでないが、器厚が非常に薄く、器表には体部下半に縦方向の撚糸文、同上半には斜行する撚糸文が4段付され、このような特徴から弥生末期の赤穴式土器に近似した土器と言えよう。336は器厚が非常に薄く、器表に沈線区画帯の中に交互刺突による波状文、さらに重複しないように0段多条R L横回転による単節斜行縄文が付され、この特徴から弥生末期の天王山式土器系の赤穴式土器と考えられる。338は器厚が薄く、器表には無文の器面に細い沈線で施文する特徴があり、

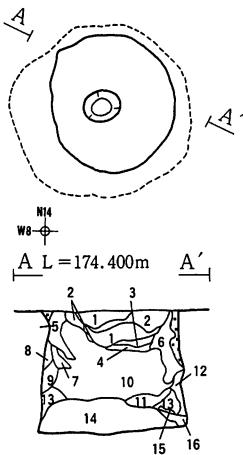
II D 6 c 土坑



II D 6 c 土坑 A-A'

- 2.5Y3/2 黒褐 シルト 灰白色土ブロック (径1~2mm) 微量 黒色土ブロック (1mm以下) 微量 赤褐色土ブロック (径10mm以上) 微量 T o - C h 微量
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト 黒色土・黄褐色土・にぶい黄色土との混合土 灰黄色土ブロック (径5~10mm) 10% T o - C h 微量
- 2.5Y2/1 黒 シルト 黒褐色土との混合土 下位に黄褐色土ブロック (径10mm以上) 微量含む 明黄褐色パミス (径1mm以下) 多量
- 2.5Y2/1 黒 シルト 黒褐色土・黄褐色土との混合土 明黄褐色パミス多量 灰白色土ブロック (径1~2mm) 微量
- 2.5Y2/1 黒 シルト 黒褐色土・黄褐色土との混合土 4層より黒色土少なく、黒褐色土が多い 明黄褐色パミス含む
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト 黒色土ブロック・黄褐色土ブロック含む 5層に似る
- 2.5Y5/6 黄褐色 シルト 黒色土ブロック (径10mm以上) 含む
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト 黄褐色土との混合土
- 2.5Y2/1 黒 シルト 黒褐色土との混合土 明黄褐色パミス (径1mm以下) 含む

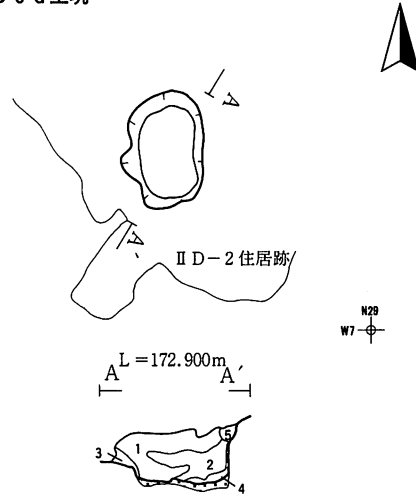
II D 6 h 土坑



II D 6 h 土坑 A-A'

- 10YR7/4 にぶい黄橙 砂質シルト
- 10YR5/4 にぶい黄褐 灰白色土 (T o - O f ?) ブロック 5% にぶい黄橙色微小ブロック (T o - C h) 3%
- 10YR6/6 明黄褐 砂質シルト
- 10YR6/6 明黄褐 灰黄褐色土 (3%) ・黒色土 (1%) 混入
- 10YR5/3 にぶい黄褐 黄褐色小ブロック (T o - N b) 微量 にぶい黄橙微細粒 (T o - C h) 5%
- 10YR4/3~4/4 にぶい黄褐~褐 シルト 黄褐色小ブロック (T o - N b) 極微量 炭化物微細粒微量
- 10YR5/3 にぶい黄褐 灰白色土小ブロック (T o - O f) 1%
- 10YR4/6 褐 地山? 掘り過ぎ?
- 10YR5/3 にぶい黄褐 (60%) 褐色土 (40%) との混合土
- 10YR5/6 黄褐 砂質シルト
- 10YR3/3 暗褐
- 10YR5/4~5/6 にぶい黄褐~黄褐 黄褐色小ブロック (T o - N b) 微量
- 7.5YR4/6 褐 粘土質シルト
- 10YR3/2 黒褐
- 10YR3/4 暗褐
- 10YR5/6 黄褐 暗褐色土15%混入

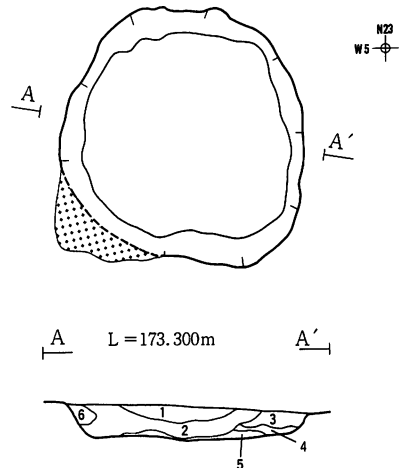
II D 6 d 土坑



II D 6 d 土坑 A-A'

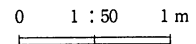
- 10YR5/8 黄褐 シルト ブロック 黒色土・褐色土がブロック状に混じる混合土
- 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性小 締り有り 黒褐色土との混合土 黄褐色土ブロック微量
- 10YR3/3 暗褐 シルト 粘性小 締りやや有り 褐色土との混合土 黄褐色土ブロック微量
- 10YR5/8 黄褐 シルト 粘性小 締り有り
- 10YR6/8 明黄褐 シルト 粘性小 締り有り 黒褐色土との混合土

II D 6 f-1 土坑



II D 6 f-1 土坑 A-A'

- 10YR3/1 黒褐 シルト 灰黄色土ブロック (径2~5mm) 微量 明黄褐色パミス (径5~10mm) 微量
- 10YR3/1 黒褐 シルト 黒色土混入 黄褐色土ブロック 5% 明黄褐色パミス (径1~2mm) 微量
- 10YR3/1 黒褐 シルト 黒色土との混合土 灰黄色土ブロック 1~3% 明黄褐色パミス (径1~2mm) 微量
- 10YR3/1 黒褐 シルト 黄褐色土との混合土 攪乱層?
- 10YR3/1 黒褐 シルト 黒色土との混合土 灰黄色土ブロック (径5~10mm) 微量
- 10YR5/8 黄褐 シルト 明黄褐色パミス (径1~2mm) 2~3%



第49図 II D 6 c・II D 6 d・II D 6 f-1・II D 6 h 土坑

前2点と同時期の土器と推測される。337は器厚のやや厚い土器片であるが、器面に断面三角形の隆起帯を貼付した文様を付す特徴があり、北大式土器と推定される。

<石器>339は横断面が三角形で縦長剥片を素材にし、側縁部を裏面からの調整剥離によつて刃部を作出した削器である。

時期 出土した土器の内335・336・338は弥生末期、337は古墳時代に相当することから、3～4世紀代に位置づけられようか。

ⅡD6f-2土坑（第50図、写真図版53）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD6fグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。ⅡD6f石囲炉・PP426と重複する。本遺構が最も古い。

<規模・形態>開口部径246cm×187cm、底部径180cm×140cm、深さは116.5cmである。平面形は楕円形を呈する。壁は、南西側が内傾、北東側は外傾して立ち上がり、開口部で緩やかに外傾して開く。埋土の状態から、壁の上部は崩落したものであると思われる。底面は南西側のみ残存する。概ね平坦で、Ⅳ～Ⅴ層中に構築されている。

<埋土>上位は黒褐色土と褐色土の混合土を主体として構成される。中位は暗褐色土と褐色土の混合土主体である。下位は褐色土ブロックを含む黒褐色土・暗褐色土を主体として構成される。底面壁際には地山崩落土の堆積が認められる。全体として自然堆積の様相を呈していると考えられる。

遺物（第103図340、写真図版99）

<出土状況>縄文土器が1点出土している。

<縄文土器>340は体部下位～底部の一部を残存する破片であるが、器表にLR横回転による縄文を付す。時期は特定出来ないが中期～後期に属するものと推測される。

時期・性格 本遺構の底面で検出された土坑を別遺構と考え、ⅡD6f-3土坑として登録し、精査を行ったが、不手際のため、2基の土坑の関係を明らかにすることができなかった。推測の域を出ないが、可能性として考えられることを二つ、以下に記しておきたい。一つは、ⅡD6f-2土坑の埋没後、新たに土坑を構築したという考え方である。この場合、ⅡD6f-3土坑は深さ約2.9mのフラスコピットということになる。もう一つは、2基の土坑を1基の土坑として捉える考え方である。この場合、検出面より約1.2m下に段を持つ、深さ約2.9mの単一のフラスコピットということになる。

時期は縄文時代に属すると考えられる。

ⅡD6f-3土坑（第50図、写真図版53）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD6fグリッド内に位置する。ⅡD6f-2土坑の底面において検出された。

<規模・形態>開口部径113cm×107cm、底部径140cm×138cm、ⅡD6f-2土坑底面からの深さは172cm、ⅡD6f-2土坑検出面からの深さは288cmである。平面形は円形を呈する。壁は内傾して立ち上がり、断面形はフラスコ状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅴ層中に構築されている。

<埋土>記録がないため、詳細は不明である。

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 II D 6 f - 2 土坑の時期・性格の欄を参照されたい。

II D 6 h 土坑 (第49図、写真図版53)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 6 h グリッド内に位置する。IV層上面において、にぶい黄橙色土を含む暗褐色土のほぼ円形のプランとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態> 開口部径92.5cm×81.5cm、底部径123cm×119cm、深さは85cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁はやや内傾して立ち上がり、開口部付近では外傾する。断面形はフラスコ状を呈する。底面は概ね平坦で、V層中に構築されている。

<埋土> 黄褐色の砂質土が主体を占めており、壁際に褐～暗褐色土が混入する。また、底面付近では黒褐色土の堆積が認められる。埋土の様相は自然堆積を示すものと考えられるが、砂質土の堆積する中～下位については、人為堆積の可能性もある。

<付属施設> 底面のほぼ中央で、副穴と考えられる小ピットを検出した。ピットの平面形は、径25×22cmの円形を呈し、深さは21cmを測る。埋土は黒色土である。

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 遺構の形態から縄文時代に属すると考えられる。陥し穴であろうか。

II D 6 i 土坑 (第50図、写真図版54)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 6 i グリッド内に位置する。IV層上面において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態> 開口部径152cm×140cm、底部径143.5cm×122.5cm、深さは21cmである。平面形は円形を呈する。壁は一部が僅かに内傾して立ち上がるのを除いて、概ね外傾して立ち上がる。断面形は皿状を呈する。底面は概ね平坦で、IV層中に構築されている。

<埋土> 全体として汚れた色調を呈する褐色土主体の混合土で構成される。また、全体に灰白色土ブロックを含んでいる。人為堆積と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

II D 7 e 土坑 (第51図、写真図版54)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 7 e グリッド内に位置する。IV層上面において検出された。重複する遺構はない。

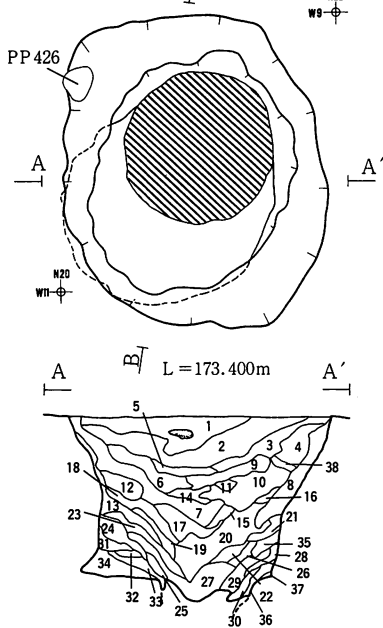
<規模・形態> 開口部径105cm×94cm、底部径61cm×53cm、深さは34cmである。平面形は不整な円形を呈する。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は皿状を呈する。底面はIV層中に構築されれている。

<埋土> 単層で、明黄褐色土粒を僅かに含む黒褐色土が堆積している。

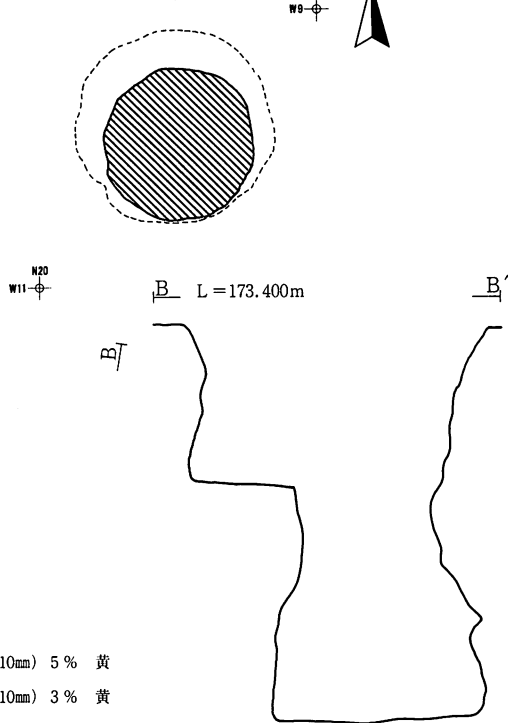
遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

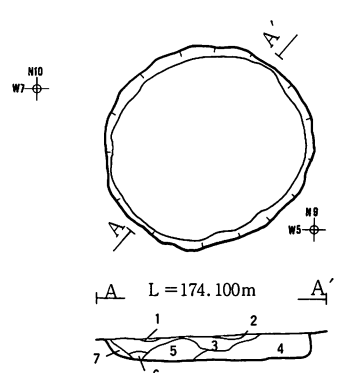
II D 6 f-2 土坑



II D 6 f-3 土坑



II D 6 i 土坑



II D 6 f-2 土坑 A-A'

1. 10Y R2/3 黒褐 シルト 褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~10mm) 5% 黄色パミス (径1mm以下) 10% 炭化物微量
2. 10Y R2/2 黒褐 シルト 褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~10mm) 3% 黄色パミス (径1mm以下) 10% 炭化物微量
3. 10Y R2/3 黒褐 シルト 褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~10mm) 5% 黄色パミス (径1mm以下) 10% 炭化物微量
4. 10Y R2/2 黒褐 シルト 褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~10mm) 3% 黄色パミス (径1mm以下) 10% 炭化物微量
5. 10Y R2/3 黒褐 シルト 褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~10mm) 5% 黄色パミス (径1mm以下) 10% 炭化物微量
6. 10Y R2/3 黒褐 シルト 暗褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~5mm) 3% 黄色パミス (径1mm以下) 5%
7. 10Y R2/2 黒褐 シルト 暗褐色土との混合土 灰黄色土粒 (径1~2mm) 微量 明黄褐色パミス微量 黄色パミス微量
8. 10Y R4/6 褐 シルト 黄褐色土との混合土 黒褐色土ブロック (径10mm以上) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~5mm) 3% 黄色パミス (径1mm以下) 微量
9. 10Y R3/4 暗褐 シルト におい黄褐色土混入 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~5mm) 1% 黄色パミス (径1mm以下) 微量
10. 10Y R2/2 黒褐 シルト 暗褐色土・におい黄褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~5mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 3% 炭化物微量
11. 10Y R4/6 褐 シルト 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 5%
12. 10Y R2/2 黒褐 シルト 暗褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 3%
13. 10Y R4/6 褐 シルト 黄褐色土・暗褐色土・におい黄褐色土・黒褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 微量
14. 10Y R3/4 暗褐 シルト 褐色土との混合土 赤褐色パミス (径1~2mm) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 微量
15. 10Y R5/4 におい黄褐 シルト 黄褐色土ブロック (径1~2mm) 微量炭化物微量
16. 10Y R4/6 褐 シルト 黄褐色土・黒褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 微量
17. 10Y R3/4 暗褐 シルト 褐色土ブロック (径5~10mm) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径2~5mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 微量 炭化物微量
18. 10Y R3/4 暗褐 シルト 褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径2~5mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 微量
19. 10Y R3/4 暗褐 シルト 黒褐色土との混合土 黄色パミス (径1mm以下) 微量
20. 10Y R3/4 暗褐 シルト 黒褐色土との混合土 褐色土ブロック (径10mm以上) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~5mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 3%
21. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~5mm) 3%
22. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土との混合土 下位に黒褐色土混入 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~5mm) 微量
23. 10Y R2/2 黒褐 シルト 褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径1~5mm) 10%
24. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土・暗褐色土混入 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量
25. 10Y R4/6 褐 シルト 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 3% 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量
26. 注記無し
27. 10Y R2/3 黒褐 シルト 褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 微量
28. 10Y R5/8 黄褐 シルト 明褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量
29. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土・黒褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~5mm) 微量
30. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1mm以下) 微量
31. 10Y R5/8 黄褐 シルト におい黄褐色土との混合土 におい黄褐色土ブロック (径5~10mm) 含む 黒褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量
32. 10Y R3/4 暗褐 シルト 黄褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量
33. 10Y R5/8 黄褐 シルト 明黄褐色パミス (T_o-N_b) 微量
34. 2.5Y5/3 黄褐 シルト 砂混入 におい黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 T_o-O_fの濁ったもの
35. 10Y R5/8 黄褐 シルト 褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量
36. 10Y R5/6 黄褐 シルト 砂少量混入 濁っている
37. 10Y R7/4 におい黄橙 シルト ブロック 明黄褐色土ブロックとの混合土
38. 10Y R4/6 褐 シルト 暗褐色土との混合土 明黄褐色パミス (T_o-N_b・径1~2mm) 微量 黄色パミス (径1mm以下) 5%

II D 6 i 土坑 A-A'

1. 10Y R2/3 黒褐 褐色土との混合土 灰白色土粒 (径1mm以下) 含む
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 含む T_o-N_b含む
3. 10Y R5/6 黄褐 黒褐色土・オリーブ褐色土との混合土 におい黄色土ブロック (径10mm以上) 微量 灰白色土ブロック (径5~10mm) 微量
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐 黄褐色土との混合土 黒褐色土ブロック (径1~10mm) 5% におい黄色土ブロック (径10mm以上) 微量 灰白色土ブロック (径2~10mm) 微量 T_o-N_b含む
5. 2.5Y5/4 オリーブ褐 におい黄色土ブロック含む T_o-N_b含む
6. 2.5Y4/6 オリーブ褐 灰白色土ブロック (径5~10mm) 含む T_o-N_b含む
7. 2.5YR3/2 黒褐 黄褐色土との混合土 灰白色土ブロック 微量

0 1:50 1m

第50図 II D 6 f-2, 3・II D 6 i 土坑

Ⅱ D 7 f - 1 土坑 (第51図、写真図版54)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 7 f グリッド内に位置する。Ⅳ層上面において検出された。4号掘立柱建物跡に截られる。

<規模・形態>開口部径162cm×122cm、底部径148cm×106cm、深さは22cmである。平面形は隅丸長方形を呈する。壁は若干外傾して立ち上がる。断面形は皿状を呈する。底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>黄褐色土ブロックを含む灰黄褐色土を主体として構成される。下位には暗褐色土が混入する。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ D 7 f - 2 土坑 (第51図、写真図版54)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 7 f グリッド内に位置する。Ⅳ層中において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径210cm×190cm、底部径235cm×216cm、深さは60cmである。平面形は不整な円形を呈する。壁は内傾して立ち上がる。断面形はフラスコ状を呈する。底面はⅤ層中に構築されている。

<埋土>上位は黄褐色土ブロックを僅かに含む黒褐～暗褐色土を主体として構成され、中位～下位にかけてはにぶい黄橙色土ブロック・黄褐色土ブロックを僅かに含む黒褐色土と暗褐色土の混合土を主体として構成される。全体にT o - C hを多く含み、T o - N bの含有率は少ない。自然堆積と考えられる。

遺物 (第103図341・342、写真図版99)

<出土状況>縄文土器が2点出土している。

<縄文土器>341は器面に撚糸文を乱雑に付す口唇部がやや角張る平縁の口縁部破片であり、342は器面に前者同様撚糸文を乱雑に付す尖底となりそうな雰囲気を持つ底部付近の破片である。両者とも内面はナデられ無文である。

時期 出土した土器の特徴が前期初頭とされる深郷田式土器に近似することから、前期初頭頃に属すると言えよう。

Ⅱ D 7 g 墓壇 (第51図、写真図版55)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 7 g グリッド内に位置する。Ⅳ層下面において検出された。Ⅱ D - 17 竪穴住居跡を截る。

<規模・形態>開口部径120cm×72cm、底部径113cm×65cm、深さは7cmである。平面形は長方形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がる。断面形は皿状を呈する。底面はⅤ層中に構築されている。

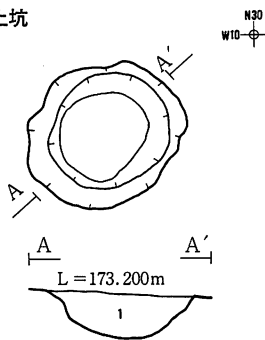
<埋土>記録がないため、詳細は不明である。

遺物

<出土状況>底面から1体の人骨が出土している。保存状態はあまり良くない。年齢・性別は不詳である。

時期 重複状況から中世～近世に属するものと考えられる。

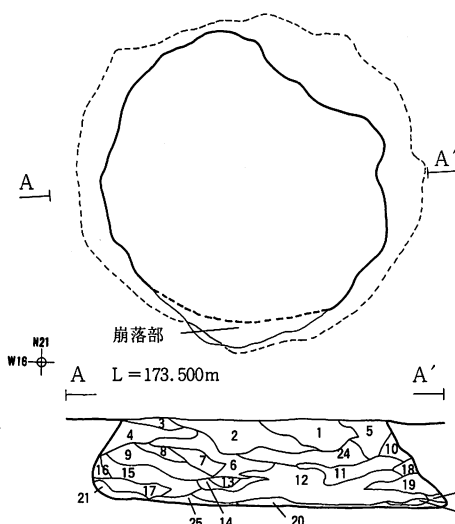
ⅡD7e土坑



ⅡD7e土坑 A-A'

1. 10YR3/1 黒褐 シルト 明黄褐色土粒 (径1mm以下) 微量

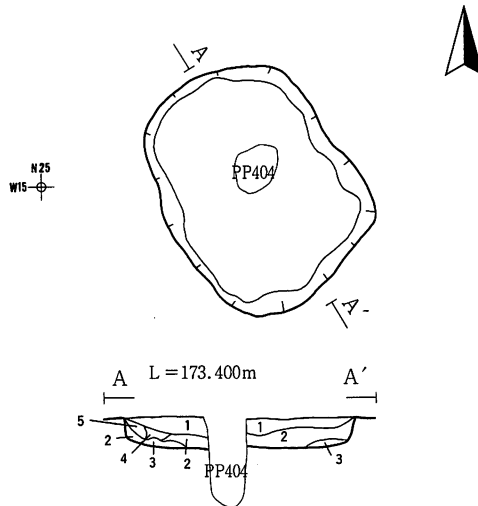
ⅡD7f-2土坑



ⅡD7f-2土坑 A-A'

1. 10YR3/4 暗褐 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 2.5Y8/6黄色バミス (T o - C h · 径1mm以下) 多量に含む 2.5Y7/8黄色バミス (T o - N b · 径1~5mm) 微量
2. 10YR2/3 黒褐 暗褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 2.5Y8/6黄色バミス (T o - C h · 径1mm以下) 多量に含む 2.5Y7/8黄色バミス (T o - N b · 径1~2mm) 微量
3. 10YR4/6 褐 T o - C h · T o - N b 含む
4. 10YR5/8 黄褐 黒褐色土混入 2.5Y7/8黄色バミス (T o - N b · 径5mm以下) 微量
5. 10YR3/4 暗褐 褐色土 · 黄褐色土との混合土 T o - C h · T o - N b 含む
6. 10YR2/3 黒褐 褐色土との混合土 T o - C h (多量) · T o - N b (微量) 含む
7. 10YR4/6 褐 暗褐色土との混合土 T o - C h · T o - N b 微量
8. 10YR4/6 褐 黄褐色土との混合土 T o - N b (径1mm以下) 微量
9. 10YR5/8 黄褐 黒褐色土ブロック (径10mm以上) 微量 T o - N b (径5mm以下) 含む
10. 10YR4/6 褐 T o - N b (径5mm以下) 微量
11. 10YR4/6 褐 黒褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~10mm) 含む T o - N b 含む
12. 10YR2/3 黒褐 暗褐色土との混合土 におい黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 黄褐色土ブロック (径10mm以上) 微量 T o - C h (径1mm以下) 多量に含む
13. 10YR2/3 黒褐 暗褐色土との混合土 におい黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 黄褐色土ブロック (径10mm以上) 微量 T o - C h (径1mm以下) 多量に含む T o - N b (径1~2mm) 微量
14. 10YR3/4 暗褐 黄褐色土との混合土 T o - C h · T o - N b 含む
15. 10YR2/3 黒褐 ブロック 黄褐色土ブロック · 褐色土ブロック · におい黄褐色土ブロックとの混合土 T o - C h · T o - N b 含む
16. 2.5Y4/3 オリーブ褐 T o - N b 微量
17. 10YR5/4 におい黄褐 T o - N b 微量
18. 10YR4/6 褐 黄褐色土との混合土 T o - N b 含む
19. 10YR4/6 褐 黒褐色土との混合土 T o - C h 含む
20. 10YR4/6 褐 T o - C h 含む
21. 2.5Y5/3 黄褐 灰黄色土粒 (径1~2mm) 含む
22. 10YR5/4 におい黄褐
23. 10YR4/6 褐 黒褐色土との混合土
24. 10YR4/6 褐 黒褐色土との混合土 T o - C h · T o - N b 含む
25. 10YR4/6 褐 黄褐色土との混合土 灰黄色土粒 (径1~2mm) 含む

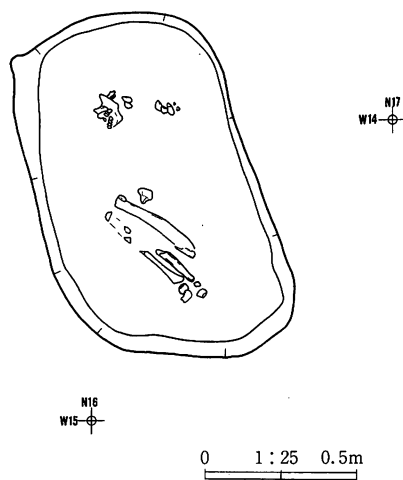
ⅡD7f-1土坑



ⅡD7f-1土坑 A-A'

1. 10YR4/2 灰黄褐 黄褐色土ブロック (径1~10mm) 含む
2. 10YR4/2 灰黄褐 黄褐色土ブロック (1層よりブロック大きい) 含む 暗褐色土混入
3. 10YR5/8 黄褐
4. 10YR5/8 黄褐 暗褐色土多く混入
5. 10YR4/2 灰黄褐 ブロック 黄褐色土ブロックとの混合土

ⅡD7g墓壇



0 1:50 1m
(その他)

第51図 ⅡD7e · ⅡD7f-1, 2土坑 ⅡD7g墓壇

Ⅱ D 7 h-1 土坑 (第52図、写真図版55)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 7 h グリッド内に位置する。V層上面において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径187cm×162cm、底部径175cm×155cm、深さは7.5～11cmである。平面形は楕円形を呈する。上部は削平を受けており、南側の壁は残存しない。その他は緩やかに外傾する。断面形は皿状を呈する。底面はV層中に構築されている。

<埋土>全体として汚れた色調を呈する、黄褐色土・灰黄色土・にぶい黄橙色土等の混合土を主体として構成される。人為堆積と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ D 7 h-2 土坑 (第52図、写真図版55)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 7 h グリッド内に位置する。V層上面において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径142cm×130cm、底部径115cm×104cm、深さは38cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はV層中に構築されている。

<埋土>にぶい黄橙色土ブロックを全体に含む汚れた褐色土主体の土で構成される。人為堆積と考えられる。

遺物 (第103図343、写真図版99-343~345)

<出土状況>弥生土器1点、土師器1点、須恵器1点が出土している。

<弥生土器>343は器厚が薄く器表にR L横回転による単節斜行縄文を付す頸部付近と推測される小破片である。弥生末期に位置づけられようか。

<土師器>345は非クロ使用成形の甕体部破片で内面ナデ、外面ミガキの調整が観察されるものの詳細は不明である。

<須恵器>344は焼成が還元不足のためやや赤みのある灰褐色をなす坏の口縁部小破片である。

時期 土師器・須恵器の出土により平安時代に属する。

Ⅱ D 7 i 土坑 (第52図、写真図版55)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 7 i グリッド内に位置する。V層上面において検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径147cm×142cm、底部径132cm×123cm、深さは38cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はV層中に構築されている。

<埋土>にぶい黄橙色土ブロック等を含むにぶい黄褐色土を主体として構成される。底面壁際には、灰黄褐色土が堆積している。人為堆積と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ D 8 a 土坑 (第52図、写真図版56)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 8 a グリッド内に位置する。Ⅱ D-16 堅穴住居跡プラン内の北西部で、灰白色火山灰土(十和田 a 降下火山灰)を載る黒褐～暗褐色土の円形の広がりとして検出された。Ⅱ D-16 堅穴住居跡を載る。また P P 56・70・145・148 に截られる。

<規模・形態>開口部径(200)cm×(188)cm、底部径160cm×148cm、深さは74cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は直立ぎみに立ち上がり、開口部付近では外傾して開く。底面は概ね平坦で、V層中に構築されている。

<埋土>灰黄色土の混入する暗褐色土及び黒褐色土を主体として構成される。

遺物 (写真図版99-346・347)

<出土状況>土師器が2点出土している。

<土師器>2点(346・347)とも非ロクロ使用成形の甕の口縁部破片であるが、346は内外面がミガキ調整され口唇部が上方に屈曲する受け口状であり、347は両面ともヨコナデのみであるが口唇部が摘みだされて有段となる擦文土器の口唇部に近い特徴を持つ。

時期 出土した土師器は8世紀代に属するが、奈良の住居跡を載っていることから平安時代に属すると推察される。

Ⅱ D 8 b 土坑 (第53図、写真図版56)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ D 8 b グリッド内に位置する。Ⅱ D-16 堅穴住居跡の平面プラン内の南側隅付近において、黒褐色土主体の混合土の円形の広がりとして検出された。Ⅱ D-16 堅穴住居跡を載る。

<規模・形態>開口部径138cm×127cm、底部径122cm×110cm、深さは52cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁はほぼ直立して立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅱ D-16 堅穴住居跡の埋土中に構築されている。

<埋土>上位には褐色、黄褐色、黄灰色土ブロックを含む黒褐色土が堆積し、下位は黒褐色土・褐色土・黄褐色土等の混合土を主体として構成され、部分的に灰白色土ブロックが混入する。全体に炭化物を含む。人為堆積と考えられる。

遺物 (第104図351、写真図版99・100-348~351)

<出土状況>土師器3点と石器1点が出土している。

<土師器>348は胎土に金雲母が大量に混在する特徴のあるロクロ使用成形された甕体部上位破片であり、内外面にロクロ成形痕を残す。349は非ロクロ使用成形の両面にヨコナデ痕を残す甕口縁部破片であり、端部が有段となる擦文型である。350は非ロクロ使用成形の甕体部上位破片であり、両面にナデ痕がある。

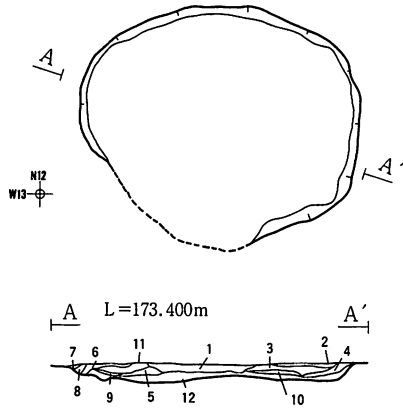
<石器>351は楕円形で断面扁平な河川礫の側縁を磨石、平坦部分を凹石として使用している。

時期 348の特徴が平安時代であることから、平安時代に位置づけられる。

Ⅱ D 8 d-1 土坑 (第53図、写真図版56)

遺構

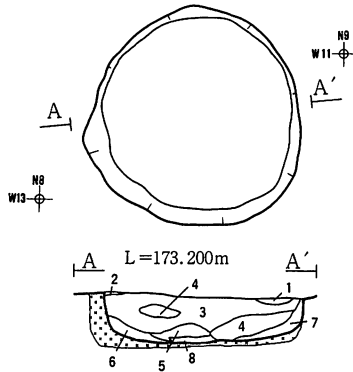
II D 7 h-1 土坑



II D 7 h-1 土坑 A-A'

1. 2.5Y5/6 黄褐 汚れた土 灰黄色土ブロック(径2~5mm)微量 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)微量 明黄褐色パミス(T_o-N_b)微量
2. 10Y R5/6 黄褐 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)微量
3. 10Y R5/8 黄褐 におい黄橙色土との混合土
4. 10Y R4/6 褐 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)5%
5. 10Y R7/4 におい黄橙 粘質土ブロック 黄褐色土ブロック・におい黄色土(汚れた土)ブロックとの混合土
6. 2.5Y4/3 オリーブ褐 黄褐色土ブロック(径2~5mm)におい黄橙色土ブロック含む
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐 におい黄橙色土との混合土
8. 2.5Y6/4 におい黄 オリーブ褐色土ブロック(径2~5mm)微量
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐 黒褐色土ブロック(径2~5mm)微量 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)含む
10. 2.5Y4/3 オリーブ褐 黄褐色土と暗褐色土の混合土
11. 10Y R6/3 におい黄橙色土 オリーブ褐色土との混合土
12. 10Y R6/3 におい黄橙 10Y R7/4におい黄橙色土ブロック(径1mm以上)70%

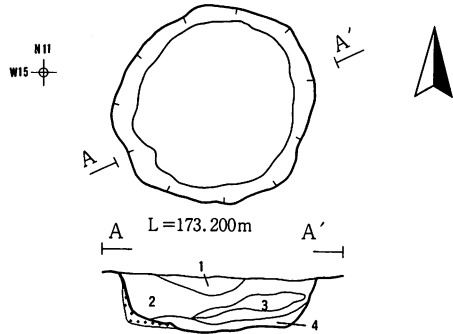
II D 7 i 土坑



II D 7 i 土坑 A-A'

1. 10Y R5/4 におい黄褐 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)微量
2. 10Y R5/4 におい黄褐 におい黄橙色土粒(径1~2mm)微量
3. 10Y R5/4 におい黄褐 におい黄橙色土ブロック(径1mm以上)20% 黒褐色土ブロック(径2~5mm)微量 黄褐色土ブロック1%
4. 10Y R7/4 におい黄橙 ブロック 黄褐色土ブロック(径2~5mm・1%) におい黄褐色土ブロック(径2~5mm・2%)との混合土
5. 10Y R7/4 におい黄橙 ブロック 黄褐色土ブロック(径2~5mm・1%) におい黄褐色土ブロック(径2~5mm・2%)との混合土 炭化物微量
6. 10Y R4/2 灰黄褐 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)2% 黄褐色土ブロック(径2~5mm)微量
7. 10Y R4/2 灰黄褐 T_o-O_fの汚れたもの におい黄橙色土ブロック(径2mm以上)15%
8. 10Y R5/4 におい黄褐 砂含む

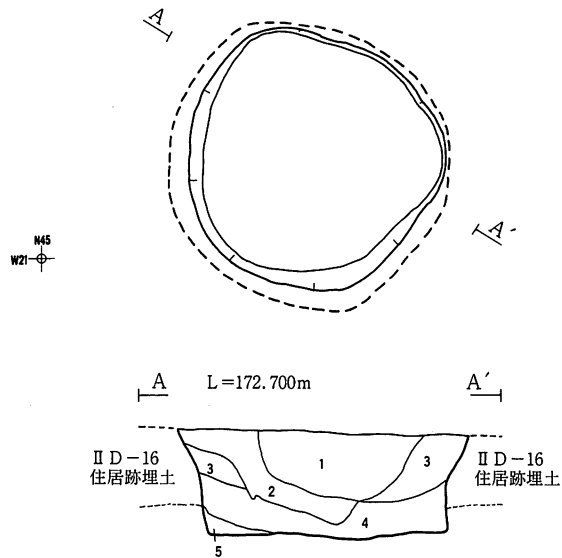
II D 7 h-2 土坑



II D 7 h-2 土坑 A-A'

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)10%
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐 におい黄橙色土ブロック(径2mm以上)含む におい黄色土ブロック(径2mm以上)多量 褐色土ブロック(径2~5mm)微量
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 上位に黒褐色土混入 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)微量 灰黄色土ブロック(径10mm以上)微量
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 におい黄橙色土ブロック(径2~5mm)微量

II D 8 a 土坑



II D 8 a 土坑 A-A'

1. 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 締りやや疎 灰黄色土・炭化物混入
2. 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 灰黄色土小ブロック・炭化物混入
3. 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り中 パミス少量混入
4. 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締りやや疎 灰黄色土粒・パミス・炭化物混入
5. 10Y R6/4 におい黄褐 粘性無し 締りやや疎 黒褐色土混入

0 1:50 1m

第52図 II D 7 h-1, 2・II D 7 i・II D 8 a 土坑

＜検出状況・重複関係＞ⅡD8dグリッド内に位置する。ⅡD-7 竪穴住居跡のカマド精査時に、床面のカマド下及び西側付近で、黄褐色土を含む黒褐色土の不整な円形の広がりとして検出された。ⅡD-7 竪穴住居跡に伴う可能性もあるが、詳細は不明である。また、ⅡD8d-3 土坑と重複する。新旧関係は不明である。

＜規模・形態＞開口部径170cm×145cm、底部径130cm×109cm、深さは29cmである。平面形は不整な円形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅳ層中に構築されている。

＜埋土＞黄褐色土を含む黒褐色土を主体として構成され、上位には灰白色土が混入する。

遺物 (写真図版100-352・353)

＜出土状況＞土師器が2点出土している。

＜土師器＞352はロクロ使用成形された坏の体部下位～底部の一部を残す、内面がミガキ後黒色処理された破片であり、底面は再調整されている。353は非ロクロ使用成形の甕体部上位破片であり内面ナデ、外面ナデとミガキ調整される。

時期 352の出土により平安時代に属するであろう。

ⅡD8d-2 土坑 (第53図、写真図版56)

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅡD8dグリッド内に位置する。ⅡD-7 竪穴住居跡の床面西側隅において、黒褐色土の楕円形の広がりとして検出された。ⅡD-7 竪穴住居跡に伴う可能性もあるが詳細は不明である。

＜規模・形態＞開口部径69cm×55cm、底部径59cm×45cm、深さは15cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁は緩やかに外傾し、断面形は皿状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅳ層中に構築されている。

＜埋土＞単層で、褐色土の混入する黒褐色土が堆積する。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

ⅡD8d-3 土坑 (第53図、写真図版57)

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅡD8dグリッド内に位置する。ⅡD8d-1 土坑の精査時に、土坑の南西側壁面で断面プランを検出した。ⅡD8d-1 土坑と重複する。新旧関係は不明である。

＜規模・形態＞開口部径〔62〕cm×46cm、底部径〔26〕cm×34cm、深さは〔30〕cmである。平面形は楕円形を呈すると考えられる。壁の西側は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形状を呈すると考えられる。底面はⅣ層及びⅡD8d-1 土坑の埋土中に構築されている。

＜埋土＞上位には黒褐色土が堆積し、中位～下位は黄褐色土等の混入する暗褐～褐色土を主体として構成される。

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 規模・形状から柱穴の可能性もある。時期は不明である。

ⅡD8d-4 土坑 (第53図、写真図版57)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD8dグリッド内に位置する。ⅡD-7 竪穴住居跡のカマド精査後、カマド脇東側で、カマドを載る柱穴状の平面プランを検出した。検出状況からⅡD-7 竪穴住居跡を載ると考えられる。

<規模・形態>開口部径54cm×52cm、底部径26cm×25cm、住居床面からの深さは53cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、開口部の東側では緩やかに外傾して開く。底面は平坦で、Ⅳ層中に構築されている。

<埋土>8層の黄褐色土の混入する黒色土が柱痕跡、9層の黄褐色土・灰褐色土の混入する黒褐色土が掘り方埋土と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期・性格 規模・形状・埋土から柱穴と考えられる。時期は不明である。

ⅡD8f 土坑 (第53図、写真図版57)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD8fグリッドの南西側に位置する。Ⅳ～Ⅴ層の漸移層面で、灰黄色火山灰土・暗オリーブ褐色土・黄褐色土・黒褐色土等が斑状に混じった混合土のほぼ円形の広がりとして検出された。他の遺構との重複はない。

<規模・形態>開口部径270cm×250cm、底部径230cm×220cm、深さは70cmである。平面形はほぼ円形である。壁はやや外傾して立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面はⅤ層中に構築されている。

<埋土>上位は暗オリーブ褐色、黒色、黒褐色、褐色土主体で、灰黄火山灰土・にぶい黄橙色土ブロックを含む。中位は、黄褐色土と暗灰黄色土の混合土及び汚れた大不動火山灰土がブロック状に混じる土が主体である。下位は黄褐色土主体で部分的に暗灰黄～灰黄色土がブロック状に混じる。最下位には明赤褐色焼土・暗灰黄色土・黄褐色土・浅黄色土・黒色土がブロック状に混じった土が2～4cm堆積していた。人為堆積と考えられる。最下位の焼土を含む層は投げ込まれたものであろうか。

遺物 (第104図357、写真図版100-354～357)

<出土状況>土師器3点と鉄製品1点が出土したほか、底面直上の焼土を含む層から炭化穀類が出土している。

<土師器>354はロクロ使用成形内面ミガキ後黒色処理の坏口縁部破片、355は非ロクロ使用成形された甕の口縁部～体部上位を残す破片であり、内面ヨコナデ、外面口縁部ヨコナデ体部縦ヘラナデ調整があり、頸部に段があるほか窄んだ後口縁部が長く強く外湾する器形である。356は非ロクロ使用成形された内外面ともヨコナデ調整された甕の口縁部破片であり、口唇部は角張り沈線状に軽く凹む。

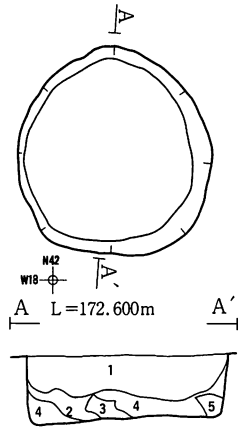
<金属製品>357の鉄製品は刀子の一部と推測される。

<自然遺物>サンプリングした炭化穀類3.05g中に、イネ1229粒・コムギ1粒・アワ1粒・ヒエ34粒が含まれていた。

時期 出土した土師器坏の様相から平安時代の可能性がある。

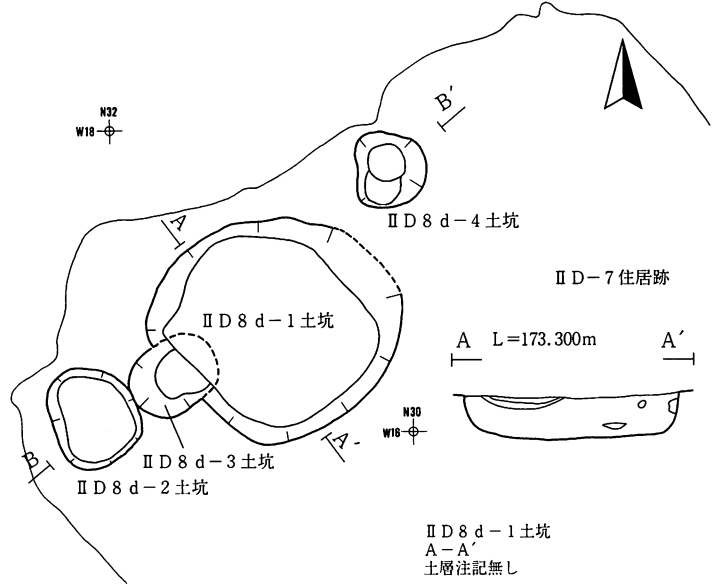
ⅡD8g 土坑 (第54図、写真図版57)

II D 8 b 土坑

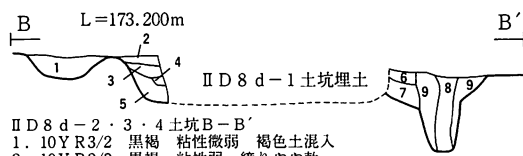


- II D 8 b 土坑 A-A'
- 10Y R2/2 黒褐 褐、黄褐色土ブロック含む
炭化物2%
 - 10Y R3/1 黒褐 暗褐、灰白色土ブロック含む
炭化物1%
 - 10Y R4/4 褐 暗褐色土・黄褐色土等との混合土
炭化物1%
 - 10Y R3/3 暗褐 黒褐色土・黄褐色土等との混合土
炭化物1%
 - 10Y R3/1 黒褐 炭化物1%

II D 8 d-1・2・3・4 土坑

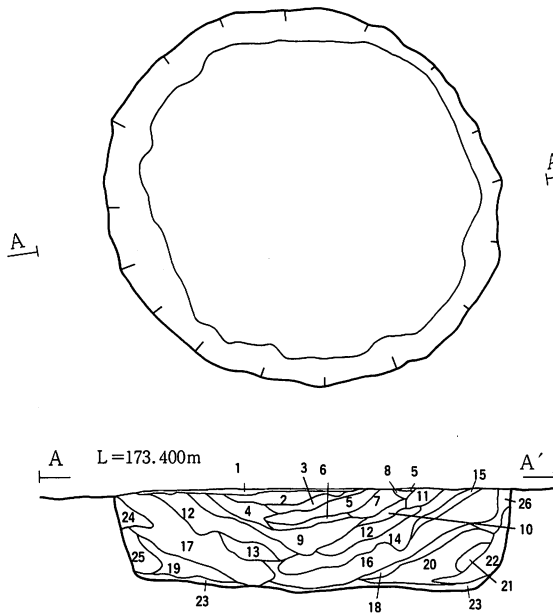


II D 8 d-1 土坑
A-A'
土層注記無し



- II D 8 d-2・3・4 土坑 B-B'
- 10Y R3/2 黒褐 粘性微弱 褐色土混入
 - 10Y R2/3 黒褐 粘性弱 締りやや軟
 - 2.5Y3/4 暗褐 粘性弱 締りやや疎 黄橙色土小粒含む 黄褐色土・バミス混入
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締り中 やや砂質
 - 10Y R4/4 褐 粘性無し 締りやや疎 黄褐色土ブロック混入
 - 5 Y R5/8 明赤褐 粘性無し 締り疎 焼土層
 - 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締り疎 黄褐色土・バミス混入
 - 10Y R2/1 黒 粘性無し 締り疎 黄褐色土疎らに混入
 - 10Y R3/1 黒褐 粘性無し 締り中 黄褐色土・灰褐色土混入

II D 8 f 土坑



- II D 8 f 土坑 A-A'
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト 灰黄色土ブロック (径2~10mm) 含む
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土との混合土 灰黄色土ブロック (径2~5mm) 微量 明黄褐色バミス2~3%
 - 2.5Y3/2 黒褐 シルト 明黄褐色バミス微量 灰黄色土ブロック (径2~5mm) 微量 灰黄色バミス (径2~10mm) 微量 炭化物微量
 - 10Y R3/1 黒褐 シルト 黒色土・黄褐色土混入 明黄褐色バミス (径2~5mm) 含む におい黄橙色土ブロック (径10mm以上) 微量
 - 10Y R4/6 褐 シルト 暗灰黄色土との混合土 明黄褐色バミス1% 灰白色バミス (径1~2mm) 微量 浅黄色土ブロック (径2~5mm) 微量 炭化物微量
 - 10Y R2/1 黒 におい黄褐色土との混合土 におい黄褐色土ブロック (径2~5mm) 5%
 - 10Y R4/6 褐 シルト 暗灰黄色土との混合土 明黄褐色バミス (径1~2mm) 微量 におい黄褐色バミス (径1~2mm・T o - b ?) 微量 褐色土粒 (径1~2mm) 微量
 - 10Y R5/6 黄褐 シルト 暗灰黄色土との混合土 明黄褐色バミス (径1~2mm) 2%
 - 10Y R5/6 黄褐 シルト 暗灰黄色土との混合土 明黄褐色バミス (径2~5mm) 微量 灰白色バミス微量 におい黄褐色土ブロック (径2~5mm) 5%
 - 10Y R4/6 褐 シルト 暗灰黄色土・におい黄褐色土との混合土 明黄褐色バミス (径1~2mm) 微量 灰白色バミス (径1~2mm) 微量
 - 2.5Y3/2 黒褐 シルト 黄褐色土混入 明黄褐色バミス (径2~10mm) 含む
 - 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト ブロック におい黄色土ブロック・灰黄色土ブロックとの混合土 明黄褐色バミス (径1~2mm) 微量
 - 2.5Y3/2 黒褐 シルト 灰黄色土ブロック (径2~5mm) 1% 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 褐色土粒 (径1~2mm) 微量
 - 2.5Y3/2 黒褐 シルト 上位は暗灰黄色を呈する 灰黄色土ブロック (径2~5mm) 1% 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 褐色土粒 (径1~2mm) 微量
 - 10Y R5/6 黄褐 シルト 暗灰黄色土との混合土
 - 10Y R5/8 黄褐 シルト T o - H 下位に黒褐色土混入 明黄褐色バミス (径1~2mm) 5%
 - 10Y R5/8 黄褐 シルト T o - H 暗灰黄色土 (火山灰土の汚れたもの) との混合土 黄褐色土ブロック (径2mm以上) 含む におい黄褐色土 (T o - O f) ブロック (径1~5mm) 含む 黒褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 炭化物微量
 - 10Y R5/8 黄褐 シルト 暗灰黄色土との混合土 (17層より黄褐色土多い) 黄褐色土ブロック (径2mm以上) 含む におい黄褐色土 (T o - O f) ブロック (径1~5mm) 含む 黒褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 灰白色バミス (T o - O f か T o - b 径10mm) 含む 炭化物微量
 - 10Y R5/8 黄褐 シルト 暗灰黄色土・暗灰黄色土との混合土 におい黄色粘質土ブロック (径10mm以上) 含む 炭化物微量
 - 10Y R5/8 黄褐 粘土質シルト 明黄褐色バミス (径2~5mm) 微量 暗灰黄色土混入
 - 2.5Y5/6 黄褐 砂質シルト 浅黄色土ブロック (径10mm以上) 微量
 - 2.5Y6/3 におい黄 シルト 砂含む
 - 5 Y R5/6 明赤褐 焼土 ブロック 暗灰黄色土ブロック・黄褐色土ブロック (径10mm以上) との混合土 炭化物多量に含む 下位に黒色土 (炭化殻類含む) 浅黄色土混入
 - 10Y R5/8 黄褐 シルト 砂含む 暗褐色土ブロック含む
 - 2.5Y6/3 におい黄 シルト 砂含む
 - 10Y R5/8 黄褐 シルト におい黄色土との混合土

0 1:50 1m

第53図 II D 8 b・II D 8 d-1, 2, 3, 4・II D 8 f 土坑

遺構

<検出状況・重複関係> II D 8 g・h グリッド内に位置する。V層上面において、円形の土坑プランを載る、黄褐色土粒を含む黒～黒褐色土の隅丸方形に近似する円形のプランとして検出された。II D 8 h-1土坑を載る。

<規模・形態> 開口部径340cm×320cm、底部径298cm×252.5cm、深さは89cmである。平面形は隅丸方形に近似する円形を呈する。壁の北側は、ほぼ直立して立ち上がった後、開口部で外傾して開き、南側は緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦で、V層中に構築されている。

<埋土> 上位は黄褐色土粒を若干含む黒～黒褐色土を主体として構成され、中位～下位はにぶい黄橙色土等を含む、にぶい黄褐色を呈する混合土を主体として構成される。壁付近には黒褐～暗褐色土主体の混合土が堆積している。

遺物 (写真図版100-358~361)

<出土状況> 4点の土師器が出土している。

<土師器> 358はロクロ使用成形され内面ミガキ後黒色処理の坏口縁部破片である。359はロクロ使用成形された甕の口縁部破片であり、内外面にロクロナデ調整痕を残す。360は非ロクロ使用成形され内外面にナデ調整があり頸部から大きく外湾する甕口縁部破片である。361は非ロクロ使用成形であるが、輪積み痕を残し口縁部がヨコナデ、体部が粗雑なヘラナデ調整された甕の口縁部～体部上位を残す破片である。

時期 358~360の特徴は平安時代の土師器の特徴であり、平安時代の可能性が強い。

II D 8 h-1 土坑 (第54図、写真図版58)

遺構

<検出状況・重複関係> II D 8 h グリッド内に位置する。V層上面において、隅丸方形に近似する円形の土坑プランに截られる褐色土及び黄褐色土の円形のプランとして検出された。II D 8 g 土坑に截られる。

<規模・形態> 開口部径160cm×〔141〕cm、底部径188cm×176cm、深さは91cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は内傾して立ち上がり、断面形はフラスコ状を呈する。底面は平坦で、V層中に構築されている。

<埋土> 上位はにぶい黄褐色土の混入する褐色土を主体として構成され、中位は黄褐色及びにぶい黄橙色砂質土が主体である。下位はにぶい黄橙色土主体で、水性堆積の様相を呈する。最下位にはにぶい黄褐色土が堆積する。自然堆積の様相を呈する。

遺物 (第104図362~364、写真図版100)

<出土状況> 縄文土器が3点出土している。

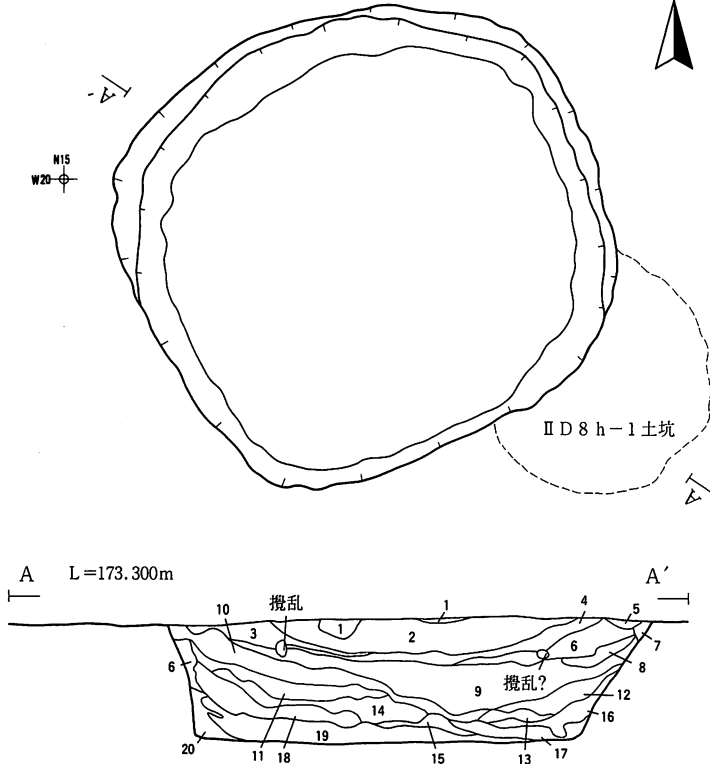
<出土状況> 362は体部が大きく膨らみ無文の器面に沈線と隆起帯の貼付で施文する後期初頭に属する十腰内I式土器であり、体部中位～底部を残存する。363・364はともに器面に縄文のみを付す。363は体部、364は口縁部を含む土器片である。付される縄文は両者ともLR横回転による単節斜行縄文であるが、364は細い原体を使用している。

時期 出土した土器に後期初頭に属する個体が存在することから、縄文後期頃に位置づけられようか。

II D 8 h-2 土坑 (第55図、写真図版58)

遺構

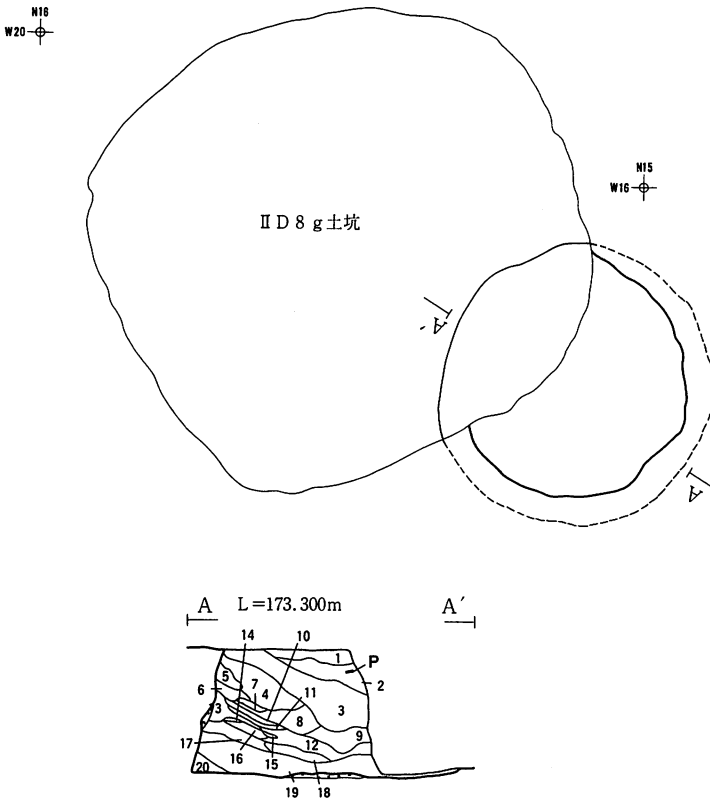
II D 8 g 土坑



II D 8 g 土坑 A-A'

1. 10Y R3/3 暗褐 耕作による攪乱?
2. 10Y R2/1 黒 黄褐色土粒若干 炭化物若干 (1%以下)
3. 10Y R3/2 黒褐 黄褐色土粒若干 褐色土ブロック若干 炭化物1%
4. 10Y R4/3 におい黄褐 黒褐色土小ブロック含む 漸移層的色調
5. 10Y R5/4 におい黄褐 暗褐色土ブロック含む (混合土)
6. 10Y R4/1 におい黄褐 炭化物若干
7. 10Y R5/4 におい黄褐 10Y R6/4におい黄橙色土ブロック含む
8. 10Y R4/3 におい黄褐 10Y R6/4におい黄橙色土ブロック含む (混合土) 炭化物1%
9. 10Y R4/4 褐 10Y R6/4・7/3におい黄橙色土ブロック含む (混合土) 炭化物若干
10. 10Y R6/4 におい黄橙 におい黄褐色土ブロック・10Y R7/3におい黄橙色土ブロック含む (混合土) 炭化物1%
11. 10Y R3/2 黒褐 10Y R6/4・7/3におい黄橙色土小ブロック含む 炭化物1%
12. 10Y R5/4 におい黄褐 10Y R6/4・7/3におい黄橙色土ブロック含む (混合土)
13. 10Y R5/4 におい黄褐 10Y R6/4におい黄橙色土ブロック含む (混合土)
14. 10Y R4/3 におい黄褐 10Y R6/4・7/3におい黄橙色土小ブロック含む (混合土)
15. 10Y R4/3 におい黄褐 10Y R6/4・7/3におい黄橙色土ブロック含む (混合土)
16. 10Y R3/3 暗褐 褐色土ブロック含む (混合土) 炭化物3% (薄層有り)
17. 10Y R4/3 におい黄褐 黒褐色土ブロック・10Y R6/4・7/3におい黄橙色土ブロック含む (混合土)
18. 10Y R3/1 黒褐 暗褐色土ブロック・10Y R6/4におい黄橙色土ブロック含む 炭化物若干
19. 10Y R4/3 におい黄褐 10Y R6/4・7/3におい黄橙色土ブロック含む (混合土)
20. 10Y R3/2 黒褐 10Y R6/4・7/3におい黄橙色土ブロック含む 炭化物1%

II D 8 h-1 土坑



II D 8 h-1 土坑 A-A'

1. 7.5Y R4/3 褐 におい黄褐色土20%混入 To-Ch 5% To-Nb微量
2. 10Y R4/6 褐 To-Ch 3%
3. 10Y R5/8 黄褐 砂質シルト におい黄褐色土15%・におい黄褐色土5%混入 To-Ch 3% To-Of起源?
4. 10Y R6/4 におい黄橙 砂質シルト 10Y R7/2におい黄褐色土10%混入 To-Of起源?
5. 10Y R7/2 におい黄橙 砂質シルト 10Y R6/4におい黄褐色土30%混入 To-Of起源?
6. 10Y R8/2 灰白 砂質シルト To-Of
7. 10Y R4/6 褐
8. 10Y R5/4 におい黄褐
9. 10Y R3/4 暗褐
10. 10Y R4/6 褐 灰白色土ブロック (To-Of) 20%混入
11. 10Y R5/6 黄褐
12. 7.5Y R4/6 褐
13. 10Y R7/2 におい黄橙 10Y R7/3におい黄褐色土との混合土 砂含む
14. 10Y R7/2 におい黄橙 10Y R7/3におい黄褐色土との混合土 砂多量に含む
15. 10Y R7/2 におい黄橙 10Y R7/3におい黄褐色土との混合土
16. 10Y R7/2 におい黄橙 10Y R7/3におい黄褐色土との混合土 黒褐色土ブロック含む
17. 10Y R7/2 におい黄橙 10Y R7/3におい黄褐色土・におい黄褐色土との混合土 砂含む
18. 10Y R5/4 におい黄褐 におい黄褐色土ブロック10%
19. 10Y R4/3 におい黄褐 炭化物微量
20. 7.5Y R4/6 褐

0 1:50 1 m

第54図 II D 8 g・II D 8 h-1 土坑

<検出状況・重複関係>ⅡD8hグリッド内に位置する。V層上面において、黒褐色～暗褐色土の隅丸方形のプランとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径349cm×320cm、底部径290cm×241cm、深さは157cmである。平面形は楕円形を呈する。壁はほぼ直立して立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は概ね平坦で、V層下面の砂層まで掘り込まれている。

<埋土>上位は黒～黒褐色土が主体である。中位はにぶい黄橙色土ブロックを含む褐色土が主体、下位は暗褐色の粗砂が堆積する。

遺物 (第104図365～368、写真図版100-365～369)

<出土状況>縄文土器1点、弥生土器3点、土師器1点が出土している。

<縄文土器>368は器面に0段多条RL横回転による単節斜行縄文を施文した後、2状ほぼ並行して横走する沈線を付す。後期中葉頃の土器であろう。

<弥生土器>365は器表に弥生末期赤穴式土器に特徴的に見られる縄文を付す体部下位～底部を残す破片である。367は口縁端部が肥厚する口縁部破片であるが口唇部にも撚糸文を付す特徴がある。369は輪積み痕を残し口縁が緩い波状となる無文の口縁部破片である。いずれも弥生末期の土器片と推察される。

<土師器>366は非ロクロ使用成形され底部に木葉痕を付す甕の体部下端～底部を残す破片である。

時期 366の特徴は平安時代の特徴であり平安時代に位置づけられる。

ⅡD9a-1土坑 (第55図、写真図版58)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD9aグリッド内に位置する。ⅡD-16竪穴住居跡の精査時に、北西壁南端の壁面上部において、黒褐～暗褐色土の断面プランとして検出された。PP507に截られている可能性がある。

ⅡD-16竪穴住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径(84)cm×77cm、底部径(67)cm×53cm、深さは[26]cmである。平面形はほぼ円形を呈すると考えられる。断面形は皿状を呈し、底面と壁の区別が付かない。底面及び壁はⅣ層中に構築されている。

<埋土>褐色土ブロック・灰白色土ブロック・赤褐色焼土粒を含む暗褐色土を主体として構成される。2・3層はPP507の埋土と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

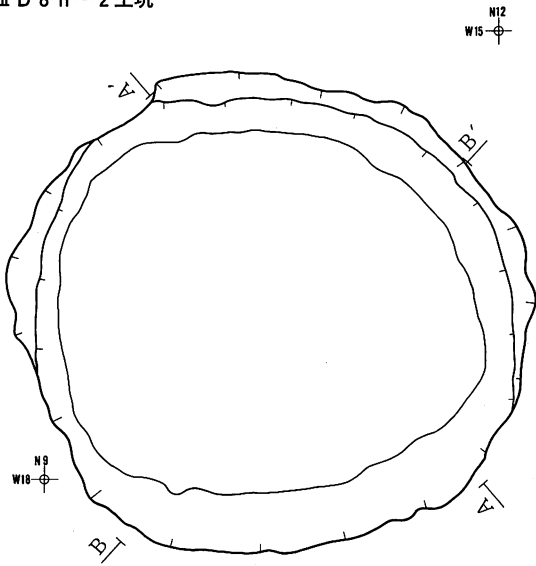
ⅡD9a-2土坑 (第55図、写真図版58)

遺構

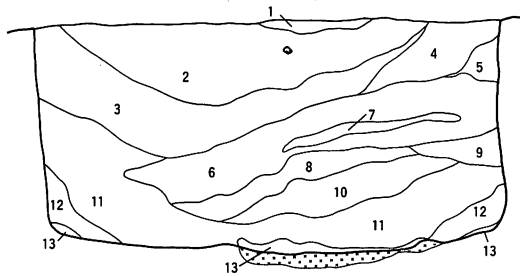
<検出状況・重複関係>ⅡD9aグリッド内に位置する。ⅡD-15竪穴住居跡の精査後、北壁東寄りのⅣ層上面において、黒褐色土の半楕円形のプランとして検出された。ⅡD-15竪穴住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径95cm×(68)cm、底部径80cm×(55)cm、深さは[7]cmである。平面形は楕円形を呈すると考えられる。断面形は浅皿状を呈し、底面と壁の区別が付かない。底面及び壁はⅣ層中に構築さ

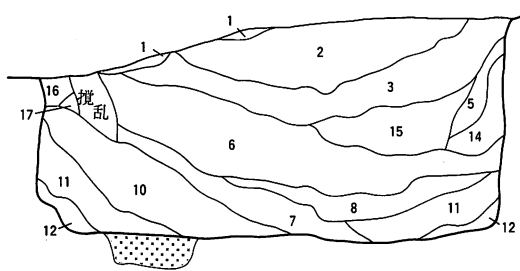
II D 8 h-2 土坑



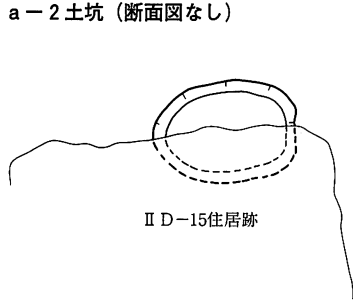
A L=173.120m(推定)



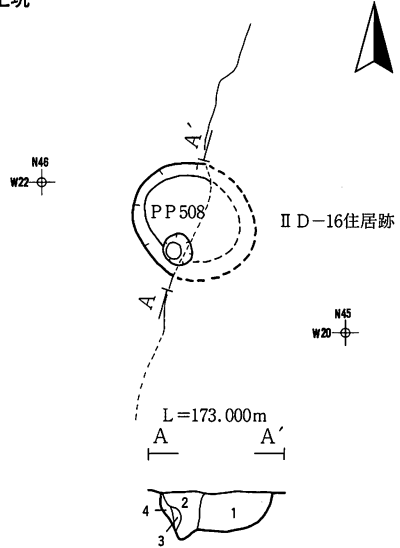
B L=173.100m(推定)



II D 9 a-2 土坑 (断面図なし)



II D 9 a-1 土坑



II D 9 a-1 土坑 A-A'

1. 10Y R3/3 暗褐 褐色土ブロック(径1~5mm)1% 灰白色土(To-a?)粒(径1~2mm)微量 赤褐色土粒微量 To-Nb(径1~2mm)微量 To-Ch(径1mm以下)微量 炭化物微量
2. 10Y R3/1 黒褐 暗褐色土との混合土 褐色土ブロック(径1~5mm)10% 灰白色土(To-a?)粒(径1~2mm)微量 To-Nb(径1~2mm)微量 To-Ch(径1mm以下)微量 炭化物微量
3. 10Y R3/3 暗褐 褐色土ブロック(径1~10mm)10%
4. 10Y R4/6 褐 To-Nb(径1~5mm)2%

II D 8 h-2 土坑 A-A'・B-B'

1. 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性あまり無し 締り有り To-Ch全体を含む
2. 10Y R2/1 黒 シルト 粘性無し 締り有り To-Ch全体を含む To-Nb1%
3. 10Y R3/2 黒褐 粘土質シルト 粘性やや有り 締り有り To-Ch全体を含む To-Nb1~3% 炭化物粒5%程度
4. 10Y R3/3 暗褐 粘土質シルト 粘性やや有り 締り有り To-Ch全体を含む To-Nb1%
5. 10Y R4/4 褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 暗褐色土との混合土
6. 10Y R4/4 褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り におい黄橙色土小ブロック10~15%
7. 10Y R3/3 暗褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り 褐色土小ブロック・炭化物粒含む
8. 10Y R5/4~5/6 におい黄褐~黄褐 粘土質シルト 粘性有り 締り有り におい黄橙色土小ブロック10%
9. 10Y R4/4 褐 シルト 粘性やや有り 締り有り 暗褐色土ブロック・黒褐色土小ブロックとの混合土
10. 10Y R3/4 暗褐 粗砂 粘性無し 締り有り 黒色土粒・黄褐色土粒・To-Nbとの混合土
11. 10Y R3/4 暗褐 粗砂 粘性無し 締り有り 10層より黒味有り
12. 10Y R4/6 褐 粘土 粘性有り 締り有り 地山崩落土
13. 10Y R4/3 におい黄褐 シルト 粘性有り 締り有り 粗砂混じり
14. 10Y R5/3 におい黄褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 地山崩落土
15. 10Y R3/3 暗褐 シルト 粘性やや有り 締り有り におい黄橙色土小ブロック10~15% 炭化物粒含む
16. 10Y R5/4 におい黄褐 シルト 粘性やや有り 締りあまり無し 地山崩落土小ブロック
17. 10Y R3/3 暗褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り 褐色土・黒褐色土との混合土

0 1:50 1m

第55図 II D 8 h-2・II D 9 a-1, 2 土坑

れている。

<埋土>単層で、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が主体である。

遺物 (第104図371、写真図版100-370・371)

<出土状況>土師器1点と鉄製品1点が出土している。

<土師器>370は非ロクロ使用成形され内面にヘラナデ外面にヘラケズリ調整のある甕の体部破片である。

<鉄製品>371は残存状態不良であるが刀子の一部かと推測される。

時期 出土した土師器の特徴から平安時代の可能性が強い。

ⅡD9b-1土坑 (第56図、写真図版59)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD9b・ⅢD0bグリッド内に位置する。Ⅲ層下面において検出された。ⅢD0b土坑、PP180と重複する。新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径154cm×75cm、底部径71cm×56cm、深さは14~25cmである。平面形は不整な長楕円形を呈する。断面形は浅皿状を呈し、底面と壁面の区別がつかない。底面及び壁はⅣ層中に構築されている。底面で径13~23cmの礫が3個検出されている。

<埋土>記録がないため、詳細は不明であるが、黄褐色土ブロックを含む黒褐~暗褐色土主体であると思われる。

遺物 (第104図372、写真図版100)

<出土状況>縄文土器が1点出土している。

<縄文土器>372は縄文土器の小破片である。

時期 縄文土器が出土しているが、時期は特定できない。

ⅡD9b-2土坑 (第56図、写真図版59)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD9bグリッド内に位置する。Ⅲ層下面において検出された。3号掘立柱建物跡(PP164)と重複する。新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径(85)cm×65cm、底部径(65)cm×48cm、深さは21~24cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>黄褐色土ブロックを含む黒色土主体である。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

ⅡD9d土坑 (第56図、写真図版59)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD9dグリッド内に位置する。Ⅲ層下面において検出された。PP356と重複す

る。新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径108cm×66cm、底部径100cm×53cm、深さは8cmである。平面形は隅丸長方形を呈する。断面形は浅皿状を呈し、底面と壁面の区別がつかない。底面は概ね平坦で、底面はⅣ層中に構築されている。

<埋土>単層で、砂の混入する暗褐色土が堆積する。

遺物 出土遺物はない。

時期 詳細は不明である。

ⅡD9e土坑（第56図、写真図版59）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD9eグリッド内に位置する。ⅡD-6 竪穴住居跡床面南西部において、黒褐色土の円形の広がりとして検出された。検出状況からⅡD-6 竪穴住居跡より古い遺構の可能性はある。

<規模・形態>開口部径180cm×175cm、底部径180cm×175cm、深さは70cmである。平面形は円形を呈する。壁は内傾して立ち上がり、開口部付近では外傾して開く。底面は概ね平坦で、Ⅲ～Ⅳ層中に構築されている。

<埋土>上位は黒褐色砂質土が堆積、中位は褐色土粒を含む黒褐色土主体、下位は褐色及び黄褐色土ブロックを含む黒色砂質土が主体である。壁際には地山崩落土と考えられる褐色土が堆積する。下位を除き、自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

ⅡD9g土坑（第56図、写真図版60）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡD9gグリッド内に位置する。ⅡD-19竪穴住居跡床面南西部のⅤ層上面において、残存する貼床土を截る、褐色土の円形の広がりとして検出された。ⅡD-19竪穴住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径150cm×145.5cm、底部径136.5cm×132cm、深さは55cmである。平面形は円形を呈する。壁は一部直立して立ち上がるのを除き、やや外傾して立ち上がる。断面形は筒状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅴ層中に構築されている。

<埋土>上位には灰白色土の混入する褐色土が堆積する。中位～下位は、にぶい黄褐色土ブロックが混入するにぶい黄褐色土を主体として構成される。

遺物（写真図版100-373）

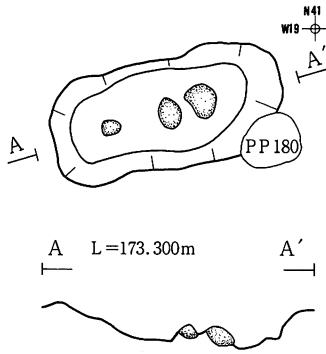
<出土状況>土師器が1点出土している。

<土師器>373は非ロクロ使用成形された内面にヨコナデ外面が縦ミガキ・ナデ調整された甕体部破片である。

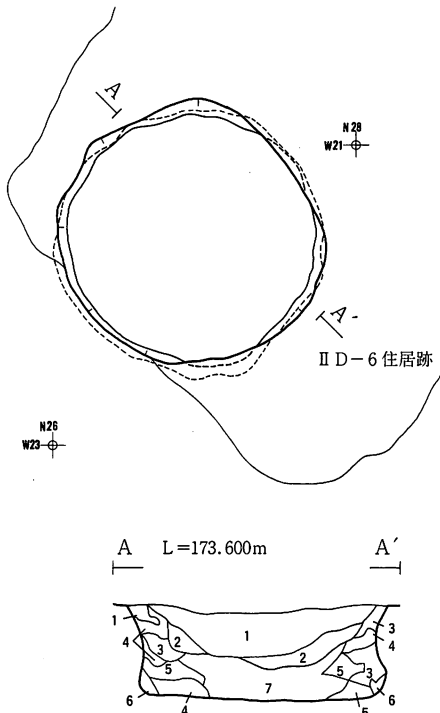
時期 土師器の特徴は奈良時代的であり、古代に位置づけられるだろう。

ⅡE0d土坑（第57図、写真図版60）

II D 9 b-1 土坑



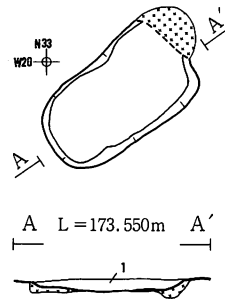
II D 9 e 土坑



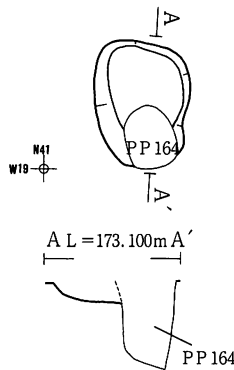
II D 9 e 土坑 A-A'

1. 10Y R2/2 黒褐 砂質シルト 粘性無し 締りやや有り To-C h全体を含む To-Nb 1%
2. 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り To-Nb 1% 褐色土粒を含む
3. 10Y R4/5 褐 シルト 粘性有り 締りやや有り 暗褐色土小ブロック含む 地山崩落土
4. 10Y R3/4 暗褐 シルト 粘性有り 締りやや有り 暗褐色土小ブロック含む 3層より黒味有り
5. 10Y R3/3 暗褐 シルト 粘性有り 締りやや有り 褐色土粒疎らを含む
6. 10Y R4/4 褐 砂質シルト 粘性有り 締り有り 地山崩落土(ローム下砂層)
7. 10Y R2/1 黒 砂質シルト 粘性有り 締り有り 褐、黄褐色土極小ブロック3~5% To-C h全体を含む

II D 9 d 土坑



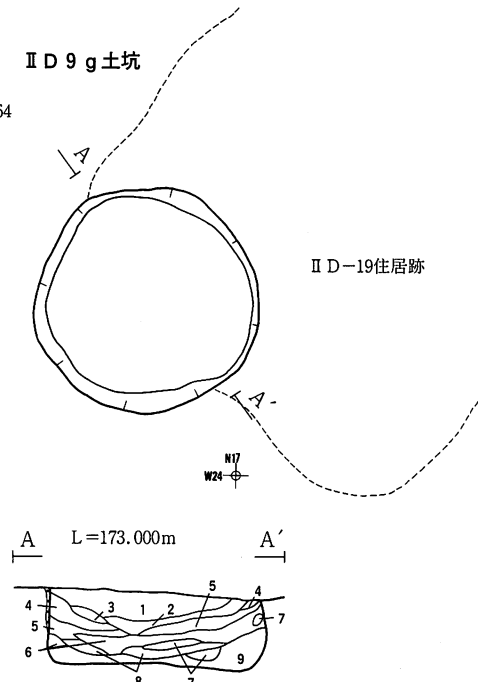
II D 9 b-2 土坑



II D 9 d 土坑 A-A'

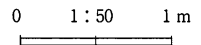
1. 10Y R3/4 暗褐 シルト 砂混じり

II D 9 g 土坑



II D 9 g 土坑 A-A'

1. 10Y R4/6 褐 粘性無し 締りやや疎 灰白色土混入
2. 10Y R4/3 におい黄褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄橙色土ブロック混入
3. 10Y R4/3 におい黄褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄橙色土ブロック多く混入
4. 10Y R4/3 におい黄褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄橙色土ブロック少量混入
5. 10Y R4/4 褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄橙色土ブロック混入
6. 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 におい黄褐色土ブロック少量混入
7. 10Y R6/4 におい黄橙 粘性無し 締りやや疎 ブロック
8. 10Y R6/4 におい黄橙 粘性無し 締りやや疎 暗褐色土混入
9. 10Y R5/4 におい黄褐 粘性無し 締り中



第56図 II D 9 b-1, 2 · II D 9 d · II D 9 e · II D 9 g 土坑

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡE0dグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、黒褐色～暗褐色土の不整な円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径318cm×240cm、底部径270cm×180cm、深さは130cmである。平面形は隅丸長方形を呈するが、南東側に張出しを持つ。壁は、中部に若干内傾する部分があるが、全体としては外傾して立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はⅤ層中に構築されている。概ね平坦で、貼床の痕跡が確認されている。

<埋土>上位は黄橙色土・黒色土の混入する暗褐色土、中位は黄橙色土の混入する褐色土で構成される。下位には、灰白色土等の混入する褐～にぶい褐色土が堆積する。人為堆積と考えられる。

遺物 (第104図374～376、写真図版100-374～377)

<出土状況>縄文土器1点と弥生土器が2点、土師器1点出土している。

<縄文土器>374は体部下部～底部を残存する破片であるが、器面が無文、底面に網代痕を持つ。時期は定かでないが、後期以降もしくは弥生時代の可能性がある。

<弥生土器>375は器面に0段多条のRL横回転による単節斜行縄文、376は変則的な網目縄文を付す体部破片であり、内面は両者ともナデ調整である。時期は断定出来ないが調整・縄文・胎土・雰囲気は弥生土器的である。

<土師器>377はロクロ使用成形され内面がミガキ後黒色処理された坏の口縁部破片である。

時期 土師器の出土から平安時代であろう。

ⅡE1d土坑 (第57図、写真図版60)

遺構

<検出状況・重複関係>ⅡE1dグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、黒褐～褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径270cm×260cm、底部径230cm×214cm、深さは109cmである。平面形は隅丸方形を呈するが、南東側に張出し状の膨らみを持つ。張り出し部は底面より1段高い面に構築されており、底面との比高差は40cmである。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はⅤ層中に構築されている。概ね平坦で、中央付近では炭化物が検出されている。また、南東壁際中央部で径27cmの礫を1個検出している。

<埋土>上位はにぶい黄褐色土粒を含む黒褐色砂質土、中位は暗褐～褐色砂質土とにぶい黄橙色土ブロック・褐色土ブロック等との混合土主体、下位は褐色土ブロックを含む黒褐色土が主体となって構成される。最下位にはにぶい黄橙色粘質土主体の混合土の堆積が見られる。底面に貼ったものであろうか。

遺物 (第102図378・379・382・383、写真図版101-378～383)

<出土状況>土師器が4点、縄文土器2点が出土している。

<土師器>土師器には坏1点(379)、甕3点(378・380・381)を含む。379の坏はロクロ使用成形され内面ミガキ後黒色処理され、底部は回転糸切り離し無調整である。甕はすべて非ロクロ使用成形され内面ヘラナデ、外面ヘラナデやヘラケズリ調整される。器形は頸部が窄み短く強く外反し、体部は軽く膨らむ形と推測される。

<縄文土器>2点(382・383)の内382の器表には0段多条RL横回転による単節斜行縄文に並行する沈線で施文された後期前葉の土器であり、383は変則的な網目縄文を付す土器片である。

時期 出土した土師器の特徴から10世紀代に位置づけられる。

Ⅱ E 2 a 土坑 (第57図、写真図版60)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ E 2 a グリッド内に位置する。Ⅳ層中において、菜根による攪乱部の埋土掘削中に検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径145cm×(121)cm、底部径135cm×119cm、深さは25cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、西半部と北側そして東側の一部のみ残存し、西側はほぼ垂直に立ち上がる。底面はⅤ層中に構築されており、概ね平坦であるが、菜根による攪乱を受けている。

<埋土>記録が無いため、詳細は不明である。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ E 2 d 土坑 (第57図、写真図版61)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ E 2 d グリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径138cm×132.5cm、底部径125cm×119cm、深さは32cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、やや外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅳ層中に構築されている。底面で極小ピットが4個検出されている。平面形は径10～19cmのほぼ円形を呈し、深さは5～15cmを測る。

<埋土>上位は暗褐色土粒を含む褐色土、下位は褐色粘土粒を含む褐色の粗砂で構成される。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ E 3 b 土坑 (第58図、写真図版61)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ E 3 b グリッド内に位置する。Ⅳ層下面において、にぶい黄褐色土ブロックを含むにぶい黄橙色土の楕円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

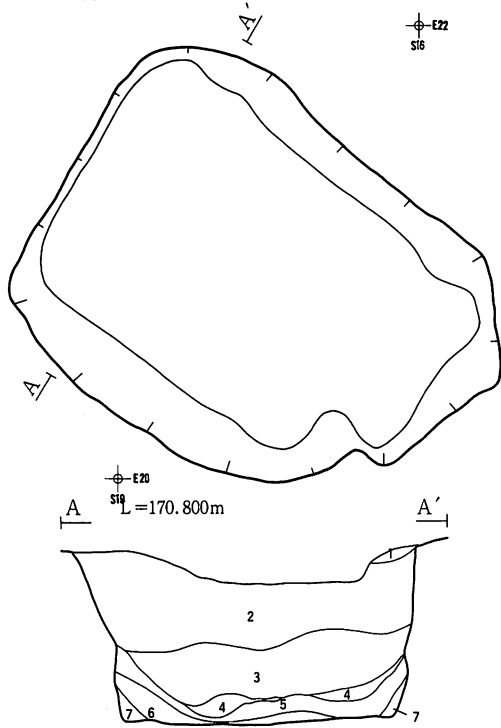
<規模・形態>開口部径209cm×189cm、底部径195cm×169cm、深さは40cmである。平面形は楕円形を呈する。壁は、やや外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅴ層中に構築されている。

<埋土>上位～中位にかけては黄褐色土ブロック・黄橙色土ブロック等を含むにぶい黄橙色土が主体、下位は黄褐色土・褐灰色土ブロックを含むにぶい黄褐色土主体で構成される。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

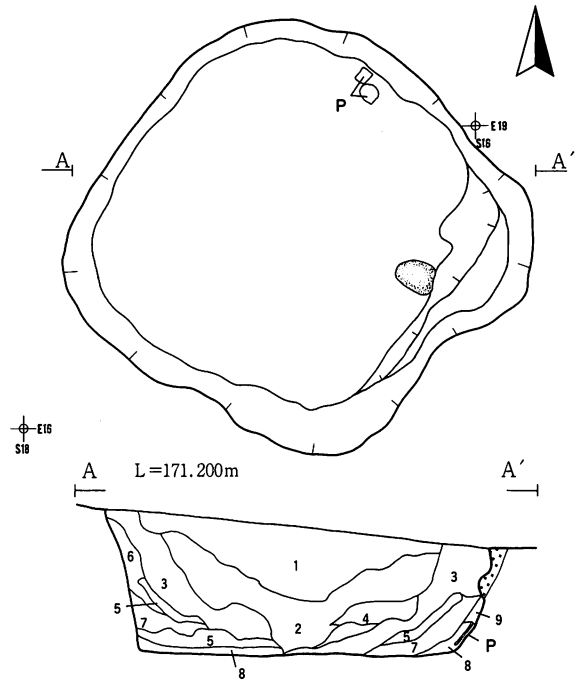
II E 0 d 土坑



II E 0 d 土坑 A-A'

1. 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締り疎 褐色土混入
2. 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締りやや疎 黄橙色土・黒色土混入
3. 10Y R4/6 褐 粘性微弱 締りやや疎 黄橙色土混入
4. 10Y R5/4 におい黄橙 粘性微弱 締り疎 灰黄色土少量混入
5. 10Y R4/6 褐 粘性微弱 締り中 灰白色土・黒色土混入
6. 10Y R4/4 褐 粘性微弱 締り中 灰白色土・黒色土混入
7. 10Y R4/3 におい褐 粘性微弱 締り中 灰白色土混入

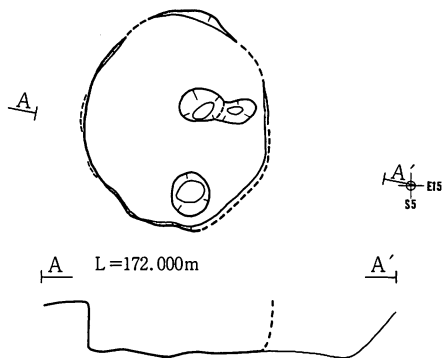
II E 1 d 土坑



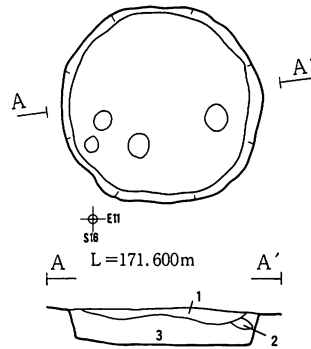
II E 1 d 土坑 A-A'

1. 10Y R3/2 黒褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り におい黄褐色土粒1~3%
2. 10Y R3/3 暗褐 砂質シルト 粘性やや有り 締りやや有り におい黄橙色土小ブロック・褐色土小ブロックとの混合土
3. 10Y R4/4 褐 砂質シルト 粘性やや有り 締りやや有り におい黄橙色土小ブロック・褐色土小ブロック・黒色土粒との混合土
4. 10Y R3/3 暗褐 シルト 粘性やや有り 締り有り 褐色土小ブロック・黒色土小ブロックとの混合土
5. 10Y R3/2 黒褐 シルト 粘性有り 締り有り 褐色土小ブロック含む
6. 10Y R3/4 暗褐 シルト 粘性有り 締りあまり無し におい黄橙色土小ブロック含む
7. 10Y R5/7 黄褐 シルト 粘性やや有り 締りあまり無し 地山崩落土
8. 10Y R6/4 におい黄橙 粘土質シルト 粘性有り 締りあまり無し におい黄橙色土・暗褐色土粒との混合土
9. 10Y R4/5 褐 砂質シルト 粘性やや有り 締りあまり無し 地山崩落土

II E 2 a 土坑



II E 2 d 土坑



II E 2 d 土坑 A-A'

1. 10Y R4/4 褐 シルト 粘性無し 締りあまり無し 暗褐色土粒1~3%
2. 10Y R5/6 黄褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 地山崩落土小ブロック
3. 10Y R4/6 褐 粗砂 粘性なし 締り有り 褐色粘土粒1%

0 1:50 1m

第57図 II E 0 d・II E 1 d・II E 2 a・II E 2 d 土坑

Ⅱ E 4 a 土坑 (第58図、写真図版61)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ E 4 a グリッド内に位置する。V層上面において、灰黄褐色土主体の混合土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径255cm×221cm、底部径242cm×218cm、深さは76cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、開口部の一部が緩やかに外傾して開くが、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は筒状を呈する。底面は概ね平坦で、V層中に構築されている。

<埋土>上位は灰黄褐色土あるいはにぶい黄褐色土主体の混合土、中位は黒褐～褐色土主体の混合土、下位はにぶい黄褐色土主体の混合土で構成される。人為堆積の様相を呈する。

遺物 (第105図384・385・387、写真図版101-384~387)

<出土状況>縄文土器3点と石器が1点出土している。

<縄文土器>384は器面にLR横回転、385は縦回転による単節斜行縄文を付した体部破片であり、386は無文の口縁部破片であるが、口唇部に縄文が付される。3点とも時期を明確にし難いが縄文と胎土の特徴から後期の可能性が強いが、386は弥生の可能性もある。

<石器>387は楕円形の河川礫の平坦面を使用面にした凹石である。

時期 縄文時代か弥生時代に属しようか。

Ⅱ E 5 a 土坑 (第58図、写真図版61)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ E 5 a グリッド内に位置する。V層上面において、暗褐色土の楕円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径190cm×172cm、底部径169cm×150cm、深さは74cmである。平面形は楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は若干の凹凸があるが、概ね平坦で、V層中に構築されている。

<埋土>上位はにぶい黄橙色土粒を含む暗褐色砂質土、中位はにぶい黄褐色土及び褐色土主体、下位はにぶい黄褐色砂質土主体で構成される。中位～下位は人為堆積の可能性がある。

遺物 (第105図388・390、写真図版101-388~390)

<出土状況>土師器2点と土製品1点が出土している。

<土師器>388は還元不足で焼成不良となった須恵器坏の体部下位～底部を残す破片である。389は非ロクロ使用成形された甕の体部上位の破片であり、内外面ともナデ調整される。

<土製品>390は土製の勾玉である。

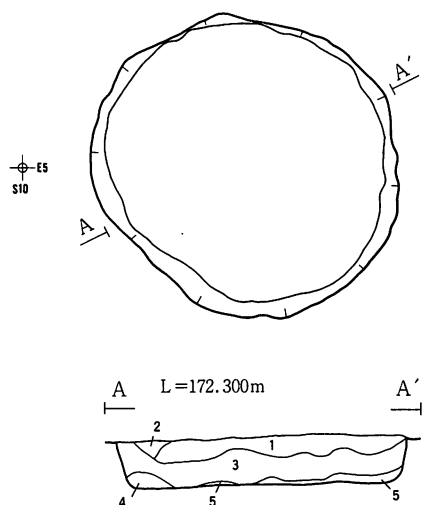
時期 出土した土師器から平安時代に位置づけられる。勾玉は奈良時代に位置づけられようか。

Ⅱ E 7 b 土坑 (第58図、写真図版62)

遺構

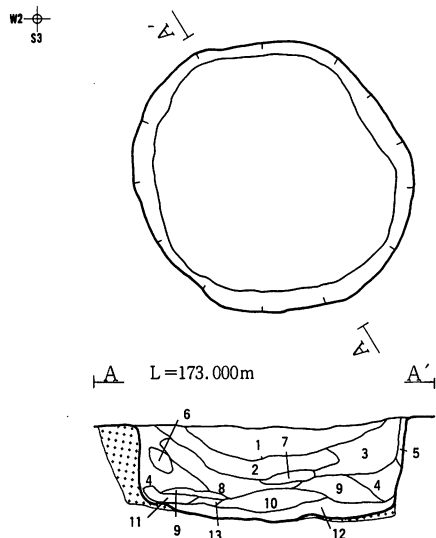
<検出状況・重複関係>Ⅱ E 7 b グリッド内に位置する。V層上面において、にぶい黄褐色土の方形の広が

II E 3 b 土坑



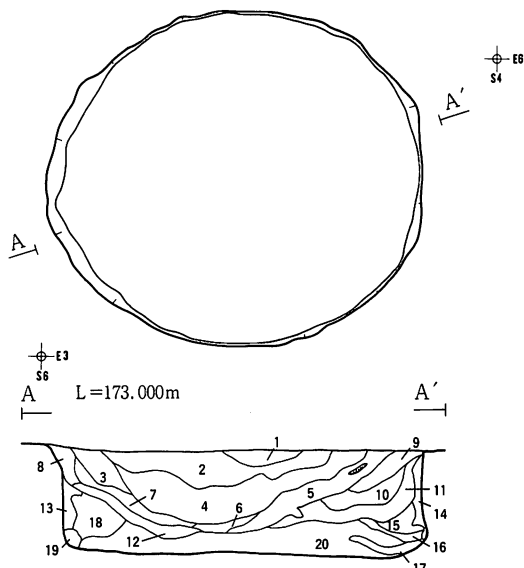
- II E 3 b 土坑 A-A'
1. 10Y R7/4 におい黄橙 におい黄褐色土ブロック含む
 2. 10Y R6/4 におい黄橙
 3. 10Y R6/4 におい黄橙 黄褐、黄橙色土ブロック含む
 4. 10Y R5/4 におい黄褐 黄褐、褐灰色土ブロック含む
 5. 10Y R5/3 におい黄褐 黄褐、褐灰色土ブロック含む

II E 5 a 土坑



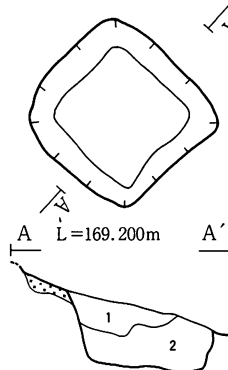
- II E 5 a 土坑 A-A'
1. 10Y R3/3 暗褐 砂質シルト 粘性やや有り 締りあまり無し におい黄橙色土粒1%
 2. 10Y R4/3 におい黄褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 明黄褐色土(地山)との混合土
 3. 10Y R4/4 褐 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 明黄褐色土粒3%
 4. 10Y R4/3 におい黄褐 シルト 粘性有り 締りやや有り 地山崩落土ブロック含む
 5. 10Y R7/2 におい黄橙 シルト 粘性やや有り 締りやや有り 地山崩落土
 6. 10Y R4/3 におい黄褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り におい黄褐色土との混合土
 7. 10Y R4/4 褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り におい黄褐色土との混合土
 8. 10Y R4/4 褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り におい黄褐色土小ブロック含む
 9. 10Y R2/1 黒 砂質シルト 粘性やや有り 締りあまり無し におい黄褐色土ブロック含む
 10. 10Y R5/4 におい黄褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り 灰白色浮石粒3%
 11. 10Y R3/2 黒褐 砂質シルト 粘性有り 締り有り
 12. 10Y R4/3 におい黄褐 砂質シルト 粘性やや有り 締り有り 明黄褐色土小ブロック含む
 13. 注記無し

II E 4 a 土坑



- II E 4 a 土坑 A-A'
1. 10Y R3/3 暗褐 灰白色土小ブロック若干 炭化物若干
 2. 10Y R4/2 灰黄褐 灰白、黒褐色土ブロック含む(混合土) 炭化物2%
 3. 10Y R3/2 黒褐 灰白、暗褐色土ブロック含む 炭化物1%
 4. 10Y R5/4 におい黄褐 褐色土・黄褐色土との混合土 暗褐色土ブロック含む 炭化物1%
 5. 10Y R2/3 黒褐 褐、におい黄橙色土ブロック含む(混合土) 炭化物若干
 6. 10Y R4/3 におい黄褐 黄褐、暗褐色土ブロック含む(混合土)
 7. 10Y R4/6 褐 黄褐、暗褐色土ブロック含む(混合土) 炭化物若干
 8. 10Y R4/4 褐 暗褐色土ブロック含む
 9. 10Y R4/6 褐 灰白、暗褐色土ブロック含む(混合土) 炭化物若干
 10. 10Y R3/2 黒褐 褐、暗褐色土ブロック含む 炭化物2%
 11. 10Y R4/4 褐 におい黄褐色土小ブロック含む
 12. 10Y R3/2 黒褐 褐、黄褐色土ブロック含む(混合土) 炭化物1%
 13. 10Y R4/4 褐 暗褐、灰白色土ブロック含む
 14. 10Y R7/2 におい黄橙 におい黄褐色土ブロック含む(壁崩落土)
 15. 10Y R4/4 褐 灰白色土ブロック含む 炭化物1%
 16. 10Y R4/3 におい黄褐 灰白、褐色土ブロック含む(混合土) 炭化物1%
 17. 10Y R4/4 褐 灰白色土ブロック含む 炭化物1%
 18. 10Y R4/6 褐 暗褐色土・黄褐色土・黒褐色土からなる混合土 炭化物1%
 19. 10Y R6/4 におい黄橙 褐色土ブロック含む
 20. 10Y R4/3 におい黄褐 灰白色土・暗褐色土・褐色土等からなる混合土

II E 7 b 土坑



- II E 7 b 土坑 A-A'
1. 10Y R4/4 褐 粘性無し 締り疎 木葉混入 新しい埋土
 2. 10Y R5/4 におい黄褐 粘性無し 締りやや疎 灰黄色土混入

0 1:50 1m

第58図 II E 3 b・II E 4 a・II E 5 a・II E 7 b 土坑

りとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径105cm×101cm、底部径69cm×69cm、深さは58cmである。平面形は隅丸方形を呈する。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は概ね平坦で、V層中に構築されている。

<埋土>灰黄色土の混入するにぶい黄褐色土が主体である。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅲ B 3 i 土坑 (第59図、写真図版62)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅲ B 3 i グリッド内に位置する。IV層中において、暗褐～褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径117.5cm×114cm、底部径114cm×103cm、深さは67cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は部分的に内傾して立ち上がるのを除き、ほぼ垂直に立ち上がるが、北東側の上部は外傾して開く。底面は概ね平坦で、IV層中に構築されている。

<埋土>上位は黄褐～明黄褐色土主体、下位は黄褐色土とにぶい黄橙色土がブロック状に混入する暗褐色土で構成される。下位は人為堆積層と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅲ B 4 j 土坑 (第59図、写真図版62)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅲ B 4 j グリッド内に位置する。IV層上面において、黒褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径116cm×107cm、底部径117cm×94cm、深さは39cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁の東側は直立ぎみに、あるいは内傾して立ち上がる。断面形はフラスコ状を呈すると推測される。底面は概ね平坦で、IV層中に構築されている。

<埋土>黄褐色土が混入する黒褐色土が主体である。壁際に堆積する明黄褐色土を含む黄褐色土は人為堆積と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ C 3 i 土坑 (第59図、写真図版62)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅱ C 3 i グリッド内に位置する。IV層下面において、黒褐色土主体の混合土の不整な長方形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

＜規模・形態＞開口部径122cm×103cm、底部径112cm×78cm、深さは32cmである。平面形は不整な長方形を呈する。壁は南東側のみ残存し、緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は浅皿状を呈するものと考えられる。底面はⅣ層中に構築されており、北西に向かって若干傾斜する。底面南東壁際では40×36cmの範囲に、厚さ2cm程のの焼土層が確認されている。また、壁にも焼けた痕跡が見られた。現地性と考えられる。

＜埋土＞黄褐色土ブロックを含む黒色土と暗褐色土の混合土が主体である。2層中にはT o - aブロックが含まれる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅲ C 3 j 土坑 (第59図、写真図版63)

遺構

＜検出状況・重複関係＞Ⅲ C 3 j グリッド内に位置する。Ⅳ層下面～Ⅴ層上面において、黒褐色土と黄褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

＜規模・形態＞開口部径217cm×199cm、底部径201cm×188cm、深さは58cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は平坦で、Ⅴ層中に構築されている。

＜埋土＞上位は黒褐色土主体の混合土、中位は黄褐色土及びオリーブ褐色土主体で、下位はにぶい黄褐色土ブロックを含む暗褐色土主体で構成される。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅲ C 5 c 土坑 (第60図、写真図版63)

遺構

＜検出状況・重複関係＞Ⅲ C 5 c グリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、暗褐色土と明黄褐色土の不整な楕円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

＜規模・形態＞開口部径94cm×68cm、底部径84cm×54cm、深さは35cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はⅣ層中に構築されており、西側に向かって傾斜する。

＜埋土＞上位は暗褐色土、下位はにぶい黄橙色土の混入する明黄褐色土で構成される。

遺物 出土遺物はない。

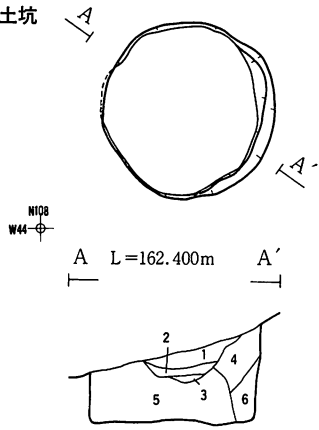
時期 不明である。

Ⅲ C 5 e 土坑 (第60図、写真図版63)

遺構

＜検出状況・重複関係＞Ⅲ C 5 e グリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、黒褐色土の不整な楕円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

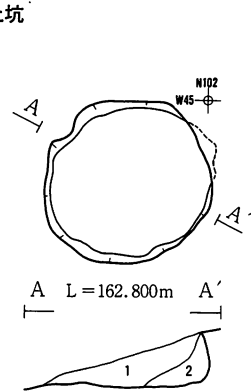
ⅢB 3 i 土坑



ⅢB 3 i 土坑 A-A'

1. 10Y R4/4 褐 粘性無し 締りやや軟
2. 10Y R6/6 明黄褐 粘性やや有り 締り硬 下位に黄褐色土混入
3. 10Y R5/6 黄褐 粘性やや有り 締り軟
4. 10Y R6/8 明黄褐 粘性やや有り 締り中 黄褐色土混入 炭化物微量
5. 10Y R3/3 暗褐 粘性非常に有り 締りやや硬 黄褐、に黄褐色土ブロック含む 人為堆積層
6. 地山 (掘り過ぎ)

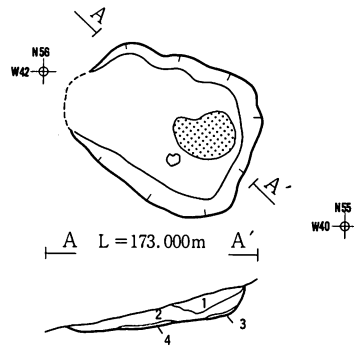
ⅢB 4 j 土坑



ⅢB 4 j 土坑 A-A'

1. 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締り軟 黄褐色土混入 黄褐色パミス (極小粒) 5~10%
2. 10Y R5/6 黄褐 粘性無し 明黄褐色土ブロック混入 黄褐色パミス (極小粒) 1% 人為堆積層

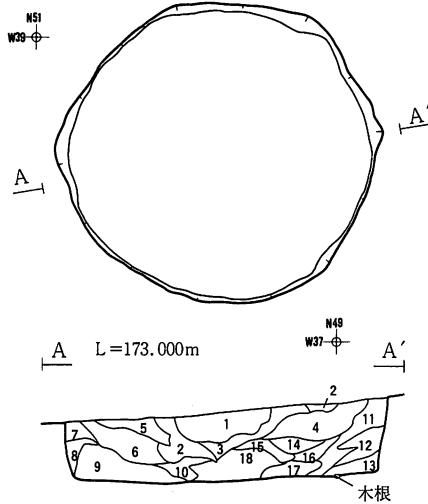
ⅢC 3 i 土坑



ⅢC 3 i 土坑 A-A'

1. 10Y R3/4 暗褐 黒褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径5~10mm) 微量
2. 10Y R2/1 黒 暗褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径1~5mm) 微量 T o - a ブロック微量
3. 5 Y R4/8 赤褐 焼土 地山が焼けたもの
4. 10Y R5/8 黄褐 暗褐色土との混合土

ⅢC 3 j 土坑



ⅢC 3 j 土坑 A-A'

1. 10Y R2/3 黒褐 に黄褐色土との混合土 明黄褐色パミス (径2~5mm) 微量
2. 10Y R4/3 に黄褐 黒褐色土との混合土 明黄褐色パミス (径1~2mm) 微量
3. 10Y R2/2 黒褐 に黄褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径10mm以上) 微量
4. 10Y R5/6 黄褐 明黄褐色土ブロック (径5~10mm) 微量 明黄褐色パミス (径1~10mm) 1% 赤褐色土粒微量
5. 2.5Y4/6 オリーブ褐 T o - H の汚れたもの 明黄褐色パミス (径1~5mm) 1%
6. 10Y R5/6 黄褐 オリーブ褐色土との混合土 明褐色パミス (径1mm以下) 微量 赤褐色パミス (径1~2mm) 微量 炭化物微量
7. 2.5Y5/4 黄褐 T o - O f の汚れたもの
8. 2.5Y6/3 に黄 T o - O f
9. 2.5Y6/3 に黄 暗オリーブ褐色土・暗褐色土との混合土 明黄褐色パミス (径1~2mm) 微量 炭化物微量
10. 2.5Y4/6 オリーブ褐 暗オリーブ褐色土・暗褐色土との混合土 明黄褐色パミス (径1~2mm) 微量 赤褐色パミス (径1~2mm) 微量 炭化物微量
11. 10Y R5/6 黄褐 明褐色土との混合土 に黄褐色粘質土ブロック (径10mm以上) 微量 明黄褐色パミス (径2~5mm) 微量 炭化物微量
12. 10Y R6/6 明黄褐
13. 10Y R6/6 明黄褐 筋状に黒褐色土混入 下位に黄褐色土混入
14. 10Y R5/6 黄褐 暗褐色土・に黄褐色土混入
15. 10Y R5/6 黄褐 に黄褐色土・暗褐色土・オリーブ褐色土との混合土 明黄褐色パミス (径1~2mm) 微量
16. 10Y R5/8 黄褐 明黄褐色パミス (径1~2mm) 微量
17. 10Y R5/8 黄褐 に黄褐色土・暗褐色土との混合土 明黄褐色パミス (径2~5mm) 微量
18. 10Y R3/4 暗褐 に黄褐色土ブロック (極小~極大) 20% 明黄褐色パミス (径1~5mm) 1% 赤褐色パミス (径1~2mm) 微量 炭化物微量

0 1 : 50 1 m

第59図 ⅢB 3 i・ⅢB 4 j・ⅢC 3 i・ⅢC 3 j 土坑

<規模・形態>開口部径179cm×160cm、底部径174cm×147cm、深さは99cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁は一部内傾して立ち上がるのを除き、ほぼ垂直に立ち上がり、西側の開口部付近はやや外傾して開く。断面形は基本的に筒状を呈する。底面はほぼ平坦で、Ⅳ層中に構築されている。

<埋土>上位は黒褐色土主体、下位は黄褐色土の混入する黒褐色土・褐色土を主体として構成される。

遺物（第105図391、写真図版101）

<出土状況>弥生土器が1点出土している。

<弥生土器>391は器面にL R縦回転による単節斜行縄文を付した器厚の薄い体部小破片である。

時期 出土した土器から弥生時代の可能性がある。

ⅢD0b土坑（第60図、写真図版63）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅢD0bグリッド内に位置する。Ⅱ層下面～Ⅲ層中において、黒褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。ⅡD9b-1土坑・PP418と重複する。新旧関係は不明である。

<規模・形態>開口部径91cm×84cm、底部径（80）cm×76cm、深さは25cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、緩やかに外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、Ⅲ層中に構築されている。底面で、柱穴状小ピットを1個検出した。平面形は、径27×17cmの楕円形を呈し、底面からの深さは15cmを測る。ただし、本遺構を截る柱穴である可能性も考えられる（PP460として登録）。

<埋土>単層で、白色粒・明黄褐パミスを含む黒褐色土が堆積する。

遺物（写真図版101-392）

<出土状況>土師器が1点出土している。

<土師器>392は胎土に金雲母が混在するロクロ使用成形された甕の頸部破片である。

時期 平安時代に属する。

ⅢD0c-1土坑（第60図、写真図版64）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅢD0cグリッド内に位置する。Ⅲ層下面において、黒色土・暗褐色土の楕円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径152cm×135cm、底部径135cm×109cm、深さは15.5cmである。平面形は楕円形を呈する。壁は、やや外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、Ⅳ層中に構築されている。

<埋土>暗褐色土及び暗褐色土と黄褐色土の混合土を主体として構成される。4層は新規柱穴埋土であろうか。

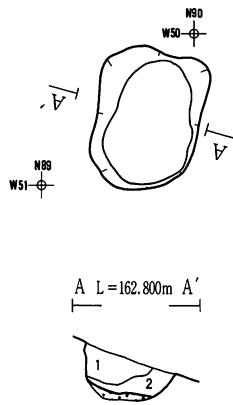
遺物（写真図版101-394）

<出土状況>土師器が1点出土している。

<土師器>394は非ロクロ使用成形された甕の体部上位の破片であり、内外面にナデ痕が見られる。

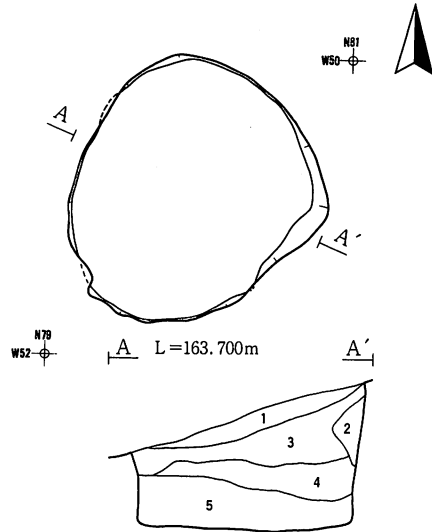
時期 土師器の時期から平安時代に位置づけられる。

ⅢC5c土坑



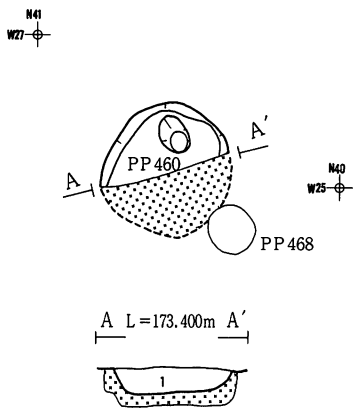
- ⅢC5c土坑 A-A'
 1. 10Y R3/4 暗褐 粘性有り 締り軟
 2. 10Y R6/8 明黄褐 粘性無し 締り軟 におい黄橙色土混入

ⅢC5e土坑



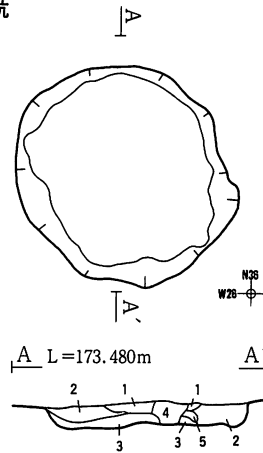
- ⅢC5e土坑 A-A'
 1. 10Y R2/2 黒褐 粘性やや有り 締り中
 2. 10Y R4/6 褐 粘性やや有り 締りやや軟 下位に黄褐色土混入 壁崩落土
 3. 10Y R2/3 黒褐 粘性中 締り中 黄橙色バミス3~5%
 4. 10Y R3/2 黒褐 粘性無し 締り軟 黄褐色土・褐色土混入 黄橙色バミス全体に含む 人為堆積層
 5. 10Y R4/6 褐 粘性無し 締り中 全体に黄褐色土混入 黄橙色バミス(径2mm以下)混入 人為堆積層

ⅢD0b土坑



- ⅢD0b土坑 A-A'
 1. 10Y R2/3 黒褐 白色粒(バミス?)含む 明黄褐バミス含む

ⅢD0c-1土坑



- ⅢD0c-1土坑 A-A'
 1. 10Y R2/1 黒 シルト 暗褐色土との混合土 明黄褐色バミス(径1mm以下・T o - C h?)含む
 2. 10Y R3/4 暗褐 シルト 明黄褐色バミス(径1mm以下)多量に含む
 3. 10Y R3/4 暗褐 シルト 黄褐色土との混合土 T o - N b?微量
 4. 10Y R2/1 黒 シルト 暗褐色砂質土との混合土 明黄褐色バミス(径1mm以下・T o - C h?)含む 柱穴?
 5. 10Y R5/8 黄褐 シルト T o - N b?微量

0 1:50 1m

第60図 ⅢC5c・ⅢC5e・ⅢD0b・ⅢD0c-1土坑

ⅢD0c-2土坑（第61図、写真図版64）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅢD0cグリッド内に位置する。Ⅲ層下面において、黒褐色土・オリーブ褐色土の楕円形の広がりとして検出された。平成62年度に一戸町教育委員会が調査を行ったBF33竪穴状遺構(中世)とPP474に截られる。

＜規模・形態＞開口部径166cm×145cm、底部径148cm×78cm、深さは29cmである。平面形は楕円形を呈する。壁は、やや外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、Ⅳ層中に構築されている。

＜埋土＞黄褐色土ブロックを含む黒褐色土とオリーブ褐色土の混合土を主体として構成される。上位には黄褐色土ブロックが多量に含まれる。人為堆積と考えらる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

ⅢD0d土坑（第61図、写真図版64）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅢD0dグリッド内に位置する。Ⅳ層上面において、黄褐色土主体の混合土のほぼ円形の広がりとして検出された。PP503に截られる。

＜規模・形態＞開口部径230cm×216cm、底部径223cm×212cm、深さは39cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は中央部がやや低くなっていて、Ⅳ層中に構築されている。

＜埋土＞灰白色土ブロックを含む黄褐色土・明黄褐色土を主体として構成される。最下位には焼土を含む層が見られる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

ⅢD0f-1土坑（第61図、写真図版64）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅢD0fグリッド内に位置する。Ⅴ層上面において、黒～黒褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。ⅢD0f-2土坑と重複する。新旧関係は不明である。

＜規模・形態＞開口部径222cm×213cm、底部径199cm×182cm、深さは106cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は開口部の一部が若干外傾するが、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は筒状を呈する。底面は概ね平坦で、Ⅴ層中に構築されている。

＜埋土＞上位は発泡の良い灰白色パミスを含む黒褐色土、中位は褐色土ブロックを含む暗褐色土、中位の壁際はⅣ層・Ⅴ層起源の汚れた火山灰土、下位は黄褐色土ブロック・にぶい黄橙色土ブロックを含む混合土で構成される。上位は自然堆積、中位～下位は人為堆積と考えられる。

遺物（第105図395・396・398～400、写真図版101・102-395～400）

＜出土状況＞縄文土器1点、弥生土器1点、土師器1点と石器が3点出土している。

＜縄文土器＞395は器面に単軸絡状体の回転による撚糸文が乱雑に付された胎土に繊維の混入した口縁部破片である。縄文前期の深郷田式に近似している。

＜弥生土器＞396は細いR Lの原体を斜め回転して縦方向の縄文を付す器厚の薄い体部破片である。

＜土師器＞397はロクロ使用成形された皿の口縁部破片である。

＜石器＞3点の石器には不定形1点（398）、楔形石器1点（399）、磨石1点（400）がある。

時期 出土した土師器より平安時代に位置づけられる。

ⅢD0f-2土坑（第61図、写真図版65）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅢD0fグリッド内に位置する。ⅢD0f-1土坑の南側壁面上部において、その断面プランを検出した。ⅢD0f-1土坑と重複する。新旧関係は不明である。

＜規模・形態＞開口部径〔81〕cm、底部径〔52〕cm、残存部の深さは23cmである。平面形は楕円形を呈すると推察される。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈すると推察される。底面はV層とⅢD0f-1土坑埋土中に構築されている。

＜埋土＞上位と下位は暗褐色土を主体とする混合土、中位は黄褐色土で構成される。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

ⅢD0g土坑（第62図、写真図版65）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅢD0gグリッド内に位置する。V層上面において、黒褐色土・灰黄褐色土主体の混合土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

＜規模・形態＞開口部径175cm×156cm、底部径124cm×110cm、深さは43cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はV層中に構築されている。

＜埋土＞上位は黒褐色土・暗褐色土等の混合土、中位は灰黄褐色土主体の混合土、下位はT o - O fブロックを含む混合土主体で構成される。全体に汚れた色調を呈する。

遺物（第106図401・402、写真図版102-401～403）

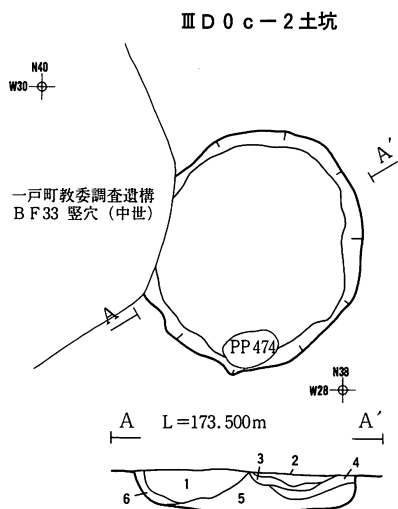
＜出土状況＞土師器1点、弥生土器2点、その他に不掲載であるが石器が出土している。

＜弥生土器＞2点（402・403）は、402は口縁部、403は体部下位～底部を残す破片である。402は器面に縦方向の縄文を付して端部を無文とし口唇部にも縄文を付す。403は器面に粗い撚糸文を付し器厚の薄い破片であり、底面は低い輪高台的である。

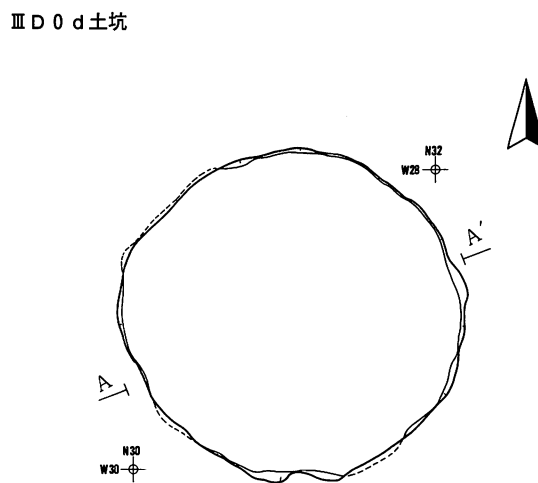
＜土師器＞401は非ロクロ使用成形された甕の体部下位～底部を残す破片である。

時期 土師器の出土により平安時代に属するであろう。

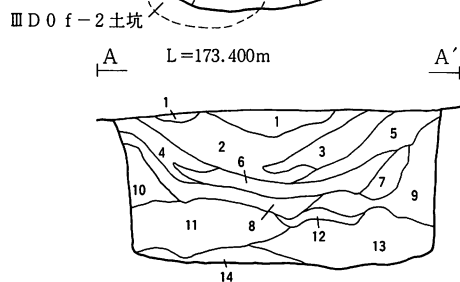
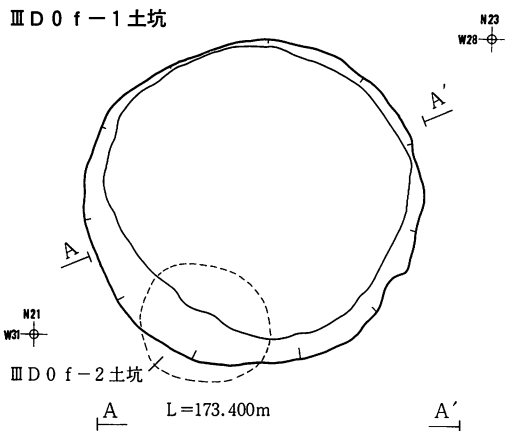
ⅢD1d-1土坑（第62図、写真図版65）



- ⅢD0c-2土坑 A-A'
- 2.5Y4/6 オリーブ褐 黄褐色土ブロック (極小~極大) 多量に含む 明黄褐色バミス 多く含む
 - 2.5Y3/2 黒褐 明黄褐色バミス多く含む
 - 2.5Y3/2 黒褐 オリーブ褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径5~10mm) 微量 明黄褐色バミス含む
 - 2.5Y2/1 黒 オリーブ褐色土との混合土 明黄褐色バミス5%
 - 2.5Y3/2 黒褐 オリーブ褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 含む
 - 2.5Y5/6 黄褐 黒色土ブロック含む (攪乱) 明黄褐色バミス含む

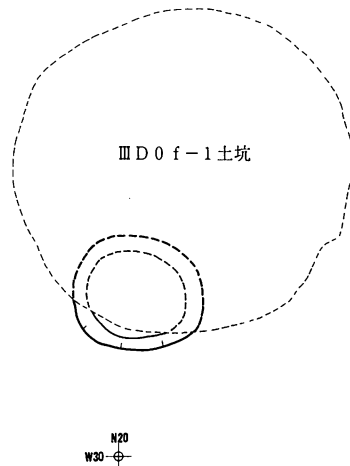


- ⅢD0d土坑 A-A'
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト 黄褐色バミス (To-Ch?) 含む
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト
 - 10Y R5/8 黄褐 砂質(?)シルト 灰白色土ブロック (径2~5mm) 微量
 - 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 砂質シルト 下に黒色土混入 黄褐色バミス含む
 - 10Y R6/6 明黄褐 シルト 黄褐色土との混合土 灰白色土ブロック (径5mm以上) 疎らに含む 黄褐色バミス含む 炭化物微量
 - 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト オリーブ褐色土との混合土 明赤褐色焼土微量 炭化物微量



- ⅢD0f-1土坑 A-A'
- 10Y R3/1 黒褐 黄褐色土ブロック含む
 - 10Y R2/1 黒 To-b? (発泡の良い灰白色バミス) 1%
 - 10Y R3/1 黒褐 To-b? (発泡の良い灰白色バミス) 若干
 - 10Y R3/1 黒褐
 - 10Y R3/3 暗褐 褐色土ブロック含む 炭化物若干
 - 10Y R3/1 黒褐 炭化物2%
 - 10Y R3/4 暗褐 褐色土ブロック含む 炭化物若干
 - 10Y R3/3 暗褐 炭化物1%
 - 10Y R4/4 褐 暗褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土等の混合土 To-H・To-O f 起源の汚れた火山灰
 - 10Y R5/4 にぶい黄褐 To-H・To-O f 起源の汚れた火山灰 炭化物若干
 - 10Y R4/4 褐 黄褐色土・にぶい黄褐色土・にぶい黄褐色土等の混合土 炭化物1%
 - 10Y R3/4 暗褐 黄褐色土ブロック含む 炭化物若干
 - 10Y R3/2 黒褐 黄橙、黄褐色土ブロック含む 炭化物若干
 - 10Y R4/3 にぶい黄褐 黄橙、黄褐色土ブロック含む 炭化物若干

ⅢD0f-2土坑 (断面図なし)



0 1:50 1m

第61図 ⅢD0c-2・ⅢD0d・ⅢD0f-1,2土坑

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅢD1dグリッド内に位置する。Ⅳ層下面～Ⅴ層上面において、暗褐色土主体の混合土の不整な長楕円形の広がりとして検出された。PP264に截られる。

＜規模・形態＞開口部径237cm×190cm、底部径200cm×170cm、深さは27cmである。平面形は不整な長楕円形を呈する。壁の北東側はほぼ垂直に立ち上がるが、南西側は緩やかに外傾する。底面は概ね平坦で、Ⅳ～Ⅴ層中に構築されている。

＜埋土＞上位は暗褐色土主体の混合土、下位は黄褐色土主体の混合土で構成される。全体にT o - O f ・ T o - Hブロックを含む。1・2・5層には微量であるが焼土ブロックが含まれている。人為堆積と考えられる。

遺物（第106図404・405、写真図版102）

＜出土状況＞弥生土器が2点出土している。

＜弥生土器＞404は器面に単軸絡状体縦回転による捺糸文が付された器厚の薄い体部破片であり、405は無文の器面に並行沈線で施文する土器片である。

時期 弥生時代の可能性が強い。

ⅢD1d-2土坑（第62図、写真図版65）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅢD1dグリッド内に位置する。Ⅳ層下面～Ⅴ層上面において、明黄褐色土主体の混合土の楕円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

＜規模・形態＞開口部径160cm×150cm、底部径155cm×144cm、深さは37cmである。平面形は楕円形を呈する。壁は一部がやや外傾して立ち上がるのを除き、直立して立ち上がる。断面形は筒状を呈する。底面は中央部が若干低くなるが、概ね平坦で、Ⅴ層中に構築されている。

＜埋土＞灰白色土ブロックを比較的多く含む黄褐～明黄褐色土を主体とする。人為堆積と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

ⅢD1e-1土坑（第62図、写真図版66）

遺構

＜検出状況・重複関係＞ⅢD1eグリッド内に位置する。Ⅳ層下面～Ⅴ層上面において、複数の土坑の截り合いの様相を呈する不整な楕円形の広がりとして検出された。ⅢD1e-2土坑を截る。

＜規模・形態＞開口部径176cm×161cm、底部径164cm×150cm、深さは58cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は中央部が低くなっていて、Ⅴ層中に構築されている。

＜埋土＞1～11層が本遺構の埋土で、12～14層はⅢD1e-2土坑の埋土と考えられる。灰白色土ブロック・浅黄色土ブロック・黄褐色土ブロック等を含む黄褐色土あるいは暗褐色土を主体とする。人為堆積と考えられる。

遺物（写真図版102-406）

<出土状況>土師器が1点出土している。

<出土状況>406はロクロ使用成形された甕の体部上位～口縁部を残す破片であり、内外面にロクロ成形痕を残し口縁部が上方に挽き出されて受け口となる。

時期 平安時代であろう。

ⅢD1e-2土坑（第62図、写真図版66）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅢD1eグリッド内に位置する。Ⅳ層下面～Ⅴ層上面において、複数の土坑の截り合いの様相を呈する不整な楕円形の広がりとして検出された。ⅢD1e-1土坑に截られる。

<規模・形態>開口部径195cm×(170)cm、底部径193cm×(170)cm、残存部の深さは44cmである。平面形は円形あるいは楕円形を呈すると考えられる。残存部の壁は垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈すると推察される。残存部の底面は平坦で、Ⅳ～Ⅴ層中に構築されている。

<埋土>12～14層が本遺構の埋土で、1～11層はⅢD1e-1土坑の埋土と考えられる。上位はT o - O f ブロック・黄褐色土を含むオリブ褐色土、中位はT o - H ・ T o - O f ブロックを含む黒褐色土、下位はT o - O f ブロック等を含む黄褐色土主体の混合土で構成される。人為堆積と考えられる。

遺物（写真図版102-407～409）

<出土状況>ⅢD1e-1・2土坑の埋土から土師器が3点出土している。

<土師器>407はロクロ使用成形され内面ミガキ後黒色処理の坏口縁部小破片であり、408・409は非ロクロ使用成形された甕の口縁部破片であり、内外面ともナデ痕がある

時期 出土した土師器の特徴から平安時代に属する。

ⅢD1f土坑（第63図、写真図版66）

遺構

<検出状況・重複関係>ⅢD1fグリッド内に位置する。Ⅴ層上面において、明褐色焼土と暗褐色土の混合土・黄褐色土主体の混合土の楕円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径131cm×125cm、底部径126cm×114cm、深さは62cmである。平面形は楕円形を呈する。壁は一部が内傾するが、全体としては垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈する。底面は西側に向かって若干傾斜し、Ⅴ層中に構築されている。

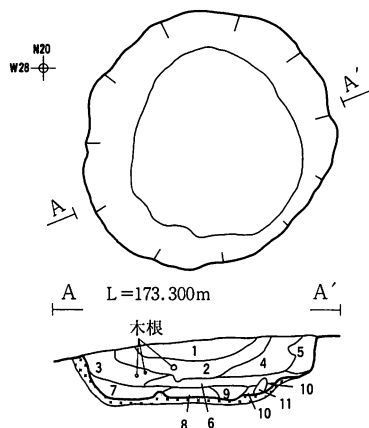
<埋土>最上位は明褐色焼土と暗褐色土の混合土、上位はにぶい黄橙色土ブロックを多量に含む黄褐色土主体の混合土、中位はにぶい黄橙色土主体の混合土、下位は灰黄色土ブロックを含む暗オリブ褐色土主体で構成される。

遺物（第106図410、写真図版102）

<出土状況>土師器が1点出土している。

<土師器>410は非ロクロ使用成形された甕の体部上位～口縁部を残す破片である。内面は丁寧なナデ調整、外面は体部が下方から上方に向かって粗くヘラケズリされ、口縁部はヨコナデである。器形は直立する体部から短く強く外反する口縁部を持つ。

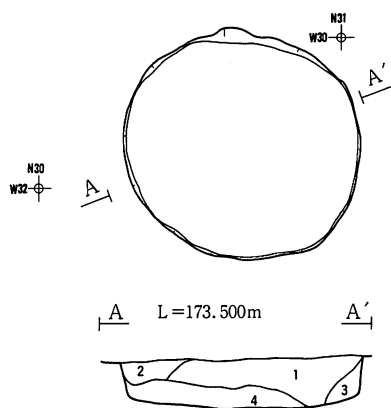
ⅢD0g土坑



ⅢD0g土坑 A-A'

1. 10Y R2/3 黒褐 暗褐色土・褐色土との混合土
2. 10Y R3/3 暗褐 黒褐色土混入 明黄褐色パミス微量
3. 10Y R4/2 灰黄褐 黄褐色土 (汚れた土) との混合土 暗褐色土ブロック (径10mm以上) 含む
4. 10Y R4/2 灰黄褐 黄褐色土 (汚れた土) との混合土 暗褐色土ブロック (径10mm以上) 含む におい黄褐色土ブロック含む 炭化物微量
5. 10Y R5/6 黄褐 浅黄色土 (砂混入) との混合土
6. 10Y R2/3 黒褐 灰黄褐色土との混合土 におい黄褐色土ブロック (径5~10mm) 微量 におい黄褐色土ブロック (径10mm以上) 含む
7. 2.5Y5/3 黄褐 浅黄色土ブロック (径10mm以上) におい黄色土ブロック (径10mm以上) 含む 炭化物微量
8. 2.5Y5/2 暗灰黄 におい黄色土ブロック含む
9. 2.5Y5/2 暗灰黄 ブロック におい黄色土ブロックとの混合土
10. 2.5Y5/2 暗灰黄
11. 10Y R6/4 におい黄橙 浅黄色パミス (径5mm程度) 微量

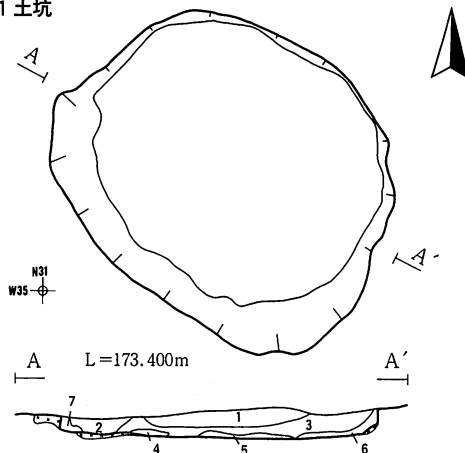
ⅢD1d-2土坑



ⅢD1d-2土坑 A-A'

1. 10Y R6/6 明黄褐 シルト 黄褐色土との混合土 灰白色土ブロック20% T o-N b 1% 炭化物 (径5~10mm) 含む
2. 10Y R6/6 明黄褐 シルト 黄褐色土との混合土 灰白色土ブロック (径2~5mm) 1層より少ない 炭化物微量
3. 2.5Y5/4 黄褐 シルト T o-N b 1% 炭化物微量
4. 10Y R6/6 明黄褐 シルト 黄褐色土との混合土 灰白色土ブロック (径1mm以上) 50% 炭化物 (径5~10mm) 含む

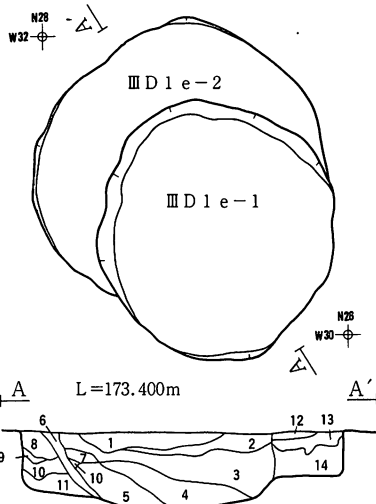
ⅢD1d-1土坑



ⅢD1d-1土坑 A-A'

1. 10Y R3/4 暗褐 黒褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~5mm) 10% 黒色土ブロック含む 赤褐色土ブロック微量 明黄褐色パミス (径5mm程度・T o-C h?) 含む
2. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 黄褐色土ブロック20% 黒色土ブロック微量 赤褐色土ブロック (径2~5mm) 微量 浅黄色土ブロック (径2~5mm) 微量
3. 10Y R5/6 黄褐 暗褐色土との混合土 浅黄色土ブロック (径10mm以上) 微量 T o-N b? 含む
4. 10Y R2/1 黒 下に黄褐色土ブロック (径10mm以上) 微量含む
5. 10Y R5/6 黄褐 暗褐色土との混合土 赤褐色焼土ブロック含む 黒色土ブロック含む 浅黄色土ブロック (径10mm以上) 微量 T o-N b? 含む
6. 10Y R5/6 黄褐 暗褐色土との混合土 3層より明るい色調 浅黄色土ブロック (径10mm以上) 微量 T o-N b? 含む
7. 注記無し

ⅢD1e-1・2土坑



ⅢD1e-1・2土坑 A-A'

1. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 シルト 灰白色土ブロック (径2~5mm) 含む 黒色土ブロック微量 明黄褐色パミス1% 下に赤褐色焼土粒微量、炭化物含む
2. 2.5Y4/4 オリブ褐 数種のブロックの混合土 灰白色土ブロック (径2mm以上) 1層より多く含む 浅黄色土ブロック (径1mm以上) 微量 黄褐色土ブロック含む 焼土? 微量
3. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 数種のブロックの混合土 灰白色土ブロック (径2mm以上) 2層より多く含む 浅黄色土ブロック2層より多く含む 黄褐色土ブロック含む 黒色土ブロック微量 焼土微量
4. 2.5Y3/2 黒褐 数種のブロックの混合土 灰白色土ブロック (径2mm以上) 2層より多く含む 浅黄色土ブロック3層より小さく少ない 黄褐色土ブロック (径10mm以上) 微量
5. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 数種のブロックの混合土 灰白色土ブロック (径10mm以上) 微量
6. 2.5Y5/6 黄褐 シルト オリブ褐色土との混合土 灰白色土ブロック含む 攪乱層
7. 2.5Y5/6 黄褐 シルト 明黄褐色パミス微量
8. 10Y R5/6 黄褐 シルト 浅黄色土ブロック (径10mm以上) 微量
9. 10Y R7/4 におい黄橙 砂質シルト T o-H? 暗褐色ブロック (径10mm以上) 微量
10. 10Y R5/6 黄褐 シルト 暗褐色土ブロック微量 灰白色土ブロック微量 明黄褐色パミス微量
11. 10Y R3/3 暗褐 シルト 黄褐色土との混合土 灰白色土ブロック (径2~5mm) 15% 浅黄色土ブロック (径10mm以上) 微量
12. 2.5Y4/3 オリブ褐 シルト 黄褐色土混入 浅黄色土ブロック (径1mm以上) 含む T o-N b? (径10mm程度) 微量
13. 2.5Y3/2 黒褐 シルト 黄褐色土ブロック含む 浅黄色土ブロック (径2~5mm) 15%
14. 10Y R5/6 黄褐 シルト におい黄褐色土との混合土 浅黄色土ブロック (径2mm以上) 含む 黒褐色土ブロック微量

0 1:50 1m

第62図 ⅢD0g・ⅢD1d-1, 2・ⅢD1e-1, 2土坑

時期 土師器の特徴から平安時代に属する。

Ⅲ D 2 e - 1 土坑 (第63図、写真図版66)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅲ D 2 e グリッド内に位置する。V層上面において、にぶい黄褐～明黄褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径172cm×159cm、底部径165cm×156cm、深さは35cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁の南西側は削平されている。残存する北東側の壁は垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈していたと考えられる。底面は概ね平坦で、V層中に構築されている。

<埋土>灰白色土ブロックを比較的多く含む明黄褐色土が主体である。下位には明赤褐色焼土を含む層が見られる。

遺物 (第106図411・412・414、写真図版102-411~414)

<出土状況>土師器が3点と中世陶器が1点出土している。

<土師器>坏2点(411・412)と甕1点(414)がある。坏の411はロクロ使用成形され両面がミガキ後黒色処理された高台脇～底部を残す破片であり、底部には断面三角形で「ハ」状に踏ん張る低い高台が付く。412は非ロクロ使用成形で仕上げた坏で、内面はナデとミガキ、外面はナデ調整される。底部はやや丸底風の平底である。甕の414は非ロクロ使用成形された甕体部上位～口縁部を残す破片で、内外面ともナデ、口縁部ヨコナデ調整され、口縁部が短く強く外湾する。

<中世陶器>413は体部が大きく膨らむ甕の破片と推測されるが、胎土は緻密であるが色調が赤褐色を呈し、在地産の甕であろう。

時期 中世陶器の出土から中世に属するであろう。

Ⅲ D 2 e - 2 土坑 (第63図、写真図版66)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅲ D 2 e グリッド内に位置する。V層上面において、北東側のみ弧を描く汚れた色調を呈する褐色土の不整な広がりとして剥き出しになった土器片の集まりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>残存部の長径は〔112〕cm、深さは約10cmである。平面形は円形あるいは楕円形を呈すると推測される。削平のため、壁は北東側で4cm程しか残存せず、立ち上がり・断面形は不明である。底面はV層中に構築されており、南西側に向かって傾斜する。

<埋土>単層で、汚れた色調を呈するT o - O f が堆積する。

遺物 (第106図415、写真図版102)

<出土状況>縄文土器が1点出土している。

<縄文土器>415は無文の器面に沈線と隆起帯で施文した深鉢か鉢の体部破片であり、この特徴から後期初頭の十腰内I式土器に相当する。

時期 縄文時代に属する。

Ⅲ D 3 a 土坑 (第63図、写真図版67)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅲ D 3 a グリッド内に位置する。V層上面において、褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径61cm×55cm、底部径44cm×42cm、深さは14cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は若干の凹凸を持ち、V層中に構築されている。

<埋土>上部は褐色土粒を含む褐色土、下部はにぶい黄褐色土粒を含むにぶい黄橙色土によって構成される。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅲ D 3 b 土坑 (第63図、写真図版67)

遺構

<検出状況・重複関係>Ⅲ D 3 b グリッド内に位置する。V層上面において、黄褐色土主体の混合土の不整な楕円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径264cm×247cm、底部径232cm×193cm、深さは41cmである。平面形は不整な楕円形を呈する。壁は、東側の一部が内傾して立ち上がるが、その他は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はV層中に構築されており、南西に向かって若干傾斜する。

<埋土>全体として汚れた色調を呈する。にぶい黄色土ブロック・灰白色土ブロック・黒色土ブロック等を含む黄褐色土が主体である。人為堆積と考えられる。

遺物 (第106図416~419、写真図版102)

<出土状況>縄文土器が4点出土している。

<縄文土器>416は体部下端~底部を残す破片である。417~419は無文の器面に沈線か隆起帯の貼付で文様を付す特徴をもつ体部破片であり、後期初頭の十腰内I式土器に相当する。

時期 縄文時代に属する。

Ⅲ D 3 c 土坑 (第63図、写真図版67)

遺構

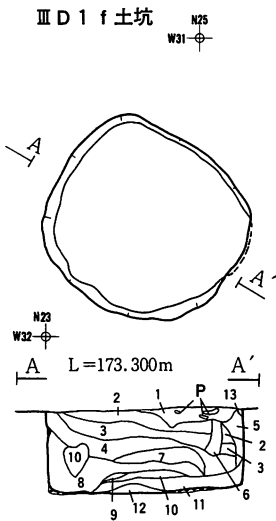
<検出状況・重複関係>Ⅲ D 3 c グリッド内に位置する。IV層上面において、黒褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。重複する遺構はない。

<規模・形態>開口部径51cm×47cm、底部径85cm×75cm、深さは41cmである。平面形はほぼ円形を呈する。壁は内傾して立ち上がり、断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦で、V層中に構築されている。

<埋土>最上位にT o - C hを含む黒褐色土が堆積する以外は、T o - H・T o - O f・褐色土の混合土が主体である。

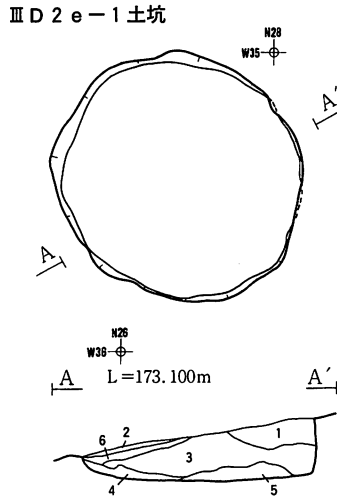
遺物 出土遺物はない。

時期 遺構の形態から縄文時代に属すると考えられる。



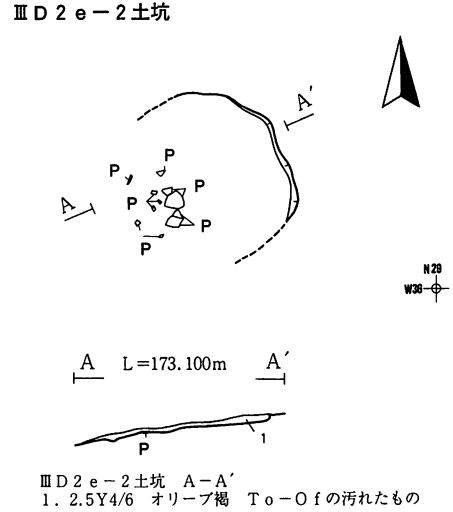
ⅢD1f土坑 A-A'

- 10Y R3/2 暗褐 明褐色焼土との混合土 明黄褐色バミス微量 炭化物含む
- 10Y R5/6 黄褐 10Y R7/3にぶい黄橙色土との混合土 10Y R6/3にぶい黄橙色土ブロック (径2~10mm) 多量に含む 暗褐色土ブロック (径5~10mm) 微量
- 10Y R5/6 黄褐 10Y R7/3にぶい黄橙色土・明黄褐色土との混合土
- 10Y R6/4 にぶい黄橙 10Y R6/3にぶい黄橙色土ブロック (径2~10mm) 2層より少ない
- 2.5Y4/6 オリーブ褐
- 10Y R5/6 黄褐 10Y R7/3にぶい黄橙色土との混合土 砂多く含む 暗褐色土ブロック (径2~10mm) 炭化物含む
- 10Y R6/4 にぶい黄橙 暗褐色土混入 10Y R6/3にぶい黄橙色土ブロック (径2~10mm) 2層より少ない
- 10Y R6/4 にぶい黄橙 暗褐色土混入 7層より暗い色調 10Y R6/3にぶい黄橙色土ブロック (径2~10mm) 2層より少ない
- 10Y R3/4 暗褐 にぶい黄褐色土ブロック (径10mm以上) 微量
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 黄褐色土混入
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 灰黄色土ブロック (径2~5mm) 含む
- 2.5Y3/2 黒褐 ブロック にぶい黄色土ブロックとの混合土
- 2.5Y7/4 にぶい黄 暗灰黄色土との混合土



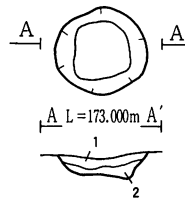
ⅢD2e-1土坑 A-A'

- 10Y R4/3 にぶい黄褐 シルト 灰白色土ブロック15% 明黄褐色土ブロック10% 黒色土微量 炭化物微量
- 2.5Y5/4 黄褐 シルト 明黄褐色土ブロック30% 黒色土粒微量 灰白色粒微量
- 10Y R6/6 明黄褐 シルト 灰白色土ブロック25% 黒褐色土ブロック (径10mm以上) 微量 オリーブ褐色土ブロック (径10mm以上) 微量
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト 黒色土50% 明黄褐色土20% 明赤褐色土5%
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト 締り有り 黄色粒含む 炭化物微量
- 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト 灰白色土ブロック50% 明赤褐色焼土・黒色土混入 炭化物微量



ⅢD2e-2土坑 A-A'
1. 2.5Y4/6 オリーブ褐 T o - O f の汚れたもの

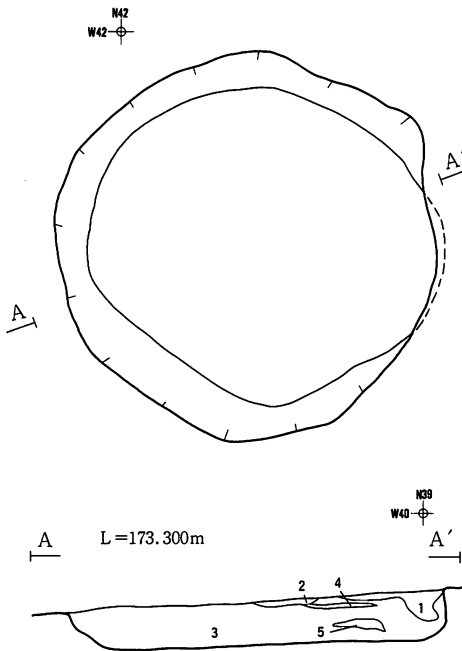
ⅢD3a土坑



ⅢD3a土坑 A-A'

- 10Y R4/4 褐 シルト 粘性無し 締りあまり無し 褐色土粒5% 草木根多い
- 10Y R6/4 にぶい黄橙 シルト 粘性やや有り 締りあまり無し にぶい黄褐色土粒含む

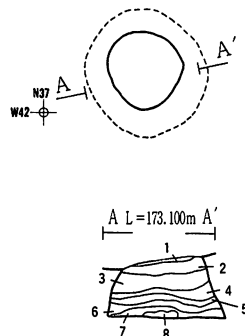
ⅢD3b土坑



ⅢD3b土坑 A-A'

- 2.5Y5/6 黄褐 シルト 暗褐色土ブロック50% 灰白色土ブロック15% 黒色土ブロック微量 T o - C h 微量 炭化物微量
- 2.5Y5/6 黄褐 シルト オリーブ褐色土ブロック30% にぶい黄褐色土ブロック20% 灰白色土ブロック5%
- 2.5Y5/6 黄褐 シルト にぶい黄色土ブロック50% 灰白色土ブロック5% 黒色土ブロック・灰オリーブ色土ブロック微量
- 5Y3/2 オリーブ黒 シルト 黄褐色土ブロック1%
- 5Y3/2 オリーブ黒 シルト 黄褐色土ブロック・にぶい黄色土ブロック・灰白色土ブロック微量

ⅢD3c土坑



ⅢD3c土坑 A-A'

- 10Y R2/3 黒褐 シルト 明黄褐色バミス含む
- 10Y R5/8 黄褐 にぶい黄褐色土との混合土 下位ににぶい黄色土ブロック (径2~5mm・T o - O f?) 含む
- 2.5Y6/3 にぶい黄 ブロック 浅黄褐色土ブロックとの混合土 黄褐色土ブロック含む
- 10Y R7/4 にぶい黄橙 暗オリーブ褐色土との混合土 黄褐色粘質土ブロック (径10mm以上) 含む
- 2.5Y6/3 にぶい黄 ブロック 浅黄褐色土ブロックとの混合土 黄褐色土ブロック含む 暗オリーブ褐色土ブロック (径2~5mm) 微量
- 10Y R5/8 黄褐 浅黄褐色土・暗オリーブ褐色土との混合土 炭化物微量
- 10Y R6/4 にぶい黄橙 黄褐色土・浅黄色土混入
- 2.5Y5/4 黄褐 暗褐色土との混合土 浅黄色土ブロック (径10mm以上) 微量

第63図 ⅢD1f・ⅢD2e-1, 2・ⅢD3a・ⅢD3b・ⅢD3c土坑

5. 炉・焼土遺構

(1) 石囲炉

Ⅱ D 6 f 石囲炉

遺構 (第64図・写真図版68)

<位置・検出状況>Ⅱ D 6 f グリッド内に位置する。Ⅳ層上面とⅡ D 6 f - 2 土坑の平面プラン内の南東側、埋土の最上位において検出された。Ⅱ D 6 f - 2 土坑を截る。本来は住居跡に伴う炉跡であったと推測される。

<形態・規模>径18~28cmの3個の炉石(凝灰岩?)の内側に、36×31cmの楕円形の広がりを持つ、最大厚6cmの焼土層が形成されている。炉石の一つは被熱のためか割れていた。

<埋土>焼土の焼成は比較的良い。2・3層は掘り方埋土であろうか。北西部は土坑の埋土上にあるためか沈む。

遺物 出土遺物はない。

時期 縄文時代の炉跡であろう。

Ⅱ D 6 g 石囲炉

遺構 (第64図・写真図版68)

<位置・検出状況>Ⅱ D 6 g グリッド内に位置する。Ⅲ層上面において検出された。重複する遺構はない。

<形態・規模>80×60cmの楕円形に径10~50cmの礫が配置されており、その内側に37×15cm、最大厚3cmの焼土層が形成されている。炉石の南東脇には非常に固く締る面が存在することから、本来は住居跡に伴う炉跡であったと考えられるが、壁・柱穴等は検出されなかった。

<埋土>焼土層は炉跡検出面よりも18cm低い面で検出されている。焼成は比較的良い。2層は炉石の掘り方であろうか。3層の非常に固く締る層は住居に伴う炉として使用された痕跡であると考えられる。4層は地山に非常に良く似る。

遺物 (第106図420~422、写真図版102)

<出土状況>縄文土器が3点出土している。

<出土状況>3点とも器面に単軸絡状体縦回転による捺糸文を付す体部の破片であり、器厚が薄い共通の特徴がある。

時期 縄文時代の炉跡であろう。

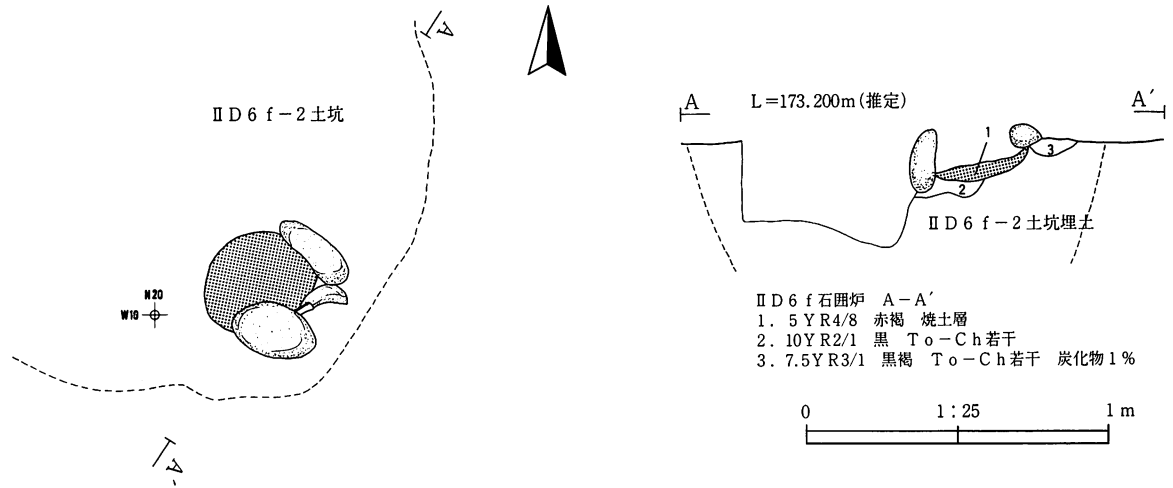
(2) 焼土遺構

Ⅱ C 5 h 焼土遺構

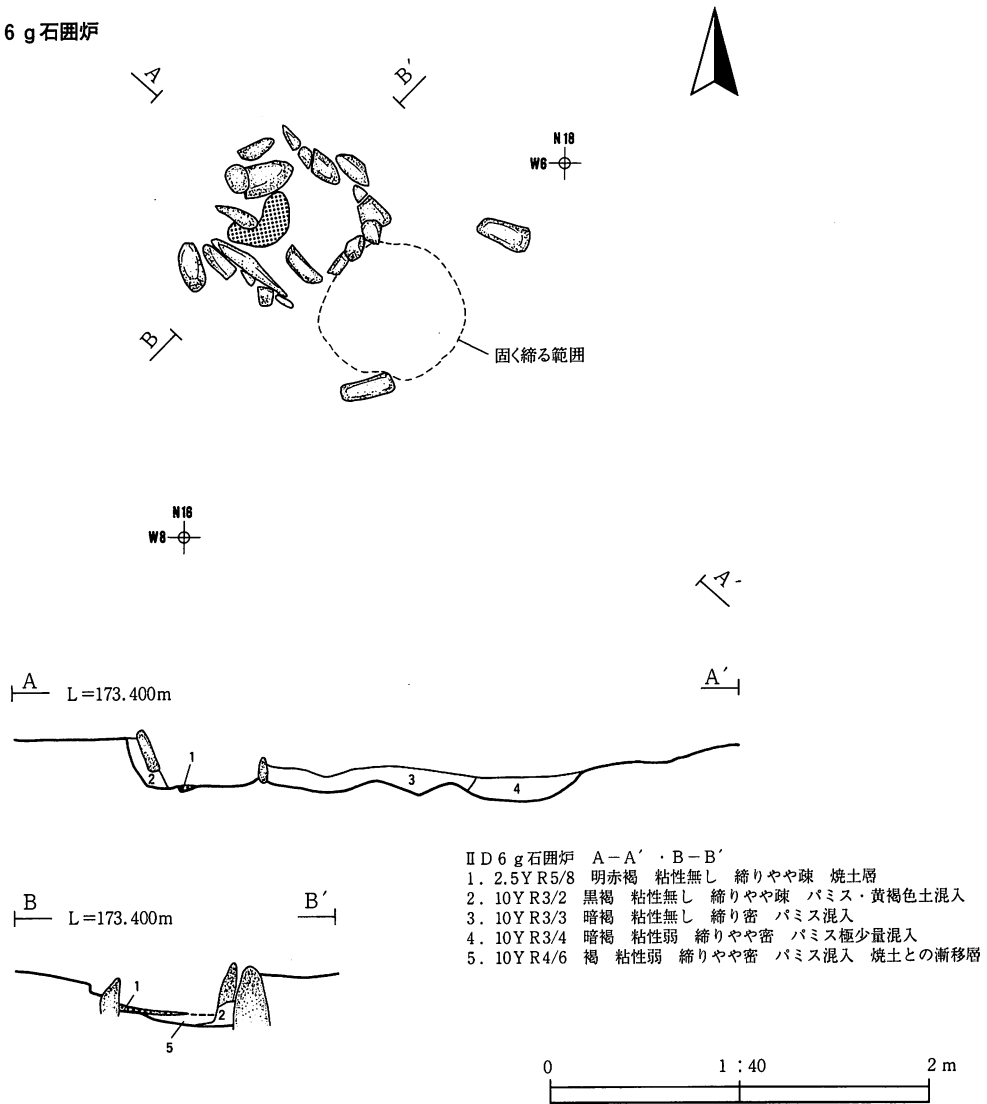
遺構 (第65図・写真図版68)

<位置・検出状況>Ⅱ C 5 h グリッド内に位置する。Ⅱ層中で検出された。本遺構の下でⅡ C - 1 竪穴住居跡が検出されている。

Ⅱ D 6 f 石囲炉



Ⅱ D 6 g 石囲炉



第64図 Ⅱ D 6 f・Ⅱ D 6 g 石囲炉

<形態・規模>75×55cmの不整な楕円形の範囲に、最大厚22cmの焼土層が形成されている。

<埋土>焼土の焼成は非常に良い。現地性の焼土と推測される。

遺物 (第106図423、写真図版102-423・424)

<出土状況>縄文土器が2点出土している。

<縄文土器>423は器表に単節斜行縄文、424は網目状撚糸文が付された体部の小破片である。

時期 縄文時代か。

II C 6 i 焼土遺構

遺構 (第65図・写真図版69)

<位置・検出状況>II C 6 i グリッド内に位置する。II層下面で検出された。重複する遺構はない。

<形態・規模>調査の下手際で平面図をとり忘れたため、詳細は不明であるが、長径88cmの楕円形の範囲に焼土層が形成されていると推測される。

<埋土>埋土中には比較的焼成の良い橙色を呈する焼土がブロック状に混入する。異地性の焼土と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

II D 9 a-1 焼土遺構

遺構 (第65図・写真図版69)

<位置・検出状況>II D 9 a グリッド内に位置する。II D-16 縦穴住居跡検出プランの北側隅において、橙色土の不整な楕円形のプランとして検出された。II D-16 縦穴住居跡を截る可能性が高い。

<形態・規模>58×40cmの不整な楕円形の範囲に、最大厚10cmの焼土層が形成されている。

<埋土>焼土の焼成は比較的によく、黒褐色土が混入する。焼土中の礫からは被熱の痕跡を確認している。現地性の焼土であろうか。2～9層はII D-16 縦穴住居跡の埋土と考えられる。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

II D 9 a-2 焼土遺構

遺構 (第65図・写真図版69)

<位置・検出状況>II D 9 a グリッド内に位置する。IV層上面において、灰黄褐色土と明赤褐色土の混合土の不整な広がりとして検出された。検出プランを半裁後、底面でP P 76～78を検出している。2号掘立柱建物跡と重複する。柱穴の存在に気付かずに半裁した可能性もあるため、新旧関係は明らかではない。

<形態・規模>150×98cmの不整な広がりを持つ。

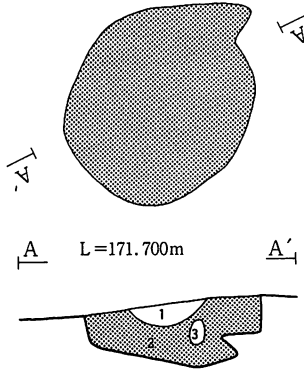
<埋土>最大厚6cmの焼土層が形成されている。その上を部分的に灰が覆う。現地性と推測される。

遺物

<出土状況>底面で炭化材のサンプリングを行った。樹種はツキである。また、掲載はしていないが土師器片が出土している。

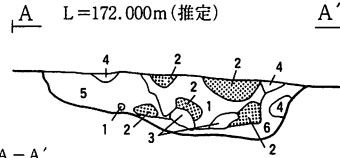
時期 平安時代であろうか。

II C 5 h 焼土遺構



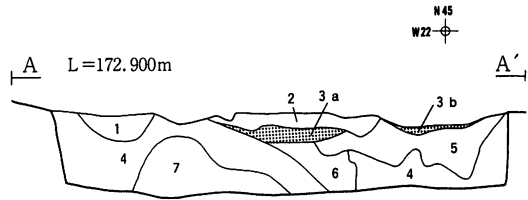
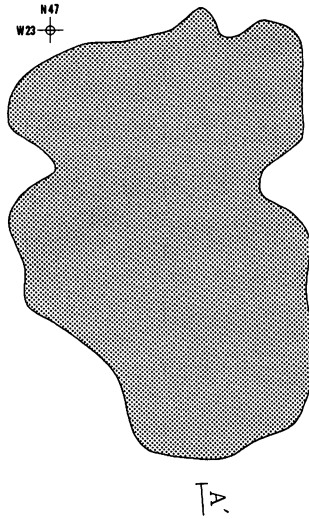
- II C 5 h 焼土遺構 A-A'
- 10Y R2/3 黒褐 粘性無し 締り疎 焼土ブロック混入
 - 5 Y R4/8 赤褐 粘性無し 締りやや疎 焼土層 灰層も混じる
 - 10Y R4/4 褐 粘性無し 締りやや疎密 攪乱層

II C 6 i 焼土遺構 (平面図なし)



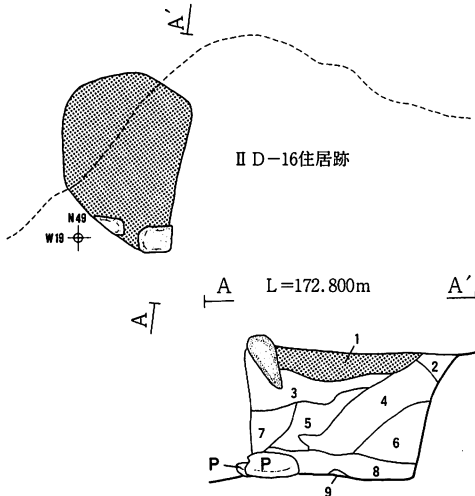
- II C 6 i 焼土遺構 A-A'
- 7.5Y R5/4 にぶい褐 粘性無し 締り微弱 黒褐色土ブロック (径5~10mm) 10% 橙褐色土ブロック (径5~10mm) 10% T o - C h 極微量 炭化物粒 (径1~5mm) 極微量
 - 5 Y R6/8 橙 粘性無し 締り微弱 焼土
 - 10Y R8/2 灰白 粘性弱 締り弱 火山灰?
 - 10Y R3/1 黒褐 粘性弱 締り弱 T o - C h 極微量
 - 10Y R3/3 暗褐 粘性弱 締り弱 T o - C h 極微量 炭化物粒 (1~5mm) 極微量
 - 10Y R3/4 暗褐 粘性弱 締り弱 炭化物粒 (1~5mm) 極微量

II D 9 a-2 焼土遺構

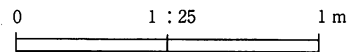


- II D 9 a-2 焼土遺構 A-A'
- 10Y R2/2 黒褐 暗褐色土との混合土 褐色土混入 T o - N b 微量
 - 5 Y R5/2 灰黄褐 灰の汚れたもの 黒褐色土ブロック (径10mm以上) 10% 明赤褐色土粒 (径1mm以下) 微量
 - 3 a. 5 Y R5/8 明赤褐 灰黄褐色土混入
 - 3 b. 5 Y R4/8 赤褐 暗褐色土混入
 - 10Y R4/6 褐 黄褐色土との混合土 T o - N b (径1~2mm) 1%
 - 10Y R3/4 暗褐 黄褐色土・灰黄褐色土混入 炭化物微量
 - 10Y R3/4 暗褐 上位固く締る 下位締り無し
 - 10Y R3/4 暗褐 黄褐色土ブロック (径1~10mm) 10% 炭化物微量

II D 9 a-1 焼土遺構



- II D 9 a-1 焼土遺構 A-A'
- 5 Y R6/8 橙 焼土 粘性無し 締り無し 黒褐色土との混合土 現地性?
 - 10Y R4/6 褐 ローム 粘性有り 締り中 暗褐色土との混合土
 - 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性中 締りやや有り 黄褐色土粒 (T o - C h · T o - N b) · 炭化物粒少量混入
 - 10Y R2/2 黒褐 シルト 粘性やや有り 締り無し T o - H ブロック 5%
 - 10Y R3/4 暗褐 シルト 粘性やや有り 締り中 T o - H ブロック 7%
 - 10Y R2/3 黒褐 シルト 粘性中 締り無し T o - H 小ブロック 3%
 - 10Y R3/3 暗褐 シルト 粘性やや有り 締り無し T o - H 小ブロック 3%
 - 10Y R2/3~3/3 黒褐~暗褐 シルト 粘性やや有り 締り無し T o - H ブロック 3~5%
 - 10Y R6/8 明黄褐 ローム 粘性有り 締り有り T o - H II D-16住居の貼床?



第65図 II C 5 h · II C 6 i · II D 9 a-1, 2 焼土遺構

Ⅱ D 9 a - 3 焼土遺構

遺構 (第66図・写真図版69)

<位置・検出状況>Ⅱ D 8・9 a グリッド内に位置し、Ⅱ D 9 a - 1 焼土遺構に非常に近接する。Ⅳ層上面において、赤褐色土の不整な広がりとして検出された。P P 81に載られる。

<形態・規模>170×65cmの不整な長楕円形の範囲に焼土が広がる。

<埋土>最大厚10cmの焼土層が形成されている。ほぼ全体に炭化物が含まれるが、4層の下位には特に多く炭化物が含まれる。現地性と推測される。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。

Ⅱ D 2 d - 1 焼土遺構

遺構 (第66図・写真図版69)

<位置・検出状況>Ⅲ D 2 d グリッド内に位置する。Ⅳ層下面において、赤褐色土の不整な楕円形のプランとして検出された。重複する遺構はない。

<形態・規模>73×58cmの不整な楕円形を呈する。

<埋土>最大厚15cmの、焼土と炭化物が混入する層が形成されている。下位にはT o - O f ブロックが見られる。異地性と推測される。

遺物 (第106図425～427、写真図版102)

<出土状況>縄文土器1点と土師器2点が出土している。

<縄文土器>425の器種は高台の付く鉢と推測されるが、器面に0段多条のLR横回転による単節斜行縄文を付すものである。晩期または弥生土器の可能性はある。

<土師器>426は非ロクロ使用成形された甕体部上位～口縁部の破片で、口縁部ヨコナデ体部は内面ナデ、外面ヘラナデ調整される。427は体部下位～底部を残す個体であるが、内面ナデ、外面削り調整される。

時期 平安時代であろう。

Ⅲ D 2 d - 2 焼土遺構

遺構 (第66図・写真図版69)

<位置・検出状況>Ⅲ D 2 d グリッド内のⅢ D 2 d - 1 焼土遺構から南西方向に35cm程離れた地点に位置する。Ⅳ層下面において、赤褐色土の不整なプランとして検出された。重複する遺構はない。

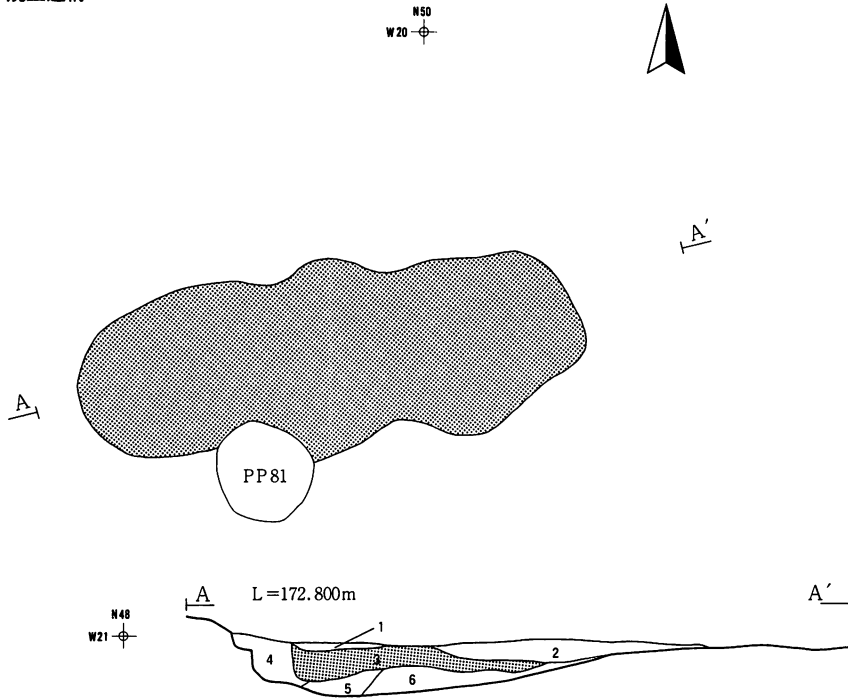
<形態・規模>48×31cmの不整な広がりを持つ。

<埋土>最大厚3cmの、焼土と炭化物が混入する層が形成されている。異地性と推測される。

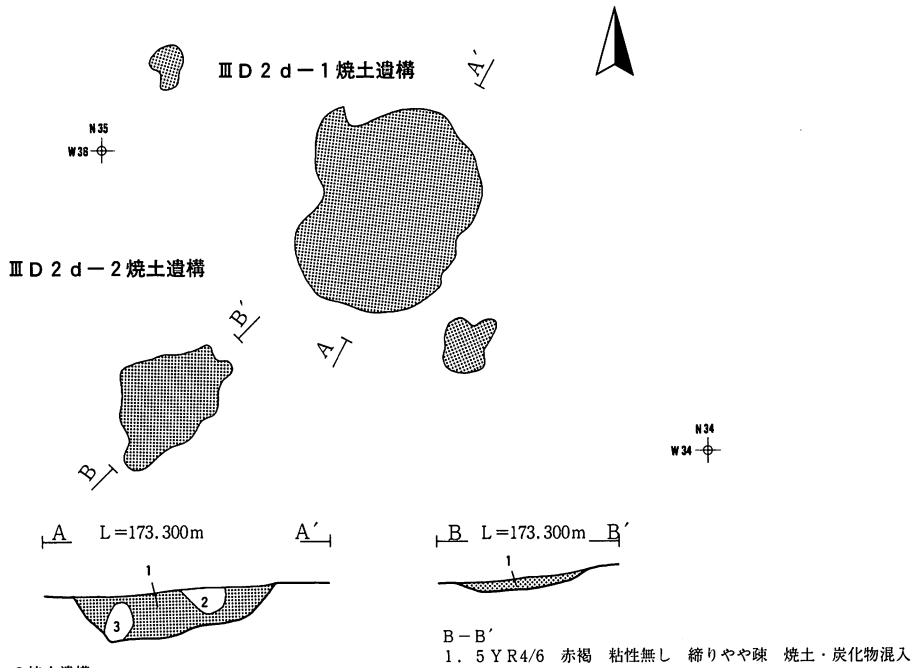
遺物 出土遺物はない。

時期 検出状況からⅢ D 2 d - 1 焼土遺構と時期を同じくすると推察される。

ⅡD9a-3 焼土遺構



- ⅡD9a-3 焼土遺構 A-A'
1. 10Y R3/4 暗褐 縮りやや有り 褐色土10%混入 明黄褐色土極小粒1% 炭化物微量
 2. 10Y R3/4 暗褐 黒褐色土との混合土 黄褐色土ブロック (径2~10mm) 5% T o - N b 微量
 3. 5 Y R4/8~5/8 赤褐~明赤褐 黒色土10%混入 暗赤褐色土10%混入 炭化物5%
 4. 10Y R2/3 暗褐 下位に炭化物多量に含む
 5. 10Y R2/2 黒褐 暗赤褐色土との混合土 炭化物含む
 6. 10Y R2/2 黒褐 赤褐色土2% 炭化物含む



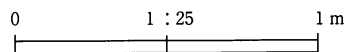
ⅢD2d-1・2 焼土遺構

A-A'

1. 5 Y R4/4 にぶい赤褐 粘性無し 縮りやや疎 焼土・炭化物混入
2. 10Y R3/4 暗褐 粘性無し 縮り疎 攪乱層
3. 10Y R7/2 にぶい黄橙 粘性無し 縮りやや疎 ブロック

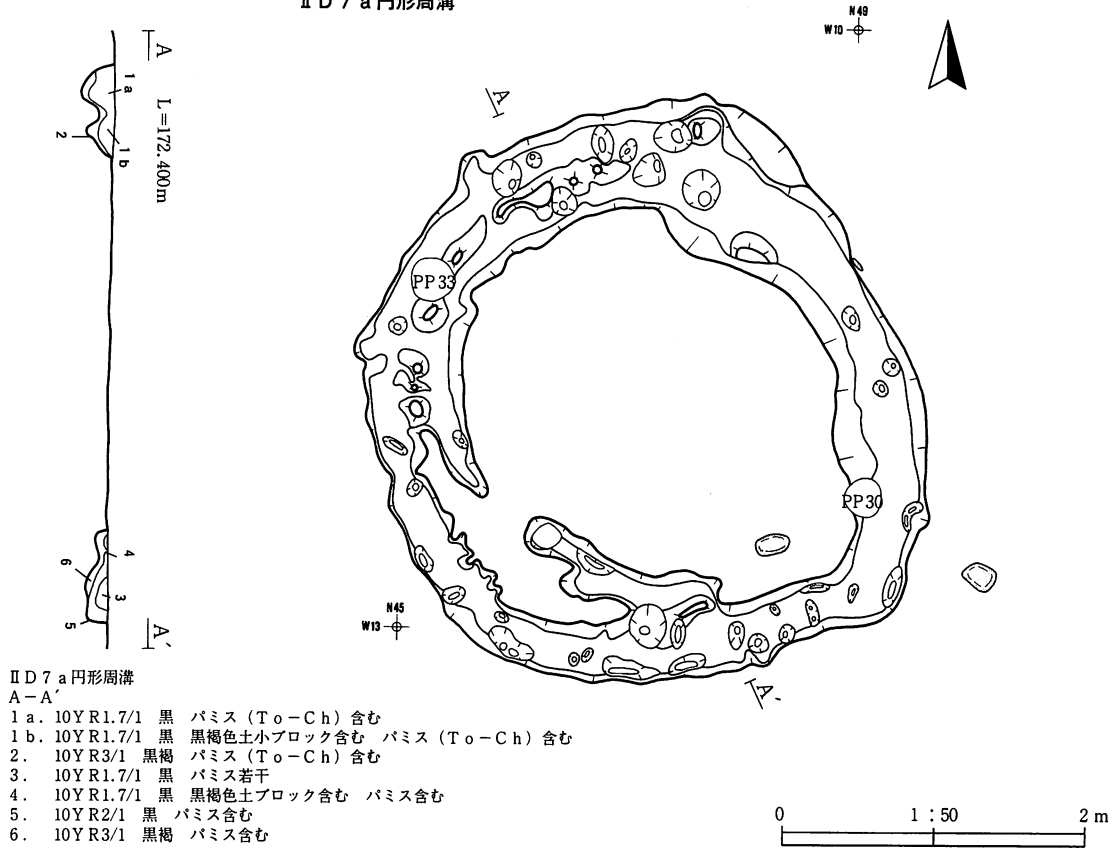
B-B'

1. 5 Y R4/6 赤褐 粘性無し 縮りやや疎 焼土・炭化物混入



第66図 ⅡD9a-3・ⅢD2d-1, 2 焼土遺構

II D 7 a 円形周溝



第67図 II D 7 a 円形周溝

6. 円形周溝

II D 7 a 円形周溝

遺構 (第67図・写真図版70)

<位置・検出状況> II D 7 a グリッド内に位置する。II層上面において、黒色土のドーナツ状のプランとして検出された。PP 30・PP 33に截られる。

<規模・形態> 外周径390×350cm、内周径290×225cm、溝幅20～95cm、深さは2～28cmである。平面形は楕円形に近いドーナツ状を呈する。溝の断面形は概ね逆台形またはU字状を呈する。部分的に溝が二重になっていることから、作り替えが行われた可能性がある。溝の底で掘り方痕と考えられる小ピットが多数検出されている。深さは4～32cmである。ただし、新規柱穴と気付かず掘ったものも含まれていると思われる。

<埋土> To-Chを含む黒～黒褐色土が主体である。

遺物 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため詳細は不明であるが、古代の遺構と考えられる。

7. 帯曲輪 (第68～74図・写真図版71～77)

調査区は舌状に西に張り出す台地になっており、中央部は標高約173mの平坦地で、北側と南側は段丘崖となっている。今回の調査でその平坦地が曲輪として機能していたことが確認された。また、北側・南側の斜面で3段の帯曲輪が検出されている。曲輪の北端と崖下との標高差は約17m、南端と崖下との標高差は約18mである。斜面に数段存在する平坦地は現況地形においても確認されている。構築あるいは形成時期は、南トレンチ1・A-Bにおける十和田a降下火山灰の堆積状況及び遺物の出土状況から、中世以降の可能性が高いと考えられる。人為的に構築されたものであるかどうかは、トレンチ断面で盛土・切土を明確に示す混合土層を確認できなかったため詳細は不明である。ただし、南斜面で確認された暗褐～褐色土層(南トレンチ1・A-Bの2・3層)・にぶい黄橙色土層(南トレンチ2・C-Dの2層)は、平坦部の基本層序とは異なる堆積状況を示していること、また、北斜面で確認されたにぶい黄褐色土層(北トレンチ4・K-Lの11層、北トレンチ5・M-Nの5層、北トレンチ6・O-Pの6層、北トレンチ8・Q-Rの8層)は、基本層序では確認されなかった層であることから、盛土によって構築された可能性も考えられる。

(1) 帯曲輪1

検出された部分の規模は、南側が東西長約52m・南北幅11～14m、北側が南北長約25m・東西幅2～4.5mを測る。南側と北側は連続せず、西側に張り出した曲輪(調査区域外)にぶつかるような形で途切れていることが現地踏査の結果明らかになっている。北側は一部、現代の畑地造成のため改変されており、残存しない。標高は南側が167～168m、北側が約170mである。平坦部との高低差は南側で4～5m、北側約3mで、帯曲輪2との高低差は南側・北側共に5～6mである。作事の痕跡は確認されなかった。

遺物(第114図542・543、第116図572、写真図版107～109)

<出土状況>北側表土下で542・543の金属製品と572の銭貨とが出土している

(2) 帯曲輪2

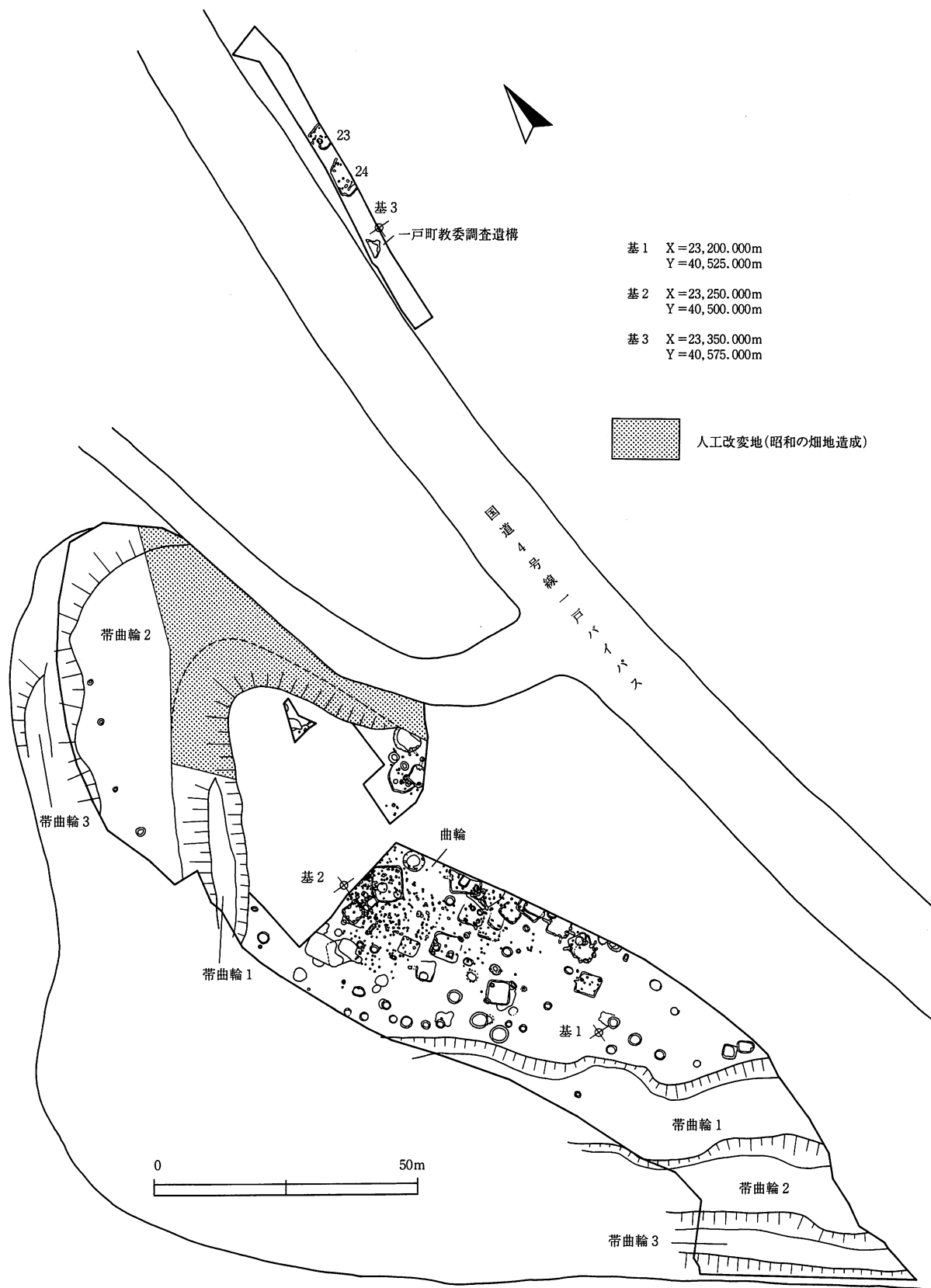
検出された部分は、南側が東西長約45m・南北幅9～12m、北側が南北長約55m・東西幅14～18mである。南側と北側が曲輪を取り巻くように連続することが現地踏査の結果明らかになっている。北側は一部、現代の畑地造成のため改変されており、残存しない。標高は南側が161～162m、北側が163～164mである。帯曲輪3との高低差は南側で約3m、北側で約6mである。作事の痕跡は確認されなかった。

遺物(第115・116図553・558、写真図版108・109)

<出土状況>北側の表土下で573の銭貨(寛永通寶)が、同じく北側(ⅢB3j区)のにぶい黄褐色土層下で558の舶載白磁皿片(16世紀)が出土している。

(3) 帯曲輪3

検出された部分は、南側が東西長約38m・南北幅3～5m、北側は調査区域外にかかるが、南北長約15m・東西幅3～5mである。南側と北側は連続しているが、段丘崖を全周せずに、北側の途中で途切れることが現地踏査の結果明らかになっている。標高は南側が157～158m、北側が約157mである。斜面下平坦面との高低差は南側、北側共に約2mである。作事の痕跡は確認されなかった。



第68図 遺構配置図

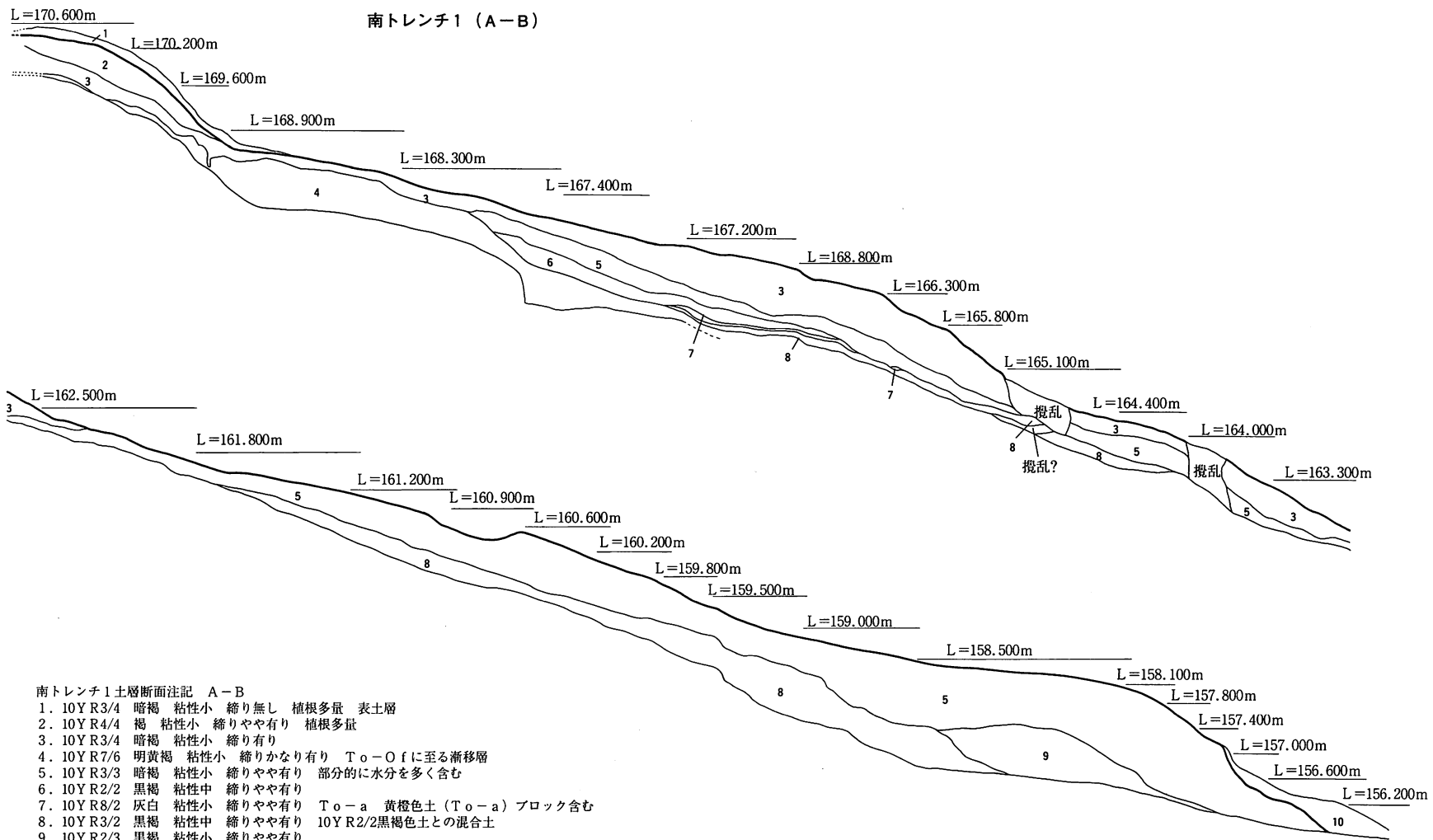
遺構一覽表

No	遺構名	備考
1	ⅡC-1 竪穴住居跡	
2	ⅡD-1 竪穴住居跡	
3	ⅡD-5 b 竪穴住居跡	
4	ⅡD-16 竪穴住居跡	
5	ⅡC-2 竪穴住居跡	
6	ⅡC-3 竪穴住居跡	
7	ⅡC-4 竪穴住居跡	
8	ⅡD-2 竪穴住居跡	
9	ⅡD-3 竪穴住居跡	
10	ⅡD-4 竪穴住居跡	
11	ⅡD-5 竪穴住居跡	
12	ⅡD-6 竪穴住居跡	
13	ⅡD-7 竪穴住居跡	
14	ⅡD-8 竪穴住居跡	
15	ⅡD-9 竪穴住居跡	
16	ⅡD-10 竪穴住居跡	
17	ⅡD-12 竪穴住居跡	
18	ⅡD-14 竪穴住居跡	
19	ⅡD-17 竪穴住居跡	
20	ⅡD-13 竪穴住居跡	
21	ⅡD-19 竪穴住居跡	
22	ⅢD-2 竪穴住居跡	
23	ⅠA-1 竪穴住居跡	68図参照
24	ⅠA-2 竪穴住居跡	68図参照
25	ⅡD-1 b 竪穴住居跡	
26	ⅡD-15 竪穴住居跡	
27	ⅢD-1 竪穴住居跡	
28	ⅡD-18 竪穴住居跡	
29	ⅡD-20 竪穴住居跡	
30	ⅡD-21 竪穴住居跡	
31	ⅡD-22 竪穴住居跡	
32	1号掘立柱建物跡	附図参照
33	2号掘立柱建物跡	附図参照
34	3号掘立柱建物跡	附図参照
35	4号掘立柱建物跡	附図参照
36	5号掘立柱建物跡	附図参照
37	6号掘立柱建物跡	附図参照
38	7号掘立柱建物跡	附図参照
39	8号掘立柱建物跡	附図参照
40	1号柱穴列	附図参照
41	2号柱穴列	附図参照
42	ⅡC 5 h-1 土坑	
43	ⅡC 5 h-2 土坑	
44	ⅡC 5 h-3 土坑	
45	ⅡC 5 i 土坑	
46	ⅡC 6 i 土坑	
47	ⅡC 7 d 土坑	
48	ⅡD 2 h 土坑	
49	ⅡD 2 i 土坑	
50	ⅡD 2 j 土坑	
51	ⅡD 3 g-1 土坑	
52	ⅡD 3 g-2 土坑	
53	ⅡD 3 g-3 土坑	
54	ⅡD 3 g-4 土坑	
55	ⅡD 3 h-1 土坑	
56	ⅡD 3 h-2 土坑	
57	ⅡD 4 f 土坑	
58	ⅡD 4 h 土坑	
59	ⅡD 4 i 土坑	
60	ⅡD 4 j 土坑	
61	ⅡD 5 d 土坑	
62	ⅡD 5 f-1 土坑	
63	ⅡD 5 f-2 土坑	

No	遺構名	備考
64	ⅡD 6 c 土坑	
65	ⅡD 6 d-4 土坑	
66	ⅡD 6 f-1 土坑	
67	ⅡD 6 f-2 土坑	
68	ⅡD 6 f-3 土坑	
69	ⅡD 6 h 土坑	
70	ⅡD 6 i 土坑	
71	ⅡD 7 e 土坑	
72	ⅡD 7 f-1 土坑	
73	ⅡD 7 f-2 土坑	
74	ⅡD 7 g 墓壇	
75	ⅡD 7 h-1 土坑	
76	ⅡD 7 h-2 土坑	
77	ⅡD 7 i 土坑	
78	ⅡD 8 a 土坑	
79	ⅡD 8 b 土坑	
80	ⅡD 8 d-1 土坑	
81	ⅡD 8 d-2 土坑	
82	ⅡD 8 d-3 土坑	
83	ⅡD 8 d-4 土坑	
84	ⅡD 8 f 土坑	
85	ⅡD 8 g 土坑	
86	ⅡD 8 h-1 土坑	
87	ⅡD 8 h-2 土坑	
88	ⅡD 9 a-1 土坑	
89	ⅡD 9 a-2 土坑	
90	ⅡD 9 b-1 土坑	
91	ⅡD 9 b-2 土坑	
92	ⅡD 9 d 土坑	
93	ⅡD 9 e 土坑	
94	ⅡD 9 g 土坑	
95	ⅡE 0 d 土坑	
96	ⅡE 1 d 土坑	
97	ⅡE 2 a 土坑	
98	ⅡE 2 d 土坑	
99	ⅡE 3 b 土坑	
100	ⅡE 4 a 土坑	
101	ⅡE 5 a 土坑	
102	ⅡE 7 b 土坑	
103	ⅢB 3 i 土坑	
104	ⅢB 4 j 土坑	
105	ⅢC 3 i 土坑	
106	ⅢC 3 j 土坑	
107	ⅢC 5 c 土坑	
108	ⅢC 5 e 土坑	
109	ⅢD 0 b 土坑	
110	ⅢD 0 c-1 土坑	
111	ⅢD 0 c-2 土坑	
112	ⅢD 0 d 土坑	
113	ⅢD 0 f-1 土坑	
114	ⅢD 0 f-2 土坑	
115	ⅢD 0 g 土坑	
116	ⅢD 1 d-1 土坑	
117	ⅢD 1 d-2 土坑	
118	ⅢD 1 e-1 土坑	
119	ⅢD 1 e-2 土坑	
120	ⅢD 1 f 土坑	
121	ⅢD 2 e-1 土坑	
122	ⅢD 2 e-2 土坑	
123	ⅢD 3 a 土坑	
124	ⅢD 3 b 土坑	
125	ⅢD 3 c 土坑	
126	ⅡD 6 f 石囲炉	

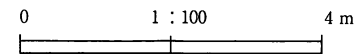
No	遺構名	備考
127	ⅡD 6 g 石囲炉	
128	ⅡC 5 h 焼土遺構	
129	ⅡC 6 i 焼土遺構	平面図無
130	ⅡD 9 a-1 焼土遺構	
131	ⅡD 9 a-2 焼土遺構	
132	ⅡD 9 a-3 焼土遺構	
133	ⅢD 2 d-1 焼土遺構	
134	ⅢD 2 d-2 焼土遺構	
135	ⅡD 7 a 円形周溝	

南トレンチ1 (A-B)



南トレンチ1土層断面注記 A-B

1. 10Y R3/4 暗褐 粘性小 締り無し 植根多量 表土層
2. 10Y R4/4 褐 粘性小 締りやや有り 植根多量
3. 10Y R3/4 暗褐 粘性小 締り有り
4. 10Y R7/6 明黄褐 粘性小 締りかなり有り T o - O f に至る漸移層
5. 10Y R3/3 暗褐 粘性小 締りやや有り 部分的に水分を多く含む
6. 10Y R2/2 黒褐 粘性中 締りやや有り
7. 10Y R8/2 灰白 粘性小 締りやや有り T o - a 黄橙色土 (T o - a) ブロック含む
8. 10Y R3/2 黒褐 粘性中 締りやや有り 10Y R2/2黒褐色土との混合土
9. 10Y R2/3 黒褐 粘性小 締りやや有り
10. 10Y R3/3 暗褐 粘性小 締り有り



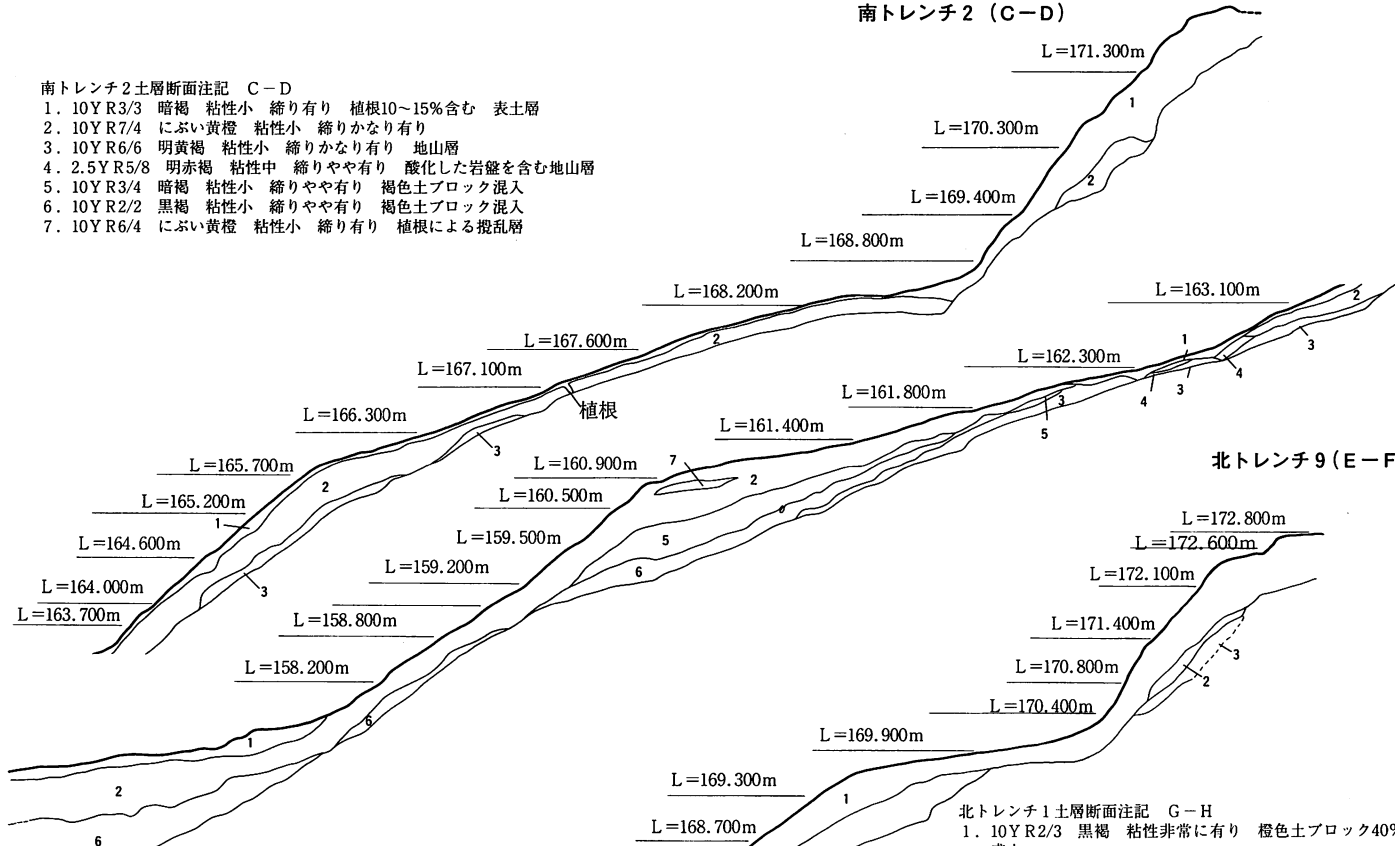
第69図 トレンチ断面図 (1)

第70図 トレンチ断面図(2)

南トレンチ2土層断面注記 C-D

- 1. 10Y R3/3 暗褐 粘性小 締り有り 植根10~15%含む 表土層
- 2. 10Y R7/4 にぶい黄橙 粘性小 締りかなり有り
- 3. 10Y R6/6 明黄褐 粘性小 締りかなり有り 地山層
- 4. 2.5Y R5/8 明赤褐 粘性中 締りやや有り 酸化した岩盤を含む地山層
- 5. 10Y R3/4 暗褐 粘性小 締りやや有り 褐色土ブロック混入
- 6. 10Y R2/2 黒褐 粘性小 締りやや有り 褐色土ブロック混入
- 7. 10Y R6/4 にぶい黄橙 粘性小 締り有り 植根による攪乱層

南トレンチ2 (C-D)



北トレンチ9 (E-F)

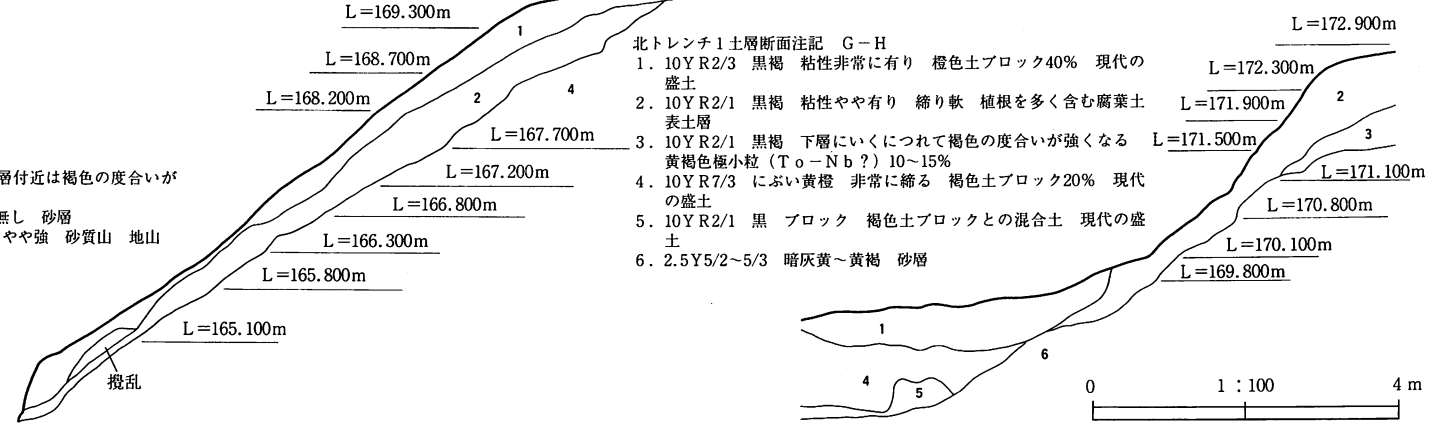
北トレンチ9土層断面注記 E-F

- 1. 10Y R2/3 黒褐 粘性やや強 締り中
- 2. 10Y R5/6 黄褐 粘性強 締り中 上層付近は褐色の度合いが強い T o - H
- 3. 2.5Y 5/4~5/6 黄褐 粘性無し 締り無し 砂層
- 4. 2.5Y R6/4 にぶい黄 粘性無し 締りやや強 砂質山 地山 T o - O f

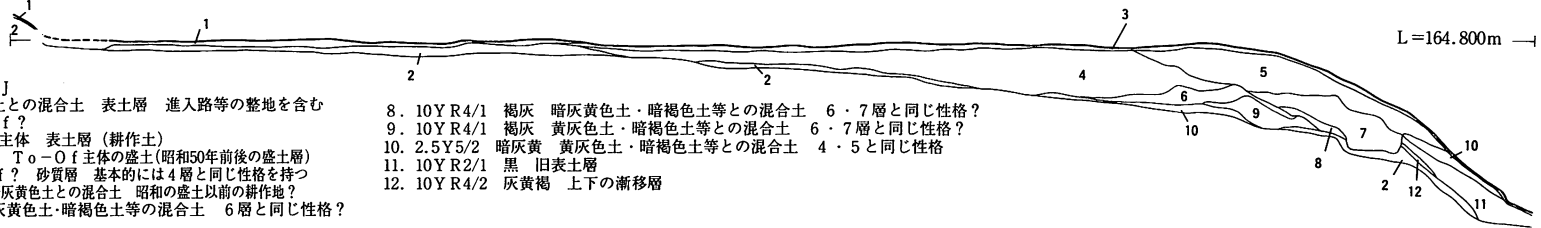
北トレンチ1土層断面注記 G-H

- 1. 10Y R2/3 黒褐 粘性非常に有り 橙色土ブロック40% 現代の盛土
- 2. 10Y R2/1 黒褐 粘性やや有り 締り軟 植根を多く含む腐葉土 表土層
- 3. 10Y R2/1 黒褐 下層にいくにつれて褐色の度合いが強くなる 黄褐色極小粒 (T o - N b ?) 10~15%
- 4. 10Y R7/3 にぶい黄橙 非常に締る 褐色土ブロック20% 現代の盛土
- 5. 10Y R2/1 黒 ブロック 褐色土ブロックとの混合土 現代の盛土
- 6. 2.5Y 5/2~5/3 暗灰黄~黄褐 砂層

北トレンチ1 (G-H)



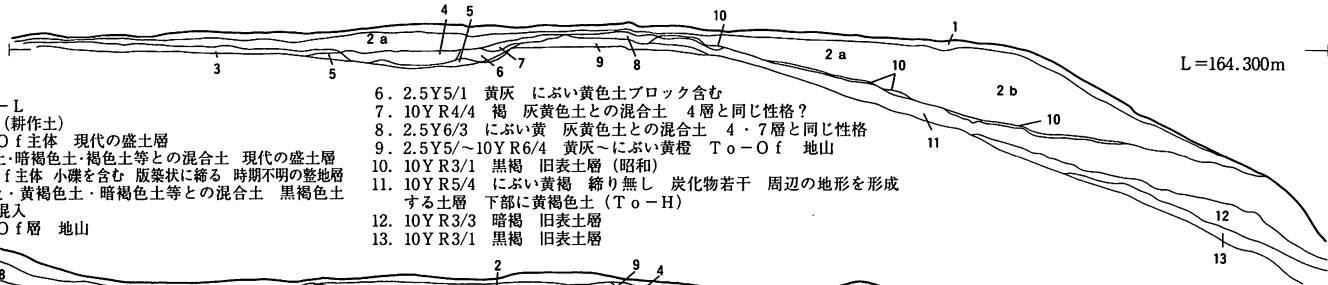
北トレンチ3
(I-J)



北トレンチ3土層断面注記 I-J

1. 10Y R3/1 黒褐 暗灰黄色土との混合土 表土層 進入路等の整地を含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄 T o-O f ?
3. 2.5Y4/1 黄灰 T o-O f 主体 表土層 (耕作土)
4. 2.5Y5/1~5/2 灰黄~暗灰黄 T o-O f 主体の盛土(昭和50年前後の盛土層)
5. 10Y R5/2 暗灰黄 T o-O f ? 砂質層 基本的には4層と同じ性格を持つ
6. 10Y R3/3 暗褐 黄灰色土・暗灰黄色土との混合土 昭和の盛土以前の耕作地?
7. 10Y R4/3 におい黄褐 暗灰黄色土・暗褐色土等の混合土 6層と同じ性格?
8. 10Y R4/1 褐灰 暗灰黄色土・暗褐色土等との混合土 6・7層と同じ性格?
9. 10Y R4/1 褐灰 黄灰色土・暗褐色土等との混合土 6・7層と同じ性格?
10. 2.5Y5/2 暗灰黄 黄灰色土・暗褐色土等との混合土 4・5と同じ性格
11. 10Y R2/1 黒 旧表土層
12. 10Y R4/2 灰黄褐 上下の漸移層

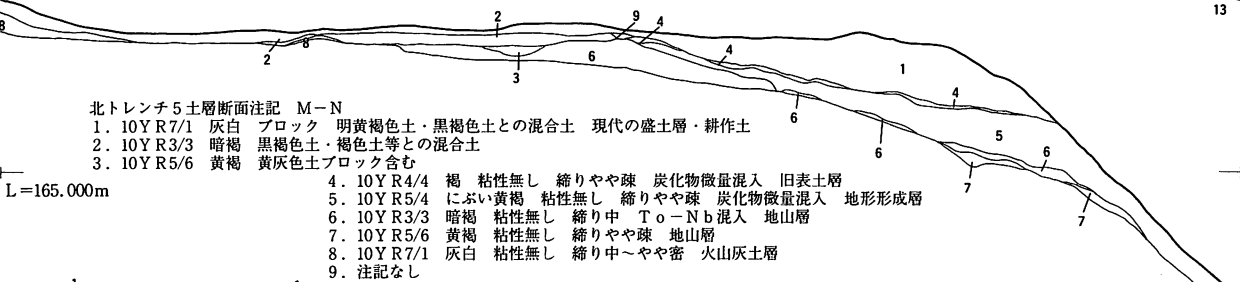
北トレンチ4
(K-L)



北トレンチ4土層断面注記 K-L

1. 2.5Y4/1 黄灰 表土層 (耕作土)
- 2 a. 2.5Y5/1 黄灰 T o-O f 主体 現代の盛土層
- 2 b. 2.5Y5/1 黄灰 黒褐色土・暗褐色土・褐色土等との混合土 現代の盛土層
3. 2.5Y5/3 黄褐 T o-O f 主体 小礫を含む 版築状に締る 時期不明の整地層
4. 10Y R3/2 黒褐 褐色土・黄褐色土・暗褐色土等との混合土 黒褐色土にはバミス(径5mm程度)混入
5. 2.5Y5/1 黄灰 T o-O f 層 地山
6. 2.5Y5/1 黄灰 におい黄色土ブロック含む
7. 10Y R4/4 褐 灰黄色土との混合土 4層と同じ性格?
8. 2.5Y6/3 におい黄 灰黄色土との混合土 4・7層と同じ性格
9. 2.5Y5/1~10Y R6/4 黄灰~におい黄橙 T o-O f 地山
10. 10Y R3/1 黒褐 旧表土層 (昭和)
11. 10Y R5/4 におい黄褐 締り無し 炭化物若干 周辺の地形を形成する土層 下部に黄褐色土(T o-H)
12. 10Y R3/3 暗褐 旧表土層
13. 10Y R3/1 黒褐 旧表土層

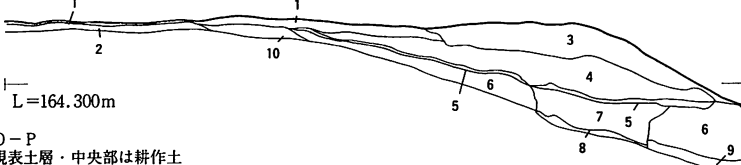
北トレンチ5
(M-N)



北トレンチ5土層断面注記 M-N

1. 10Y R7/1 灰白 ブロック 明黄褐色土・黒褐色土との混合土 現代の盛土層・耕作土
2. 10Y R3/3 暗褐 黒褐色土・褐色土等との混合土
3. 10Y R5/6 黄褐 黄灰色土ブロック含む
4. 10Y R4/4 褐 粘性無し 締りやや疎 炭化物微量混入 旧表土層
5. 10Y R5/4 におい黄褐 粘性無し 締りやや疎 炭化物微量混入 地形形成層
6. 10Y R3/3 暗褐 粘性無し 締り中 T o-N b 混入 地山層
7. 10Y R5/6 黄褐 粘性無し 締りやや疎 地山層
8. 10Y R7/1 灰白 粘性無し 締り中~やや密 火山灰土層
9. 注記なし

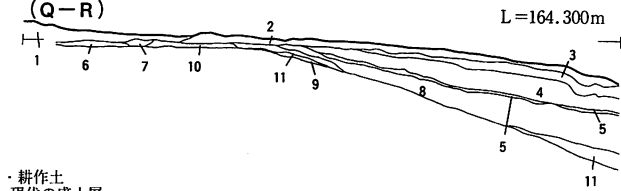
北トレンチ6
(O-P)



北トレンチ6土層断面注記 O-P

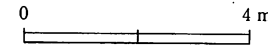
1. 10Y R3/1~2/3 黒褐 現表土層・中央部は耕作土
2. 2.5Y5/1~10Y R6/4 黄灰~におい黄橙 T o-O f 地山層
3. 10Y R3/1 黒褐 細石(ズリ)を多く含む 現代の盛土層
4. 10Y R4/4 褐 灰黄色土・暗灰黄色土等との混合土 盛土層
5. 10Y R2/3 黒褐 旧表土層(昭和)
6. 10Y R4/3 におい黄褐 地形形成層
7. 10Y R5/4 におい黄褐 黄褐色土ブロック含む 攪乱層?
8. 10Y R5/8 黄褐 暗褐色土ブロックを含む 7層底部
9. 10Y R2/3 黒褐 径5mm以下のバミス含む 南部浮石層?

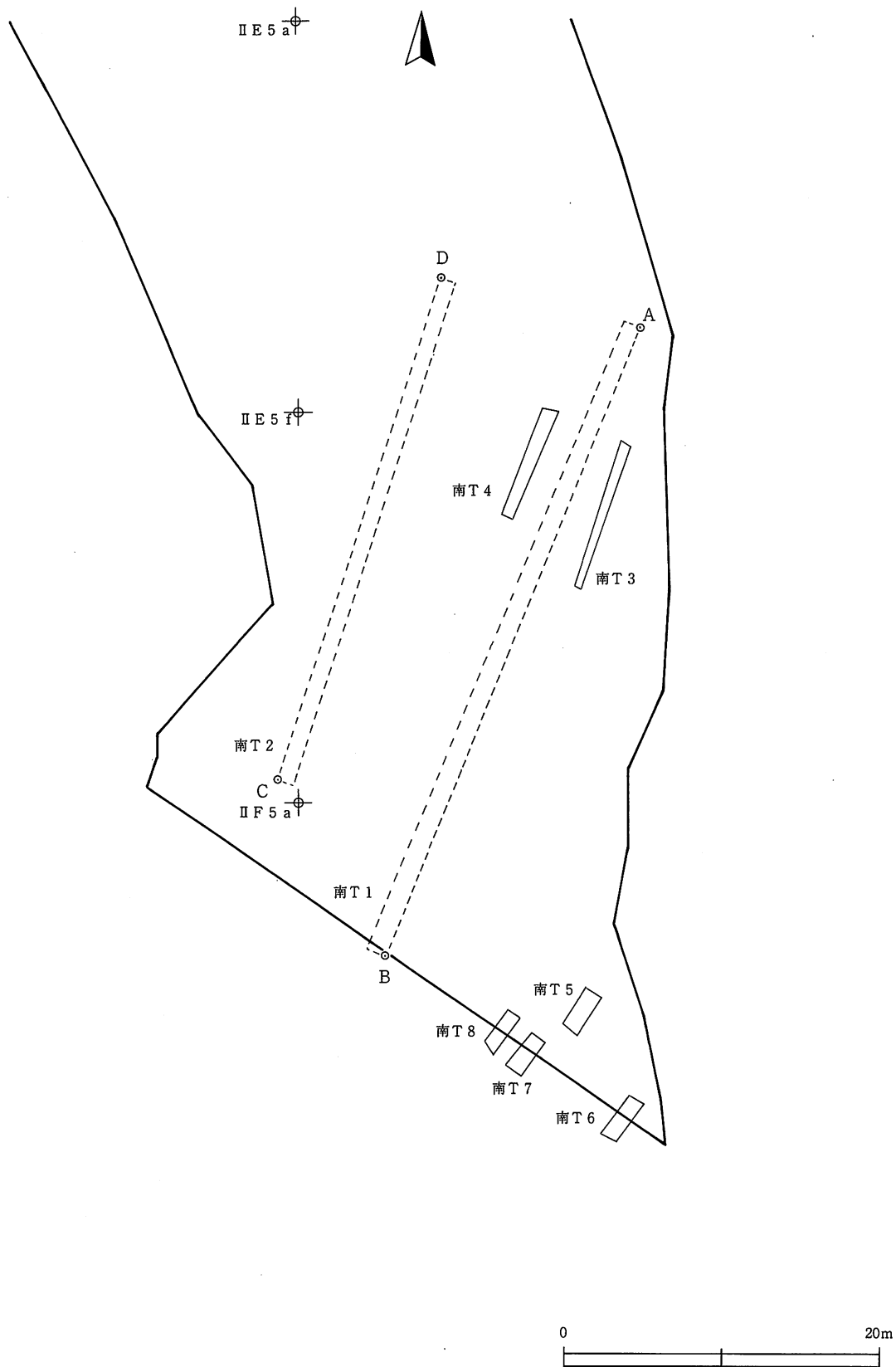
北トレンチ8
(Q-R)



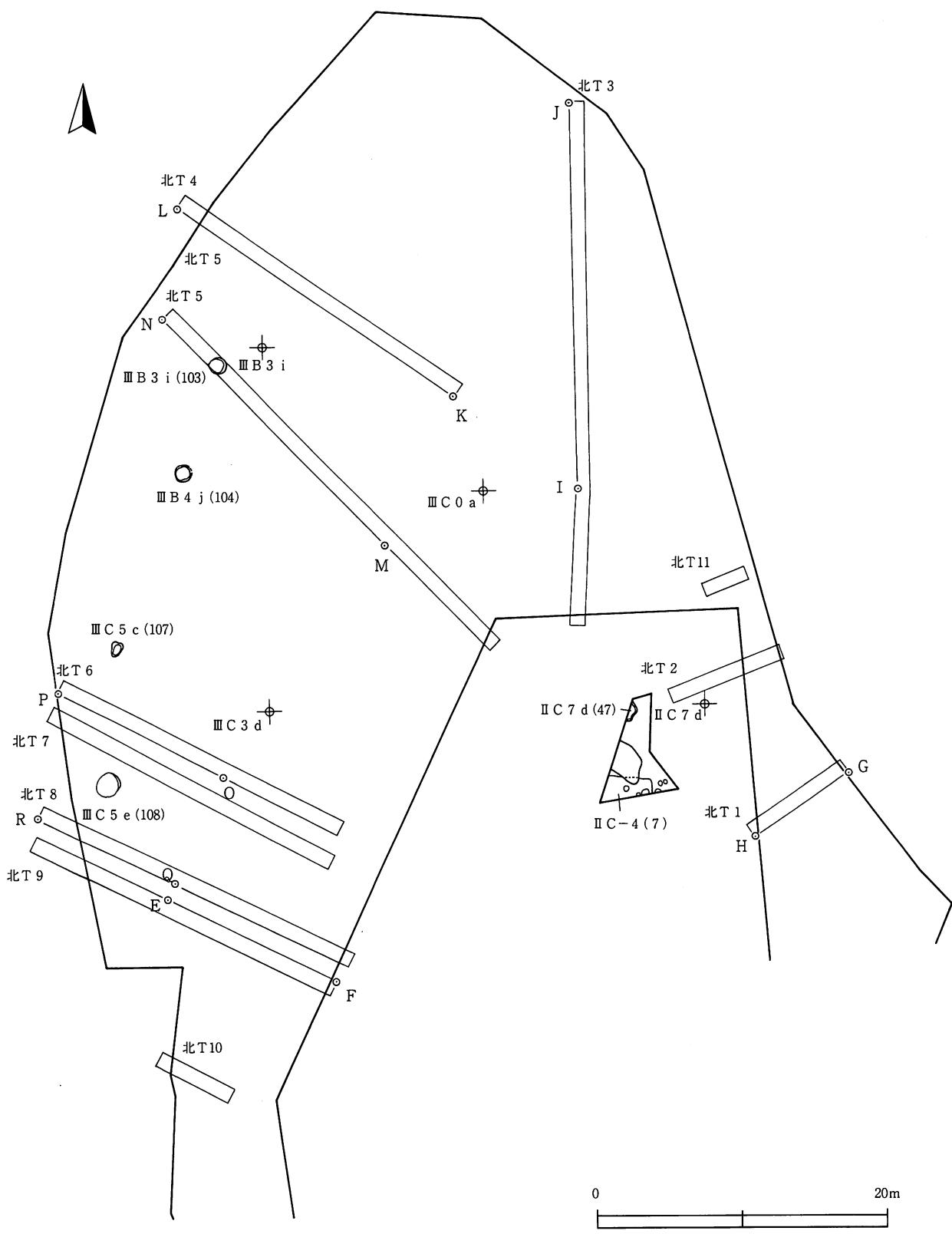
北トレンチ8土層断面注記 Q-R

1. 10Y R3/1~2/3 黒褐 現表土層
2. 10Y R5/3 におい黄褐 現表土層・耕作土
3. 2.5Y5/3 黄褐 T o-O f 主体 現代の盛土層
4. 10Y R4/4 褐 黄褐色土・黄灰色土・黒褐色土等との混合土 盛土層
5. 10Y R3/1 黒褐 旧表土層(昭和)
6. 2.5Y5/1~10Y R6/4 黄灰~におい黄橙 T o-O f
7. 2.5Y5/2 暗灰黄 灰黄色土等との混合土 攪乱層?
8. 10Y R4/3 におい黄褐 地形形成層
9. 10Y R5/8 黄褐 T o-H
10. 10Y R4/6 褐 径5mm以下のバミス含む T o-H層上層
11. 10Y R2/3 黒褐 旧表土層

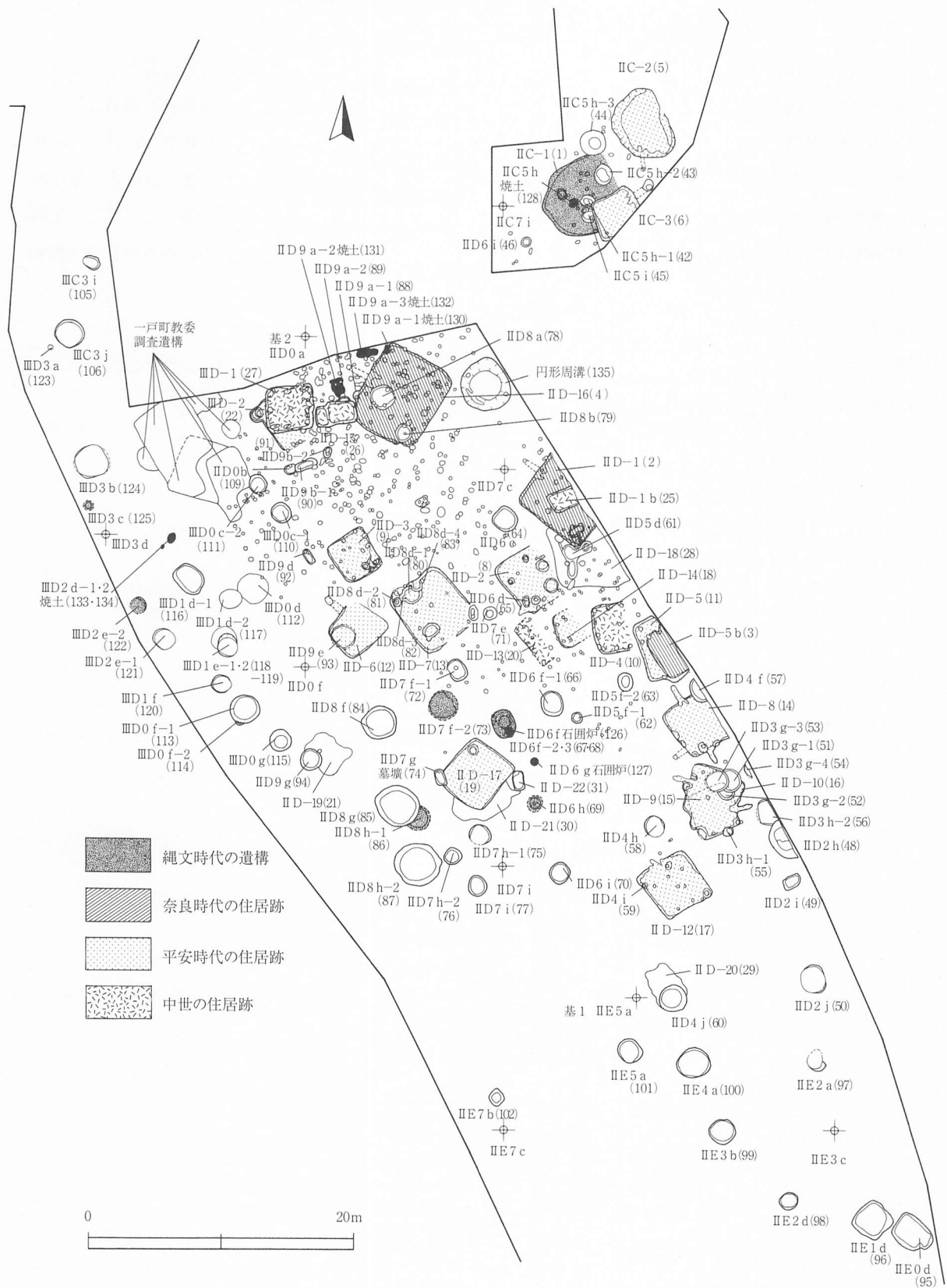




第72図 南斜面部トレンチ位置図



第73図 北斜面部トレンチ位置図



第75図 調査区中央平坦部遺構配置図

8. 柱穴群 (付録図版・写真図版46)

ⅡC区・ⅡD区・ⅢD区において柱穴(柱穴状ピットを含む)が合計508個検出されている。その大半は調査区中央平坦部の北側(曲輪のほぼ中央部)、標高の最も高い部分でまとまって検出された。内訳は掘立柱建物跡・柱穴列を構成するものが計165個、その他が343個である(竪穴住居跡床面で検出されたが、住居跡に伴うものかどうか断定しがたかったものも含めている)。その他の343個の時期は、縄文～近世まで幅があると推測される。掲載した遺物以外に、表採で中・近世の陶磁器片が20数点出土していること、柱穴の配置に規則性を窺わせる部分が他にもあること等から、他にも建物跡・柵列等の存在が予想されるが、室内整理の時間の関係上検討することができなかった。

遺物(第159図295、写真図版97)

<出土状況>ⅡD9b区で検出されたP P 159の底面から295の銭貨が1枚出土している。模鑄銭で、銭文はあるが判読はできない。

柱穴計測表

単位：cm () 推定値

No	開口部径	底径	深さ	備考
1	30×26	14×(11)	50	
2	(32)×30	—	—	
3	(21)×20	—	—	
4	36×32	19×15	51	
5	44×29	23×18	53	
6	40×26	24×19	49	
7	27×24	19×15	22	
8	42×(35)	(32)×27	46	
9	(24)×23	17×14	18	
10	29×18	10×9	53	
11	41×30	20×16	59	
12	24×21	15×15	21	
13	27×24	17×15	32	
14	21×15	15×9	12	
15	31×29	18×14	32	
16	26×24	13×12	17	
17	49×(34)	34×13	30	
18	31×29	18×15	40	
19	31×22	15×13	18	
20	44×27	14×14	28	
21	22×22	14×11	17	
22	61×39	47×26	27	
23	28×14	9×9	—	
24	45×25	13×12	53	
25	23×21	9×7	—	
26	21×19	6×6	—	
27	29×24	18×16	10	
28	35×26	26×18	10	
29	23×20	12×10	28	
30	26×24	12×6	20	
31	20×19	14×14	23	
32	28×26	21×16	23	
33	30×30	22×22	21	
34	29×26	24×19	25	
35	20×16	13×13	22	
36	30×26	14×10	56	
37	20×19	12×10	18	
38	25×23	19×18	34	
39	(24)×24	17×(16)	21	
40	28×(24)	22×20	32	1号掘立柱建物跡
41	26×24	25×19	25	
42	28×(22)	12×11	38	
43	22×20	12×9	—	
44	37×33	17×15	49	柱痕径17×15
45	42×39	36×35	47	3号掘立柱建物跡
46	35×30	18×17	79	柱痕径18×17
47	26×22	17×16	25	
48	35×34	27×20	53	
49	46×36	23×22	62	2号掘立柱建物跡
50	25×24	13×12	22	2号掘立柱建物跡
51	24×21	14×12	11	
52	30×28	18×13	24	
53	34×28	25×19	18	
54	34×34	24×21	13	
55	50×44	28×26	48	8号掘立柱建物跡
56	49×39	35×24	72	
57	24×22	14×10	18	
58	46×40	32×25	47	3号掘立柱建物跡
59	43×42	26×24	35	2号掘立柱建物跡
60	(35)×30	17×16	71	
61	34×29	18×12	50	1号掘立柱建物跡
62	44×34	21×17	47	2号掘立柱建物跡
63	18×15	10×9	16	
64	25×20	12×11	32	

No	開口部径	底径	深さ	備考
65	50×42	33×27	50	
66	25×23	13×12	—	
67	25×21	12×11	32	
68	16×13	9×6	4	
69	25×23	17×15	48	
70	24×23	17×14	58	
71	35×(30)	22×16	52	
72	32×31	22×20	45	
73	25×22	18×17	17	1号掘立柱建物跡
74	25×23	15×13	31	
75	(45)×42	34×29	57	3号掘立柱建物跡
76	23×23	15×14	53	
77	39×36	35×25	59	2号掘立柱建物跡
78	34×24	17×16	61	
79	21×18	8×6	30	
80	28×24	14×14	61	2号掘立柱建物跡
81	28×22	18×13	23	
82	41×29	25×16	57	3号掘立柱建物跡
83	25×19	8×9	18	
84	38×30	22×18	43	2号掘立柱建物跡
85	27×19	12×9	49	
86	16×15	8×7	22	
87	21×20	10×9	37	8号掘立柱建物跡
88	22×19	8×7	33	
89	42×35	20×17	46	2号掘立柱建物跡
90	21×20	11×11	41	
91	34×28	23×18	57	
92	22×21	12×11	18	
93	56×43	35×19	78	
94	36×32	22×18	43	2号掘立柱建物跡
95	45×40	27×23	16	8号掘立柱建物跡
96	65×37	44×19	43	1号掘立柱建物跡
97	41×39	19×17	40	3号掘立柱建物跡
98	?×23	18×14	23	
99	49×34	13×10	37	
100	—	21×14	40	
101	—	21×19	55	
102	42×30	18×15	52	8号掘立柱建物跡
103	30×27	15×15	49	2号掘立柱建物跡
104	(48)×26	19×13	64	
105	53×35	19×13	56	8号掘立柱建物跡
106	39×31	26×25	54	柱痕径18×16
107	(30)×25	(25)×18	37	
108	30×28	15×14	62	柱痕径16×15
109	29×28	19×14	41	柱痕径15×14
110	26×23	14×9	26	
111	28×(20)	20×(15)	13	
112	24×23	14×7	24	
113	22×20	14×13	40	
114	36×(30)	27×(25)	21	2号掘立柱建物跡
115	23×21	15×7	25	
116	36×32	25×23	30	3号掘立柱建物跡
117	39×39	27×24	38	1号掘立柱建物跡
118	25×22	16×15	29	
119	45×37	21×18	32	2号掘立柱建物跡
120	37×(26)	38×19	27	2号掘立柱建物跡
121	35×32	30×26	12	3号掘立柱建物跡
122	32×30	18×17	51	3号掘立柱建物跡
123	22×20	14×13	16	
124	44×38	25×25	51	3号掘立柱建物跡
125	51×50	44×26	49	2号掘立柱建物跡
126	40×40	12×10	51	柱痕径17×16・8号掘立
127	44×36	16×12	39	柱痕径19×18・2号掘立
128	24×22	17×15	27	8号掘立柱建物跡

No	開口部径	底径	深さ	備 考
129	50×40	24×20	57	3号掘立柱建物跡
130	24×21	15×15	34	
131	33×(28)	22×19	49	6号掘立柱建物跡
132	47×38	45×35	22	1号掘立柱建物跡
133	38×34	17×15	37	8号掘立柱建物跡
134	(32)×28	11×9	50	3号掘立柱建物跡
135	41×32	21×15	47	7号掘立柱建物跡
136	(50)×38	(35)×30	15	
137	20×17	12×9	24	
138	33×32	21×18	56	
139	22×21	12×6	54	6号掘立柱建物跡
140	49×(44)	31×16	35	7号掘立柱建物跡
141	34×33	16×14	43	
142	40×(35)	10×9	22	8号掘立柱建物跡
143	25×23	16×14	15	3号掘立柱建物跡
144	26×22	15×14	32	
145	23×23	14×10	20	
146	24×23	13×12	29	
147	38×33	20×19	67	6号掘立柱建物跡
148	29×28	14×16	56	
149	30×(30)	16×13	57	6号掘立柱建物跡
150	(30)×28	15×9	44	
151	25×19	12×11	49	
152	42×28	24×16	89	柱痕径20×19・3号掘立
153	50×44	36×37	62	柱痕径22×20・2号掘立
154	27×22	18×9	16	
155	54×41	13×13	64	柱痕径25×24
156	46×35	26×25	44	7号掘立柱建物跡
157	60×47	37×25	76	柱痕径25×24・2号掘立
158	44×37	22×17	54	2号掘立柱建物跡
159	40×33	26×25	76	
160	51×48	(29)×24	56	1号掘立柱建物跡
161	35×27	21×15	28	2号柱穴列
162	39×32	(11)×11	33	8号掘立柱建物跡
163	22×20	15×12	39	
164	41×37	23×20	67	3号掘立・遺物出土
165	40×34	33×30	50	2号掘立柱建物跡
166	32×30	17×14	52	6号掘立柱建物跡
167	(35)×33	20×17	53	
168	(43)×31	19×15	75	
169	(40)×30	(27×24)	12	
170	(35)×35	20×15	69	1号柱穴列
171	35×(27)	12×12	74	柱痕径19×16・6号掘立
172	48×(34)	18×14	80	柱痕径18×(17)・1号柱列
173	(36)×28	25×18	52	柱痕径26×25・7号掘立
174	36×32	32×28	44	柱痕径16×12・1号掘立
175	33×32	20×18	45	
176	(33)×30	21×20	63	6号掘立柱建物跡
177	(24)×21	(14)×8	32	
178	(28)×20	11×9	20	
179	31×(27)	15×13	69	
180	42×(37)	16×11	85	6号掘立柱建物跡
181	48×38	31×24	78	6号掘立柱建物跡
182	(36)×28	13×13	51	3号掘立柱建物跡
183	17×15	10×8	50	
184	25×18	16×10	52	
185	30×25	18×14	94	
186	31×28	22×19	42	柱痕径19×17
187	36×30	32×23	62	柱痕径22×16
188	32×25	25×19	51	柱痕径17×15
189	18×14	8×6	25	
190	30×27	20×16	19	
191	(20)×17	13×12	17	
192	32×29	24×22	21	1号掘立柱建物跡
193	31×28	23×14	24	2号掘立柱建物跡
194	40×33	30×25	33	2号掘立柱建物跡
195	43×40	21×21	39	柱痕径21×20・3号掘立

No	開口部径	底径	深さ	備 考
196	28×27	26×23	58	
197	40×36	27×27	56	柱痕径19×19・3号掘立
198	(36)×35	20×19	22	1号掘立柱建物跡
199	45×(42)	16×15	15	
200	28×26	20×16	36	2号掘立柱建物跡
201	30×26	21×18	43	柱痕径18×18・3号掘立
202	27×23	17×15	27	
203	57×52	49×42	39	1号掘立柱建物跡
204	34×(29)	28×26	102	柱痕径20×16・2号掘立
205	33×(28)	25×23	57	3号掘立柱建物跡
206	43×32	31×23	11	1号掘立柱建物跡
207	20×20	13×12	35	4号掘立柱建物跡
208	21×20	11×11	34	
209	23×14	13×10	21	4号掘立柱建物跡
210	36×24	22×20	21	2号掘立柱建物跡
211	34×28	25×24	41	3号掘立柱建物跡
212	35×33	18×14	32	柱痕径21×20・2号掘立
213	34×30	26×22	66	柱痕径20×20・3号掘立
214	34×29	21×18	20	柱痕径19×16
215	59×56	34×33	78	柱痕23×22・1、2号掘立
216	47×37	32×27	65	柱痕径22×20・3号掘立
217	17×17	15×14	13	
218	29×28	22×19	33	柱痕径22×22・2号掘立
219	47×40	18×18	49	柱痕径22×22・1号掘立
220	40×36	10×11	49	柱痕径19×19・2号掘立
221	40×34	13×13	71	柱痕径20×16・3号掘立
222	20×15	16×12	13	
223	39×32	20×18	62	6号掘立柱建物跡
224	(28)×26	10×8	57	
225	(32)×32	16×14	60	6号掘立柱建物跡
226	22×20	9×9	53	
227	21×19	6×5	53	
228	(22×19)	10×8	55	102×(96)
229	(34×26)	26×6	50	102×(96)
230	(32×25)	17×9	48	102×(96)
231	(29×24)	13×10	40	102×(96)・7号掘立
232	(24×21)	19×16	32	102×(96)
233	(71×47)	31×23	47	
234	(71×47)	23×9	37	
235	29×29	17×14	59	3号掘立柱建物跡
236	20×19	6×5	30	
237	22×16	12×11	38	102×(96)
238	28×26	12×9	36	
239	22×21	11×9	45	7号掘立柱建物跡
240	56×(32)	19×9	69	6号掘立柱建物跡
241	42×36	26×23	51	7号掘立柱建物跡
242	35×(27)	19×14	57	
243	45×44	27×23	70	2号掘立柱建物跡
244	39×(35)	24×17	59	1号掘立柱建物跡
245	(45)×40	23×19	79	柱痕径19×16・3号掘立
246	48×37	29×21	64	2号掘立柱建物跡
247	46×36	23×9	76	柱痕径18×18・3号掘立
248	43×36	38×13	74	柱痕径18×17・7号掘立
249	54×44	22×15	73	柱痕径20×19
250	52×44	27×14	66	柱痕径17×16・2号掘立
251	55×50	29×29	74	柱痕径20×19
252	38×36	23×16	65	3号掘立柱建物跡
253	34×31	11×10	46	2号柱穴列
254	28×25	9×8	42	
255	32×29	17×14	81	柱痕径16×14・6号掘立
256	41×41	9×9	74	柱痕径18×15・3号掘立
257	45×33	16×15	78	6号掘立柱建物跡
258	35×(32)	20×17	35	7号掘立柱建物跡
259	40×35	(18)×15	26	
260	32×(24)	13×13	63	5号掘立柱建物跡
261	(34)×26	16×14	17	
262	32×30	10×10	23	

No	開口部径	底径	深さ	備考
263	(38)×23	(25)×11	46	
264	16×15	7×6	62	
265	29×(24)	14×9	53	1号柱穴列
266	15×12	7×6	9	
267	35×32	17×12	51	
268	(37)×25	15×12	33	
269	(41)×32	13×11	54	
270	29×(20)	(17)×15	25	
271	32×30	15×15	22	
272	45×41	31×23	71	柱痕径23×23・3号掘立
273	27×25	11×10	16	8号掘立柱建物跡
274	23×(21)	10×9	49	
275	25×25	21×20	20	
276	33×33	28×20	23	
277	43×35	27×20	25	
278	32×25	27×16	29	5号掘立柱建物跡
279	30×27	22×11	26	1号柱穴列
280	27×24	20×17	23	7号掘立柱建物跡
281	28×24	17×13	22	
282	26×24	18×14	15	
283	40×37	—	23	5号掘立柱建物跡
284	18×18	11×9	18	
285	38×31	14×11	71	
286	32×(19)	15×(8)	33	
287	(24)×16	(17)×9	12	
288	14×11	10×8	18	
289	18×16	12×10	—	
290	24×20	18×12	13	
291	23×20	13×11	20	
292	26×25	17×14	44	
293	(23)×18	(13)×10	15	
294	24×23	15×14	17	
295	28×(24)	19×13	49	
296	30×28	15×12	34	
297	27×21	14×7	48	
298	25×25	13×12	41	
299	(22)×22	9×7	21	
300	27×24	20×16	47	
301	35×30	17×12	18	
302	27×21	(12)×8	34	
303	35×30	20×16	33	
304	18×17	6×3	—	
305	14×14	3×3	—	
306	17×17	8×6	—	
307	(47×38)	19×18	48	
308	30×25	19×18	38	
309	51×48	14×14	41	
310	73×60	28×20	50	
311	45×44	21×14	56	
312	22×22	16×16	47	
313	37×30	30×20	19	
314	38×31	18×16	39	
315	30×23	19×12	38	
316	29×(20)	11×11	36	
317	28×(22)	21×18	17	
318	24×18	9×9	18	
319	30×28	20×17	44	
320	31×29	23×17	12	
321	25×19	13×12	11	
322	46×32	20×11	19	
323	38×(15)	14×14	21	4号掘立柱建物跡
324	19×16	13×13	16	4号掘立柱建物跡
325	20×20	16×15	21	
326	(30)×24	(17)×12	54	4号掘立柱建物跡
327	(35)×33	(20)×14	47	
328	22×18	14×12	11	4号掘立柱建物跡
329	(33)×30	(25)×20	36	4号掘立柱建物跡

No	開口部径	底径	深さ	備考
330	25×(21)	16×16	51	
331	33×27	18×16	38	4号掘立柱建物跡
332	23×16	11×4	11	4号掘立柱建物跡
333	49×39	16×15	66	柱痕径20×17・1号掘立
334	21×20	16×14	26	
335	34×31	14×12	60	柱痕径16×16
336	41×37	35×33	31	1号掘立柱建物跡
337	27×25	20×19	61	4号掘立柱建物跡
338	23×21	14×13	20	4号掘立柱建物跡
339	64×63	45×37	75	1号掘立柱建物跡
340	44×38	19×16	76	2号掘立柱建物跡
341	43×40	14×13	80	3号掘立柱建物跡
342	21×20	13×13	11	
343	27×22	8×8	43	
344	24×20	8×7	24	
345	13×12	4×2	22	
346	31×30	19×13	39	4号掘立柱建物跡
347	30×30	18×18	34	4号掘立柱建物跡
348	55×28	13×13	68	
349	25×(22)	9×9	52	
350	34×34	15×14	63	
351	39×(30)	(22×17)	82	
352	(44×44)	31×28	43	
353	53×51	25×24	53	
354	30×26	17×16	51	柱痕径16×16
355	32×28	24×16	—	
356	28×(27)	23×(19)	—	
357	33×38	20×18	69	
358	35×30	25×24	30	
359	22×19	17×15	22	
360	40×31	24×18	44	3号掘立柱建物跡
361	(32)×30	21×20	63	2号掘立柱建物跡
362	31×(26)	(20)×18	53	1号柱穴列
363	34×33	25×17	29	
364	38×30	29×19	19	
365	39×38	25×25	24	5号掘立柱建物跡
366	21×18	13×9	12	
367	17×14	8×5	15	
368	23×20	18×(15)	21	
369	17×15	10×10	10	
370	16×15	8×6	9	
371	21×17	(11×9)	—	
372	44×27	14×7	32	
373	21×20	9×7	40	
374	23×14	10×6	12	
375	18×18	9×8	15	
376	32×29	26×22	—	
377	39×21	20×17	—	
378	(30)×22	(17)×22	—	
379	23×20	14×9	29	
380	24×22	16×12	19	
381	24×24	14×12	38	
382	14×12	6×5	29	
383	21×21	12×11	62	
384	20×20	7×6	21	
385	20×19	11×11	28	
386	36×25	11×7	42	4号掘立柱建物跡
387	19×16	6×6	10	
388	24×17	13×9	18	
389	42×36	25×9	30	
390	28×22	13×12	65	4号掘立柱建物跡
391	24×23	12×10	41	4号掘立柱建物跡
392	26×26	10×8	15	
393	24×23	10×9	41	
394	18×14	6×5	18	
395	29×23	15×14	45	4号掘立柱建物跡
396	21×19	15×15	12	

No	開口部径	底径	深さ	備考
397	24×23	19×18	45	
398	32×26	15×14	14	
399	24×20	6×5	26	
400	28×25	13×12	35	4号掘立柱建物跡
401	65×44	31×14	15	
402	65×44	10×9	14	
403	33×23	24×15	37	
404	28×27	21×18	62	柱痕径21×18・4号掘立
405	26×26	21×21	46	4号掘立柱建物跡
406	36×28	8×6	24	
407	38×30	13×13	41	4号掘立柱建物跡
408	34×33	28×19	42	4号掘立柱建物跡
409	26×25	13×12	31	
410	31×22	16×10	26	
411	26×20	9×9	22	
412	17×16	9×8	10	
413	30×26	16×14	17	
414	25×20	14×9	28	
415	(38)×20	(16×14)	26	
416	36×28	19×16	20	
417	24×21	6×6	20	
418	31×23	17×10	18	
419	29×21	8×8	59	4号掘立柱建物跡
420	26×24	10×9	58	4号掘立柱建物跡
421	25×22	5×5	51	4号掘立柱建物跡
422	25×22	9×8	22	4号掘立柱建物跡
423	20×19	16×12	15	4号掘立柱建物跡
424	23×21	15×12	19	
425	37×35	18×18	15	
426	25×20	18×14	41	
427	21×20	13×12	21	
428	20×18	12×10	23	
429	36×26	16×15	19	
430	30×21	18×13	54	
431	22×19	13×13	30	
432	23×20	7×5	16	
433	30×20	9×7	24	
434	27×25	11×10	34	
435	20×(15)	6×5	40	
436	18×18	10×10	22	
437	26×21	15×13	4	
438	22×21	14×14	29	
439	25×24	15×12	18	
440	30×22	14×10	53	
441	24×16	13×8	13	
442	33×21	23×15	13	
443	23×22	15×14	33	
444	28×23	(26×22)	19	
445	19×19	14×13	23	
446	35×19	13×12	42	
447	47×33	12×8	60	
448	21×21	11×8	24	
449	25×21	8×8	43	
450	40×34	22×16	50	3号掘立柱建物跡
451	(19)×15	14×11	60	
452	(24)×20	11×8	59	
453	36×30	24×20	27	
454	22×17	17×12	38	
455	26×19	16×15	28	
456	26×26	16×14	37	
457	23×20	12×11	41	
458	(21)×18	18×10	39	
459	25×(20)	10×10	44	
460	25×27	14×11	15	
461	32×23	9×9	50	
462	32×27	10×8	19	
463	28×27	15×13	23	

No	開口部径	底径	深さ	備考
464	43×38	15×13	21	
465	34×23	25×11	23	
466	28×26	(17×17)	—	柱痕径14×14
467	27×25	(15×14)	—	
468	34×29	12×12	23	
469	34×31	20×18	27	2号柱穴列
470	19×(19)	12×8	27	
471	21×19	11×11	65	
472	23×22	16×13	53	2号柱穴列
473	17×14	11×8	21	
474	23×20	13×11	34	
475	24×21	18×12	—	
476	16×15	12×12	14	
477	25×23	15×15	42	
478	(25)×23	(15)×10	21	
479	21×(20)	14×7	18	
480	26×22	17×14	56	
481	55×42	31×20	55	柱痕径23×20・5号掘立
482	27×27	20×16	26	
483	29×26	15×14	33	5号掘立柱建物跡
484	41×30	23×23	53	
485	(28)×27	18×(9)	50	2号柱穴列
486	(18)×17	8×(8)	—	
487	25×22	17×13	37	
488	(25)×19	14×10	29	
489	(25)×19	12×9	42	
490	21×18	12×11	18	
491	27×26	16×15	53	
492	23×19	12×11	65	
493	21×21	7×6	38	
494	27×24	12×11	55	柱痕径19×18
495	27×25	18×16	63	
496	24×24	14×12	54	
497	23×21	11×11	37	
498	27×25	20×16	12	
499	35×34	17×17	63	柱痕径22×21・5号掘立
500	50×38	22×14	102	
501	33×30	23×21	51	
502	39×37	10×10	33	5号掘立柱建物跡
503	20×18	12×10	23	
504	26×21	22×17	39	5号掘立柱建物跡
505	—	25×17	72	6号掘立柱建物跡
506	(30)×19	(30)×19	7	7号掘立柱建物跡
507	21×20	12×10	32	
508	(83)×48	(70)×35	29	

9. 遺構外出土遺物

粗掘り中や遺構検出作業時に表土や第Ⅱ層などから出土した遺物の中から、全体が網羅出来るように選択して本項に記載する。本項では時代ごとに大別しその中で遺物の種類ごとに分けて記載する。しかし、石器については縄文時代か弥生時代か区別が困難なことから、便宜的に縄文時代の遺物として一括する。

(1) 縄文時代

1) 土器

土器には器面の文様や縄文の種類、胎土の調整などに種々の特徴があり、その特徴に合わせ時期分けをして記載することとするが、器面に縄文のみを施し胎土などに时期的な特徴が判然としないものは一括する。
〈早期〉(第107図444、写真図版103)

早期に属する土器は444の1点のみである。体部の小破片のため詳細は定かでないが、内外面に貝殻条痕で調整され、器表にはさらに横形の擬似爪形文を付している。胎土に砂粒の混入も少なく堅緻であり、繊維の混入は見られない。文様や器面調整などの特徴が蛭沢 a II 式に近いことから、早期中葉の貝殻沈線文系土器に位置付けられる。

〈前期〉(第107図428～440・445・446・458、写真図版103)

胎土に繊維を混入するか器面に前期特有の縄文を付す土器片16点を前期として分類した。以下では特徴ごとにさらに細分する。

- ①器面に単軸絡状体縦回転による撚糸文を付す土器片が6点ある。口縁部破片を3点含むが2点(428・446)は口縁端部に絡状体を押捺した半置反転による縄文を持ち、他の口縁部破片(429)は口縁端部まで撚糸文が付される。その他の3点(435・436・439)は器面に単軸絡状体縦回転による撚糸文を付す体部破片のため口縁部の状況は不明である。このように器面に単軸絡状体縦回転による撚糸文を付すのは前期初頭の深郷田式土器の特徴とされている。特に口縁端部に半置反転の縄文を付すことはその証であり、本土器もほぼこの時期に位置づけられる土器と理解される。
 - ②口縁部に横走る不整撚糸文を付す特徴のある土器で4点(430～432・434)が該当する。特に430・431・434の3点はまったく同様な特徴を持ち、432は頸部に沈線に挟まれた2条の隆帯が全周する。このような特徴は前期前葉の大木2式土器や円筒下層 a 式土器に見られるものである。特に432は円筒下層 a 式そのものであろう。
 - ③特徴が前2種類に該当しない縄文を器面に付す土器片であり、口縁部1点(458)、体部4点(433・437・438・440)、体部下位～底部1点(445)の6点該当する。付される縄文で見ると単節斜行縄文を付す4点(433・437・445・458)と撚糸文1点(438)、木目状撚糸文1点(440)に分けられる。これらの土器は胎土に繊維を混入することから前期に属しようが、それ以上のことは不明である。
- 〈後期〉(第107・108図443・447・450～452・457・460・471、写真図版103・104)
- 体部に施文された文様で明らかに後期に位置づけられる個体は3点(450・457・460)のみで、他の5点(443・447・451・452・471)は縄文の様相、胎土の状況などから中期か後期の土器と判断されたものである。
- ①無文の器表に3条並行する沈線で文様を描くもの(450)と単節斜行縄文の施文された器面に沈線で区画し縄文を磨消して文様を付す特徴を持つもの(460)で、後期初頭の十腰内 I 式に多用される文様を持つ。
 - ②口縁部が富士山形の波状口縁で器面に入り組み三叉文の文様を付す土器が1点(457)ある。文様は、器

面全体にR L縦回転による単節斜行縄文を付した後、沈線で入り組み文を区画し不必要部分の縄文を磨消して文様を仕上げている。このような文様は後期末葉～晩期初頭に見られるものであり、この土器もほぼこの時期に相当する。

- ③器面に単節斜行縄文のみを付す土器であるが、口縁部1点(447)、体部3点(443・451・452)含まれる。口縁部破片の447は口縁端部が肥厚する特徴があり後期の土器であろう。その他の体部破片は時期の特定は困難であるが胎土や縄文の状況から後期に位置づけられる土器と判断した。

〈晩期〉(第108図454・443・459・461、写真図版103)

確実に晩期に属する土器は3点(454・459・461)のみである。文様が明確なのは沈線が付され小波状口縁となる454と、肩部に横走る並行沈線の間を縦に刻み目を伏して文様を付す459がある。残る1点(461)は口縁部文様が欠失するので確実ではないが、体部の縄文が晩期的であり、ここに含めた。土器型式では中葉の大洞C1式に位置づけられようか。

2) 石器(第110・111図、496～508・511、写真図版104)

縄文時代の石器は全部で14点の出土であるが、中には石錐1点、石匙7点、石筥2点、尖頭器2点、不定形石器1点、磨石1点がある。

〈石錐〉496の1点出土しているが、摘み部を欠失しており尖端部のみを残存する。縦長剥片を素材にし、側縁部の両面押圧剥離調整によつて断面三角形の尖端部を作出しているが、使用した痕跡は認められない。なお、残存する形状から欠損品である可能性が強い。残存全長約3.4cm、最大幅約1.5cmであり、石質は奥羽山脈産の頁岩である。

〈石匙〉出土した7点は完形品が2点(497・508)と、残る5点(498・499・500・506・507)のうち刃部を欠損する4点(498・499・500・506)と破損により一部のみを残存する1点(507)がある。平面的な形状はいずれも縦型であり、大型のもので全長6.5cm、幅約2.7cmであり、その他は小型が多い。使用される石材はすべて奥羽山脈産の頁岩である。

〈石筥〉石筥とした2点(501・503)は典型的な形をした石筥であり、平面形をやや幅狭の撥形に作り幅の広い先端部を刃部としたものである。501は側縁部を表裏両面に剥離調整し刃部は片面調整としている。また、503は裏面に一次剥離面を残し、側縁からの剥離は、裏面には鈍角に、表面には鋭角に調整され、刃部は表面からの片面調整である。大きさは全長が約9.0cmと約7.2cm、最大幅はともに約4.0cmである。石質はいずれも頁岩であるが501は奥羽山脈産、503は北上山地産である。

〈尖頭器〉尖頭器とした2点(502・504)はともに一端を欠失しているので定かでないが、平面的には石槍に近似しており、石槍の破損品の可能性がある。側縁の剥離調整は両面に対する入念な押圧剥離で仕上げられ、断面形は薄い凸レンズ状である。残存する先端が当初の先端かは定かでないが、502は丸く仕上げられ504は尖る。残存する大きさは全長約8.0cmと約7.0cmである。石質はともに北上山地産の頁岩である。

〈不定形石器〉505の1点が該当するが、一次剥片の縁辺部を簡略的な調整剥離により刃部を作出したもので、いわば削器的な石器である。石質は北上山地産の赤色頁岩である。

〈磨石〉511は一部を破損しているが棒状の自然礫の稜線部分を磨石として使用したもので、石質は北上山地産の砂岩である。

〈円盤形石製品〉19点(513～531)出土している。大小には多少の違いはあるもののいずれも北上山地から産出した頁岩の断面が扁平な自然円礫の周辺部を打ち欠いて成形したものである。大きさは長さ2.7cm～4.5cm、幅2.5cm～5.7cm、厚さ0.3cm～1.5cm、重さ2.91g～21.92gであり、平均的には長さ幅は3.0cm代、厚

さは0.7cm前後、重さは10g前後である。この石製品は遺構に伴って出土した例は1点(522)のみで、他はすべて粗掘り中に表土や遺構検出作業中の出土であり、それも表土からの出土が多い。これまでの例では縄文時代後期や晩期に共伴する場合が多く、当遺跡では後・晩期の土器の出土が少なく後・晩期の遺物として積極的な証拠は無いが、本報告では取りあえず縄文時代の遺物としておく。

3) 土製品(第109図489・492(A)・492(B)・491・493・495、写真図版104)

土製平玉2点、垂飾品2点、動物形土製品1点、器種不明土製品1点がある。

〈土製平玉〉489・495の2点であるが、2点とも粘土で扁平な基石状に形を作り焼成したものであり、鈕や貫通孔はなく、径約1.7~2.0cmである。

〈垂飾品〉出土している2点(492(A)・492(B))は扁平な粘土でC形状に作り、全面に縄文を付した後上端に貫通孔を穿つ。下端部分を欠失しているのもので全体的なことは不明であるが、平面的には勾玉状の形状をし、耳飾りである可能性も考えられる。

〈動物形土製品〉1点(493)の出土である。頭部のみを形作ったものと推測され、顔面を略三角形に作り耳を尖らせ目・鼻・口を沈線と刺突で抽象的に表現している。全長約5.0cm、最大幅約4.0cm、厚さ約2.0cmの大きさがあり、焼成によって一部に黒斑を残すが褐色である。顔全体のイメージは狐的であり、出土した層位が約5,500年前の降下とされる中掘浮石層の上面からであり、縄文前期に位置づけられる可能性が強い。

〈器種不明土製品〉出土した1点(491)は明らかに粘土を焼成したものであるが、なにを形作ろうとしたものかはまったく不明である。粘土を萱状の幹に巻き付けた痕跡を残し、焼成を受け一端に焼けこげ痕が残る。大きさは全長6.5cm、幅約1.0cm、厚さ0.7cm位である。

(2) 弥生時代

1) 土器(第107・108図441・442・448・449・453・455・456・462~470・472~476、写真図版103)

弥生時代の土器と考えられるのは全部で21点ある。その中には色々な文様や特徴を持つ土器が含まれているのでさらに細分される。

- ①無文の器表に口縁と並行して変形工字文と推測される沈線文を付す口縁部の小破片であり2点(464・465)が該当する。初頭の谷起鳥式土器に近い特徴であろう。
- ②縄文の付された器面を沈線で区画した後、不要部分の縄文を磨消する磨り消し技法によつて文様を付す土器で2点(453・456)該当する。型式名は定かでないが文様の特徴から中期的な様相と言えようか。
- ③無文や縄文を付した器面に沈線のみで文様を付す土器であり4点(473~476)該当するが、475は他の3点と縄文と沈線の雰囲気異なる。しかし、時期的には末期の天王山式土器や赤穴式土器に近似した特徴であることから、末期に属する土器であろう。
- ④器面に沈線と刺突文で施文する土器で2点(469・470)ある。文様の特徴から赤穴式土器であろうか。
- ⑤器面に細い単軸絡状体回転による斜行や縦行する撚糸文を付す土器で3点(442・466・472)ある。このような特徴は赤穴式土器に見られるものであり、この土器もほぼそれに該当しよう。
- ⑥器面に縄文のみを付す土器で、8点あるが、縄文の種類によって細分される。
※単軸絡状体の回転による撚糸文を付すものが5点(441・448・462・467・468)あるが、器厚や内面の調整、撚糸文の様相などから5個体の破片と推測される。
※斜行縄文を付す個体で3点(449・455・463)あるが、中に口縁部1点(455)と体部下位~底部を残す1点(463)があり他は体部破片である。

以上の破片は内面調整、縄文、器厚などから弥生土器としたが、時期の特定は出来ない。

(3) 続縄文時代 (第109図482、写真図版104)

北海道地方の続縄文土器と考えられる土器片が1点(482)出土している。小破片のため器種や器形は定かでないが、無文の器表に隆起帯を添付してその両側をナデで断面三角形に仕上げている。同様な特徴の土器に縄文時代では早期の槻木下層式土器が存在するが、胎土や器面に条痕がないなど調整が異なり、北海道地方の古墳時代の北大Ⅱ式土器の特徴と言える。当遺跡では遺構内からも小破片がもう1点出土している。

(4) 奈良時代 (第109・112図490・494・512、写真図版104・105)

奈良時代の遺物と推測されるものに土製勾玉1点、硬玉翡翠製の勾玉1点、土製丸玉1点ある。

〈土製勾玉〉490は粘土紐で勾玉の形にやや湾曲させて形を作り、上端に貫通孔を付した後焼成したものであり、全長が2.5cmと小型である。黒色処理はなく色調は褐色で、器表のミガキは顕著でない。

〈硬玉翡翠製勾玉〉512はやや縞状の濁りのある翡翠を素材とした勾玉であり、全長約4.5cmと大型である。全体形はC形状で下端が細くなり上端部に貫通孔を穿つ。色調は白味の強い淡い緑色である。

〈土製丸玉〉494は粘土で平面円形・断面隅丸方形的に成形し中心部に貫通孔を穿って焼成したものである。色調は淡い褐色でミガキはなく、径約1.3cmの大きさがある。

(5) 平安時代

遺構外から出土した平安時代の遺物は土師器と須恵器がある。

1) 土師器 (第109図477～481・483～488、写真図版104)

出土の9点に坏3点(477・478・484)、甕3点(479～481)、高台付皿1点(483)、把手付き鉢2点(487・488)を含む。

〈坏〉3点はいずれもロクロ使用成形されるが内面がミガキ後黒色処理される2点(477・478)と無処理の1点(484)がある。前者の底部切り離しは回転糸切り離し無調整であり、器形は3点とも同様である。

〈甕〉3点にはロクロ使用成形の1点(481)と非ロクロ使用成形の2点(479・480)がある。ロクロ使用成形された甕481は体部上位～口縁部を残し内外面にロクロ成形痕を残す。非ロクロ使用成形の2点は内面がナデ、外面がナデやケズリ調整され、頸部が窄み口縁部が強くと外反する479と体部が直立し口縁部が短く屈曲する480がある。

〈高台付皿〉483の1点のみである。ロクロ使用成形され底部に高台を付した痕跡を残す体部下位～底部を残す破片である。

〈把手付鉢〉487・488の2点が該当するが、前者には把手部と鉢部が若干残存するが、488は把手部のみであり、胎土の調整、焼成の状態、器面調整などから同一個体と推測されることから、本来は両手付鉢か非ロクロ使用成形された両手付坏の可能性が高い。胎土に砂粒の混入は少ないが若干小礫が混入し焼成は良好である。鉢内面の調整は粗雑なナデのみで、把手と外面もほぼ同様に粗いミガキ・ケズリ・ナデで調整され、この様相は448も同じである。

2) 須恵器 (第109図485・486、写真図版104)

出土した2点には坏1点(485)と甕1点(486)がある。

〈坏〉485はロクロ使用成形され体部下位～底部を残す破片であり、底部はヘラケズリ調整されており、切

り離し技法は不明である。346の甕はロクロ使用成形された口縁部の破片であり、内外面にロクロ成形痕を持つ。

(6) 中世・中世以降

中世またはそれ以降に属する遺物には陶磁器類8点、石製品2点、鉄製品25点、銭貨9点が含まれる。なお、出土した中には中国磁器と国産陶器を含むが出土量が少ないことから一括して記載する。

1) 陶磁器

8点には青磁1点、白磁1点、白磁染付3点、灰釉陶器3点あり、以下にそれぞれについて記載する。

〈青磁〉562の1点の出土である。中国龍泉窯産の小碗腰部分の小破片である。成形は型作りと推測され外面波状の浮文が観察される。胎土は龍泉窯特有の白さを持ち、釉薬の色調も鮮やかな緑色をなすいわゆる砧手の上手のものである。時期的には元時代の14世紀代であろうか。

〈白磁〉558の1点が出土している。一般に中国景德鎮窯産とされている皿の腰～高台を残す破片であり、口縁部を残存していないが、端反りとなるタイプである。高台がやや内傾気味に作るのを特徴とし、畳付は露胎で蛇管の砂が付着する。遺跡からは15世紀末～16世紀代に一般的に出土するものである。

〈白磁染付〉557・561・564の3点出土している。561と564を比較すると釉薬、呉須、絵付けなどに微妙な違いがあり、焼成した窯もしくは時期に違いのあることが推測される。561は直口型の口縁部～腰部分を残す破片であるが、釉薬が白濁した不透明釉であり、絵付けの呉須と混じり合い濁っている。胎土は白く焼成不良とは言えず、本来的な特徴であろう。564は告部分のみを残す小破片であるが、胎土は白く釉には嵌入があり、見込みに呉須による絵付けが見られる。2点は中国明時代の16世紀代の所産であろう。557は高台脇～高台を残す皿の破片であるが、高台がやや角張り大きく作ること、釉薬が薄くさらに溶け方が悪く焼成不良であること、呉須が灰色的であり中国産にないことなどから、国産の初期伊万里に相当するであろう。

〈灰釉陶器〉瀬戸・美濃系とされる灰釉が559・560・563の3点出土している。559と563の2点は碗と推測される。559は口縁部～口縁端部を残存する碗の小破片であり、外面に線描連弁文が付される。563は腰部～体部中位を残す碗の小破片である。560は丸碗の腰部小破片である。釉薬は3点ともやや黄味を帯びた灰釉である。時期的には大窯I期の製品で15世紀末～16世紀代に位置づけられる。

2) 石製品

石硯の破片が1点、砥石1点の2点が該当する。

〈石硯〉509の1点であるが、粘板岩（スレート）を使用した製品であるが、陸部分の縁の小破片であり、全体的なことは不明である。

〈砥石〉510の1点該当する。平面が長方形で断面方形のホルンフェルス素材とし3面に使用面を持つ砥石である。

3) 鉄製品

全部で25点出土しているが、出土した層位がすべて表土であり、そのことからだけでは時期の特定は不可能であり、古代～近代までの製品が含まれる可能性が強い。因みに、種類別では丸棒状2点、角棒・釘状5点、板状鉄製品4点、鍋2点、環状鉄製品4点、鎧部品1点、溶鉄1点、蓋1点、器種不明5点に分けられる。なお、大きさについては一覧票を参照して欲しい。

〈丸棒状〉545・548の2点該当するが、断面が丸形の共通点があるものの、548は先端が鋭角に尖ることから丸釘であるが、545は針金の断片と推察される。時期的には近代～現代であろう。

〈角棒状・釘状〉断面が方形で釘と推定される物が533・541・550・552・556の5点出土している。断面は方形で共通し先端ほど細くなる形状をなし、本来は折頭釘であろうと推定したものであるが、古代以降丸釘が出現するまでの釘の一般的な形状であり、時期を特定するのは困難である。

〈板状鉄製品〉何かの一部または部品である可能性が強いが全体を残していないので器種不明なものを板状鉄製品としたが543・547・553・554の4点が該当する。543・554は若干湾曲するので鍋かとも推測したが、錆の状況から鋳物ではなく鍛造で作られた可能性が高く、他の2点はいわゆる鉄板である。

〈鍋〉534と537が該当する。534は鋳物製鍋の口縁部小破片であり、錆により亀甲割れが著しい。537は鍋と別鋳された鋳物製の吊り耳であり、表面に細い隆起線で文様を付した鋳型で略富士山形に作られ中央下部に透かし窓を入れ中心部に釣を架ける貫通孔がある。錆の付着状況から現代のものである可能性が高い。

〈環状鉄製品〉538・539A・539B・542の4点該当するが、539A・Bは同一個体であるため、都合3点の出土である。環状鉄製品としたが、539は平鉄を方形の環状に加工したものであるし、542は針金状の丸棒を丸く巻いた状況を示し、前者と後者には形と作りに違いが見られる。前者は何かの柄部分の責金具か縁金具であろうと推測でき、時期的には中世の可能性もある。542は針金が巻いた状態の現代品であろう。538は銅製品である。

〈鎧部品〉549の1点が該当する。一部を欠失するので全体的なことは定かでないが、一端が丸く仕上げられた細長く薄い鉄板で作った小札に近似した形状を持つ製品である。嚇し穴は確認されていないが形状が小札に似ることから、鎧の部品ではないかとした。

〈溶鉄〉溶解した鉄の塊であり544の1点が出土している。表面が赤く錆びているが亀甲割れは無いことから銑ではなく鋼である可能性が高い。

〈蓋〉551の1点が該当する。鋳物製と考えられ、全体を復元すると径10cmほどになる。上面には文様は観察されず平坦であり、下面には身の口に沿う受けが突起帯として全周する。形や大きさから鉄瓶の蓋と考えられるが、時期的には中世～現代まで製作されており特定出来ないものの、錆の付着状況から近・現代の物である可能性が高い。

〈器種不明〉器種不明としたのは鉄製であるが、製品的な形状をなさない535・536・546の3点と2枚の鉄板を重ねて鋳留めし何かの一部と認識できる555の1点、一部を欠失すると思うが残存する形状から器種を特定出来ない540の1点の合計5点ある。

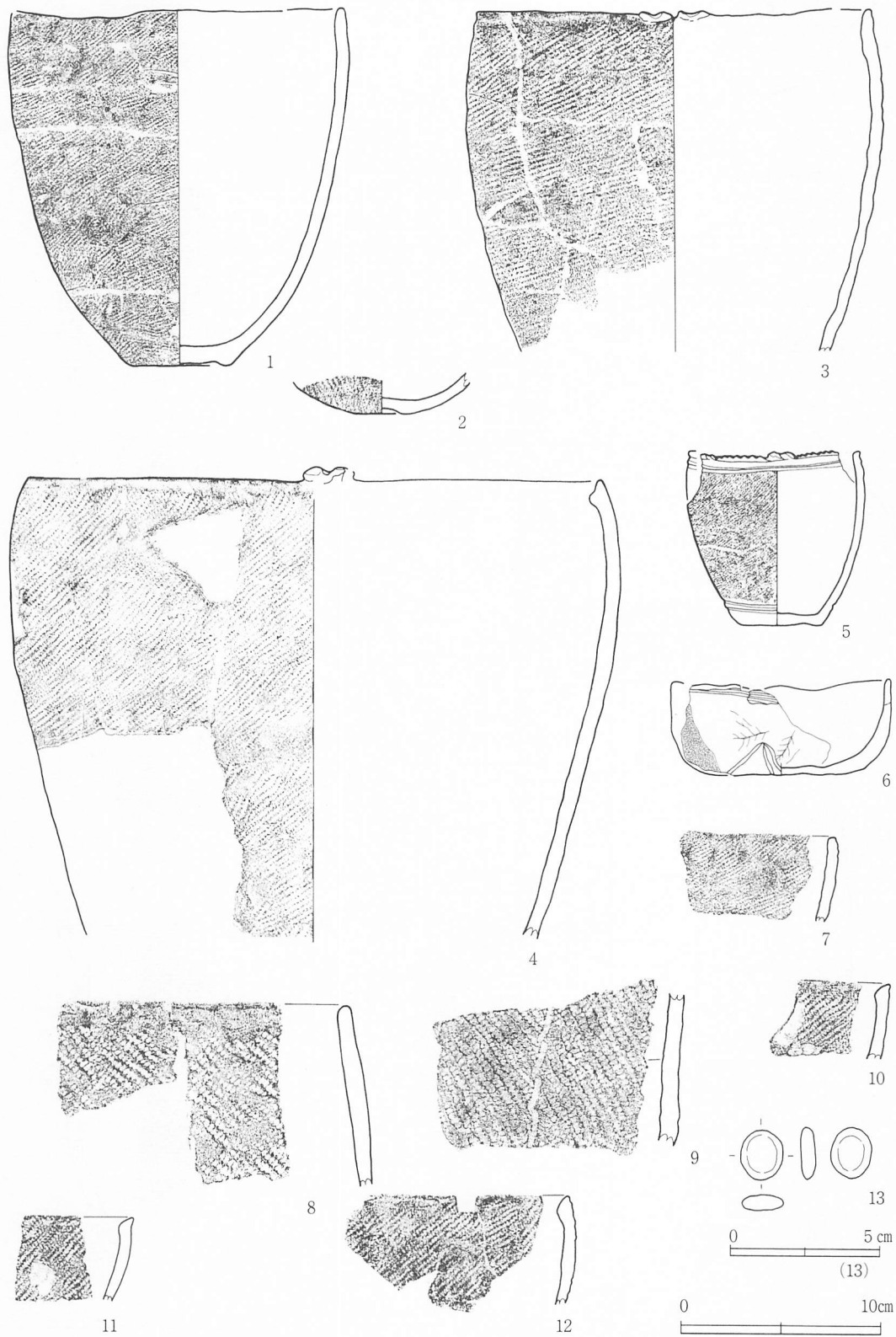
4) 銭貨

全部で9点(565～573)出土しているが、面の銭文により中国の銭名を持つ4点(565・567・568・571)と寛永通寶の銭名を持つ3点(570・572・573)、無文の2点(566・569)を含む。

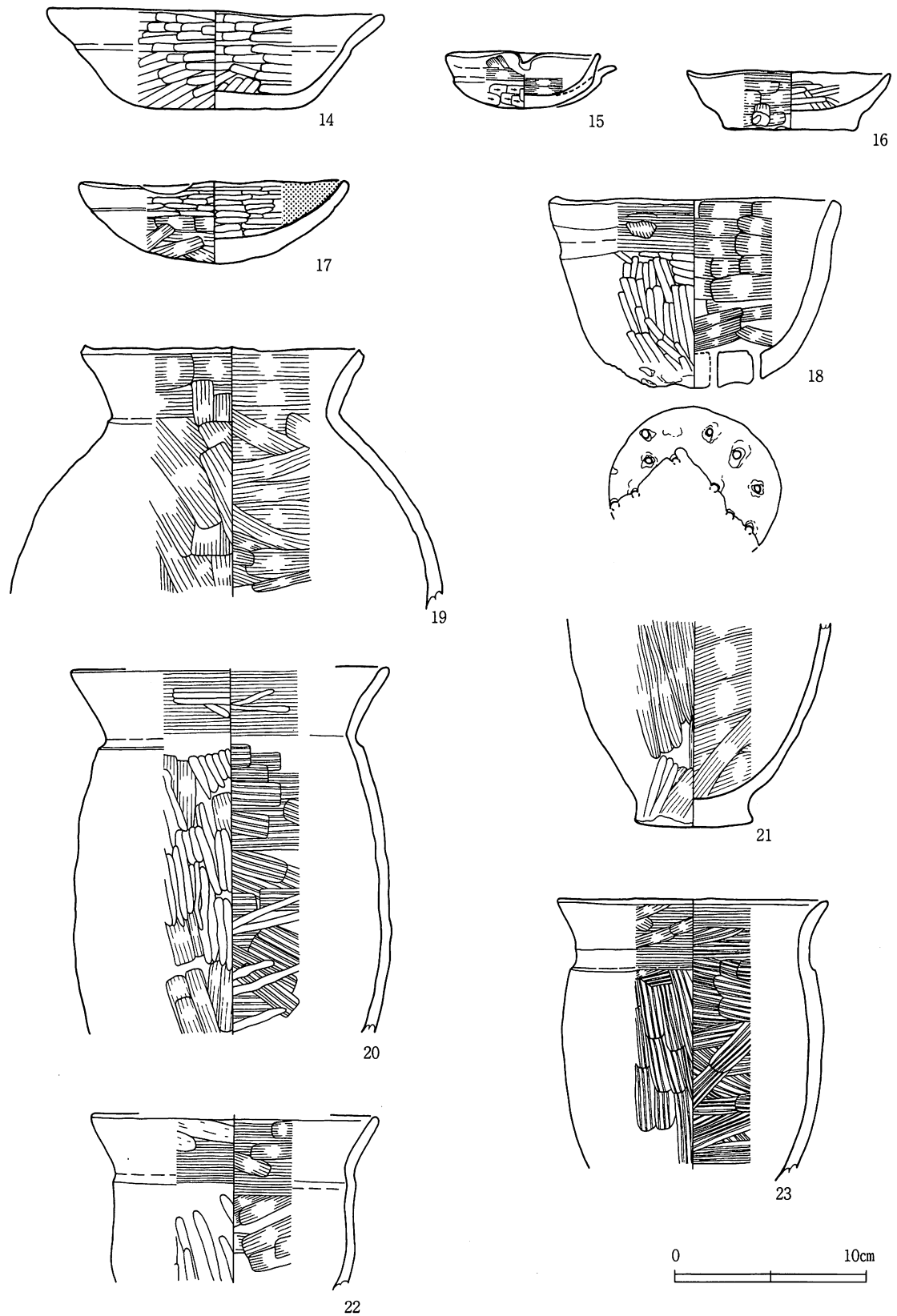
中国の銭名を持つのは565の嘉祐通寶、567の淳化元寶、568の大觀通寶、571の皇宋通寶であるが、面の銭名は大觀通寶以外は不鮮明であること、背の輪が不明瞭でほとんど無い状態であるなど、中国渡来の本銭とは断定出来ないことから、模鑄銭である可能性が高い。もし、本銭とするとこれらはすべて中国の990年～1107年の北宋の時代に鑄造された銭である。しかし、模鑄銭であれば中世ではあろうが時期の特定は困難である。

面に銭名の無い2点についても、模鑄銭と言うことが出来よう。北東北の中世城館遺跡では普遍的に出土する物であり、日本で中世に鑄造された物と理解される。

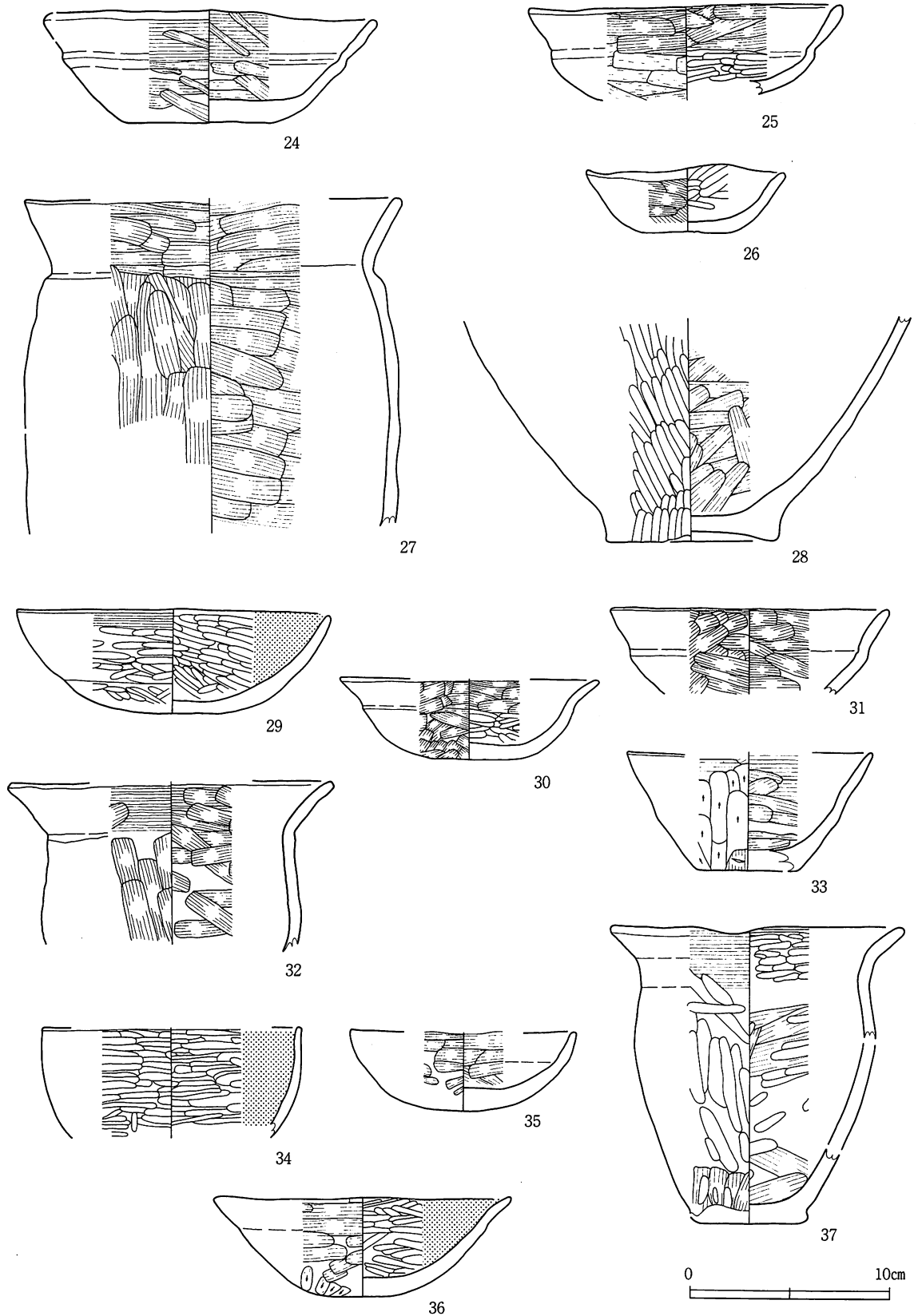
面に寛永通寶の銭名を持つのは近世に徳川幕府が日本の正用銭として鑄造した銭であり、当遺跡では3点出土している。その中の570は書体から寛永年間(1630年頃)に鑄造されたものであるし、572はそれ以降、573は鉄製の銭であることから江戸中期以降に鑄造された物である。



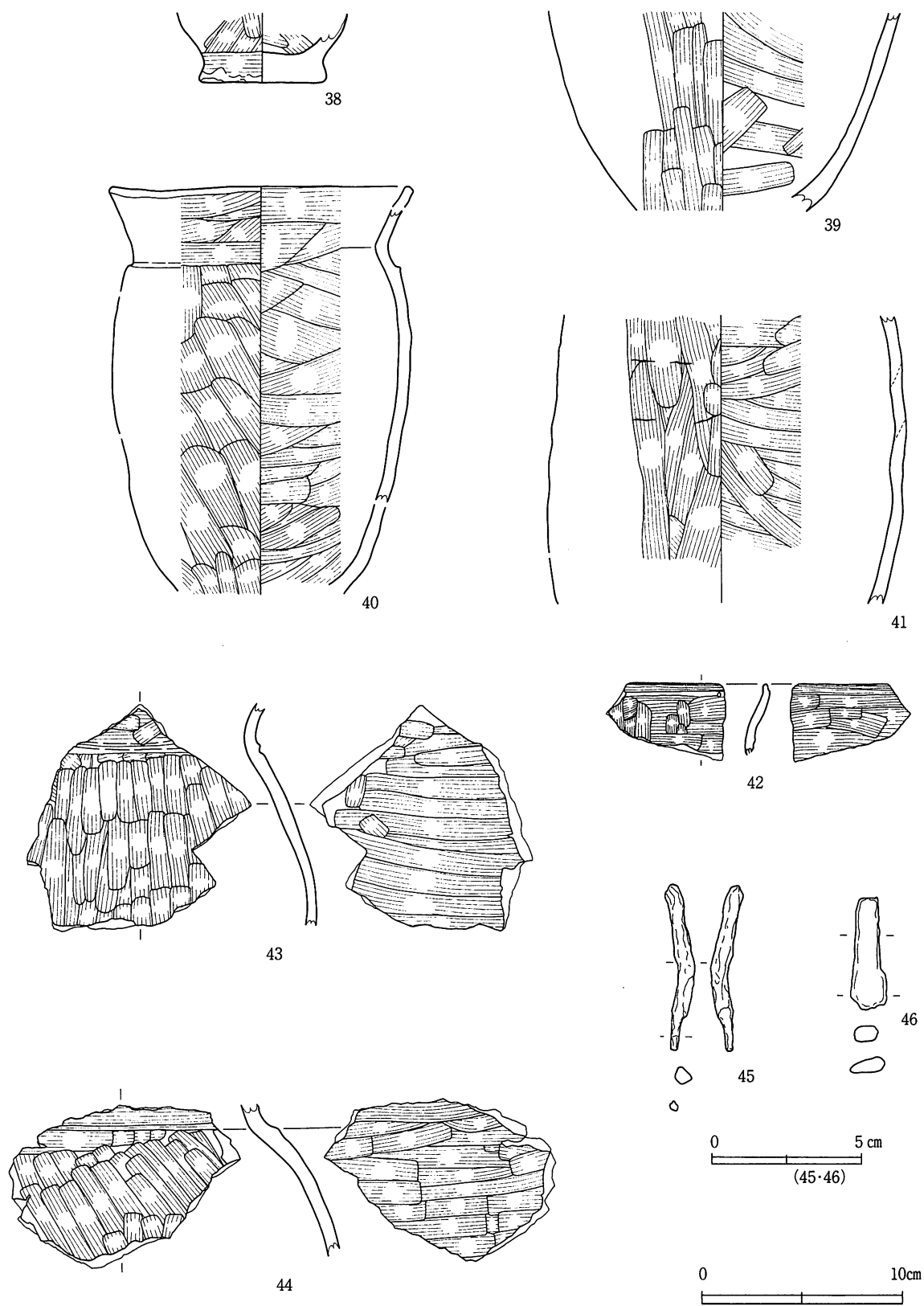
第76図 遺構内出土遺物 II C-1 住



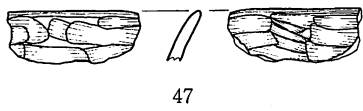
第77図 遺構内出土遺物 II D-1住(1)



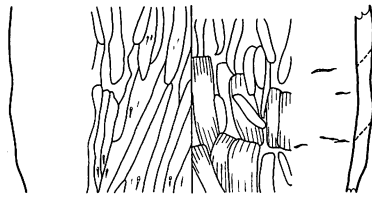
第78図 遺構内出土遺物 II D-1 住 (2)



第79図 遺構内出土遺物 ID-1住(3)

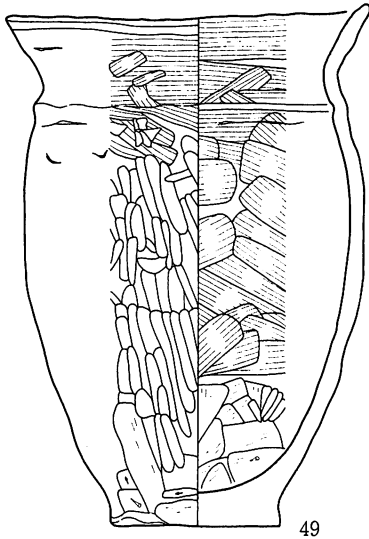


47

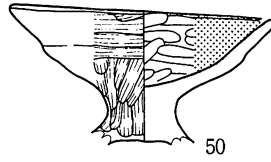


48

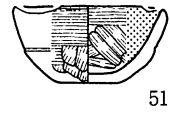
ⅡD-5b住



49



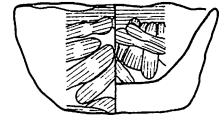
50



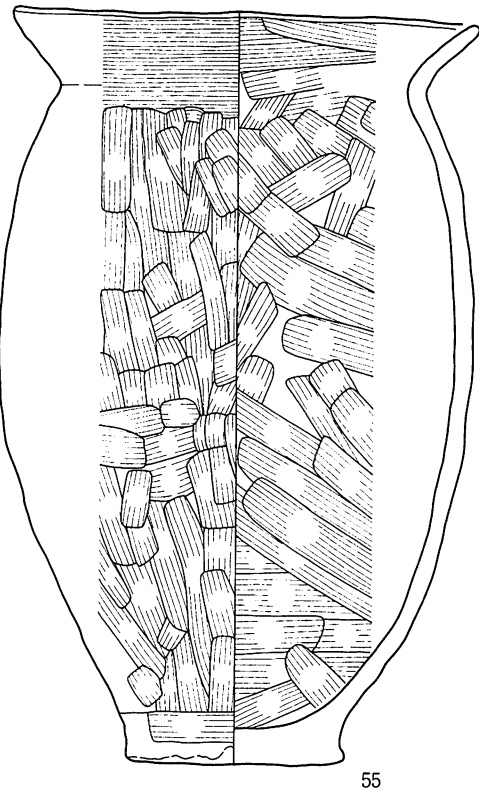
51



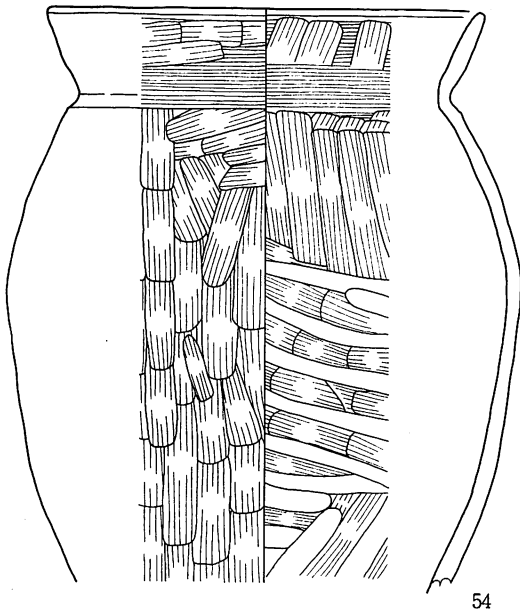
52



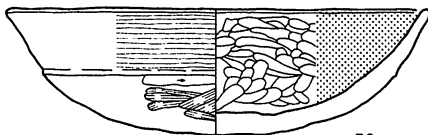
53



55

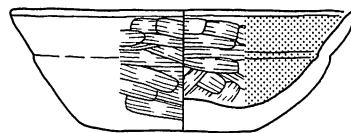


54

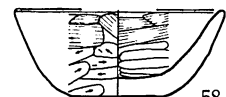


56

ⅡD-16住



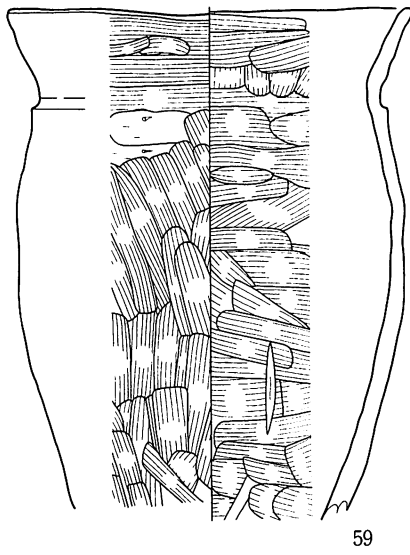
57



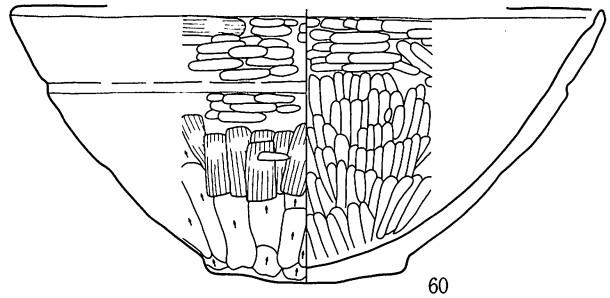
58

0 10cm

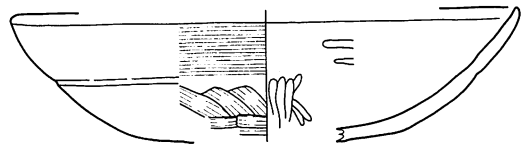
第80図 遺構内出土遺物 ⅡD-5b住・ⅡD-16住(1)



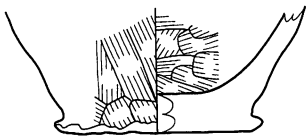
59



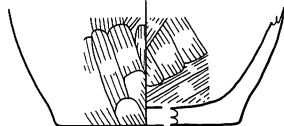
60



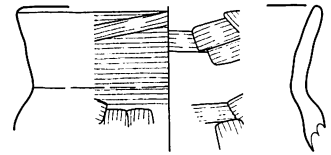
61



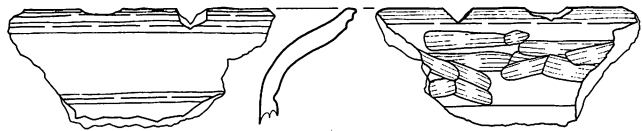
62



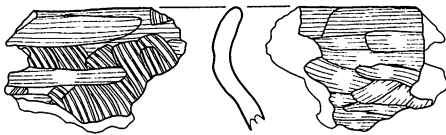
63



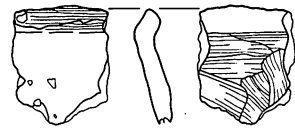
64



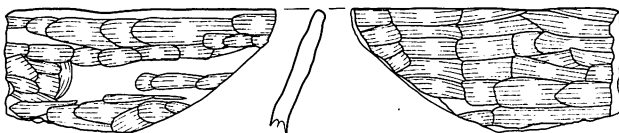
65



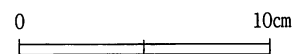
66



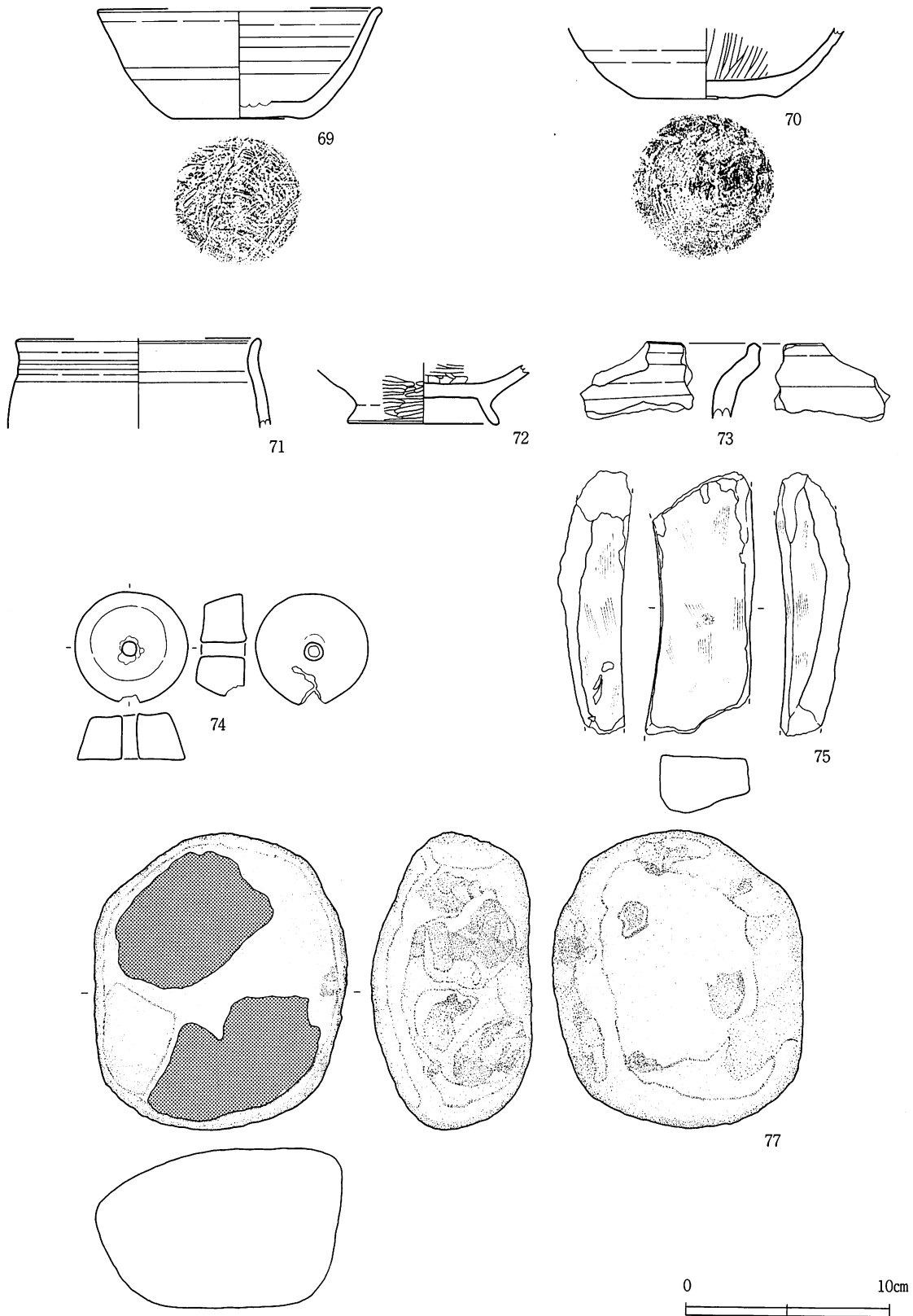
67



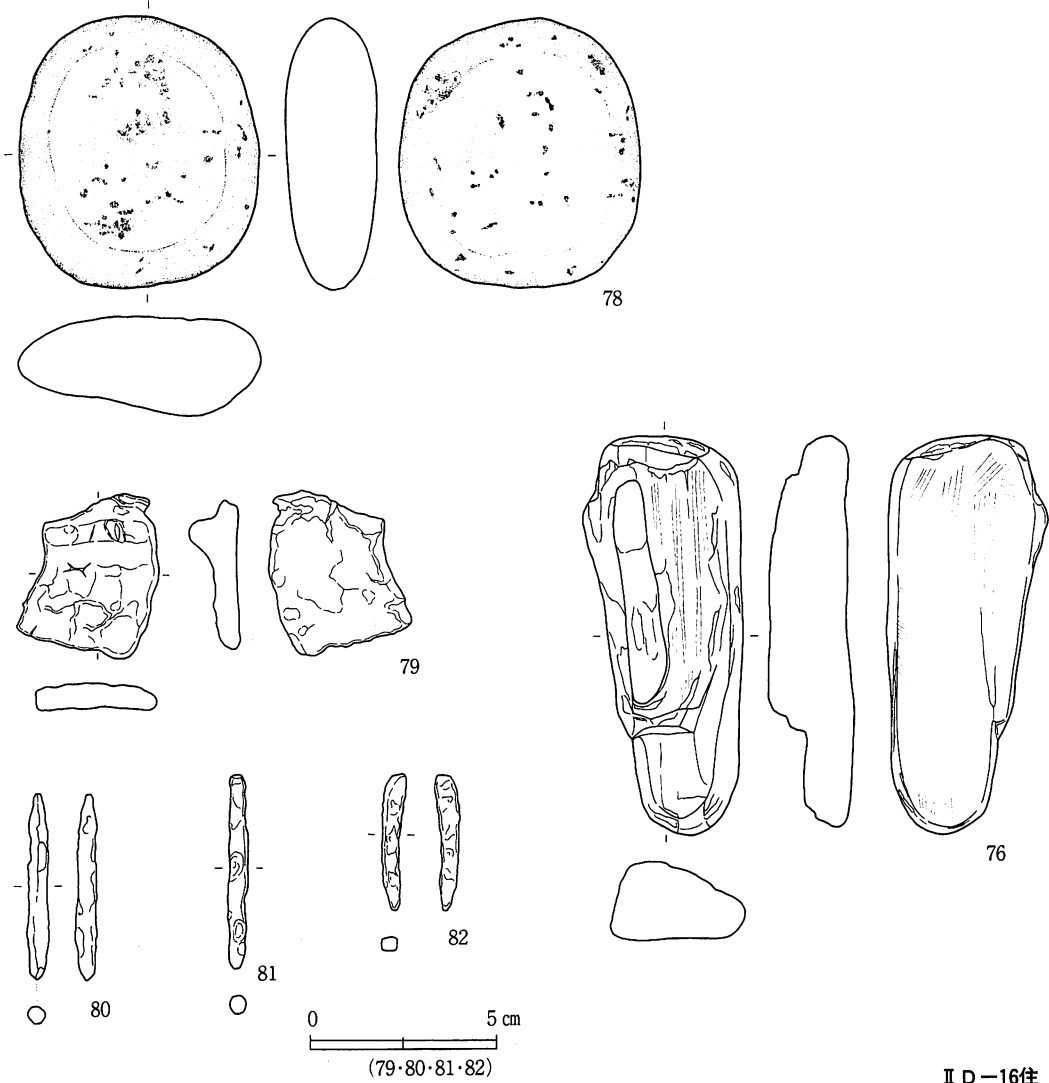
68



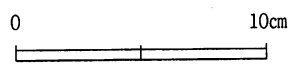
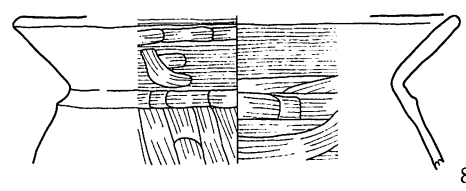
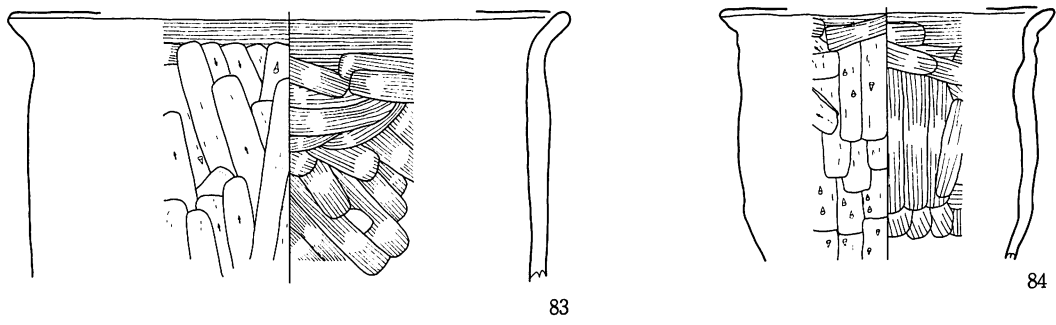
第81圖 遺構内出土遺物 ID-16住(2)



第82図 遺構内出土遺物 II D-16住(3)

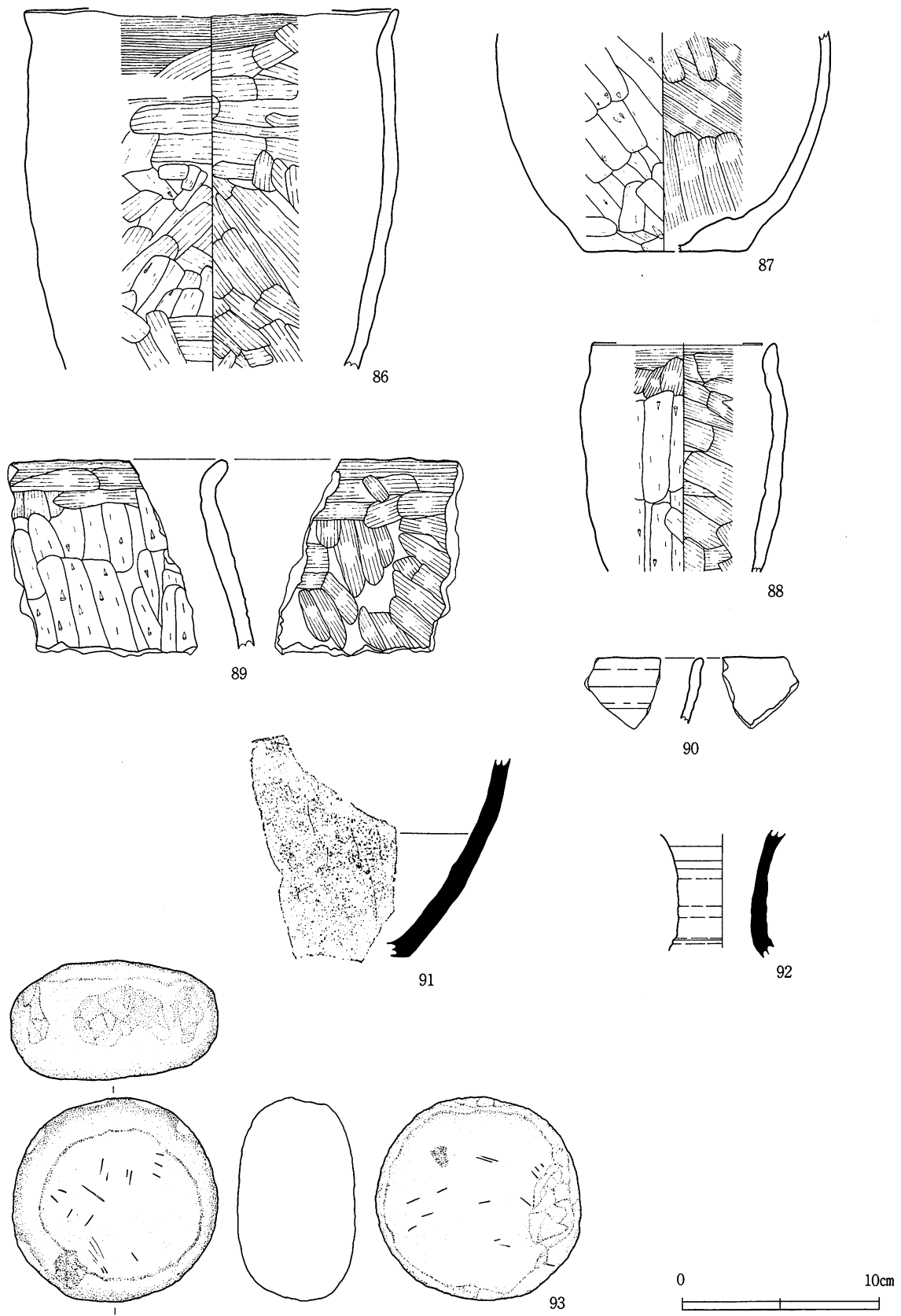


II D-16住

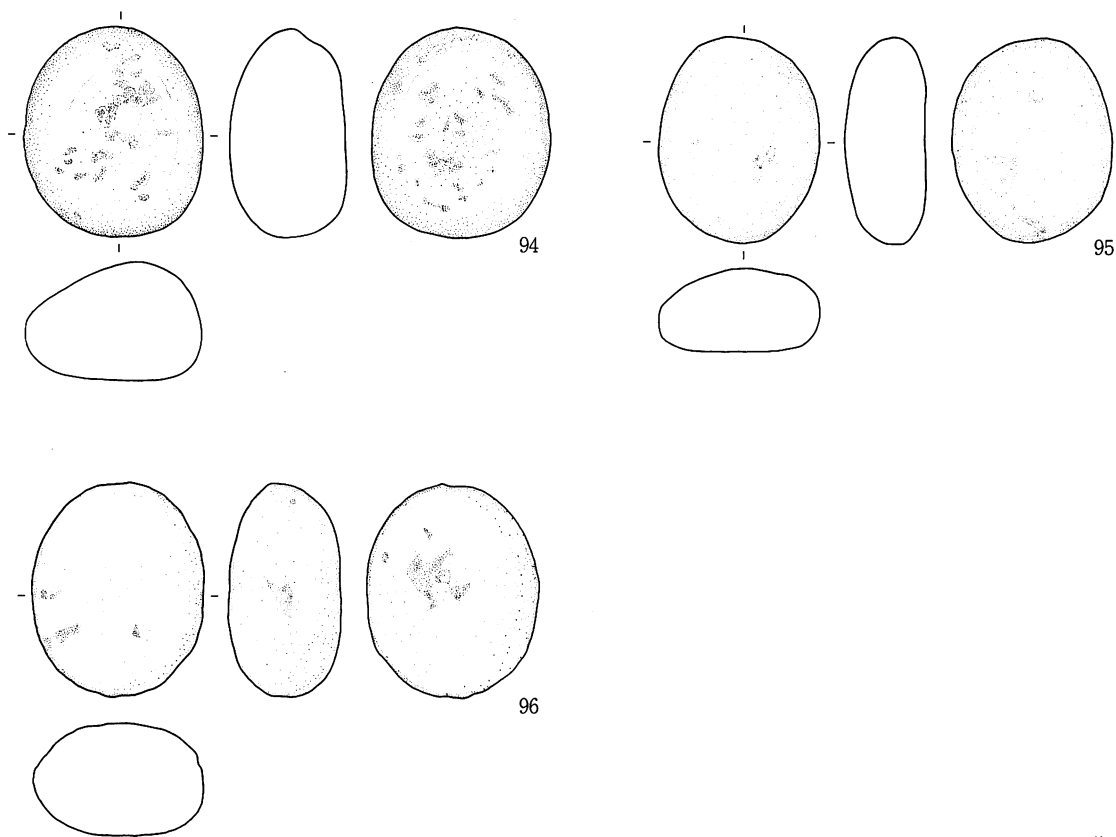


II C-2住

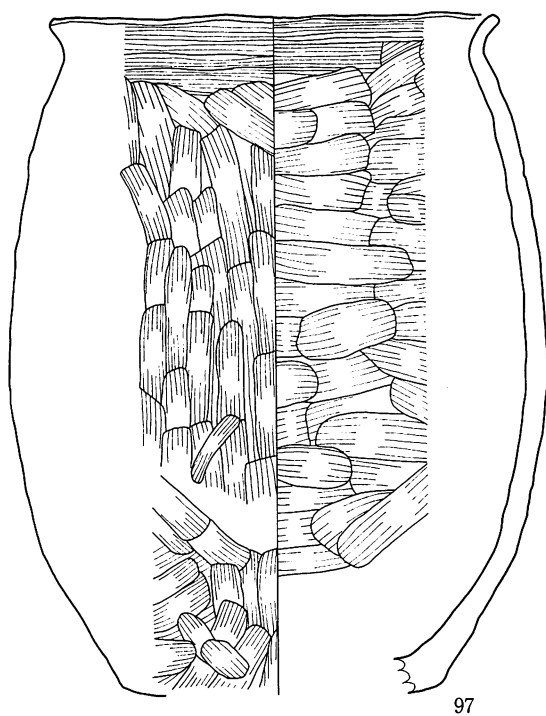
第83図 遺構内出土遺物 II D-16住(4)・II C-2住(1)



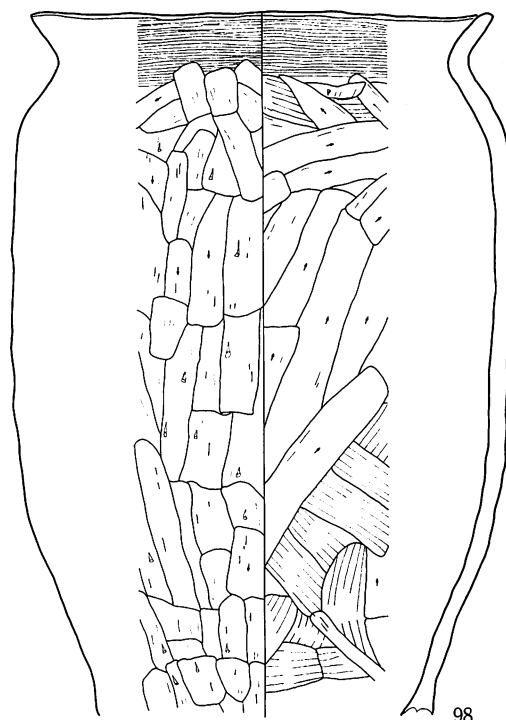
第84図 遺構内出土遺物 II C-2 住(2)



II C-2 住

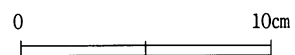


97

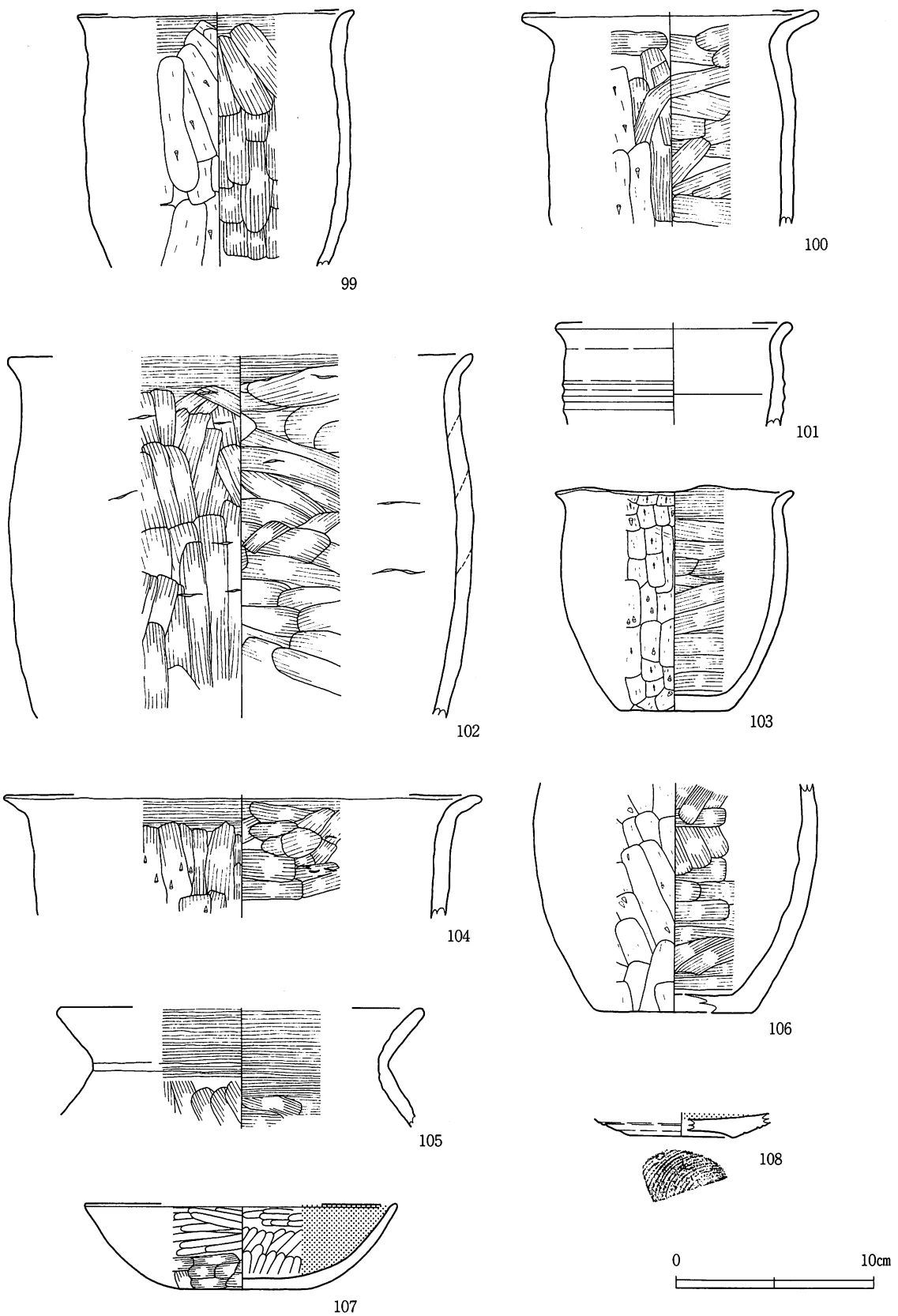


98

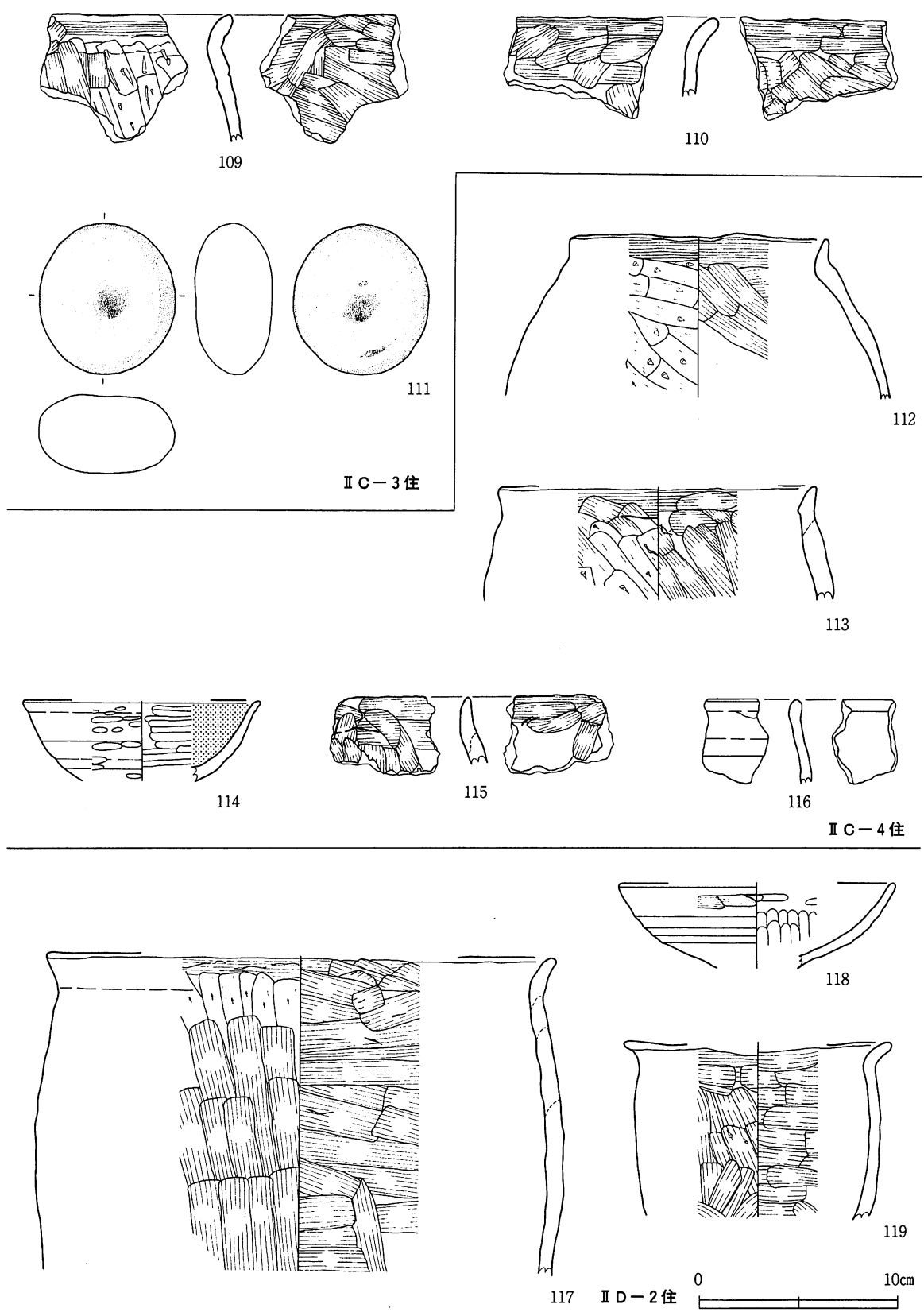
II C-3 住



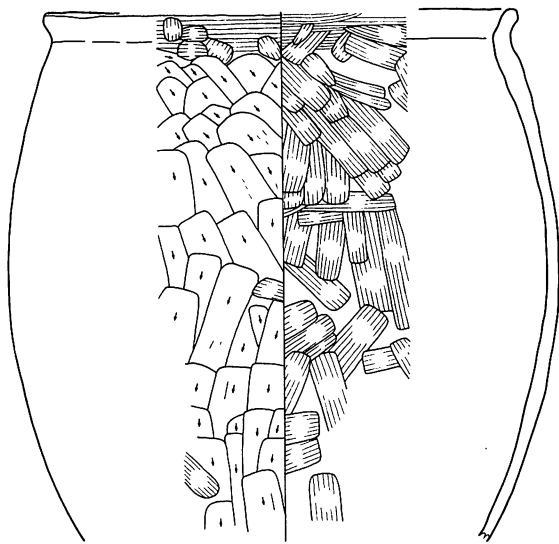
第85図 遺構内出土遺物 II C-2 住 (3)・II C-3 住 (1)



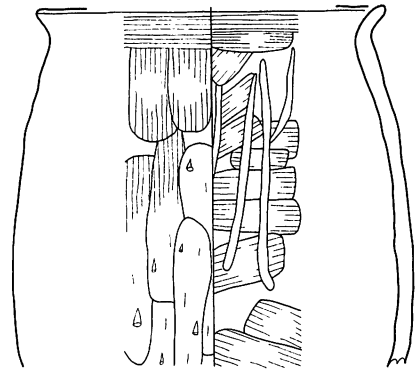
第86図 遺構内出土遺物 II C-3住(2)



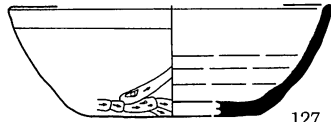
第87図 遺構内出土遺物 II C-3 住 (3)・II C-4 住・II D-2 住 (1)



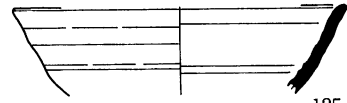
122



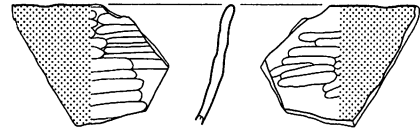
124



127

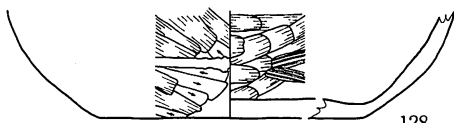


125



126

II D-2 住



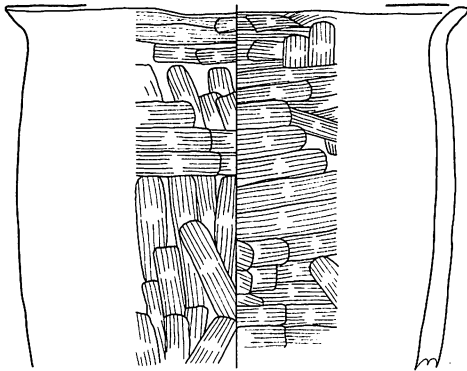
128



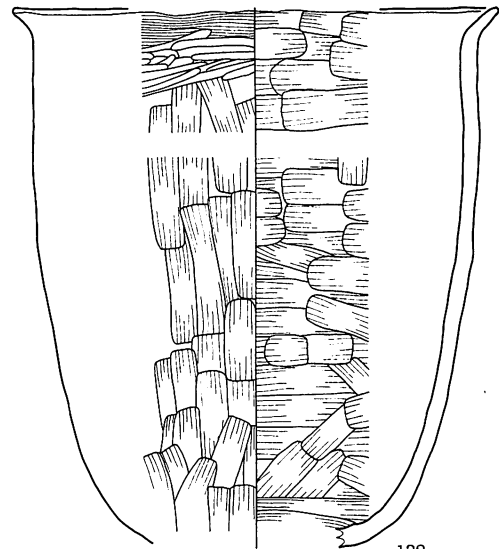
129



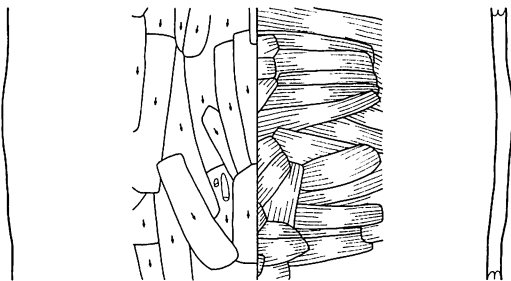
130



131

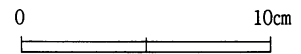


132

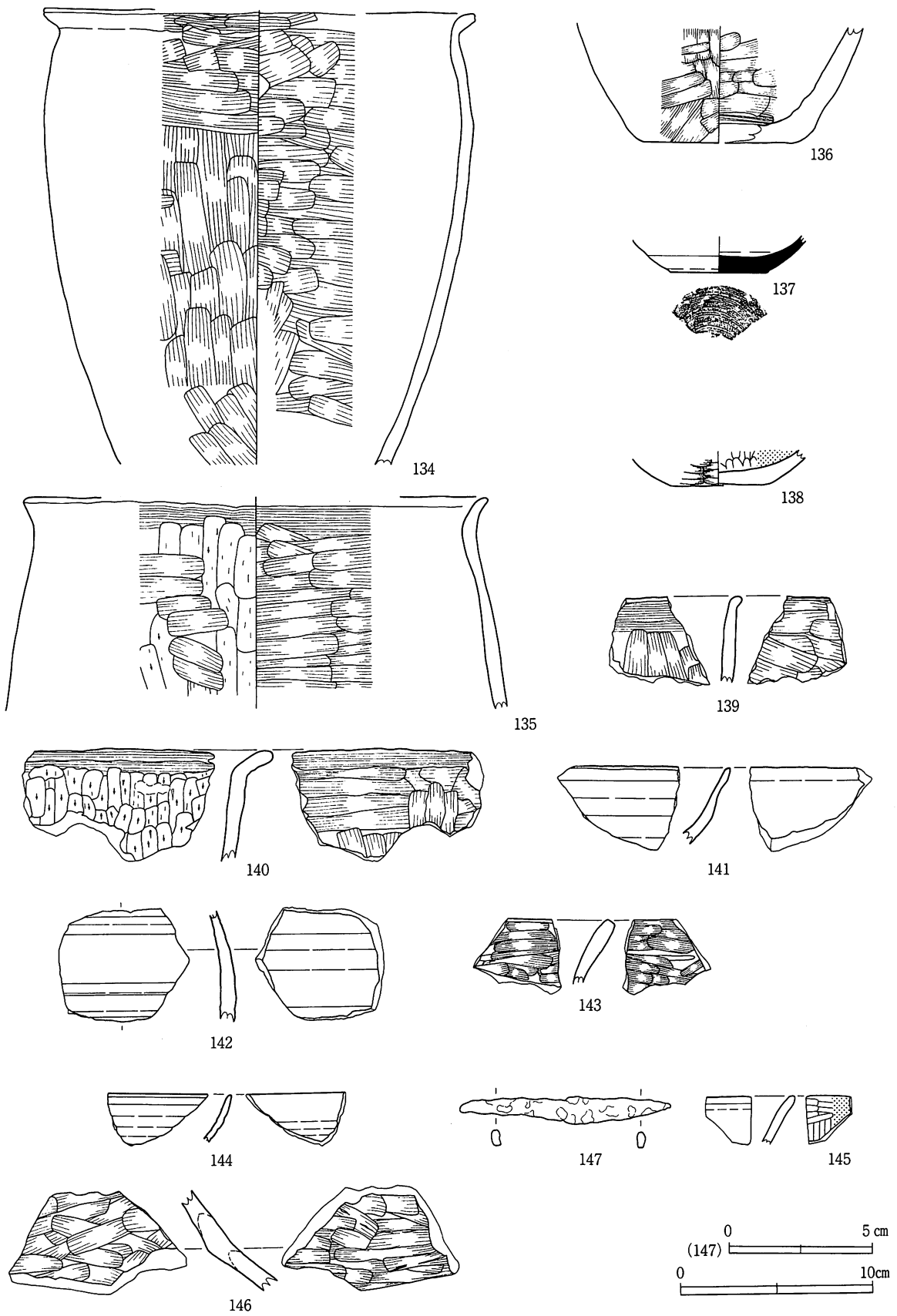


133

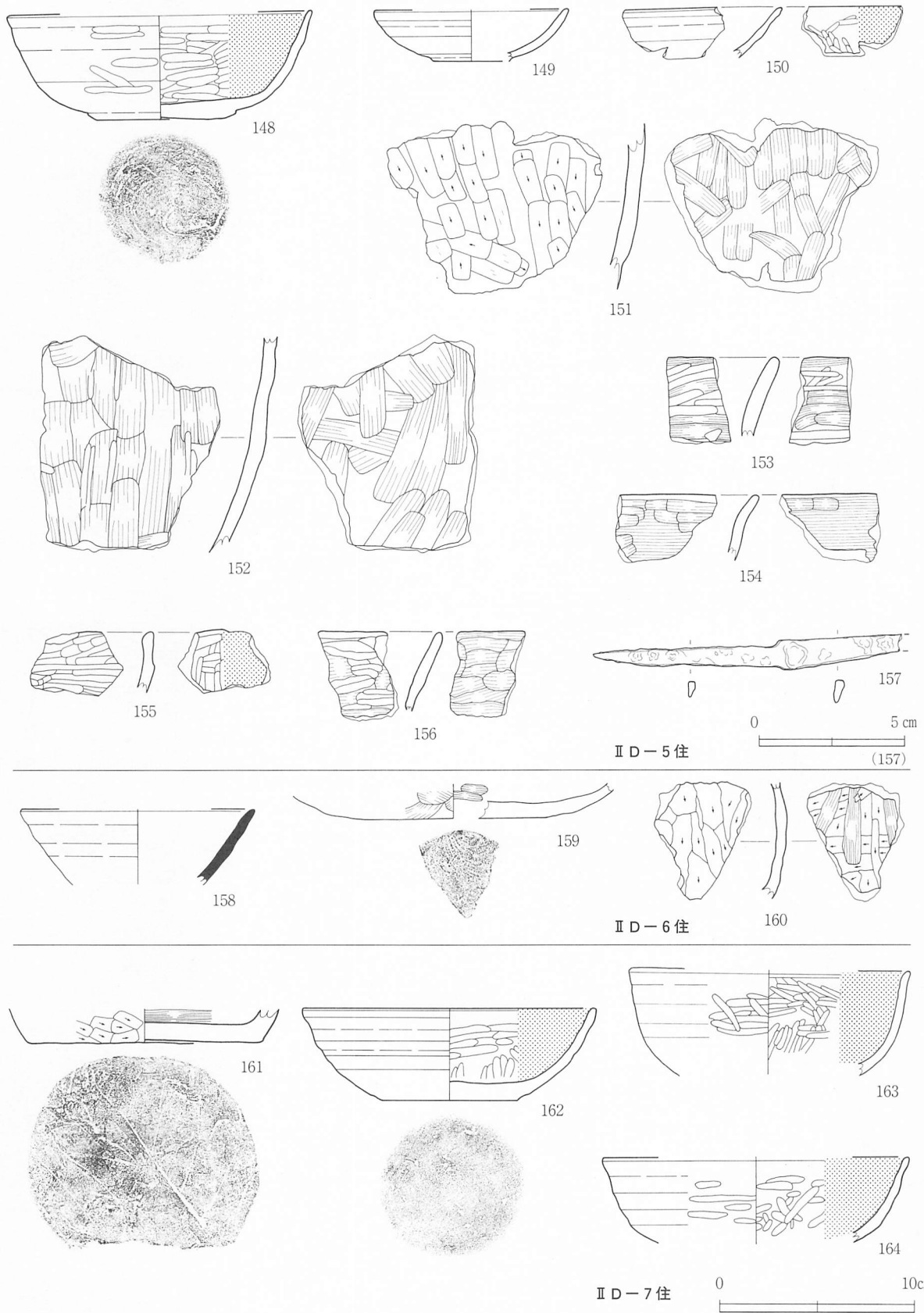
II D-3 住



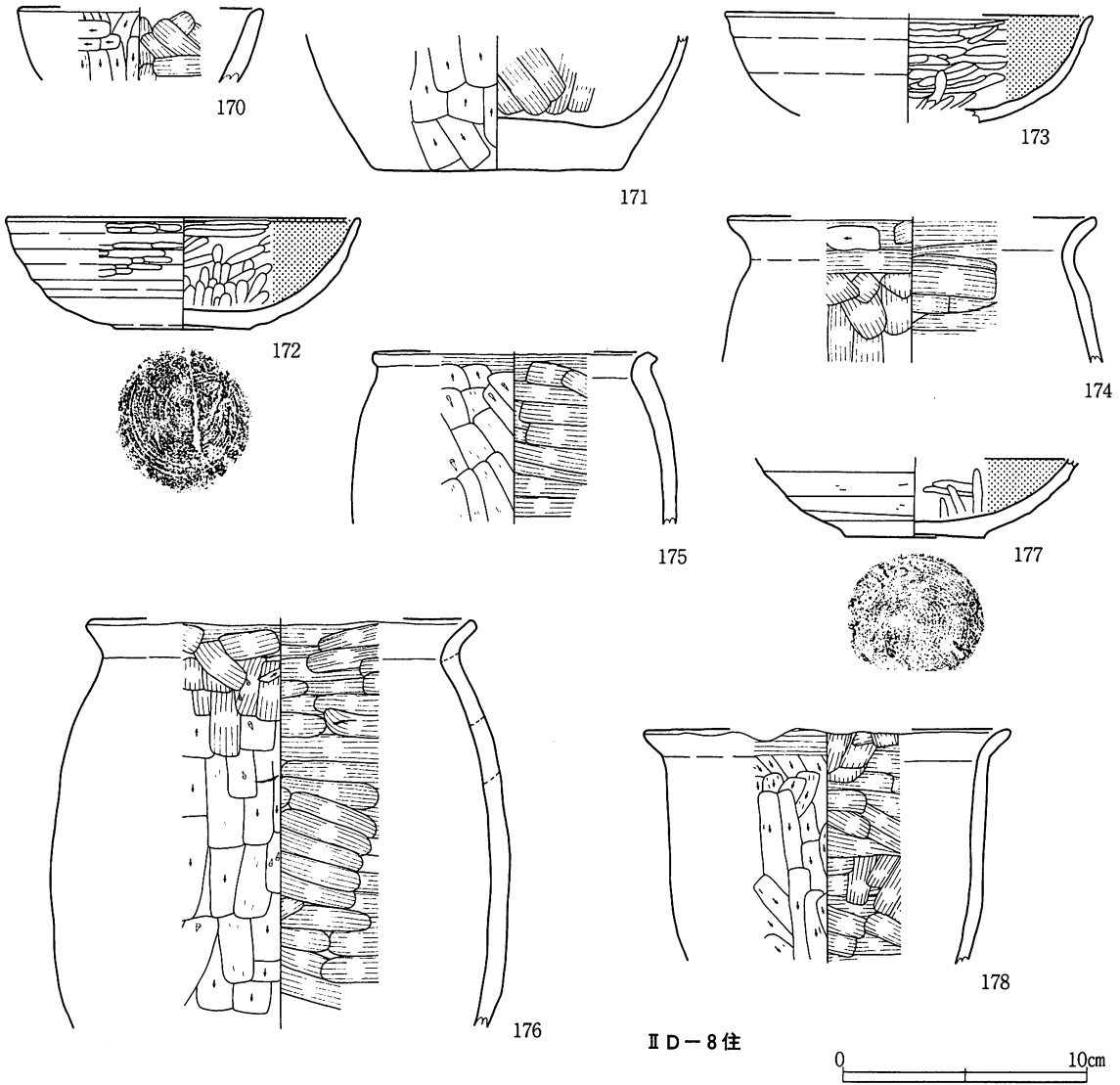
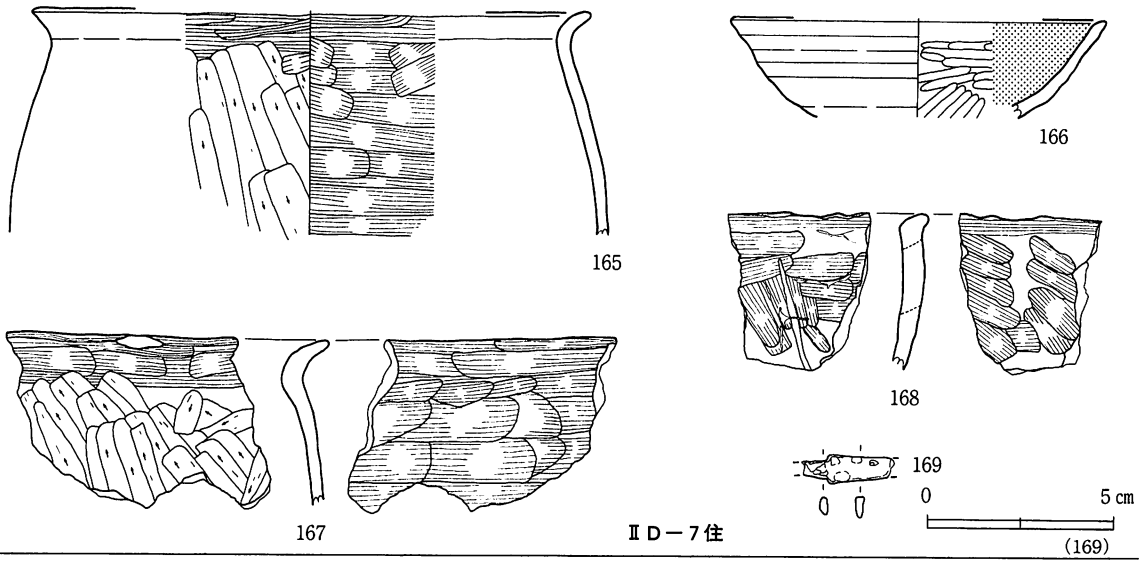
第88図 遺構内出土遺物 II D-2 住 (2)・II D-3 住 (1)



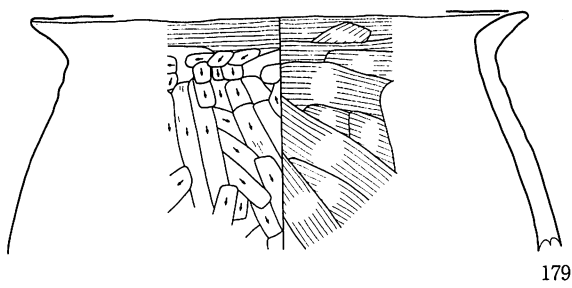
第89図 遺構内出土遺物 II D-3住(2)



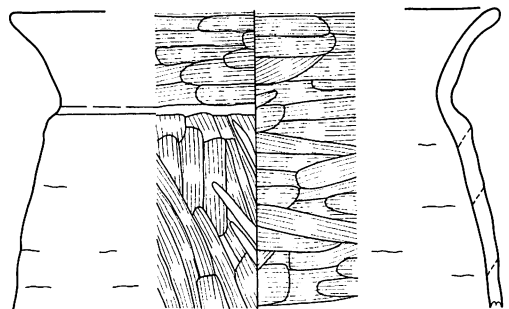
第90図 遺構内出土遺物 II D-5住・II D-6住・II D-7住(1)



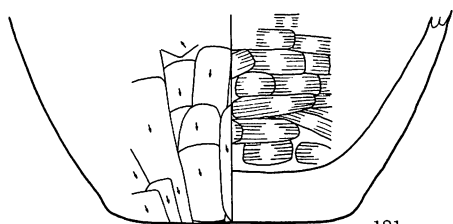
第91图 遺構内出土遺物 II D-7 住 (2) · II D-8 住 (1)



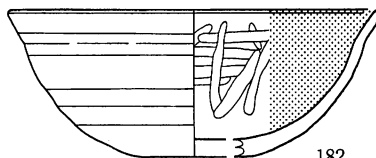
179



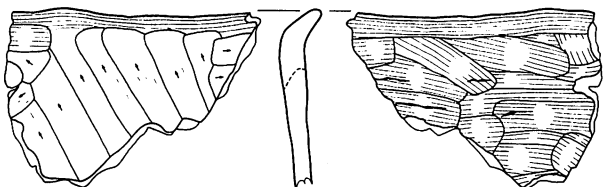
180



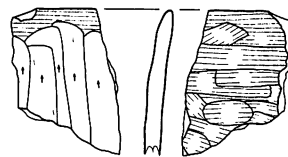
181



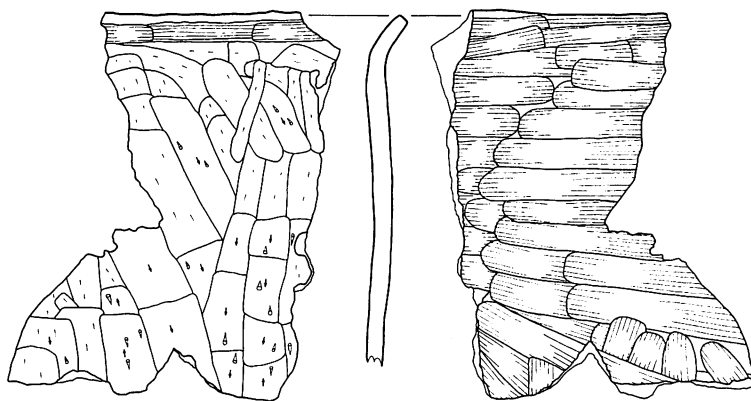
182



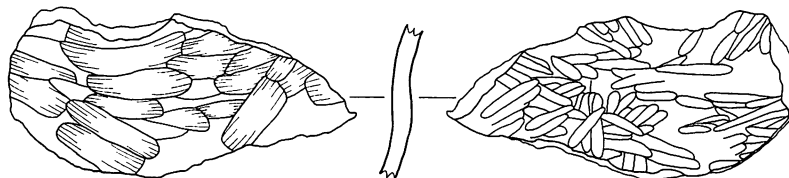
183



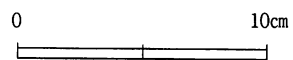
184



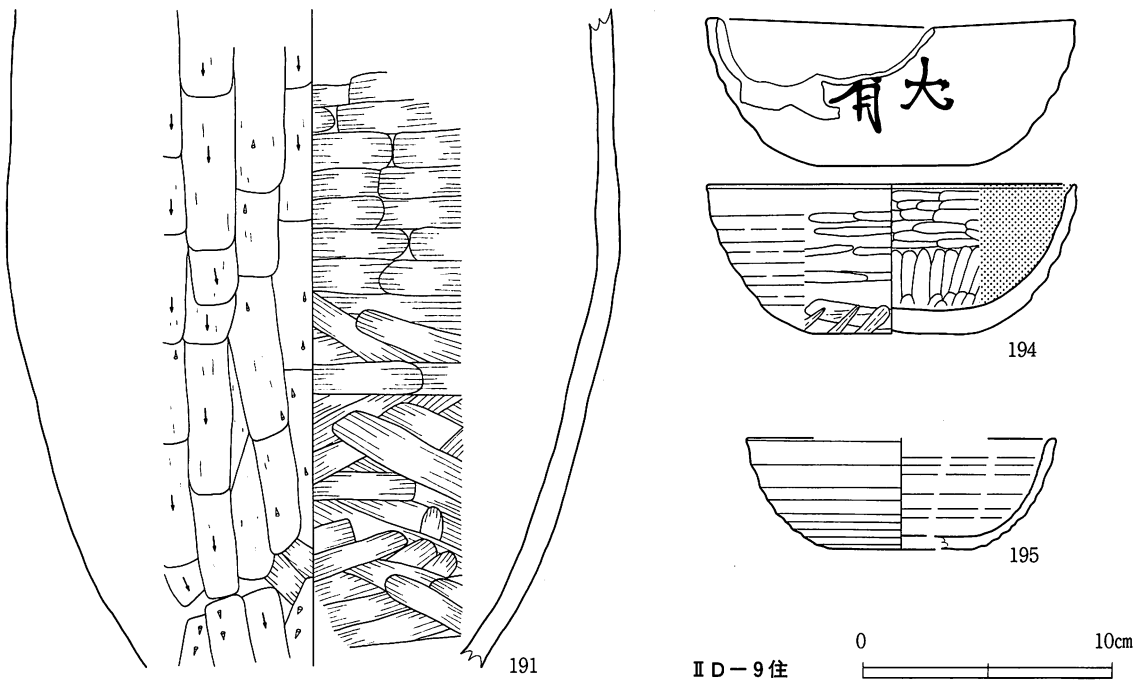
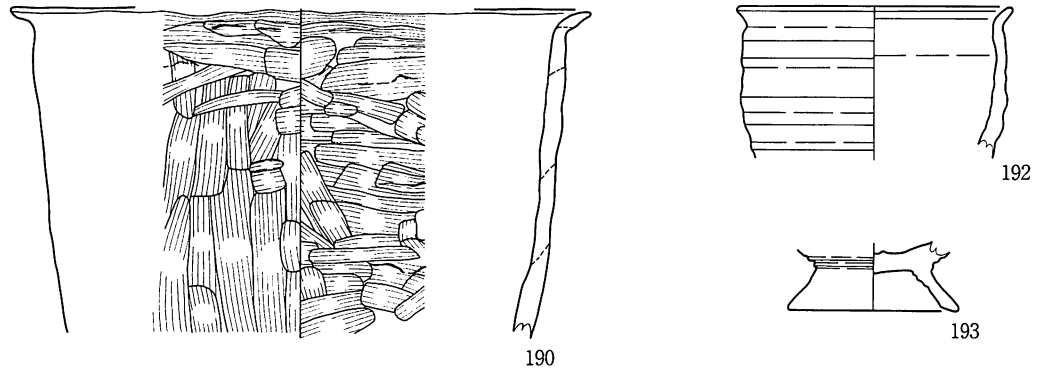
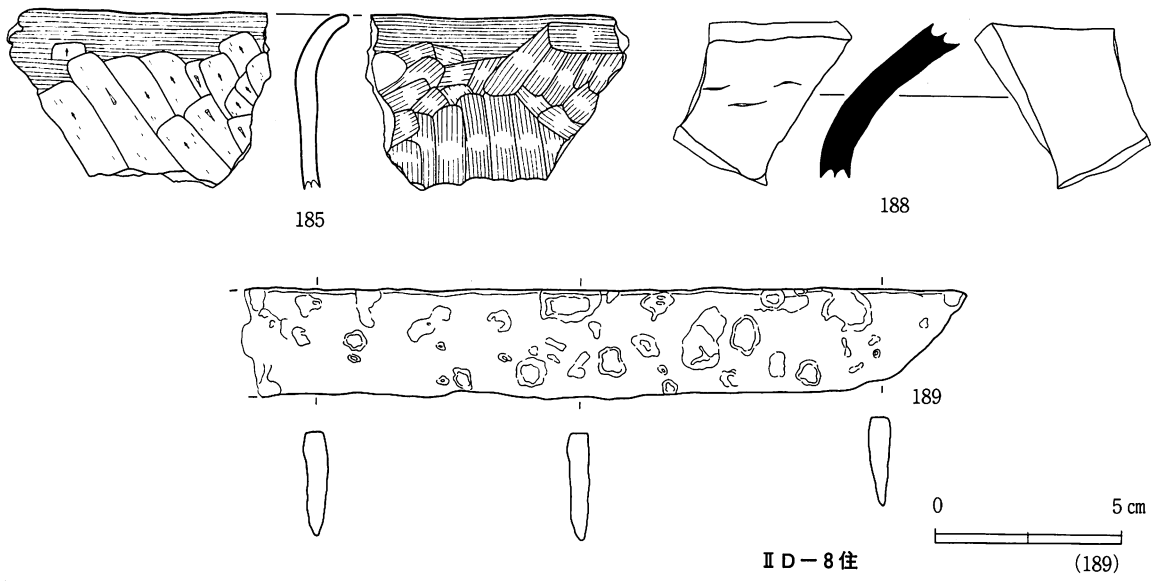
186



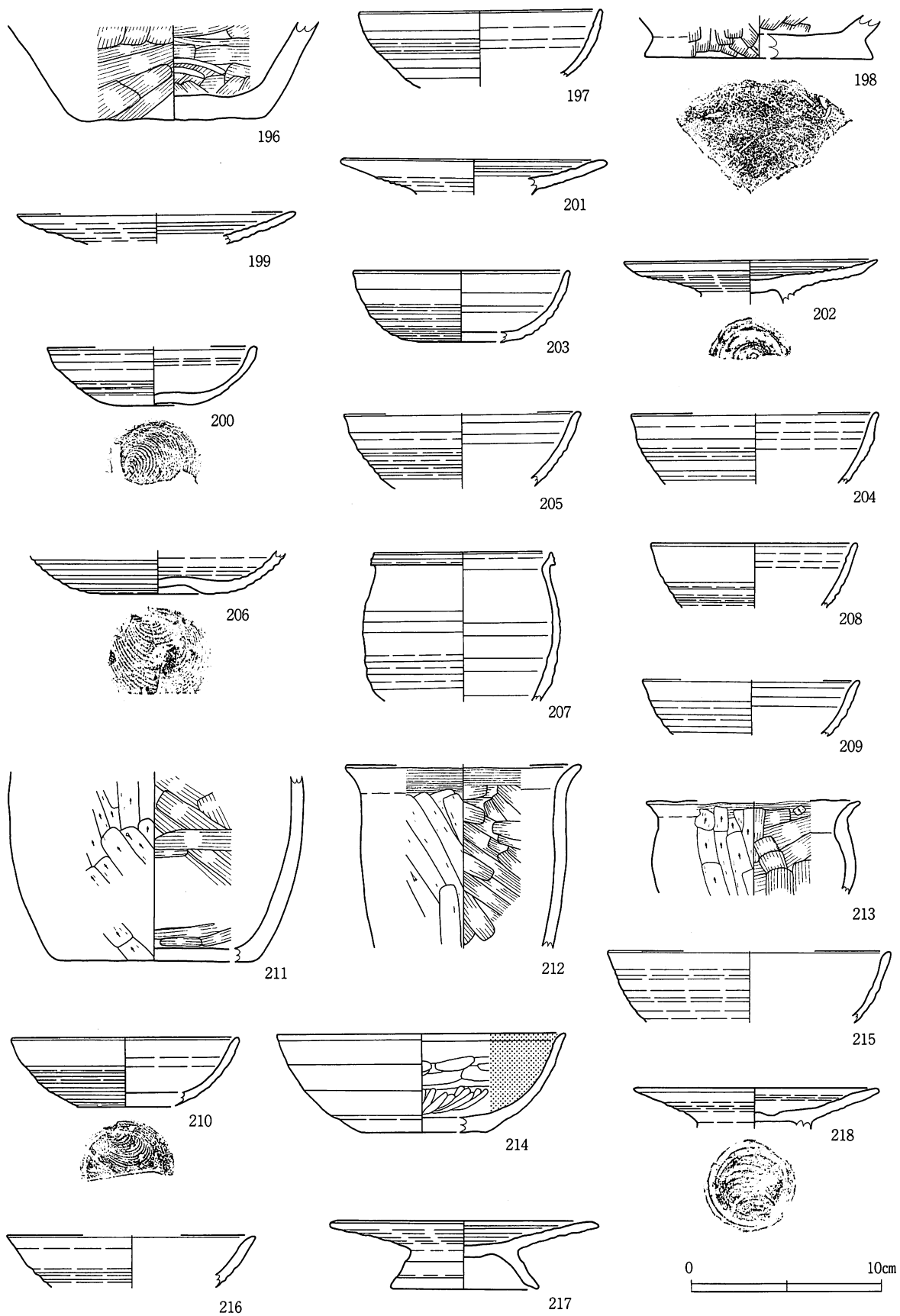
187



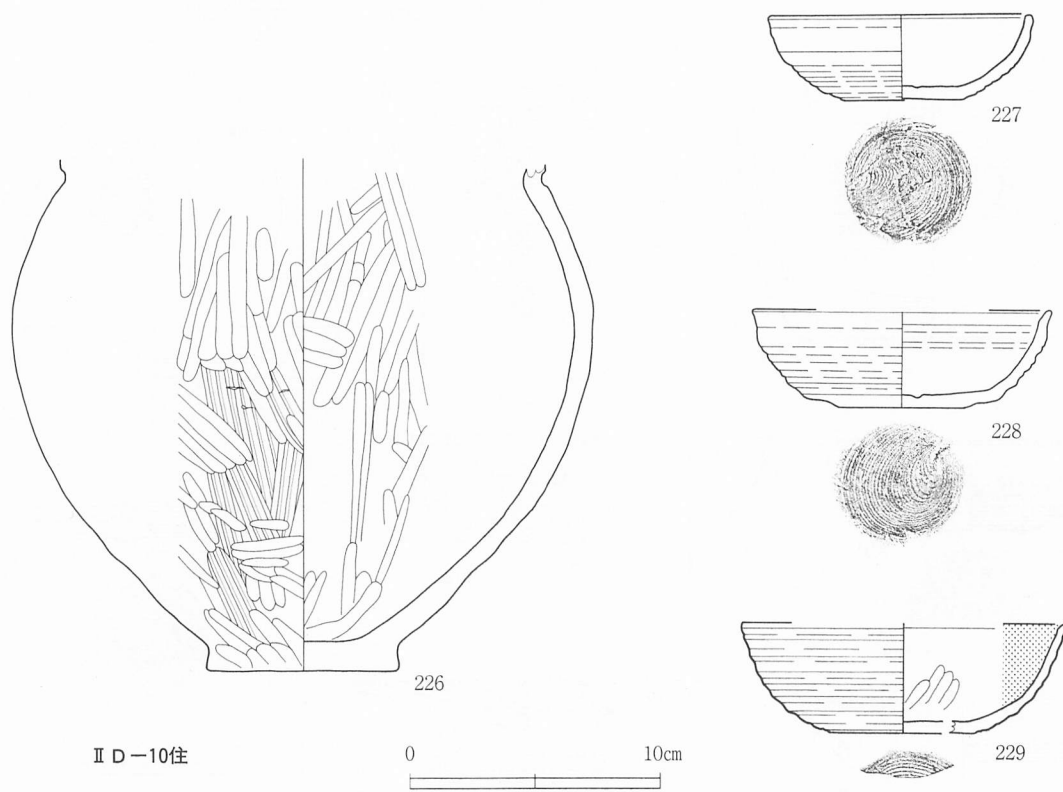
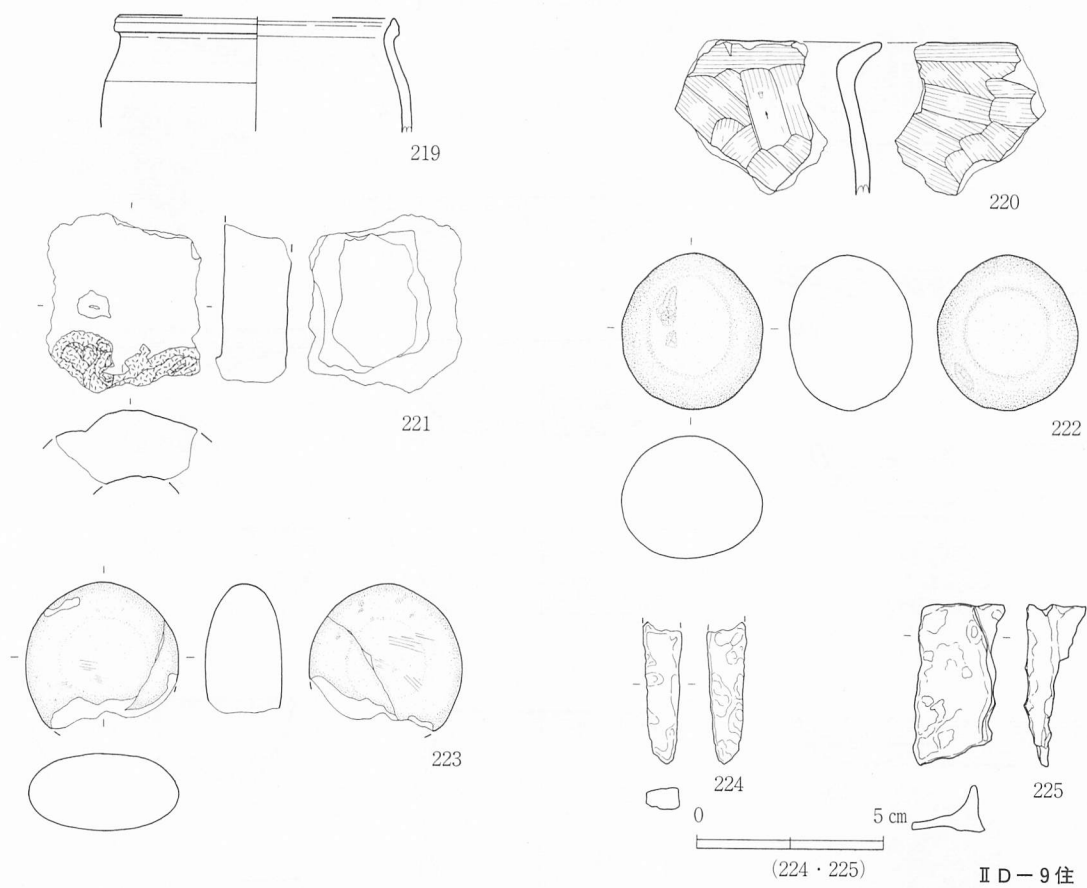
第92図 遺構内出土遺物 II D-8住(2)



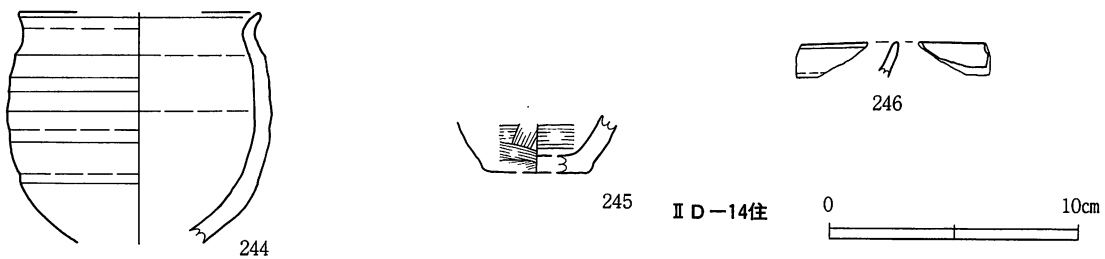
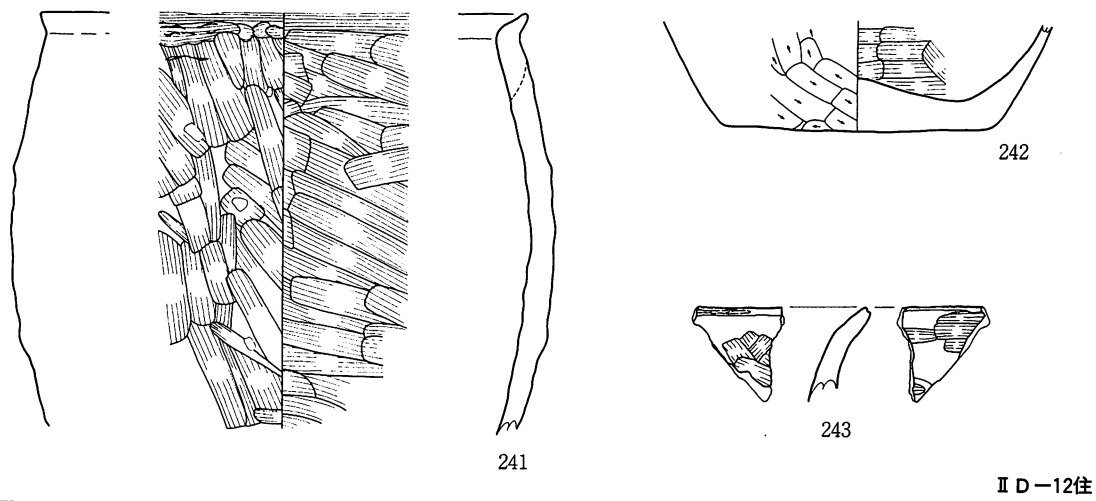
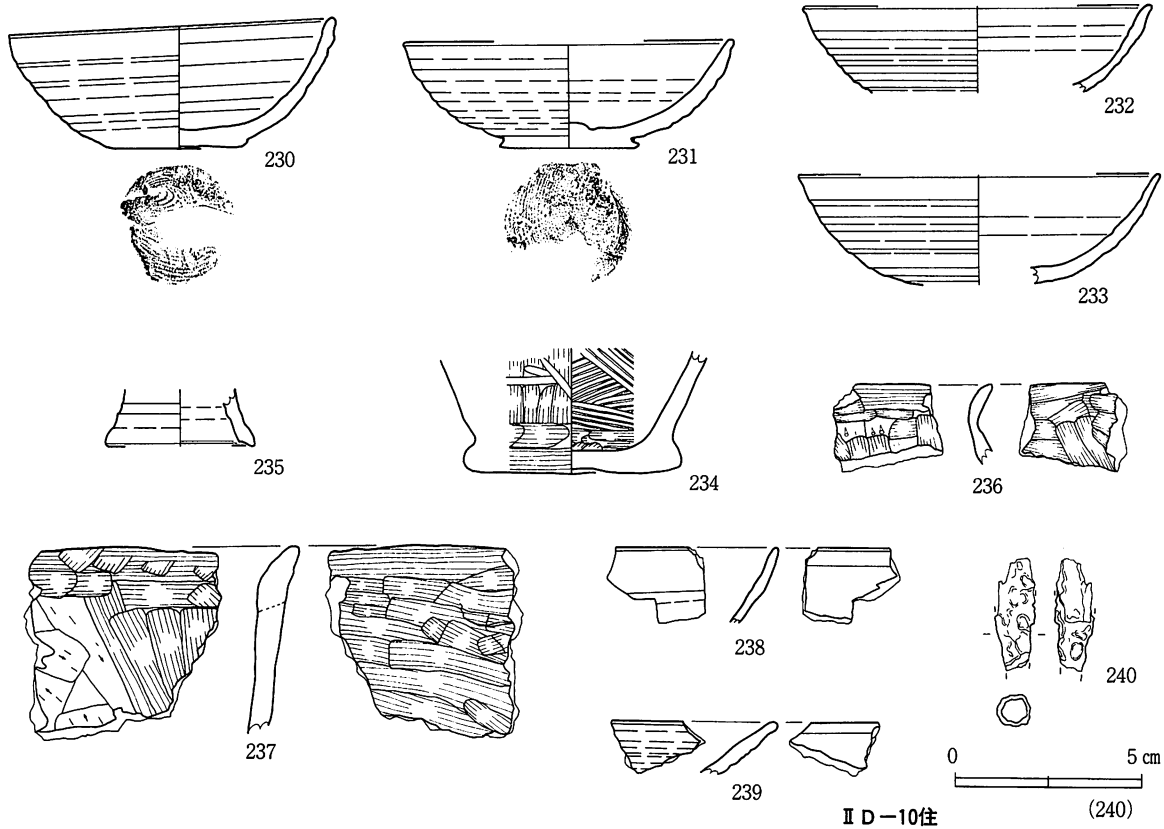
第93図 遺構内出土遺物 II D-8 住 (3)・II D-9 住 (1)



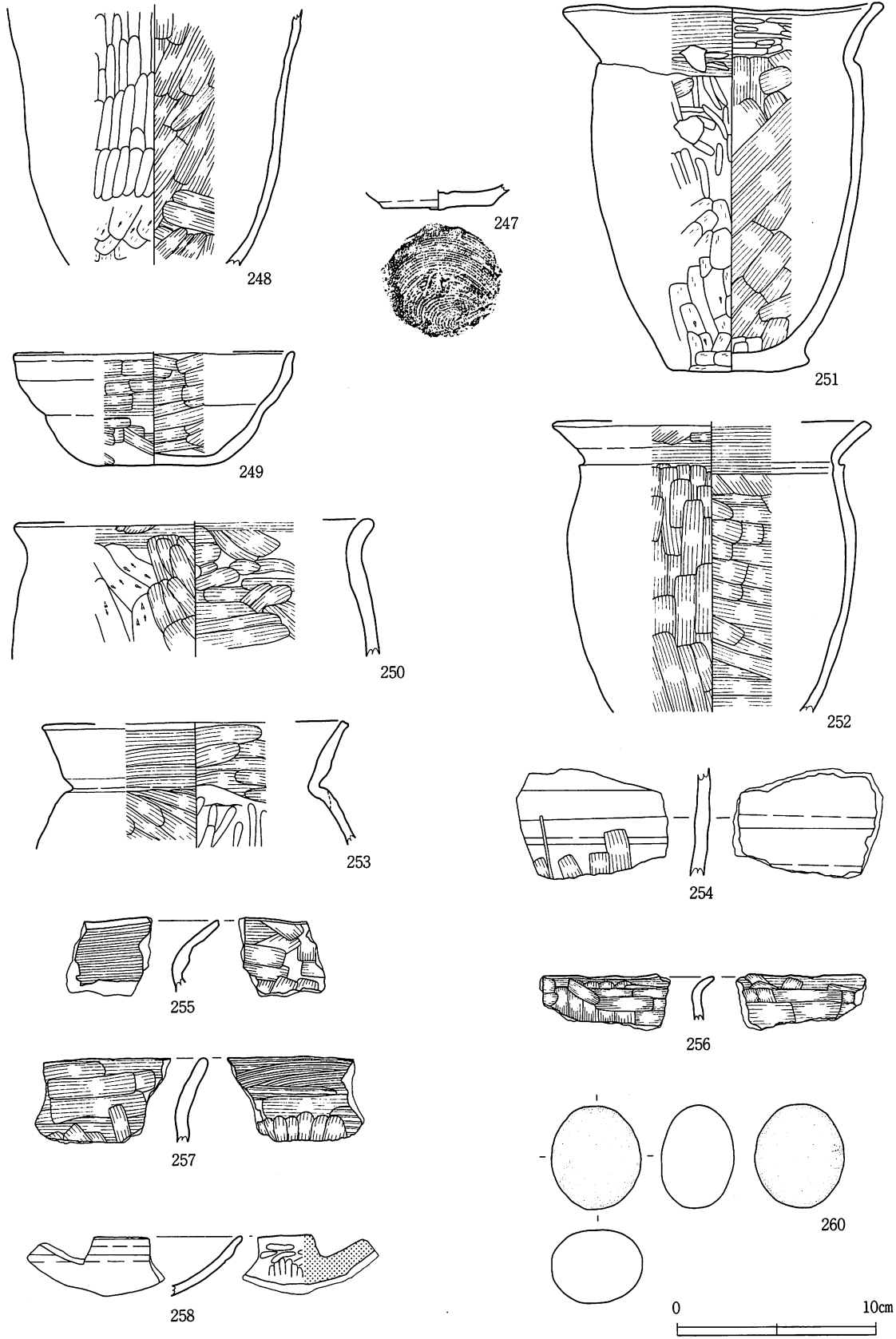
第94図 遺構内出土遺物 II D-9住(2)



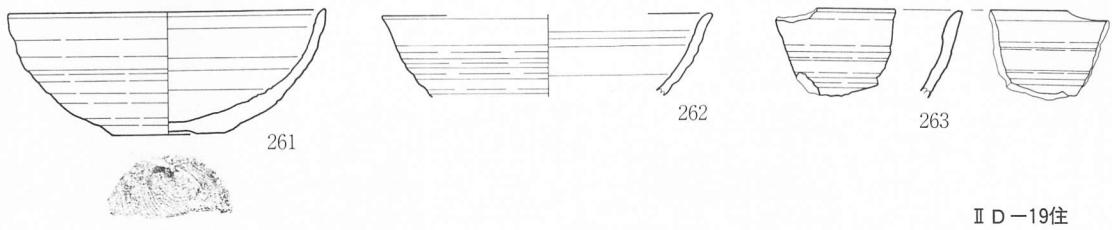
第95図 遺構内出土遺物 II D-9 住 (3) · II D-10 住 (1)



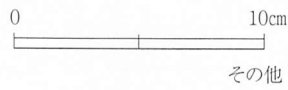
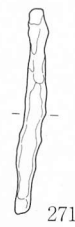
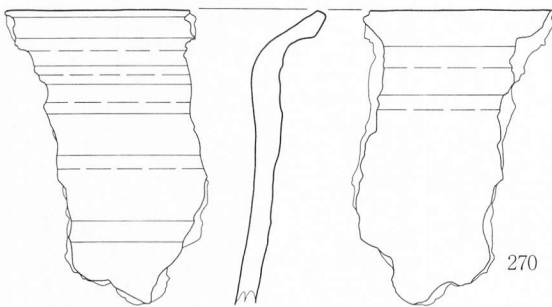
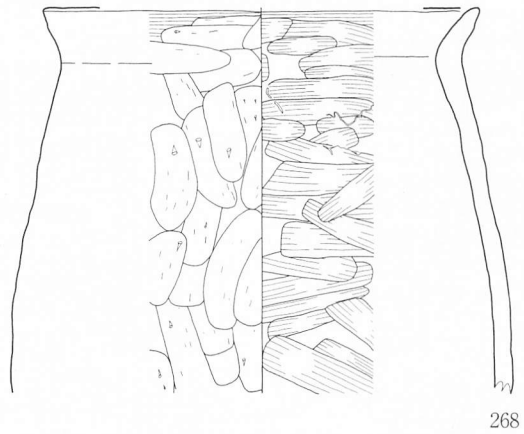
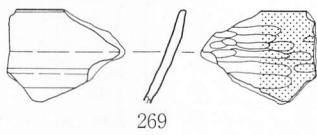
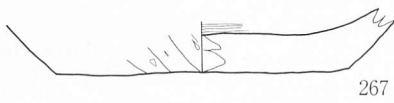
第96図 遺構内出土遺物 II D-10住 (2)・II D-12住・II D-14住



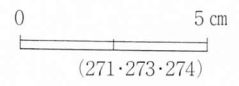
第97図 遺構内出土遺物 II D-17住



ⅡD-19住

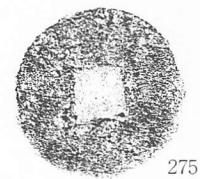
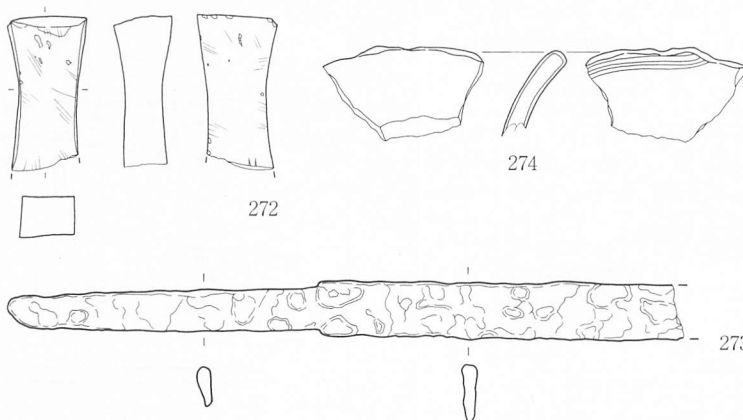


その他



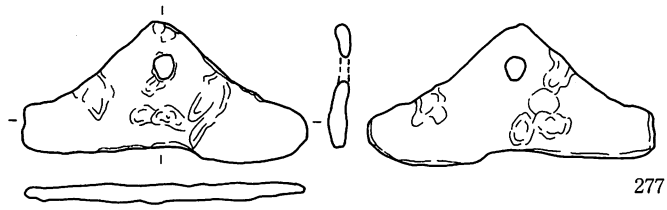
ⅢD-2住

(271・273・274)



ⅠA-1住

第98図 遺構内出土遺物 ⅡD-19住・ⅢD-2住・ⅠA-1住

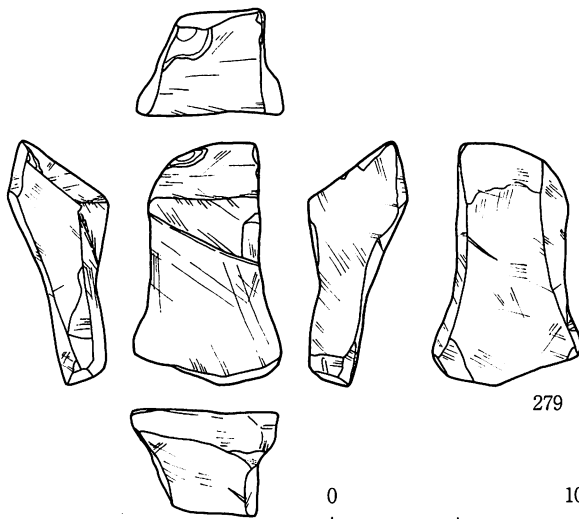


277

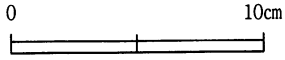


278

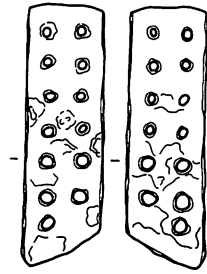
ⅡD-1b住



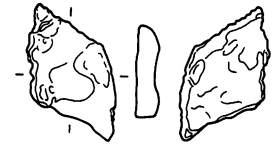
279



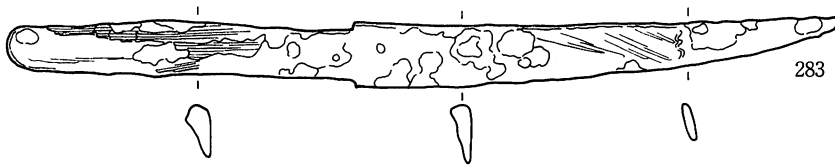
(279)



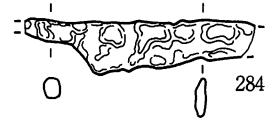
281



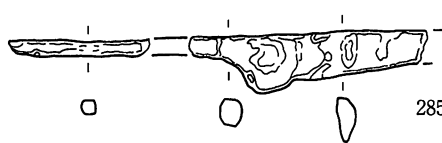
282



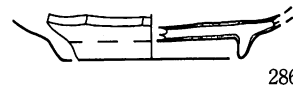
283



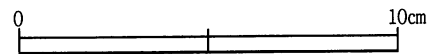
284



285

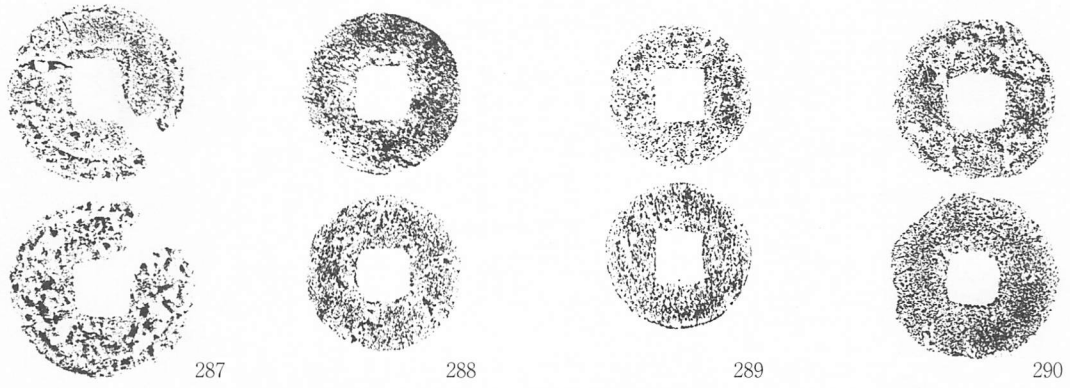


286

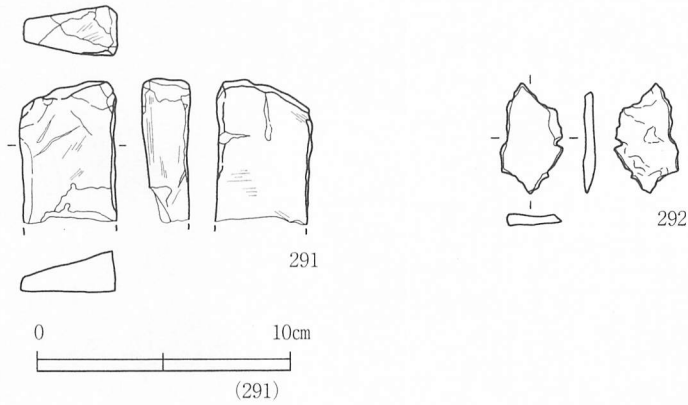


ⅡD-15住

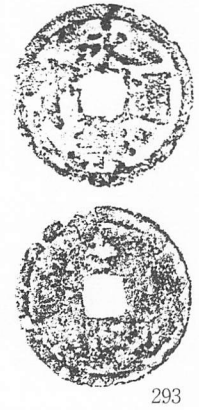
第99図 遺構内出土遺物 ⅡD-1b住・ⅡD-15住(1)



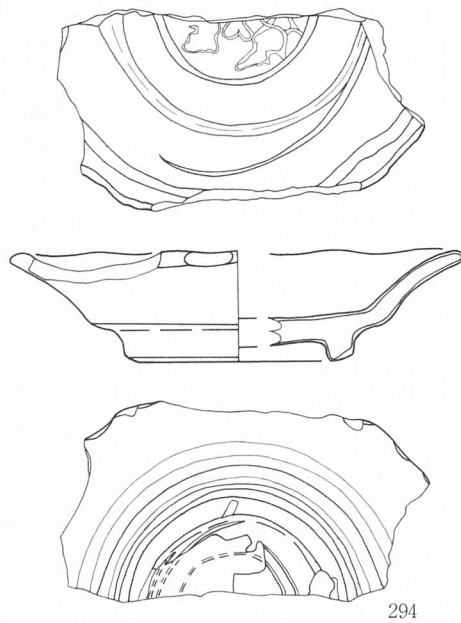
ⅡD-15住



ⅡD-4住



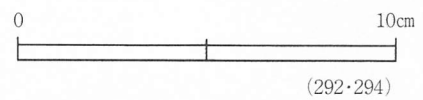
ⅡD-13住



ⅢD-1住

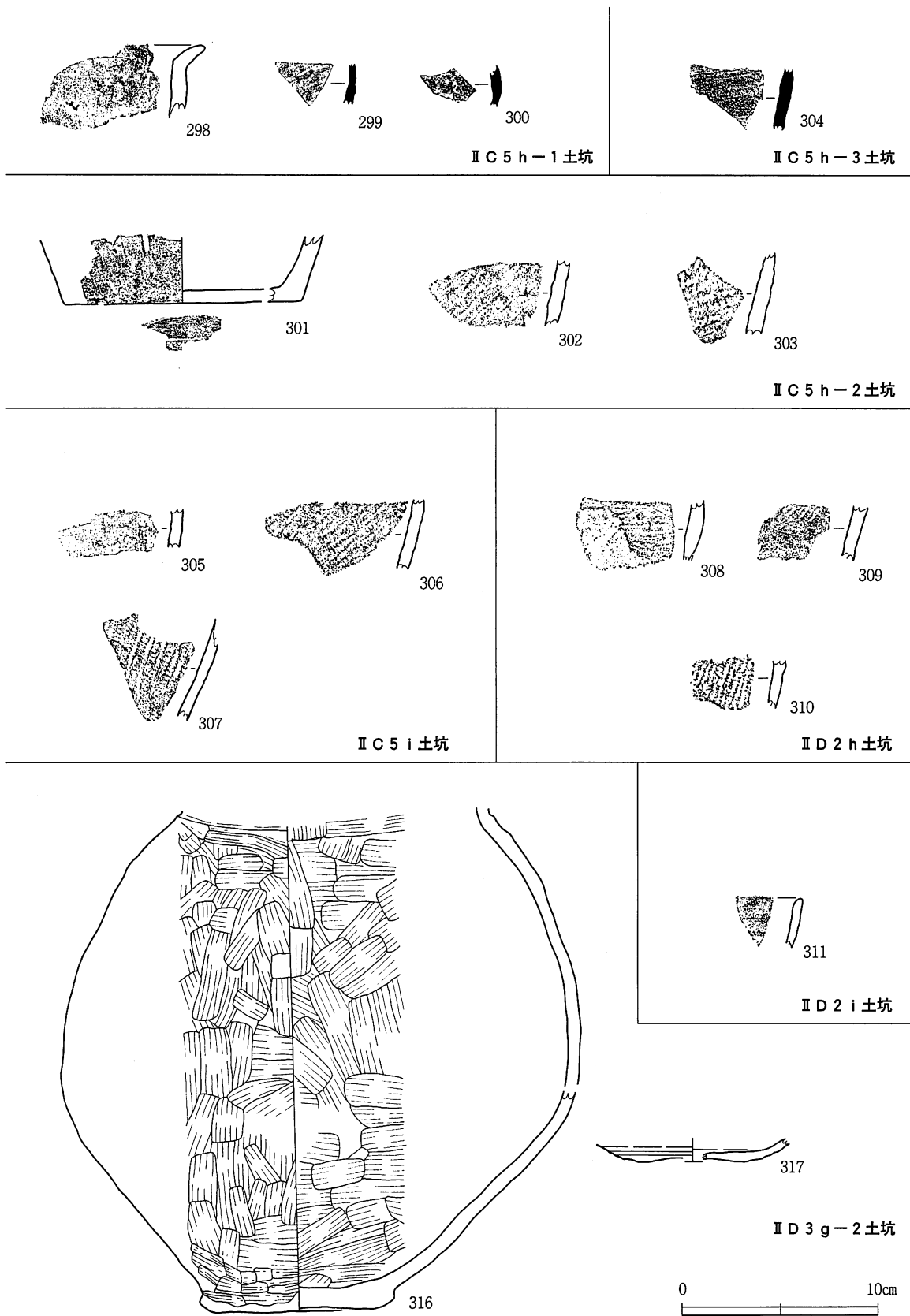


PP159

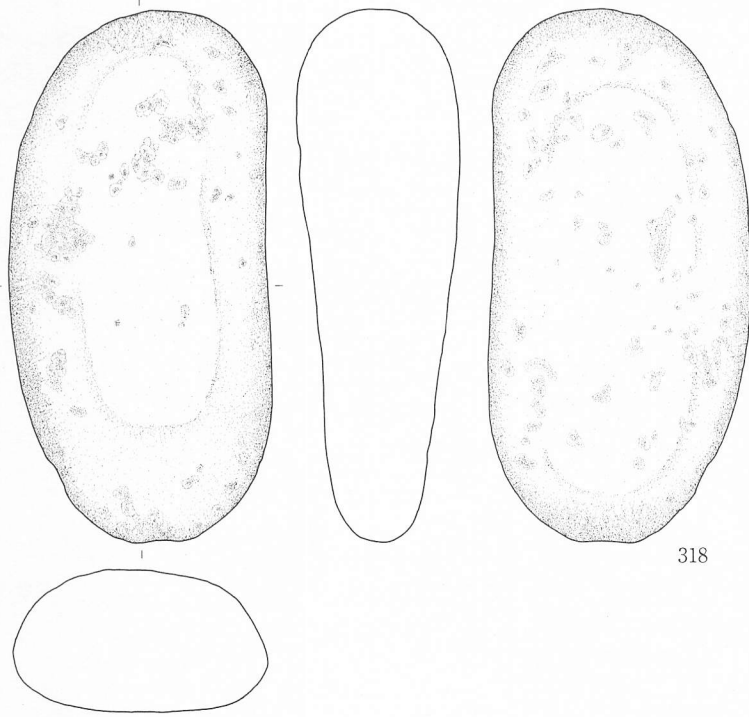


(292・294)

第100図 遺構内出土遺物 ⅡD-15住(2)・ⅡD-4住・ⅡD-13住・ⅢD-1住・その他



第101图 遺構内出土遺物 土坑(1)

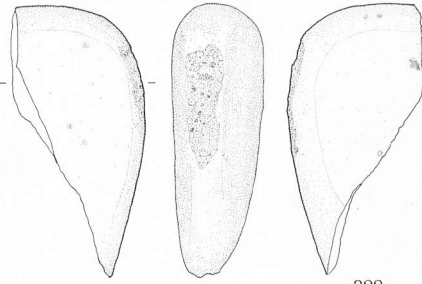


318

Ⅱ D 3 g - 2 土坑



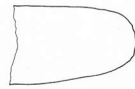
319



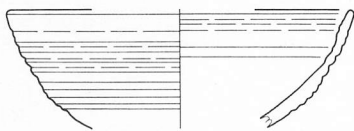
322



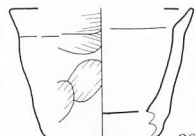
320



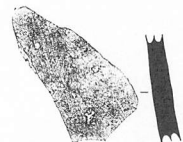
Ⅱ D 3 g - 3 土坑



323

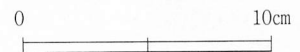


324

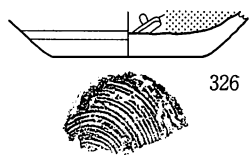


325

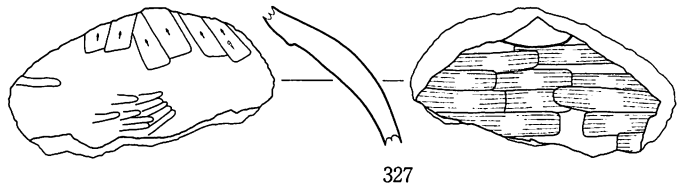
Ⅱ D 3 h - 1 土坑



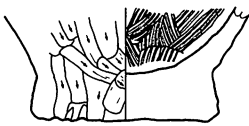
第102図 遺構内出土遺物 土坑(2)



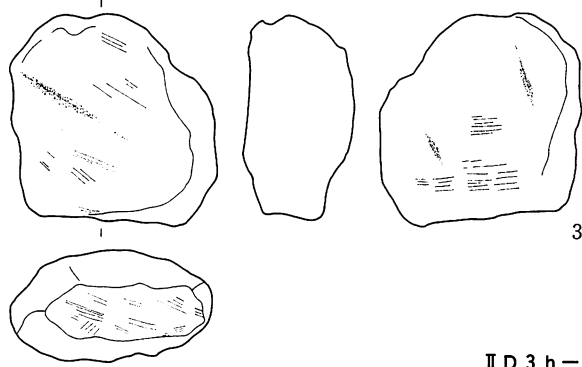
326



327

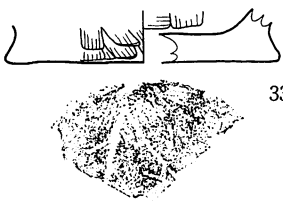


328



329

Ⅱ D 3 h-2 土坑



331



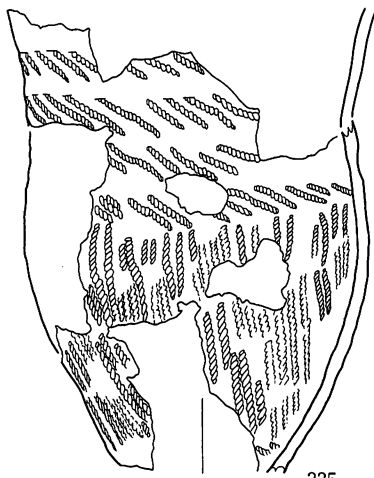
332



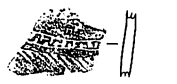
333

Ⅱ D 4 h 土坑

Ⅱ D 4 j 土坑



335



336

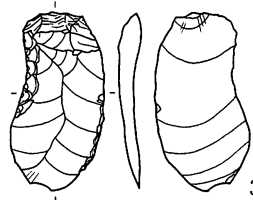


337

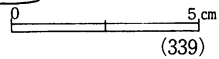


338

Ⅱ D 6 f-1 土坑



339



(339)

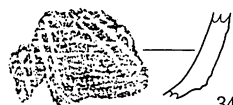


340

Ⅱ D 6 f-2 土坑



341



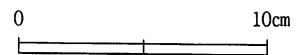
342

Ⅱ D 7 f-2 土坑

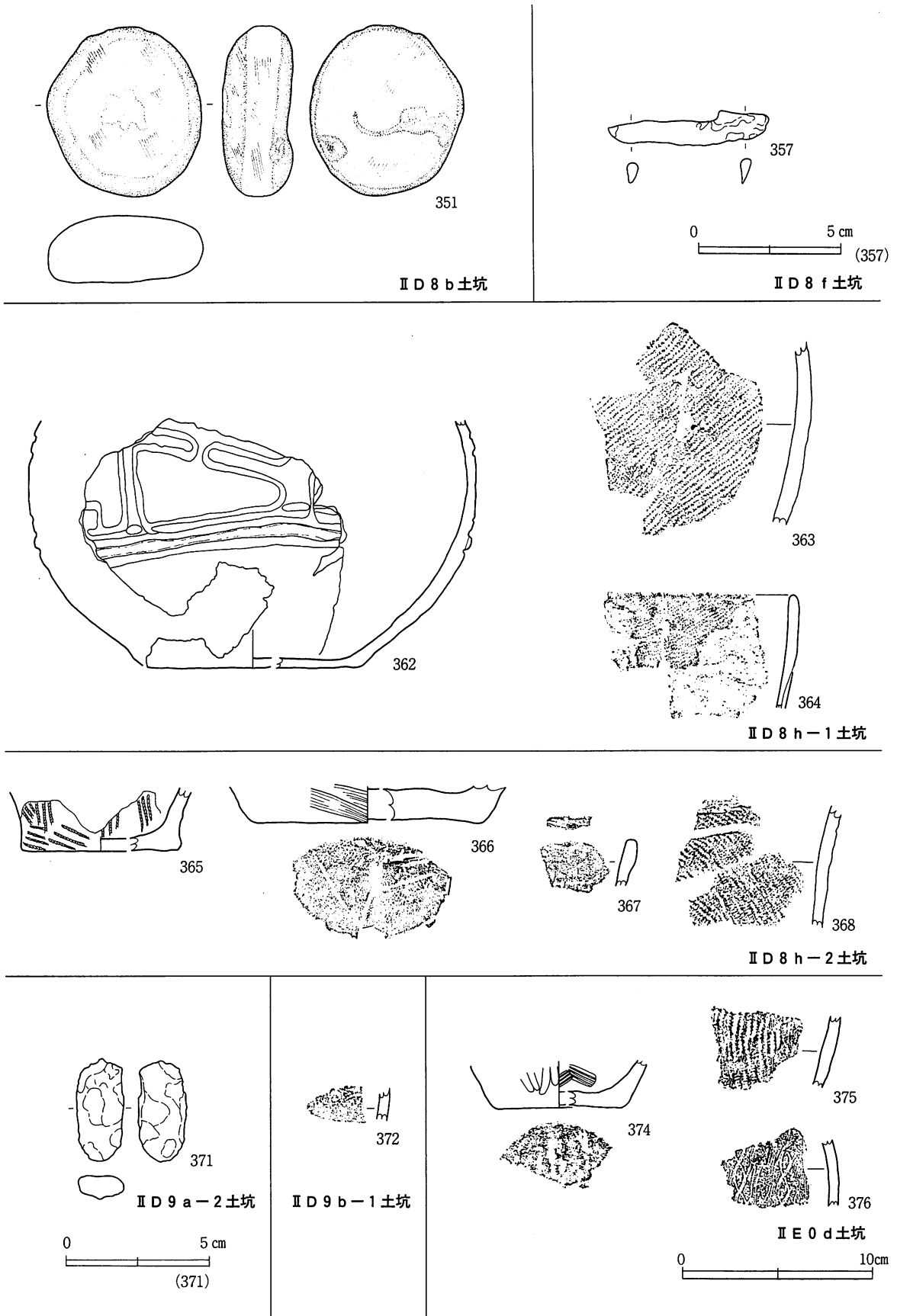


343

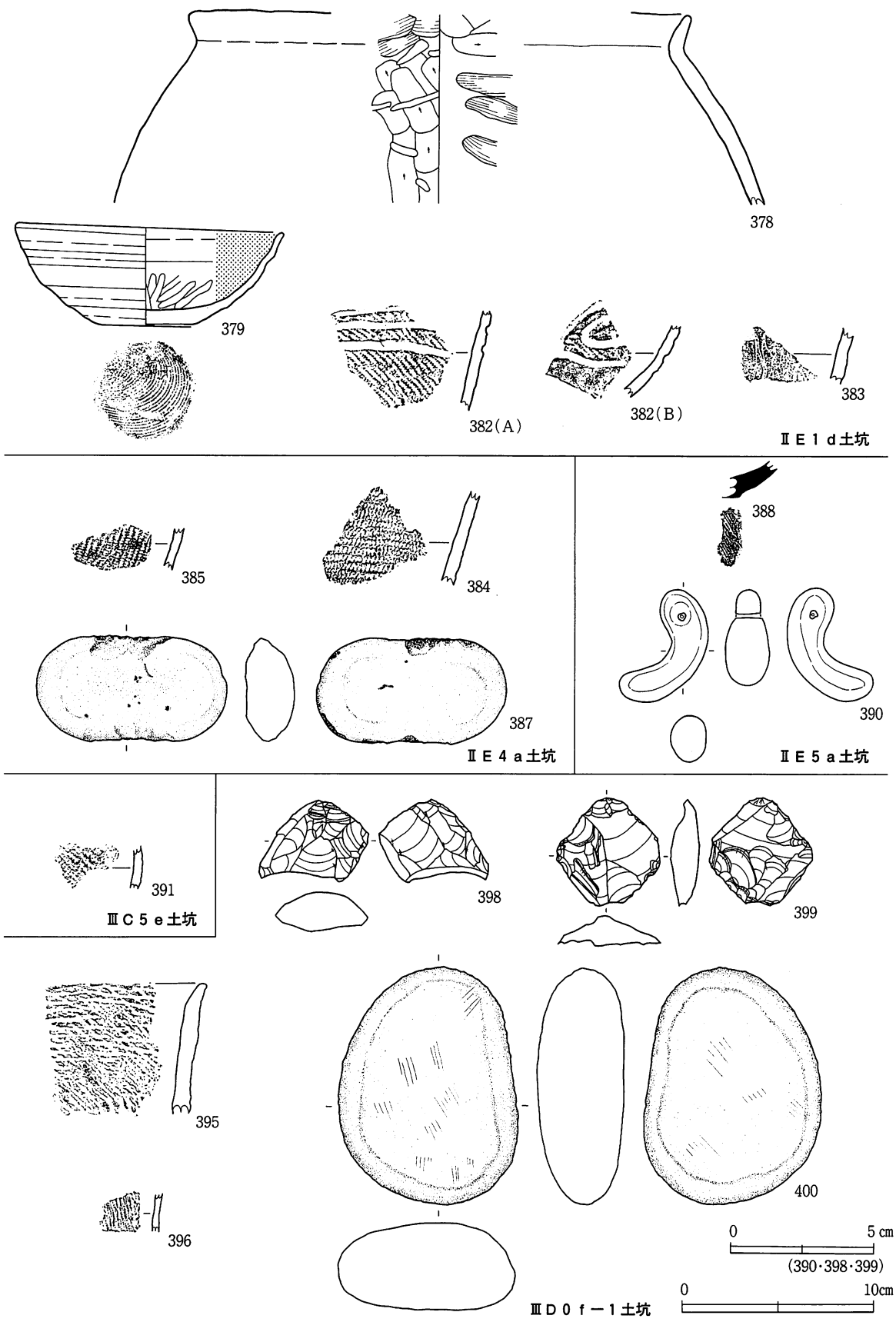
Ⅱ D 7 h-2 土坑



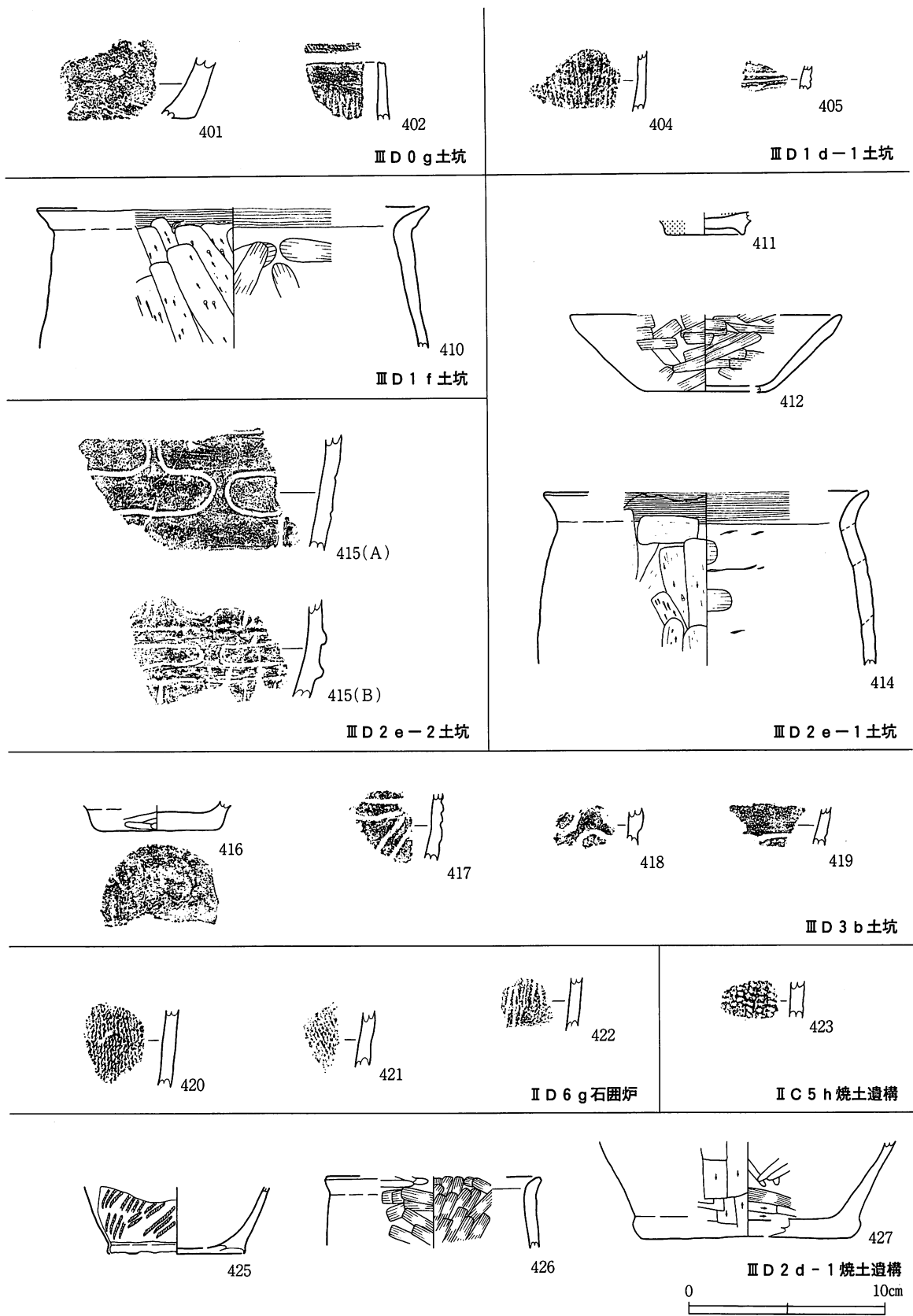
第103图 遺構内出土遺物 土坑 (3)



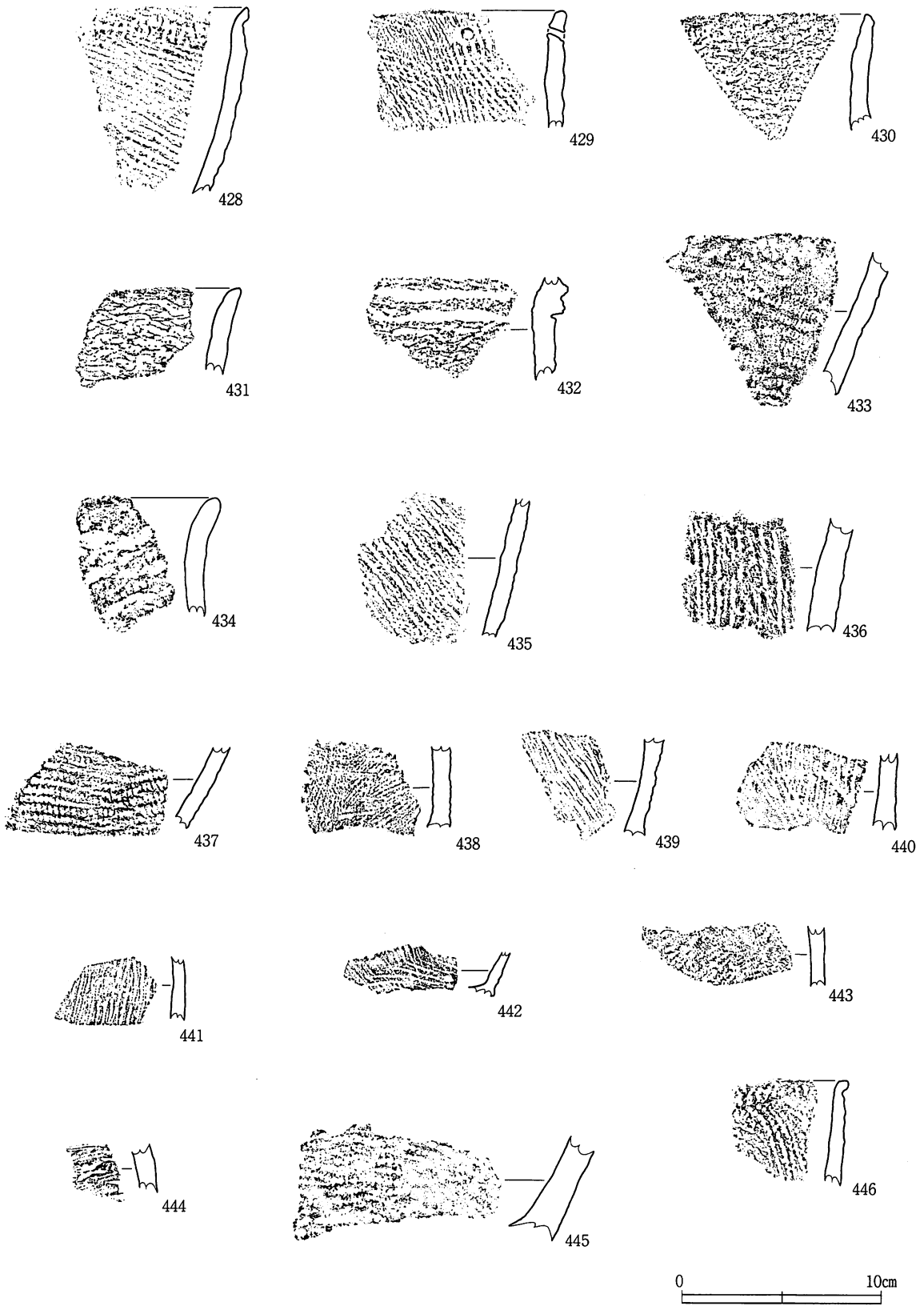
第104図 遺構内出土遺物 土坑(4)



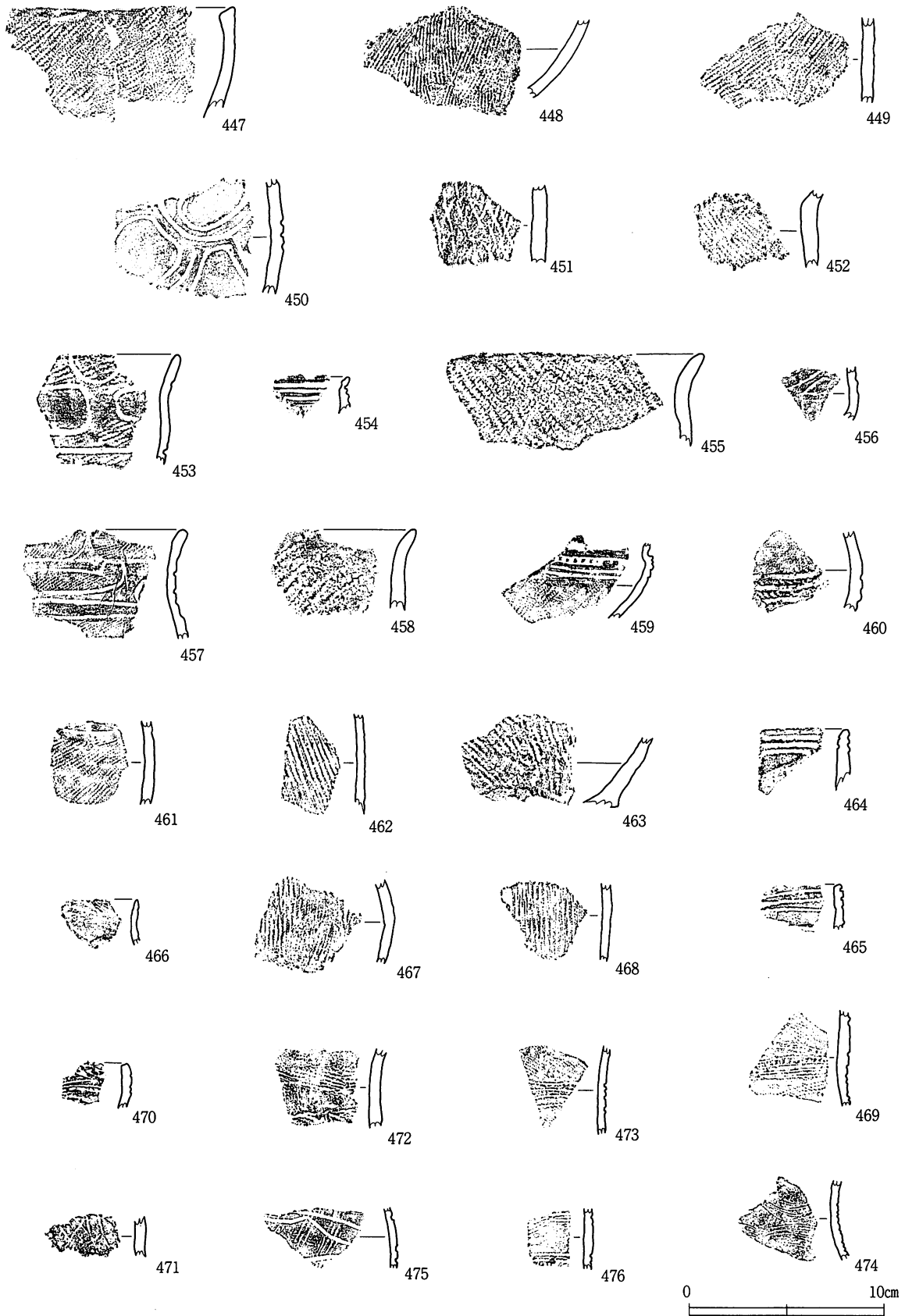
第105图 遺構内出土遺物 土坑(5)



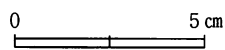
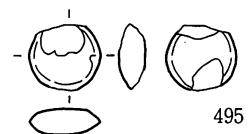
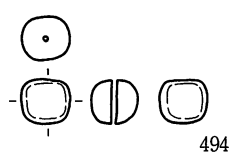
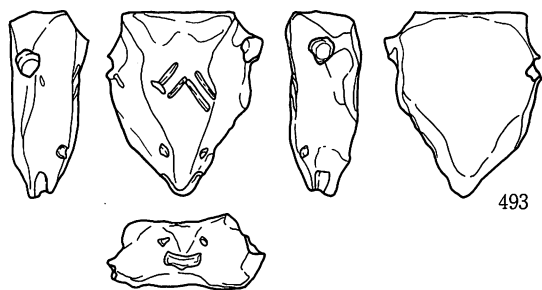
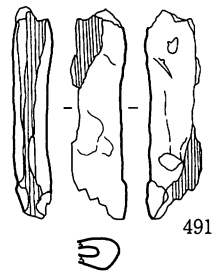
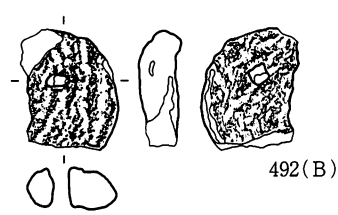
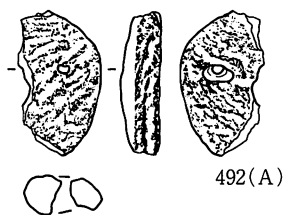
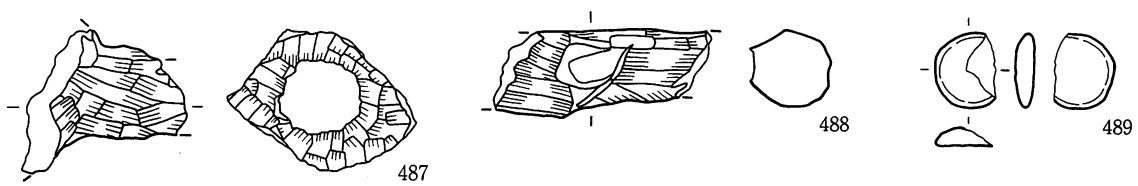
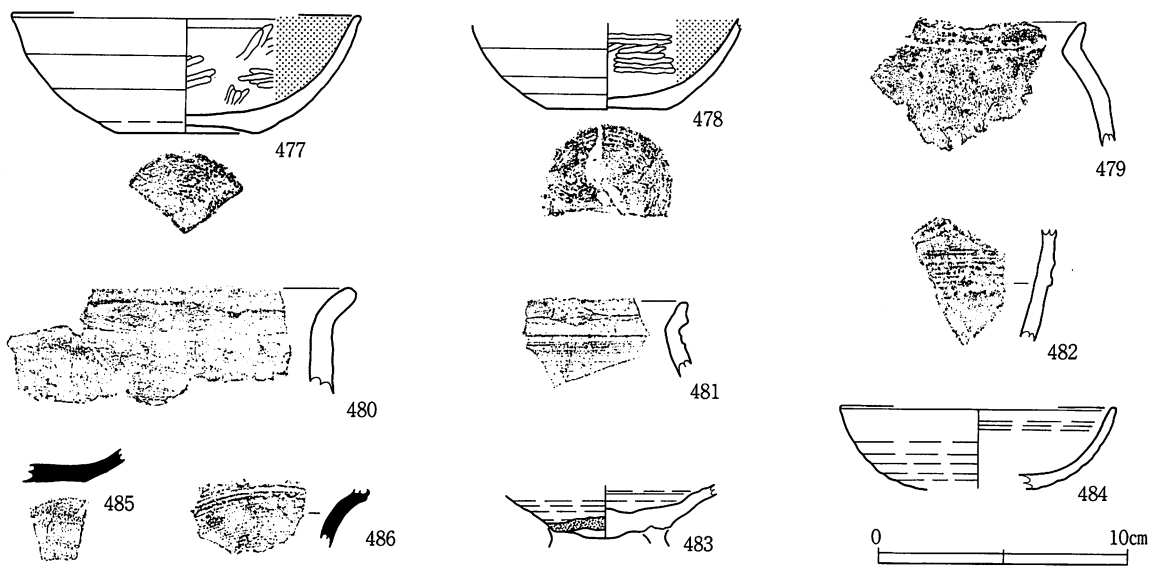
第106图 遺構内出土遺物 土坑(6)・石圈炉・烧土遺構



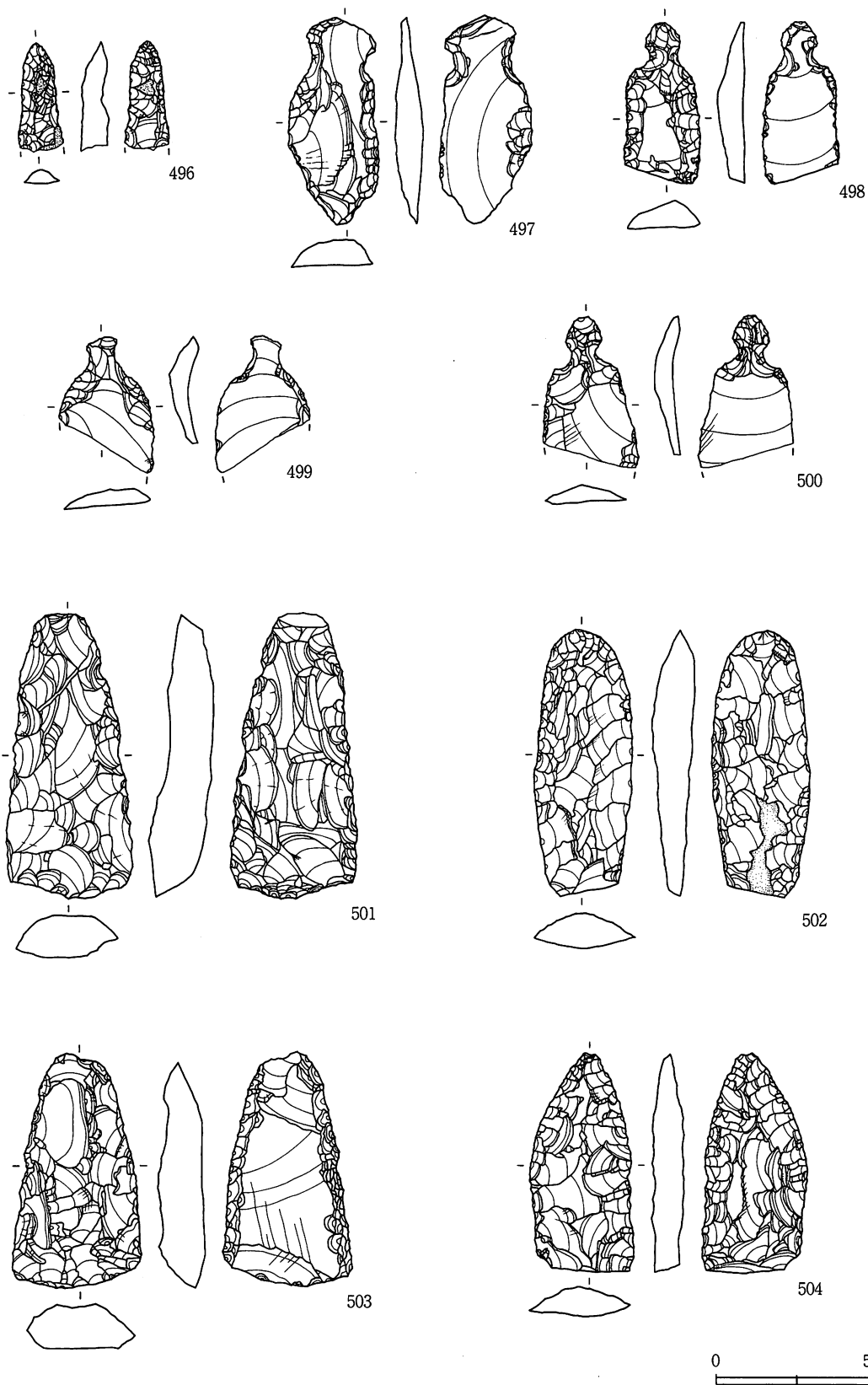
第107図 遺構外出土遺物 土器(1)



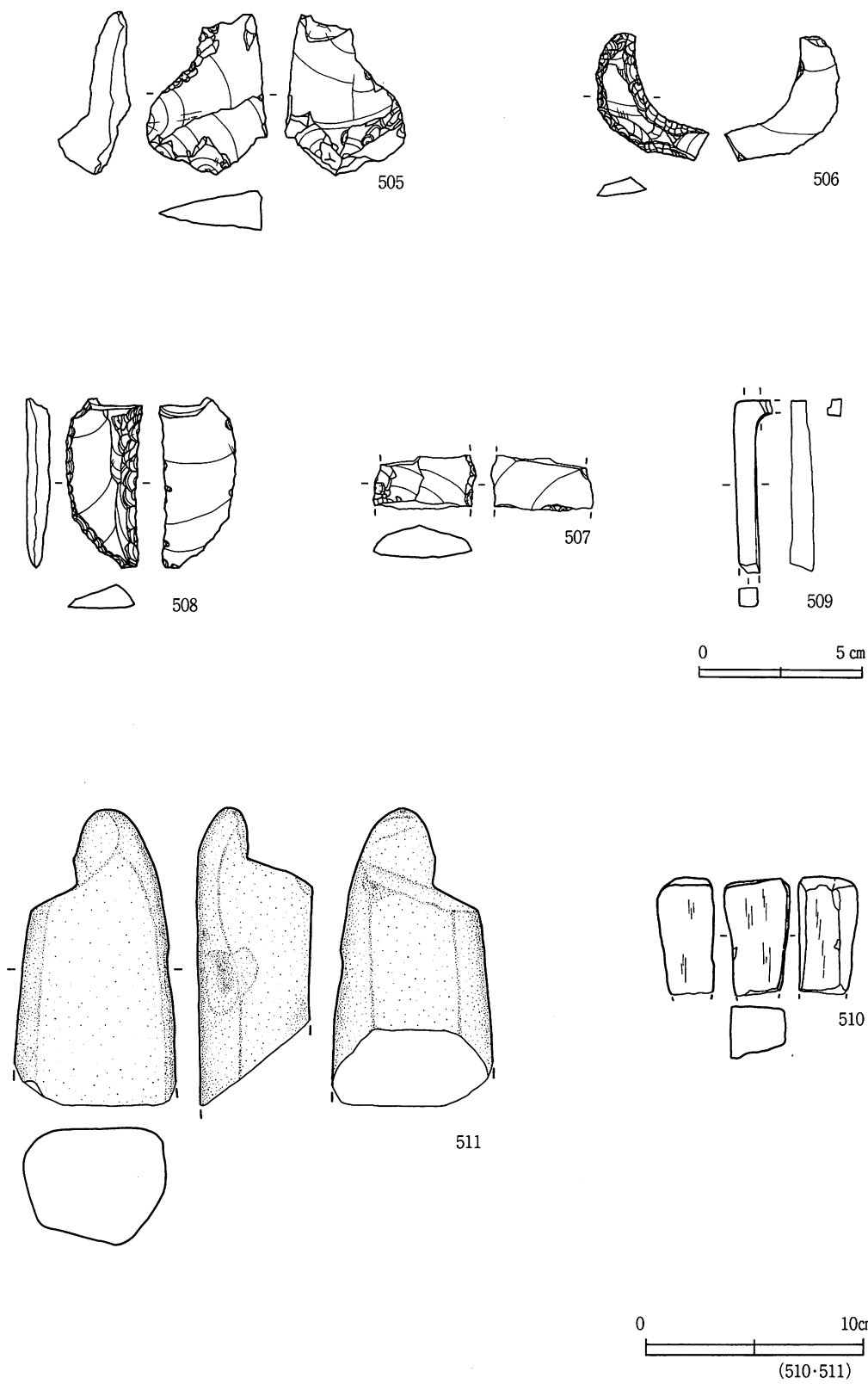
第108図 遺構外出土遺物 土器(2)



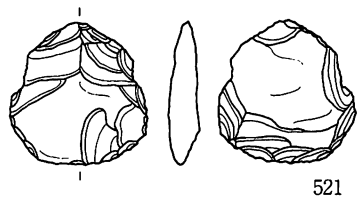
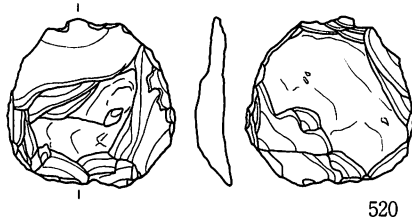
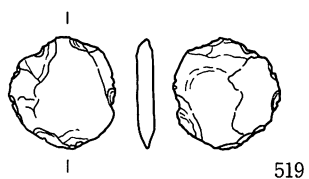
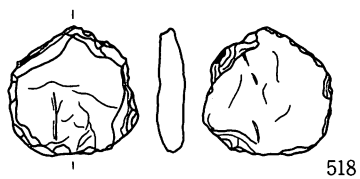
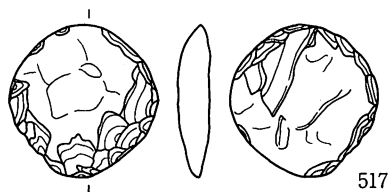
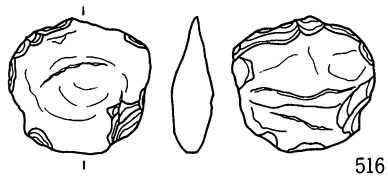
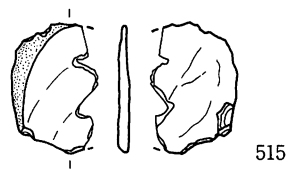
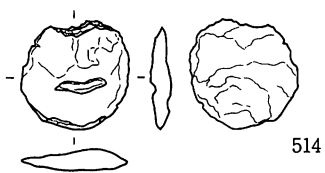
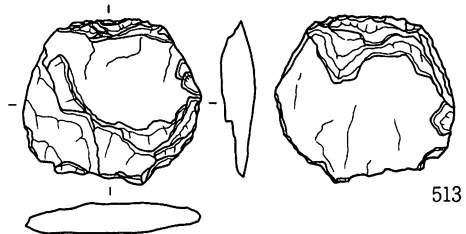
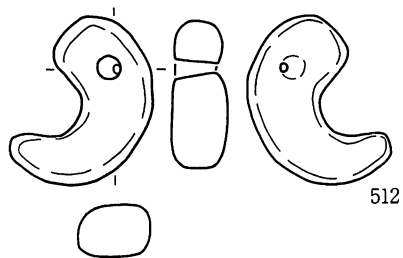
第109図 遺構外出土遺物 土器(3)・土製品



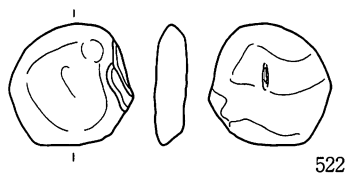
第110図 遺構外出土遺物 石器 (1)



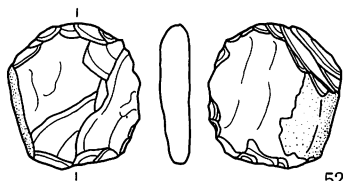
第111圖 遺構外出土遺物 石器 (2)



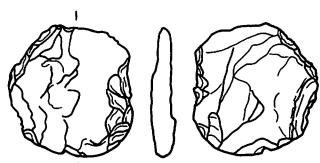
第112図 遺構外出土遺物 石製品(1)



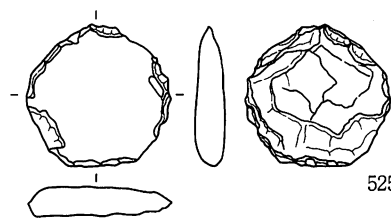
522



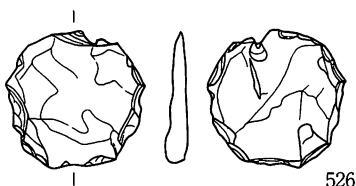
523



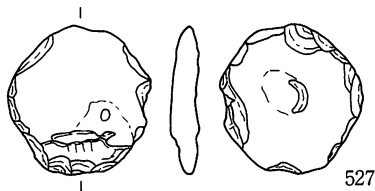
524



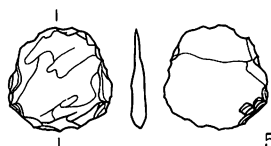
525



526



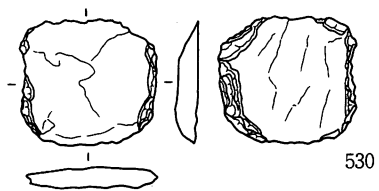
527



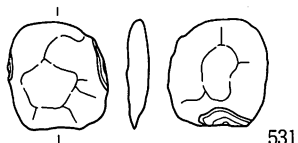
528



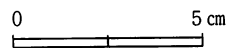
529



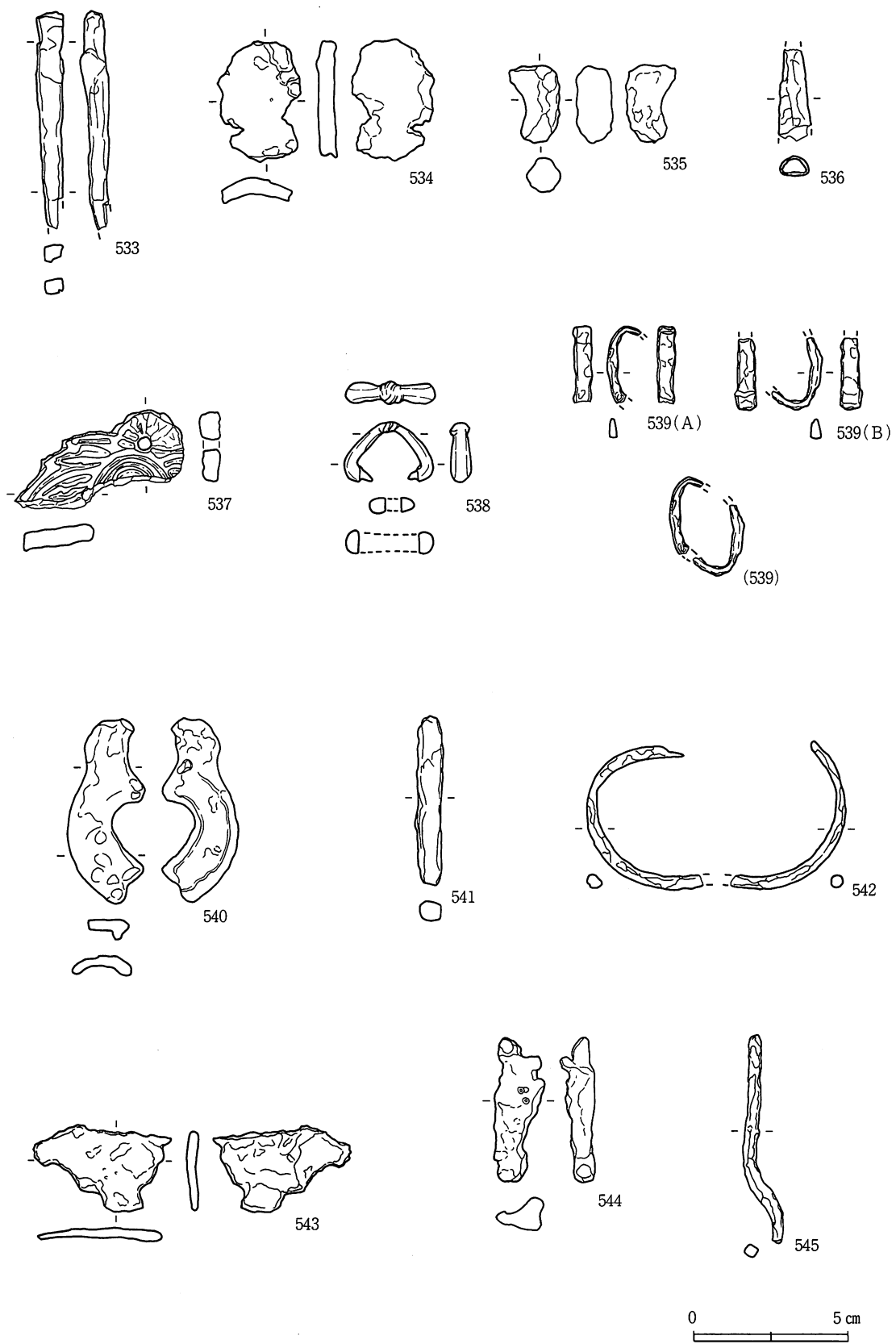
530



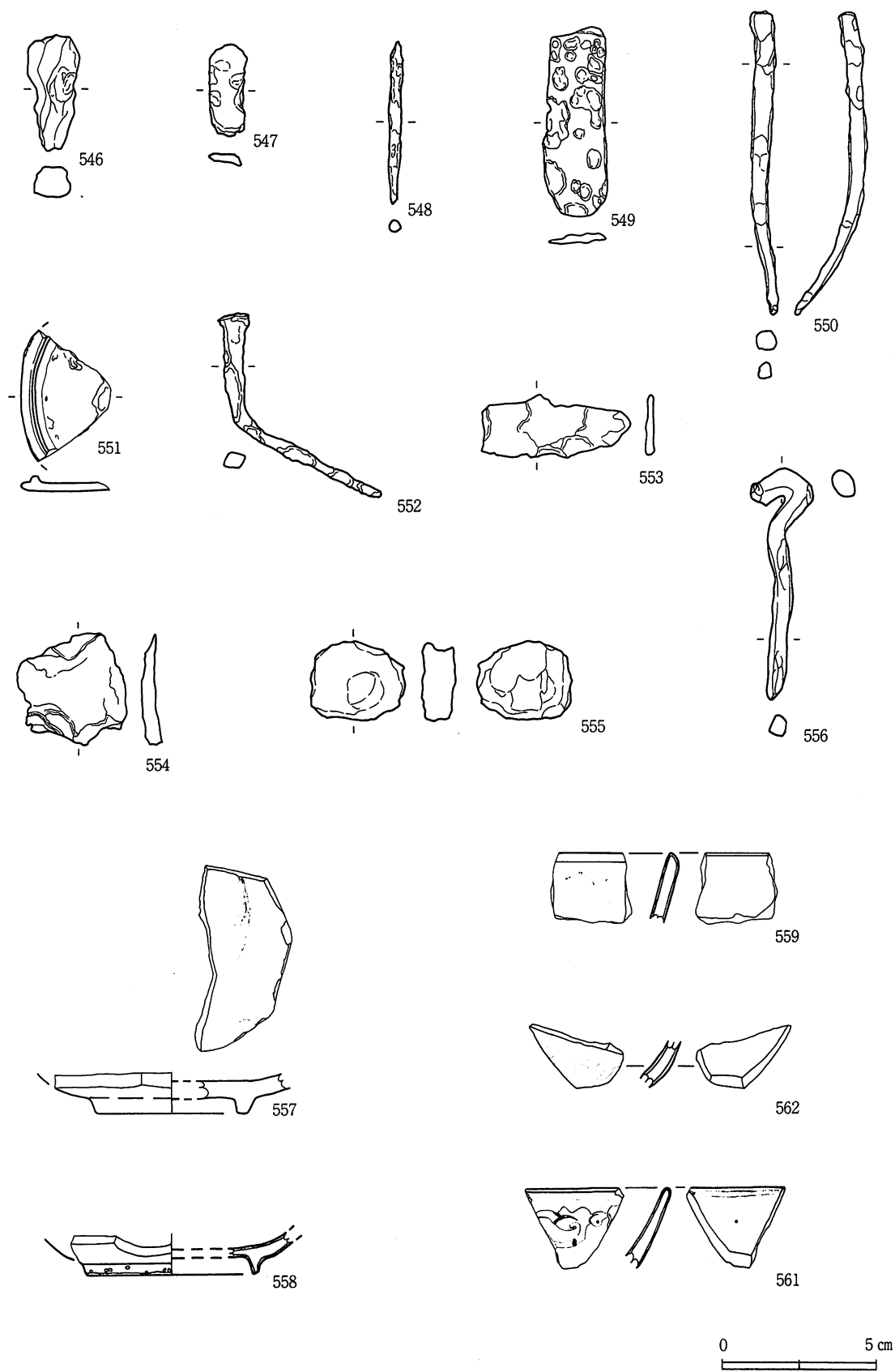
531



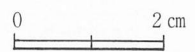
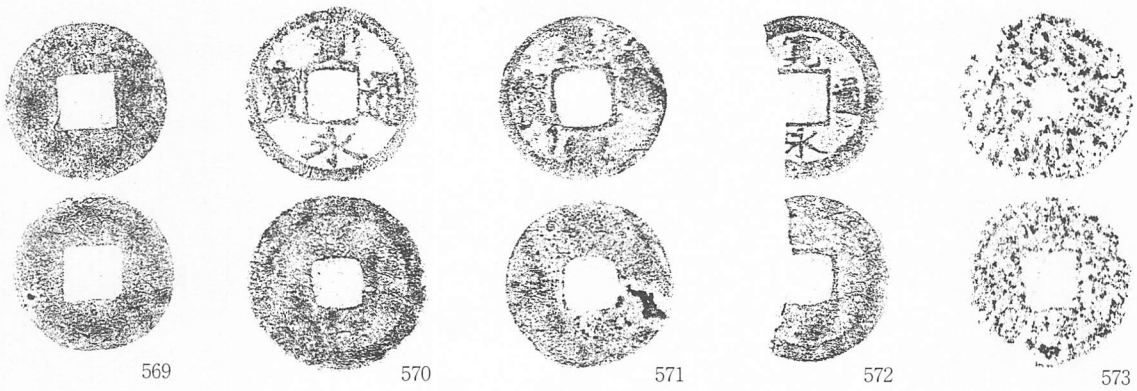
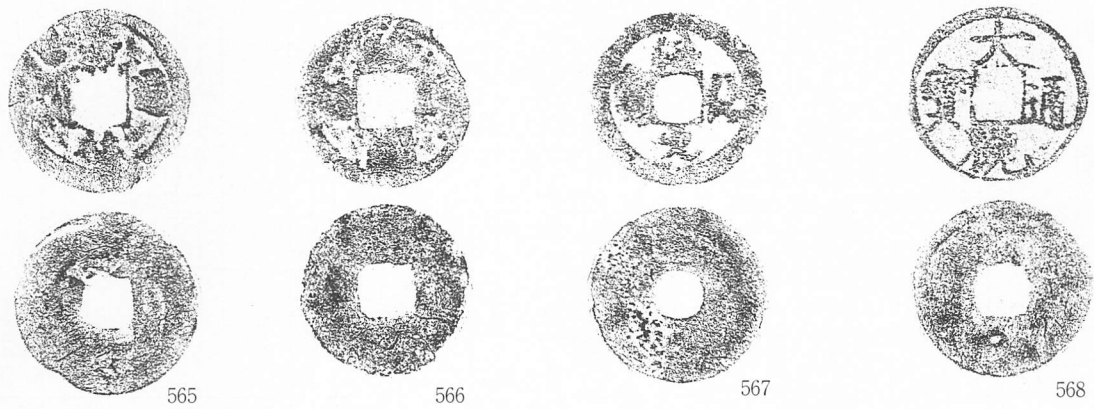
第113圖 遺構外出土遺物 石製品(2)



第114図 遺構外出土遺物 金属製品 (1)



第115図 遺構外出土遺物 金属製品(2)・陶磁器



第116図 遺構外出土遺物 銭貨

土器観察表

口径・底径・器高：単位cm < >：推定値 ()：残存値 *：写真のみ掲載

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整/文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
1	ⅡC-1住	床面	深鉢	<16.6>	5.2	17.9	L R横位 口：平縁・角状に近い 上げ底状	ミガキ	器面磨耗		縄文晩期
2	ⅡC-1住	床面	鉢か壺	-	2.5	-	R L横位? 上げ底状	ミガキ	器面磨耗		縄文晩期
3	ⅡC-1住	埋土	深鉢	19.8	-	-	L R横位? 口：若干内削ぎ・突起	ミガキ	器面磨耗		縄文晩期
4	ⅡC-1住	埋土	深鉢	<28.8>	-	[23.0]	L R横位 口：内削ぎ・肥厚・突起	ミガキ	外面煤付着		縄文晩期
5	ⅡC-1住	埋土	深鉢	<8.6>	4.2	8.7	L R横位 口唇：刻み・突起 平行沈線	ミガキ			縄文晩期
6	ⅡC-1住	埋土	鉢	<11.0>	<6.5>	4.7	無文 口：平縁 胴下端～底：木葉痕	ナデ			縄文晩期
7	ⅡC-1住	埋土	深鉢	-	-	-	L R横位 口：平縁・丸み・若干内傾	ミガキ	胎土に砂を含む		縄文晩期
8	ⅡC-1住	床面	深鉢	-	-	-	L R縦位 結節回転文 口：平縁・角状	ナデ			縄中末～後初
9	ⅡC-1住	埋土	深鉢	-	-	-	L R縦位 結節回転文	ナデ	8と同一個体		縄中末～後初
10	ⅡC-1住	埋土	深鉢	-	-	-	L R横位 口：平縁・内削ぎ・若干肥厚	ミガキ			縄文晩期
11	ⅡC-1住	埋土	鉢	-	-	-	L R横位 口：平縁・内削ぎ・若干肥厚	ミガキ			縄文晩期
12	ⅡC-1住	埋土	鉢	-	-	-	L R横位 口：平縁・内削ぎ・肥厚	ミガキ			縄文晩期
14	ⅡD-1住	床面カマド右袖脇	坏	17.6	7.1	5.2	口～体：ミガキ 底：ナデ	口～底：ミガキ	内黒の可能性も有り	A II b	奈良
15	ⅡD-1住	床面カマド左袖脇	片口	8.0	3.0	3.0	口：ヨコナデ 体～底：ケズリ	口～底：ナデ (M)			奈良
16	ⅡD-1住	床面カマド右袖脇	坏	10.7	7.0	3.0	口：ヨコナデ 体～底：ナデ	口～底：ミガキ		A II c	奈良
17	ⅡD-1住	床面カマド左袖脇	坏	14.1	-	4.3	口：ミガキ 体：ナデ・ミガキ 底：ミガキ	口～底：ミガキ	内面黒色処理	A I a	奈良
18	ⅡD-1住	カマド	甌	15.2	-	10	口：ヨコナデ 体：ミガキ	口～体：ナデ			奈良
19	ⅡD-1住	カマド煙出部	球胴甌	14.6	-	[12.8]	口～体：ナデ (M)	口～体：ナデ (M)		A I	奈良
20	ⅡD-1住	カマド煙出部	甌	<16.6>	-	[19.0]	口：ヨコナデ後ミガキ 体：ナデ (ハケメ?) 後ミガキ	口～体：ハケメ後ミガキ		A I	奈良
21	ⅡD-1住	カマド(支脚)	甌	-	6.2	[11.0]	体：ナデ後ミガキ	体～底：ナデ・ミガキ			奈良
22	ⅡD-1住	床面直上	甌	<15.0>	-	[8.8]	口：ヨコナデ・ケズリ 体：ミガキ	口：ヨコナデ後ナデ 体：ナデ		A I	奈良
23	ⅡD-1住	埋土下部～床直	甌	14.2	-	[14.1]	口：ヨコナデ後ナデ (M) 体：ハケメ後ミガキ	口：ヨコナデ 体：ハケメ	内面煤付着	A I	奈良
24	ⅡD-1住	床面直上	坏	16.8	7.2	5.7	口：ヨコナデ後ナデ (M) 体：ナデ (M) 底：ナデ	口(M)ヨコナデ 体～底：ナデ (M)		A II b	奈良
25	ⅡD-1住	床面直上	坏	15.8	-	<4.8>	口：ナデ (M) 体：ケズリ	口：ナデ (M) 体：ミガキ		A II d	奈良
26	ⅡD-1住	床面直上	坏	10.0	4.3	3.2	口～底：ナデ	口～底：ミガキ			奈良
27	ⅡD-1住	床面直上	甌	<19.0>	-	[16.8]	口～体：ナデ	口～胴：ナデ		A I	奈良
28	ⅡD-1住	埋土下部	球胴甌	-	8.6	[11.3]	体：ミガキ	体～底：ナデ・ハケメ			奈良
29	ⅡD-1住	埋土下部	坏	15.7	4.5	5.2	口：ヨコナデ 口～体：ミガキ	口～底：ミガキ	内面黒色処理	A I a	奈良
30	ⅡD-1住	埋土下部	坏	13.0	4.1	4.1	口～体：ナデ (M)	口：ナデ 体～底：ミガキ		A II a	奈良
31	ⅡD-1住	埋土下部	坏	14.0	-	[4.3]	口～体：ナデ (M)	口～体：ナデ (M)		A II a	奈良
32	ⅡD-1住	埋土下部	甌	<16.1>	-	[8.2]	口：ヨコナデ後ナデ 体：ナデ (M)	口～体：ナデ	内外面被熱	A I	奈良
33	ⅡD-1住	埋土中部	小鉢	<13.0>	4.9	6.0	口～体：ナデ・ケズリ	口～体：ナデ			奈良
34	ⅡD-1住	埋土上部	坏	<13.0>	-	[5.6]	口～体：ミガキ ロクロナデ	口～体：ミガキ ロクロナデ	内外面黒色処理	B I d	平安
35	ⅡD-1住	埋土上部	坏	<11.2>	-	4.1	口～体：ナデ (M)	口～底：ナデ (M)		A II a	奈良
36	ⅡD-1住	埋土上部	坏	15.0	-	5.1	口：ナデ (M) 体：ナデ (M)・ケズリ	口～底：ミガキ	内外面(?)黒色処理	A I b	奈良
37	ⅡD-1住	埋土上部	甌	14.7	6.0	15.0	口：ヨコナデ 体：ナデ後ミガキ	口：ミガキ 体：ナデ後ミガキ		A I	奈良
38	ⅡD-1住	埋土上部	甌	-	6.4	[3.5]	体：ナデ (M)	体～底：ナデ			奈良
39	ⅡD-1住	埋土上部	甌	-	-	[10.0]	体：ナデ (M)	体：ナデ			奈良
40	ⅡD-1住	埋土上部	甌	<15.0>	-	[23.5]	口：ヨコナデ 体：ナデ (M)	口～体：ナデ		A I	奈良
41	ⅡD-1住	埋土上部	甌	-	-	[14.5]	体：ナデ (M)	体：ナデ			奈良
42	ⅡD-1住	床面	甌	-	-	-	口：ヨコナデ後ナデ (M)	口：ナデ			奈良
43	ⅡD-1住	埋土下部～床直	球胴甌	-	-	-	口：ヨコナデ後ナデ	口～体：ナデ			奈良
44	ⅡD-1住	埋土上部	球胴甌	-	-	-	口：ヨコナデ 胴：ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ			奈良
47	ⅡD-5b住	埋土	甌	-	-	-	口：ナデ	口：ナデ			奈良
48	ⅡD-5b住	埋土	甌	-	-	[7.5]	体：ケズリ後ミガキ	体：ナデ・ミガキ			奈良
49	ⅡD-16住	床面	甌	14.6	6.8	21.0	口：ヨコナデ後ナデ (M) 体：ナデ・ケズリ後ミガキ	口：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ		A I	奈良
50	ⅡD-16住	床面	高坏	10.7	-	5.7	口：ヨコナデ 体：ナデ	口～底：ミガキ	内面黒色処理		奈良
51	ⅡD-16住	床面	小型手捏ね土器	6.1	2.4	3.1	口：ヨコナデ 体：ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ (M)	内面黒色処理		奈良

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整/文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
52	ⅡD-16住	壁溝埋土	小型手握ね土器	5.6	—	3.6	□～体：ナデ	□～底：ナデ			奈良
53	ⅡD-16住	壁溝埋土	小鉢	8.1	4.9	4.4	□：ヨコナデ 体：ナデ	□：ヨコナデ 体：ナデ			奈良
54	ⅡD-16住	カマド袖部右	甕	17.6	—	[23.0]	□：ヨコナデ後ナデ (M) 体：ナデ (M)	□：ヨコナデ 体：ナデ後ミガキ		A I	奈良
55	ⅡD-16住	カマド袖部左	甕	18.7	8.8	30.3	□：ヨコナデ 体：ナデ (M)	□：ヨコナデ 体：ナデ		A I	奈良
56	ⅡD-16住	床面直上	坏	17.0	—	5.1	□：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ	□～底：ミガキ	内面黒色処理	A I a	奈良
57	ⅡD-16住	床面直上	坏	13.8	6.0	4.9	□～体：ナデ (M)	□～底：ナデ (M)	内面黒色処理	A I c	奈良
58	ⅡD-16住	埋土下部	坏(碗に近い)	<8.4>	3.8	3.5	□：ナデ (M) 体：ケズリ	□：ナデ 体：ミガキ		A II b	奈良
59	ⅡD-16住	埋土下部	甕	16.3	—	[20.5]	□：ヨコナデ後ナデ (M) 体：ケズリ後ナデ (M)	□：ヨコナデ後ナデ (M) 体：ナデ		A I	奈良
60	ⅡD-16住	埋土上部	鉢	<23.8>	8.0	11.1	□：ナデ後ミガキ 体：ナデ・ケズリ後ミガキ	□～底：ミガキ			奈良
61	ⅡD-16住	埋土上部	坏	<20.4>	<6.2>	<5.3>	□：ヨコナデ 体：ナデ	□～体：ミガキ		A II d	奈良
62	ⅡD-16住	埋土最上部	甕	—	7.5	[5.0]	体：ナデ	体：ナデ			奈良
63	ⅡD-16住	埋土最上部	甕	—	<7.3>	—	体：ナデ	体：ナデ			平安
64	ⅡD-16住	埋土最上部	甕	<11.8>	—	[5.9]	□：ヨコナデ後ナデ (M) 体：ナデ (M)	□～体：ナデ		A I	奈良
65	ⅡD-16住	埋土最上部	甕	—	—	—	□縁部端・頸部：沈線	□：ナデ	鍛夷甕		奈良?
66	ⅡD-16住	埋土上部	甕	—	—	—	□：ヨコナデ 体：ハケメ後ナデ (M)	□：ヨコナデ後ナデ		A II	平安
67	ⅡD-16住	埋土最上部	甕	—	—	—	□：ヨコナデ	体：ナデ		A II	平安
68	ⅡD-16住	埋土上部T o - a	甕	—	—	—	□：ナデ (M)	□：ナデ	胎土赤褐色		
69	ⅡD-16住	埋土上部	坏	<14.0>	6.3	5.5	□～体：ロクロナデ 底：回転糸切り痕	□～体：ロクロナデ		B II a	平安
70	ⅡD-16住	埋土上部	坏	—	6.6	[3.6]	体：ロクロナデ 底：回転糸切り痕	体～底：ミガキ	内面黒色処理?	B I c	平安
71	ⅡD-16住	埋土上部T o - a	甕	<12.0>	—	[4.2]	□～体：ロクロナデ	□～体：ロクロナデ		B III	平安
72	ⅡD-16住	埋土最上部	高台付坏	—	7.5	[2.9]	ロクロナデ 体：ミガキ	ロクロナデ 底：ミガキ	内面黒色処理?		平安
73	ⅡD-16住	埋土最上部	甕	—	—	—	□：ロクロナデ	□：ロクロナデ		B I	平安
83	ⅡC-2住	床面	甕	<22.2>	—	[10.9]	□：ヨコナデ・ナデ 体：ケズリ・ハケメ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
84	ⅡC-2住	床面	甕	<13.3>	—	[10.1]	□：ナデ 体：ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
85	ⅡC-2住	床面	甕	<18.0>	—	[6.0]	□：ヨコナデ後ナデ 体：ナデ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A I	奈良
86	ⅡC-2住	カマド右袖	甕	<19.0>	—	[18.4]	□：ヨコナデ・ナデ 体：ケズリ・ナデ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
87	ⅡC-2住	カマド右袖	甕	—	<8.0>	[11.2]	体：ケズリ	体～底：ナデ			平安
88	ⅡC-2住	埋土下部	甕	<9.3>	—	[11.5]	□：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A III	平安
89	ⅡC-2住	床面	甕	—	—	—	□：ヨコナデ・ナデ 体：ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
90	ⅡC-2住	埋土下部	坏	—	—	—	□：ロクロナデ	□：ロクロナデ	赤焼土器	B II a	平安
91	ⅡC-2住	埋土下部	甕	—	—	—	体：ケズリ	体：ナデ	須恵器		平安
92	ⅡC-2住	床面	長頸瓶	—	—	[5.8]	類：ロクロナデ	類：ロクロナデ	須恵器		平安
97	ⅡC-3住	カマド左袖部	甕	<18.0>	<11.2>	<27.2>	□：ヨコナデ 体：ナデ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
98	ⅡC-3住	カマド袖部	甕	<18.5>	—	[28.1]	□：ヨコナデ 体：ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ		A II	平安
99	ⅡC-3住	カマド左袖部	甕	<14.0>	—	[13.0]	□：ヨコナデ・ケズリ 体：ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
100	ⅡC-3住	カマド左袖部	甕	<14.7>	—	[10.8]	□：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
101	ⅡC-3住	カマド左袖部	甕	<12.0>	—	[5.2]	□～体：ロクロナデ	□～体：ロクロナデ		B II	平安
102	ⅡC-3住	カマド袖部	甕	<23.6>	—	[18.5]	□：ヨコナデ 体：ナデ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
103	ⅡC-3住	カマド袖部	小甕	12.1	5.6	11.4	□～体：ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
104	ⅡC-3住	カマド袖部	甕	<24.2>	—	[5.1]	□：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A II	平安
105	ⅡC-3住	埋土	甕	<18.3>	—	[6.0]	□：ヨコナデ 体：ナデ (M)	□：ヨコナデ 体：ナデ		A I	奈良
106	ⅡC-3住	カマド袖部	甕	—	<7.9>	[11.7]	体：ケズリ	体～底：ナデ			平安
107	ⅡC-3住	埋土	坏	<15.8>	6.0	4.4	□：ロクロナデ・ミガキ 体～底：ナデ・ケズリ	□～底：ミガキ	内面黒色処理	B I b	平安
108	ⅡC-3住	埋土	坏	—	<5.2>	[1.3]	体：ロクロナデ 底：回転糸切り痕	底：ミガキ?	内面黒色処理	B I c	平安
109	ⅡC-3住	カマド袖部	甕	—	—	—	□：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ	□～体：ナデ		A II	平安
110	ⅡC-3住	カマド袖部	甕	—	—	—	□：ヨコナデ 体：ナデ	□～体：ナデ		A II	平安
112	ⅡC-4住	埋土	甕	13.0	—	<8.2>	□：ヨコナデ 体：ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A III	平安
113	ⅡC-4住	埋土	甕	<16.0>	—	[5.7]	□：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ	□：ヨコナデ 体：ナデ		A III	平安
114	ⅡC-4住	埋土上部	坏	<12.0>	—	[4.1]	□：ロクロナデ・ミガキ 体：ミガキ・ケズリ	□～体：ミガキ	内面黒色処理	B I b	平安
115	ⅡC-4住	埋土	甕	—	—	—	□：ナデ	□：ヨコナデ・ナデ		A III	平安

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整/文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
116	II C-4住	埋土	小甕	-	-	-	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ		B III	平安
117	II D-2住	カマド煙道部	甕	<25.6>	-	[16.0]	口:ヨコナデ 体:ケズリ・ナデ	口~体:ナデ		A II	平安
118	II D-2住	カマド煙道部	坏?	<14.0>	-	[4.3]	口~体:ロクロナデ・ナデ (M)	口~体:ミガキ			平安
119	II D-2住	埋土下部	甕	<13.4>	-	[9.0]	口:ヨコナデ 体:ナデ	口~体:ナデ		A II	平安
120	II D-2住	P3埋土	瓶	-	-	-	肩:ミガキ	肩:ナデ	*		平安?
121	II D-2住	P3埋土中部	坏	-	-	-	口~体:ロクロナデ・ミガキ	口~体:ミガキ	* 内外面黒色処理	B I d	平安
122	II D-2住	カマド煙道部	甕	<18.8>	-	[21.2]	口:ヨコナデ・ナデ 体:ナデ・ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
123	II D-2住	P3埋土中部	坏	-	-	-	体:ロクロナデ 底:回転糸切り痕?	体~底:ミガキ	* 内面黒色処理	B I c	平安
124	II D-2住	P3検出面	甕	<13.8>	-	[14.3]	口:ヨコナデ 体:ナデ・ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ・ミガキ		A II	平安
125	II D-2住	P3検出面	坏	<13.4>	-	[3.5]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	須恵器(焼成不良)	C I b	平安
126	II D-2住	埋土下部~床直	坏	-	-	-	口~体:ロクロナデ・ミガキ	口~体:ロクロナデ・ミガキ	内外面黒色処理	B I d	平安
127	II D-2住	埋土下部~床面	坏	<13.0>	<7.0>	4.5	口:ロクロナデ 体~底:ケズリ	口~体:ロクロナデ	須恵器	C I a	平安
128	II D-3住	埋土下部~床面	甕	-	<10.4>	[4.4]	体~底:ナデ・ケズリ	体~底:ナデ			平安
129	II D-3住	埋土下部~床面	坏	<12.0>	-	[2.7]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
130	II D-3住	埋土下部~床面	坏	-	<6.0>	[1.7]	体~底:ロクロナデ・ヘラナデ	体~底:ミガキ	内面黒色処理	B I a	平安
131	II D-3住	カマド	甕	<18.6>	-	[14.6]	口~体:ナデ	口~体:ナデ		A II	平安
132	II D-3住	埋土下部	甕	<19.5>	-	21.7	口:ヨコナデ・ミガキ 体:ナデ	口~体:ナデ		A II	平安
133	II D-3住	カマド	甕	-	-	[11.0]	体:ケズリ	体:ナデ			平安
134	II D-3住	埋土上部	甕	<22.4>	-	[23.6]	口~体:ナデ	口~体:ナデ		A II	平安
135	II D-3住	埋土下部~床面	甕	<24.2>	-	<14.0>	口:ヨコナデ 体:ケズリ・ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
136	II D-3住	埋土	甕	-	<7.8>	[6.2]	体:ナデ	体~底:ナデ			平安
137	II D-3住	埋土	坏	-	<4.8>	[1.9]	体:ロクロナデ 底:回転糸切り痕	体~底:ロクロナデ	須恵器(生焼け)	C I b	平安
138	II D-3住	埋土	坏	-	<4.6>	[1.8]	体~底:ロクロナデ・ヘラナデ	体~底:ミガキ	内面黒色処理	B I a	平安
139	II D-3住	貼床	甕	-	-	-	口:ヨコナデ 体:ナデ	口~体:ナデ			平安
140	II D-3住	床面	甕	-	-	-	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
141	II D-3住	埋土下部~床面	坏	-	-	-	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
142	II D-3住	埋土下部~床面	甕?	-	-	-	体:ロクロナデ	体:ロクロナデ			平安
143	II D-3住	埋土下部~床面	甕	-	-	-	口:ナデ	口:ナデ			平安
144	II D-3住	埋土	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
145	II D-3住	埋土	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ミガキ	内面黒色処理	B I c	平安
146	II D-3住	埋土	大甕	-	-	-	頸~肩:ナデ 胎土に金雲母含む	頸~肩:ナデ	陶器 在地産		中世
148	II D-5住	床面	坏	<15.6>	6.3	5.5	口~体:ロクロナデ・ミガキ 底:回転糸切り痕・ヘラナ	口~底:ミガキ	内面黒色処理	B I d	平安
149	II D-5住	埋土	坏	<10.0>	<3.9>	<2.7>	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
150	II D-5住	貼床	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ミガキ	内面黒色処理	B I c	平安
151	II D-5住	床面	甕	-	-	-	体:ケズリ	体:ナデ			平安
152	II D-5住	床面	甕	-	-	-	体:ナデ・ミガキ	体:ナデ			平安
153	II D-5住	P P1埋土	甕	-	-	-	口:ヨコナデ・ナデ・ミガキ	口:ヨコナデ・ナデ・ミガキ			奈良
154	II D-5住	埋土上部	甕	-	-	-	口:ヨコナデ・ナデ	口:ヨコナデ・ナデ		A I ?	奈良?
155	II D-5住	埋土	坏	-	-	-	口:ミガキ 有段	口:ミガキ	内面黒色処理	B I d	平安
156	II D-5住	埋土	甕	-	-	-	口:ナデ・ミガキ	口:ナデ		A I	奈良
158	II D-6住	床面~床面直上	坏	<12.0>	-	[3.9]	口:ロクロナデ	口:ロクロナデ	須恵器(焼成不良)	C I b	平安
159	II D-6住	床面~床面直上	坏	-	<9.5>	[1.8]	体:ナデ 底:糸切り痕	底:ナデ	赤焼土器	B II b	平安
160	II D-6住	床面~床面直上	甕	-	-	-	体:ケズリ	体:ケズリ・ナデ			平安
161	II D-7住	床面	甕	-	11.7	[1.8]	体:ケズリ 底部:木炭痕	底:ナデ			平安
162	II D-7住	埋土下部~床直	坏	15.1	7.2	4.8	口~体:ロクロナデ 底:ケズリ?	口~底:ミガキ	内面黒色処理・器面磨耗	B I a	平安
163	II D-7住	P1埋土	坏	<14.3>	-	[5.5]	口~体:ロクロナデ・ミガキ	口~底:ミガキ	内面黒色処理	B I d	平安
164	II D-7住	床面	坏	<15.8>	-	[4.5]	口~体:ロクロナデ・ミガキ	口~底:ミガキ	内面黒色処理	B I d	平安
165	II D-7住	床面	甕	22.4	-	[9.0]	口:ヨコナデ・ナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
166	II D-7住	P2埋土	坏	<15.0>	-	[4.0]	体:ケズリ 底:回転糸切り痕	口~体:ロクロナデ・ミガキ?	内面黒色処理・器面磨耗	B I d	平安
167	II D-7住	埋土下部~床直	甕	-	-	-	口:ヨコナデ・ナデ 体:ケズリ	口~体:ナデ		A II	平安

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整 / 文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
168	II D-7住	床面	甕?	-	-	-	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
170	II D-8住	床面直上	小型甕?	<9.8>	-	[3.0]	口:ケズリ	口:ナデ			平安
171	II D-8住	住内ビット埋土	甕	-	10.2	[5.5]	体:ケズリ	体:ナデ			平安
172	II D-8住	南カマド煙道埋下	坏	14.3	5.4	4.6	口~体:ロクロナデ・ミガキ 底:回転糸切り痕	口~底:ミガキ	内面黒色処理	B I d	平安
173	II D-8住	貼床土	坏	<14.9>	-	4.5	口~体:ロクロナデ	口~体:ミガキ	内面黒色処理	B I c	平安
174	II D-8住	床面直上	甕	<15.0>	-	[5.9]	口:ヨコナデ・ナデ・ケズリ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
175	II D-8住	南カマド煙道埋下	甕	<11.2>	-	[6.1]	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
176	II D-8住	南カマド煙道部	甕	<16.0>	-	[16.9]	口:ヨコナデ・ナデ 体:ケズリ・ナデ	体:ナデ		A II	平安
177	II D-8住	埋土下部	坏	-	5.6	[3.3]	体:ロクロナデ 底:回転糸切り痕	体~底:ミガキ	内面黒色処理	B I c	平安
178	II D-8住	埋土下部	甕	14.8	-	[9.7]	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口~体:ナデ		A II	平安
179	II D-8住	北カマド	甕	<19.5>	-	[9.7]	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
180	II D-8住	埋土上部	甕	<19.4>	-	[12]	口:ナデ(ヨコナデ後ミガキ) 体:ナデ後ミガキ	口~体:ナデ(ヨコナデ後ミガキ)		A I	奈良
181	II D-8住	埋土上部	甕	-	9.6	[8.4]	体:ケズリ	体~底:ナデ			平安
182	II D-8住	埋土上部	坏	<14.8>	<4.6>	5.9	口~体:ロクロナデ 体部下端~底:ヘラケズリ	口~底:ミガキ	内面黒色処理	B I a	平安
183	II D-8住	床面直上	甕	-	-	-	口:ヨコナデ・ナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
184	II D-8住	床面直上	甕	-	-	-	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ			平安
185	II D-8住	南カマド煙道部	甕	-	-	-	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
186	II D-8住	西カマド燃焼部	甕	-	-	-	口:ヨコナデ・ナデ 体:ケズリ	口~体:ナデ		A II	平安
187	II D-8住	埋土上部	甕?	-	-	-	頸~肩:ナデ(M)	頸~肩:ミガキ			奈良?
188	II D-8住	南カマド横P埋土	壺	-	-	-	頸~肩:ロクロナデ	頸~肩:ロクロナデ	須恵器		平安
190	II D-9住	カマド	甕	<23.1>	-	[13.2]	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
191	II D-9住	カマド	甕	-	-	[26.5]	体:ナデ・ケズリ	体:ナデ			平安
192	II D-9住	カマド	甕	<10.9>	-	[6.2]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ		B II	平安
193	II D-9住	P1埋土	高台付皿	-	6.7	[2.8]	台部:ロクロナデ	台部:ロクロナデ			平安
194	II D-9住	P1埋土	坏	14.7	6.0	6.0	口~体:ロクロナデ・ミガキ 底:ケズリ・回転糸切り痕	口~底:ミガキ	内面黒色処理・墨書土器	B I b	平安
195	II D-9住	P1-2埋土	坏	<12.3>	<5.8>	4.5	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
196	II D-9住	P1埋土	甕	-	9.8	[5.9]	体:ナデ	体~底:ナデ・ミガキ			平安
197	II D-9住	埋土下部	坏	<12.6>	-	[4.0]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
198	II D-9住	埋土下部	甕	-	<12.0>	[2.3]	体:ナデ 底:ケズリ・木葉痕	体~底:ナデ			平安
199	II D-9住	埋土下部	高台付皿	<14.5>	-	[1.6]	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器		平安
200	II D-9住	埋土上部	坏	<10.8>	4.2	3.1	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り痕	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
201	II D-9住	埋土下部	高台付皿	<13.8>	-	[1.9]	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器		平安
202	II D-9住	埋土	高台付皿	<13.2>	-	[2.3]	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器		平安
203	II D-9住	埋土上部	坏	<11.3>	<4.4>	3.8	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
204	II D-9住	埋土上部	坏	<12.8>	-	[3.7]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
205	II D-9住	埋土上部	坏	<12.3>	-	[3.9]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
206	II D-9住	埋土上部	坏	-	5.8	[2.3]	体:ロクロナデ 底:回転糸切り痕	体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
207	II D-9住	埋土上部	甕	9.3	-	[7.9]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B I	平安
208	II D-9住	埋土上部	坏	<10.7>	-	[3.4]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
209	II D-9住	埋土上部	坏	<11.3>	-	[3.0]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
210	II D-9住	埋土	坏	<11.8>	4.9	3.6	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り痕	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
211	II D-9住	埋土上部	甕	-	<10.3>	[10.0]	体:ケズリ	体:ナデ			平安
212	II D-9住	埋土上部	甕	<12.1>	-	[9.7]	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
213	II D-9住	埋土上部	甕	<11.1>	-	[4.9]	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
214	II D-9住	埋土	坏	15.0	<6.5>	5.2	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り痕?	口~底:ミガキ	内面黒色処理	B I c	平安
215	II D-9住	埋土	坏	<14.7>	-	[3.8]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
216	II D-9住	埋土	坏	<12.9>	-	[2.8]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
217	II D-9住	埋土	高台付皿	13.4	7.6	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器		平安
218	II D-9住	埋土	高台付皿	12.7	-	[2.1]	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器		平安
219	II D-9住	検出面	甕	<11.0>	-	[4.6]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B I	平安

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整 / 文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
220	ⅡD-9住	P1埋土	甕	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ			平安
226	ⅡD-10住	カマド	球胴甕	-	7.6	[20.6]	体：ハケメ後ミガキ	体：ミガキ			奈良
227	ⅡD-10住	埋土下部	坏	10.3	4.8	3.5	口～体：ロクロナデ 底：回転系切り痕	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
228	ⅡD-10住	埋土下部	坏	<11.9>	5.1	3.9	口～体：ロクロナデ 底：回転系切り痕	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
229	ⅡD-10住	埋土下部	坏	<12.8>	<5.8>	4.5	口～体：ロクロナデ 底：回転系切り痕	口～底：ミガキ		BⅠc	平安
230	ⅡD-10住	埋土上部	坏	12.9	5.0	5.0	口～体：ロクロナデ 底：回転系切り痕	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
231	ⅡD-10住	埋土上部	坏	13	5.6	4.3	口～体：ロクロナデ 底：回転系切り痕	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
232	ⅡD-10住	埋土上部	坏	<13.8>	-	[3.5]	口～体：ロクロナデ	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
233	ⅡD-10住	埋土上部	坏	<14.3>	-	[4.4]	口～体：ロクロナデ	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
234	ⅡD-10住	埋土上部	甕	-	-	[4.6]	体：ナデ・ミガキ	体～底：ハケメ・ナデ			
235	ⅡD-10住	埋土上部	高台付皿	-	<5.9>	[2.3]	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器		平安
236	ⅡD-10住	埋土下部	甕	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ナデ・ケズリ	口～体：ナデ		AⅡ	平安
237	ⅡD-10住	埋土上部	甕	-	-	-	口：ヨコナデ・ナデ 体：ケズリ・ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ		AⅢ	平安
238	ⅡD-10住	埋土上部	坏	-	-	-	口：ロクロナデ	口：ロクロナデ	須恵器(焼成不良)	CⅠb	平安
239	ⅡD-10住	埋土上部	高台付皿	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器		平安
241	ⅡD-12住	P2埋土	甕	<19.4>	-	[16.8]	口：ヨコナデ 体：ケズリ後ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ	胎土に小石含む	AⅡ	平安
242	ⅡD-12住	床面	甕	-	10.4	[4.4]	体：ケズリ・一部ナデ 底：ケズリ	体～底：ナデ	242と同一個体？		平安
243	ⅡD-12住	P1埋土	甕	-	-	-	口：ナデ	口：ナデ		AⅡ?	平安？
244	ⅡD-14住	床面	甕	<9.5>	-	[9.4]	口～体：ロクロナデ	口～体：ロクロナデ	器面磨耗	BⅡ	平安
245	ⅡD-14住	床面	甕	-	<4.0>	[2.4]	体～底：ナデ	体～底：ナデ			奈良・平安
246	ⅡD-14住	床面	坏	-	-	-	口：ロクロナデ	口：ロクロナデ	赤焼土器・金雲母含む	BⅡb	平安
247	ⅡD-17住	床面	坏	-	5.6	[1.2]	体部下端：ロクロナデ 底：回転系切り痕	底：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
248	ⅡD-17住	床面	甕	-	-	[12.8]	体：ミガキ・ケズリ(下端)	体：ナデ			奈良
249	ⅡD-17住	床面・貼床土	坏	<13.7>	6.0	[5.7]	口～体：ナデ(M) 底：ケズリ	口～底：ナデ(M)	内面黒色処理？	AⅠc	奈良
250	ⅡD-17住	貼床土	甕	<17.5>	-	[6.9]	口：ヨコナデ後ナデ 体：ケズリ後ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ	胎土に小石含む	AⅡ	平安
251	ⅡD-17住	床面・焼土3	甕	15.7	7.1	18.4	口：ヨコナデ 体：ケズリ後ミガキ	口：ミガキ 体～底：ナデ		AⅠ	奈良
252	ⅡD-17住	焼土3埋土	甕	<15.5>	-	[14.7]	口：ヨコナデ 体：ナデ(M)	口：ヨコナデ 体：ナデ		AⅠ	奈良
253	ⅡD-17住	焼土3埋土	甕	<14.9>	-	[6.3]	口：ヨコナデ 体：ナデ(M)	口：ナデ 体：ミガキ		AⅡ	平安
254	ⅡD-17住	床面	甕	-	-	-	体：ロクロナデ後ナデ	体：ロクロナデ			平安
255	ⅡD-17住	焼土2埋土	甕	-	-	-	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ後ナデ		AⅠ	奈良
256	ⅡD-17住	埋土	甕	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ		AⅡ	平安
257	ⅡD-17住	埋土	甕	-	-	-	口：ヨコナデ後ナデ	口：ハケメ 体：ナデ		AⅠ	奈良？
258	ⅡD-17住	埋土	坏	-	-	-	口～体：ロクロナデ	口～体：ミガキ	内面黒色処理	BⅠc	平安
259	ⅡD-17住	埋土	坏	-	-	-	口～体：ロクロナデ	口～体：ロクロナデ	* 赤焼土器	BⅡb	平安
261	ⅡD-19住	検出面(床面)	坏	12.7	4.5	5.0	口～体：ロクロナデ 底：回転系切り痕	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
262	ⅡD-19住	焼土1	坏	<13.1>	-	[3.4]	口～体：ロクロナデ	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
263	ⅡD-19住	検出面(床面)	坏	-	-	-	口～体：ロクロナデ	口～体：ロクロナデ	赤焼土器	BⅡb	平安
264	ⅡD-19住	検出面(床面)	甕	-	-	-	頸：ナデ	頸：ナデ	* 胎土に小石含む		平安
265	ⅢD-2住	埋土下部～床面	坏	<15.1>	-	[5.6]	口～体：ロクロナデ	口～体：ミガキ	内面黒色処理	BⅠc	平安
266	ⅢD-2住	床面(焼土周辺)	坏	<16.4>	-	[3.5]	口～体：ロクロナデ	口～体：ミガキ	内面黒色処理	BⅠc	平安
267	ⅢD-2住	床面(焼土周辺)	甕	-	11.6	[2.5]	体部下端：ケズリ 底：ナデ	底：ナデ			平安
268	ⅢD-2住	P1埋土	甕	<17.3>	-	[15.5]	口：ヨコナデ後ケズリ 体：ケズリ	口：ヨコナデ 体：ナデ		AⅡ	平安
269	ⅢD-2住	床面(焼土周辺)	坏	-	-	-	口～体：ロクロナデ	口～体：ミガキ	内面黒色処理	BⅠc	平安
270	ⅢD-2住	床面(焼土周辺)	甕	-	-	-	口～体：ロクロナデ	口～体：ロクロナデ		BⅠ	平安
298	ⅡC5h-1土坑	埋土	甕	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ		AⅡ	平安
299	ⅡC5h-1土坑	埋土	坏	-	-	-	体：ロクロナデ	体：ロクロナデ	須恵器	CⅠb	平安
300	ⅡC5h-1土坑	埋土	瓶か壺	-	-	-	体：ロクロナデ	体：ロクロナデ	須恵器		平安
301	ⅡC5h-2土坑	埋土下部	甕	-	<3.0>	[3.3]	体～底：ケズリ 底：木葉痕	体：ナデ			平安
302	ⅡC5h-2土坑	埋土	深鉢か鉢	-	-	-	L R横位(付加条) 地文のみ	ナデ			弥生？
303	ⅡC5h-2土坑	埋土	深鉢か鉢	-	-	-	L R横位 地文のみ	ナデ			縄文中期？

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整 / 文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
304	Ⅱ C5h-3土坑	埋土上部	長径瓶	-	-	-	頸:ロクロナデ	頸:ロクロナデ	須恵器		平安
305	Ⅱ C5i土坑	埋土	甕	-	-	-	体:ケズリ	体:ナデ			平安
306	Ⅱ C5i土坑	埋土	不明	-	-	-	L R横位 地文のみ	ナデ	器面磨耗		不明
307	Ⅱ C5i土坑	埋土	不明	-	-	-	L R横位 (付加条) 地文のみ	ミガキ			弥生
308	Ⅱ D2h土坑	埋土	不明	-	-	-	L R斜位・横位 地文のみ	ナデ			弥生
309	Ⅱ D2h土坑	埋土	不明	-	-	-	L R横位 地文のみ	ナデ			弥生
310	Ⅱ D2h土坑	埋土	不明	-	-	-	R L縦位? 地文のみ	ナデ			弥生
311	Ⅱ D2i土坑	埋土	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
312	Ⅱ D2j土坑	埋土	坏	-	-	-	底:ロクロナデ (回転系切り後再調整か?)	底:ミガキ	* 内面黒色処理	B I a	平安
313	Ⅱ D2j土坑	埋土	坏	-	-	-	体:ロクロナデ	体:ミガキ	* 内面黒色処理	B I c	平安
314	Ⅱ D3g-1土坑	埋土下部	坏	-	-	-	体:ロクロナデ	体:ミガキ	* 内面黒色処理	B I c	平安
315	Ⅱ D3g-1土坑	埋土下部	坏	-	-	-	口:ヨコナデ	口:ミガキ	* 内面黒色処理	A I a	奈良
316	Ⅱ D3g-2土坑	埋土	球胴甕	-	8.5	[25.5]	体:ナデ (M) 底:ナデ・ケズリ	体:ナデ (M)	器面磨耗		奈良
317	Ⅱ D3g-2土坑	埋土上部	坏	-	5.6	[1.1]	体:ロクロナデ 底:回転系切り痕	体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
319	Ⅱ D3g-3土坑	埋土上部	坏	10.8	5.0	3.2	口~体:ロクロナデ 底:回転系切り痕	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
320	Ⅱ D3g-3土坑	埋土上部	高台付皿	<13.7>	-	[1.7]	ロクロナデ 黒斑有り	ロクロナデ	赤焼土器		平安
321	Ⅱ D3g-3土坑	埋土下部	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ミガキ	* 内面黒色処理	B I c	平安
323	Ⅱ D3h-1土坑	埋土	坏	<13.7>	-	[4.8]	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	赤焼土器	B II b	平安
324	Ⅱ D3h-1土坑	埋土上部~中部	小型鉢	<7.2>	<4.4>	5.2	口~体:ナデ	ナデ			平安
325	Ⅱ D3h-1土坑	埋土上部~中部	甕	-	-	-	体:ケズリ	体:ナデ	須恵器		平安
326	Ⅱ D3h-2土坑	埋土下部	坏	-	-	[1.8]	体:ロクロナデ 底:回転系切り痕	体~底:ミガキ	内面黒色処理	B I c	平安
327	Ⅱ D3h-2土坑	埋土	壺	-	-	-	肩:ナデ・ケズリ 体:ミガキ 輪積み痕	肩~体:ヨコナデ	胎土に海綿骨針含む・陶器		中世
328	Ⅱ D3h-2土坑	埋土	甕	-	6.7	[4.2]	体部下端:ケズリ・ミガキ 底:ナデ?	体~底:ハケメ?ケズリ?			奈良
330	Ⅱ D4f土坑	埋土下部	坏	-	-	-	体:ロクロナデ後ミガキ	体:ロクロナデ後ミガキ	* 内外面黒色処理	B I d	平安
331	Ⅱ D4h土坑	埋土上部	甕	-	<11.0>	[2.1]	体部下端:ナデ 底:木葉痕	底:ナデ			平安
332	Ⅱ D4h土坑	埋土上部	深鉢	-	-	-	R L横位 地文のみ	ミガキ			縄文中~後期
333	Ⅱ D4j土坑	埋土	甕	-	<8.0>	[3.0]	体部下端:ケズリ後ミガキ 底:ケズリ	体~底:ナデ			平安
334	Ⅱ D5f土坑	埋土下部	甕	-	-	-	体:ナデ・ミガキ	体:ナデ	*		奈良
335	Ⅱ D6f-1土坑	埋土	深鉢	-	-	[18.7]	単軸絡糸体:L	ミガキ			弥生
336	Ⅱ D6f-1土坑	埋土	不明	-	-	-	0段多条R L横位 交互刺突文	ナデ			弥生
337	Ⅱ D6f-1土坑	埋土	不明	-	-	-	隆帯	ナデ			統縄文
338	Ⅱ D6f-1土坑	埋土	不明	-	-	-	重要形文	ナデ			弥生
340	Ⅱ D6f-2土坑	底面	深鉢	-	-	-	L R横位 体部下端~底部:ミガキ	ナデ?	内面煤付着		縄文中~後?
341	Ⅱ D7f-2土坑	埋土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:L 口唇:平縁・角状	ナデ?	胎土に繊維を含む		縄文前期初頭
342	Ⅱ D7f-2土坑	埋土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:L	ミガキ	胎土に繊維を含む		縄文前期初頭
343	Ⅱ D7h-2土坑	埋土	不明	-	-	-	R L横位				弥生
344	Ⅱ D7h-2土坑	埋土	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	体:ロクロナデ	* 須恵器(焼成不良)	C I b	平安
345	Ⅱ D7h-2土坑	埋土中部	甕	-	-	-	体:ミガキ	肩:ナデ	* 胎土に金雲母含む		平安?
346	Ⅱ D8a土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ミガキ	口:ミガキ	* 口唇受け口状・擦文型		奈良
347	Ⅱ D8a土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ヨコナデ	口:ヨコナデ	* 口縁部有段・擦文型		奈良
348	Ⅱ D8b土坑	検出面	甕	-	-	-	体:ロクロナデ	体:ロクロナデ	* 器面磨耗・金雲母含む		平安
349	Ⅱ D8b土坑	埋土中部~下部	甕	-	-	-	口:ヨコナデ	口:ヨコナデ	* 擦文型		奈良
350	Ⅱ D8b土坑	埋土	甕	-	-	-	体:ナデ	体:ナデ	*		平安
352	Ⅱ D8d-1土坑	埋土	坏	-	-	-	体:ロクロナデ 底:ケズリ (再調整) 器面磨耗	体~底:ミガキ	* 内面黒色処理	B I a	平安
353	Ⅱ D8d-1土坑	埋土	甕	-	-	-	体:ナデ・ミガキ	体:ナデ	*		奈良?
354	Ⅱ D8f土坑	埋土	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ミガキ	* 内面黒色処理	B I c	平安
355	Ⅱ D8f土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ヨコナデ 体:ミガキ・ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ			奈良
356	Ⅱ D8f土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ヨコナデ	口:ヨコナデ	* 口唇部角状		奈良
358	Ⅱ D8g土坑	埋土	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ミガキ	* 内面黒色処理	B I c	平安
359	Ⅱ D8g土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ロクロナデ	*		平安

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整/文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
360	ⅡD8g土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ヨコナデ	口:ヨコナデ	*		平安
361	ⅡD8g土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	* 輪積み痕		平安
362	ⅡD8h-1土坑	埋土	甕	-	<11.0>	[13.0]	無文 沈線 隆帯	ナデ	樽型		縄文後期
363	ⅡD8h-1土坑	埋土	深鉢	-	-	-	L R横位 地文のみ	ミガキ			縄文後期?
364	ⅡD8h-1土坑	埋土	深鉢	-	-	-	L R横位 地文のみ 口唇:丸状	ミガキ			縄文後~晩
365	ⅡD8h-2土坑	底面直上	不明	-	<5.5>	[2.2]	単軸絡状体:L 体:縦走 体部下端:斜行	ナデ			弥生
366	ⅡD8h-2土坑	埋土	甕	-	<12.0>	[1.9]	体部下端:ナデ 底:木葉痕	底:ナデ			平安
367	ⅡD8h-2土坑	埋土下部	不明	-	-	-	口唇:絡条体押圧:L	ナデ			弥生
368	ⅡD8h-2土坑	底面直上	深鉢	-	-	-	0段多条RL横位 沈線	ミガキ			縄文後期前葉
369	ⅡD8h-2土坑	埋土	不明	-	-	-	波状口縁 口:ミガキ	口:ミガキ	* 輪積み痕		弥生
370	ⅡD9a-2土坑	埋土	甕	-	-	-	体:ケズリ	体:ナデ	*		平安
372	ⅡD9b-1土坑	埋土	不明	-	-	-	斜行?縄文 原体不明	ミガキ			縄文?弥生?
373	ⅡD9g土坑	埋土	甕	-	-	-	体:ミガキ	体:ナデ	*		奈良?
374	ⅡE0d土坑	埋土上部	不明	-	<6.8>	[2.5]	無文 ミガキ 底部:網代痕	体:ハケメ			縄文?弥生?
375	ⅡE0d土坑	埋土上部	不明	-	-	-	0段多条RL横位	ナデ			弥生?
376	ⅡE0d土坑	底面直上	不明	-	-	-	網目状撚糸文	ナデ			弥生?
377	ⅡE0d土坑	底面直上	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ミガキ	* 内面黒色処理	B I d	平安
378	ⅡE1d土坑	底面直上	甕	<26.0>	-	[9.8]	口:ナデ 体:ケズリ	口:ケズリ 体:ナデ		A II	平安
379	ⅡE1d土坑	底面	坏	13.8	4.8	5.3	口~体:ロクロナデ 底:回転系切り痕	体~底:ミガキ	内面黒色処理	B I a	平安
380	ⅡE1d土坑	底面直上	甕	-	-	-	体:ナデ	体:ナデ	*		平安
381	ⅡE1d土坑	埋土	甕	-	-	-	体:ケズリ	体:ナデ	*		平安
382A	ⅡE1d土坑	埋土上部	深鉢	-	-	-	RL横位 沈線	ミガキ	368と同一個体		縄文後期前葉
382B	ⅡE1d土坑	埋土上部	深鉢	-	-	-	RL横位 沈線 磨消縄文	ミガキ	368と同一個体		縄文後期前葉
383	ⅡE1d土坑	底面直上	不明	-	-	-	網目状撚糸文	ナデ	376に酷似		弥生?
384	ⅡE4a土坑	埋土中部	深鉢	-	-	-	L R横位 地文のみ	ミガキ			縄文後期?
385	ⅡE4a土坑	埋土下部	深鉢	-	-	-	L R縦位 地文のみ	ナデ			縄文後期?
386	ⅡE4a土坑	埋土中部	深鉢	-	-	-	口唇:原体押圧(LR)	ナデ			縄文?弥生?
388	ⅡE5a土坑	埋土	坏	-	-	-	体部下端:ロクロナデ 底:回転系切り痕?	体部下端:ロクロナデ	須恵器(焼成不良)	C I b	平安
389	ⅡE5a土坑	埋土上部	甕	-	-	-	体:ナデ	体:ナデ			平安
391	ⅢC5e土坑	4層	不明	-	-	-	L R縦位 地文のみ	ミガキ			弥生
392	ⅢD0b土坑	埋土	甕?	-	-	-	頸:ロクロナデ	頸:ロクロナデ	*		平安
393	5号掘立柱建物跡	P P481埋土	坏	-	-	-	体:ケズリ後ミガキ	体~底:ミガキ	* 内面黒色処理	A I a	奈良
394	ⅢD0c-1土坑	埋土	甕	-	-	-	体:ナデ	体:ナデ	* 器面磨耗		平安
395	ⅢD0f-1土坑	埋土	深鉢	-	-	-	単軸絡状体:L	ミガキ	胎土に繊維を含む		縄文前期初頭
396	ⅢD0f-1土坑	埋土上部	不明	-	-	-	RL斜位	ナデ			弥生
397	ⅢD0f-1土坑	埋土	高台付皿?	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	* 赤焼土器		平安
401	ⅢD0g土坑	埋土	甕	-	-	-	体部下端:ケズリ	体:ナデ			平安
402	ⅢD0g土坑	埋土	不明	-	-	-	口唇:角状・縄文施文	ミガキ			弥生
403	ⅢD0g土坑	埋土	不明	-	-	-	単軸絡状体:L	ミガキ	*		弥生
404	ⅢD1d-1土坑	埋土	不明	-	-	-	単軸絡状体:L	ミガキ			弥生
405	ⅢD1d-1土坑	埋土	不明	-	-	-	沈線	ミガキ			弥生
406	ⅢD1e-1土坑	埋土	甕	-	-	-	口~体:ロクロナデ	口~体:ロクロナデ	*		平安
407	ⅢD1e-1.2土坑	埋土	坏	-	-	-	口:ロクロナデ	口:ミガキ	* 内面黒色処理	B I c	平安
408	ⅢD1e-1.2土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ヨコナデ	口:ヨコナデ	*		平安
409	ⅢD1e-1.2土坑	埋土	甕	-	-	-	口:ヨコナデ	口:ヨコナデ	*		平安
410	ⅢD1f土坑	埋土上部	甕	<19.8>	-	[7.2]	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安
411	ⅢD2e-1土坑	埋土	高台付坏	-	4.2	[1.1]	台:ロクロナデ・ミガキ	台:ミガキ	内外面黒色処理		平安
412	ⅢD2e-1土坑	埋土	坏	<13.5>	<5.6>	4.3	口~体:ナデ	口~体:ナデ・ミガキ		A II c	奈良?
413	ⅢD2e-1土坑	埋土	甕	-	-	-	体:ハケメ・ミガキ?	体:ナデ	* 器面磨耗 陶器		中世
414	ⅢD2e-1土坑	埋土	甕	<16.4>	-	[8.9]	口:ヨコナデ 体:ケズリ後ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ		A II	平安

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整/文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
415A	ⅢD2e-2土坑	底面	深鉢か鉢	-	-	-	隆帯 沈線 ミガキ	ミガキ			縄文後期初頭
415B	ⅢD2e-2土坑	底面	深鉢か鉢	-	-	-	隆帯 沈線 ミガキ	ミガキ			縄文後期初頭
416	ⅢD3b土坑	埋土	甕形土器	-	6.1	[1.5]	無文 ミガキ	ミガキ			縄文後期?
417	ⅢD3b土坑	埋土	不明	-	-	-	沈線	ミガキ			縄文後期初頭
418	ⅢD3b土坑	埋土	不明	-	-	-	沈線 ミガキ	ミガキ			縄文後期初頭
419	ⅢD3b土坑	埋土	不明	-	-	-	沈線 隆帯 ミガキ	ミガキ			縄文後期初頭
420	ⅡD6g石罏炉	埋土	不明	-	-	-	単軸絡糸体:L 地文のみ		胎土に砂含む		縄中後~後前
421	ⅡD6g石罏炉	埋土	不明	-	-	-	単軸絡糸体:L 地文のみ	ミガキ	420と同一個体		縄中後~後前
422	ⅡD6g石罏炉	埋土	不明	-	-	-	単軸絡糸体:L	ミガキ	胎土に砂含む		縄文
423	ⅡC5h焼土	埋土	不明	-	-	-	L R斜位? 地文のみ	ミガキ			縄文
424	ⅡC5h焼土	埋土	不明	-	-	-	網目状燃糸文	体:ミガキ	*		縄文
425	ⅢD2d-1焼土	埋土	鉢?	-	<6.8>	[3.4]	0段多糸LR横位	ミガキ			縄文晩~弥生
426	ⅢD2d-1焼土	埋土	甕	<10.8>	-	[3.6]	口:ヨコナデ・ミガキ 体:ナデ	口~体:ナデ			平安
427	ⅢD2d-1焼土	埋土	甕	-	<10.8>	[5.0]	体:ケズリ	体:ケズリ・ナデ・ミガキ			平安
428	ⅡD-16住	埋土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:L 口:燃糸原体押圧	ナデ	胎土に繊維を含む		縄文前期初頭
429	ⅡD-7住	埋土下部~床直	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:L 口唇:角状気味 穿孔	ナデ	胎土に繊維を含む		縄文前期初頭
430	南斜面下段東	表土	深鉢	-	-	-	不整燃糸文	ナデ	胎土に砂・繊維を含む		縄文前期前葉
431	南斜面中段T1東	表土	深鉢	-	-	-	不整燃糸文	ナデ	胎土に砂・繊維を含む		縄文前期前葉
432	南斜面下段東	表土	深鉢	-	-	-	不整燃糸文 隆沈線	ナデ	胎土に砂・繊維を含む		縄文前期前葉
433	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	0段多糸LR横位 器面磨耗		胎土に繊維を含む		縄文前期前葉
434	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	不整燃糸文 口:外反		胎土に砂・繊維を含む		縄文前期前葉
435	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:R	ミガキ?	胎土に繊維を含む		縄文前期
436	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:R 器面磨耗		胎土に繊維を含む		縄文前期
437	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	R L縦位		胎土に繊維を含む		縄文前期
438	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:R 平底	ナデ	胎土に繊維を含む		縄文前期
439	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:R	ナデ	胎土に繊維を含む		縄文前期
440	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:R 木目状燃糸文	ナデ	胎土に繊維少量含む		縄文前期
441	ⅡD8g土坑	埋土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体 縦走	ナデ(丁寧)			弥生
442	ⅡD-16住	埋土	甕か壺	-	-	-	単軸絡糸体:L 体:縦走 体部下端:斜行	ナデ(丁寧)			弥生
443	ⅡD8b土坑	埋土上部	深鉢	-	-	-	0段多糸LR横位	ミガキ			縄文中~後期
444	ⅡD-16住	埋土上部	深鉢	-	-	-	貝殻糸痕文 爪形文	糸痕			縄文早期
445	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	0段多糸 LR縦位 地文のみ	ミガキ	胎土に繊維少量含む		縄文前期
446	ⅡC5h・i区	表土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体:L 口:燃糸原体押圧	ナデ	胎土に繊維を含む		縄文前期初頭
447	ⅡC-3住	Ⅱ層	深鉢	-	-	-	L R横位 地文のみ 口唇:内傾・若干肥厚	ミガキ			縄文後期
448	南斜面中段T1・2間	表土	不明	-	-	-	単軸絡糸体:r 赤色塗彩	ナデ			弥生
449	南斜面T1下段	黒色土	不明	-	-	-	0段多糸LR横位	ナデ			弥生
450	ⅡD-1住	埋土下部~床直	壺?	-	-	-	無文 沈線	ミガキ			縄文後期
451	南斜面中段T1・2間	表土	深鉢	-	-	-	単軸絡糸体 網目状燃糸文	ナデ			縄文後期初頭
452	南斜面下段東	表土	不明	-	-	-	R L横位	ナデ			縄文後期初頭
453	南斜面T1下段	黒色土	深鉢	-	-	-	原体不明 沈線による区画 磨消縄文	ナデ			弥生
454	ⅡC-3住	埋土下部	不明	-	-	-	平行沈線	ミガキ			縄文晩期
455	南斜面T1下段	黒色土	壺?	-	-	-	0段多糸R L横位 地文のみ 口唇:丸み	ミガキ			弥生
456	ⅡC5i区	Ⅱ層	不明	-	-	-	L R 沈線 磨消縄文	ナデ			弥生
457	ⅡC7・8d区	表土	深鉢	-	-	-	L R横位 磨消縄文 入組み文 富士山形波状口縁	ナデ			縄後末~晩初
458	南斜面中段T1東	表土	深鉢	-	-	-	L R横位	ナデ	胎土に繊維・海綿骨針含む		縄文前期
459	ⅡE1a区	Ⅱ層	鉢	-	-	-	L R横位 羊歯状文 平行沈線	ミガキ			縄文晩期
460	ⅡD8g土坑	埋土	不明	-	-	-	原体不明 沈線 磨消縄文	ナデ			縄文後期
461	ⅡD-8住	西カマド	鉢	-	-	-	L R横位				縄文晩期
462	ⅡD-5住	埋土	深鉢	-	-	-	R L横位	ナデ			弥生
463	ⅡD-12住	埋土	深鉢	-	-	-	R L横位	ナデ			弥生

図No	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	外面調整/文様の特徴等	内面調整	備考	分類	時期
464	ⅡD-10住	埋土上部	不明	-	-	-	口唇に平行する二条の沈線	沈線 ナデ			弥生
465	不明	不明	不明	-	-	-	沈線	ナデ			弥生
466	平坦部東側中央	表土	不明	-	-	-	R L横位 口唇部に施文	ナデ			弥生
467	ⅢD-1住	埋土	不明	-	-	-	R L横位	ナデ			弥生
468	ⅡD6 i 区	V層	不明	-	-	-	R L横位	ナデ			弥生
469	ⅡD-16住	埋土最上部	不明	-	-	-	交互刺突文 沈線区画 波状文	ミガキ			弥生
470	ⅡD8 g 土坑	埋土	不明	-	-	-	交互刺突文 沈線	ナデ			弥生
471	ⅡD-15住	埋土	不明	-	-	-	網目状撫系文				縄文後期初頭
472	ⅢD-1住	埋土	不明	-	-	-	単軸絡状体：L	ミガキ			弥生
473	平坦部北東側	表土	不明	-	-	-	R 沈線	ナデ			弥生
474	ⅡD8 e 区	Ⅳ層上面	不明	-	-	-	沈線 赤色塗彩	ナデ			弥生
475	ⅢD-1住	埋土	不明	-	-	-	単軸絡状体：L 赤色塗彩 沈線				弥生
476	平坦部北東側	表土	不明	-	-	-	沈線				弥生
477	ⅢD-1住	埋土	坏	<13.8>	<5.8>	4.8	口~体：ロクロナデ 底：回転系切り痕	口~底：ミガキ	内面黒色処理	B I c	平安
478	平坦部北側中央	表土	坏	-	5.0	[3.7]	体：ロクロナデ・ミガキ 底：回転系切り痕	体~底：ミガキ	内面黒色処理	B I c	平安
479	ⅡC5 h 区	表土	甕	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ナデ	口：ヨコナデ 体：ナデ		A Ⅲ	平安
480	平坦部北側中央	表土	甕	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ケズリ	口：ヨコナデ 体：ナデ		A Ⅱ	平安
481	平坦部南東	表土	甕	-	-	-	口~体：ロクロナデ	口~体：ロクロナデ		B I	平安
482	平坦部東側中央	表土	不明	-	-	-	隆帯		北海道式土師器		縄文
483	ⅡD3・4 g 区	表土	高台付皿	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器		平安
484	ⅡD3 g 区	表土	坏	<10.9>	-	[3.3]	口~体：ロクロナデ	口~体：ロクロナデ	赤焼土器	B Ⅱ b	平安
485	平坦部東側中央	表土	坏	-	-	-	体部下端：ロクロナデ 底：ケズリ	体~底：ロクロナデ	須恵器	C I a	平安
486	ⅡC5 h 区	表土	甕	-	-	-	頸：ロクロナデ	頸：ロクロナデ	須恵器		平安
487	ⅡD8 e 区	表土	把手付鉢	-	-	-	把手部：ナデ・ミガキ・ケズリ	鉢部：ナデ	把手部 鉢部若干残存		平安
488	ⅡD-16住	埋土上部	把手付鉢	-	-	-	把手、鉢部：ナデ・ミガキ・ケズリ		把手部 488と同一個体?		平安

土製品観察表

長さ・幅・厚さ：単位cm

図No	出土地点	層位	種別	長さ	幅	厚さ	備考
74	ⅡD-16住	床面	紡錘車	5.5	5.5	2.3	
221	ⅡD-9住	P1埋土	鞆の羽口	7.2	6.1	2.6	
390	ⅡE5a土坑	埋土	飾り玉	3.9	1.2	1.6	勾玉
489	ⅡC5h区	表土	土玉	2.0	1.5	0.5	おはじき形
490	ⅡC5h区	表土	飾り玉	2.1	0.6	0.6	勾玉
491	ⅡD-16住	埋土上部	不明	5.4	1.4	0.8	管状
492A	ⅡD-16住	埋土最上部	垂飾品	3.9	2.2	1.1	縄文前期?
492B	ⅡD-16住	埋土最上部	垂飾品	3.3	2.6	1.2	縄文前期?
493	ⅡD8b区	Ⅱ層	垂飾品	4.9	4.1	2.0	縄文前期 動物形
494	平坦部北東側	表土	飾り玉	1.2	1.3	1.2	丸玉
495	平坦部北西側	表土	土玉	1.8	1.9	0.7	おはじき形

陶磁器観察表

口径・底径・器高：単位cm < >：推定値 []：残存値 *：写真のみ掲載

図No	出土地点	層位	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	産地	年代	備考
274	ⅠA-1住	床面	磁器	皿	-	-	-	褐灰色	中国	15C末~16C	龍泉窯産青磁 稜花皿
286	ⅡD-15住	埋土	磁器	皿	-	-	-	白色	中国	16C	白磁
294	ⅢD-1住	PP10埋土	磁器	皿	<12.0>	4.8	3.0	褐灰色	中国	15C末	龍泉窯産青磁
296	3号掘立柱建物跡	PP164埋土	陶器	丸碗	-	-	-	灰色	瀬戸美濃	15C末~16C初	* 大窯Ⅰ期
557	ⅡD7f区	表土	磁器	皿	-	<3.5>	[1.3]	白色・橙色	伊万里		染付
558	ⅢB3j区	Ⅳ層	磁器	皿	-	<5.7>	[1.4]	白色	中国	15C末~16C	白磁
559	ⅡD9b区	不明	陶器	丸碗	-	-	-	灰黄褐色	瀬戸美濃	15C末~16C初	大窯Ⅰ期 連弁文
560	平坦部北東側	表土	陶器	丸碗	-	-	-	灰黄褐色	瀬戸美濃	15C末~16C初	* 大窯Ⅰ期
561	平坦部北東側	表土	磁器	碗	-	-	-	白色	中国	16C	染付
562	ⅡE2a区	不明	磁器	碗	-	-	-	白色	中国	14C	龍泉窯産
563	ⅡD9b区	不明	陶器	丸碗	-	-	-	灰黄褐色	瀬戸美濃	15C末~16C初	* 大窯Ⅰ期
564	ⅡC5h区	Ⅱ層	磁器	不明	-	-	-	白色	中国	16C	* 染付

石器観察表

長さ・幅・厚さ:cm 重量g

図No	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	備考
75	ⅡD-16住居	床面	砥石	12.9	5.4	3.6	247.64	凝灰岩	奥羽山脈	3面使用
76	ⅡD-16住	カマド左床面	砥石?	16.0	6.4	3.5	405.77	珪化木	一戸地域	器面滑らか 1面に縞い窪み
77	ⅡD-16住	床面	敲石?磨石?	14.6	12.4	7.8	2100.15	安山岩	奥羽山脈	器面滑らか 使用痕顕著ではない
78	ⅡD-16住	床面	磨石	10.9	9.7	3.8	522.83	安山岩	奥羽山脈	扁平 片面使用か?
93	ⅡC-2住	床面直上	磨石	10.5	10.2	4.9	905.89	安山岩	奥羽山脈	両面使用?片面顕著 周囲敲打痕
94	ⅡC-2住	床面直上	凹石	8.4	7.2	4.8	369.77	砂岩	北上山地	片面使用?
95	ⅡC-2住	埋土	磨石	8.4	6.4	3.3	234.99	安山岩	奥羽山脈	片面使用
96	ⅡC-2住	埋土	凹石	8.6	6.8	4.5	304.4	安山岩	奥羽山脈	両面使用?片面中央痘痕状
111	ⅡC-3住	カマド構築土	凹石	7.6	6.8	3.9	294.02	砂岩	北上山地	両面使用
222	ⅡD-9住	P1埋土	磨石	6.2	5.7	4.9	220.63	安山岩	奥羽山脈	小型 ほほ全面使用
223	ⅡD-9住	埋土	磨石	5.9	6.1	3.1	96.45	凝灰岩	奥羽山脈	表裏擦痕 側縁敲打痕?
260	ⅡD-17住	貼床土	磨石	5.2	4.5	3.7	51.02	凝灰岩	奥羽山脈	小型 ほほ全面使用
272	ⅠA-1住	埋土	砥石	6.2	3.2	2.3	59.6	リバライト	奥羽山脈	4面使用
279	ⅡD-15住	埋土	砥石	9.6	5.8	4.0	155.3	リバライト	奥羽山脈	5面使用
291	ⅡD-4住	床面直上	砥石	5.6	3.8	1.9	39.01	凝灰岩	奥羽山脈	5面?使用
318	ⅡD3g-2土坑	埋土下部	台石?砥石?	21.4	10.5	6.4	1941.45	安山岩	奥羽山脈	両面使用 片面使用痕顕著 被熱?
322	ⅡD3g-3土坑	埋土下部	磨石	10.9	5.3	3.7	245.12	閃緑岩	北上山地	両面使用 角に敲打痕 破損品
329	ⅡD3h-2土坑	埋土	砥石	8.5	8.1	4.5	149.6	凝灰岩	奥羽山脈	ニヶ所使用
339	ⅡD6f土坑	埋土上部	削器	4.8	2.5	0.6	5.77	頁岩	奥羽山脈	片面 縞い凹刃+凸刃
351	ⅡD8b土坑	検出面	磨石・凹石	9.0	8.1	3.8	416.79	砂岩	北上山地	周縁使用痕顕著 煤?付着
387	ⅡE4a土坑	埋土中部	石錘	6.5	9.9	2.5	252.73	閃緑岩	北上山地	側面加工
398	ⅢD0f-1土坑	埋土上部	石篋	2.7	3.7	1.4	14.97	頁岩	奥羽山脈	刃部のみ残存?
399	ⅢD0f-1土坑	埋土上部	楔形石器	3.7	3.6	1.0	10.37	頁岩	奥羽山脈	
400	ⅢD0f-1土坑	埋土	磨石	12.4	9.3	4.5	866.34	花崗閃緑岩	北上山地	片面使用
496	ⅢD1c区	Ⅳ層	石錘?	3.4	1.1	0.5	3.83	頁岩	奥羽山脈	両面 棒状 頭部破損?
497	平坦部北東側	表土	石匙	6.5	2.7	0.8	16.76	頁岩	奥羽山脈	縦型
498	ⅡD6i区	Ⅴ層	石匙	5.0	2.3	0.8	9.24	頁岩	奥羽山脈	縦型 片面使用?
499	ⅡD-17住	貼床土	石匙	3.4	2.8	0.4	5.36	頁岩	奥羽山脈	縦型 端部欠損
500	ⅡD8b・c区	Ⅱ層	石匙	4.8	2.5	0.4	6.0	頁岩	奥羽山脈	縦型片面浅く小さい加工端部欠損
501	ⅡC5j区	Ⅱ層	石篋	9.0	3.9	1.3	58.4	頁岩	奥羽山脈	両面からの幾分浅い加工
502	ⅡD-17住	貼床土	尖頭器	8.4	3.0	1.1	31.89	頁岩	北上山地	細かい剥離加工 再利用品か?
503	平坦部中央	表土	石篋	7.4	3.4	1.3	48.22	頁岩	北上山地	刃部片面加工
504	ⅡD-16住	埋土上部	尖頭器	6.9	3.2	0.9	24.31	頁岩	北上山地	基部?破損?
505	ⅡC5h区	表土	不定形石器	4.7	3.7	0.8	19.66	赤色頁岩	北上山地	片面調整・使用 縞い凹刃
506	ⅡD8b・c区	Ⅱ層	石匙	4.0	1.5	0.5	5.01	頁岩	奥羽山脈	
507	平坦部中央	表土	石匙	3.1	1.7	1.0	5.85	頁岩	奥羽山脈	破損品
508	ⅡD-15住	埋土	石匙	5.2	2.4	0.6	10.05	頁岩	奥羽山脈	
509	ⅡD3h区	表土	長方硯	5.4	1.2	0.75	4.92	スレート	北上山地	縁部のみ残存
510	ⅡD-15・16住付近	不明	砥石	5.4	3.0	2.6	57.87	ホルンフェルス	北上山地	3面使用
511	平坦部	表土	磨石?	13.7	7.3	5.2	669.42	砂岩	北上山地	角に使用痕 敲打痕に似る 破損品

石製品観察表

長さ・幅・厚さ:cm 重量g * :写真のみ

図No	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	備考
13	ⅡC-1住	埋土	不明	1.7	1.4	0.5	2.0	玉髓	北上山地	
280	ⅡD-15住	埋土	原石	-	-	-	0.29	硫黄	不明	* 第四紀火山に関係
297	2号掘立柱建物跡	PP210埋土下部	原石	-	-	-	11.84	琥珀	久慈地区	*
512	ⅡD6i区	Ⅳ~Ⅴ層	勾玉	4.5	3.7	1.5	33.33	翡翠	糸魚川周辺	
513	ⅡC5h・i区	表土	円盤形石製品	4.4	4.7	0.9	21.92	頁岩	北上山地	両面加工
514	ⅡC5h・i区	表土	円盤形石製品	2.9	2.9	0.6	5.52	頁岩	北上山地	一部両面加工
515	ⅡC5h・i区	表土	円盤形石製品	3.5	2.3	0.3	2.98	頁岩	奥羽山脈	小孔二つ有り
516	ⅡC5h区	Ⅱ層	円盤形石製品	3.6	3.7	1.1	16.01	頁岩	北上山地	一部両面加工
517	ⅡD7h区	Ⅴ層	円盤形石製品	4.1	3.9	0.8	17.32	頁岩	北上山地	両面加工? 一部研磨
518	ⅡD7i区	表土	円盤形石製品	3.4	3.4	0.7	10.6	頁岩	北上山地	両面加工
519	ⅡD8j区	表土	円盤形石製品	2.9	2.8	0.4	4.22	頁岩	北上山地	両面加工
520	ⅡD9f区	Ⅳ層	円盤形石製品	4.5	4.5	0.9	17.42	頁岩	北上山地	両面?加工
521	ⅡD9h区	Ⅴ層	円盤形石製品	3.8	3.7	0.8	12.17	頁岩	北上山地	両面加工
522	ⅡE1d土坑	底面	円盤形石製品?	3.2	3.3	0.8	11.75	頁岩	北上山地	ほとんど無加工?磨耗
523	平坦部中央	表土	円盤形石製品	3.8	3.5	0.8	13.76	頁岩	北上山地	両面加工 アスファルト?付着
524	平坦部北東側	表土	円盤形石製品	3.5	3.2	0.7	8.15	頁岩	奥羽山脈	両面?加工
525	平坦部東側中央	表土	円盤形石製品	3.8	3.8	0.8	15.3	頁岩	北上山地	両面加工

図No	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	備考
526	平坦部北西側	表土	円盤形石製品	3.6	3.7	0.7	9.48	頁岩	北上山地	両面加工
527	平坦部北西側	表土	円盤形石製品	3.9	3.8	0.7	12.85	頁岩	北上山地	両面加工
528	平坦部北東側	表土	円盤形石製品	2.8	2.7	0.4	2.91	頁岩	北上山地	一部両面加工
529	平坦部北東側	表土	円盤形石製品	2.7	2.5	0.5	3.63	頁岩	北上山地	一部両面加工
530	平坦部北東側	表土	円盤形石製品	3.4	3.7	0.6	10.75	頁岩	北上山地	一部両面加工
531	南斜面中段T1・2間	表土	円盤形石製品	2.9	2.7	0.6	5.89	頁岩	北上山地	一部両面加工

金属製品観察表 長さ・幅・厚さ：cm

図N	出土地点	層位	種別	長さ	幅	厚さ	備考
45	ⅡD-1住	埋土上部	棒状	5.6	1.1	0.6	丸釘
46	ⅡD-1住	床面	刀子	1.2	3.7	0.5	
79	ⅡD-16住	埋土	不明	4.4	3.8	0.6	鋳造品 亀甲割れ
80	ⅡD-16住	埋土	丸棒状	5.0	0.5	4.5	
81	ⅡD-16住	埋土	丸棒状	5.2	0.6	4.5	
82	ⅡD-16住	埋土上部	角棒・釘状	3.6	0.6	0.4	
147	ⅡD-3住	床面	刀子	7.3	1.0	0.3	
157	ⅡD-5住	床面直上	刀子	10.6	1.2	0.4	
169	ⅡD-7住	P1埋土中部	刀子	3.0	1.2	0.3	
189	ⅡD-8住	床面直上	刀	19.2	2.9	0.5	
224	ⅡD-9住	ベルト	刀子?	3.6	1.0	0.5	
225	ⅡD-9住	埋土	鋸	4.4	2.4	0.2	先端部
240	ⅡD-10住	埋土上部	管状	3.0	1.0	0.9	
271	ⅢD-2住	不明	丸棒状	3.8	0.5	0.4	釘?
273	ⅠA-1住	床面直上	刀子	17.9	1.5	0.4	
277	ⅡD-1b住	床面	火打金	3.7	7.6	0.5	
278	ⅡD-1b住	埋土	鎧	18.4	6.4	0.3	胸板?
281	ⅡD-15住	床面	鎧	7.0	2.1	0.3	小札
282	ⅡD-15住	埋土	鍋	3.6	2.4	0.7	
283	ⅡD-15住	埋土	刀子	22.0	1.6	0.6	
284	ⅡD-15住	礫下埋土	刀子	6.1	1.4	0.5	
285	ⅡD-15住	礫下埋土	刀子	10	1.6	0.5	
292	ⅡD-4住	床面直上	鍋?	2.9	1.7	0.3	鋳造品 亀甲割れ
357	ⅡD8f土坑	埋土	刀子	5.5	1.1	0.4	
371	ⅡD9a-2土坑	埋土	刀子?	3.6	1.7	0.7	
533	ⅡD4e区	表土	角棒・釘状	7.2	1.0	0.5	
534	ⅡD5h区	表土	鍋	4.0	2.3	0.5	鋳造品 亀甲割れ
535	ⅡD5h区	表土	不明	2.6	1.1	1.1	
536	ⅡD6g区	表土	不明	3.0	0.9	0.7	
537	ⅡD7a区	表土	鍋	4.6	2.4	0.5	
538	ⅡD9c区	不明	環状	2.9	2.0	0.7	
539A	ⅡD9f区	表土	環状	-	-	-	
539A	ⅡD9f区	表土	環状	-	-	-	
540	ⅡD9g区	表土	不明	6.0	2.2	0.3	
541	ⅢD0g区	表土	角棒・釘状	5.6	1.0	0.7	
542	北斜面上段(帯曲輪1)	表土下	環状	-	-	-	
543	北斜面上段(帯曲輪1)	表土下	板状	2.9	4.5	0.5	鍛造品
544	不明	不明	溶鉄	4.8	1.7	1.1	
545	平坦部中央	表土	丸棒状	6.9	1.4	0.4	針金?
546	平坦部北東側	表土	角棒・釘状	3.8	1.7	1.0	
547	平坦部北東側	表土	板状	3.0	1.3	0.3	
548	平坦部北東側	表土	丸棒状	5.3	0.5	0.4	丸釘
549	平坦部東側中央	表土	鎧	6.2	1.9	0.3	小札?
550	平坦部北東側	表土	角棒・釘状	9.1	0.9	0.6	
551	平坦部北東側	表土	蓋	4.3	2.9	0.5	鉄瓶の蓋
552	平坦部北東側	表土	角棒・釘状	6.0	0.6	0.5	
553	平坦部北東側	表土	板状	4.8	2.1	0.3	
554	平坦部東側中央	表土	板状	3.6	3.5	0.4	鍛造品
555	平坦部東側中央	表土	不明	3.1	2.6	1.1	
556	平坦部東側中央	表土	角棒・釘状	7.6	2.1	0.6	

錢貨觀察表

徑:cm 重量:g []:殘存值

図No	出土地点	層位	錢銘	徑	重量	初鑄年	備考
275	I A-1住	検出面	不明	2.25	1.94		模鑄錢
293	II D-13住	検出面	永樂通寶	2.4	2.31	1408年	正錢
287	II D-15住	埋土	不明	[2.45]	[2.32]		模鑄錢
288	II D-15住	床面	無文	2.15	2.25		模鑄錢
289	II D-15住	床面	無文	1.95	1.19		模鑄錢
290	II D-15住	集石底面	無文	[2.30]	[2.15]		模鑄錢
295	II D 9 b区	P P 159底面	不明	[2.30]	[2.15]		模鑄錢
565	II D 8 a区	不明	嘉祐通寶	2.5	3.15	1056年(嘉祐元年)	模鑄錢
566	II D 9 b区	不明	無文	2.3	2.0		模鑄錢
567	II D 9 b区	不明	淳化元寶	2.4	3.01	990年(淳化元年)	模鑄錢
568	II D 9 c区	不明	大觀通寶	2.4	2.46	1107年(大觀元年)	模鑄錢
569	II D 9 c区	不明	無文	2.2	1.88		模鑄錢
570	平坦部東側中央	表土	寬永通寶	2.4	2.91		古寬永
571	平坦部北側	表土	皇宗通寶	2.25	1.82	1038(寶元元年)	模鑄錢
572	北斜面上段(帶曲輪1)	表土下	寬永通寶	[2.25]	[1.58]		新寬永
573	北斜面中段(帶曲輪2)	表土下	寬永通寶	2.25	2.96		鉄製

V. まとめ

1. 遺構

(1) 竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は合計31棟である。時期別にみると、縄文時代1棟、奈良時代が3棟、平安時代が16棟、中世が7棟、時期不明のものが4棟である。奈良時代の竪穴住居跡は、方形あるいは隅丸方形を呈し、北西壁中央にカマドを有する。出土した土器の形態から8世紀後半に属すると考えられる。平安時代の竪穴住居跡16棟のうち、カマドの位置を確認できたものは11棟である。11棟のうち、北西壁にカマドを有するもの3棟、北東壁にカマドを有するもの3棟、南西壁にカマドを有するもの1棟、南東壁にカマドを有するもの3棟、北西・南西・南東の3方向にカマドを有するもの1棟である。カマドの位置の時期的な変遷については、十分に検討することができず、明らかにできなかった。中世の竪穴住居跡7棟のうち、I A区で検出された2棟は一部のみ調査のため詳細は不明であるが、平坦部で検出された5棟のうち3棟は、一辺が3.3～3.7mの隅丸方形を呈し、四周に柱穴が巡る形態を持つ。残りの2棟はいずれも長軸が2m程度の長方形を呈する小規模な建物跡である。

(2) 掘立柱建物跡

調査区中央平坦部で8棟検出されている。1～3号掘立柱建物跡はほぼ同一地点で重複しており、柱穴の截り合い関係から判断すると、1号が最も旧く、3号が最も新しいと考えられる。4号掘立柱建物跡は2号あるいは3号掘立柱建物跡に付随するものと予想される。5号掘立柱建物跡は出土した遺物から奈良あるいは平安時代に属するものと思われる。6～8号掘立柱建物跡の詳細は不明である。

(3) 土坑類

合計84基の土坑が検出されている。そのうち1基は墓墳である。時代別にみると、縄文時代に属するもの8基、縄文あるいは弥生時代に属する可能性のあるもの1基、弥生時代に属する可能性のあるもの2基、古墳時代に属する可能性のあるもの1基、奈良時代に属する可能性のあるもの1基、奈良～平安時代に属する可能性のあるもの2基、平安時代に属する可能性のあるもの29基、中世に属する可能性のあるもの2基、時期を特定できないもの37基である。1基の墓墳は中世～近世に属すると思われる。

(4) その他

石囲炉が2基、焼土遺構が7基検出されている。石囲炉の1基は出土遺物がなく詳細は不明であるが、1基は出土遺物の特徴から縄文中期後半～後期前半に位置付けられる。7基の焼土遺構中、時期を特定できるものは4基で、1基は縄文、3基は平安時代に属する遺構と考えられる。

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物には、土器、土製品、陶磁器、石器、石製品、金属製品、銭貨、炭化種子等がある。これらのうち、土器について整理し、まとめとしたい。

(1) 縄文時代

そのほとんどが遺構外からの出土で、小破片が多く、器種・器形・時期を判別し難いものが多く、推測の域をでないが、早期～晩期の土器が出土している。奈良時代の遺構の埋土からの出土であるが、貝殻条痕文と擬似爪形文を付す体部小破片が1点出土しており、早期中葉に位置付けられる。調査区南側の斜面下方に堆積する沖積土層から、胎土に繊維を含み、全体に厚手の土器片が比較的多く出土している。その中に口頸部に横走る不整燃糸文を有する円筒深鉢の口縁部片が4点存在する。大木2b式や円筒下層a式に比定され、前期前葉に位置付けられる。ⅡC-1 竪穴住居跡埋土からの出土であるが、縦位に結節回転文が施文され、口縁部が平縁で若干内傾し、胴部上半に膨らみを持ち、底部付近がやや窄まると推測される粗製深鉢の口縁部と胴部片が出土している。中期末葉に位置付けられると思われる。ⅡD8h-1 土坑の埋土とⅡD2e-2 土坑の底面からは、沈線と隆帯によって文様を構成する壺形土器及び土器片が出土している。十腰内I式に比定されると思われ、後期前葉に位置付けられる。ⅡC-1 竪穴住居跡の埋土から口頸部に2条、胴部下端1条の平行沈線文を持ち、口唇部にB突起と刻みを有する深鉢のミニチュアと口唇部が内削ぎで、若干肥厚し、口縁部が内傾する深鉢が出土している。大洞C式に比定され、晩期中葉に位置付けられる。

(2) 弥生時代

ⅡD6f-1 土坑出土の335以外は、小破片で器種を特定できるものは少ない。器壁が薄く、細い数条の沈線文、交互刺突文、不整燃糸文を有するものを弥生土器としてとらえた。335は、甕形土器で頸部～胴部下端にかけて燃糸文のみを有する。小破片では、交互刺突文を有する336、重菱形沈線を有する338があり、本遺跡のB地点でも同様の土器片が出土している。交互刺突文が簡略化していることや体部の燃糸文の状況から天王山式土器に後続すると言われる、弥生時代の終末期の赤穴式土器に位置付けられる。

(3) 奈良・平安時代

土師器・須恵器が今回の調査で出土した土器の主体をなしている。二戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Iで高田和徳氏が行った分類を参考にし、坏と土師器甕にしぼって分類を試みた。分類の基準を以下に記す。

<坏> A類 ロクロを使用しないもの

I 黒色処理するもの

- a 体部丸みをもって外傾・底部丸底 b 体部外傾・底部丸底
- c 体部外傾・底部丸底に近い平底

II 黒色処理しないもの

- a 体部丸みをもって外傾・底部丸底 b 体部丸みをもって外傾・底部丸底
- c 底部平底 d 体部丸みをもって外傾・底部平底に近い丸底

B類 ロクロを使用するもの

I 黒色処理するもの

- a 再調整有・内面ヘラミガキ b 再調整有・内外面ヘラミガキ
c 再調整無・内面ヘラミガキ d 再調整無・内外面ヘラミガキ

II 黒色処理しないもの

- a 再調整のあるもの b 再調整のないもの

C類 ロクロを使用し、還元炎焼成されているもの（須恵器）

- I 再調整のあるもの II 再調整のないもの

<甕> A類 ロクロを使用しないもの

- I 口縁部長く外反・体部外面ヘラミガキ II 口縁部短く屈曲・体部外面ヘラナデ・ヘラケズリ
III 口縁部短くほぼ直立・体部外面ヘラナデ・ヘラケズリ

B類 ロクロを使用するもの

- I 口縁部が受け口状のもの II 口縁部短く屈曲するもの
III 口縁部短くほぼ直立するもの

基本的に、坏は、A類を8世紀、B I・B II a・C類を9～10世紀、B II b類を10世紀の遺物として捉え、甕はA I類を8世紀、A II・A III・B類を9～10世紀の遺物としてとらえた。

<参考・引用文献>

- (1) 高田和徳（1981）；一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I。一戸町教育委員会。
- (2) 高田和徳（1983）；一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書IV。一戸町教育委員会。
- (3) 高田和徳（1984）；上野遺跡 一戸町文化財報告書第7集。一戸町教育委員会。
- (4) 高田和徳（1985）；上野遺跡 一戸町文化財報告書第13集。一戸町教育委員会。
- (5) 高田和徳（1987）；上野遺跡・一戸城 一戸町文化財報告書第18集。一戸町教育委員会。
- (6) 高田和徳（1988）；上野遺跡 一戸町文化財報告書第20集。一戸町教育委員会。
- (7) 中村良幸（1979）；立石遺跡 大迫町埋蔵文化財報告書第3集。大迫町教育委員会。
- (8) 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正（1982）；「岩手の土器」. 岩手県博物館。

VI. 分析・鑑定

1. 岩手県上野遺跡出土火山灰の分析鑑定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

岩手県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、岩手県、秋田駒ヶ岳火山、十和田火山など東北地方北部に分布する火山のほか、遠く北海道、中部、中国、九州、さらには、中国北朝鮮国境などに位置する火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる（たとえば、早田・八木、1991など）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、遺跡発掘調査の際に認められたテフラについて、発掘調査担当者により採取された試料を対象に火山ガラス比分析、重鉍物組成分析（以上を合わせてテフラ組成分析と呼ぶ）、屈折率測定を行って、示標テフラとの同定を行うことになった。

2. 分析試料

テフラ分析の対象となった試料は、一戸町上野遺跡において発掘調査担当者により採取された試料である。

3. 分析・測定方法

(1) テフラ組成分析（火山ガラス比・重鉍物組成分析）

テフラ組成分析の手順は、次の通りである。

- 1) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 2) 80℃で恒温乾燥。
- 3) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 4) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別組成を求める（火山ガラス比分析）。
- 5) 偏光顕微鏡下で重鉍物250粒子を観察し、重鉍物組成を求める（重鉍物組成分析）。

(2) 屈折率測定

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）による。

4. 分析結果

II C 5 i 土坑埋土から採取された試料のテフラ組成ダイアグラムを図1に、火山ガラス分析と重鉍物組成分析の結果を表1及び表2に示す。試料に含まれる火山ガラスの割合は14.8%で、量の多い順に、軽石型（繊維束状、スポンジ状：11.2%）、バブル型（平板状：2.8%）、中間型（0.8%）である。色調としては、無色透明や白色の火山ガラスが認められる。重鉍物としては、両の多い順に磁鉄鉍（37.6%）、斜方輝石（35.2%）、単斜輝石（26.4%）などが含まれている。

屈折率測定の結果を表3に示す。試料に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.502-1.521と1.706-1.709である。以上のことから、この試料にはT o - aのほかに、800~900年前（放射性

炭素〔¹⁴C〕年代)に中国と北朝鮮の国境の白頭山から噴出した白頭山苦小牧火山灰(B-Tm, 町田ほか, 1981, 1992)に由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。

表1 上野遺跡における火山ガラス比分析結果

試料採取地点	b w	m d	p m	その他	合計
ⅡC5i土坑	7	2	28	213	250

数字は粒子数。bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型。

表2 上野遺跡における重鉱物組成分析結果

試料採取地点	o l	o p x	c p x	h o	b i	m t	その他	合計
ⅡC5i土坑	0	88	66	0	0	94	2	250

数字は粒子数。ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石

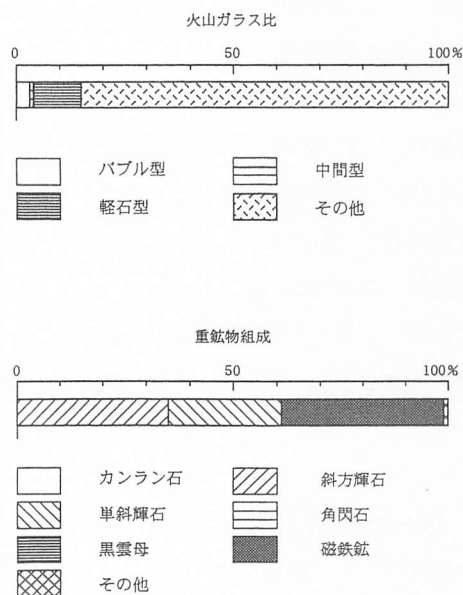
ho:角閃石, bi:黒雲母, mt:磁鉄鉱。

表3 上野遺跡における屈折率測定結果

試料採取地点	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)
ⅡC5i土坑	1.502-1.521	1.706-1.709

屈折率測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。

図1 上野遺跡におけるテフラ組成ダイヤグラム



5. まとめ

岩手県上野遺跡の発掘調査において認められたテフラ試料について、火山ガラス比分析、重鉱物組成分析(以上、テフラ組成分析)と屈折率測定を行った。その結果、十和田a火山灰(T-o-a, 915AD)のほか、白頭山苦小牧火山灰(B-Tm, 800~900年前:注1)に由来する可能性の高いテフラ粒子が検出された。なお、テフラが一次堆積層として認められたか否かについては、現地において土層断面を観察できなかったことから言及できない。

注1: B-Tmの噴出年代については、923-924年(町田・福沢, 1996)、937年(池田ほか, 1997)、944-947(早川・小山, 1998)などの説がある。

文献

- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫(1933)温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法-研究対象別分析法」, p.138-148.
- 早川由紀夫・小山真人(1998)日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日。火山, 第2集, 43, p.403-407.
- 池田まゆみ・福沢仁之・岡村 真・松岡裕美(1997)青森県小川原湖と十三湖における過去2300年間の環境変動と津波地震。平成8年度文部省研費研究成果報告書「汽水湖堆積物を用いた過去2000年間の気候・海水準・降砂変動の解明」(研究代表者 福沢仁之), p.124-159
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981)日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.
- 町田 洋・福沢仁之(1996)湖沼堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代。日本第四紀学会講演要旨集, No26, p.80-81.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之(1966)馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀研究, 5, p.29-35.
- 早田 勉・八木浩司(1991)東北地方の第四紀テフラ研究。第四紀研究, 30, p.369-378.

写 真 图 版



遺跡遠景（西から）



上野遺跡・一戸城跡遠景（南から）
写真図版1 空中写真（1）



遺跡近景（南から）



遺跡近景（直上）

写真図版 2 空中写真（2）

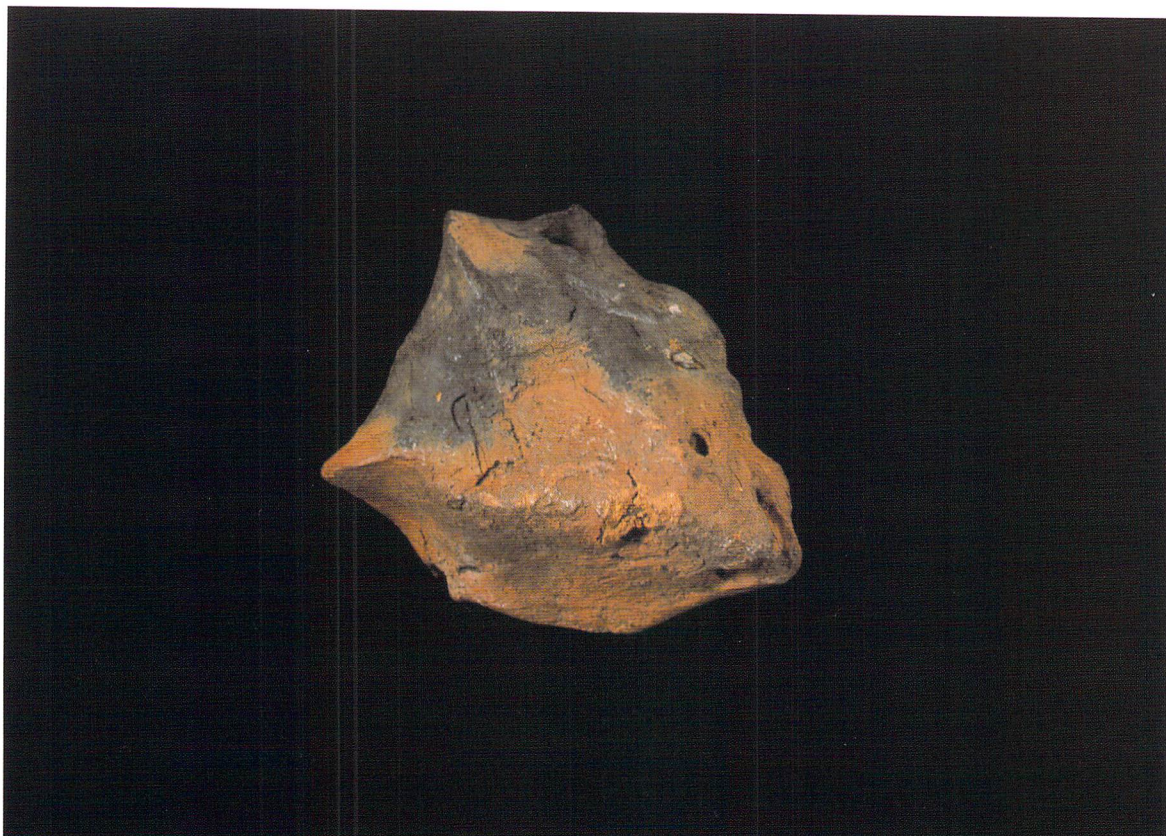


帯曲輪検出状況（北斜面）

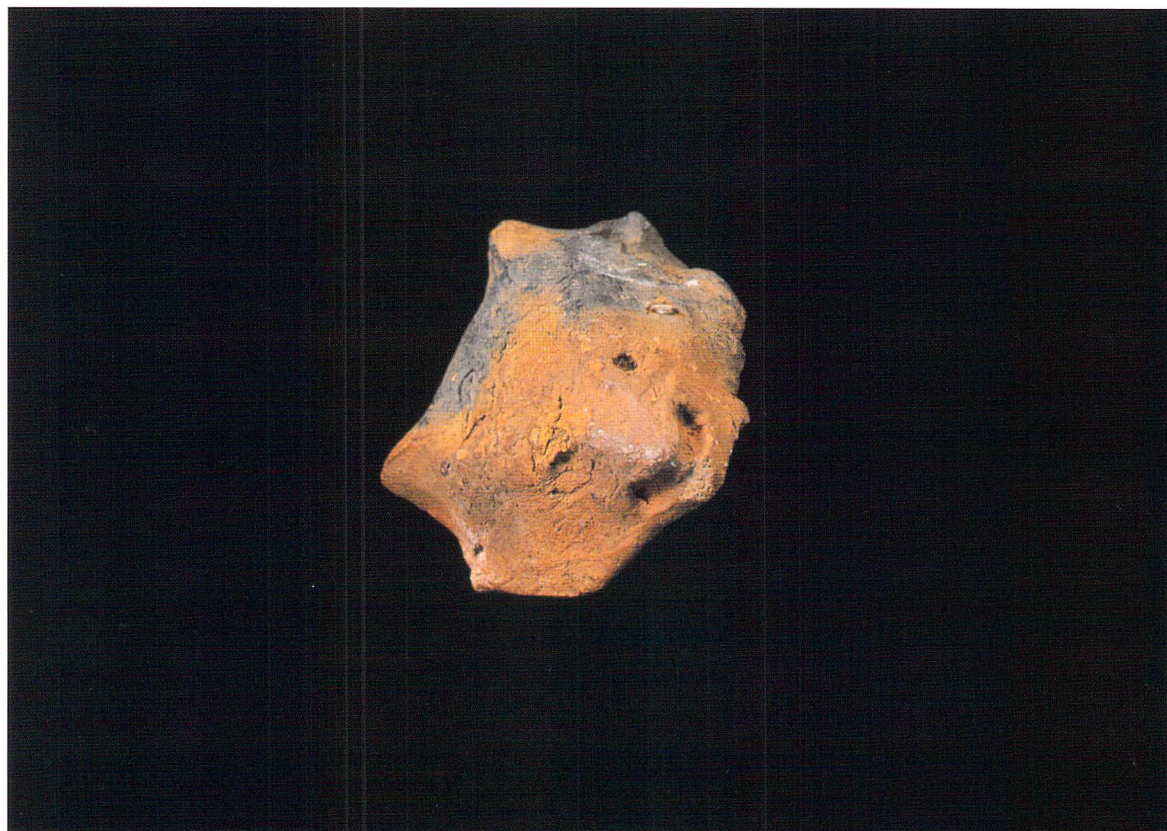


帯曲輪検出状況（南斜面）

写真図版3 帯曲輪検出状況

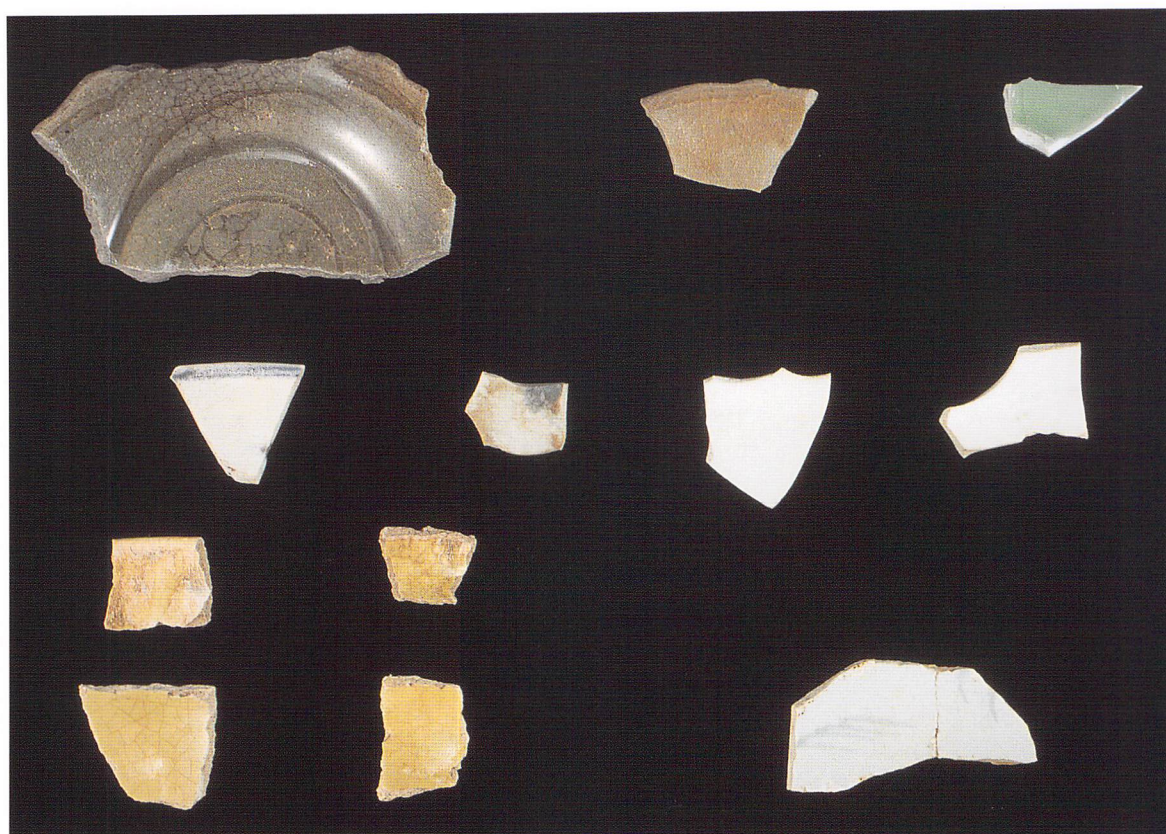


動物形土製品



動物形土製品

写真図版 4 出土遺物 (1)



陶磁器 (内面)



陶磁器 (外面)

写真図版5 出土遺物 (2)



金属製品



石製品・土製品 (勾玉)
写真図版 6 出土遺物 (3)